

元総社寺田遺跡 I

一級河川牛池川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

溝・井戸・土坑・水田の調査

《遺構・遺物編》

1993

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	財文化堂埋縣島群(財)
	保管團景事查調
No. 93-1903	平成 5年 10月 25日

01-353
445
(5)

もと そう じゃ てら だ
元 総 社 寺 田 遺 跡 I

一級河川牛池川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

溝・井戸・土坑・水田の調査

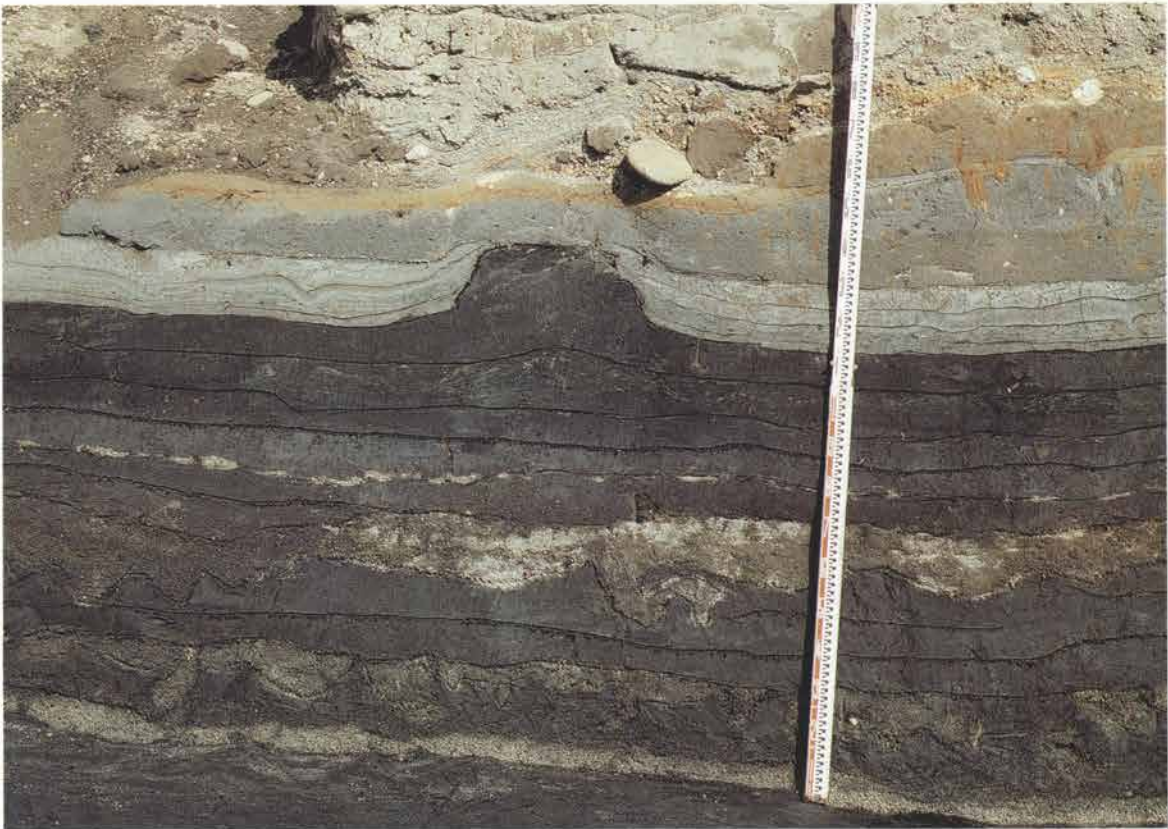
《遺構・遺物編》

1993

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



V区3面南半部 F.A水田面に残された足跡群



IV区2面南端部 基本土層（凸面がF A下水田の畦畔断面）



IV区2面北半部出土の八稜鏡

序

前橋市元総社町に鎮座する上野国総社神社周辺は、奈良・平安時代に上野国府があった地であり官人たちで大いに栄えました。その総社神社のすぐ東を流れる牛池川は大雨が降ると川があふれ周辺の住民に度々被害を与えました。

群馬県土木部は、牛池川周辺に住む人々を水害から守るために、昭和63年度より同川の河川改修工事を始めました。そして、それに伴い川の周辺が上野国府であったことから埋蔵文化財の調査も併せて行うことになりました。

埋蔵文化財の調査は工事計画にあわせて当事業団が行っていますが、調査した成果を一日も早く公開するために、今年度から発掘調査と併行して報告書刊行のための整理作業も始めました。今年度は昭和63年から平成3年度の前半期まで調査した遺構・遺物のうち木製品を除いて作業を行い、その成果がまとまりましたので、ここに『元総社寺田遺跡Ⅰ』の調査報告書を刊行することにしました。

本報告書には、上野国府のあった奈良・平安時代の遺構・遺物は勿論ですが、それ以前にこの地域で生活した人々の営んだ水田跡、また、旧牛池川河道等が報告されており、今は市街化してしまった元総社町の古い時代の様子の一端を窺い知ることができます。

発掘調査から報告書刊行に至るまで群馬県土木部河川課、前橋市土木事務所、前橋市区画整理課、前橋市教育委員会、群馬県教育委員会、地元関係者等には、種々お世話になりました。今回報告書を上梓するに際して、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が上野国府を解明するための資料の一助として活用されることを願い序とします。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1分冊「元総社寺田遺跡Ⅰ」の《遺構・遺物編》である。第1集では、Ⅰ区からⅤ区までの遺構、遺物を中心にして報告し、主として4面出土の木製品については、夥しい量に上るため次年度の第2集《木器編》で報告する予定である。
2. 元総社寺田遺跡は、群馬県前橋市元総社町字閑泉明神北・屋敷・寺田地内に所在する。遺跡名は、大字に相当する「元総社」と調査区占有面積が最大の小字名、「寺田」に因んで『元総社寺田遺跡』とした。なお、同河川の発掘調査が今後も継続し、報告書の続編の刊行が予定されるため、報告書名には便宜的にローマ数字のⅠを付した。
3. 発掘調査は、群馬県（土木部河川課）の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 調査の実施期間は以下のとおりである。

発掘調査	第1次調査	昭和63年1月1日～平成元年3月31日
	第2次調査	平成元年4月10日～平成元年12月28日
	第3次調査	平成2年12月1日～平成3年3月31日
	第4次調査	平成3年4月1日～平成3年5月31日
	第5次調査	平成3年11月1日～平成4年3月31日
整理作業	第1年次	平成4年4月1日～平成5年3月31日

5. 調査体制は以下のとおりである。

事務担当 白石保三郎、邊見長雄、松本浩一、近藤 功、田口紀雄、佐藤 勉、上原啓巳、神保侑史、住谷 進、岩丸大作、斎藤俊一、巾 隆之、国定 均、笠原秀樹、小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義

事務補助員 野島のお江、並木綾子、今井もと子、松井美智子、大島敬子、小野沢春美、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ、松下登

調査担当	第1次調査	相京建史（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、主任調査研究員）
		中山茂樹（ 同 上 主任調査研究員）
		松村和男（ 同 上 調査研究員）
	第2次調査	下城 正（ 同 上 専 門 員）
		中山茂樹（ 同 上 主任調査研究員）
		松村和男（ 同 上 調査研究員）
	第3次調査	下城 正（ 同 上 専 門 員）
		高井佳弘（ 同 上 調査研究員）
		根岸 仁（ 同 上 調査研究員）
	第4次調査	下城 正（ 同 上 専 門 員）
		石坂 茂（ 同 上 主任調査研究員）
		石守 晃（ 同 上 主任調査研究員）
		高井佳弘（ 同 上 調査研究員）
		根岸 仁（ 同 上 調査研究員）

	磯貝朗子 (勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員)
第5次調査	石塚久則 (同 上 専 門 員)
	齊藤利昭 (同 上 主任調査研究員)
	小林 徹 (同 上 調査研究員)

6. 本書作成の担当は以下のとおりである。

編 集 根岸 仁

本分執筆 巾 隆之、坂井 隆、宮崎重雄氏、齊藤利昭、根岸 仁 (編者以外の文責は文末に記した)

遺構写真 相京建史、石塚久則、下城 正、石坂 茂、中山茂樹、石守 晃、齊藤利昭、高井佳弘、
松村和男、根岸 仁、小林 徹、磯貝朗子

遺物写真 佐藤元彦 (勸群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)

遺物保存処理 関 邦一 (勸群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)、北爪健二 (勸群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員)、小材浩一 (同整理補助員)、渡邊静治 (同非常勤嘱託)、樋口一之 (同整理補助員)、土橋まり子 (同非常勤嘱託)

遺物観察 下城 正、原 雅信、桜岡正信、友廣哲也、根岸 仁 (土器)、大江正行、根岸 仁 (石造品)、
坂井 隆 (八稜鏡)、大西雅広 (青磁・陶磁器)、高井佳弘 (瓦・古銭)、新倉明彦 (板碑)、
関口博幸、根岸 仁 (石器・石製類)

遺物実測・図版作成 浅井良子 (整理嘱託員)、岩淵フミ子 (整理補助員)、高梨房江 (同)、田中暁美 (同)、
生巢由美子 (同)、横堀初枝 (同)、渡辺フサ枝 (同)

委託関係 遺構測量及びトレースは(株)測研、野外調査はパリオ・サーヴェイ株式会社、(有)古環境研究所、
自然科学分析は(有)古環境研究所、樹種同定は(株)パレオ・ラボ、航空写真はたつみ写真スタジオ
オ、獣・人歯骨鑑定は宮崎重雄氏 (群馬県立大間々高等学校・教諭)、石材鑑定は飯島静男氏
(群馬県地質研究会)に依頼した。

7. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

群馬県 (土木部河川課)、前橋市土木事務所、前橋市 (区画整理課)、前橋市教育委員会 (文化財保護課)
群馬県教育委員会 (文化財保護課)

仲野泰裕氏 (愛知県陶磁資料館・学芸員)、小島達夫氏、茂木 晃氏 (渋川市立渋川中学校・教諭)

8. 出土遺物は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。


















9. 以下の方々には、発掘及び整理作業に従事していただいた。記して感謝いたします。(敬称略)

相川トミ子、阿部イチエ、阿部きよ、阿部俊次、阿部忠治、阿部伸代、阿部ノリ子、阿部裕江、阿部広子、
天立アグリ、新井勉、新井峰子、飯島キクエ、飯島義幸、石井美津恵、石川志ず子、石倉光子、石関うめ
子、石関コズエ、石田いつ、石田まん、石原侃一、板垣てる子、板橋眞喜太、依田勝代、市川宝作、伊藤
朝子、井野米子、岩田四郎、内田サダ子、大木好信、大沢やよい、大竹周一、大塚正次、岡好江、岡田い
そ江、岡田和亥、岡田登志子、岡田ふじ子、岡村鶴子、荻野彦三郎、小瀬智志、小野里昇久、勝田キミエ、
金井通、金沢カオル、鹿沼フミ、鹿沼泰治、金田治悦、狩野フク、川井美代、河西三明、木島ヒサ子、木
村すい子、木間健治、工藤襄、久保正雄、久保田とよ、窪田圭造、黒崎ミツノ、桑原住枝、河野富江、小
林延寿、小林喜美子、小林健、小林マス子、小鮎きみ江、小鮎春子、駒形邦子、近藤ハルイ、近藤俊男、
齊田正美、齊藤邦枝、齊藤さだゑ、齊藤重美、齊藤多恵子、齊藤たけ、齊藤文子、齊藤真澄、齊藤万作、

坂牧光枝、桜井はる枝、桜井裕子、佐々木克豊、佐々木とみえ、佐藤武四郎、佐藤富子、佐野慶子、島津ツヤ子、清水かよ子、下田克美、下広哲男、新保幸永、須賀こと、鈴木ひとみ、鈴木まき江、鈴木正吉、鈴木ヤス、鈴木ヨシエ、須田亮治、関端幸子、関根時太、膳セツ子、反町ハナ、反町裕雄、高井達雄、高坂とも、高坂花子、高田みや子、高野正光、高橋まさ子、高橋マスミ、高橋由治、高橋義勝、高山和子、竹之内秀子、竹淵良子、田代きよ、田島靖美、立木睦巳、田原澄子、田村友一郎、堤桂子、角田智津子、角田彦一、角田彦二、角田ふじ江、手塚ハツエ、手塚広、戸田節子、富所恵子、都丸敏子、中沢タマ、中野鶴市、中村スミエ、中村浩子、中村ふじの、中村美知代、中山勇次郎、永井進、奈良芳子、野口栄一、野口たかね、野口初枝、萩原イネ子、箱田伍郎、橋田威雄、橋本ツナヨ、橋元裕児、蜂須賀もとめ、羽鳥イソヨ、長谷川眞子、早川フサ子、原沢昭子、原沢純子、原沢伝十郎、原沢正江、原沢政雄、原沢さい子、兵藤つる子、深沢ハルミ、深沢ヨシ子、藤田光夫、古市忠蔵、星野ウメ、星野福松、細井トク江、堀口正雄、堀越うめ子、牧野ゆき子、町田丑一、松岡英子、松田正子、松永シマ子、松本玲子、三川清子、水島貞子、箕輪三郎、峰岸ツル子、宮下美枝子、宮田本春、矢内政江、矢島キク江、矢島幸一、矢島サダ子、柳沢京四郎、矢野利子、山口きく、山田常治、山本廣、湯浅京子、湯浅作次郎、湯浅千鶴子、湯浅ヤス子、湯浅義雄、横沢あさ子、横沢早苗、横沢信子、横沢美枝子、横堀きの、横堀シゲ子、吉田サヨ子、吉田ヤス子、渡辺君江、綿貫栄子、綿貫安保

凡 例

1. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院 5 万分の 1・2 万 5 千分の 1 地形図、前橋市都市計画図 2 千 5 百分の 1 を等倍及び縮小して使用した。
2. 本書の挿図中の北方位は座標北を示す。
3. 本調査の記録に使用したグリッドは 5 m 四方で、北東交点をその呼称としている。
4. 遺構平面図・遺構断面図・遺物実測図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

	As-B灰		As-YP		煤・漆
	As-B		台地		赤色塗彩
	FPF-1		地山		内黒
	FA		灰		緑釉
	As-C		焼土		施釉
	As-Sj				自然木

5. 本文中に記載されているテフラについては略称を用いた。正式名称と給源及び現段階での降下年代は以下のとおりである。

As-B	浅間Bテフラ	浅間山	天仁元年(1108年)
FP	二ツ岳軽石	榛名山	6世紀中葉
		FPF-1(二ツ岳第一軽石流堆積物)	
Hr-S	榛名-渋川テフラ層	+	榛名山 6世紀初頭
		FA(二ツ岳火山灰)	
As-C	浅間C軽石	浅間山	4世紀初頭
As-Sj	浅間-総社軽石	浅間山	約1.1万年前
As-YP	浅間-板鼻黄色軽石	浅間山	約1.3~1.4万年前

6. 調査における各文化層の概要は以下のとおりである。

- 1面 As-Bより上層の中・近世の遺構面及び遺物包含層
- 2面 As-B下面及び下層の砂礫層中の奈良・平安時代の遺構面及び遺物包含層
- 3面 FA下面の古墳時代後期の遺構面(水田耕土)
- 4面 FA下面の黒色粘質土からAs-Cまでの泥炭層(木器包含層)
- 5面 As-C下面の古墳時代前期の遺構面(水田耕土)
- 6面 As-C下層の弥生時代中期~縄文時代晩期の遺物包含層と縄文時代後期~前期の遺物包含層

7. 本書の挿図及び付図の縮尺は以下のとおりである。

- | | | | | | |
|-------|---------------|-------|-----------|-------|---|
| 1:30 | カマド平面図及び土層断面図 | 1:40 | 基本土層・柱状図 | 1:60 | 井戸・土坑・ピット・井堰跡・補強された畦畔・住居跡の平面図及び溝・トレンチの土層断面図 |
| 1:120 | 杭列の平面図及び土層断面図 | 1:150 | 主要遺構平面図 | | |
| 1:300 | 全体図 | 1:400 | 水田遺構図(付図) | 1:500 | 遺物分布図・トレンチ設定図 |

8. 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

- | | | | | | | | |
|-----|--------------|-----|---------------------------------------|-----|------------------|-----|----------|
| 1/1 | 白玉、石製模造品、八稜鏡 | 1/2 | 縄文式土器・土師質小皿・須恵器・瓦等の破片実測、八稜鏡、古銭、石器、金属器 | 1/3 | 土師器・須恵器・板碑等の器形実測 | 1/4 | 瓦、石臼、石造品 |
|-----|--------------|-----|---------------------------------------|-----|------------------|-----|----------|

9. 本書に記載されている遺構名称及び遺物番号は、発掘調査時の名称を整理作業の過程で再検討し、各調査区ごとに上面から下面に向かって種別に通し番号を付した。なお、遺物番号は、遺物観察時において欠番としたものもある。

10. 遺構図中に使用している破線は、上面からの削平・攪乱及びトレンチを表し、基本土層図では推定を表す。

11. 本文・遺物観察表・水田計測一覧表の数値に使用されている()書きは、推定計測値を表す。

12. 遺物実測図中で縮尺の異なる遺物については、繁雑を避けるために以下のマークを付した。

■ 1:1 ▲ 1:2 ● 1:3 △ 1:4

13. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所 色票監修「新版標準土色帖」を使用した。

14. 水田面積の計測には、1/150平面図において、プランメーター(ローラー極式・レンズ式)による3回計測平均値を用い、小数点第3位を四捨五入して掲載した。

15. 遺物写真の図版倍率は、小型の遺物は1/4、大型の遺物は1/6、1/10で撮影し、個々に応じてサービス判(1.3倍)、手札判(1.5倍)、キャビネ判(2倍)に引き伸ばして掲載した。また、部分的に特徴のあるものについては、近接写真を掲載した。

報告書抄録

フリガナ	モトソウジャテラダイセキ1
書名	元総社寺田遺跡I
副書名	一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集《遺構・遺物編》
シリーズ名	勸群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番号	第156集
編著者名	根岸 仁 宮崎重雄 巾 隆之 坂井 隆 齊藤利昭
編集機関	勸群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	1993年 3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
モトソウジャテ ラダイセキ1 元総社寺田遺跡 I	マエバシシ モトソウジャマチ アザカンセンミョ ウジンキタ・オオ ヤシキ・テラダ 前橋市元総社町字 閑泉明神北・大屋 敷・寺田	102016	00323	362301	1390250	19880101～ 19890331	1.200m ²	河川改修 工事
						19890410～ 19891228	4.200m ²	同上
						19901201～ 19910331	4.180m ²	同上
						19910401～ 19910531	2.120m ²	同上
						19911101～ 19920331	2.180m ²	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
元総社寺田遺跡		中・近世	溝(旧河道)	33	青磁・白磁・土師器・須恵器・ 灰釉陶器・軟質陶器・古銭・ 墓石・石臼・五輪塔・土釜・ 砥石・紡錘車・石鉢・コモア ミ石・板碑・打製石斧・羽釜・ 土師質土器小皿・瓦	
			井戸	32		
			土坑	13		
			ピット	35		
	居住	奈良・平安	竪穴住居跡	1	須恵器・土師器・紡錘車・羽 釜・土釜・管玉・灰釉陶器・ 瓦・打製石斧・獣骨・土錘・ 石鏃・緑釉・砥石	
	生産	古墳・後期	水田	4		
			溝	21		
古墳・中期～前期		水田	2	土師器・須恵器・コモアミ石・ 縄文式土器・弥生式土器・打 製石斧・木製品		
溝	35					
古墳・前期	井堰跡	1				
	水田	4				
	溝	34				
		杭列	1	縄文・多孔石・土偶・打製石 斧・自然木・弥生(赤井戸・ 樽)		
		補強された畦畔	1			
		縄文・前期～晩期 弥生・後期	旧河道			

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例
抄 録

第1章 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の方法と経過	3
3. 基本土層	6

第2章 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と環境	11
2. 周辺の遺跡と環境	11

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 1面の調査（中・近世）

1. 概 要	21
2. I区の溝・井戸・土坑	23
3. II区の溝・井戸・土坑	29
4. III区の溝・井戸・土坑	35
5. IV区の井戸	39
6. V区の溝・井戸	40

第2節 2面の調査（奈良・平安時代）

1. 概 要	80
2. I区の溝	82
3. IV区の1号住居	84
4. IV区の溝・土坑	88
5. V区の溝	91

第3節 3面の調査（古墳時代後期）

1. 概 要	110
2. II区のFA下水田	113
3. II区の溝	115
4. III区のFA下水田	116
5. III区の溝	119
6. IV区のFA下水田	123
7. IV区の溝	125

8. V区のFA下水田	131
9. V区の溝	133
第4節 4面の調査(古墳時代前期～後期)	
1. 概要	137
2. II区の溝	141
3. III区の溝	143
4. IV区南端部の第3洪水砂下水田	148
5. IV区南端部の第2洪水砂下水田	152
6. IV区の溝	152
7. V区の溝	157
第5節 5面の調査(古墳時代前期)	
1. 概要	168
2. I区の溝	170
3. II区のAs-C下水田	173
4. II区の溝	174
5. III区のAs-C下水田	176
6. III区の溝	179
7. IV区のAs-C下水田	183
8. IV区の溝	185
9. V区のAs-C下水田	189
10. V区の溝	191
第6節 6面の調査(縄文・弥生時代)	
1. 概要	199
第4章 自然科学分析と獣骨鑑定	
第1節 I区における野外調査	パリノ・サーヴェイ株式会社 207
第2節 II・IV区における野外調査	古環境研究所 209
第3節 V区における野外調査	古環境研究所 214
第4節 V区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析	古環境研究所 217
第5節 元総社寺田遺跡出土の獣骨類	宮崎重雄 222
第5章 まとめ	
第1節 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡	坂井隆 226
第2節 元総社寺田遺跡検出水田の様相	根岸仁 234
参考文献	237
主な古墳時代の水田遺跡一覧・水田計測一覧表	238
遺物観察表	243
写真図版	

挿図目次

図1	遺跡の位置	1	図55	IV区2面南端部 1号住居跡平面図	84
図2	調査区及びグリッド設定図	4	図56	IV区1・2面 全体図	85・86
図3	基本土層・柱状図(1)	7	図57	IV区2面南端部 1号住居跡掘形平面図	87
図4	基本土層・柱状図(2)	8	図58	IV区2面南端部 1号住居跡カマド平面図	87
図5	遺跡周辺の地形分類	12	図59	IV区2面南端部 1号住居跡出土遺物	88
図6	周辺の遺跡分布	15	図60	IV区1・2面の主な遺物分布	90
図7	I区1面 全体図	21	図61	IV区2面南端部 1～2号溝、1号土坑、旧河道、V区 2面7号溝土層断面	93
図8	調査区と蒼海城の掘削	22	図62	V区2面 8・9号溝土層断面	94
図9	I区1面の主な遺物分布	25	図63	I区2面 10・11号溝出土遺物	95
図10	II区1面 全体図	27・28	図64	I区2面 12号溝出土遺物	96
図11	II区1面北半部の主要遺構	30	図65	I区2面 グリッド、IV区2面南端部 1号溝出土遺物 ……………	97
図12	II区1面南半部の主要遺構	32	図66	IV区2面 グリッド出土遺物(1)	98
図13	II区1面の主な遺物分布	34	図67	IV区2面 グリッド出土遺物(2)	99
図14	III区1面 全体図	36	図68	IV区2面 グリッド出土遺物(3)	100
図15	III区1面の主な遺物分布	38	図69	IV区2面 グリッド出土遺物(4)	101
図16	V区1・2面 全体図	41・42	図70	IV区2面 グリッド出土遺物(5)	102
図17	V区1・2面中央部の主要遺構	43	図71	IV区2面 グリッド出土遺物(6)	103
図18	V区1・2面南半部の主要遺構	44	図72	IV区2面 グリッド出土遺物(7)	104
図19	V区1・2面の主な遺物分布	47	図73	IV区2面 グリッド出土遺物(8)	105
図20	I区1面 1～6号溝、II区1面 1・2・4号溝土層 断面	48	図74	IV区2面 グリッド出土遺物(9)	106
図21	II区1面 4～6号溝土層断面	49	図75	IV区2面 グリッド出土遺物(10)	107
図22	III区1面 1・2号溝 V区1面 1・2号溝土層断面 ……………	50	図76	V区2面 7・8号溝(1)出土遺物	108
図23	V区1面5・6号溝 I区1面 5～10号・14～16号ピ ット土層断面	51	図77	V区2面 8号溝出土遺物(2)	109
図24	I区1面 1号井戸、1～5号土坑土層断面	52	図78	II区3面 全体図	111・112
図25	II区1面 1～7号井戸土層断面	53	図79	II区3面北半部 FA下水田	114
図26	II区1面 8～11号井戸、1・2号土坑、 III区1面 1号井戸土層断面	54	図80	III区3面 全体図	117
図27	III区1面 2～6号井戸土層断面	55	図81	III区3面北半部 FA下水田	118
図28	III区1面 1号土坑、IV区1面 1～3号井戸、V区1 面1～5号井戸土層断面	56	図82	III・IV区3面 FA下水田	120
図29	I区1面 5号土坑、2号溝、グリッド出土遺物	57	図83	IV区3面 全体図	121・122
図30	II区1面 2・3号溝出土遺物	58	図84	IV区3面南半部・南端部 FA下水田	124
図31	II区1面 3号溝出土遺物	59	図85	III・IV区3面の主な遺物分布	126
図32	II区1面 5号溝出土遺物(1)	60	図86	V区3面北半部 FA下水田	128
図33	II区1面 5号溝出土遺物(2)	61	図87	V区3面 全体図	129・130
図34	II区1面 4・10号井戸、グリッド(1)出土遺物	62	図88	V区3面南半部 FA下水田	132
図35	II区1面 グリッド出土遺物(2)	63	図89	II区3面 7～10号溝、III区3面 7号溝、IV区3面 7・8号溝、V区3面 10～13号溝土層断面	134
図36	II区1面 グリッド出土遺物(3)	64	図90	I区3面 グリッド、III区3面 7号溝、IV区3面 8号溝、グリッド(1)出土遺物	135
図37	III区1面 1号溝出土遺物	65	図91	IV区3面 グリッド出土遺物(2)	136
図38	III区1面 2・4号溝出土遺物	66	図92	III区4面の井堰跡	138
図39	III区1面 5号溝、2・3号井戸出土遺物	67	図93	II区4面 全体図	139・140
図40	III区1面 グリッド出土遺物(1)	68	図94	II区4面の主な遺物分布	142
図41	III区1面 グリッド出土遺物(2)	69	図95	III区4面 全体図	144
図42	IV区1面 グリッド、V区1面 4号溝出土遺物(1)	70	図96	III区4面の主な遺物分布	147
図43	V区1面 4号溝出土遺物(2)	71	図97	IV区4面 全体図	149・150
図44	V区1面 4・5号溝(1)出土遺物	72	図98	IV区4面南端部 第3洪水砂下水田	151
図45	V区1面 5号溝出土遺物(2)	73	図99	V区4面 全体図	155・156
図46	V区1面 6号溝出土遺物(1)	74	図100	V区4面の主な遺物分布	158
図47	V区1面 6号溝出土遺物(2)	75	図101	II区4面 13～15号溝、IV区4面 16～18号溝土層断 面	159
図48	V区1面 6号溝出土遺物(3)	76	図102	IV区4面 洪水砂下水田、V区4面 14～16号溝土層 断面	160
図49	V区1面 6号溝出土遺物(4)	77	図103	II区4面 13・15号溝、グリッド、III区4面12・13号 溝出土遺物	161
図50	V区1面 6号溝出土遺物(5)	78	図104	III区4面 16・19・20・24号溝、グリッド出土遺物	162
図51	V区1面 3・4号井戸、グリッド出土遺物	79	図105	III区4面 グリッド出土遺物	163
図52	I区2面 全体図	80	図106	V区4面 15・16号溝、1・2・5トレンチ出土遺物	164
図53	調査区と推定国府域	81			
図54	I区2面の主な遺物分布	83			

図107	V区4面	グリッド出土遺物(1)	165		
図108	V区4面	グリッド出土遺物(2)	166		
図109	V区4面	グリッド出土遺物(3)	167		
図110	I区5面	全体図	168		
図111	I区5面	13・14号溝	169		
図112	I区5面	の主な遺物分布	170		
図113	II区5面	全体図	171・172		
図114	II区5面	の杭列	174		
図115	II区5面	As-C下水田	175		
図116	III区5面	全体図	177		
図117	III・IV区5面	As-C下水田	178		
図118	II・III区5面	の主な遺物分布	180		
図119	IV区5面	全体図	181・182		
図120	IV区5面	南半部・南端部	As-C下水田	184	
図121	V区5面	全体図	187・188		
図122	V区5面	補強された畦畔	189		
図123	V区5面	北半部	As-C下水田	190	
図124	V区5面	南半部	As-C下水田	192	
図125	I区5面	13・14号溝、II区5面	16・17号溝土層断面	195	
図126	III区5面	25・31号溝、IV区5面	29・30・32・33・36号溝、V区5面	18・19号溝土層断面	196

図127	I区5面	13・14号溝、グリッド出土遺物	197	
図128	II区5面	16・17号溝、III区5面	グリッド出土遺物	198
図129	I区6面	全体図	199	
図130	I区6面	の主な遺物分布	200	
図131	III区6面	トレンチ設定図と土層断面	201	
図132	IV区6面	南端部 トレンチ設定図と旧河道土層断面	202	
図133	V区6面	トレンチ設定図と土層断面	203	
図134	I区6面	グリッド出土遺物	204	
図135	III区6面	W・Yライトトレンチ、1トレンチ、グリッド、IV区6面南端部旧河道トレンチ出土遺物	205	
図136	V区・No.1地点	における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果	221	
図137	V区・No.2地点	における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果	221	
図138	V区・No.3地点	における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果	221	
図139	元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡	出土の八稜鏡	227	
図140	竪穴などから鏡の出土した遺跡	付図	232	
付図	II区～V区3面のFA下水田・IV区南端部4面の洪水砂下水田・I区～V区5面のAs-C下水田			

写真図版目次

〈遺構写真〉

写真図版 1	1. 遺跡上空から相馬ヶ原扇状地と牛池川を望む(南東から)
写真図版 2	1. 空から見た牛池川と染谷川の合流地点(東から) 2. 空から見た推定国府域と元総社寺田遺跡(南から)
写真図版 3	1. I区から下流部方向市街地を望む(北西から) 2. IV区から上流部方向榛名山を望む(南東から)
写真図版 4	1. II区 作業風景(北から) 2. V区 排水作業風景(北東から) 3. V区 作業風景 4. 元総社小学校児童の遺跡見学
写真図版 5	1. II区南半 台地部土層断面(南から) 2. IV区南半 低地部土層断面(南から) 3. IV区 基本土層(南西から)
写真図版 6	1. IV区南端 土層断面(南西から) 2. V区 土層断面(北西から) 3. IV区南端 基本土層(南西から) 4. V区 基本土層(西から)
写真図版 7	1. I区1面 現牛池川と調査区全景(東から) 2. I区1面 1号井戸全景(西から) 3. I区1面 1号井戸土層断面(南から) 4. I区1面 5号土坑全景(北東から) 5. I区1面 5号土坑遺物出土状況(北西から)
写真図版 8	1. II区1面 全景(南東から) 2. II区1面 5号溝全景(南東から)
写真図版 9	1. II区1面 1・2号溝全景(東から) 2. II区1面 4号溝全景(北東から) 3. II区1面 3号溝遺物出土状況 4. II区1面 4号溝土層断面(西から)
写真図版 10	1. II区1面 1号土坑土層断面(南西から) 2. II区1面 3号井戸全景(南から) 3. II区1面 4号井戸全景(北から)

写真図版 11	1. V区1・2面 全景(南東から) 2. V区1・2面 全景(北西から)
写真図版 12	1. V区1面 1・2号溝全景(東から) 2. V区1面 1・2号溝土層断面(南東から) 3. V区1面 6号溝全景(北西から) 4. V区1面 1号井戸全景(南から) 5. V区1面 2号井戸全景(南から) 6. V区1面 3・4号井戸全景(南から) 7. V区1面 5号井戸全景(東から) 8. V区1面 5号井戸土層断面(東から)
写真図版 13	1. I区2面 全景(南から) 2. IV区2面 全景(北西から)
写真図版 14	1. IV区2面南端 1号住カマド全景(西から) 2. IV区2面南端 1号住カマド全景(西から) 3. IV区2面南端 1号住遺物出土状況(西から) 4. IV区2面南端 FPF-1上面 全景(北東から)
写真図版 15	1. IV区2面南端 1号住カマド土層断面(南から) 2. IV区2面南端 1号土坑全景(西から) 3. IV区2面南端 1号溝全景(西から) 4. IV区2面南端 1号溝遺物出土状況 5. IV区2面南端 2号溝全景(南東から) 6. V区2面北半 8・9号溝全景(南東から) 7. V区2面 9号溝全景(北東から)
写真図版 16	1. II区3面 全景(北から) 2. II区3面 FA下水田と溝(北から)
写真図版 17	1. II区3面北半 全景(南東から) 2. II区3面北端 FA下水田・溝検出状況(北から) 3. II区3面 7号溝全景(南東から) 4. II区3面 7号溝土層断面(南東から) 5. II区3面 8号溝全景(北西から)

	6. II区3面 8号溝土層断面(南西から)				
	7. II区3面 9・10号溝全景(北から)				
	8. II区3面 9号溝土層断面(北東から)				
写真図版 18	1. III区3面 全景(南東から)		写真図版 34	5. III区5面 28号溝と畦畔(北東から)	
	2. III区3面北半 全景(北西から)			1. IV区5面 全景(北西から)	
写真図版 19	1. III区3面北半 FA下水田検出状況(北西から)			2. IV区5面 全景(南東から)	
	2. III区3面北半 FA下水田検出状況(南西から)		写真図版 35	3. IV区5面北半 全景(南東から)	
	3. III区3面 大畦とFA下水田区画(北から)			1. IV区5面北半 30号溝全景(南東から)	
	4. III区3面 大畦とFA下水田区画(南東から)			2. IV区5面北半 31号溝全景(北西から)	
	5. III区3面 7号溝全景(南東から)			3. IV区5面北半 水田面に残る足跡群(北から)	
	6. III区3面 7号溝土層断面(東から)		写真図版 36	4. IV区5面北半 畦検出状況(北東から)	
	7. III区3面 遺物出土状況(東から)			5. IV区5面北半 畦検出状況(東から)	
	8. III区3面 遺物出土状況(東から)			6. IV区5面北半 水口検出状況(北東から)	
写真図版 20	1. IV区3面 全景(北西から)			1. IV区5面南半 全景(北東から)	
	2. IV区3面 全景(南東から)			2. IV区5面 32号溝全景(北東から)	
写真図版 21	1. IV区3面北半 全景(南東から)		写真図版 37	3. IV区5面 33号溝全景(北から)	
	2. IV区3面北半 全景(南東から)			1. IV区5面南半 33号溝全景(北から)	
	3. IV区3面北半 足跡検出状況(北東から)			2. IV区5面南半 33号溝と水田区画(南から)	
	4. IV区3面 8号溝全景(南東から)		写真図版 38	3. IV区5面南半 As-C下水田区画(南から)	
写真図版 22	1. IV区3面南半 全景(北東から)			4. IV区5面南半 32号溝と水田区画(北から)	
	2. IV区3面南半 水田区画と足跡群(南東から)			5. IV区5面南端 全景(南東から)	
	3. IV区3面南半 畦検出状況(南から)			1. V区5面 全景(南東から)	
	4. IV区3面南半 12・13号溝全景(南東から)		写真図版 39	2. V区5面北半 全景(東から)	
	5. IV区3面 遺物出土状況(東から)			1. V区5面南半 全景(東から)	
写真図版 23	1. IV区3面南端 全景(南東から)			2. V区5面北半 As-C下水田区画(東から)	
	2. IV区3面南端 全景(北西から)			3. V区5面北半 As-C下水田区画(東から)	
	3. IV区3面南端 畦検出状況(南西から)		写真図版 40	4. V区5面北半 As-C下水田区画(東から)	
	4. IV区3面南端 葎検出状況			5. V区5面北半 As-C下水田区画(南西から)	
写真図版 24	1. V区3面 全景(南東から)			1. V区5面北半 As-C下水田区画(東から)	
	2. V区3面北半 FA下水田検出状況(北西から)			2. V区5面南半 As-C下水田区画(東から)	
	3. V区3面北半 10号溝全景(北西から)			3. V区5面南半 19号溝と水田区画(南西から)	
写真図版 25	1. V区3面南半 全景(北東から)			4. V区5面南半 19号溝と水田区画(西から)	
	2. V区3面南半 足跡検出状況(南東から)			5. V区5面南半 19号溝と水田区画(南西から)	
	3. V区3面南半 水田面に残る足跡群(北西から)		写真図版 41	6. V区5面南半 19号溝と水田区画(北西から)	
	4. V区3面南半 指先まで明瞭な足跡(北西から)			7. V区5面南半 畦の補強材検出状況(北東から)	
	5. V区3面南半 13号溝全景(北西から)			8. V区5面南半 遺物出土状況	
	6. V区3面南半 遺物出土状況			1. I区6面 全景(南東から)	
写真図版 26	1. III区4面 木器出土状況(北西から)			2. I区6面 遺物出土状況	
	2. III区4面 19号溝木器出土状況(南東から)		写真図版 42	3. III区6面 試掘設定状況(南東から)	
写真図版 27	1. III区4面 調査区北壁に残る井堰跡(西から)			4. III区6面 遺物出土状況	
	2. IV区4面北半 16号溝木器出土状況(北西から)			5. III区6面 流木出土状況	
	3. IV区4面南半 17・18号溝全景(北東から)			1. IV区6面南端 流木出土状況(南西から)	
写真図版 28	1. IV区4面南端 第3洪水砂下水田全景(南東から)		写真図版 43	2. V区6面 試掘設定状況(南東から)	
	2. IV区4面南端 第2洪水砂下水田全景(北西から)			3. V区6面 試掘作業風景(南西から)	
				4. V区6面 流木出土状況	
写真図版 29	1. V区4面 木器出土状況(南東から)			I区1面 5号土坑、グリッド、II区1面 2号溝、グリッド出土遺物	
	2. V区4面南半 14・15・16号溝全景(南東から)		写真図版 44	II区1面 2・3・5号溝出土遺物	
写真図版 30	1. I区5面 全景(南から)		写真図版 45	II区1面 3・5号溝出土遺物	
	2. I区5面 13・14号溝全景(南東から)		写真図版 46	II区1面 5号溝出土遺物	
	3. I区5面 13・14号溝土層断面(南東から)		写真図版 47	II区1面 5号溝、4・10号井戸、グリッド出土遺物	
	4. I区5面 14号溝の杭検出状況(南から)		写真図版 48	II区1面 グリッド出土遺物	
写真図版 31	1. II区5面 全景(北西から)		写真図版 49	II区1面 グリッド、III区1面 1号溝出土遺物	
写真図版 32	1. II区5面 17号溝とAs-C下水田(北西から)		写真図版 50	III区1面 1・2・4号溝出土遺物	
	2. II区5面北半 全景(北西から)		写真図版 51	III区1面 5号溝、2・3号井戸、グリッド出土遺物	
	3. II区5面北端 畦検出状況(北西から)		写真図版 52	III区1面 1号溝、グリッド、IV区1面 グリッド、V区1面 4号溝、グリッド出土遺物	
	4. II区5面 杭列検出状況(南東から)		写真図版 53	V区1面 4・5号溝出土遺物	
	5. II区5面 杭列打ち込み状況(南西から)		写真図版 54	V区1面 4・5・6号溝出土遺物	
写真図版 33	1. III区5面 全景(南東から)		写真図版 55	V区1面 6号溝出土遺物	
	2. III区5面 24・31号溝とAs-C下水田(東から)		写真図版 56	V区1面 6号溝出土遺物	
	3. III区5面 31号溝とAs-C下水田(北西から)		写真図版 57	V区1面 6号溝出土遺物	
	4. III区5面 水田区画を横切る24号溝(北東から)		写真図版 58	V区1面 6号溝、3・4号井戸、2トレンチ、グ	

- リッド、I区2面 10号溝出土遺物
- 写真図版 59 I区2面 11・12号溝出土遺物
- 写真図版 60 I区2面 12号溝、トレンチ、グリッド、IV区2面
1号住、1号溝、グリッド出土遺物
- 写真図版 61 IV区2面 3・5号溝、グリッド出土遺物
- 写真図版 62 IV区2面 3・4号溝、グリッド出土遺物
- 写真図版 63 IV区2面 5号溝、グリッド出土遺物
- 写真図版 64 IV区2面 3・4・5号溝、グリッド出土遺物
- 写真図版 65 IV区2面 グリッド出土遺物
- 写真図版 66 IV区2面 グリッド出土遺物
- 写真図版 67 IV区2面 グリッド、3号溝、V区2面 7・8号
溝出土遺物
- 写真図版 68 V区2面 8号溝出土遺物
- 写真図版 69 V区2面 8号溝、I区3面 グリッド、III区3面
7号溝、グリッド、IV区3面 8号溝、グリッド出
出土遺物
- 写真図版 70 II区4面 13・15号溝、グリッド、III区4面 12・
13・16・19号溝出土遺物
- 写真図版 71 III区4面 13・16・20・24号溝、グリッド出土遺物
- 写真図版 72 III区4面 グリッド、V区4面 15・16号溝、1・
2・5トレンチ、グリッド出土遺物
- 写真図版 73 V区4面 5トレンチ、グリッド出土遺物
- 写真図版 74 V区4面 グリッド出土遺物
- 写真図版 75 V区4面 グリッド、I区5面 13・14号溝、グリッ
ド、II区5面 16号溝、I区6面 グリッド出土遺
物
- 写真図版 76 II区5面 16・17号溝、III区5面 グリッド、I区
6面 グリッド、III区6面 W・Yライン・1トレ
ンチ、グリッド、IV区6面 グリッド出土遺物
- 写真図版 77 IV区6面 旧河道トレンチ、グリッド出土遺物、元
総社寺田遺跡出土の墨書土器、刻書土器、刻印文字
瓦、線刻文字瓦
- 写真図版 78 元総社寺田遺跡出土の線刻文字瓦、刻印文字瓦、墨
書土器
- 写真図版 79 元総社寺田遺跡出土の墨書土器、刻書土器、刻印文
字瓦、I区6面出土土器の朽痕

《プラント・オパール顕微鏡写真》

- 写真図版 80 1. イネ
2. ヨシ属
3. ウシクサ属 (ススキ属など)
4. タケ亜科A1aタイプ (ネザサ節など)
5. タケ亜科B1タイプ (クマザサ属)
6. 不明Aタイプ (キビ族類似)
- 写真図版 81 1. 不明Bタイプ (ウシクサ族類似)
2. 表皮毛起源
3. イネ科の茎部起源
4. イネ科の地下茎部起源
5. 棒状珪酸体
6. 樹木起源 (マツ科?)

第1章 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯

昭和62年、群馬県教育委員会文化財保護課に河川課より牛池川河川改修工事に伴い、工事対象地である前橋市元総社町寺田周辺における埋蔵文化財の有無についての照会があった。文化財保護課では、当地区が古代の国府跡及び中世の蒼海城の近接地であり、過去周辺地区で発掘調査が数多く実施されている実績を踏まえ、調査の必要があるとの回答を行った。その後両者間で協議を重ね、昭和63年度から発掘調査を事業団で実施することが決定した。

一級河川牛池川は榛名山に源を発し、山麓を經由

して前橋市に至り、当地区を経て下流の元総社町落合付近で染谷川に合流する河川である。本来であれば下流部からの工事が望ましく、埋蔵文化財の発掘調査も同様に行うのが最適と判断されるが、元総社周辺地区で区画整理事業が進行していることと、本地域を走る県道前橋・群馬・高崎線に架かる元総社橋が毎年冠水する被害が続いていること等の理由により、当該地区の工事を優先することとなった。

以上の経過により元総社地区の発掘調査を優先して実施することになったが、区画整理事業との調整が必要となった。このため、昭和63年3月14日に文化財保護課・前橋土木事務所・前橋市区画整理課・

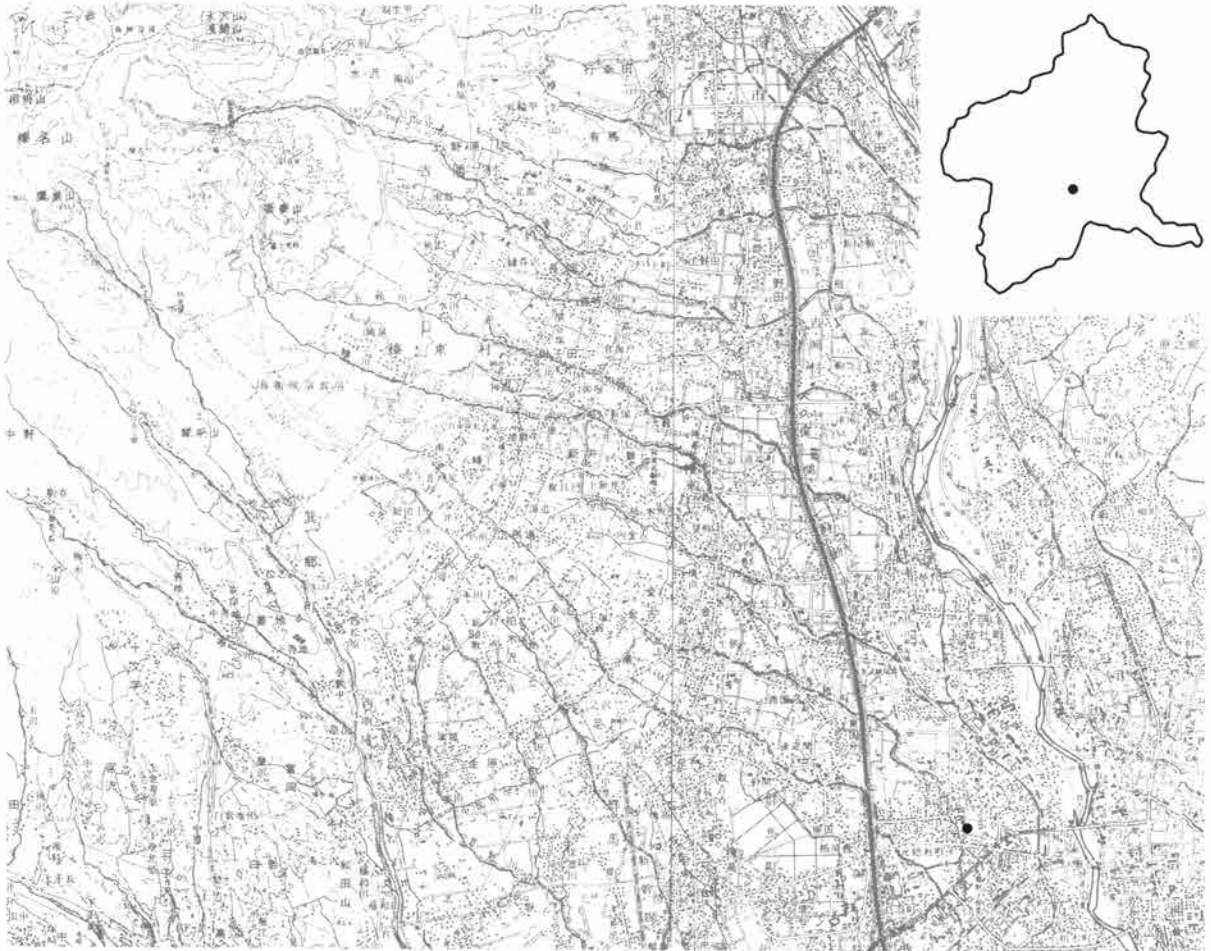


図1 遺跡の位置

0 1:100,000 5km

第1章 発掘調査の経過

前橋市文化財保護室・事業団の5機関による調整会議を行った。その結果区画整理事業と河川改修工事とは一体のものであるとの認識のもとで、開発面積の比率に応じて調査区を案分し、上流部を前橋市文化財保護室、下流部を事業団が行うこととなった。

昭和63年度の調査は同年10月から12月の3カ月を予定した。調査に先立ち8月に現地調査を行ったところ、河川の増水が激しく10月の段階でも調査に支障をきたす恐れが考えられた。このため昭和64年1月から平成元年3月の湯水期に調査時期をずらすこととなった。11月には元総社農協の裏から総社神社東側にかけてトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、古墳時代から中世に至る数枚の遺構面を確認するとともに、遺物の出土があった。

昭和64年1月になり発掘調査に着手したが、まだ移転の済んでいない住宅があるため全面的に調査を展開することができず、取りあえず可能な部分から行うこととなった。上流部より調査範囲の地区割りを行い適宜的にⅠ～Ⅲ区と命名した。調査の結果、文化層が多いところで、6面に及ぶことが判明した。特に古墳時代の2枚の水田址と多量の木器群の出土が目された。

平成元年度は、昭和63年度の調査終了に引き続き

4月10日から調査を開始し、3カ月間行われた。家屋が移転したためⅡ区と、Ⅲ区の下層が調査の対象となった。状況は前年度と同様であったが、Ⅱ区で中世に構築された堀跡が検出された。この堀は、総社神社の西に展開する蒼海城の外郭にあたり、秋元氏の居城である八日市場城に関連するものと考えられた。この堀の調査に際して、調査区のすぐ脇に民家が存在することから安全対策が必要と判断され、鋼矢板の打設を検討した。しかし、家屋は2mの盛土の上にあり、しかも昔の家屋を引いて移転したものであることが判明した。このため家屋に与える影響が大きいと判断され、断念せざるを得ず法面に対応することとなった。数条の堀跡が検出されたが、その中には古い時期のものも存在し、城出現以前の中世館跡の存在が推定できるものとして注目された。またⅢ区では古墳時代の木器群が前年度に引き続き大量に出土した。

平成2年度は、前年度と同様に川の湯水期をねらい12月1日から平成3年5月31日(4・5月については平成2年度の予算を繰返して実施)まで調査を行った。前年度からの引き続きであるⅡ・Ⅲ区の残部の調査を行い、南部分をⅣ区・Ⅴ区とし調査を続行した。遺構については前年度と同様であるが、

表1

調査年度	調査期間	調査区	調査面積(m ²)	調査内容
昭和63年度 (第1次)	昭和63年1月1日～ 平成元年3月31日	Ⅰ区 Ⅲ区(1～3面)	1,200	(中・近)溝15・井戸6・土坑7・ピット35 (奈・平)溝3・ピット9(古)溝4
平成元年度 (第2次)	平成元年4月10日 ～平成元年12月28日	Ⅱ区北半 Ⅲ区(4～6面)	4,200	(中・近)溝12・土坑3・井戸17 (古)FA下水田・As-C下水田・溝35(縄)自然木
平成2年度 (第3次)	平成2年12月1日～ 平成3年3月31日	Ⅱ区南半 Ⅳ区	4,180	(中・近)井戸3 (古)FA下水田・As-C下水田・溝10
平成3年度 (第4次)	平成3年4月1日～ 平成3年5月31日	Ⅴ区	2,120	(中・近)溝・井戸5(奈・平)溝2 (古)FA下水田・As-C下水田・溝20(縄)自然木
平成3年度 (第5次)	平成3年11月1日～ 平成4年3月31日	Ⅳ区南端 (Ⅵ区)	230 (1,950)	(中・近)井戸1・土坑3(奈・平)住1・溝6・土坑2 (古)FA下水田・As-C下水田・溝20(縄)旧河道・自然木
平成4年度 (整理)	平成4年4月1日～ 平成5年3月31日	土器復元・遺物実測・図面整理・写真整理・写真撮影・図版作成・原稿執筆・校正		

IV区の一部とV区の南側において洪積台地が検出され、牛池川の旧河道がかなり蛇行していることが判明した。

平成3・4年度においても引き続き下流部について調査を続行している。

発掘調査は昭和63年度から継続して実施してきたが、整理事業をどのように取り込むかについて調査開始時から関係諸機関で協議を行ってきた。事業地が河川に沿って帯状に延びており、全域の用地買収が済んでいないことから、発掘調査を終了してから整理事業を行うには期間的に無理が生じることとなる。従って順次終了した地区から発掘調査と並行して整理事業を行うこととした。平成4年度までの調査区間（I～V区）を対象に平成4・5年度の2年間で整理事業を実施することとなった。本年度は水田址と出土した土器群を対象とした整理事業と報告書刊行を行ない、平成5年度では出土した木器群の整理と報告書刊行を行なう予定である。（巾）

2 発掘調査の方法と経過

調査の方法 調査は牛池川下流域にあたるI区からV区にかけての13,880㎡を対象にして実施された。昭和63年度を第1次調査として、平成3年度の第5次調査までが本報告書の記載内容である。なお、調査は平成4年度も継続して実施された。

各調査区は便宜的にローマ数字で呼称し、以後調査が進展するにしたがって、下流部に向かって呼称を増していった。また、本遺跡での調査は、多年に渡り、しかも工事の進捗状況との絡みもあって、すべてが調査区呼称順通りには実施できなかったが、概ね調査にあたっては以下の方法を踏襲した。

(1) 調査区の設定は一定面積を設けず、調査年次や対象区域の現状を考慮して実施した。I区は西部環状線と牛池川の交差する地点から上流部へ向かう牛池川右岸縁、II～V区は西部環状線と牛池川が交差する地点から下流部へ向かう牛池川左岸縁を対象とし、4区間に分け実施した。

(2) 調査範囲は前橋・安中線までの区間を当面の目標としたため、調査グリッドの基準点測量は、前橋市都市計画事業元総社地区の基準点測量で使われたトラバースを使用して行い、国家座標系第IX系（ $X = +43200.0\text{m}$, $Y = -71000.0\text{m}$ ）と平行に設定した。そしてX軸を数字の0、Y軸をアルファベットの2Aに対応させ、当面の調査範囲を網羅できるようにし、1グリッドを5m方眼として、グリッド基点を北東交点に置きその呼称とした。また、水準測量は、既設の都市計画事業に伴う測量トラバース一点に設置されている高さを使用した。

(3) 遺構測量には平板を使用し、住居・遺物・セクション・エレベーション等は1/20作図、水田址は5cmコンタ・1/40作図を原則とした。また、広範囲に及ぶ測量は業者委託としたが、できる限り現場内の手実測を心掛けた。

(4) 遺構の写真撮影には中型カメラによる35mmサイズのモノクロ・リバーサル写真、及びブローニー（6×9）サイズのモノクロ写真を使用した。また、撮影対象に応じて、ローリングタワー・高所作業車を使用し、ヘリコプターによる上空からの遠景撮影も実施した。

(5) 遺構番号は各調査区単位で種別に通し番号を付した。また、遺物の取り上げは原位置をとどめるものについては、その都度番号を付し図面上に記録した。

(6) 本遺跡では6面の文化層を確認しており、谷底低地での各文化層の確認には3種の示標テフラを鍵層とした。また、遺構が検出されなかった場合においては、包含層を面として取り扱った。なお、各文化層については基本土層のところで述べることにする。

現牛池川は、群馬町金子附近を地図上の始点とし、要所々に施された護岸コンクリートの擁壁内を、調査区をかすめるように蛇行しながら南下し、前橋市元総社町落合付近で染谷川と合流する。夏季には時折冠水し周辺地域に被害をもたらすため、調査はできるだけ渇水期に実施したが、第2次、第4次調査

第1章 発掘調査の経過

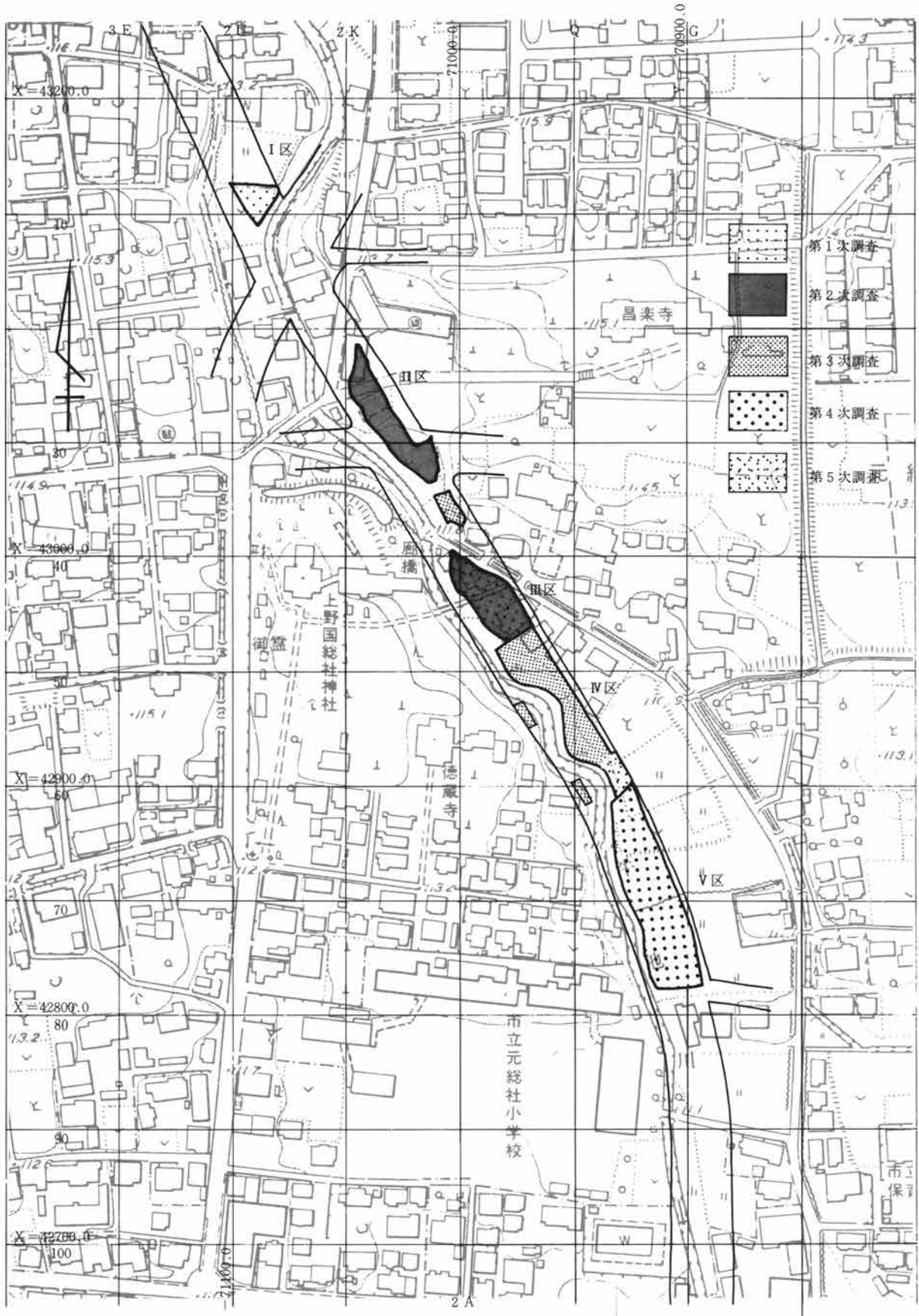


図2 調査区及びグリッド設定図

0 1 : 2500 100m

は夏季にずれ込んだため、調査区にも被害が及んだ。その上、6面までの掘削は、地表面から数メートルの深さにも達するため湧水も懸念され、安全対策も重要な課題となった。協議の結果、各調査区は、外縁から1メートルの余裕を残して掘削し、周壁には各確認面まで傾斜角45°の法面を設けた。従って各区、各遺構面の接続部分は、法面を考慮すれば必ずしも一致していない。また、調査面積は面を追うごとに減少していくが、安全対策を優先しなければならなかった実情は、河川改修工事に伴う発掘調査という特異かつ逼迫した理由によるものである。

調査の経過 第1次調査では、前年11月の試掘段階で得た土層中の示標テフラを手掛かりに、I・III区の調査を実施し、II区については、上物の移転完了後調査に入ることにした。各調査区では、1面の表土掘削は重機をリースして行い、その他の精査はすべて手作業としたが、FPF-1層及びFA層、4面の木器包含層、6面の試掘では、調査の効率化、安全を考慮して掘削機械を導入した。また、2面砂礫層の下層部分に至っては、湧水期と言えども湧水が激しいため、ポンプによる排水設備を整え、遺構・遺物の流失及び周壁の滑落を防止した。

第1次調査の結果、I区の1面からは溝、井戸、土坑、ピット群を検出し、2面からは北から南方向にかけての流れを有する溝3条を検出した。5面からは溝2条を検出し、6面では該期の遺物の出土をみた。III区の1面からは中・近世の溝と牛池川の旧河道、3面からはFA下水田址とこれに伴う溝6条を検出した。なお、第1次調査はIII区3面までとし、調査終了後は、危険防止のためすぐさま埋め戻し作業を行い、安全対策には万全を期した。

第2次調査は、当初、4月10日～6月30日の予定であったが、II区的安全対策や多量の木製品の出土等の対応により、関係機関と協議の上、調査期間を1ヶ月間延長した。また、水田土壌分析の結果が12月となることから、契約期日を12月28日とした。

III区の4面以下の調査と、上物移転が一部終了したII区北半部の調査を実施した結果、II区の1面か

らは溝6条、3面・5面からはそれぞれFA下水田址・As-C下水田址とこれらに伴う溝10条を検出した。III区の4面からは、多量の木製品が出土し困難を極めた。また、3面と同様に、5面からもAs-C直下から、整然とした水田址と溝が検出された。6面の調査では、5本のトレンチを設定し試掘したところ、該期の遺物と炭化痕を伴う自然木が多量に認められたが、湧水が激しいため確認のみにとどまった。

第3次調査は、II区南端部とIV区を対象にして実施した。IV区では、仮排水路にかかる部分だけを第5次調査分としたため、第5次分を新たにIV区南端部として区別した。今回の調査は、前回までの調査に比べ、木製品の出土量が少なく、また、調査区の約1/3を台地部が占めたため、遺構が検出されず、天候にも恵まれたことも相俟って、調査は順調に進んだ。しかも、次年度の調査対象区域であるV区の上層の調査も実施することができた。1月に実施したIV区対岸の調査では、2本のトレンチを設定し試掘したところ、大半が時期の新しい牛池川河道により削られていたものの、中央部で洪積台地（旧牛池川右岸）が検出された。台地の下層部分では、As-Sj（約1.1万年前）やAs-YP（約1.3万年前）の純層堆積が認められたが、該期の遺構・遺物は検出されなかった。また、II区南端部でも、一部で洪積台地を検出し、中世の溝が確認されたが、牛池川河道により大半が削平されていた。2月～3月にかけてのIV区の調査では、3面と5面から、FA及びAs-C下水田址とこれらに伴う溝7条を検出した。

第4次調査は、V区1・2面までを第3次調査で終了しているため、3面からを対象として実施した。4月、掘削機械を使用して、3面を覆うHr-Sを除去した後、人力による検出作業に入った。調査の結果、調査区北半部の3面からは、小区画に区分されたFA下水田址を検出し、南半部では、水田面に残る夥しい数の人の足跡群を検出した。5月、4面の木製品の分布状況を試掘調査で確認した後、精査に入った。4面からは多量の木製品が出土し、特に木

第1章 発掘調査の経過

鍬は目新しい出土となった。5面からは、北半部と南半部で区画の異なる As-C 下水田址を検出し、6面での試掘では、自然木の存在が確認された。

第5次調査は、IV区南端部とVI区を対象にして実施したが、VI区の調査結果は、第2分冊《木器編》以降の報告書に記載される予定である。IV区南端部では、2面より平安時代の竪穴住居跡1軒を検出し、3面・5面からは該期の水田址を検出した。また、4面のFA下黒色粘質土とAs-C層との間層に認められる洪水砂層(As-Cの二次堆積層)下からは、3枚の水田址の可能性を示唆する資料が得られた。

前述した様に、各調査区では6面の文化層の存在が想定されたが、6面すべての遺構面の検出をみた調査区はなかった。その理由として、As-BやFAの残存状態を悪化させた近世の掘削や攪乱、旧河道の氾濫による文化層の浸食、または調査区が谷の中心部にかかっていなかったための示標テフラの流亡等が挙げられる。しかしながら、遺存状態の良好な調査区の各面からは、数多くの遺構の検出と夥しい数の遺物の出土をみた。

旧牛池川の河道は、現行の河川とある部分では重なるものの、幾つもの蛇行を繰り返しながら下刻を続け、そしてその流水は、人為的な投入も含め、多量の遺物を運搬、堆積させながら、本遺跡地内に大きな調査成果をもたらした。また、Hr-SやAs-Cは、当時の遺構面をそのままパックする形で、遺存状態の良好な遺構検出の手助けとなった。遺物の中には、4面から出土した多量の木製品も含まれており、着柄鋤・鍬・杭・板材等は、水田址同様、水田耕作に関わる貴重な資料をもたらした。なお、4面出土の木製品については、例言の通り、次年度に報告書が刊行される予定である。

本調査に限ったことではないが、調査範囲が確実に制限されている中において、遺構等の広がりや範囲には追えなかったが、幸いなことに前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団によって本遺跡周辺地域の調査結果が詳細に報告されている。各調査の経過と内容は表1の通りである。

3. 基本土層

各調査区では、低地部(谷底平野)と台地部で以下の5つの示標テフラを鍵層として遺構の確認調査を実施したが、その堆積状態は調査区によっても差異が認められた。その原因は前述した通りであるが、概ねAs-Bは、IV区・IV区南端部・V区の一部で良好だった以外は流亡が著しく、Hr-Sにおいては、I区・II区を除く他の調査区で良好な堆積状態を示す。なお、Hr-SはFA(二ツ岳火山灰)とFPF-1(二ツ岳第一軽石流堆積物)を合わせた榛名一渋川テフラの略称であり、FAは下位より還元色の紫がかかった灰色の細粒火山灰、灰色の成層した細粒火山灰層、黄灰色粗粒火山灰層から構成されている。As-Cの堆積状態は、谷底平野の下層に位置していることも手伝ってか、上面からの遺構の影響と河川による削平が避けられたため、各調査区で良好な残存状態を示す。特に、IV区・V区の低地部では、層厚に、しかも広範囲に堆積していたのを確認することができた。また、1面と2面を覆う埋没土は、河川の運搬作用によって流入された洪水堆積物が主流を占め、砂層及び砂礫層が幾層にも縞状に堆積している。その層準を詳細に区分すれば膨大なユニット数に上るため、調査の資料として支障のない範囲内において、類似しているものはまとめて同一層として取り扱っている。調査時点における示標テフラは以下の通りである。

低地部

As-B	天仁元年(1108年)	平安時代後期
FPF-1		
Hr-S	+	6世紀初頭 古墳時代後期
FA		
As-C	4世紀初頭	古墳時代前期

台地部

As-Sj	(約1.1万年前)
As-YP	(約1.3~1.4万年前)

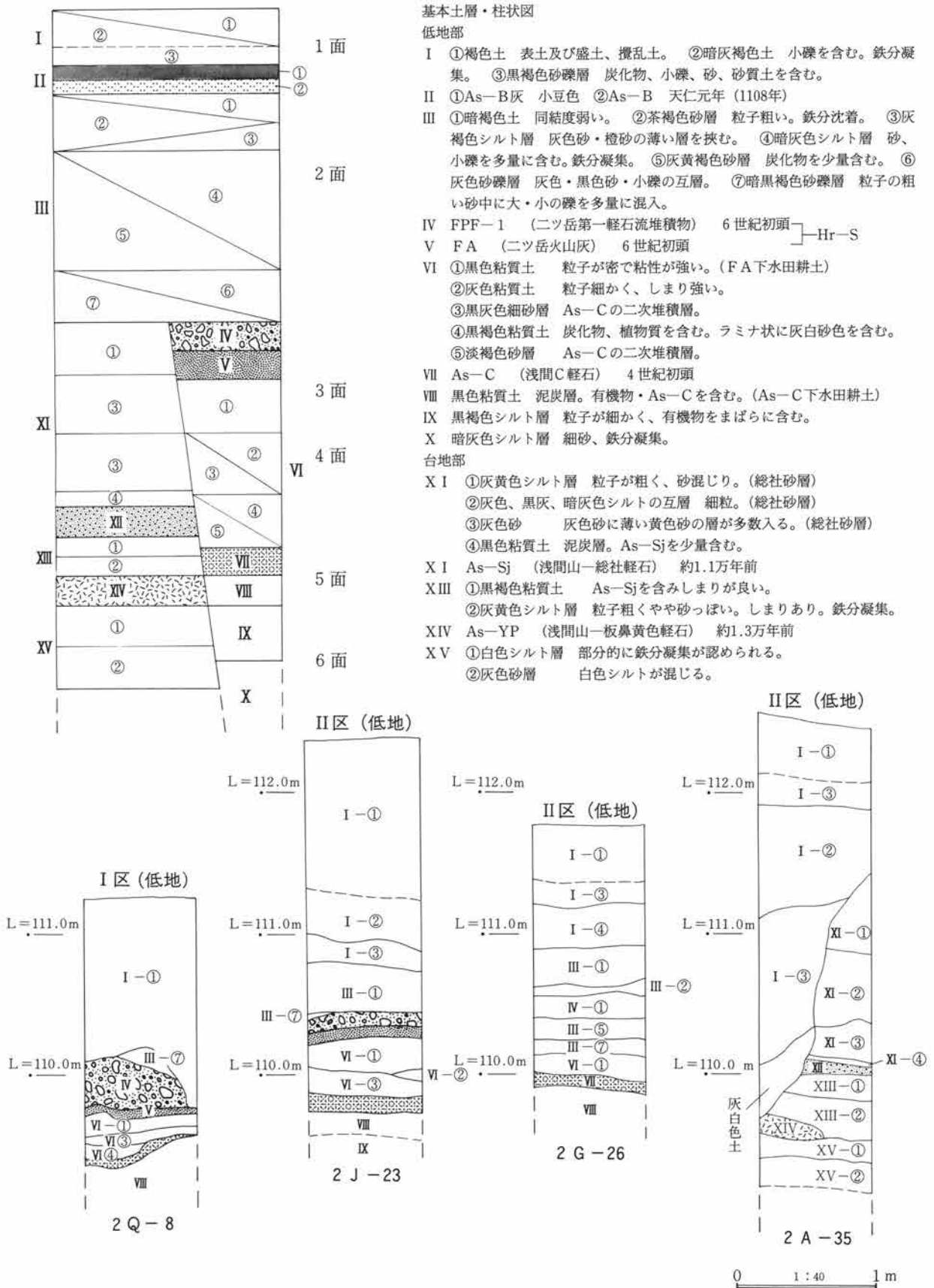


図3 基本土層・柱状図(1)

第1章 発掘調査の経過

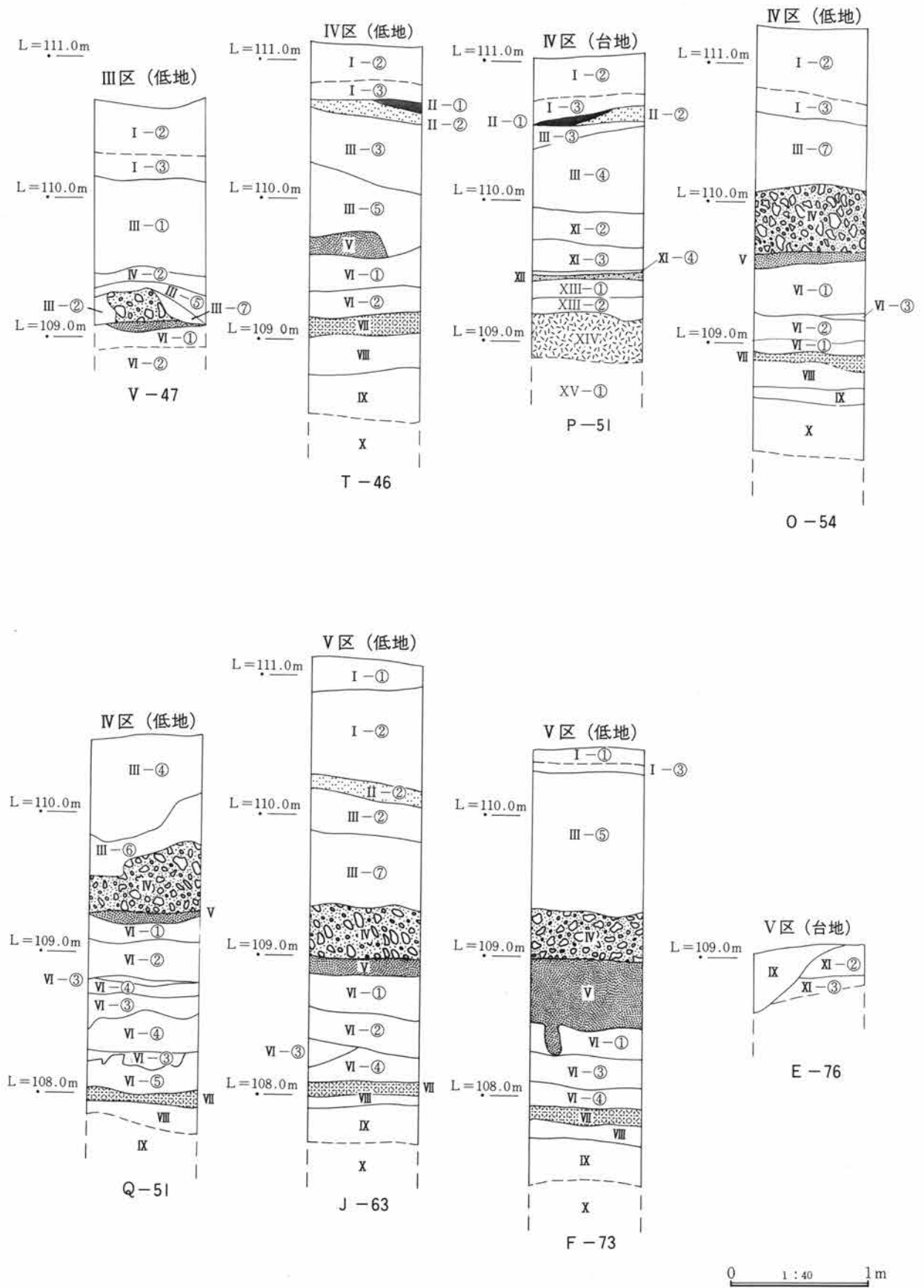


図4 基本土層・柱状図(2)

I区は低地部と台地部の調査であり、低地部では現河道の流路及び氾濫原となっていたため削平が著しく、1・2面の示標テフラであるAs-Bの殆どは流亡し、その純層堆積は近世以降の攪乱と相俟って確認することができなかつた。よって遺構確認面である1面は、表土及び盛土を掘削した面であり、各遺構の覆土中にAs-Bを少量確認できたのみである。しかしながら、As-Cの純層堆積は調査区全域にわたって確認することができた。また、低位段丘を構成する台地部では、相馬ヶ原扇状地堆積物の上位にAs-YPの純層堆積が確認されている。

II区は低地部と台地部の調査であり、低地部ではI区と同様に、As-Bの純層堆積は全域では確認することはできなかつた。また、Hr-SのFPF-1(二ツ岳第一軽石流堆積物)とFA(二ツ岳火山灰)は、調査区北東壁の通しセクションでは確認することができず、西壁の通しセクションでのみ確認することができた。As-Cの純層堆積は、調査区全域にわたって良好な残存状態を示す。

第4次調査分の調査区である北半部の台地部では、総社砂層とその面下の黒色粘質土下で、As-SjとAs-YPの純層堆積が認められたが、該期の遺構及び遺物等は検出されなかつた。As-Sjは、その層準と色調及び形状がAs-Cと極めて類似している。また、層直下に黒色粘質土を伴っているが、その特徴は比較的発泡性の良い白灰色軽石で、最大径約6mmを測り、軽石層中に赤褐色の岩片が認められることにある。(早田、1990, 1991)

III区は低地部の調査であり、I・II区と同様にAs-Bの純層堆積は一部で認められるものの、その残存状態は極めて不良であった。Hr-Sは上面の河道による削平が著しく、残存状態は良好とは言えず、As-Cの純層堆積のみ広範囲に確認することができた。

IV区は低地部と台地部の調査であり、低地部ではAs-Bとこれに伴うAs-B灰の純層堆積が、調査区北半部の一部でのみ確認することができた。また、IV区南端部では、調査区中央部の落ち込み部分(2

面・1号溝)で、As-Bの残存状態は割合と良好であった。Hr-S、As-Cの堆積状態は、IV区全域にわたって広範囲に確認することができ、その残存状態は良好と言える。

IV区の調査区のほぼ半分を占める中央部の台地部壁面において、総社砂層とAs-Sj、As-YPの純層堆積を確認することができた。

V区は低地部と台地部の調査であり、低地部でのAs-Bの堆積状態は、調査区北側の一部でのみ確認することができた。Hr-S及びAs-Cの純層堆積は確認することができた。ただ南半部に位置する台地部では、作業運搬車の通路部分にあつたため、E-76グリッド内で総社砂層を確認したのみである。

以上の様に、各調査区では上層に近く、しかも流亡し易い位置に堆積するAs-BとI区・II区のHr-Sを除く各テフラの残存状態はすべて良好であった。特に榛名山を給源とするHr-S(FA層)と浅間山を給源とするAs-C層下からは、当時の水田耕土面及び区画域を良好な状態で検出することができた。両テフラと水田耕土面との間には間層が認められないことから、両テフラが降下、堆積するまでの間は、少なくとも水田経営がなされていたと考えられる。また、As-Cの降下、堆積時期については、一般的には4世紀中葉と考えられているが、出土遺物等からみて、本報告書ではそれよりも若干遡る4世紀初頭を採用している。

第2章 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と環境

遺跡の位置と地形 関東平野の北西部に位置する群馬県は、中央部に二つの成層火山を有する。西に榛名山、東に赤城山、ともに活火山に指定されその裾野は広い。この両火山を分断する形で利根川が南流する。利根川は渋川市と赤城村に架かる大正橋の上流部付近で吾妻川と合流し、南下しながら扇状地を形成した。この扇状地は前橋台地と呼ばれ、左岸に前橋市、右岸に高崎市の代表的人口密集地域を展開する。前橋台地は約2万年前の浅間山の山体崩壊に起因する火山泥流堆積物（前橋泥流）が、赤城山・榛名山の山麓間から流出、堆積して形成された洪積台地である。

前橋泥流の層厚は、前橋市で約15m前後、高崎市でも約10m以上にも及び、その下位には、層厚約200m以上あると思われる前橋砂礫層が堆積する。また、前橋泥流の上位には、黒色の泥炭質粘土シルトの前橋泥炭層が水性上部ローム中に堆積し、その直上にシルトと砂の互層からなる層厚約5mの総社砂層（洪水堆積物）が堆積している。前橋泥炭層の堆積年代については、下部にAs-YP(1.3万年)、上部にAs-Sj(1.1万年)の純層堆積が認められることから、約1.3万年前後と推定される。

前橋台地の西縁部では、前橋泥流の上位に榛名山の陣場岩屑なだれ（約1.4万年前）に起因する相馬ヶ原扇状地が広がり、その微高地間を縫うように、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって谷を刻んでいる。その河川の一つに本調査区を流れる牛池川がある。牛池川は相馬ヶ原扇状地の中腹、群馬町の東牛池沼に端を発し、本遺跡地内で南東方向から南方向に流路を変えながら、前橋市元総社町落合付近で染谷川に合流する。さらに、染谷川は高崎市内で井野川へと合流する。元総社寺田遺跡は、この牛池川の下流域にあたる標高約112.30m～110.50mの

前橋市元総社町字閑泉明神北・屋敷・寺田地内に所在する。遺跡地東方約1.5kmの地点には利根川が流下し、中心市街地と本遺跡周辺地域とを地理的に分断する。

2. 周辺の遺跡と環境

本遺跡周辺地域の発掘調査は、本遺跡西方を縦断する関越自動車道建設工事に伴う調査の他に、前橋市の土地区画整理事業に先立つ調査が実施され報告されている。特に、元総社町周辺地域は、近年の宅地造成や開発が著しく進み、これらに伴う発掘調査が過去にも実施されてきた。また、注目を集めるものの一つに、本遺跡周辺地域は推定国府域に想定され、そのための調査も何度か行われてきた。推定域に至っては諸説が論じられてきたが、中世に築城された蒼海城の掘割と相俟って、その範囲の確証は得られていない。しかしながら、徐々にではあるが解明されつつある。

本遺跡周辺を流下する河川は、利根川を除いて東から八幡川、牛池川、染谷川の3河川がほぼ同間隔を保って並走する。各河川ともに多少の流路の変遷はあったにせよ、古代においても現位置周辺部を流下していたものと思われる。そして河川周辺の洪積台地縁には各時代ごとの生活が営まれ、その痕跡が遺構・遺物として確認されている。各時代の概要は以下の通りである。

(1) 縄文時代

牛池川中流域と関越自動車道の交わる地点に、国分寺中間地域遺跡があり、縄文時代前期～中期の竪穴式住居跡、中期～後期の土坑が検出されている。また、産業道路東・西遺跡で前期・中期、総社町桜ヶ丘遺跡で後期の竪穴式住居跡が検出されている。本調査に先立って実施された元総社明神遺跡Ⅷの調

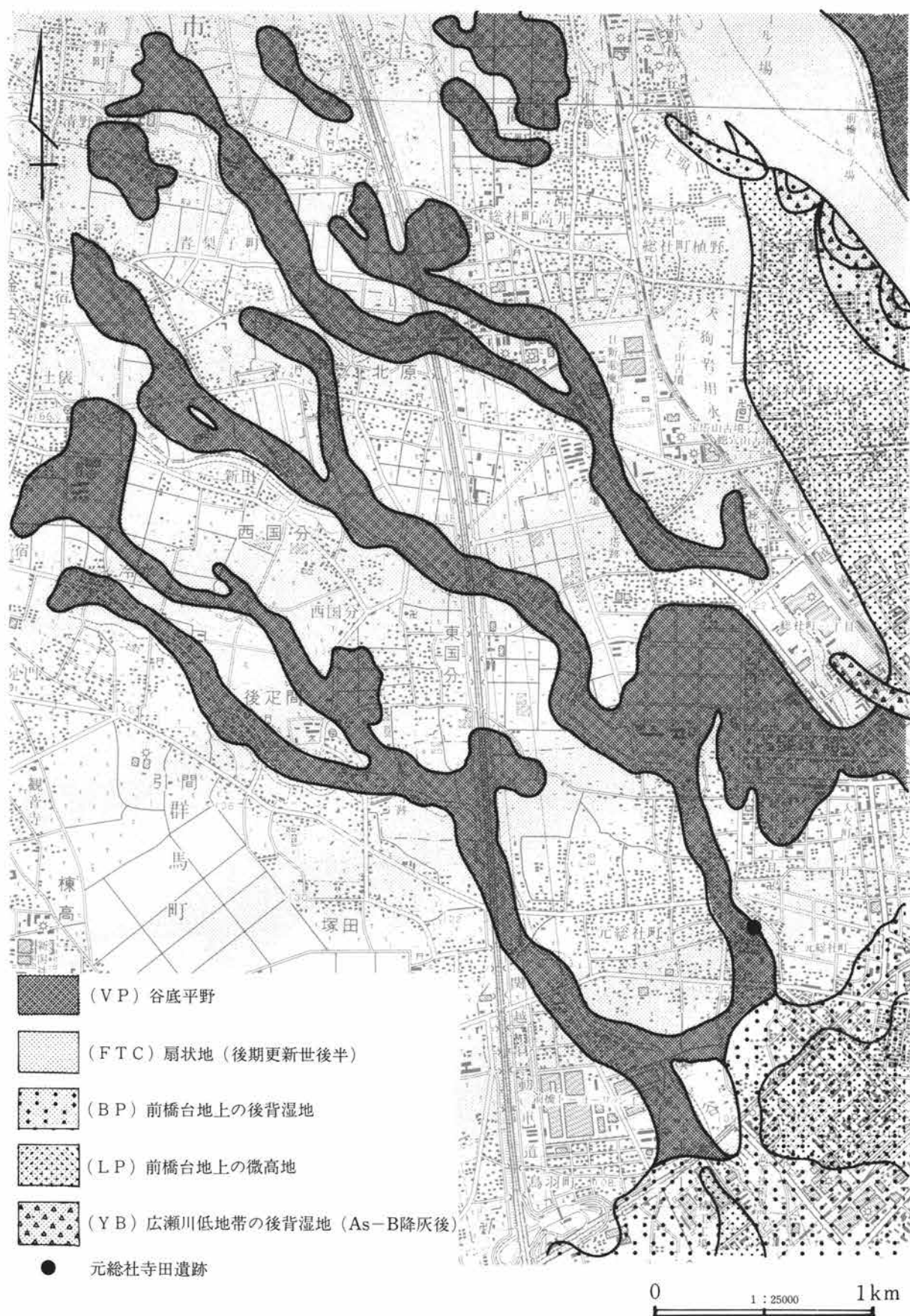


図5 遺跡周辺の地形分類

査概報によれば、遺構は検出されないものの該期の土器片が出土している。本遺跡からも、早期を除く前期～晩期の遺物が出土していること等から、おそらく、縄文時代早期の元総社町周辺地域は、前橋泥流、陣場岩屑なだれ、河川による浸食、湿地化という一連の環境の変化によって、人間生活の舞台とはなり得なかったものと考えられる。前期になり、ようやく生活の痕跡を確認することが可能となるが、周辺地域での該期の遺跡は概して稀薄である。

(2) 弥生時代

縄文時代と同様に、当該期の遺構・遺物の分布は稀薄である。しかしながら、本遺跡周辺地域では、元総社町字早道地内・柿木遺跡・元総社明神遺跡Ⅲから該期の遺物が確認され、本遺跡よりも上流部にあたる牛池川中流域に位置する国分寺中間地域遺跡からは、中期の方形周溝墓、中期末から後期の竪穴式住居跡、中期末の土坑等が検出されている。また、生産地としては、日高遺跡・新保遺跡・正観寺遺跡群・御布呂遺跡・芦田貝戸遺跡・小八木遺跡・熊野堂遺跡等が挙げられる。中でもこの時代を代表する水田遺跡には、日高遺跡・新保遺跡があり、ともに弥生時代後期末～古墳時代前期に比定される水田址が検出され、日高遺跡においては、静岡県登呂遺跡以来、30年ぶり、しかも東日本初の弥生水田の発見であり、現在では国の指定史跡となっている。また、新保遺跡は、弥生時代中期後半から中・近世へと続く複合遺跡であり、中でも大溝からの多量の木製品の出土は、東日本の木製品を考える上において、標識的遺跡として位置づけられている。

本遺跡においては、遺物の出土はみられるものの該期の遺構の検出は認められなかった。しかしながら、As-Cの降下、堆積によって水田耕作を一時中断せざるを得なくなった状況以前において、当該期に相当する水田が営まれていた可能性は高く、また、次代の古墳時代まで継続されたであろう水田経営の母体が存在した可能性も高い。

(3) 古墳時代

この時代になると元総社町周辺地域及び隣接する地域に、数多くの遺跡と代表的な古墳が出現する。本遺跡から北東方向約1.5kmの地点(大渡町)に、前方後円墳の王山古墳、北方向約2.1kmの地点(総社町)に方墳の宝塔山古墳・蛇穴山古墳、ここから北西方向約0.6kmの地点(総社町)に、前方後円墳の総社二子山古墳と方墳の愛宕山古墳が所在する。これらの古墳群は、6世紀初頭から8世紀初頭にかけての古墳時代後期から終末期の古墳であり、王山古墳—総社二子山古墳—愛宕山古墳—宝塔山古墳—蛇穴山古墳に至る一連の時期的変遷を示している。特に宝塔山古墳・蛇穴山古墳に見られる截石切組積みの石室における石工技術は、山王廃寺の根巻石、石製鷗尾、塔心礎と比較した場合、技法の上で何等かの関連があったものと推測される。また、愛宕山古墳を境として畿内色が次第に強くなっていく様子等からみて、畿内地域(大和朝廷)と東国の有力氏族(上毛野君)との力関係の一端も窺い知ることができる。

以上の様に、榛名山南東麓地域のある一定の範囲内に集中して築造された古墳群に隣接する当地域において、当然古墳築造の労力に先立つ生産活動が営まれていたであろうし、また、この時代になって該期の遺跡数が急速に増加しているということは、この時期に開発が急速に進み、代表的な古墳に見合った経済基盤が実在したのと考えられる。

本遺跡では、As-C下水田址(古墳時代前期)とFA下水田址(古墳時代後期)の2面の水田址を検出した他に、両時期間(古墳時代中期～後期)に3面の水田址の可能性を示唆する調査結果が得られた。このことは、古墳が築造された時期以前において、水田耕作という生産的な活動が既にこの近隣地域に根付いていたということでもあり、これらの経済基盤を基にして、古墳築造という大事業が成し得たであろうことは容易に推測することができる。検出された水田址の耕作者が住んだであろう集落址は、主に台地上で検出されている。

第2章 遺跡の環境

(4) 奈良・平安時代

この時代は、上毛野国から上野国に移行した時期であり、元総社町周辺地域は、政治・文化・宗教の中枢を担った地でもあった。政治では、国内政治を統括する国府が造営され、当地域は推定国府域に想定されている。その国府域の確定については諸説が論じられ、また、確定のための発掘調査も今までに幾度か実施されてきた。昌楽寺東を走る南北の溝を東の外郭線として方8町を求めた近藤義雄説(1981年)、東の外郭線を地割の検討から求め、近藤説よりも東へ約3町程ずらした地点に求めた金坂清則説(1974年)、国分僧寺の南東溝の走向線より東と南へそれぞれ6町ずつずらした松島栄治説(1976年)、蒼海城の本丸、二の丸を結ぶ線上を国衙の中軸線とし、金坂説を西へ3町ずらした峰岸純夫説(1979年)古瓦の分布と地名等から蒼海城を中心とした地域を国府域に想定し、国衙跡を導いた川原嘉久治説(1980年)等が挙げられる。いずれにしても、どの説をとってみても、国府域内を牛池川が流下していたことには変わりなく、航空写真に写し出された街並みからも、国府域を思わせる面影を僅かではあるが看取することができる。国分僧寺・尼寺を含め、時期を同じくする多量の遺物が本調査区で出土している。

国府の成立年代については、今のところ確証は得られていないが、おそらく大宝律令が制定された頃には既に始まっていたものと考えられる。

寺院址では、山王廃寺、国分僧寺(金光明四天王護国寺)、国分尼寺(法華滅罪之寺)の建立等この時代を語るに足りる史跡が点在する。天平13年(741年)、国分寺・国分尼寺建立の詔が発せられたのに伴い、現在の群馬町字東国分の地に、比較的早い段階に上野国分寺・尼寺が建立されたと考えられる。また、二寺よりも時期を数十年遡って建立された山王廃寺からは、全国的に見ても希少価値のある石製鷗尾、根巻石、塔心礎等が検出され、高崎市に所在する「山ノ上碑」、『上野国交替実録帳』から現在では放光寺に比定されている。

本遺跡のV区からは、国分僧寺跡出土の瓦と同範

の瓦と飾り金具が確認されており、その他数多くの瓦や該期の遺物が出土している。特に、IV区2面に相当する砂礫層中から出土した2枚の八綾鏡と、元総社明神遺跡Ⅷの27トレンチ出土の人形が、割合と近接する位置から出土していること等からみて、両者の機能が、すこぶる祭祀的色彩の濃いものであったことが窺える。

本遺跡周辺地域での該期の遺跡は、国分寺中間地域遺跡・新保遺跡・中尾遺跡・鳥羽遺跡・国分境遺跡・北原遺跡・下東西遺跡等があり、元総社町周辺では、元総社明神遺跡・閑泉樋遺跡・閑泉樋南遺跡・草作遺跡・桜ヶ丘遺跡等が挙げられる。

以上の様に繁栄を極めた上野国府周辺地域は、天慶2年(939年)、平将門軍による国府襲撃、治承4年(1180年)、足利俊綱軍による進攻以降、衰退の一途を辿ることになり、時代は中世の武士社会へと移行していった。

(5) 中世・近世

前代の繁栄期を引継ぎ、中世に至っても勢力の中心的役割を果たした地域であった。代表的な史跡であり本遺跡と位置的に重要な関係を持つものとして、室町時代の蒼海城址(元総社町)、大友館址(大友町)、江戸時代初期の八日市場城址(元総社町)、村山館址(大友町)が挙げられる。

蒼海城は城以前は守護代総社長尾氏の拠点として、現在の北群馬郡子持村に所在する白井長尾氏の白井城と政治、文化の面で勢力を二分した。その後、永享元年(1429年)長尾憲明の頃に、城郭としての機能を有するに至り、県内でも最古級の城郭に位置づけられ、しかも県下最初の城下町を形成したと考えられている。また、蒼海城の掘割は推定国府域と関係が深く、現在の元総社町の主要道路は、この掘割に沿って作られていると推測される。

永禄6年(1563年)、長尾氏から勢力を奪取した厩橋長野氏は、北条、武田の両軍に進攻され滅亡し、蒼海城は城としての機能を失い落城した。

室町時代には、蒼海城、白井城が象徴する様に、

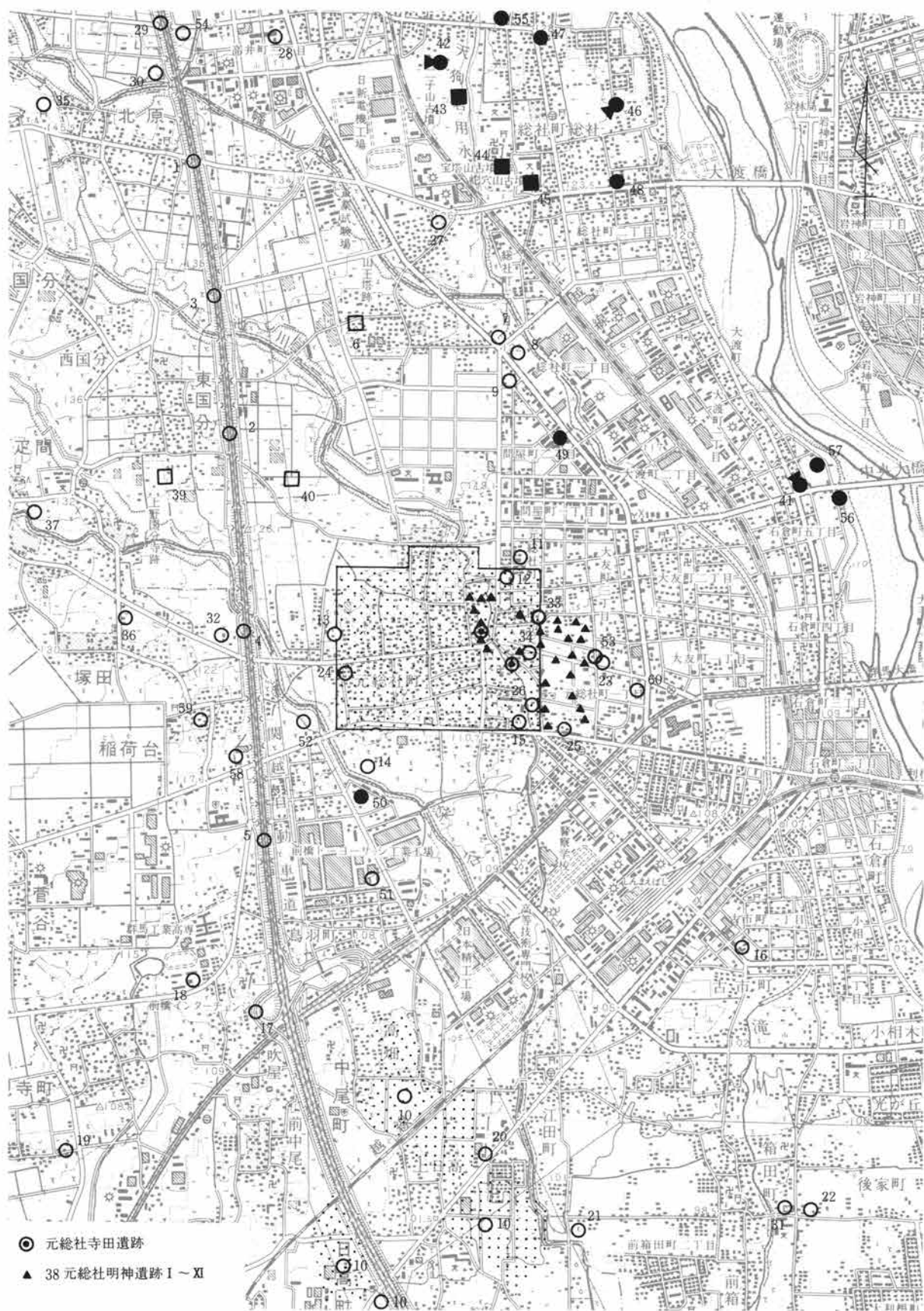


図6 周辺の遺跡分布

第2章 遺跡の環境

各地の国人層の拠点としての城館が数多く築かれた。代表的居館址では、高崎市の矢島遺跡（矢島館址）、寺之内遺跡（寺之内館址）、元島名遺跡（元島名城・桜屋敷）、吹屋遺跡（村東館址）、前橋市鳥羽遺跡（S D24）、瑞気遺跡（第1号溝）、下東西遺跡等が挙げられる。

大友館は、白井伝説の附録によれば、長尾新四郎景俊こと弾正入道長健の住庵した館であり、現在の太友町にある長見寺に所在を求めることができる。

中世の地理的変動で見逃してはならない事に、利根川の変流が挙げられる。現在、前橋の市街地西方を南流している利根川の旧流路は、群馬大学教育学部付近から西へ屈曲し、総社町付近から流路を東に移して、現在、広瀬川が流れている広瀬川低地帯の南部を流下していたと考えられている。その証左は、前橋市内に残る地形（崖線）や地名（越渡、川岸、越度、舟戸）等に求めることができ、中世のある時点を境にして、在来河川の流路を争奪して現在の流路となった可能性が非常に高い。その時期については、現在のところ応永34年（1427年）説と天文年間（1532～1554年）説があり、ともに洪水を変流の起因としている。しかしながら、一方では、洪水等の自然的な要因を否定し、人為的な掘削による河川の変流をとる立場もあるが、今のところ前者を要因とする方が主流を占めている。いずれにしても、利根川の本流は、中世後期のある時期において変流し、約2万年前に前橋泥流が堆積する以前の本来の流路に戻って来たのである。

八日市場城は、慶長6年（1601年）、蒼海に封ぜられた秋元長朝が、総社城が落成するまでの9年間仮寓した城であり、本調査区のII区からは、当初城跡に関係すると思われる堀跡が検出されたが、時期的には遡り、遺構的な関連は不明である。

村山館は、村山佐渡守の城であり、本郭の堀址が一部検出されている。現在の太友町字村山に所在を求めることができる。

近世の江戸時代に至っては、徳川家康の開幕以降、上野国内には、諸藩、旗本知行地、天領が置かれた。

また、関東の華と言われた厩橋城の城主には、徳川氏普代の酒井重忠が任命され、上野国内のすべてのものが徐々に幕藩体制に組み込まれていった。そして時代は戦国の世から元和偃武の時代へと変わっていったのである。

周辺の遺跡地名表

No	遺跡名・所在地	時代	概要
1	北原遺跡 群馬町北原	奈・平 中世 古墳	住居跡・墓地・井戸・掘立柱・土坑溝・土坑・掘立柱水田址
2	上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群 前橋市元総社町 群馬町東国府	縄・弥・古～中 中世 近世	住居跡 墓地・溝 井戸
3	国分境遺跡 群馬町北原	古・平 古墳 平安	住居跡・土坑溝 井戸・地下式土坑 定木出土
4	鳥羽II遺跡 群馬町塚田字村東	古・奈 奈・平 中世	住居跡 住居跡・掘立柱・溝・カマド採掘坑 館址
5	鳥羽遺跡 前橋市鳥羽町 群馬町稲荷台	奈・平 中世 江戸 古～中	住居跡・溝・井戸・土坑 居館・溝 墓地 畠
6	山王庵寺遺跡(放光寺) 前橋市総社町総社昌楽寺廻	奈・平	住居跡・掘立柱・塔心礎
7	昌楽寺廻村東遺跡 前橋市総社町総社昌楽寺廻村東	古墳	建物遺構・柱痕
8	産業道路東遺跡 前橋市総社町総社	縄文	前・中期の集落址
9	産業道路西遺跡 前橋市総社町総社2884 前橋市総社町総社2885	縄文	前・中期の集落址
10	日高遺跡群 高崎市日高町小字村西 高崎市日高町小字村前 高崎市日高町小字中掘添 高崎市日高町小字村東	弥生 弥・古 中世	住居跡・溝・方形周溝墓 水田址 墓地・井戸
11	閑泉樋遺跡 前橋市元総社町	古墳 奈・平・中	住居跡 溝
12	閑泉樋南遺跡 前橋市元総社町	古・奈・平 古墳 中世	住居跡・土坑 堅穴状遺構 溝
13	草作遺跡 前橋市元総社町	古～平 平安	住居跡 井戸・溝・土坑
14	染谷川遺跡 前橋市元総社町	古墳	包蔵地
15	元総社小学校校庭遺跡 前橋市元総社町2406	奈・平	住居跡・掘立柱建物跡・土坑
16	赤鳥遺跡 前橋市古市町1丁目43-28	古墳	集落址・畝状遺構
17	中尾遺跡 高崎市中尾町	奈・平 古墳	住居跡・掘立柱 掘立柱・土坑

2 周辺の遺跡と環境

No.	遺跡名・所在地	時代	概要
18	菅谷遺跡 群馬町大字菅谷字石塚2428他	弥生	包蔵地
19	正観寺遺跡 高崎市正観寺	弥・奈・平・古 奈・平	住居跡・井戸・溝 水田址・掘立柱建物跡
20	勝呂遺跡 前橋市江田町279-1他	平安	水田址・条理
21	箱田境遺跡 前橋市箱田町箱田境421	平安	水田址
22	五反田遺跡 前橋市箱田町1009-1	平安	水田址
23	堰越遺跡 前橋市元総社町	古～平	溝・土坑・住居跡・ 井戸
24	天神遺跡 前橋市元総社町早道831他	奈・平	住居跡・井戸・土坑
25	神明東遺跡 前橋市元総社町寺田5-1他	古～平	住居跡・土坑・溝・ 竪穴状遺構
26	寺田遺跡 前橋市元総社町	古～平	大溝・水口遺構 木器出土
27	村東遺跡 前橋市総社町総社1873-1	古・奈・平	住居跡・溝・集石遺 構・堀
28	柿木遺跡 前橋市高井町1-28-15	縄・弥・奈・平 中・近	住居跡 住居跡・土坑
29	下東西遺跡 前橋市青梨子町 群馬町北原	弥～中	住居跡・掘立柱跡物 跡
30	北原遺跡 群馬町北原	平安	住居跡
31	村前遺跡 前橋市箱田町字村前1471-2	古～平	水田址
32	塚田村東遺跡 群馬町塚田	平安	住居跡・井戸・溝・ 土坑
33	堰越II遺跡 前橋市大友町	平安	住居跡・土坑
34	大友屋敷III遺跡 前橋市元総社町	古～奈・平	住居跡・溝・土坑
35	熊野谷遺跡 前橋市青梨子町	縄・平 縄文 平安	住居跡・土坑 集石・溝 掘立柱建物跡
36	散布地墳墓 群馬町引間松葉	奈良	骨壺・土釜・瓦・陶 器出土
37	散布地古墳 群馬町引間古屋敷	古～奈	石製骨器・板碑片・ 土師器・須恵器出土
38	元総社明神遺跡I 元総社明神遺跡II 元総社明神遺跡III・IV 元総社明神遺跡V 元総社明神遺跡VI 元総社明神遺跡VII 元総社明神遺跡VIII 元総社明神遺跡IX	古～平 古～奈・平 平安 古墳 中世 奈・平 古～奈・平 古～中・近 平～中 平安 古墳 古・平 中世 古・平	住居跡・溝・土坑・井戸 住居跡 大溝 住居跡 溝 土坑・掘立柱建物跡・ 杭列 住居跡・溝 住居跡・土坑・溝状 遺構・建物跡・井戸・ 畝状遺構 住居跡・土坑・溝状 遺構・井戸 竪穴状遺構・井戸 人形出土 土坑 水田址 溝 住居跡

No.	遺跡名・所在地	時代	概要
	前橋市元総社町	平安 平・中 近代	掘立柱建物跡・土坑・ 棚列状遺構 溝・井戸 防空壕
39	上野国分僧寺跡 群馬町東国分村引間石堂	奈・平	礎石・築地・堀
40	上野国分尼寺 前橋市元総社町小見 群馬町東国分	奈・平	中門跡・金堂跡・講 堂跡
41	王山古墳 前橋市総社町総社100-1他	古墳	前方後円墳 全長75. 6m、高さ3.3m、横 穴式両袖型石室、積 石塚 6世紀初頭
42	総社二子山古墳 前橋市総社町植野二子山	古墳	前方後円墳 全長90. 0m、高さ8.0m、横 穴式両袖型石室 6 世紀後半～末
43	愛宕山古墳 前橋市総社町総社大屋敷 愛宕山	古墳	方墳 一辺55.0m、高 さ8.0mの巨石巨室 の横穴式両袖型石 室、南東に開口 7 世紀中葉
44	宝塔山古墳 前橋市総社町総社1606	古墳	方墳 一辺50.0m以 上、高さ12.0m、複 室の載石切組み積み の横穴式両袖型石室 7世紀後半
45	蛇穴山古墳 前橋市総社町総社1587-2	古墳	方墳 一辺39.0m、高 さ5.0m、載石切組み 積みの横穴式両袖型 石室 8世紀初頭
46	遠見山古墳 前橋市総社町総社	古墳	前方後円墳 全長約70.0m、後円 部に石室、葺石看取
47	大小路山古墳 前橋市総社町総社	古墳	円墳 径20.0m、高さ2.0m 石室使用の石片散在
48	薬師様古墳 前橋市総社町総社粟島	古墳	既削平
49	稲荷山古墳 前橋市総社町1746-1 前橋市総社町1746-2	古墳	墳丘 残存径10数m、高さ 2.0m、既削平
50	弥勒山古墳 前橋市総社町稲荷塚東	古墳	円墳 径約20m、高さ 約2.5m、角閃石安山 岩の石室、既削平
51	早道遺跡A・B 前橋市鳥羽町		土師器片散布
52	弥勒古墳 前橋市元総社町弥勒1237 前橋市元総社町弥勒1238	中世	中世墳墓 陶器片・板碑出土
53	堰越遺跡 前橋市大友町	奈・平	溝・土坑
54	清里南部遺跡群(下東西遺跡) 前橋市青梨子町下東西	奈・平	住居跡・溝等
55	稲荷山古墳 前橋市総社町1746-1他	古墳	円墳 横穴式石室石材一部 露出、既削平
56	墳墓一 前橋市総社町	古墳	削平

第2章 遺跡の環境

No.	遺跡名・所在地	時代	概要
57	墳墓二 前橋市総社町	古墳	円墳、既削平
58	墳墓 群馬町稲荷台北金尾		土師器・須恵器出土
59	墳墓 群馬町稲荷台北金尾		
60	樋越遺跡 前橋市元総社町1-2	奈・平	土坑・溝

註

- 1 『北原遺跡』 群馬県教育委員会・群馬町教育委員会 1986
- 2 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986～1988〕
- 3 『国分境遺跡』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990〕
- 4 『鳥羽II遺跡』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988〕
- 5 『鳥羽遺跡』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986〕
- 6 『山王廃寺跡発掘調査報告書』 前橋市教育委員会 1975～1982 『群馬県史』資料編2 群馬県 1986
- 7 『前橋市史』尾崎喜左雄 「第三編 古代下 第一章 国政政治」 前橋市 1971
- 8 『前橋市史』第一巻 「第二編 古代上 第一章 第一節」 前橋市 1971
- 9 『前橋市史』第一巻 「第二編 古代上 第一章 第一節」 前橋市 1971
- 10 『日高遺跡』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 『日高遺跡I～IV』 高崎市教育委員会 1979～1982〕
- 11 『閑泉樋遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 12 『閑泉樋南遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- 13 『草作遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
- 14 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1971
- 15 『前橋市史』 「第三編 古代下 第一章 第二節」 前橋市 1971
- 16 『赤鳥遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
- 17 『中尾遺跡』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 『日本考古学年報29』 1976〕
- 18 『菅谷遺跡発掘調査報告書』 群馬町教育委員会 1980
- 19 『正観寺遺跡群I～III』 高崎市教育委員会 1979～1981
- 20 『勝呂遺跡』 前橋市教育委員会 1987
- 21 『箱田境遺跡発掘調査報告書』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
- 22 『五反田遺跡発掘調査報告書』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987
- 23 『堰越遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- 24 『天神遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987
- 25 『神明東遺跡』 前橋市教育委員会 1987
- 26 『寺田遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- 27 『村東遺跡』 前橋市教育委員会 1988
- 28 『柿木遺跡』 前橋市教育委員会 1984
- 29 『下東西遺跡』 群馬県教育委員会 〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986・1988〕
- 30 『昭和55年度埋蔵文化財調査略報』 群馬町教育委員会 1981
- 31 『村前遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987
- 32 『塚田村東遺跡調査概報』 群馬町教育委員会 1986
- 33 『堰越II遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
- 34 『大友屋敷III遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987
- 35 『熊野谷遺跡』 前橋市教育委員会 1989
- 36 『群馬県遺跡台帳II』（西毛編） 群馬県教育委員会 1972
- 37 『群馬県遺跡台帳II』（西毛編） 群馬県教育委員会 1972
- 38 『元総社明神遺跡I～IX』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1982～1991
- 39 『上野国分寺周辺地域発掘調査報告』 群馬県教育委員会 1971・『史跡上野国分寺跡』 群馬県教育委員会 1988
- 40 『上野国分寺跡発掘調査報告』 群馬県教育委員会 1970・1971
- 41 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 42 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 43 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 44 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 45 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 46 『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会 1963
- 47 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1971
- 48 『全国遺跡地図・群馬県』 文化庁 1977
- 49 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1971
- 50 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 51 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1971
- 52 『弥勒遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1971
- 53 『堰越遺跡』 山武考古学研究所 1988
- 54 『清里南部遺跡群III』 前橋市教育委員会 1980
- 55 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1972
- 56 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1972
- 57 『群馬県遺跡台帳I』（東毛編） 群馬県教育委員会 1972
- 58 『群馬県遺跡台帳II』（西毛編） 群馬県教育委員会 1972
- 59 『全国遺跡地図群馬県』 文化庁 1977
- 60 『樋越遺跡』 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 1面の調査

1. 概要

I区からV区にかけて、溝27条、井戸26基、土坑8基、ピット34基を検出し、これらに伴う遺物の出土をみた。

1面は表土からAs—B直上までの遺構面及び遺物包含層であるが、主として表土直下に堆積する褐色砂礫層中から該期の遺物が多量に出土した。この砂礫層は、低地部を流れる河川の運搬、堆積作用によって形成されたものであり、現在の表土に至るまでの整地作業により、客土との混土となっている場合が多い。また、調査区によっては砂礫層を削平し

As—B直上に直接表土が堆積していた調査区もあり、攪乱を受け易い位置に堆積していることは事実である。また、各調査区で検出された遺構の殆どが自然的に形成された溝（流路）であることから、As—B堆積以降も、河川の氾濫に伴う流路の変遷が、本遺跡低地部にあったことを物語っている。

本遺跡に関係すると思われる中世の史跡では、蒼海城址と八日市場城址があり、これらについての掘割が絵図として記録されている。それによると、蒼海城の外郭を成す掘割は、牛池川の旧河道を一連の掘割として利用しているため、本遺跡の調査区はその一連の掘割の中に網羅されてしまう。従って、他の整然とした掘割と本遺跡から検出された溝（堀跡）との明瞭な接続部分は認められない。また、調査当

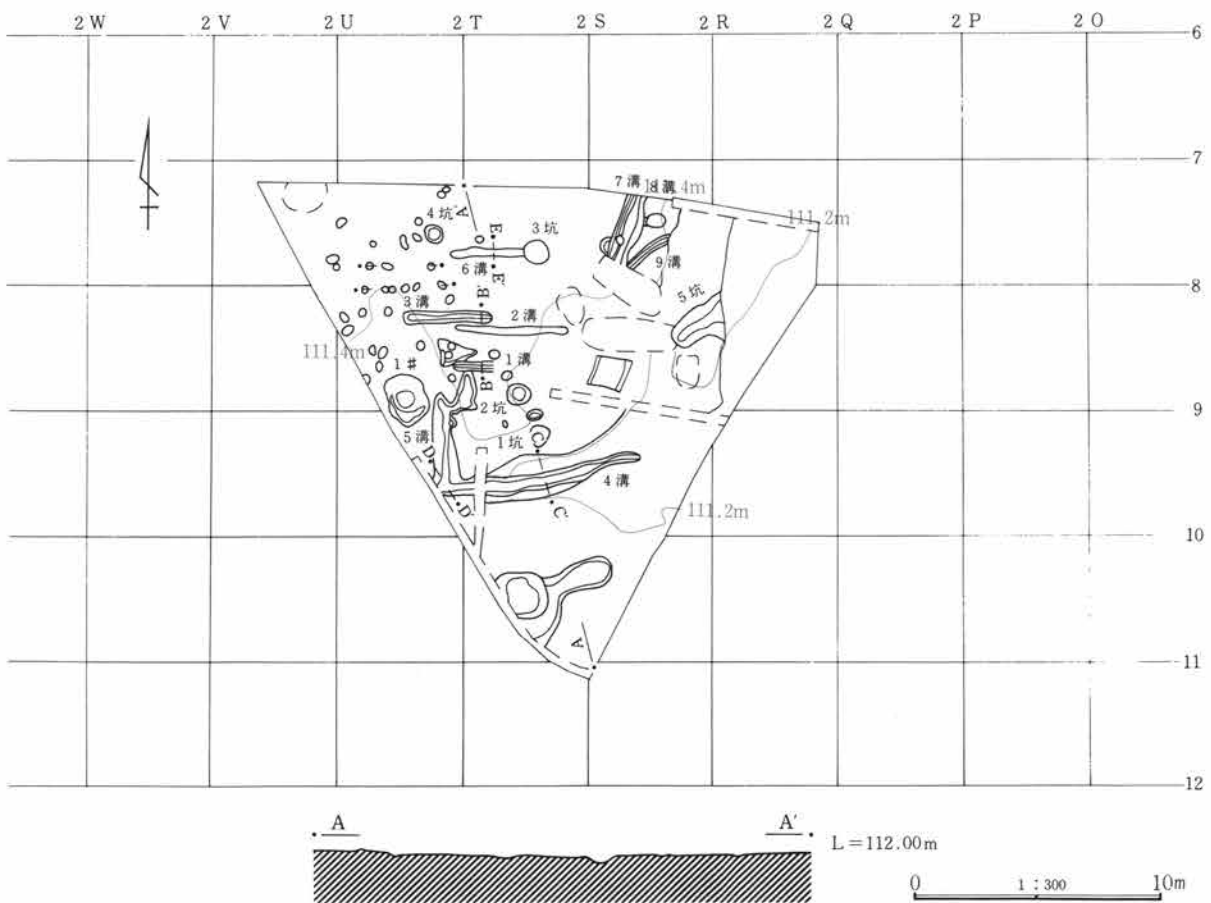


図7 I区1面 全体図

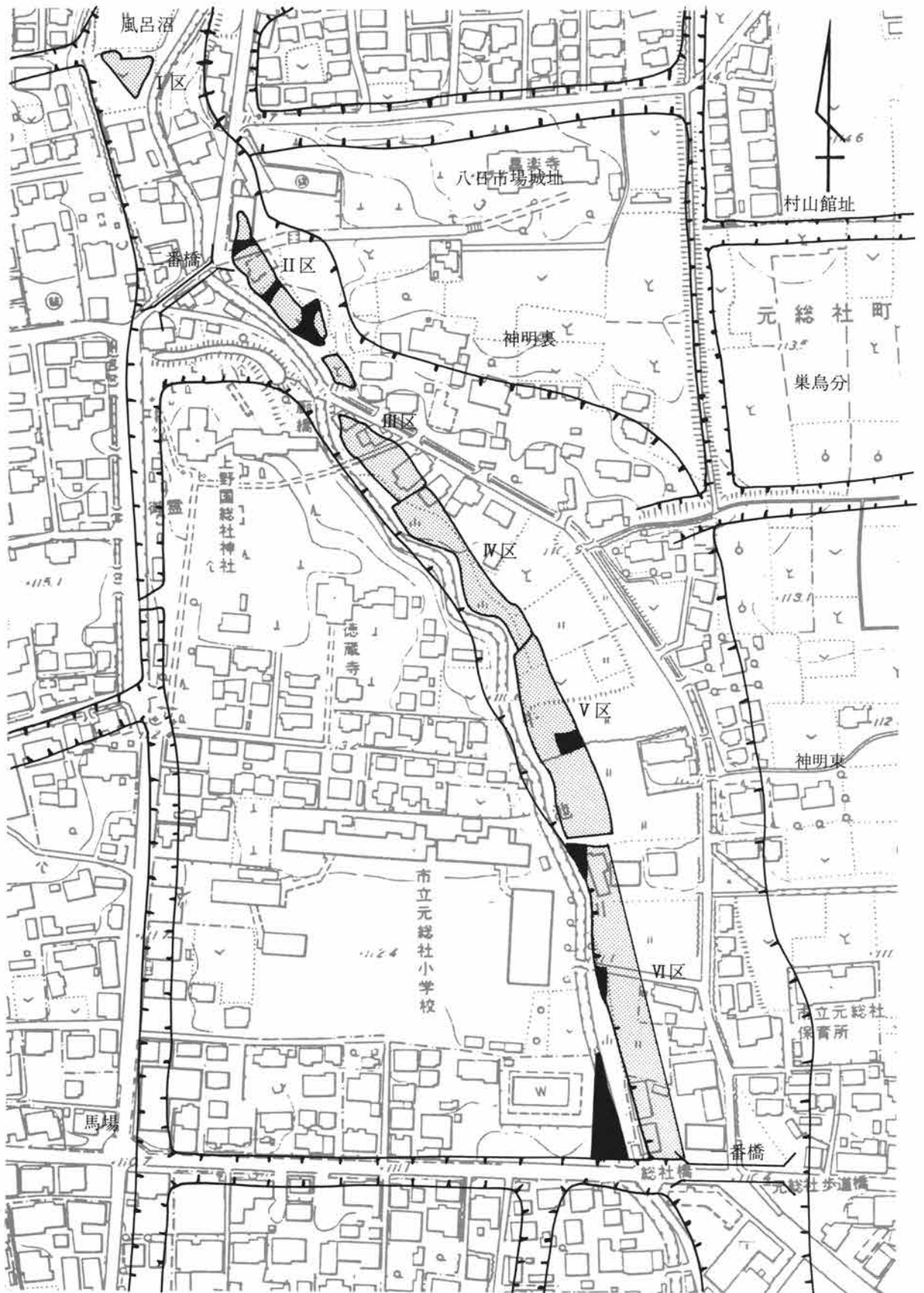


図8 調査区と蒼海城の掘割

0 1 : 2500 100m

初、II区で検出された2・4・5号溝と現在の昌楽寺に所在した八日市場城の掘割とが、何等かの関連を持つものと推定されたが、出土した遺物の時期が八日市場城よりも遡ることから、おそらく八日市場城以前の館の掘割とII区から検出された堀跡が関係するものと思われる。

I区では、旧河道による削平を一部受けている部分があるものの、溝9条、土坑5基、井戸1基、ピット35基を検出した。検出された井戸以外の遺構は出土遺物を伴うものもあるが、その純然たる機能は不明な部分が多い。

II区では溝6条、土坑2基、井戸11基を検出した。2号溝はほぼ南北方向に走向し、4号溝は北東—南西方向、5号溝は南北方向から東西方向の規格化された走向を示す。蒼海城の掘割は、前述したように牛池川の旧河道を利用しているため細部は不明であるが、2号溝と5号溝の走向は、その延長線上で交差可能な位置にあり、前述した通り、八日市場城以前の掘割と何らかの関連性を示すものと考えられる。

III区では約0.40m～1.00mの厚さで表土が堆積し、土中にビニール等を多量に混入することから、整地時に搬入された極めて新しい客土と思われる。この客土を除去した面がIII区1面の遺構面であるが、As—Bの堆積状態が不良であるため、1面と2面の遺構面の区別が正確にはできなかった。特に溝は、FPF—1を切り込んではいるものの、出土遺物が古墳時代～近・現代の物までと雑多に混入している。おそらく、2面(奈良・平安時代)の流路面と1面(中・近世)の河道面が重複した結果、遺物も両者混同して出土したものと思われる。本調査区からは、溝6条、土坑1基、井戸6基を検出した。検出された溝は、人為的に作られたものではなく、円礫を含む砂礫層によって一部埋没していることや、その形状、走向等からみて、主として河道内に形成された流路面であったと考えられる。また、1号溝は北西から南東方向への走向を持ち、現河道と同じ走向を保つが、開削時期は極めて新しく、最終的には終戦直後まで利用されていたものと思われる。

IV区では表土の堆積が薄く、しかも整地作業によって表土下の砂層が削平されていたため、遺構面としてとらえることができなかったが、北半部と南半部で、掘削時期の比較的新しい井戸3基を検出した。

V区からは溝6条、井戸5基を検出した。3号溝は旧河道面であり、現河川の流路とほぼ一致している。また、6号溝の走向は、ほぼ東西方向であり、蒼海城の掘割との関係が予想されたが、前述した絵図に描かれた掘割との接続部分は検出されなかった。しかしながら、調査時点での機能的な詳細は不明であるが、II区からV区にかけて検出された溝(堀跡)の中では、蒼海城の掘割と一番関係が深いものと推測される。

2. I区の溝・井戸・土坑

1号溝 図7・20

位置 2S・2T—8グリッド

重複 なし。

走向 東西方向

規模 調査長1.63m 幅0.20m～0.22m

深さ0.02m～0.03m

形状 (傾斜 東端111.43m 西端111.39m)

底面はほぼ平坦であり底面幅は一定である。断面形は逆台形を呈する。

埋没土 As—Bを含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器甕・坏の小片

調査所見 2・3・6号溝と併走し、2・3号溝と近接することから、当初、中世以降の畠の畝立てとされたが、機能的な詳細は不明である。

2号溝 図7・9・20・29 表P243

位置 2S・2T—8グリッド

重複 なし。

走向 東西方向

規模 調査長4.43m 幅0.16m～0.27m

深さ0.03m～0.05m

形状 (傾斜 西端111.41m 東端111.29m)

第3章 検出された遺構と遺物

底面は僅かに丸みを帯び底面幅は一定である。断面形はかまぼこ形を呈する。

埋没土 As-Bを含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 青磁碗片

調査所見 1号溝と同様に、当初、中世以降の畠の畝立てと思われたが、機能的な詳細は不明である。

3号溝 図7・20

位置 2S・2T-8グリッド

重複 なし。

走向 東西方向

規模 調査長3.66m 幅0.24m~0.51m
深さ0.05m~0.13m

形状 (傾斜 東端111.42m 西端111.25m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Bを含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器甕片、須恵器甕片、瓦片

調査所見 出土遺物である瓦片は近世の所産と思われる。1・2号溝と同様に、中世以降の畠の畝立てと思われたが、機能的な詳細は不明である。

4号溝 図7・20

位置 2R・2S・2T-9グリッド

重複 5号溝との先行、後出は不明である。

走向 ほぼ東西方向

規模 調査長11.65m 幅0.26m~1.97m
深さ0.08m~0.22m

形状 (傾斜 東端111.05m 西端111.00m)

底面は丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B及び小礫を少量含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器甕片・坏片、須恵器蓋片、灰釉陶器片

調査所見 形状、埋没土からみて耕作痕の可能性は低く、溝としての機能を有していたと考えられる。時期は中世以降と思われるが、詳細は不明である。おそらく、5号溝と同じ一連の流水作用により形成

されたものと思われる。

5号溝 図7・20

位置 2T-8・9グリッド

重複 4号溝に接続する。

走向 南北方向

規模 調査長4.10m 幅0.67m~0.88m
深さ0.19m~0.22m

形状 (傾斜 北端111.88m 南端110.99m)

底面は丸みを帯び凹凸が認められる。

埋没土 底面に細砂、小礫を多く含む暗褐色土が堆積し、上層にAs-Bを含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 須恵器甕片・碗片、土師器甕片、瓦片

調査所見 形状、埋没土からみて、4号溝と同様に溝としての機能を有していたと考えられる。時期は中世以降と思われる、4号溝と同じ一連の流水作用により形成されたものと思われる。

6号溝 図7・20

位置 2S・2T-7グリッド

重複 3号土坑に先行する。

走向 東西方向

規模 調査長2.98m 幅0.21m~0.26m
深さ0.03m~0.04m

形状 (傾斜 東端111.46m 西端111.40m)

底面はほぼ平坦であり、断面形は逆台形を呈する。

埋没土 As-Bを含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 1・2・3号溝とほぼ平行を保って走向していることから、中世以降の畠の畝立てと思われたが、機能的な詳細は不明である。

7号溝 図7

位置 2R-7グリッド

重複 なし。

走向 北北東-南南西方向

規模 調査長2.61m 幅0.26m~0.43m
深さ0.03m~0.05m

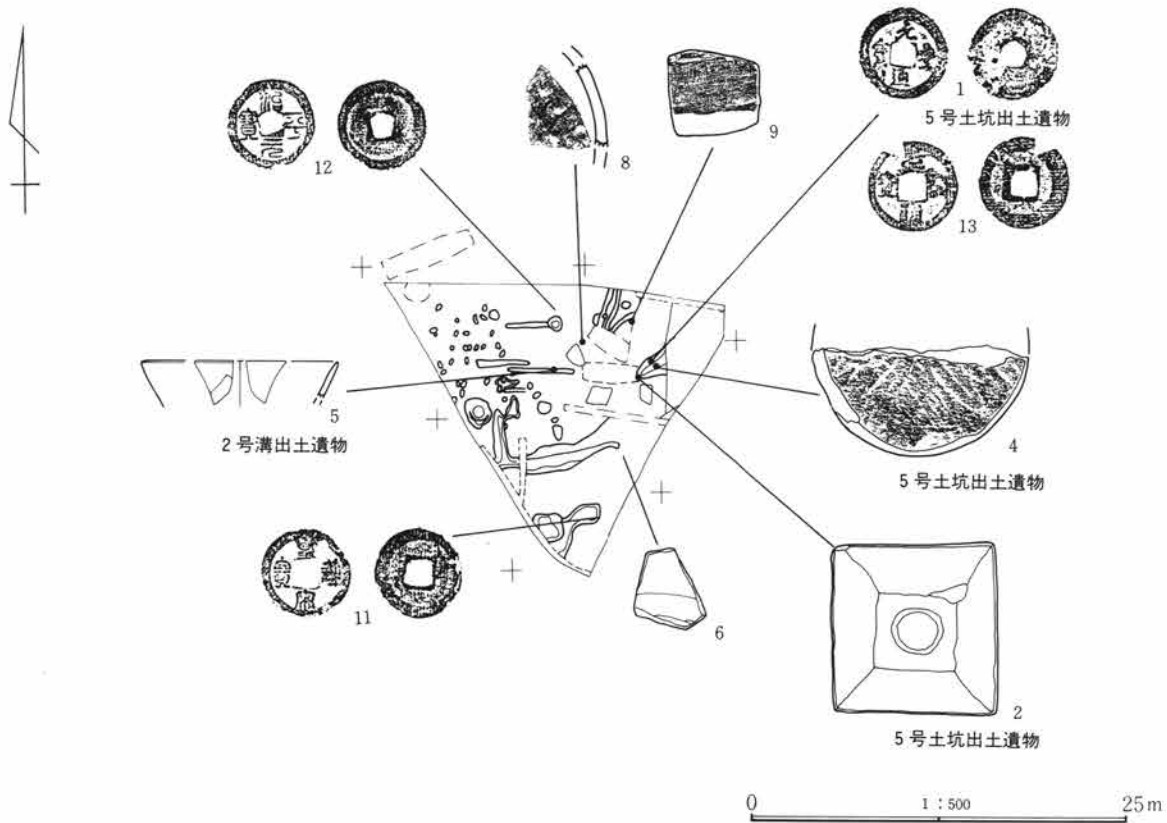


図9 I区1面の主な遺物分布

形状 (傾斜 南西端111.44m 北東端111.40m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。
埋没土 As-Bを含む暗褐色土が堆積する。
出土遺物 なし。
調査所見 溝としての機能的な詳細は不明である。

8号溝 図7

位置 2R-7グリッド
重複 なし。
走向 北北東-南南西方向
規模 調査長2.84m 幅0.19m~0.27m
 深さ0.05m~0.06m

形状 (傾斜 南西端111.39m 北東端111.38m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。
埋没土 As-Bを含む暗褐色土が堆積する。
出土遺物 なし。
調査所見 7号溝と同様に、溝としての機能的な詳細は不明である。

9号溝 図7

位置 2R-7グリッド
重複 なし。
走向 東-南西方向
規模 調査長2.00m 幅0.21m~0.29m
 深さ0.05m~0.07m

形状 (傾斜 東端111.38m 南西端111.38m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。
埋没土 As-Bを含む暗褐色土が堆積する。
出土遺物 なし。
調査所見 溝としての機能的な詳細は不明である。

1号井戸 図7 写図7-2・3

位置 2T-8・9グリッド
重複 なし。
規模 2.02m×1.67m 深さ(2.24m)
形状 平面形 不整形な方形形状。
断面形 円筒形状。西壁は直線的に立ち上がり、

第3章 検出された遺構と遺物

北壁は中位より広がる。上部はテラス状。底面は平坦。

埋没土 上層3層にAs-Bが認められる。一時期一気に埋没後、自然堆積したと思われる。

出土遺物 軟質陶器鉢の口縁部小片、須恵器椀片・蓋片・坏片、土師器甕片・椀片、河原石、羽釜片

調査所見 確認面直下に井戸枠の施設があったと推測されるテラス部が残存する。時期は中世以降と思われる。

1号土坑 図7・24

位置 2S-9グリッド

重複 なし。

規模 0.87m×0.65m 深さ0.13m

形状 平面形 不整形な方形状。

断面形 南壁は緩やかに掘り込まれ、北壁よりも浅い。

埋没土 暗灰色粘性土のブロックを含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物 軟質陶器鉢の口縁部小片、土師器甕片・坏片、灰釉陶器壺片

調査所見 埋没土、形状、出土遺物からみて掘削時期は中世以降と思われる。また、機能的な詳細は不明であるが、2・4号土坑の位置とほぼ直線上で結ばれる。

2号土坑 図7・24

位置 2S-8グリッド

重複 なし。

規模 0.83m×0.75m 深さ0.30m

形状 平面形 不整形な方形状。

断面形 東壁は直線的に掘り込まれるが、南壁は緩やかに掘り下がる。底面は平坦。

埋没土 As-B粒、FP粗粒子を含む自然堆積。

出土遺物 須恵器甕片、土師器甕片

調査所見 掘削時期は中世以降と思われる。機能的な詳細は不明であるが、1・4号土坑の位置とほぼ

直線上で結ばれる。

3号土坑 図7・24

位置 2S-7グリッド

重複 6号溝に後出する。

規模 0.97m×0.87m 深さ0.23m

形状 平面形 楕円形。

断面形 壁面はほぼ直線的に近い掘り込みを呈する。底面は平坦。

埋没土 As-B粒を含む自然堆積。

出土遺物 土師器坏片・甕片

調査所見 掘削時期は中世以降と思われるが、機能的な詳細は不明である。

4号土坑 図7・24

位置 2T-7グリッド

重複 なし。

規模 0.72m×0.60m 深さ0.02m~0.06m

形状 平面形 楕円形。

断面形 土坑中央部から北西側にかけて、深い掘り込みとなる。

埋没土 As-B粒を含む暗褐色土。

出土遺物 軟質陶器の胴部小片

調査所見 掘削時期は中世以降と思われるが、機能的な詳細は不明である。1・2号土坑とほぼ直線上で結ばれる。

5号土坑 図7・9・24・29 表 P266・270 写図7-4・5、43

位置 2Q・2R-8グリッド

重複 旧河道に先行する。

規模 1.85m×1.10m 深さ0.52m

形状 平面形 長軸、北東方向に対し膨らみをもつ。

断面形 長軸方向は北東側に緩やかに傾斜し、一度立ち上がって底面へ続く。短軸方向は南壁側にテラス部を有する。

埋没土 南西方向からの自然埋没と思われる。

出土遺物 古銭、墓石、石臼、五輪塔

調査所見 北東壁の一部は旧河道により既に削平さ

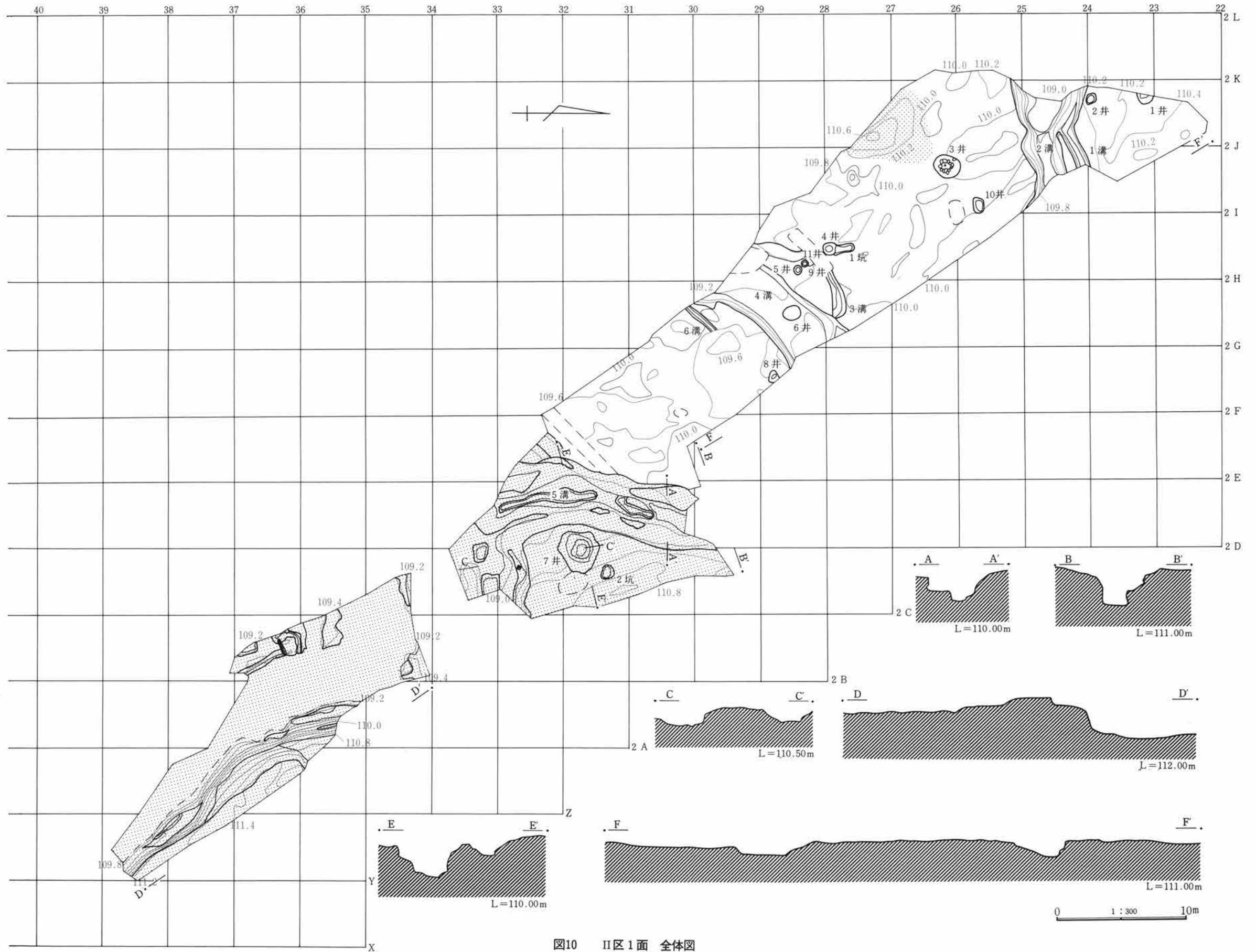


图10 II区1面 全体图

れていたため、全形は不明である。掘削時期は出土遺物からみて中世以降と思われるが、機能的な詳細は不明な部分が多い。

3. II区の溝・井戸・土坑

1号溝 図10・11・20 写図9-1

位置 2 I・2 J-24グリッド

重複 2号溝に後出する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長2.80m 幅0.84m~0.98m

深さ0.12m~0.24m

形状 (傾斜 東端109.86m 南西端109.83m)

底面はほぼ平坦であり、断面形はほぼ逆台形を呈する。南東側の法面は、北西側の法面に比べ緩傾斜を示す。

埋没土 灰色砂層の自然堆積が認められる。

出土遺物 須恵器甕片、土師器甕片

調査所見 形状、埋没土からみて、溝としての機能を有していたと思われるが、溝の延長部分が未確認であるため、詳細は不明である。

2号溝 図10・11・20・30 表 P243 写図9-1、43、44

位置 2 I-24・2 J-24・25グリッド

重複 1号溝に先行する。

走向 ほぼ東西方向

規模 調査長5.64m 幅3.42m~5.28m

深さ0.95m~1.61m

形状 (傾斜 東端109.01m 西端108.55m)

底面最深部は丸みを帯び、法面に流水作用の影響と思われる凹凸が認められる。

埋没土 流水により堆積したと思われる砂質土を主体とする。

出土遺物 須恵器坏・蓋片・甕片、土師器坏片・甕片、丸瓦、土釜片、砥石片、陶磁器片

調査所見 断面の形状からみて、河道としての機能を有するが、堀跡の可能性も考えられる。蒼海城及び八日市場城との掘割との関係は薄く、それ以前の

館跡の掘割との関係が想起される。本溝と5号溝が延長線上で直交するものと思われる。

3号溝 図10・11・13・30・31 表 P243・266 写図9-3、44、45

位置 2 G-27・2 H-27・28グリッド

重複 4号溝に先行する。

走向 ほぼ東西方向

規模 調査長3.56m 幅0.56m~0.94m

深さ0.10m

形状 (傾斜 東端109.90m 西端109.90m)

底面は丸みを帯び、底面幅は不規則である。

埋没土 淡茶褐色砂層により埋没する。

出土遺物 陶器乗燭、水滴、染付皿、播鉢、砥石、石臼

調査所見 形状、埋没土からみて、溝と認定することはできるが、機能的な詳細は不明である。また、溝からの遺物に石臼が出土しているが、本溝は小規模であり、強い流れがあったとは到底考えられず、4号溝の様な大規模な溝の副溝であり、氾濫時の残存流路面であった可能性が高い。

4号溝 図10・11・20・21 写図9-2・4

位置 2 F-28・2 G-27~29・2 H-28・29グリッド

重複 6号井戸に先行する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長8.52m 幅3.25m~4.90m

深さ0.40m~0.60m

形状 (傾斜 北東端109.90m 南西端109.20m)

調査区北東壁側の底面はほぼ平坦であり、法面の立ち上がりはやや急勾配を呈するのに対して、南西壁側は凹凸が認められ、法面の立ち上がりは緩やかである。

埋没土 褐色土が自然堆積する。

出土遺物 須恵器甕片・坏片・椀片、土師器甕片・坏片・椀片、陶磁器片、瓦片

調査所見 形状、埋没土からみて、河道(堀跡)としての機能を有する。蒼海城及び八日市場城の掘割

第3章 検出された遺構と遺物



図11 II区1面北半部の主要遺構

との関係は不明であるが、それ以前の館跡の掘割と関係が深いものと推測される。

5号溝 図10・12・13・21・32・33 表 P243・266・267 写
図8-2、44~47

位置 2D-30~33・2E-31・32グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北方向から南流し、L字状に東流する。

規模 調査長16.15m 幅3.10m~5.54m

深さ1.05m~2.27m

形状 (傾斜 北端108.04m 南端107.80m)

底面最深部はほぼ平坦であり、流水の影響による凹凸が認められる。法面の立ち上がりはほぼ垂直であるが、上段で緩やかな傾斜を呈する。

埋没土 溝の約半分に暗灰色砂層が堆積し、底面に多量の遺物を含む砂礫層が認められる。また、埋没状況からみて、一時期一気に埋没し、以後自然堆積を繰り返していったと思われる。

出土遺物 土師質土器小皿、板碑片、五輪塔、石臼、須恵器甕片・坏片・高坏片・蓋片、羽釜片、灰釉陶器片、台石片

調査所見 断面形状、出土遺物からみて、中世以降の人為的な掘割との関係が想起される。2号溝と延長線上で直交すると思われる。おそらく、蒼海城及び八日市場城以前の館跡の掘割であったものと推測される。

6号溝 図10・11・21

位置 2G-29・30グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向

規模 調査長3.08m 幅0.38m~0.48m

深さ0.19m~0.60m

形状 (傾斜 北東端109.71m 南西端109.50m)

底面は丸みを帯び、法面はほぼ垂直に立ち上がる。底面幅は一定である。

埋没土 粘性のある暗褐色土が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 断面形状はしっかりとした掘方が認めら

れるものの、確認された調査長が短いために、機能的な詳細は不明である。おそらく、3号溝と同様に、4号溝の副溝であり、残存流路面と思われるが、4号溝の形状と明らかに形状を異にする。

1号井戸 図10・25

位置 2J-23グリッド

重複 なし。

規模 1.40m×0.60m 深さ0.45m

形状 平面形 (隅丸方形)

断面形 西壁に緩いテラス部を有し、東壁は直線的に掘り込まれる。

埋没土 底面は暗灰褐色土により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 底面はFA下の黒色粘質土まで達している。埋没土の状況からみて、掘削時期は中世以降と思われる。

2号井戸 図10・11・25

位置 2J-23グリッド

重複 なし。

規模 0.86m×0.70m 深さ0.67m

形状 平面形 楕円形

断面形 円筒形

埋没土 As-B上面の黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 須恵器碗片、土師器甕片

調査所見 確認は底面部分のみであったが、埋没状態からみて、掘削時期は中世以降と思われる。

3号井戸 図10・11 写図10-2、47

位置 2I-26・27グリッド

重複 なし。

規模 1.90m×1.70m 深さ(0.90m)

形状 平面形 不整形な楕円形

断面形 緩やかなU字状を呈する。底面はほぼ平坦。

埋没土 小円礫、炭化木片を含む表土が堆積。

出土遺物 土師器坏片、土師質土器小皿、灰釉碗片

第3章 検出された遺構と遺物

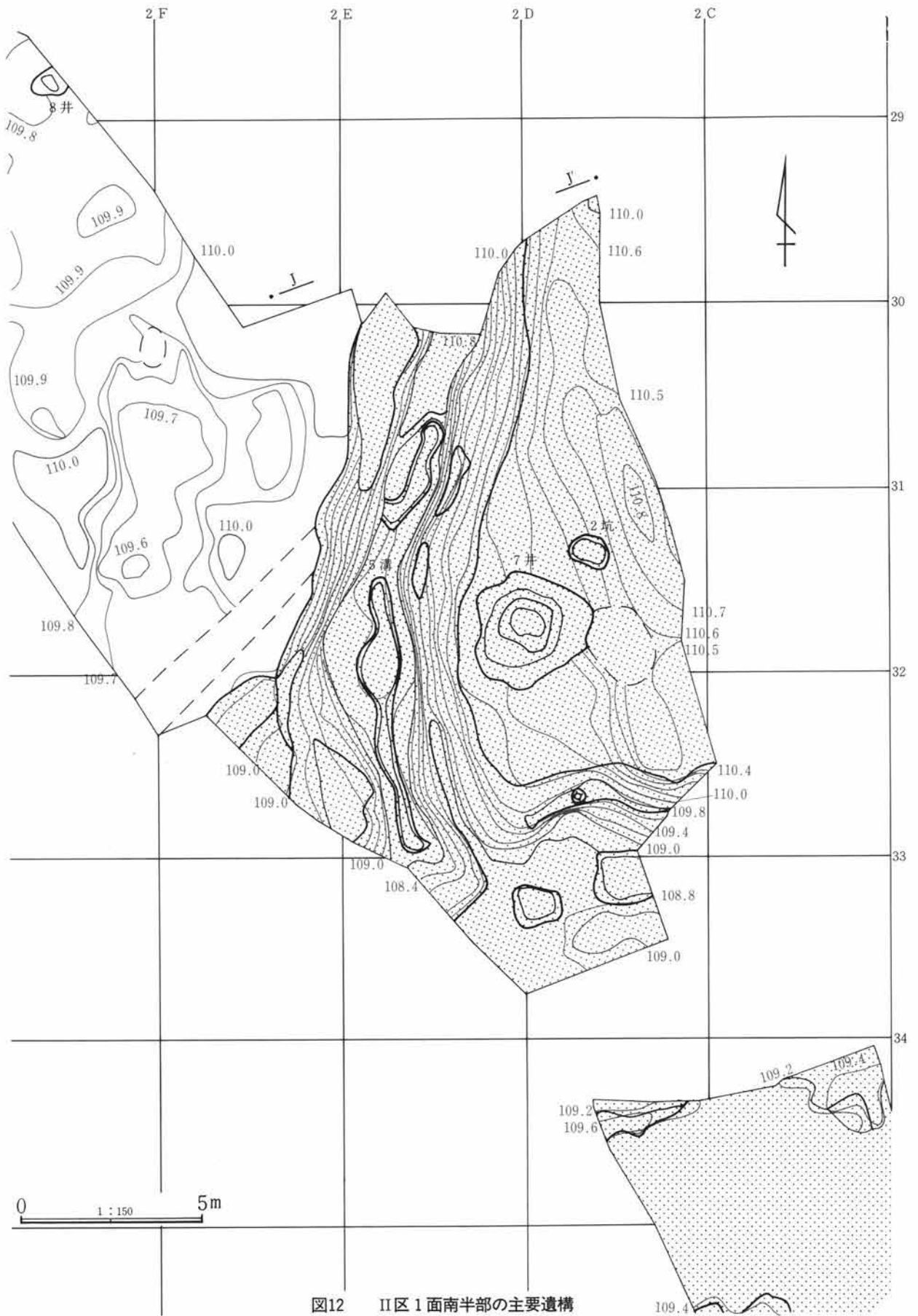


図12 II区1面南半部の主要遺構

調査所見 石積みの井戸であるが、掘削時期は埋没土からみて極めて新しいと思われる。

4号井戸 図10・11・13・25・34 表 P243 写図10-3、47

位置 2H-27・28グリッド

重複 1号井戸に後出する。

規模 1.05m×0.95m 深さ (0.49m)

形状 平面形 不整形な楕円形。

断面形 緩やかなU字状を呈する。底面は平坦。

埋没土 大・小礫、木片を含む暗褐色粘質土が堆積。

出土遺物 平瓦

調査所見 底部のみの確認であったが、掘削時期は中世以降と思われる。

5号井戸 図10・11・25

位置 2H-28グリッド

重複 なし。

規模 0.57m×0.55m 深さ (0.13m)

形状 平面形 ほぼ円形。

断面形 緩やかなU字状を呈する。底面は平坦。

埋没土 淡褐色砂礫層により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 井戸の底面のみの検出であるため、詳細は不明である。

6号井戸 図10・11・25

位置 2G-28グリッド

重複 4号溝に後出する。

規模 1.40m×1.10m 深さ (0.68m)

形状 平面形 不整形な楕円形。

断面形 南西壁はほぼ直線的に掘り下がり、北東壁は緩傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 灰色砂質土が堆積後、暗褐色粘質土により一気に埋没。

出土遺物 なし。

調査所見 4号溝に削平されたため底部のみの確認

であったが、掘削時期は中世以降と思われる。

7号井戸 図10・12・25 写図10-4

位置 2C・2D-31・32グリッド

重複 なし。

規模 3.20m×2.80m 深さ (1.13m)

形状 平面形 北東側は直線的、南側は歪んだ稜線を示す。

断面形 北西壁側にテラスを有し、南東壁は中位から直線的に底面へ続く。底面は平坦。

埋没土 As-B上面の黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 須恵器碗片、甕片、土釜片、瓦片、灰釉碗片

調査所見 北西壁の一部に井戸枠の施設があったと思われるテラス部が残存する。台地部を掘削し、時期は中世以降と思われる。

8号井戸 図10・12・26

位置 2F-28グリッド

重複 なし。

規模 0.90m×0.80m 深さ (0.24m)

形状 平面形 長軸方向に方形状。短軸南東方向に片口状に張り出す。

断面形 長軸方向、南西壁は直線的に掘り下がり、北東壁は緩やかに立ち上がる。短軸方向壁面は、中央部に向かって緩やかに掘り下がる。

埋没土 As-B上面の黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 土師器坏片・甕片、羽釜片、青磁皿片、染付碗片、須恵器蓋片・碗片、土師質土器小皿片

調査所見 底面のみの確認であったが、掘削時期は近代以降と思われる。

9号井戸 図10・11・26

位置 2H-28グリッド

重複 11号井戸に後出する。

規模 0.48m×0.47m 深さ (0.12m)

第3章 検出された遺構と遺物

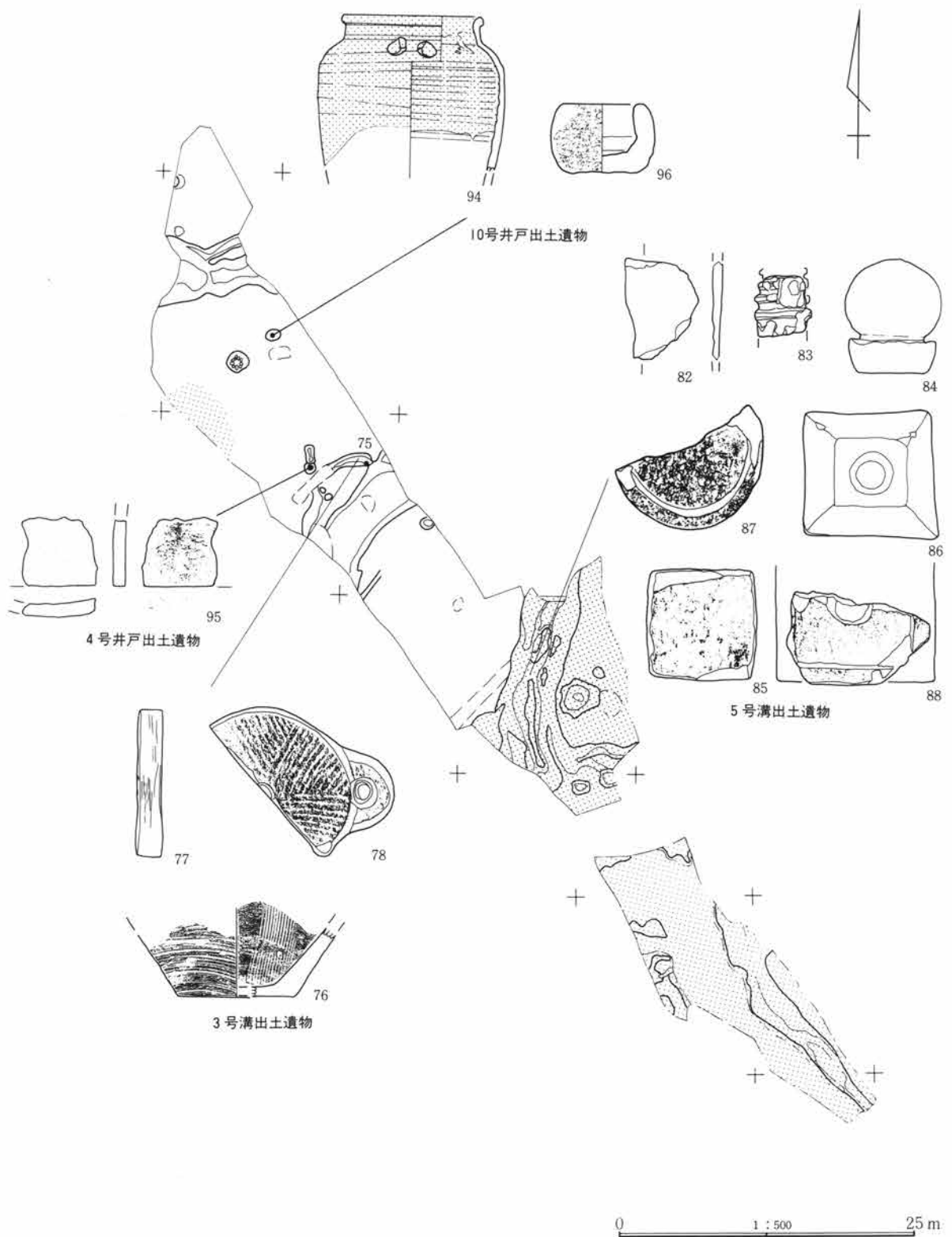


図13 II区1面の主な遺物分布

形状 平面形 円形（推定）

断面形 円筒形状

埋没土 As—B上面の黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 底面のみ確認であったが、掘削時期は中世以降と思われる。

10号井戸 図10・11・13・26・34 表 P243・267 写図47

位置 2 I—25グリッド

重複 なし。

規模 1.24m×0.70m 深さ(1.20m)

形状 平面形 楕円形

断面形 円筒形状

埋没土 礫、木材を含む褐色粘質土が一気に堆積。

出土遺物 陶器耳付甕、石鉢、土師器甕片

調査所見 埋没土からみて人為的に埋め戻されたと
思われる。掘削時期は近代以降と思われる。

11号井戸 図10・11・26

位置 2 H—28グリッド

重複 9号井戸に先行する。

規模 0.70m×0.60m 深さ(0.70m)

形状 平面形 円形

断面形 南西壁は緩やかに傾斜し、北東壁は
直線的に掘り下がる。底面は平坦。

埋没土 黒色粘質土が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 As—C下の黒色粘質土以下を掘り込み淡
褐色シルト質土まで達する。9号井戸との関係から
みて作り替えの可能性も考えられる。

1号土坑 図10・11・26 写図10—1

位置 2 H—27グリッド

重複 4号井戸に先行する。

規模 1.50m×0.60m 深さ0.48m

形状 平面形 長方形

断面形 壁は緩やかな傾斜をもって底面へ続
く。底面は平坦。

埋没土 FP粒子を含んだ暗褐色土が自然堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 一部4号井戸によって攪乱を受けている
が、掘削時期は比較的新しいと思われる。

2号土坑 図10・12・26

位置 2 C—31グリッド

重複 なし。

規模 1.15m×0.75m 深さ0.15m

形状 平面形 不整形な楕円形

断面形 東壁は西壁よりも傾斜をもち掘り下
がる。底面は平坦。

埋没土 As—B上面の黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 台地部を掘り抜き、掘削時期は比較的
新しいと思われる。

4. III区の溝・井戸・土坑

1号溝 図14・15・22・37 表 P270・271・272 写図49・50・
52

位置 V—2 B—39—47グリッド

重複 なし。

規模 調査長46.15m 幅1.20m～4.35m
深さ0.40m～0.80m

形状 (傾斜 北西端109.30m 南東端109.10m)

底面はほぼ平坦であるが、流水の影響による凹凸が
認められる。法面の立ち上がりは北東方向に緩傾斜
を呈する。

埋没土 灰黒色砂層により一気に埋没する。

出土遺物 土師器碗片・甕片・坏片、須恵器甕片、
瓦片、軟質陶器片、陶器片、土釜片、金属器、礫

調査所見 牛池川の河道からIV区北半に存在した水
車小屋に引き込んだ水路であり、水車小屋は終戦後
しばらく廃屋の状態で存続していた。出土遺物に近・
現代のものがあることから、開削時期は近・現代以
降と思われる。

第3章 検出された遺構と遺物

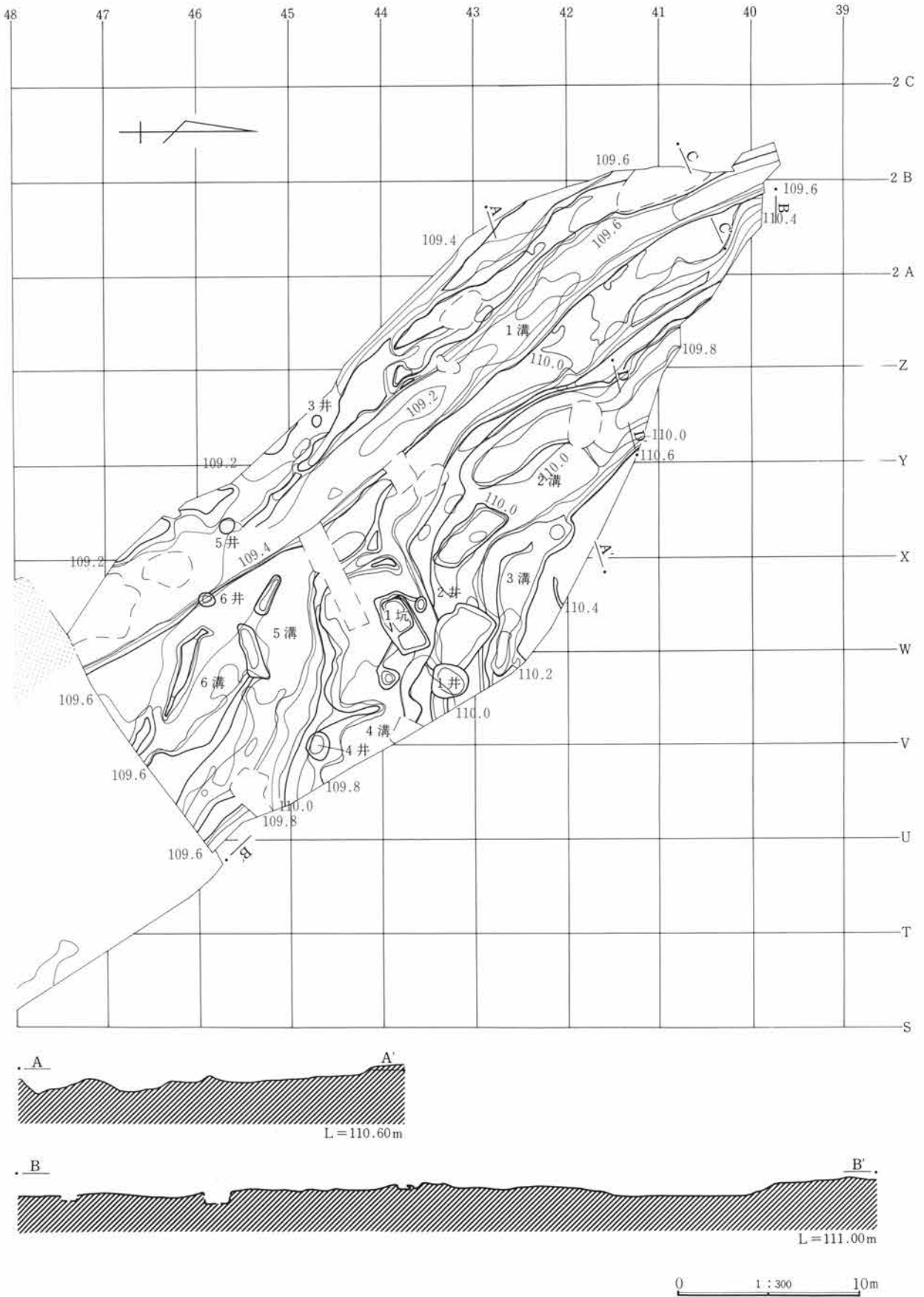


図14 Ⅲ区1面 全体図

2号溝 図14・22・38 表 P236・267 写図50

位置 V～2A-39～43グリッド

重複 なし。

規模 調査長23.30m 幅3.90m～6.30m

深さ0.10m～0.94m

形状 (傾斜 北端109.80m 東端109.80m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面の立ち上がりは緩やかである。

埋没土 褐色砂礫層により自然埋没する。

出土遺物 須恵器甕、石剝片、土師器甕片・坏片・高坏片・蓋片・椀片、軟質陶器片、灰釉陶器片

調査所見 埋没土が砂礫層であることからみて、流水作用により形成された旧河道内の流路である。2面の河道面と重複しているため、出土遺物の多くは、古墳時代～平安時代のものを中心とするが、中世の軟質陶器片が出土していることから、時期は中世以降と思われる。

3号溝 図14

位置 T・U-45グリッド

重複 なし。

規模 調査長3.05m 幅(0.50m)

深さ0.05m

形状 (傾斜 北西端109.70m 南東端109.60m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 褐色砂礫層により自然埋没する。

出土遺物 土師器甕片・坏片・椀片・高坏片、須恵器甕片・高坏片、陶器片、礫

調査所見 流水作用により形成された旧河道内の流路である。2面の河道面と重複しているため、出土遺物の多くは、古墳時代～平安時代のものを中心とするが、近代陶器片が出土していることから、時期は近代以降と思われる。

4号溝 図14・15・38 表 P244・245 写図50・77

位置 U・V・W・X-43・44、Y-41～43、Z-40～42グリッド

重複 なし。

規模 調査長34.85m 幅0.90m～3.60m

深さ0.20m～0.79m

形状 (傾斜 北西端109.71m 東端109.66m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 褐色砂礫層により自然埋没する。

出土遺物 土師器椀・坏片・甕片、土師質土器小皿、須恵器椀・蓋・甕片、丸瓦・平瓦、軟質陶器、陶器、陶磁器片、羽釜片、灰釉陶器片、古銭

調査所見 流水作用により形成された旧河道内の流路である。2面の河道面と重複しているため、出土遺物の多くは、古墳時代～平安時代のものを中心とするが、近代の陶磁器片が出土していることから、時期は近代以降と思われる。

5号溝 図14・15・39 表 P245 写図51

位置 U-45・46、V・W-44・45、X-44グリッド

重複 なし。

規模 調査長18.20m 幅1.80m～5.00m

深さ0.28m～0.60m

形状 (傾斜 北西端109.90m 南東端109.40m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 褐色砂礫層により自然埋没する。

出土遺物 土師器甕片・坏片、須恵器甕片・椀・壺片、平瓦、台石、土師質土器小皿片、軟質陶器片、陶磁器片、羽釜片、土釜片、灰釉陶器片、灰釉皿片

調査所見 流水作用により形成された旧河道内の流路である。2面の河道面と重複しているため、出土遺物は平安時代の物を中心とするが、近・現代の陶磁器片が出土していることから、時期は近代以降と思われる。

6号溝 図14

位置 U-46、W-45・46グリッド

重複 なし。

規模 調査長12.20m 幅1.00m～3.20m

深さ0.15m～0.20m

形状 (傾斜 北西端109.60m 南東端109.50m)

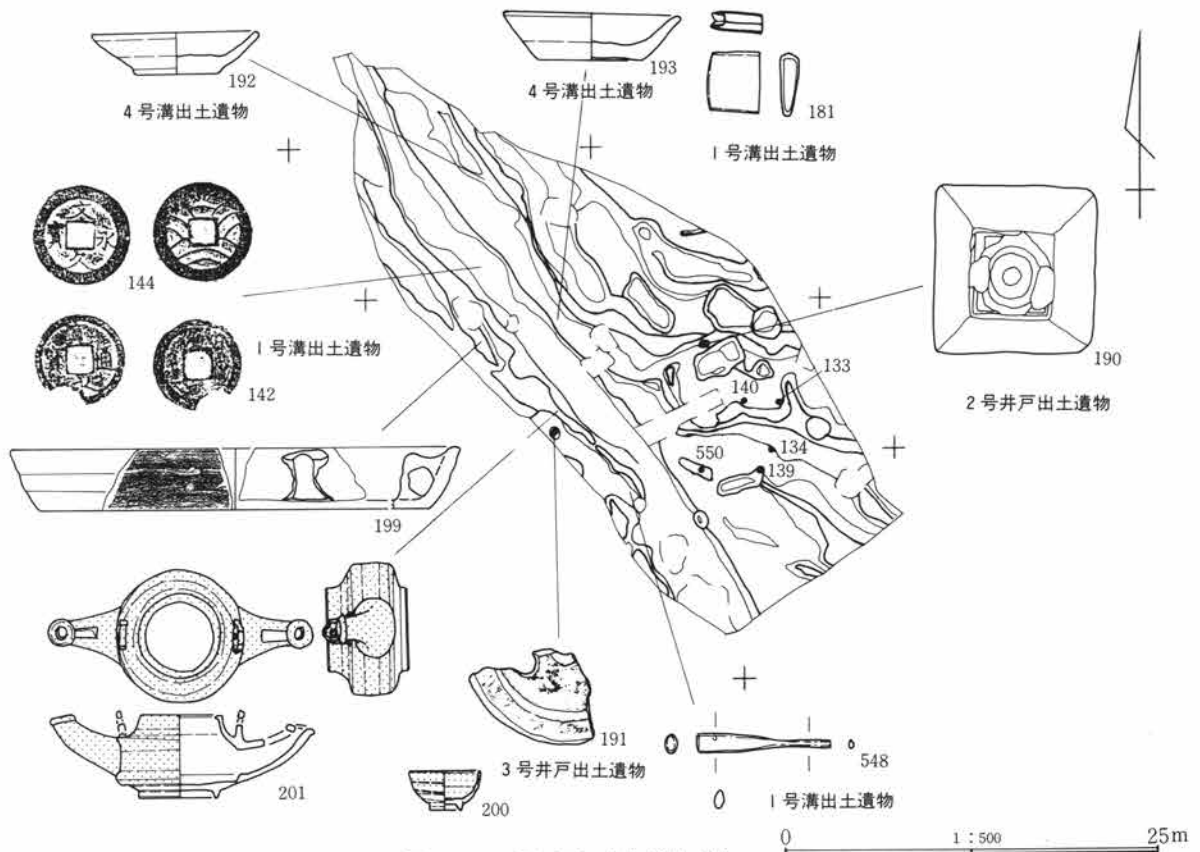


図15 III区1面の主な遺物分布

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 褐色砂礫層により自然埋没する。

出土遺物 土師器甕片・椀片、土師質土器小皿片、須恵器甕片・蓋片、瓦片、羽釜片、土釜片

調査所見 流水作用により形成された旧河道内の流路である。2面の河道面と重複しているため、出土遺物は平安時代の物が中心であるが、近代の瓦が出土していることから、時期は近代以降と思われる。

1号井戸 図14・26

位置 V-43グリッド

重複 なし。

規模 2.00m×1.85m 深さ (2.40m)

形状 平面形 歪んだ楕円形

断面形 西壁は確認面から中位までえぐり込まれ、直線的に傾斜し底面へ続く。東壁はテラス部より直線的に掘り下がる。

埋没土 表土、黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 土師器甕片・椀片・鉢片・縄文土器片

調査所見 掘削時期は不明である。

2号井戸 図14・15・39 表 P267 写図51

位置 W-43グリッド

重複 1号土坑に後出する。

規模 0.82m×0.65m 深さ (1.16m)

形状 平面形 不整形な楕円形

断面形 円筒形状

埋没土 表土、黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 五輪塔

調査所見 掘削時期は出土遺物からみて中世以降と思われる。

3号井戸 図14・15・27・39 表 P267 写図51

位置 Y-44グリッド

重複 なし。

規模 0.60m×0.60m 深さ(0.68m)

形状 平面形 円形

断面形 円筒形状

埋没土 表土、黒褐色砂層が堆積。

出土遺物 土師器甕片・坏片・石臼

調査所見 掘削時期は出土遺物からみて中世以降と思われる。

4号井戸 図14・27

位置 U・V-44グリッド

重複 なし。

規模 1.40m×1.30m 深さ(1.31m)

形状 平面形 歪んだ楕円形、東側が片口状に張り出す。

断面形 下部は袋状に膨らみを呈する。底部は不明。

埋没土 上層にAs-Bを含む灰褐色土が堆積。

出土遺物 土師器甕片・坏片・椀片・瓦片・羽釜片

調査所見 3層以下は人為的な埋め戻しの可能性があり、上層2層は自然堆積したことが土層断面から看取できる。掘削時期は近代の平瓦が出土していることから、近代以降と思われる。

5号井戸 図14・27

位置 X-45グリッド

重複 1号溝に先行する。

規模 0.80m×0.45m 深さ(0.30m)

形状 平面形 ほぼ円形、北東側確認面は張り出す。

断面形 フラスコ状に膨らむ。

埋没土 上層はAs-B上面の黒褐色砂層に相当する土質を呈し、2層以下は自然堆積と思われる。

出土遺物 土師器甕片・坏片、土師質土器小皿片、須恵器甕片・椀片、瓦片

調査所見 1号溝によって削平されるが、掘削時期は埋没状況からみて、中世以降と思われる。

6号井戸 図14・27

位置 W-45グリッド

重複 1号溝、6号溝に先行する。

規模 0.55m×0.40m 深さ(0.15m)

形状 平面形 ほぼ円形

断面形 円筒形状、底面は一段低く掘り下がる。

埋没土 上層はAs-B上面の黒褐色砂層に相当する土質を呈し、2層以下は自然堆積と思われる。

出土遺物 なし。

調査所見 1号溝、6号溝により削平される。掘削時期は埋没状況からみて中世以降と思われる。

1号土坑 図14・28

位置 W-43・44グリッド

重複 2号土坑に先行する。

規模 2.45m×1.10m 深さ0.88m

形状 平面形 不整形な方形状

断面形 長軸方向の両壁、短軸方向の北西側にテラスを有する。

埋没土 淡茶褐色粘質土により埋没する。

出土遺物 木杭

調査所見 土坑の中央部に木製の杭が打ち込まれてあったが、機能的なことは不明である。

5. IV区の井戸

1号井戸 図28・56

位置 R-51グリッド

重複 なし。

規模 0.90m×0.80m 深さ(1.31m)

形状 平面形 楕円形

断面形 北東壁は上位でえぐれ、直線的に底面へ続く。南西壁は上位でえぐれ丸みをもって底面へ続く。底面は平坦。

埋没土 暗灰色シルトと砂礫層により埋没する。

出土遺物 土師器坏片、須恵器壺片・甕片・椀片、軟質陶器片、陶磁器片

第3章 検出された遺構と遺物

調査所見 時期は、近・現代の陶磁器片が出土していることから、近・現代以降と思われる。

2号井戸 図28・56

位置 N-56グリッド

重複 なし。

規模 1.00m×0.85m 深さ(0.47m)

形状 平面形 円形

断面形 円筒形状

埋没土 表土を主体とした混土が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 埋没土に現代の遺物を含んでいることから、掘削時期は極めて新しいと思われる。

3号井戸 図28・56

位置 N-57・O-57グリッド

重複 なし。

規模 0.72m×0.70m 深さ(0.38m)

形状 平面形 ほぼ円形

断面形 円筒形状、底面は北東側に傾斜する。

埋没土 表土を主体とした混土。

出土遺物 なし。

調査所見 埋没土に現代の遺物を含んでいることから、掘削時期は極めて新しいと思われる。

6. V区の溝・井戸

1号溝 図16・17 写図12-1・2

位置 J-66・67、K-66、L-65、M-64・65グリッド

重複 2号溝と併走するが、先行、後出の区別は不明である。

走向 北西-南東方向

規模 調査長20.18m～ 幅0.25m～0.45m

深さ0.17m～0.27m

形状 (傾斜 北西端109.97m 南東端109.62m)

底面は丸みを帯び、法面の立ち上がりは急勾配を呈する。

埋没土 As-Bを含む暗灰褐色土が自然堆積する。

出土遺物 土師器甕片、須恵器椀片・甕片、平瓦片、土釜片

調査所見 形状もしっかりとしていて、FPF-1層を掘り込む人為的な溝である。掘削時期は中世以降と思われるが、機能的なことは2号溝と同様に不明である。

2号溝 図16・17 写図12-1・2

位置 K-65・66、L-65、M-65グリッド

重複 1号溝と併走するが、先行、後出の区別は不明である。

走向 北西-南東方向

規模 調査長15.90m 幅0.30m～(0.87m)

深さ0.05m～0.28m

形状 (傾斜 北西端110.05m 南東端110.05m)

底面はほぼ平坦であり、法面の立ち上がりは急勾配を呈する。

埋没土 As-Bを含む暗灰褐色土が自然堆積する。

出土遺物 須恵器甕片・椀片、土師器坏片・甕片、平瓦片

調査所見 1号溝とほぼ同時期に掘削されたと思われるが、1号溝と比較して、深さは浅く、溝の延長部分は既に削平されている。時期をおかずして一気に埋没した様相を呈する。時期は中世以降と思われるが、明らかに人為的に作られた溝であることは確かである。しかしながら、溝の延長部が未確認なため、機能的な詳細は現時点では不明である。また、1号溝と走向、形状、埋没土等が類似し、時期の差異は不明であるが、1・2号溝のどちらかが、作り替えられた可能性がある。

3号溝 図16~19

位置 H-76~78、I-70・71・75~77、J-68~75、

K-67~70、L-67・68グリッド

重複 6号溝に後出する。

走向 南西方向から大きく蛇行し南下する。

規模 調査長(32.60m) 幅(5.00m)

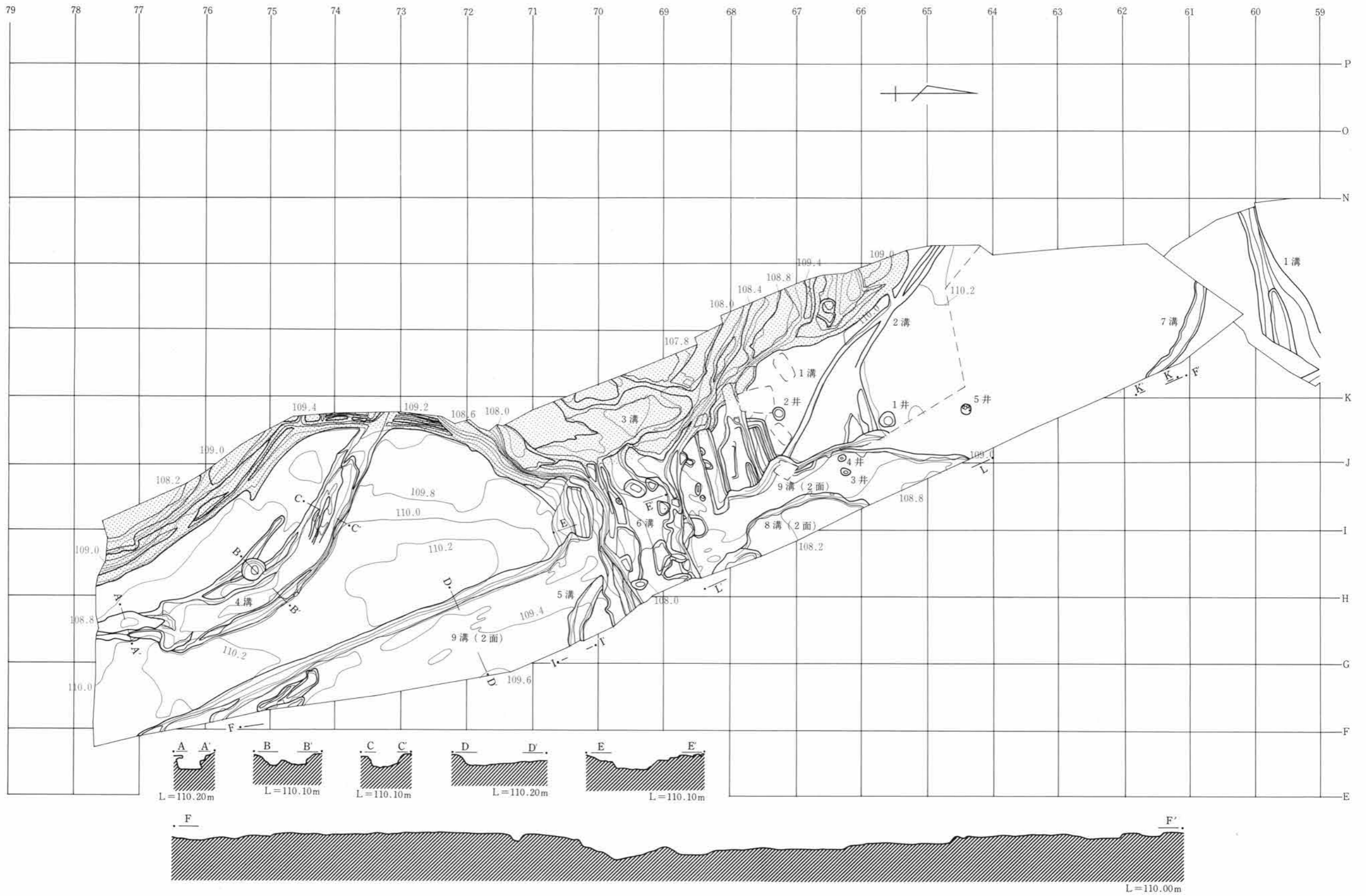


图16 V区 1·2面 全体图

0 1:300 10m

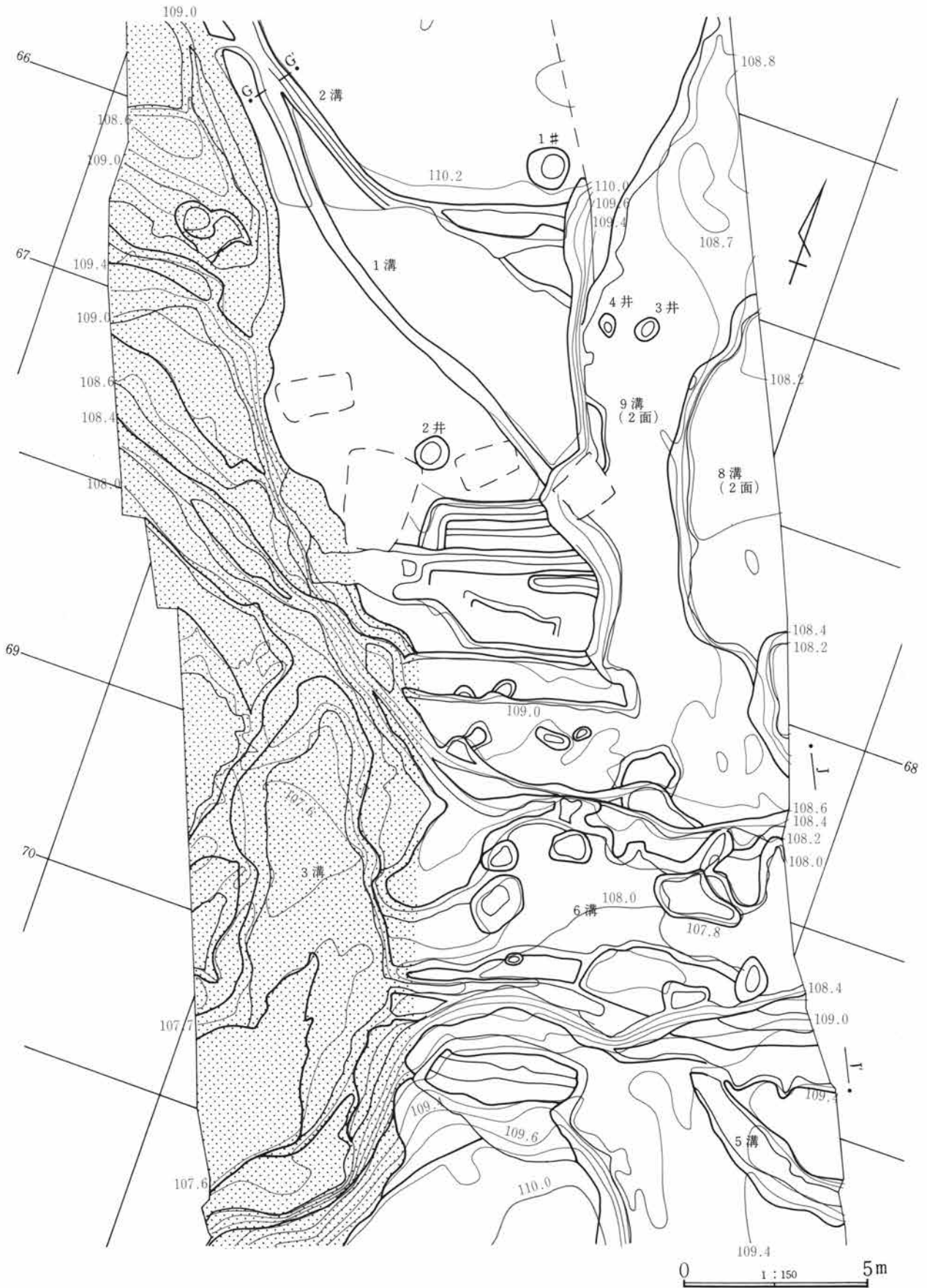


図17 V区1・2面中央部の主要遺構

第3章 検出された遺構と遺物



図18 V区1・2面南半部の主要遺構

深さ1.30m～2.19m

形状 (傾斜 北西端108.06m 南端107.63m)

底面に流水の影響と思われる凹凸が認められる。法面の立ち上がりは急勾配を呈する。

埋没土 灰褐色・黒褐色土の砂層により埋没する。

出土遺物 古銭

調査所見 形状、埋没状況からみて、旧河道の蛇行部であり、台地部分を削り込み、6号溝の西端部を削平している。出土遺物は、6号溝から流入したのもあり、本溝との正確な区別はつかない。

4号溝 図16・18・42～44 表 P245・246 写図52・53・54

位置 G-74～77、H-74・75、I-73・74、J-73
グリッド

重複 なし。

走向 南-南西方向

規模 調査長28.95m 幅1.55m～4.25m

深さ0.40m～1.12m

形状 (傾斜 南端109.90m 北西端109.25m)

底面は僅かに丸みを帯びるが、ほぼ平坦である。流水の影響による凹凸が認められる。

埋没土 黄褐色・灰褐色の砂礫を含む砂層により埋没する。

出土遺物 土師器坏、土師質土器小皿、須恵器椀・皿・蓋・鉢・陶器大甕、緑釉皿、青磁碗片、平瓦・丸瓦・軒丸瓦、有孔円盤、石塔、磨石、古銭

調査所見 溝の傾斜は南端が高く、北西端が低くなっているが、北西端の延長部は現河道により切られているもの、台地部であり、南端部との比高も調査段階とは異なっていたものと思われる。ゆえに流水方向としては南流するのが妥当であると考えられる。溝の機能としては、形状からみて人為的なものではなく、自然的に形成された河道であったと思われるが、延長部分が未確認であるために、現時点での詳細は不明である。出土遺物の中に中世のものが含まれているが、開削時期はもっと遡るものと思われる。

5号溝 図16・17・19・23・44・45 表 P247・267・268
写図53・54・77

位置 G-70、H-69・70グリッド

重複 9号溝に後出する。

走向 南西-東方向

規模 調査長5.30m 幅0.30m～1.35m

深さ0.10m～0.45m

形状 (傾斜 北西端109.25m 東端108.93m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面の立ち上がりはやや急傾斜を呈する。

埋没土 灰褐色土と灰色砂との互層が堆積する。

出土遺物 土師器坏、須恵器椀、灰釉椀、緑釉椀、丸瓦・平瓦、五輪塔、台石、石鉢

調査所見 V区2面、9号溝の埋没土である砂層を掘り込む。埋没土が一部表土との混土であることから、時期は中世以降と思われる。

6号溝 図16・17・23・46～50 表 P247・268・271 写図12
-3、54～58・77・78

位置 G-69、H-68・69、I-68・69、J-68～70
グリッド

重複 8・9号溝に後出し、3号溝に先行する。

走向 ほぼ東西方向

規模 調査長11.83m～ 幅6.50m～6.80m

深さ0.66m～1.15m

形状 (傾斜 東端108.00m 西端107.75m)

底面最深部は僅かに丸みを帯び、法面の立ち上がりは北側で緩傾斜を呈する。法面に凹凸が認められる。

また、検出範囲内の溝幅はほぼ一定を保っている。埋没土 灰褐色・黒褐色土の砂層を中心として埋没する。

出土遺物 土師器坏・椀・甕片・高坏片、須恵器蓋・皿・椀・甕片・高坏片・坏片、土師質土器小皿、灰釉陶器椀・壺片、軟質陶器片、羽釜、土釜、陶器大甕、陶磁器、石臼、板碑片、コモアミ石、砥石、丸瓦・平瓦、軒丸瓦・瓦当、土製円盤、古銭、打製石斧

調査所見 走向がほぼ東西方向を示し、溝幅も一定であることからみて、蒼海城の堀割との関係が想起されるが、周知の堀割との接続部分は認められない。

第3章 検出された遺構と遺物

また、Jライン以西は、3号溝（河道）によって既に削平を受けており、本溝の削平部分で遺物の混入が顕著であった。

1号井戸 図16・17 写図12-4

位置 J-65グリッド

重複 なし。

規模 1.14m×1.13m 深さ(0.85m)

形状 平面形 円形

断面形 東壁は直線的に掘り下がり、南西壁は緩やかに底面へと続く。底面はほぼ平坦。

埋没土 褐灰色土・黒褐色土が堆積する。

出土遺物 須恵器甕片・坏片・椀片、羽釜片

調査所見 底面部のみの残存状態であるが、掘削時期は中世以降と思われる。

2号井戸 図16・17 写図12-5

位置 J-67グリッド

重複 なし。

規模 0.98m×0.98m 深さ(0.95m)

形状 平面形 円形

断面形 緩やかなU字状を呈し、下位にあぐりが認められる。

埋没土 褐灰色土・黒褐色土が堆積する。

出土遺物 軟質陶器鉢片

調査所見 底面部のみの残存状態であるが、時期は中世以降と思われる。

3号井戸 図16~19 表 P249 写図12-6、58

位置 I-66グリッド

重複 9号溝に後出する。

規模 0.64m×0.51m 深さ(1.60m)

形状 平面形 楕円形

断面形 円筒形状

埋没土 褐灰色土・黒褐色土が堆積する。

出土遺物 土師質土器小皿、土師器甕片、須恵器坏片・甕片

調査所見 確認面は2面の9号溝の埋没土面であり、遺構上部が既に削平されているために、掘削時期は不明であるが、時期的に遡る可能性がある。

4号井戸 図16・17・19・51 表 P249 写図12-6、58

位置 J-66グリッド

重複 9号溝に後出する。

規模 0.64m×0.41m 深さ(1.20m)

形状 平面形 楕円形

断面形 円筒形状、底面はほぼ平坦。

埋没土 褐灰色土・黒褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器甕片、須恵器坏片・椀片・甕片、丸瓦片、灰釉椀、羽釜片

調査所見 3号井戸と同様に、確認面は2面の9号溝の埋没土面であり、遺構上部が既に削平されているために、掘削時期は不明であるが、時期的に遡る可能性がある。

5号井戸 図16・17・19 写図12-7・8

位置 K-64グリッド

重複 なし。

規模 0.66m×0.63m 深さ(0.72m)

形状 平面形 歪んだ楕円形

断面形 フラスコ状に膨らむ。

埋没土 灰褐色シルト質土が底面に堆積する。

出土遺物 土師器甕片、木製品

調査所見 確認面はFA上面であり、上部は削平されていた。底部から0.32mの位置に湧水の影響によるあぐりが認められ、地山の砂層が流れ込んでいる。底面に堆積する灰褐色粘質土中より、木製品の曲げ物が1点出土した。掘削時期は中世以降と思われる。

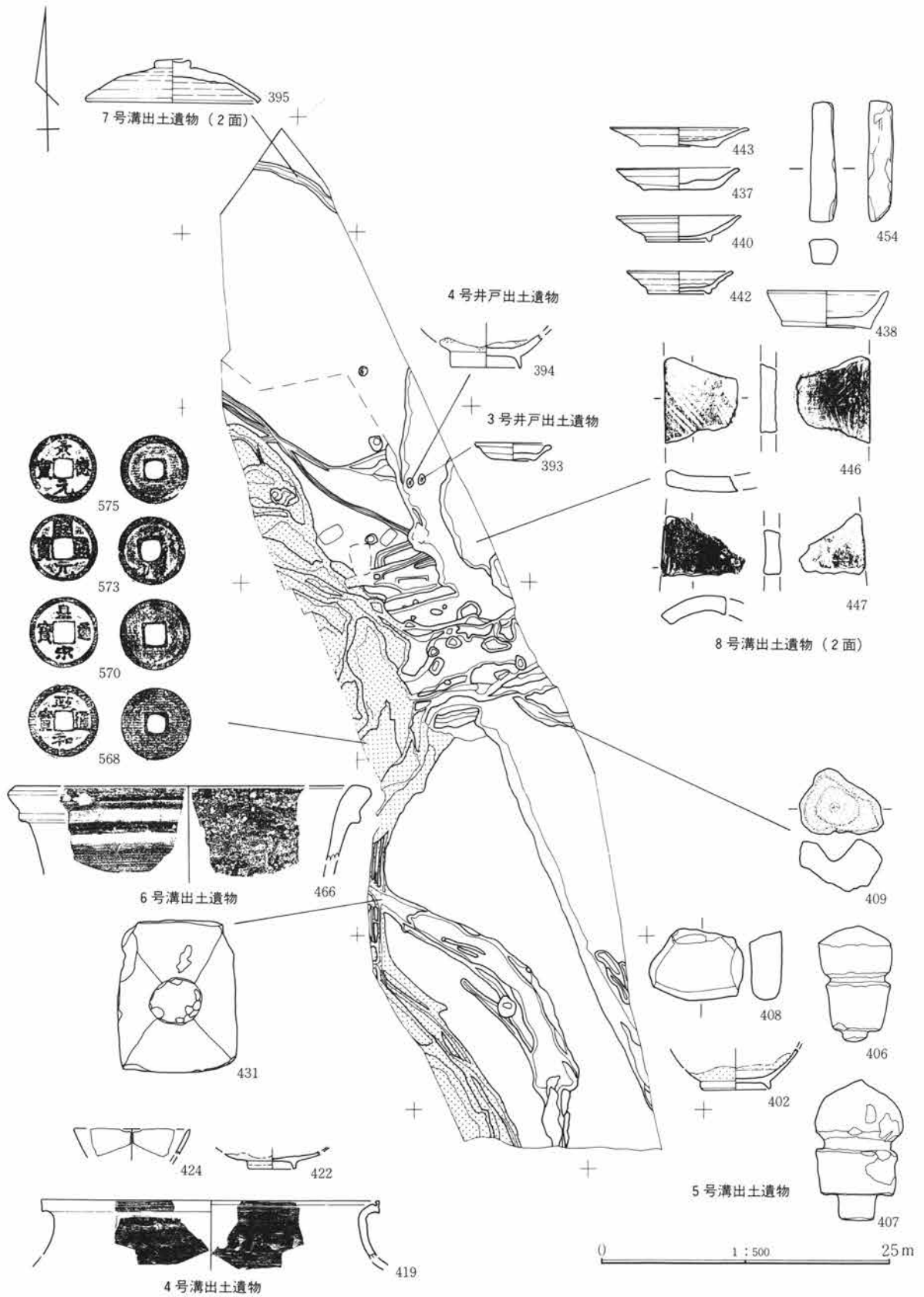
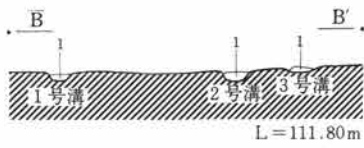


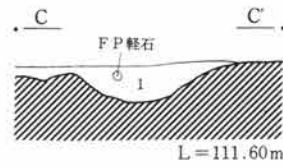
図19 V区1・2面の主な遺物分布

第3章 検出された遺構と遺物



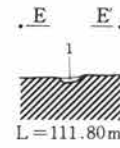
I区1面 1・2・3号溝

1 暗褐色土 小礫を含み、As-B粒を少量含む。



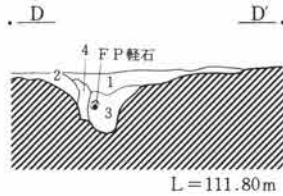
I区1面 4号溝①

1 暗褐色土 As-B、小礫を少量含む、若干粘性あり。



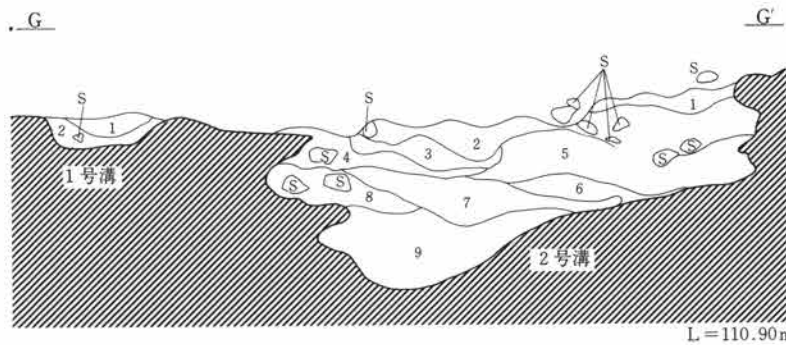
I区1面 6号溝

1 暗褐色土 As-Bを少量含む、しまり弱い。



I区1面 5号溝

1 暗褐色土 As-B、小礫を少量含む、しまり弱い。
 2 暗褐色土 As-Bをやや多めに含む、しまり強い。
 3 暗褐色土 小礫を多く含む、しまり弱い。
 4 暗褐色砂層 しまり悪い。



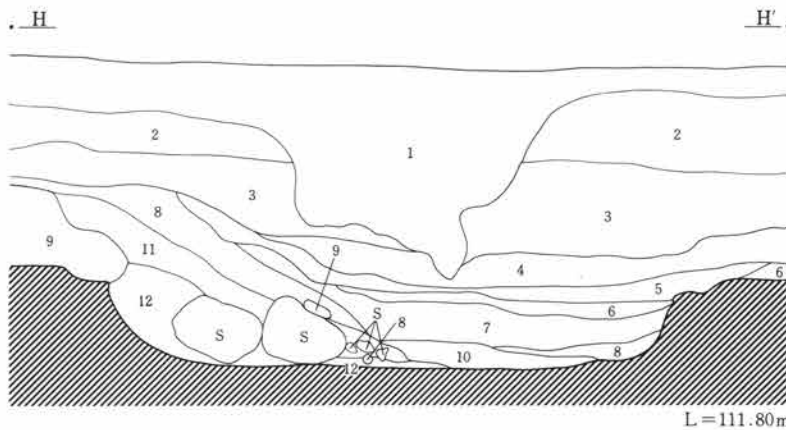
II区1面 1号溝

1 灰色砂層 砂がラミナ状に堆積。
 2 灰色土 灰色粘質土中に砂、黒色土ブロックを含む。

II区1面 2号溝

1 暗褐色砂質土 FAの小ブロックを少量含む。
 2 淡褐色土 砂と小礫の混土层で円礫を多く含む。
 3 明褐色砂質土 FAブロックの二次堆積。
 4 黒褐色土 As-C下黒色土のブロックと砂質土ブロックを含む。

5 灰色砂質土 粒子均一。
 6 暗灰色土 黒色粘質土ブロックと5のブロックを含む。
 7 灰色土 灰色の砂層と粘質土が互層をなして堆積。
 8 褐色土 砂礫、灰色土、黒色土を含む。
 9 暗灰色土 灰色土と砂質土を混入。



II区1面 4号溝

1 盛土及び攪乱土
 2 暗褐色砂質土 均一な砂粒を多量に含む。
 3 明茶褐色粘質土 粒子やや粗い。
 4 淡茶褐色土 粒子均一。やや粘性あり。鉄分沈着。
 5 淡褐色土 砂がラミナ状に堆積。
 6 淡褐色土 粒子均一。粘性強い。
 7 淡褐色土 砂と砂質土が互層をなしてラミナ状に堆積。
 8 暗褐色砂質土 粒子が粗く小礫を含む。
 9 黒色土 黒色土と砂がブロックで混入。
 10 暗褐色土 褐色粘質土中に多量の砂を混入。
 11 黒褐色土 FA、黒色土、砂のブロック、小礫を含む。やや砂質。
 12 黒褐色土 8と同様であるが、ブロックが大きく、やや粘質。

0 1:60 2m

図20 I区1面 1～6号溝、II区1面 1・2・4号溝土層断面

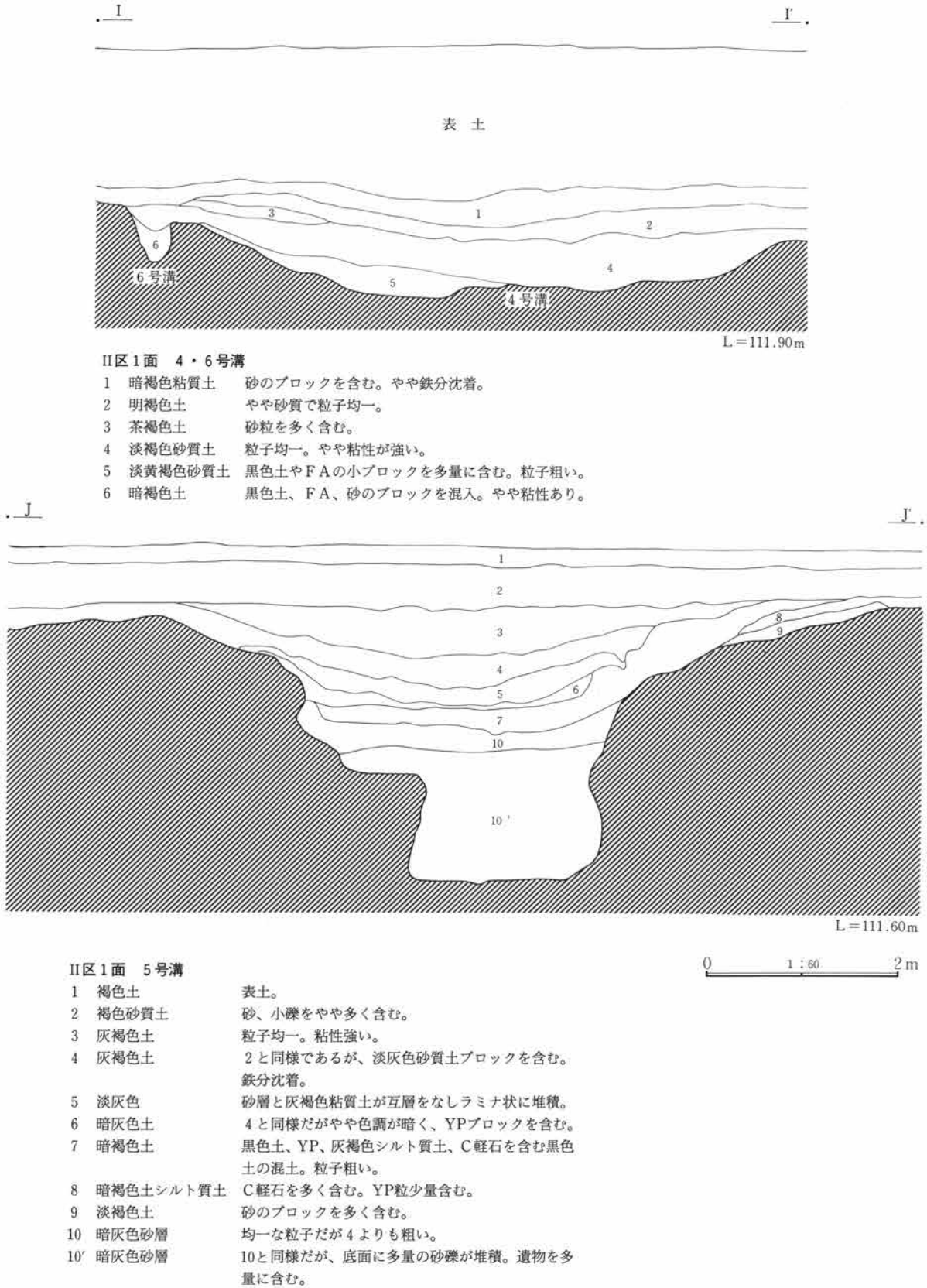
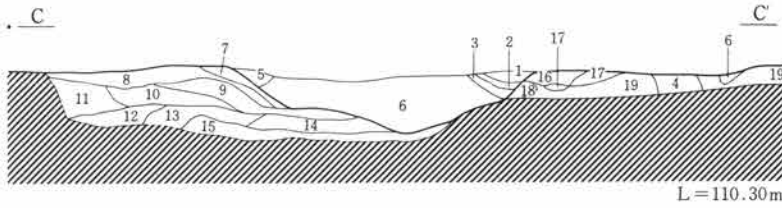


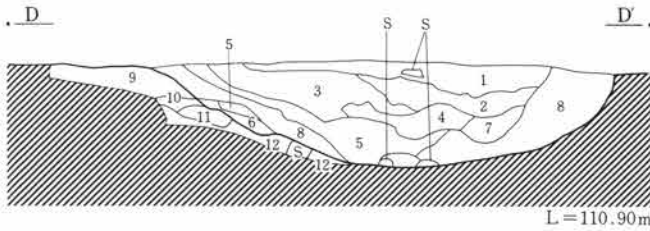
図21 II区1面 4～6号溝土層断面

第3章 検出された遺構と遺物



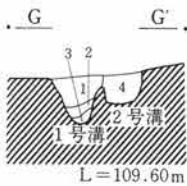
Ⅲ区1面 1号溝

- | | | | |
|-------------|-------------------|--------------|----------------|
| 1 灰黄色細砂層 | | 11 赤褐色砂礫層 | 酸化鉄を含む。 |
| 2 灰黒色シルト層 | | 12 灰褐色砂質シルト層 | 上部が砂質、下部がシルト質。 |
| 3 灰黄色砂層 | ラミナ状に堆積。 | 13 赤褐色砂層 | 粗砂。 |
| 4 褐色土 | As-B、砂を含む。 | 14 褐色砂礫層 | 径2cm程度の円礫が散在。 |
| 5 灰褐色砂質シルト層 | 発達したクロスラミナ。下部に礫層。 | 15 灰褐色砂層 | 粗砂。5mm程度の礫を含む。 |
| 6 灰黒色砂層 | 発達したクロスラミナ。下部に礫層。 | 16 灰褐色シルト層 | 径2mm程度の炭化粒散在。 |
| 7 灰褐色細砂層 | | 17 灰黄色砂層 | 淡黄色シルト層を挟む。 |
| 8 茶褐色砂層 | 酸化鉄で汚れた粗砂。 | 18 灰褐色シルト層 | |
| 9 赤褐色砂層 | 酸化鉄が認められ、下部ほど粗砂。 | 19 灰青色砂層 | 粗砂。一部ラミナ状堆積。 |
| 10 灰褐色砂層 | 淡黄色シルト層を挟む。 | | |



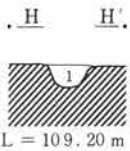
Ⅲ区1面 2号溝

- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 褐色砂質土 | 褐色土のブロックを含む。 |
| 2 褐色砂礫土 | 安山岩の小礫、砂、As-Bを含む。 |
| 3 褐色砂礫層 | 酸化鉄を含む。 |
| 4 褐色土 | 下層に砂礫層が堆積。 |
| 5 褐色砂質土 | 径3mmの炭化粒を含む。砂礫を含む。 |
| 6 灰黒色砂礫層 | 褐色土のブロックを含む。 |
| 7 褐色土 | 砂礫を含み、径3mmの白色軽石散在。 |
| 8 褐色土 | 砂礫のブロックを含む。粘性ややあり。 |
| 9 褐色土 | 8と同様であるが、粘性が強い。 |
| 10 褐色砂礫層 | 小礫を含む。 |
| 11 褐色砂層 | 炭化粒散在。ラミナ状堆積。 |
| 12 赤褐色砂礫層 | 小礫を中心とした砂礫層。酸化鉄を含む。 |



V区1面 1・2号溝

- | | |
|---------|--|
| 1 暗灰褐色土 | As-B、橙色シルト粒、炭化物を含む。しまりあり。 |
| 2 暗灰褐色土 | 橙色、灰黄色シルトの小ブロックを含む。しまりあり。 |
| 3 灰褐色土 | 灰黄色シルトを多く含む。しまりあり。 |
| 4 暗灰褐色土 | 1と同様であるが、色調がやや明るい。B軽石、橙色シルト粒を含む。しまりあり。 |



V区1面 2号溝

- | | |
|---------|------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | As-B、灰黄色シルト粒を含む。しまりあり。 |
|---------|------------------------|

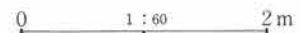
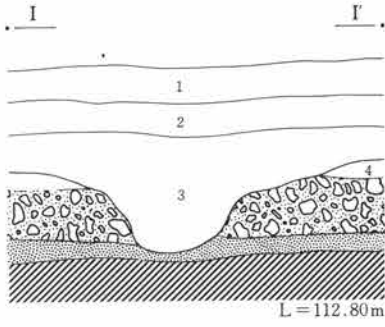
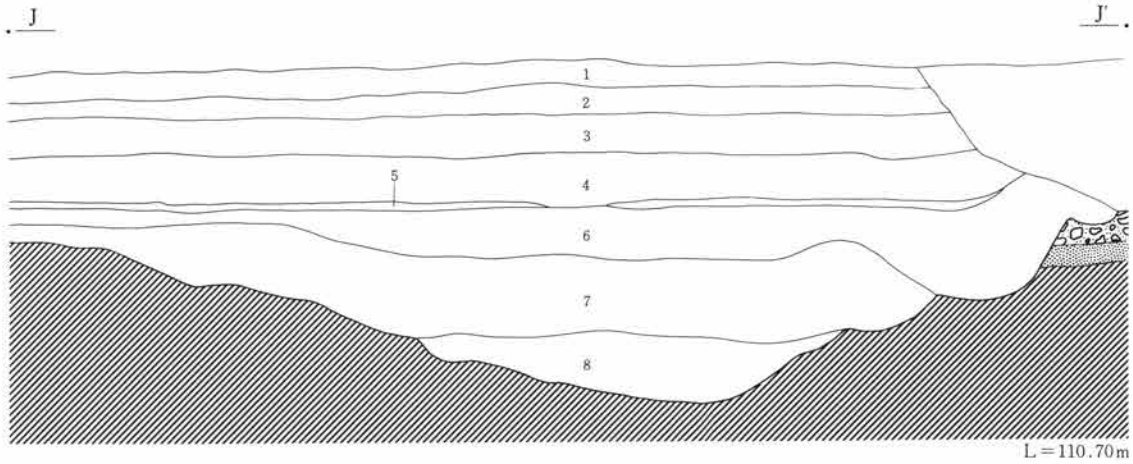


図22 Ⅲ区1面 1・2号溝 V区1面 1・2号溝土層断面



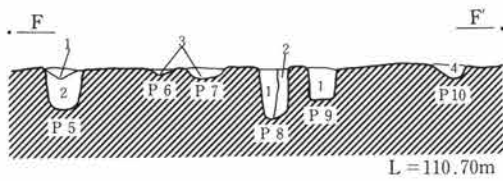
V区1面 5号溝

- 1 攪乱土
- 2 灰褐色砂質土 灰色砂、軽石をまばらに含む。鉄分凝集。
- 3 灰褐色土・灰色砂層 互層。炭化物、軽石、小礫を含む。
- 4 灰白・灰色砂層 As-B～F A間の洪水堆積物。鉄分凝集。



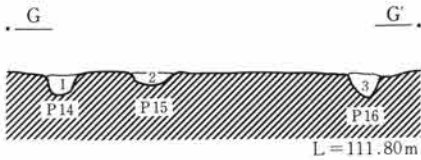
V区1面 6号溝

- 1 黒褐色土 黄橙色のローム粒を含む。表土
- 2 暗褐色土 小礫を含む。鉄分凝集。
- 3 灰褐色土 黄橙色のローム粒を少量含む。鉄分凝集。
- 4 灰褐色土 砂粒を多く含む。軽石、炭化物含有。
- 5 灰褐色粘質土 部分的に細砂を含む。鉄分凝集。
- 6 灰褐色土 部分的に暗灰褐色砂を少量含む。
- 7 灰褐色土 砂粒、炭化物を少量含む。鉄分凝集。
- 8 黒褐色土 砂、灰褐色土を多く含む。鉄分凝集。



I区1面 ビット5・6・7・8・9・10

- 1 灰褐色砂質土 小礫を少量含む。
- 2 暗褐色土 As-B、砂、灰白色粘性土ブロックを少量含み、1よりも粘性が強い。しまり良い。
- 3 暗褐色土 しまり悪くボロボロしている。
- 4 暗褐色土 炭化物を含み、やや粘性あり。



I区1面 ビット14・15・16

- 1 暗褐色土 小礫、砂を多量に含む。しまり弱い。
- 2 灰褐色砂質土 砂を多量に含む。
- 3 暗褐色砂層 小礫を少量含む。

0 1:60 2m

図23 V区1面5・6号溝 I区1面 5～10号・14～16号ビット土層断面

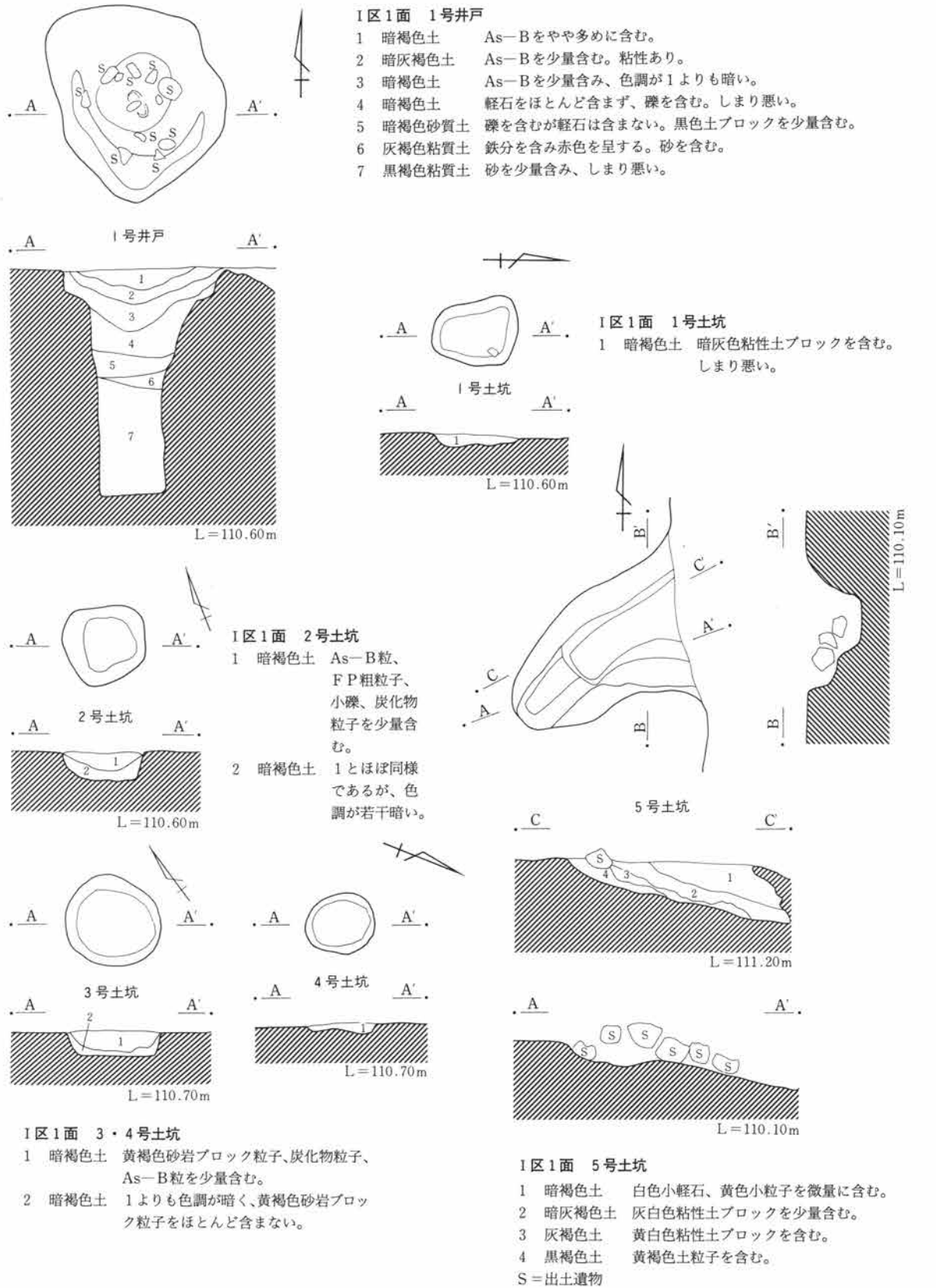


図24 I区1面 1号井戸、1～5号土坑土層断面

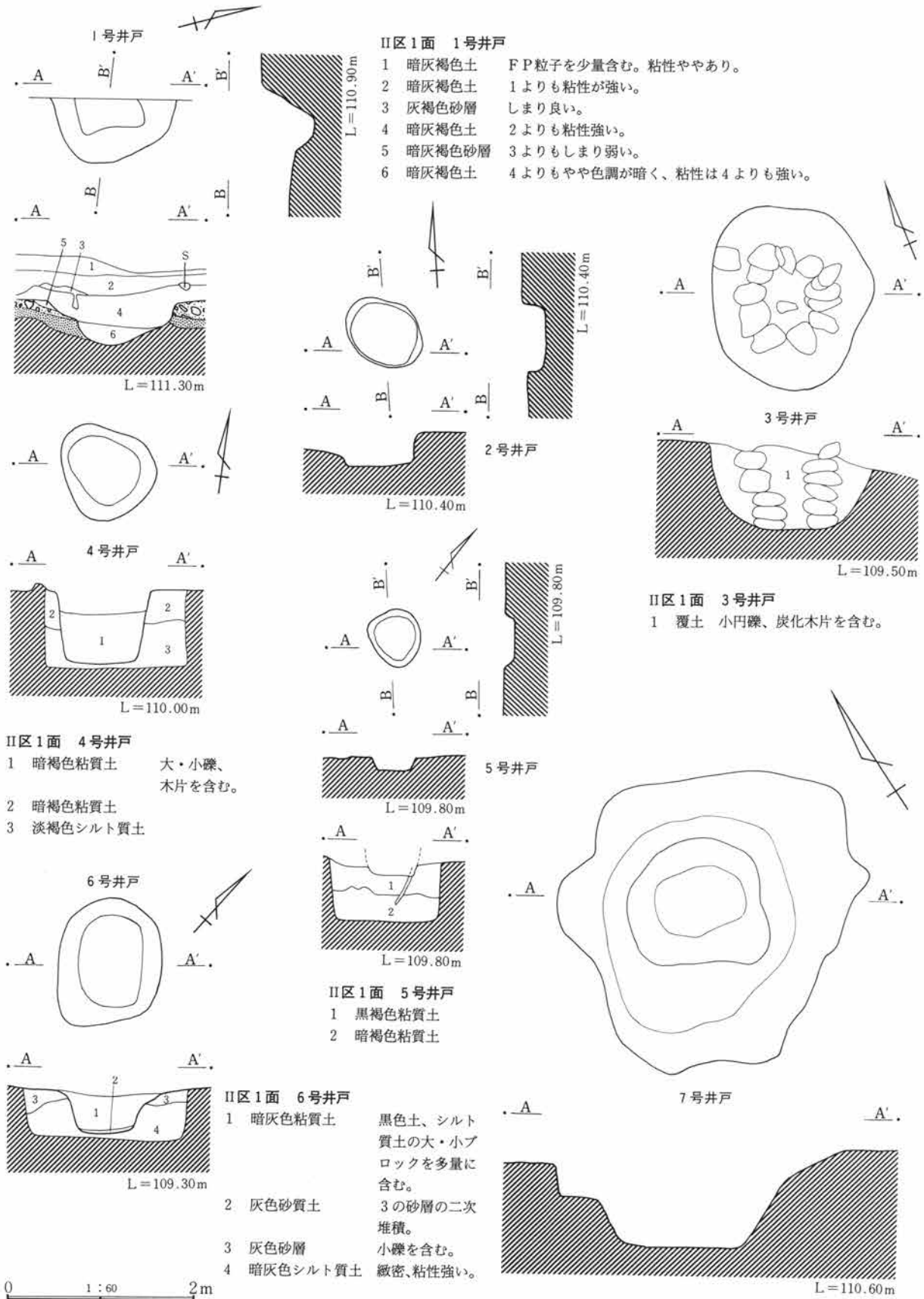


図25 II区1面 1~7号井戸土層断面

第3章 検出された遺構と遺物

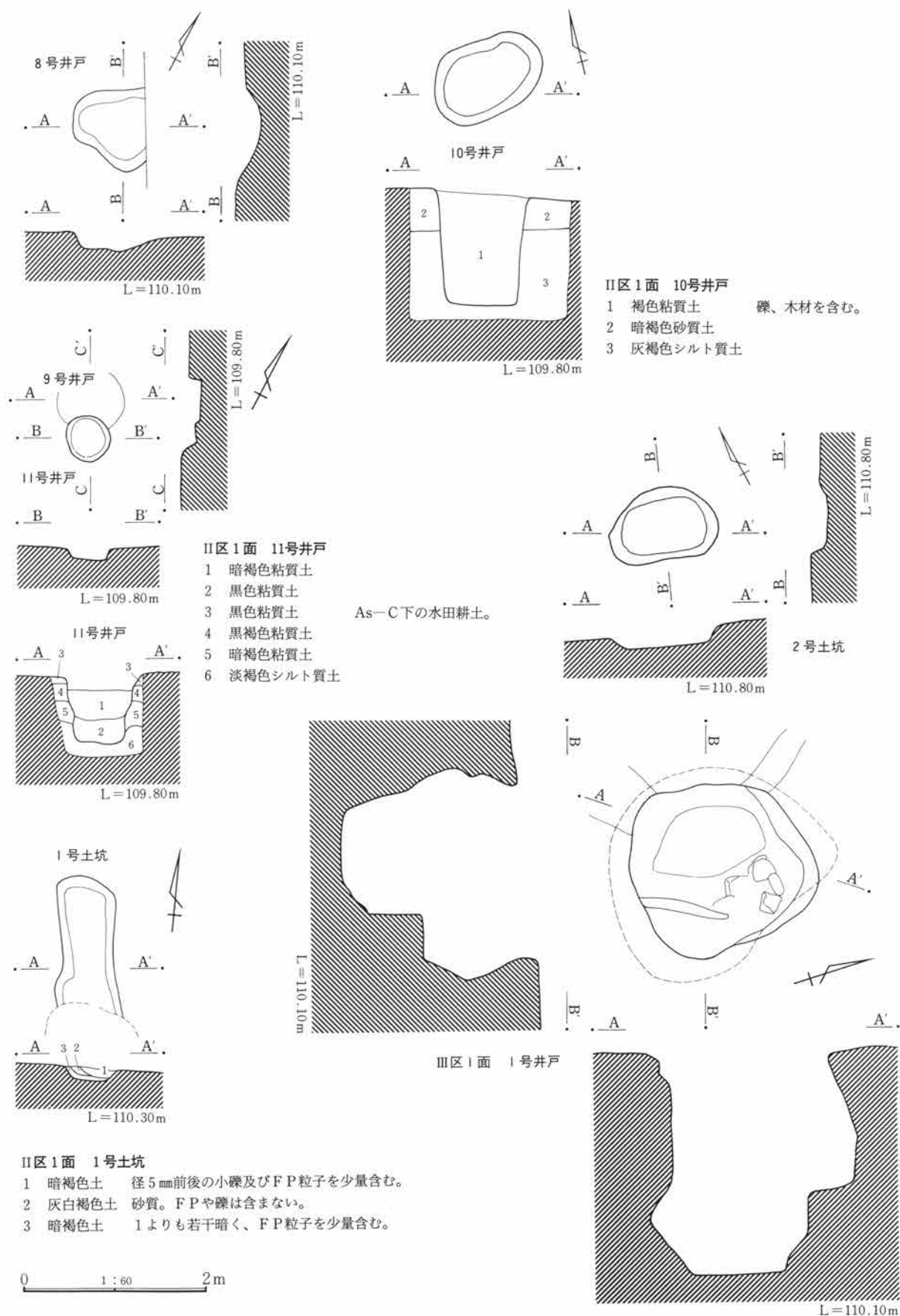
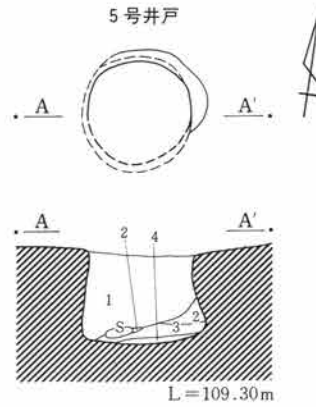
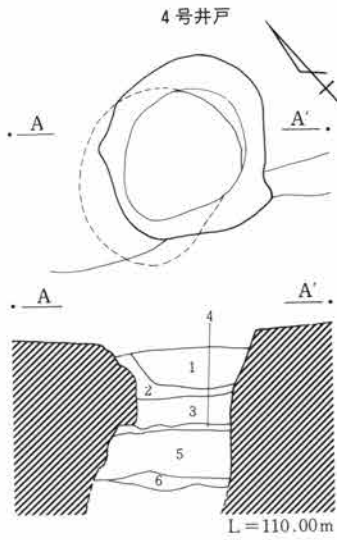
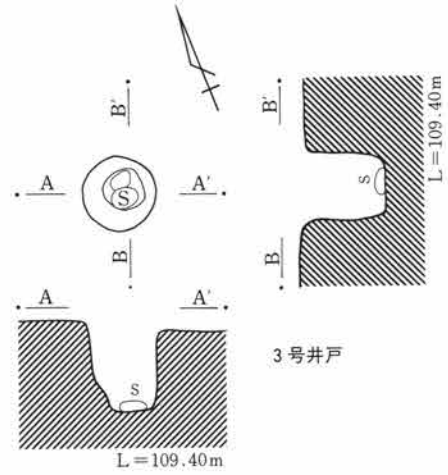
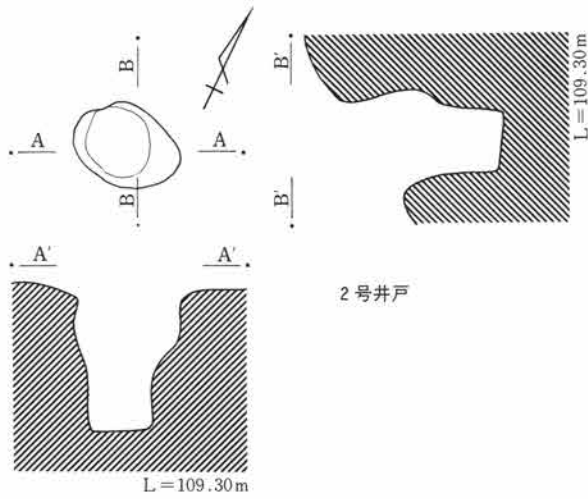


図26 II区1面 8~11号井戸、1・2号土坑、III区1面 1号井戸土層断面

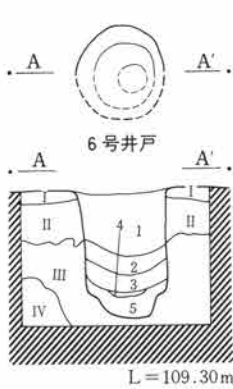


Ⅲ区1面 4号井戸

- 1 灰褐色土 やや砂質。As-B、少量の鉄分沈着。
- 2 灰褐色砂質土 1、3よりも色調が若干明るく、やや黄色味を帯びる。
- 3 灰褐色土 As-Bを少量含み、やや砂質。
- 4 灰褐色砂質土 2とほぼ同様であるが、色調がやや明るい。
- 5 灰褐色土 黄褐色砂を含む。木片出土。
- 6 灰褐色土 FPF-1の大形ブロックを含む。

Ⅲ区1面 5号井戸

- 1 褐色土 黒色土、シルト質土、砂質土のブロックを混入。
- 2 灰褐色土 砂質土、粘質土が互層をなし堆積。
- 3 灰褐色土 2と同様であるが、砂質土の粒子が粗い。
- 4 灰褐色土 わずかに砂を含む。



Ⅲ区1面 6号井戸

- 1 暗褐色土 黒色土、褐色土、シルト、砂質土のブロックを混入。
- 2 褐色粘質土 砂層と粘質土の互層。
- 3 褐色粘質土 2と同様であるが、褐色粘質土のブロックを含む。
- 4 暗褐色土 粘性が強い。
- 5 灰褐色砂層 As-C下水田土壌。
- I 黒色粘質土
- II 暗灰色粘質土
- III 灰褐色シルト質土
- IV 青灰色シルト質土



図27 Ⅲ区1面 2～6号井戸土層断面

第3章 検出された遺構と遺物

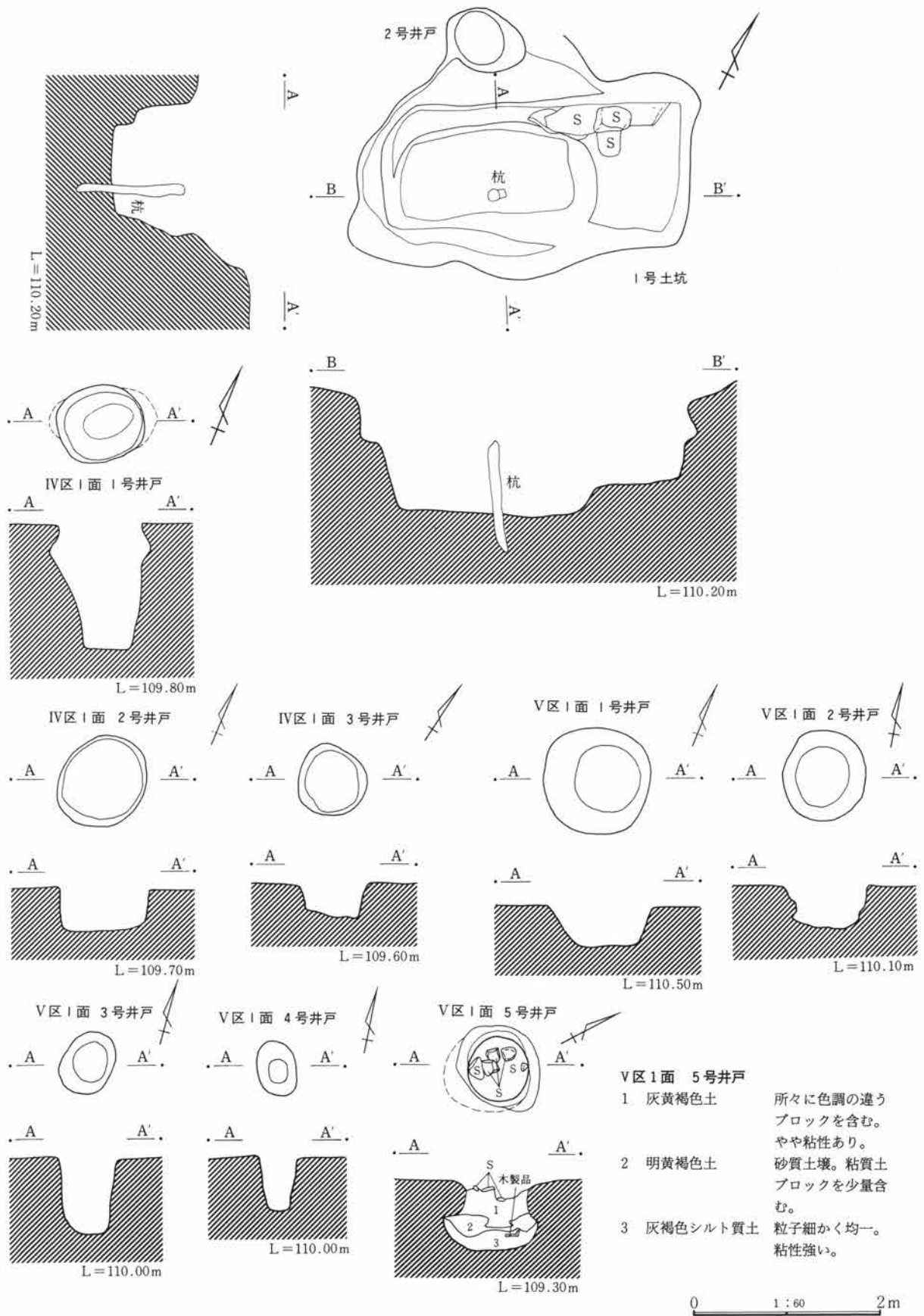


図28 III区1面 1号土坑、IV区1面 1~3号井戸、V区1面 1~5号井戸土層断面

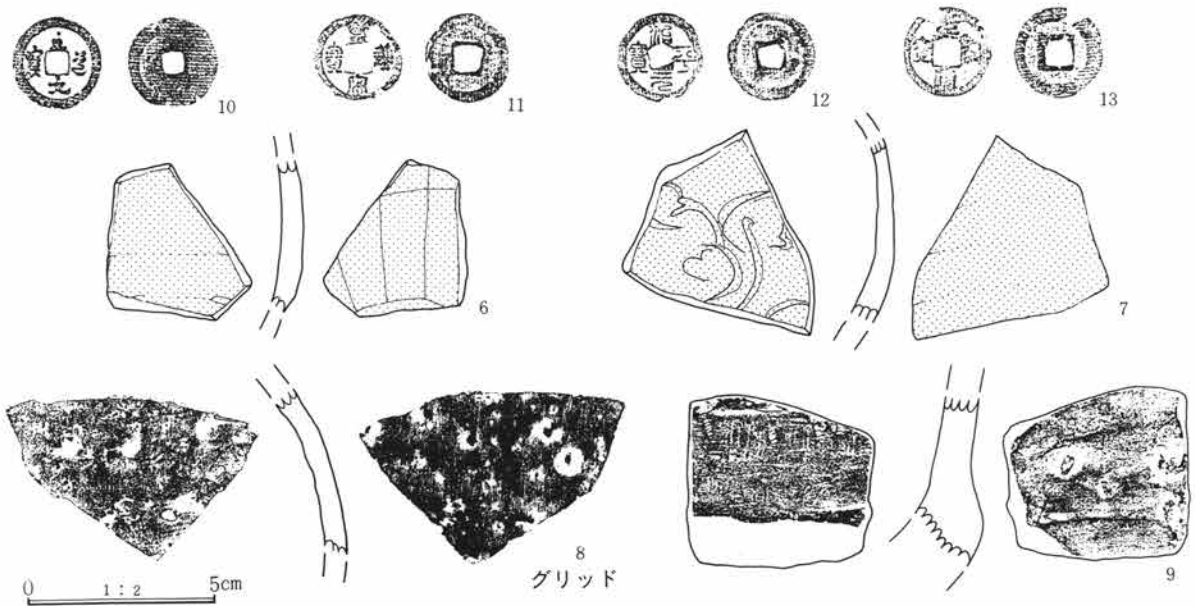
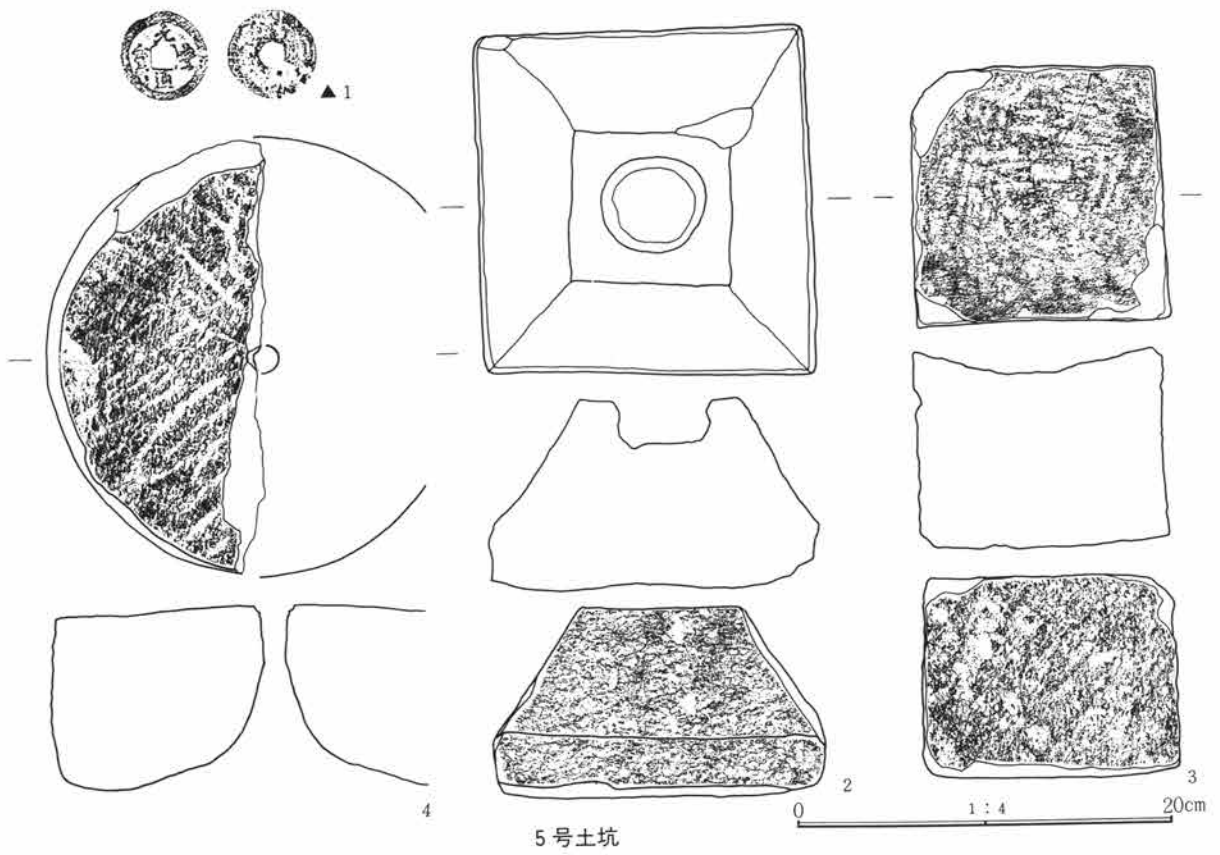


図29 1区1面 5号土坑、2号溝、グリッド出土遺物

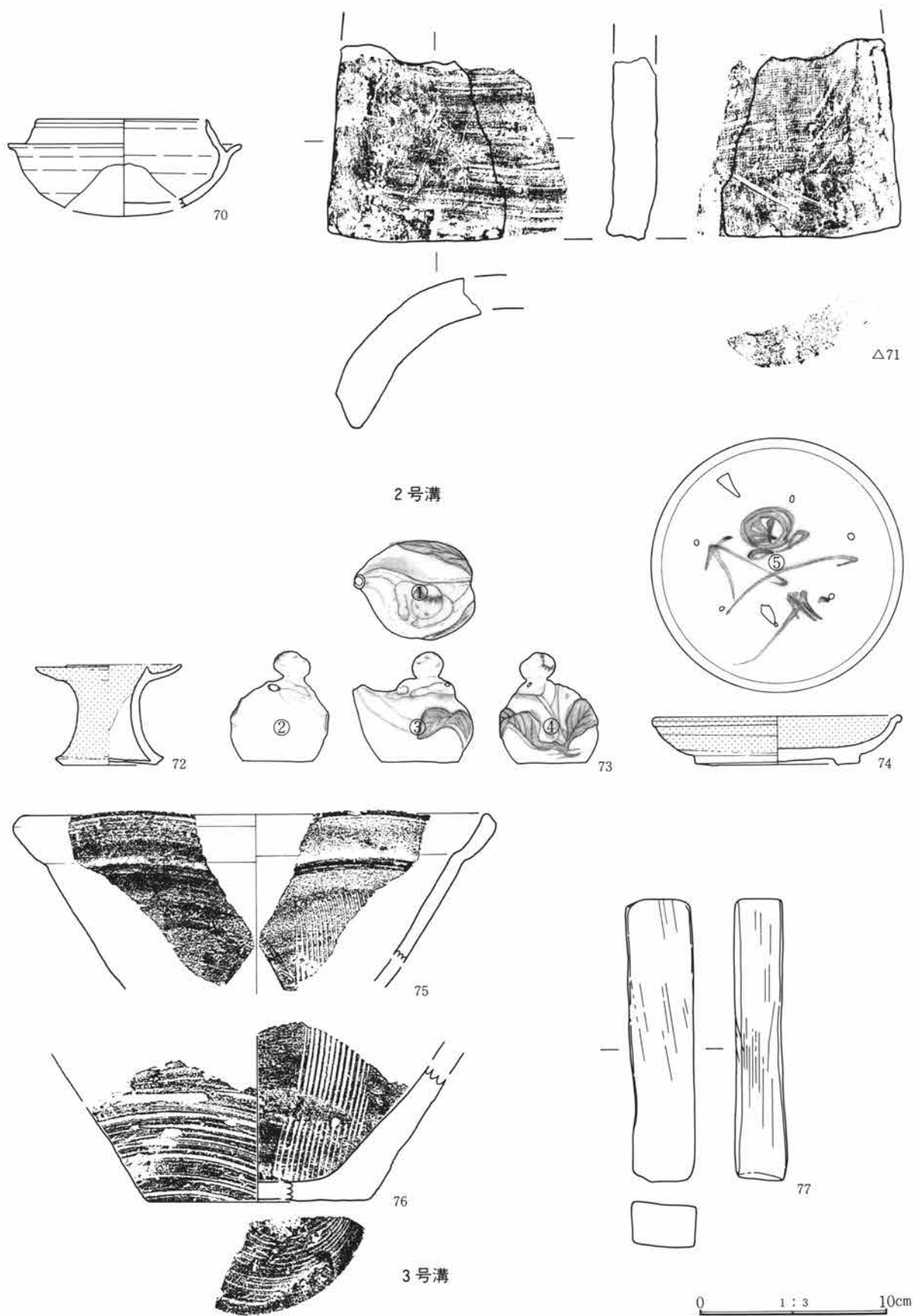


図30 II区1面 2・3号溝出土遺物

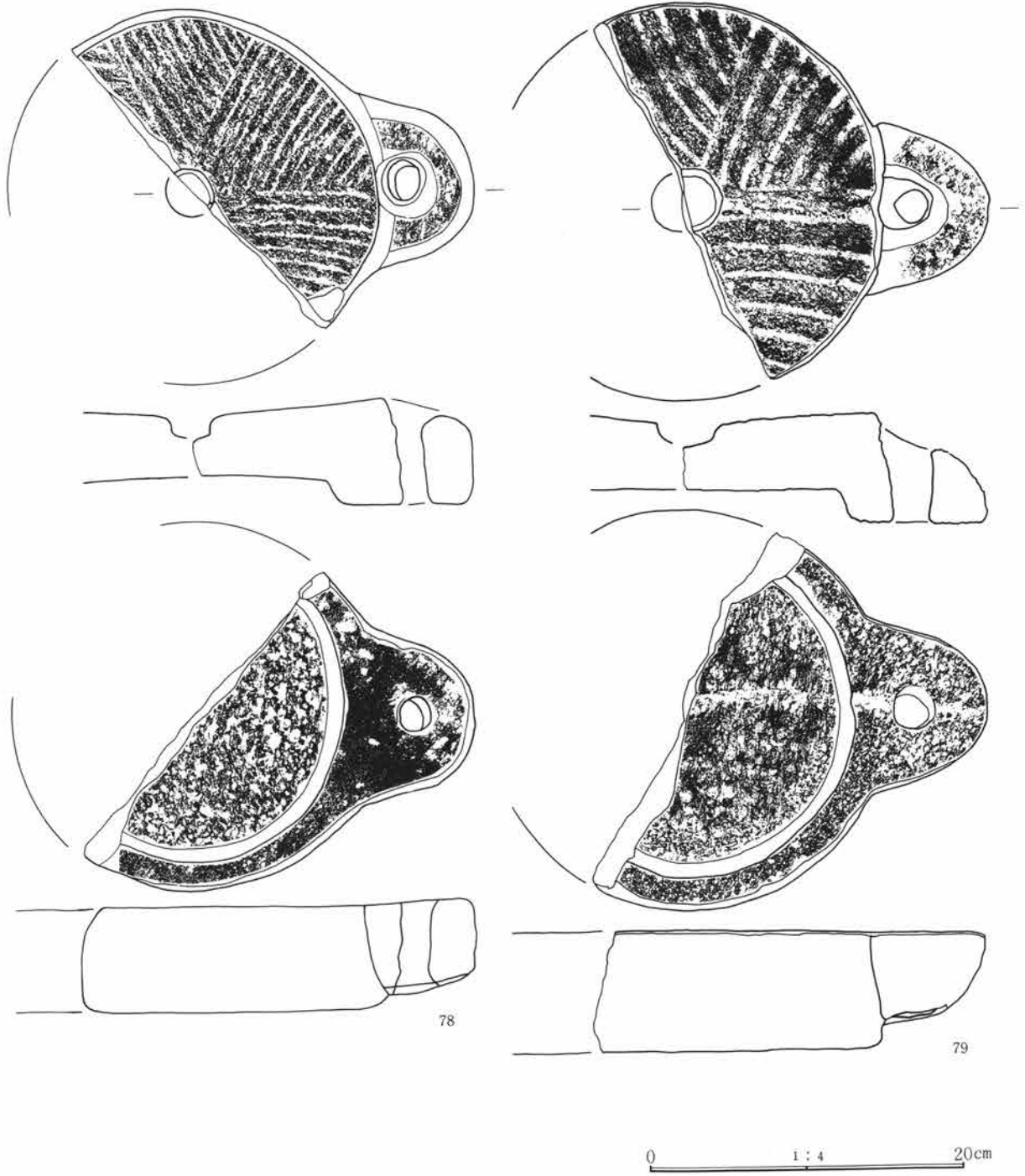


図31 II区1面 3号溝出土遺物

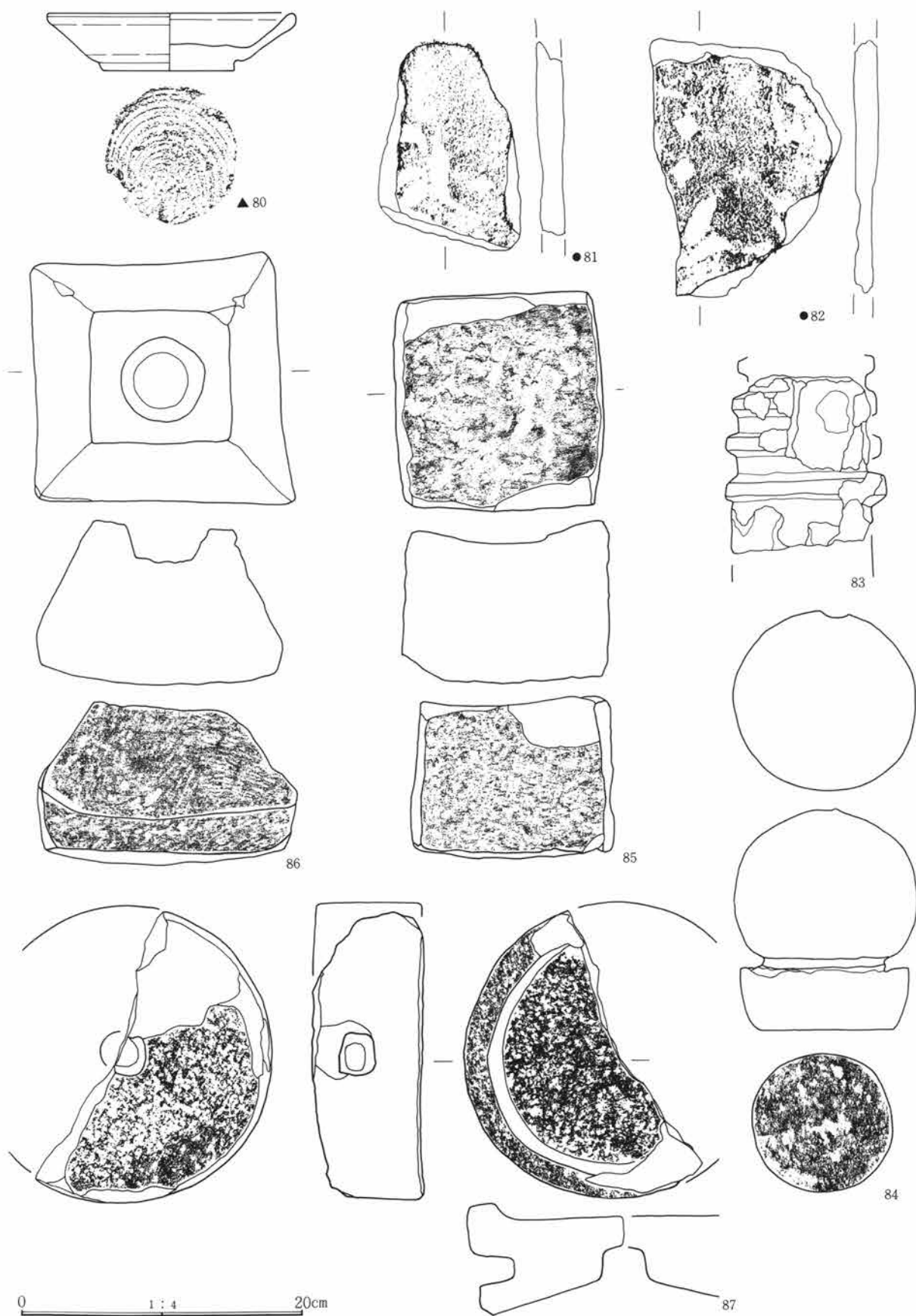


図32 II区1面 5号溝出土遺物(1)

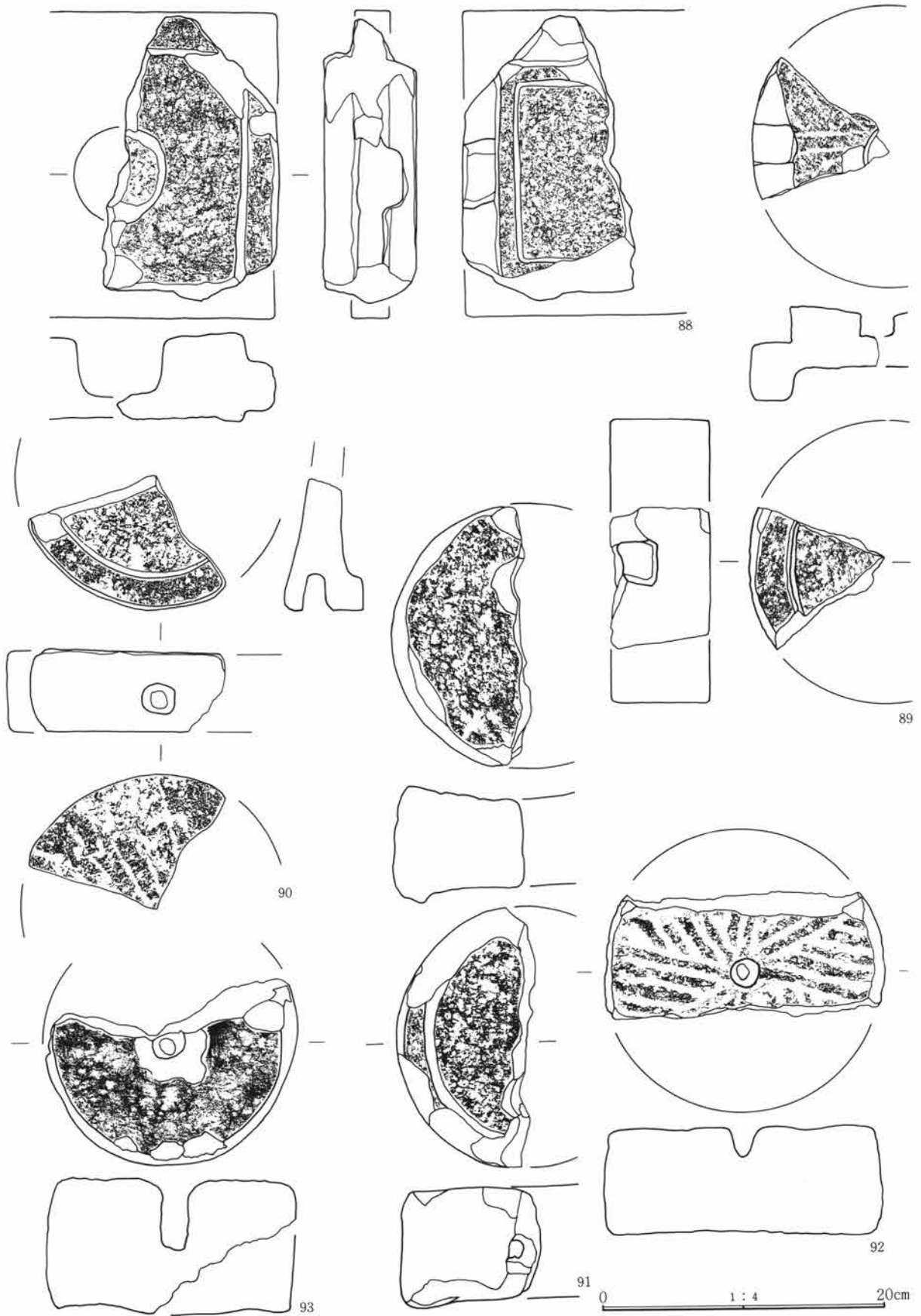


図33 II区1面 5号溝出土遺物(2)

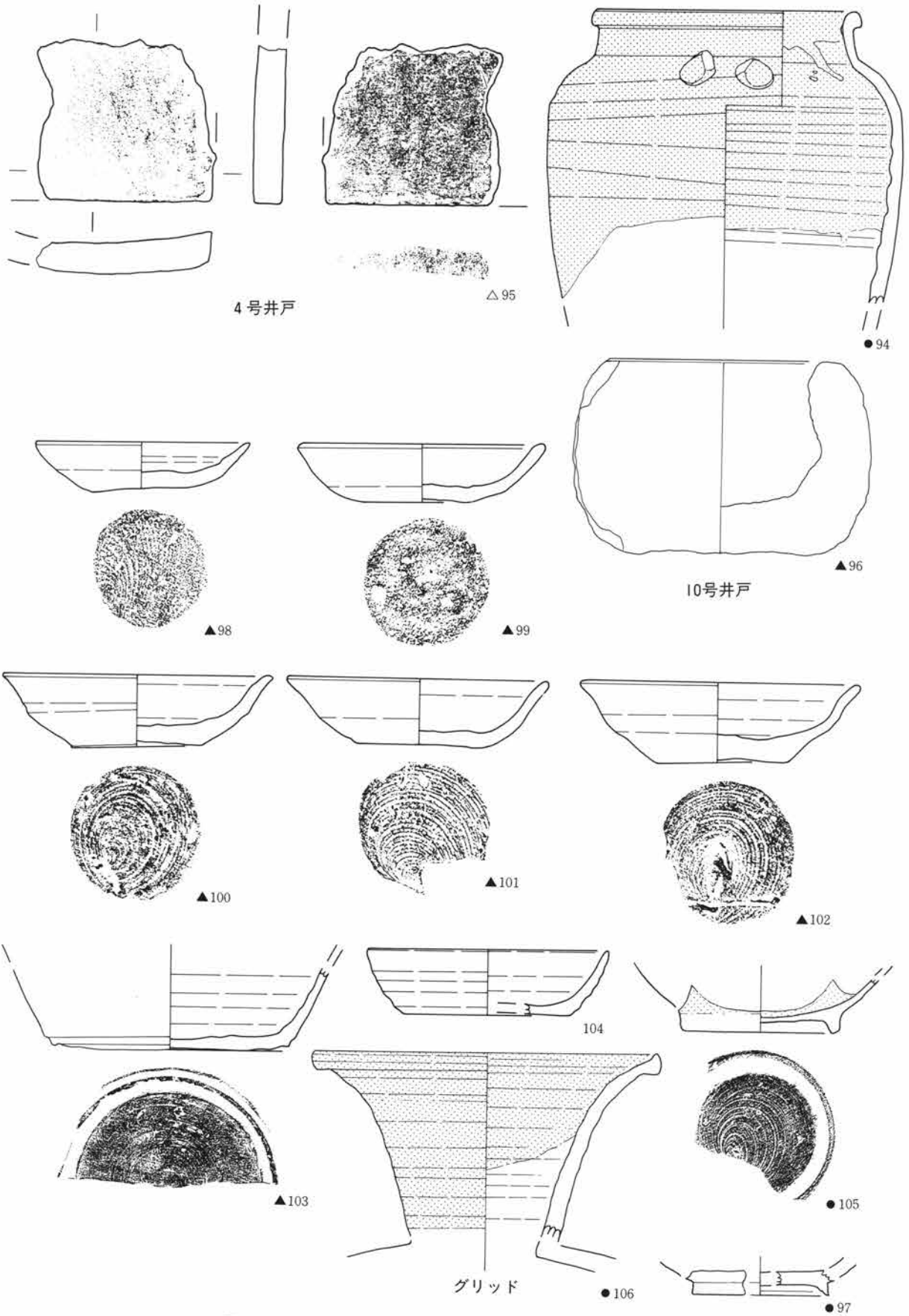


図34 II区1面 4・10号井戸、グリッド(1)出土遺物

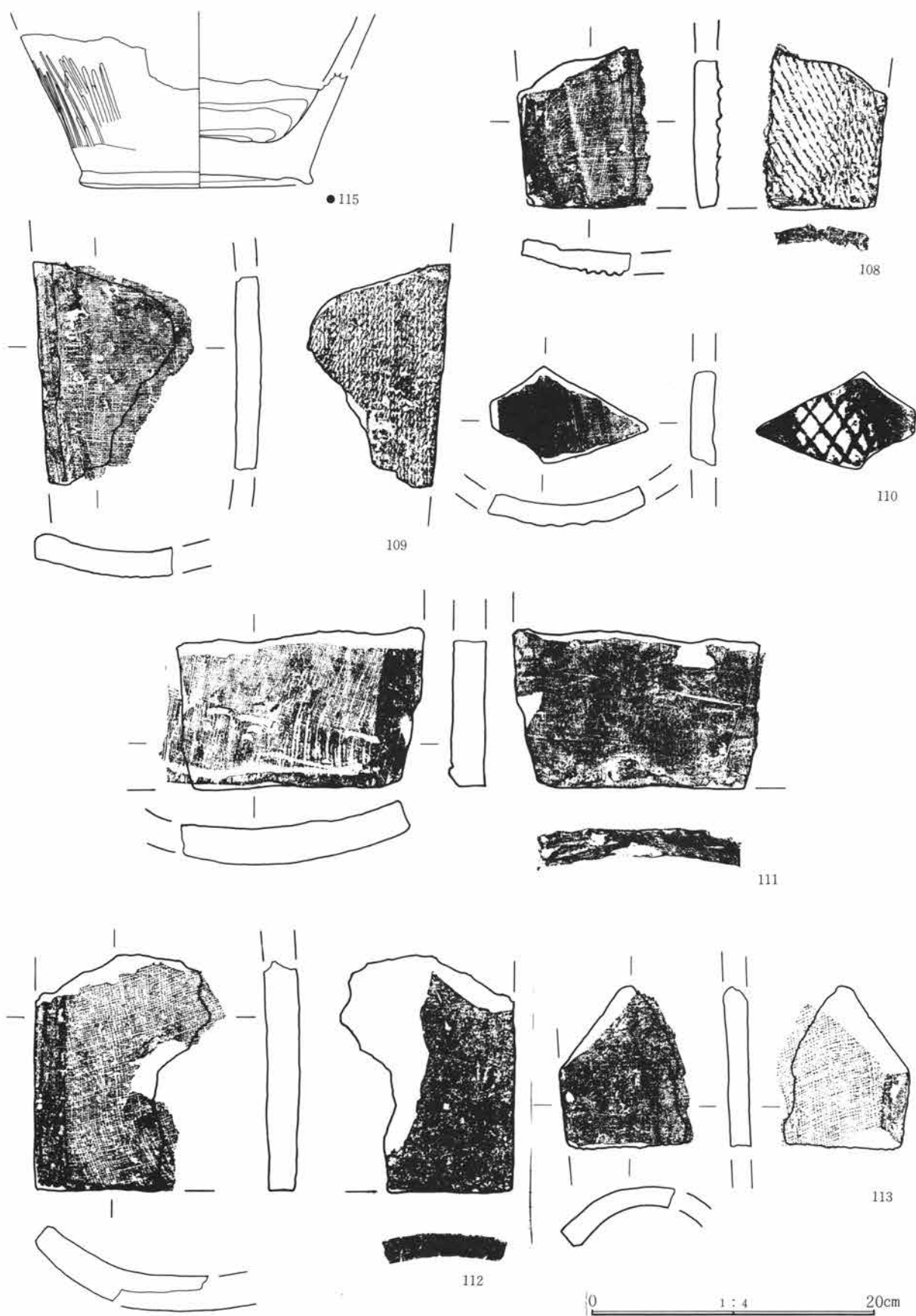
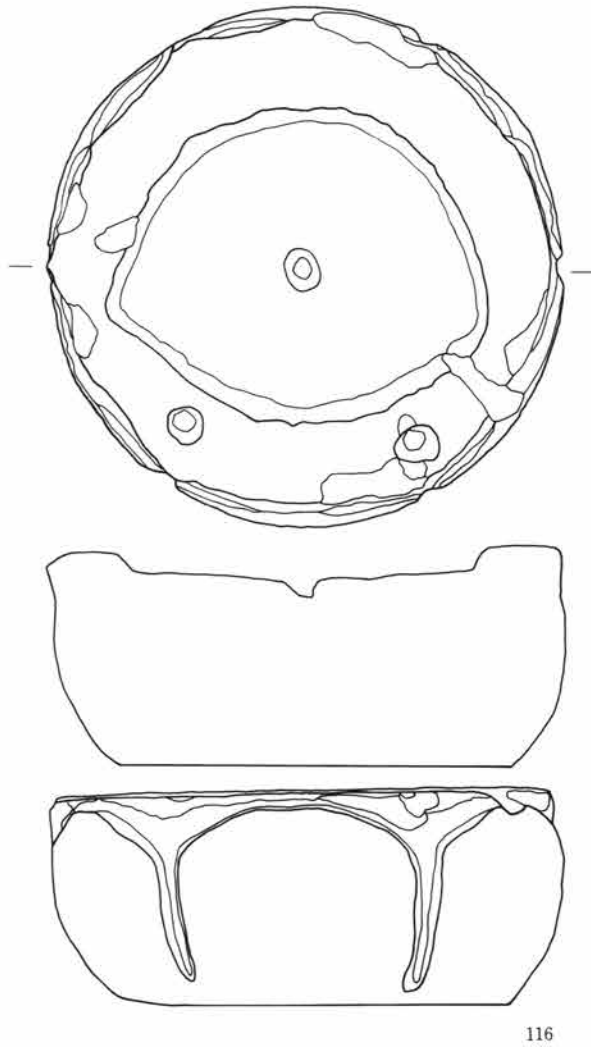
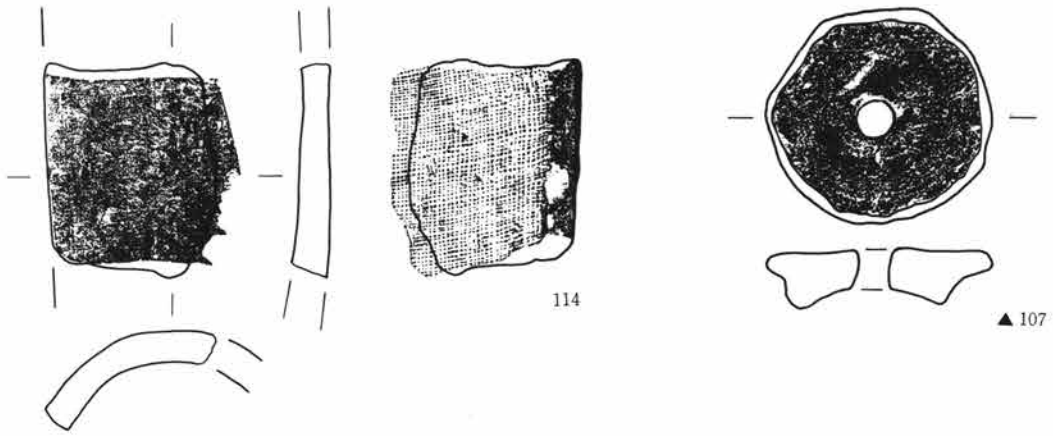


図35 II区1面 グリッド出土遺物(2)



0 1:4 20cm

図36 II区1面 グリッド出土遺物(3)

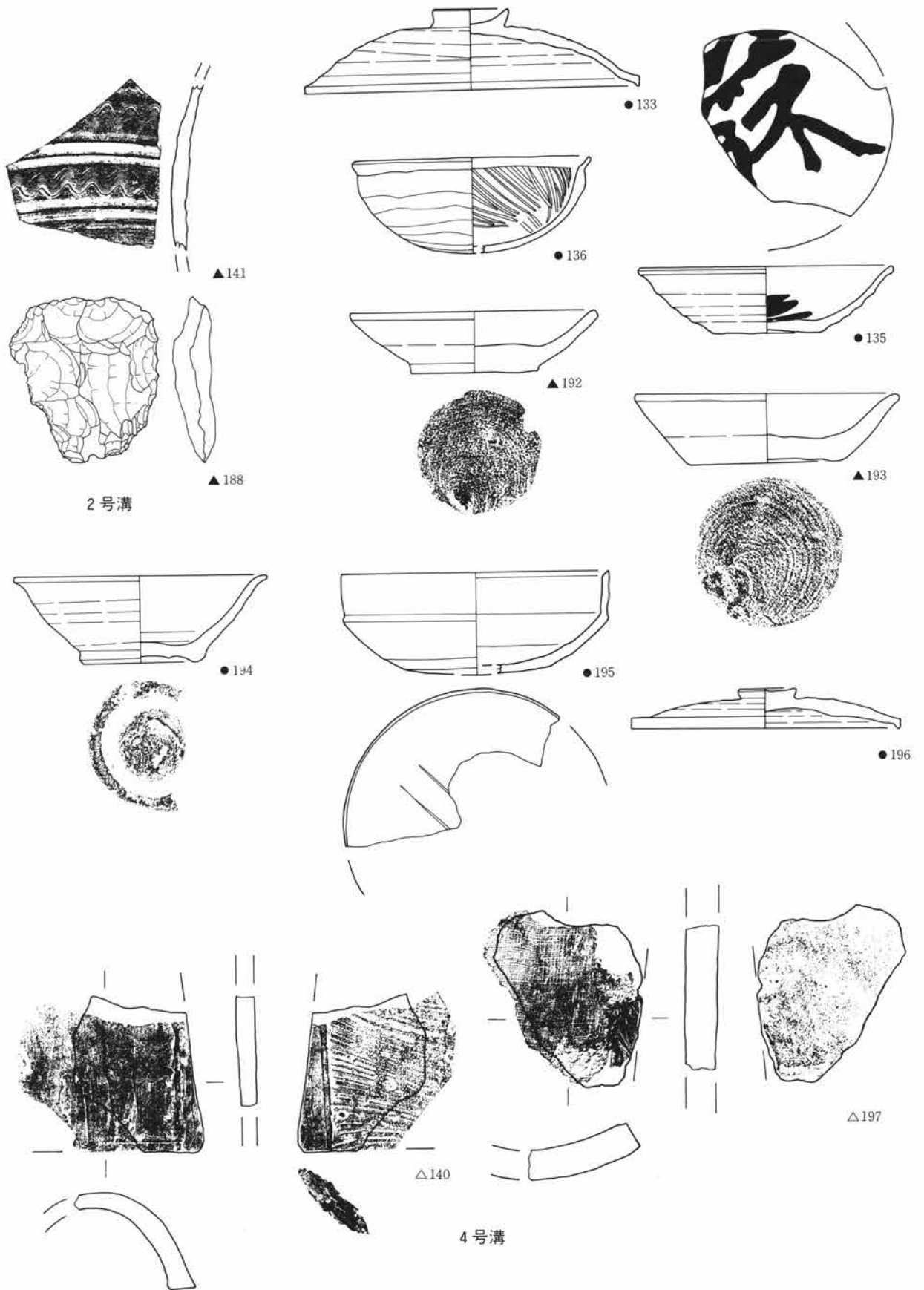


図38 III区1面 2・4号溝出土遺物

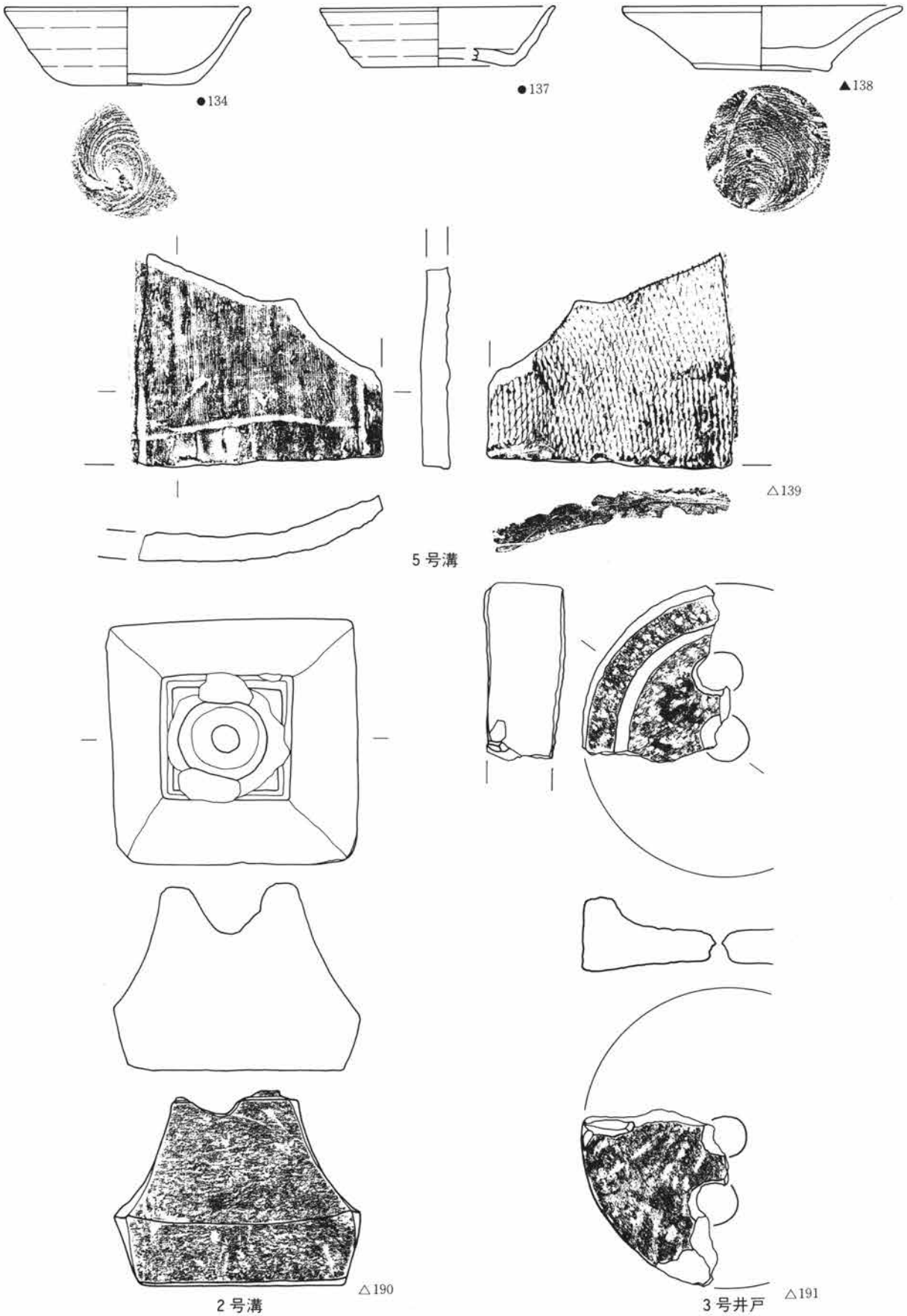


図39 III区1面 5号溝、2・3号井戸出土遺物

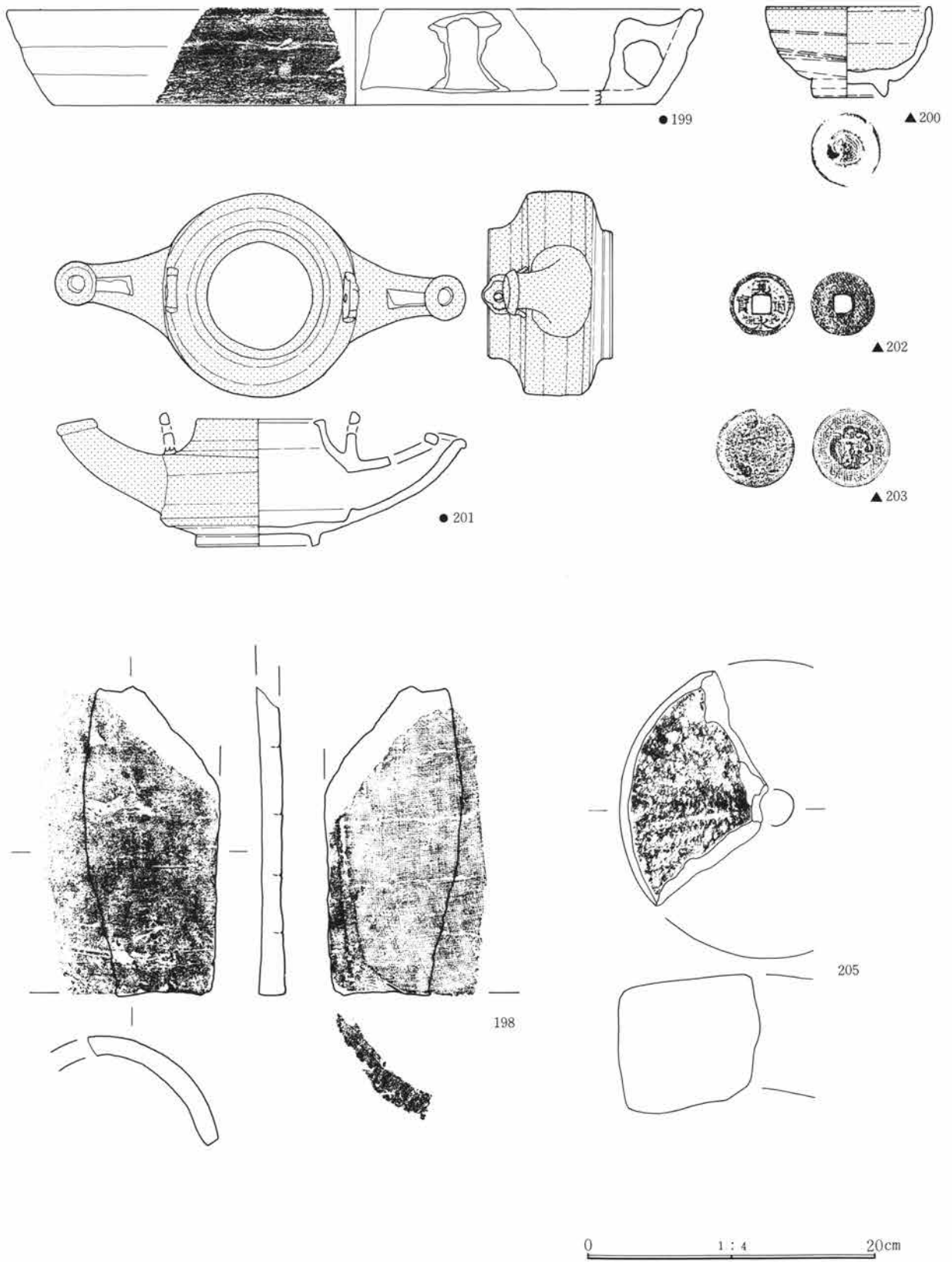


図40 III区1面 グリッド出土遺物(1)

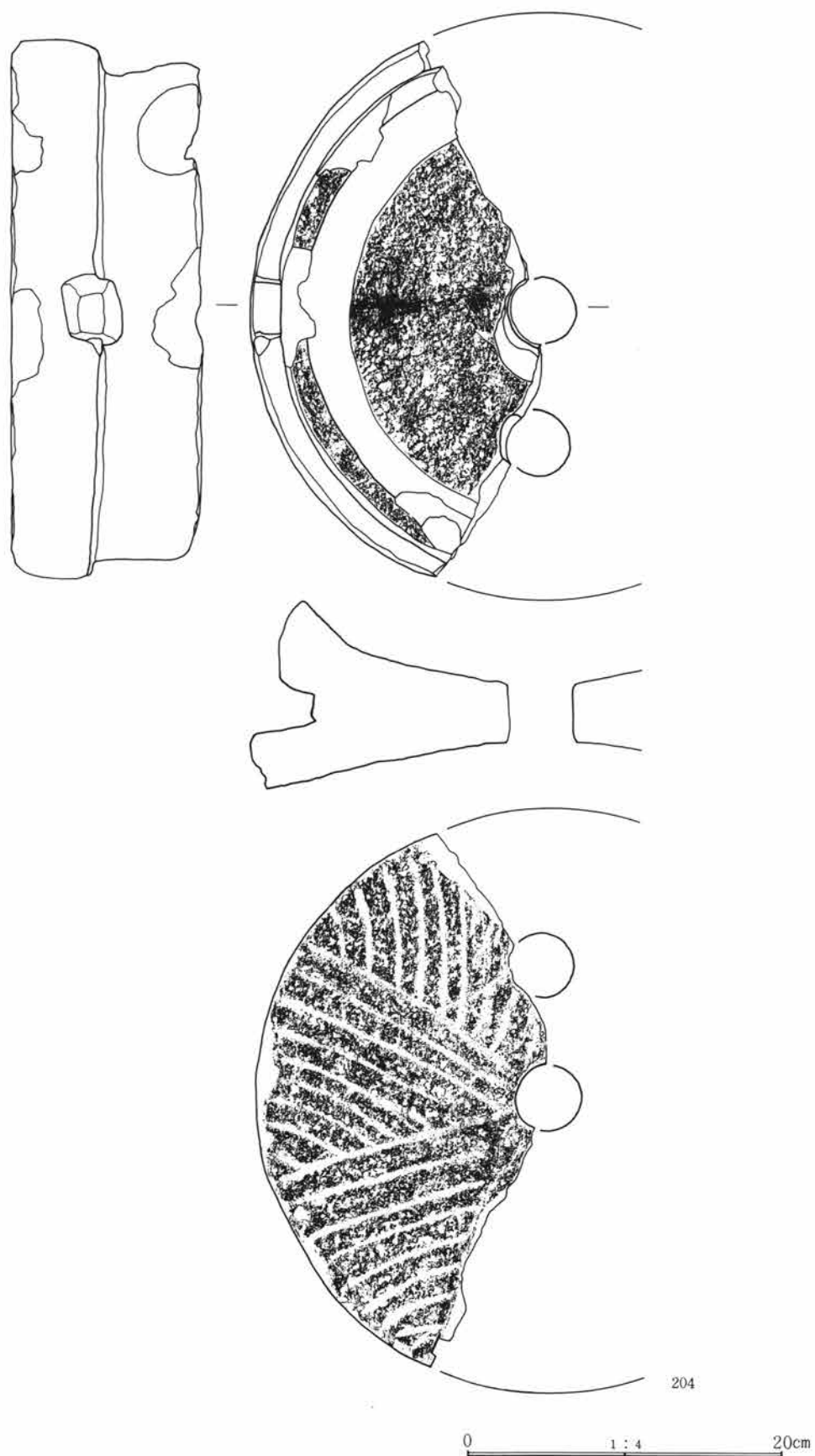


図41 III区1面 グリッド出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

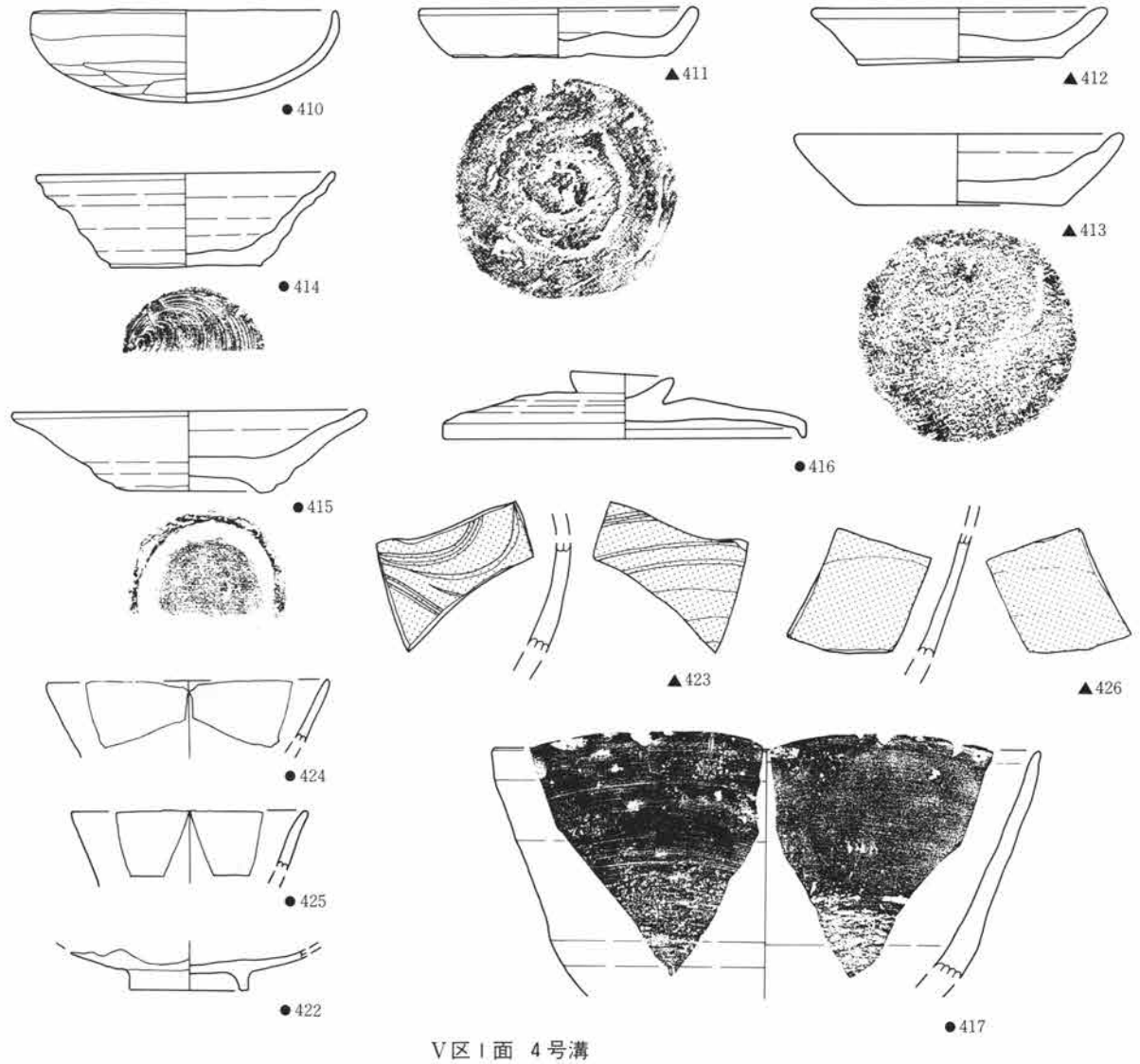
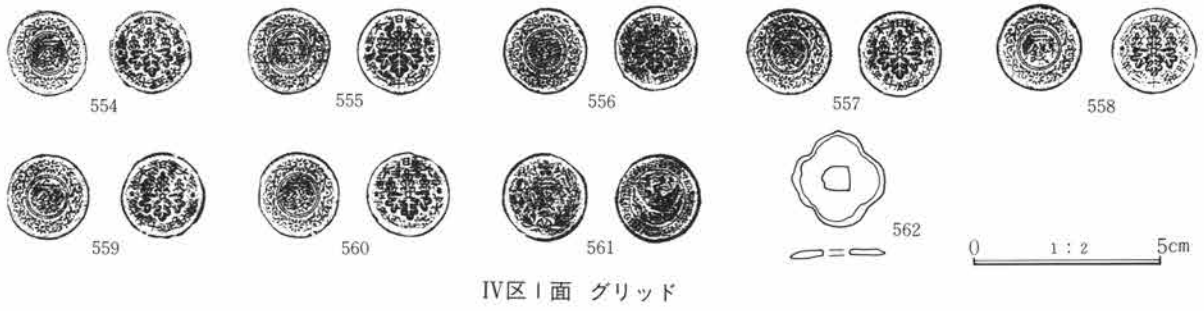


図42 IV区1面 グリッド、V区1面 4号溝出土遺物(1)

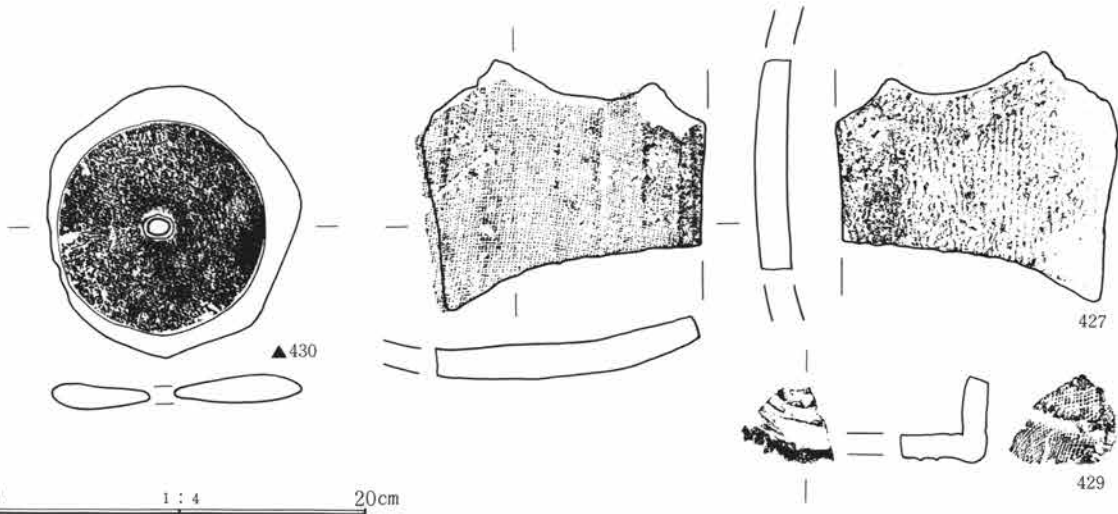
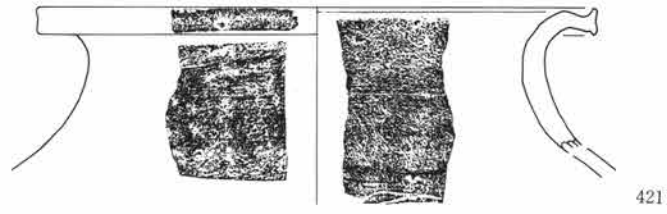
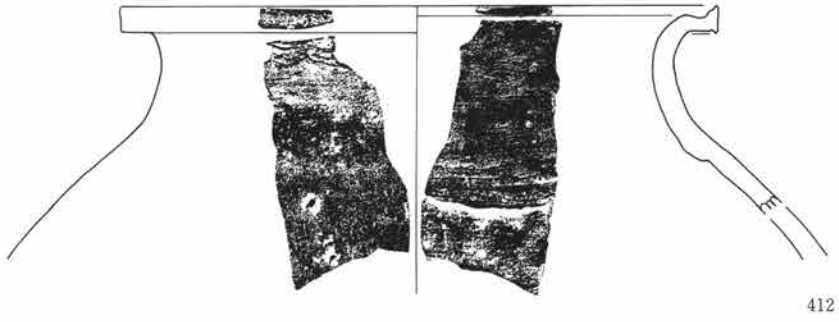
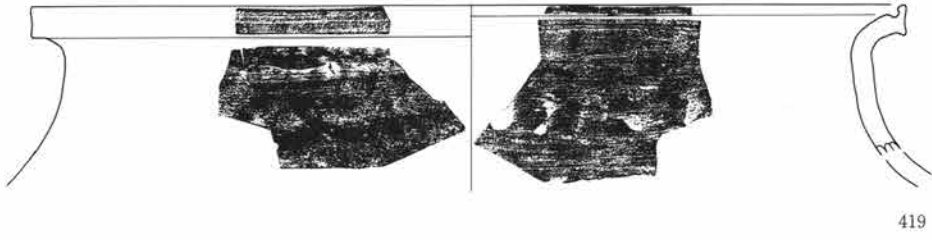
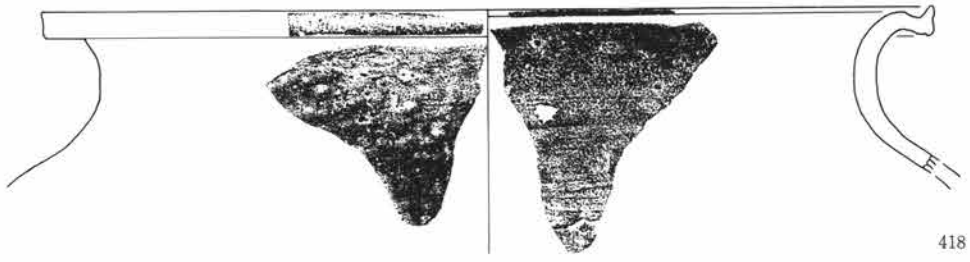


図43 V区1面 4号溝出土遺物(2)

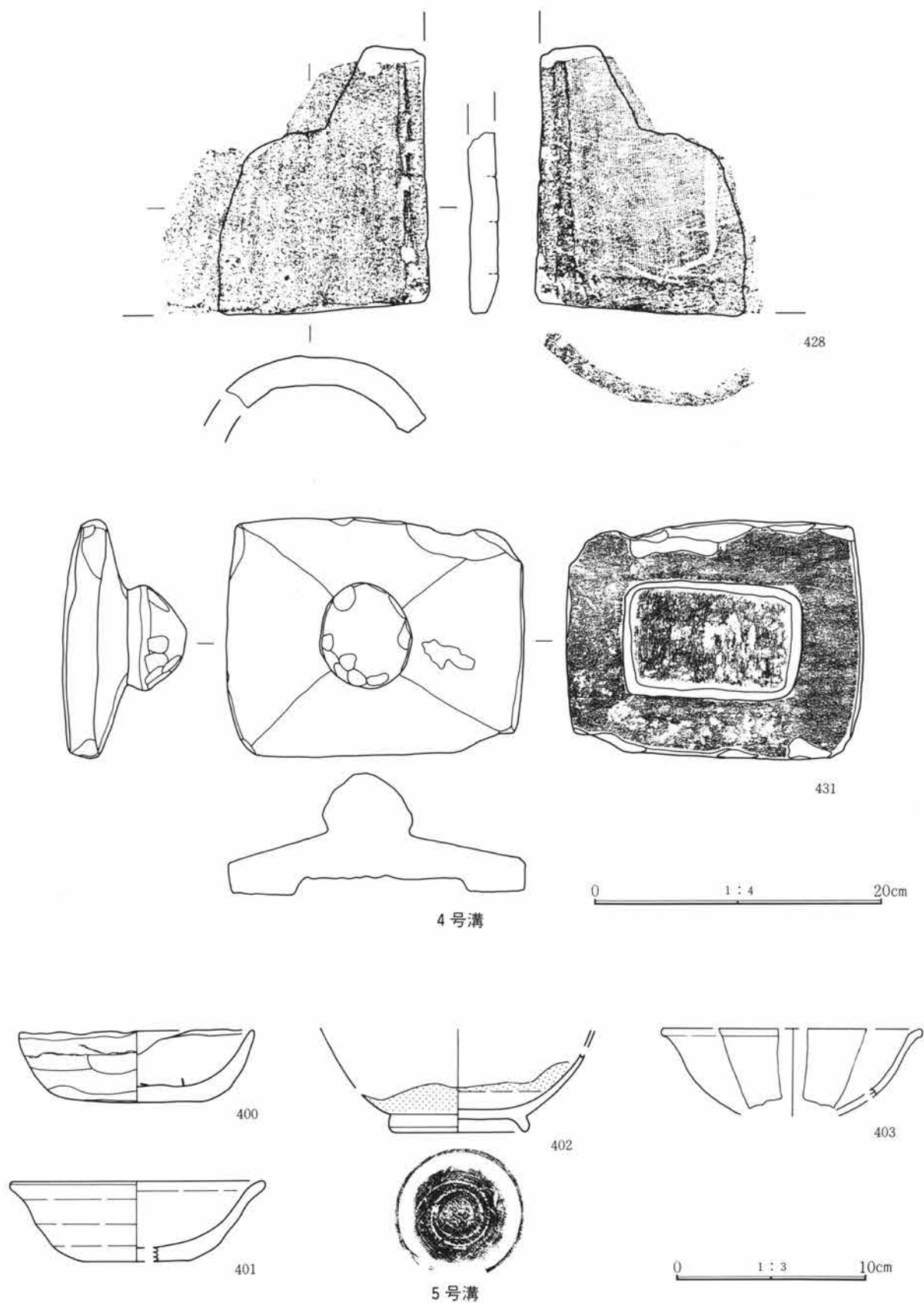


図44 V区1面 4・5号溝(1)出土遺物

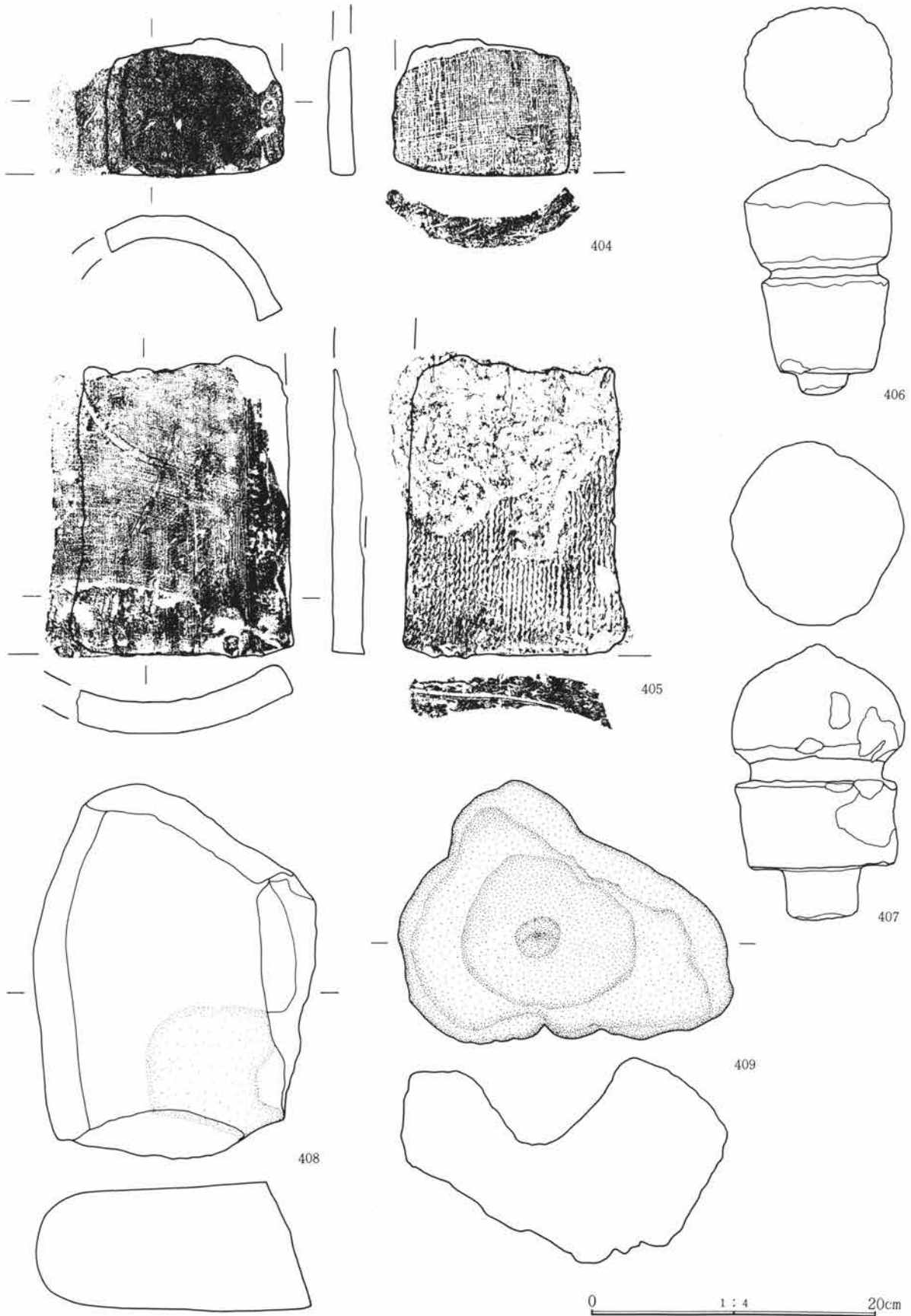


図45 V区1面 5号溝出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

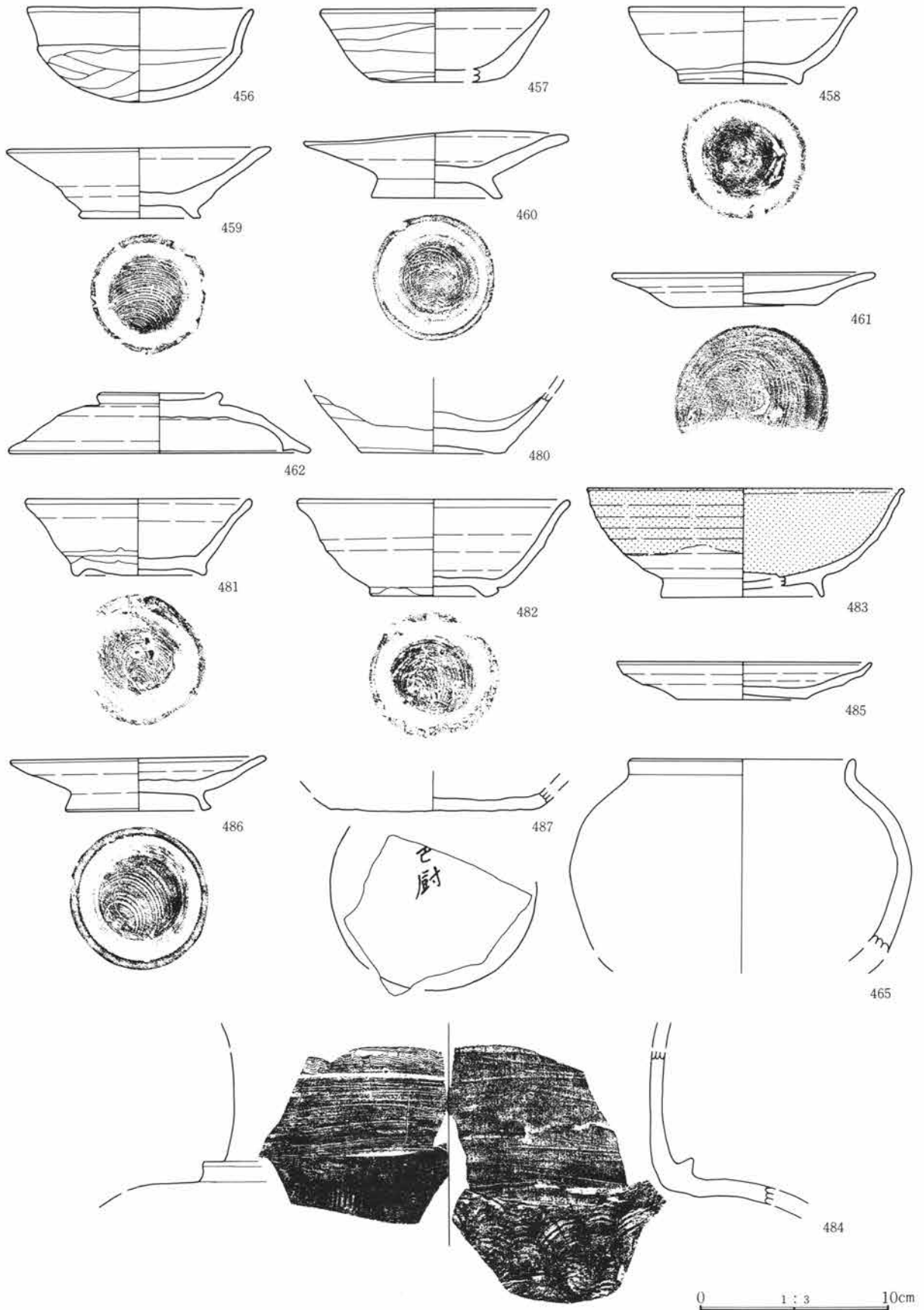


図46 V区1面 6号溝出土遺物(1)

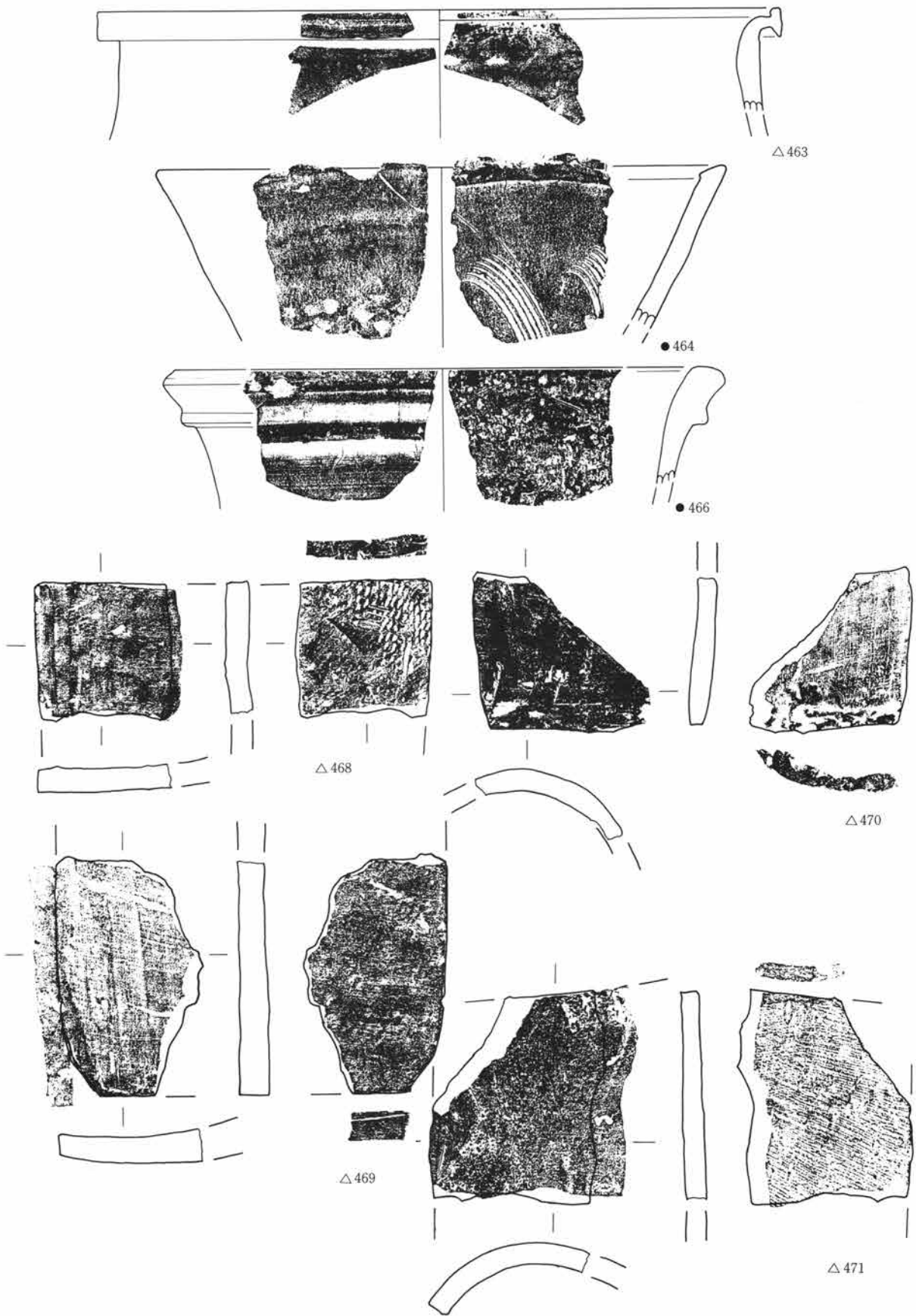


図47 V区1面 6号溝出土遺物(2)

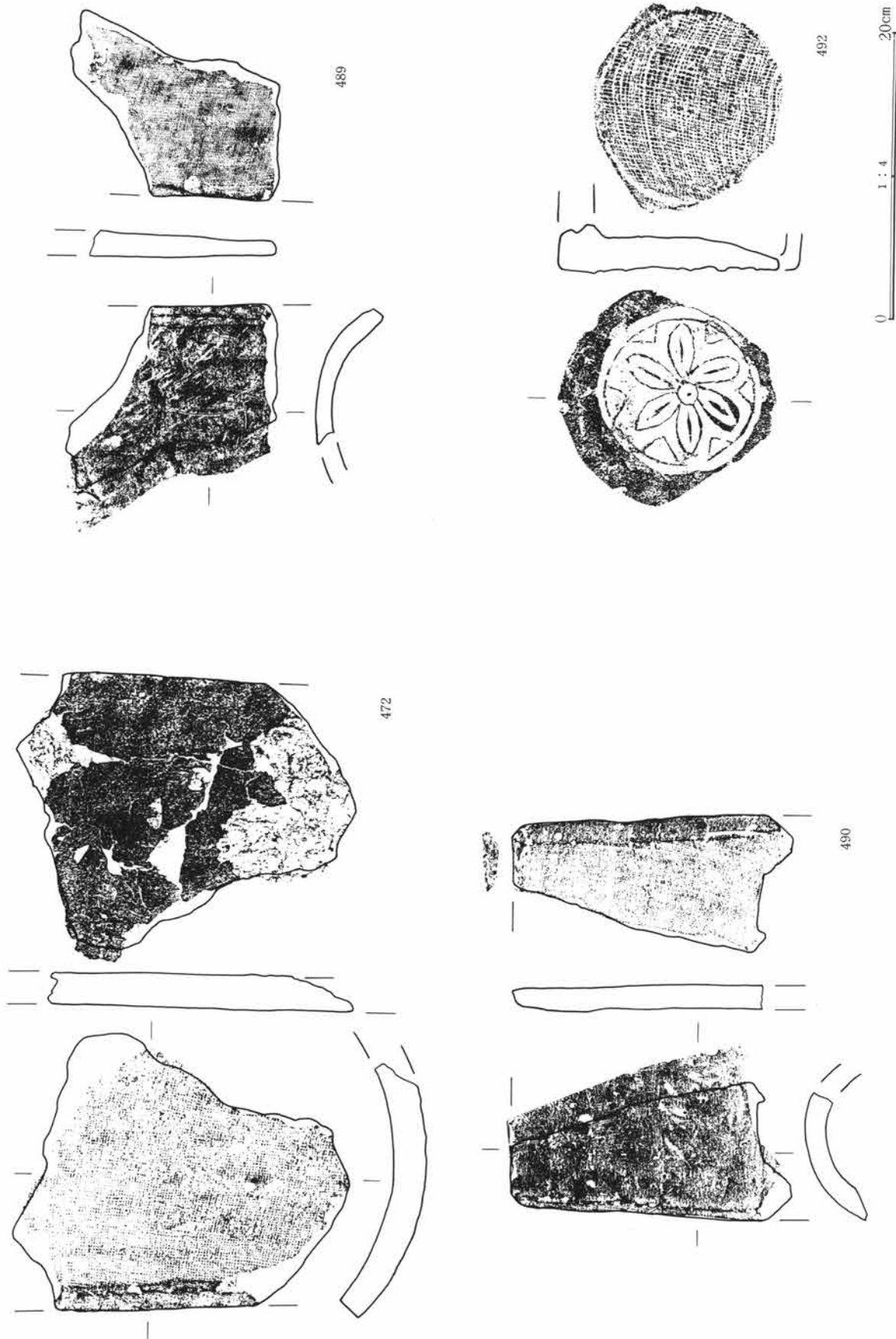


図48 V区1面 6号溝出土遺物(3)

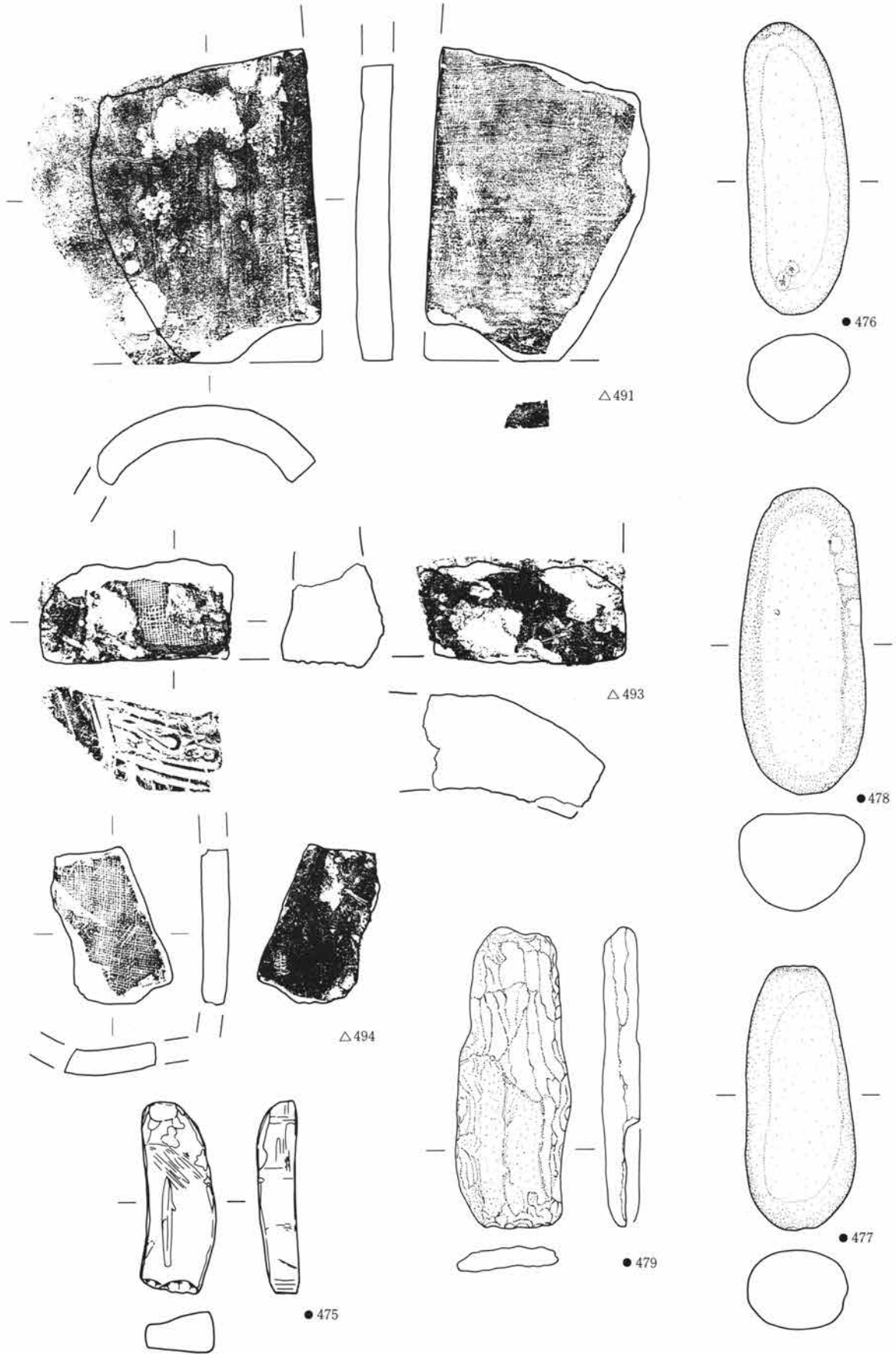


図49 V区1面 6号溝出土遺物(4)

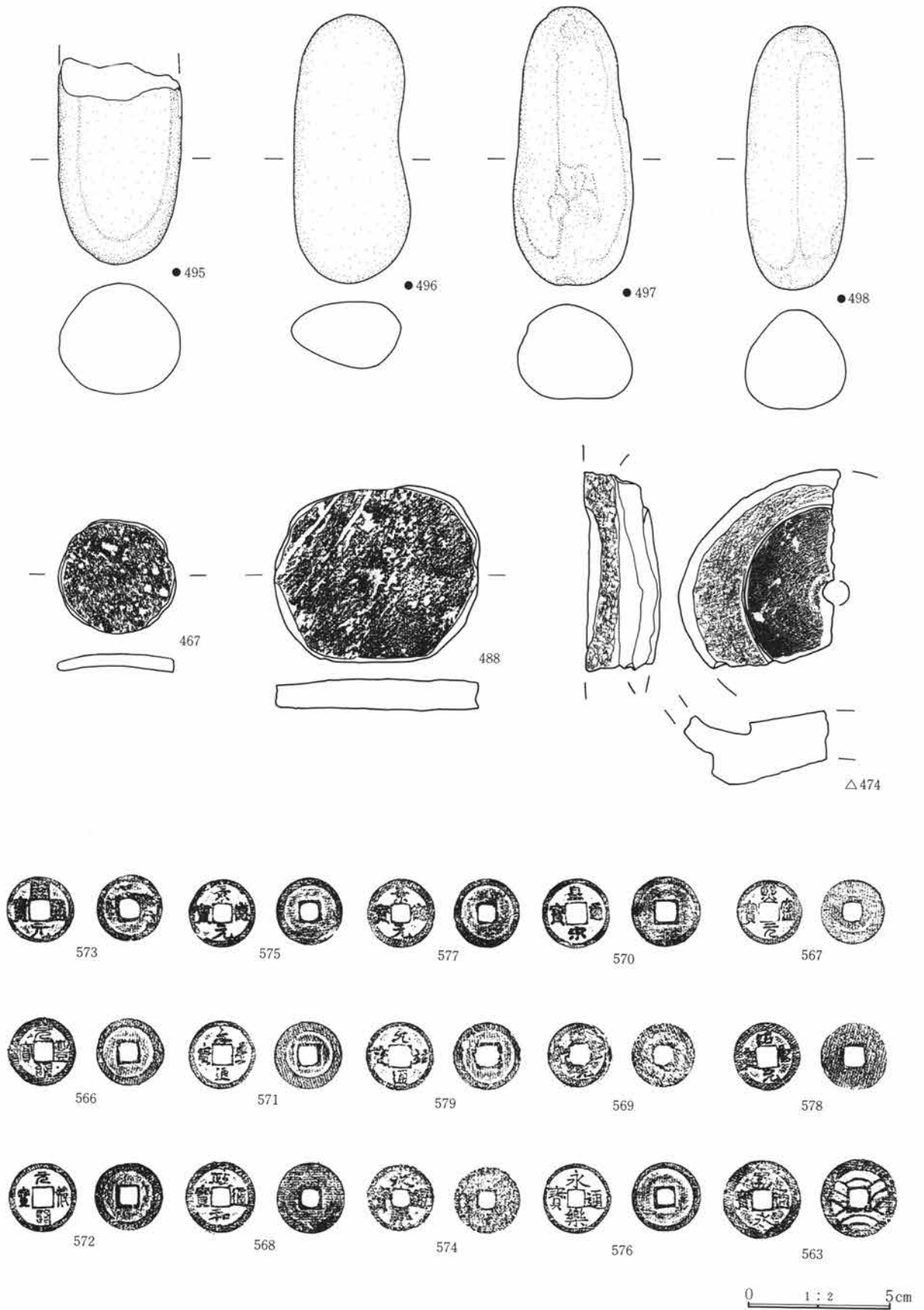
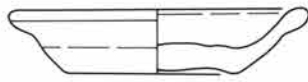


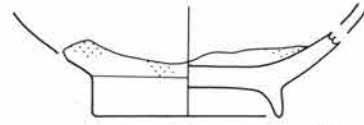
図50 V区1面 6号溝出土遺物(5)



▲393



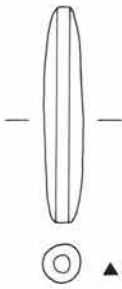
3号井戸



●394



4号井戸



▲396



▲397



▲398

グリッド

図51 V区1面 3・4号井戸、グリッド出土遺物

第2節 2面の調査

1. 概要

I・IV・V区で、As-B層下から FPF-1 直上までの層中より該期の遺構を検出し、それらに伴う遺物の出土をみた。検出された遺構は主に溝であり、IV区南端部では住居跡、土坑、溝を検出した。

2面の示標テフラである As-B は、一部で純層堆積が認められるものの、調査区によってはその残存状態に差異がみられ、遺構面として確認できたのは前述した調査区のみである。

I区では上面での河川の流水作用の影響によって、既に As-B は流亡し、砂層を伴う褐色土によって埋没していた。最下位の砂層を除去した面は、FPF-1 を切り込んだ旧河道面であり、大・小の礫が多量に

覆っていたこと等から、FPF-1 堆積以降も、河道による浸食作用が盛んであったものと思われる。したがって本調査区から検出された3条の溝は、人為的に作られた溝ではなく、すべて河道内に形成された自然流路と考えられる。

IV区は北半部と南端部の一部で、比較的 As-B の堆積状態が良好であったが、北半部では広範囲な堆積は認められず、南半部ともに該期の遺構の検出はみられなかった。しかしながら、IV区、北半部の R-50 グリッド内と台地部を削り込み走向する旧河道面である U-49 グリッド内の褐色砂礫層中より、八稜鏡がそれぞれ1点ずつ出土した。R-50 グリッド内から出土した八稜鏡は、一部が欠損しているが、U-49 グリッド内から出土した八稜鏡は完形の状態で見出された。IV区北半部では2面に相当する溝等は検出されなかったが、両鏡の出土位置が、台地部の湾入部に沿っていることから、おそらく旧河道の

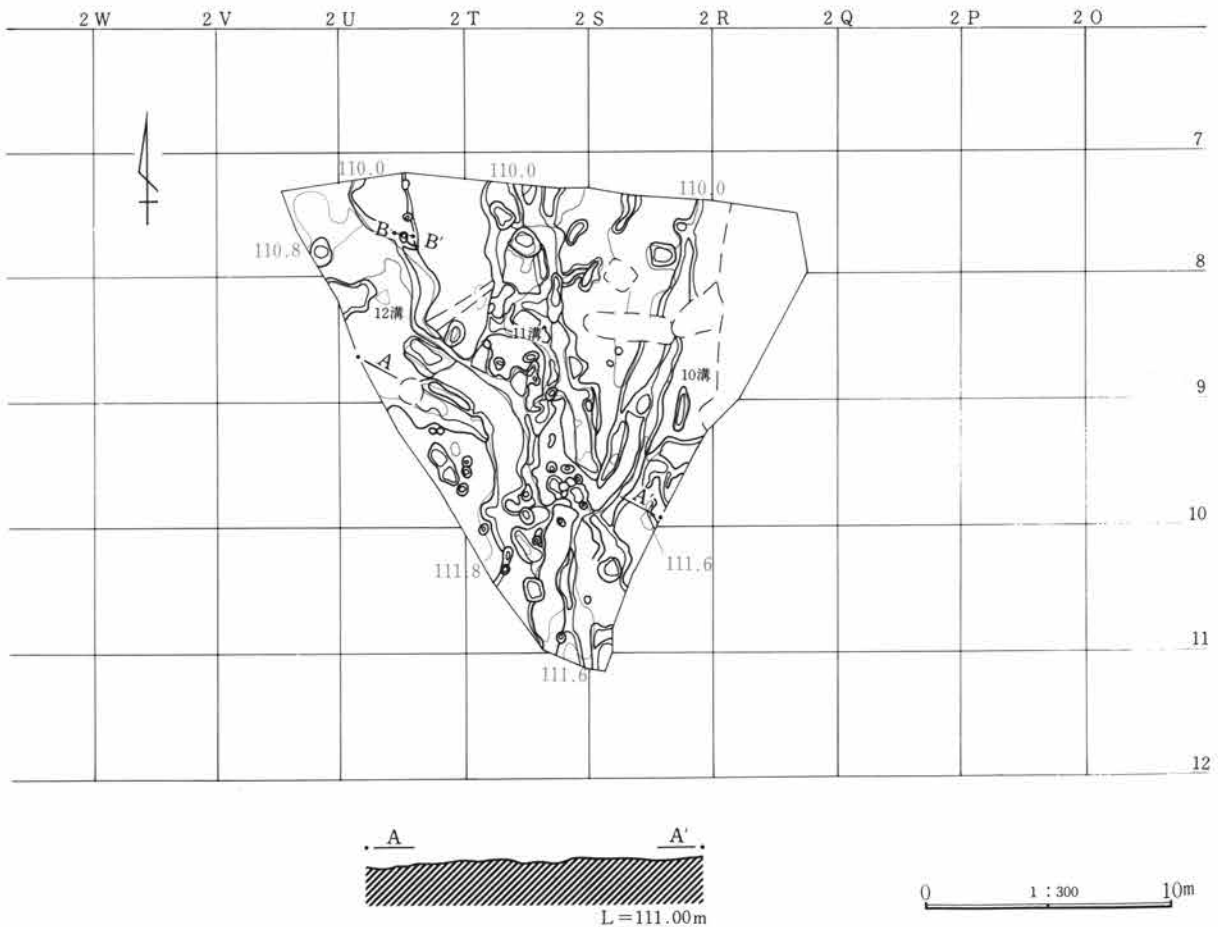


図52 I区2面 全体図



図53 調査区と推定国府域

第3章 検出された遺構と遺物

流水によって本調査区内に流入したものと推測される。また、調査区北東壁の土層観察では、明らかに褐色砂礫層が流れ込んでいるのが看取でき、また、流れ込みは断面的に認められるが、平面的に見れば、おそらく河道の流路となったであろうことが窺える。

本調査区の南半部北東側で調査した元総社明神遺跡Ⅷの27トレンチ内からは、人形が出土していることや、本遺跡周辺地域が、推定国府域の東限域に推定されていること等からみて、八稜鏡、人形ともに河道内に故意に投入された儀礼的色彩の濃いものと思われる。南端部からは、平安時代の住居跡1軒、床下土坑3基、溝2条、土坑2基を検出し、また、FPF-1上面を掘り込む溝4条を検出した。なお、Hr-SからAs-Bの堆積までの間は、砂層やシルト層を主体とした埋没土によって覆われ、大・小の礫が堆積していることから、FPF-1を掘り込む溝は、I区と同様に河道内に形成された流路と思われる。

Ⅲ区では、FPF-1を掘り込む溝と2面に相当する遺物の出土がみられたが、1面の比較的時期の新しい溝の河道面と重複していたために、1面と2面の区別を持つ遺構面としてとらえることができなかった。おそらくI区から続いていたと思われる該期の旧河道面があったと思われる。

V区でのAs-Bの残存状態は、極めて不良であり、9号溝の埋没土上層で純層堆積が認められた他に、北半部の一部でAs-Bを多量に含む暗褐色土が確認されたのみである。また、FPF-1を掘り込む溝は2条検出され、形状、埋没状況からみてIV区と同様に、河道内に形成された流路であり、人為的、意図的に作られた溝ではないと考えられる。

2. I区の溝

10号溝 図52・54・63 表 P268 写図58

位置 2Q-7・8、2R-7・10グリッド

重複 11・12号溝に先行する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長14.87m 幅0.60m~1.60m

深さ0.01m~0.23m

形状 (傾斜 北端111.06m 南端110.63m)

底面全体に小礫を含む凹凸が認められる。また、底面幅は不規則で、流路は河道内で細かく蛇行する。

埋没土 灰褐色砂層・暗灰色砂層・黒褐色砂礫層・灰褐色シルト層・灰褐色砂礫層・茶褐色砂礫層・暗褐色砂礫層により埋没する。

出土遺物 石器の剝片、磨石

調査所見 現在の牛池川は、調査区の南東壁際を南下しており、2Rライン以東の削平は、比較的新しい時期の河道によって削平されたものと思われる。よって本溝の2Rライン以東において、該期の遺構、遺物は確認されていない。形状、埋没土、出土遺物等からみて、流水作用によって形成された河道面と思われる。また、11・12号溝との時期差は、先行、後出は認められるものの、ほぼ同時期と思われる、一連の流れの中の重複にしか過ぎないと考えられる。

出土遺物は、溝に堆積した砂層・砂礫層の埋没土中からのものと、溝底面の凹面からの出土が多い。

11号溝 図52・54・63 表 P249・268 写図59

位置 2R-8・9、2S-7~11グリッド

重複 10号溝に後出し、12号溝に先行する。

走向 南北方向

規模 調査長18.00m 幅0.50m~1.20m

深さ0.01m~0.23m

形状 (傾斜 北端111.04m 南端110.80m)

底面全体に小礫を含む凹凸が認められる。また、底面幅は不規則であり、流路は河道内で細かく蛇行する。

埋没土 灰褐色砂層・暗灰色砂層・黒褐色砂礫層・灰褐色シルト層・灰褐色砂礫層・茶褐色砂礫層・暗褐色砂礫層により埋没する。

出土遺物 須恵器坏・甕・短頸壺・紡錘車、灰釉陶器碗、羽釜・土釜、管玉

調査所見 10・12号溝とほぼ同時期の河道面と思われる、溝の底面には大・小の凹凸と礫が多数認められる。また、南北方向の走向を示すこと等からみて、

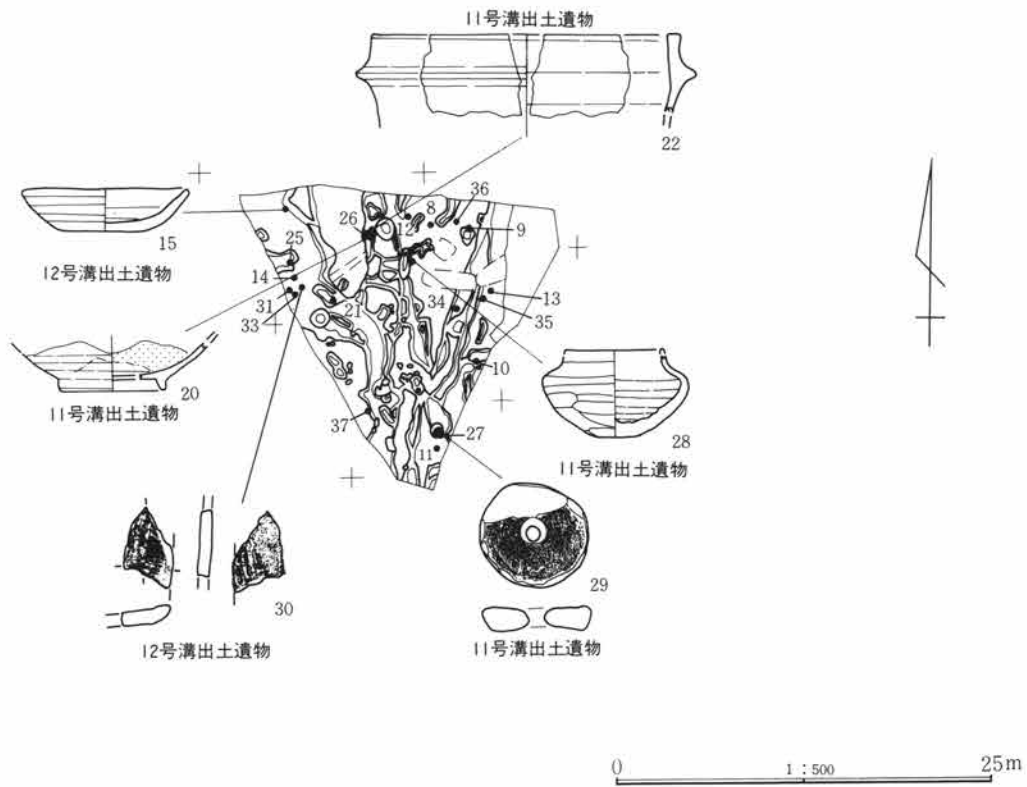


図54 I区2面の主な遺物分布

3溝の中でも、本流を成していたものと考えられる。出土遺物は、溝に堆積した砂層・砂礫層の埋没土中からのものと、溝底面の凹面からの出土が多い。このことからみて、出土した遺物は、本遺跡よりも上流部から流入されたものであり、当然出土遺物と時期を同じくする該期の遺跡の存在が推測される。

12号溝 図52・54・64 表 P249・250・269 写図59・60
位置 2S-8~10、2T-7~9、2U-7~8 グリッド
重複 10・11号溝に後出する。
走向 北西—南東方向
規模 調査長14.90m 幅0.85m~3.67m
 深さ0.09m~0.35m
形状 (傾斜 北端110.80m 南端110.76m)
 底面全体に小礫を含む凹凸が認められる。また、底面幅は不規則である。

埋没土 灰褐色砂層・暗灰色砂層・黒褐色砂礫層・灰褐色シルト層・灰褐色砂礫層・茶褐色砂礫層・暗褐色砂礫層により埋没する。

出土遺物 土師質土器小皿、須恵器坏、土師器甕、灰釉陶器碗、平瓦、打製石斧・多孔石

調査所見 溝の形状については、溝の延長部分が調査区外に延びるため、不明な部分が多い。また、11号溝の流路を削り、合流して南下している様子が、2S-8~10グリッドの接続部分で看取することができる。形状、埋没土、出土遺物からみて、10・11号溝と同様に流水作用によって形成された河道面と思われる。出土した遺物は、10・11号溝と同様に上流部より流入されたものであり、溝に堆積した砂層・砂礫層の埋没土中からのものと、溝底面の凹面からの出土が多く、時期に幅のある遺物が土器片を含めれば多数出土している。

3. IV区の1号住居

図55～60 表 P241 写図14-1～3、15-1、60

本河川改修関連の路線内で検出された唯一の住居跡であり、牛池河道内に営まれた平安時代の住居である。本住居は、FA泥流（FPF-1）を掘り込む旧河道堆積物である砂質シルト及び砂礫層を掘り込み作られている。北西隅部が攪乱を受けているため全掘はできなかった。

位置 N-57・58グリッド

方位 主軸が北方向に20°振れる。

規模 東西3.5m×南北(3.7)m やや南北方向に長い横長長方形を呈すると思われる。

重複 東壁がカマド寄り部分で土器片と骨片を含む2号土坑により削り込まれている。

壁高 東壁部で0.6m～0.7m前後の立ち上がりが確認できたが、南壁及び西壁は殆ど削平されていた。

貯蔵穴 なし。 **柱穴** なし。 **周溝** なし。

床面 住居中央部からカマド方向にかけて、浅黄色の粘土塊と暗褐色土及び黄褐色土塊をつき固め、鉄分沈着の見られる貼床を検出した。また、床面直上には灰層が堆積し、4cm前後の厚みを確認した。

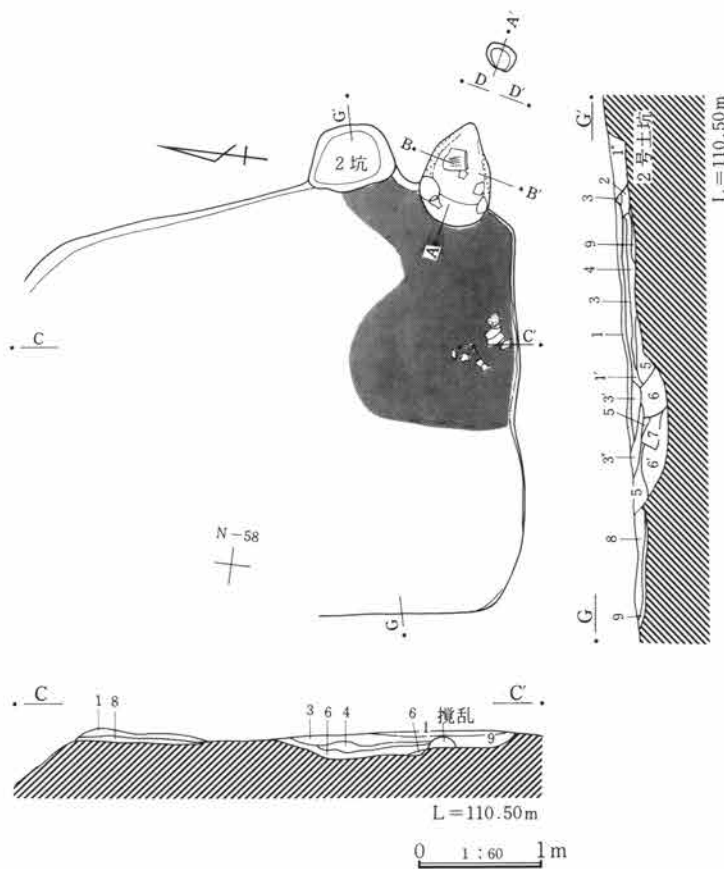
掘形 全体的に平坦である。住居中央南寄りと南西隅部に、径1m程の床下土坑が3基検出された。2号床下土坑には、壁面に浅黄色の粘土を1～2cmの厚みで全面に張り込んでいる。

遺物 南壁中央部壁寄りに、鉢形土器出土。カマド内より布目の平瓦出土。用途としては、天井部の補強材に使用されたものと考えられる。

カマドの位置 東壁南東隅に設置され斜方向に延びる。

規模 焚口部幅 0.45m 燃烧部奥行き0.50m
幅0.40m 煙道部長0.55m 幅0.21m

隅部に作られたカマドであり燃烧部は壁外に位置し、



IV区2面南端部 1号住居土層断面

1	灰黄褐色土	細砂質。鉄分沈着。
1'	灰黄褐色土	1と同様であるが、炭、灰を含む。
1''	灰黄褐色土	1と同様であるが、僅かに鉄分沈着が見られ、砂粒をやや多く含む。
2	黒色土	炭、灰を多量に含む。しまりが無い。
3	にぶい黄褐色土	浅黄色粘土小塊、黒色土、黄褐色土が互層堆積。しまりがある。貼り床。
3'	にぶい黄褐色土	3と同様であるが、FP粒を含む。鉄分沈着。
3''	にぶい黄褐色土	3'と同様であるが、褐灰色土を含む。
4	にぶい黄褐色土	浅黄色粘土小塊、細砂粒を含む。斑鉄。
5	黒褐色土	灰、炭粒を含む。微砂質。やや粘性あり。
6	灰黄褐色土	褐灰色土小塊、小砂礫混じり。しまりが無い。
6'	灰黄褐色土	6と同様であるが、細砂を互層堆積する。
7	にぶい黄褐色土	褐灰色土、黒褐色土、細砂混土。
8	灰黄褐色土	細砂を僅かに含む。斑鉄。
9	オリーブ褐色土	細砂を主体にする。斑鉄。

図55 IV区2面南端部 1号住居跡平面図

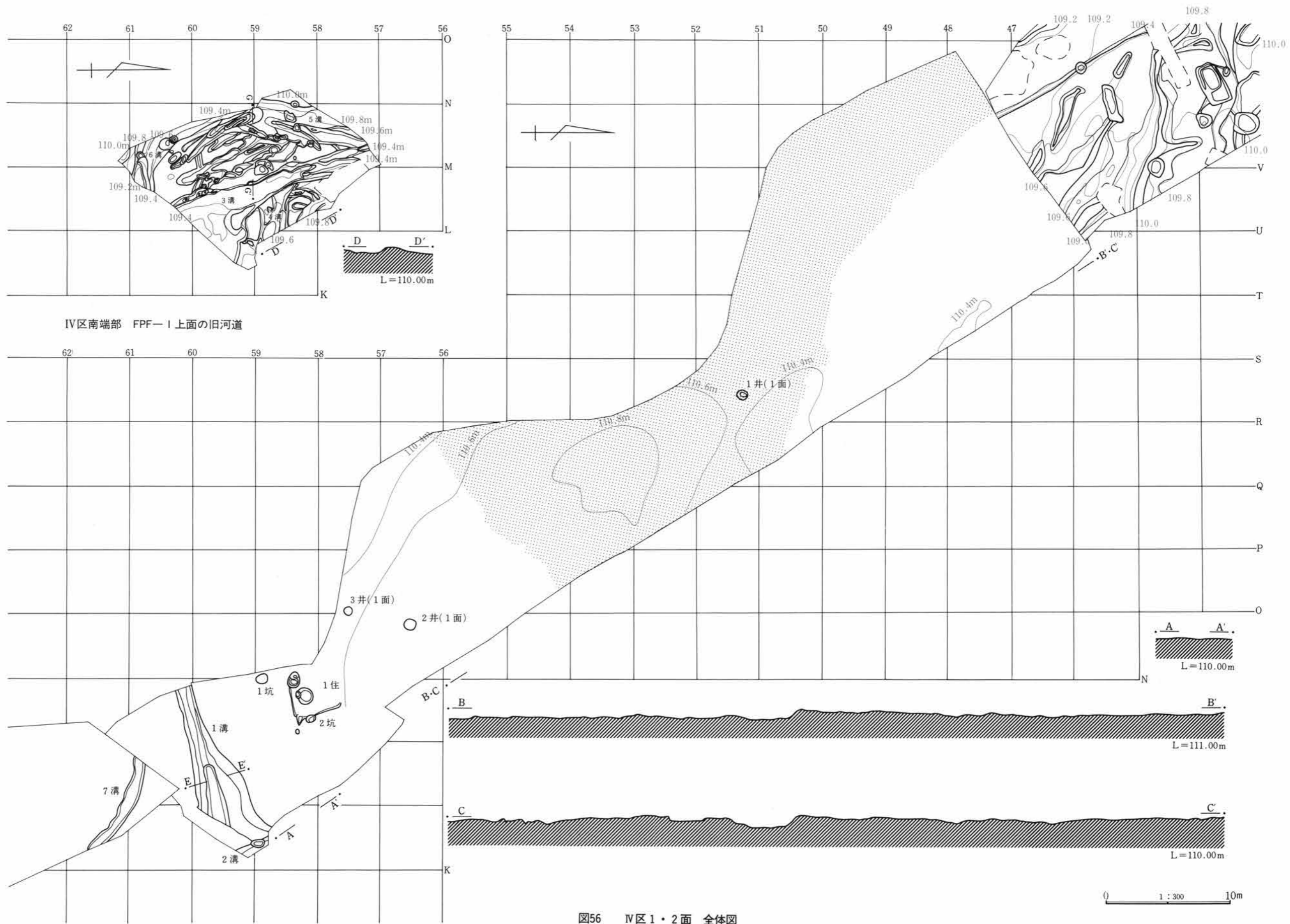


図56 IV区1・2面 全体図

浅黄色の粘土を利用し構築されている。壁面は煉瓦状に焼土化している。火床面は床面より僅かに窪み、緩やかに下がりながら煙道部に移行する。灰の堆積は厚く3~4cmを測る。天井部が崩壊せずに残る煙道部は、側壁から天井部にかけて煉瓦状に焼土化し、煙道部で垂直に立ち上がる。煙道部壁面や煙り出し部壁面等には、平板状の面が残り、板状のものが構築の際に当てられていたと考えられる。(齊藤)

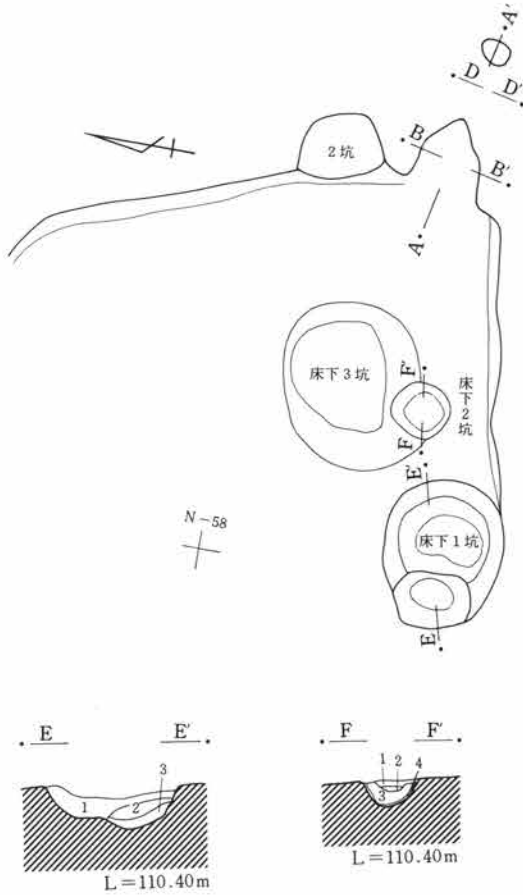


図57 IV区2面南端部 1号住居跡掘形平面図

IV区2面南端部 床下土坑1土層断面

- 1 暗褐色土 極細鉄分、小礫含む。粘性あり。
- 2 鈍い黄褐色土 極細鉄分、小礫を含み、黒色土を帯状に挟む。
- 3 黒褐色土 極細鉄分、黒色土を混入。

IV区2面南端部 床下土坑2土層断面

- 1 暗褐色土 鉄分沈着。炭化粒、浅黄色粘土を含む。しまり強い。貼床。
- 2 鈍い黄褐色土 浅黄色粘質土塊を主体に炭化粒、斑鉄を少量含む。粘性あり。
- 3 暗褐色土 小礫わずかに含み、鉄分沈着。粘性あり。
- 4 浅黄色土 粘土を底面全体に貼る。

IV区2面南端部 1号住カマド土層断面

- 1 灰黄褐色細砂層 サクサクしてしまりなし。
- 2 黄褐色土 黄色粘質土小塊を多量に含み、炭化粒、焼土粒、細砂粒わずかに含む。
- 3 黒褐色土 灰層。焼土粒を含み、底面との境に浅黄色の粘土を貼る。
- 3' 黒褐色土 灰、炭化粒を多量に含み、焼土粒、黄色粒混入。しまり弱い。
- 4 鈍い黄褐色シルト質土
- 4' 鈍い黄褐色シルト質土 焼土粒わずかに含む。
- 5 灰黄褐色土 黄色粒、砂礫混じり。しまり弱い。
- 6 暗オリーブ褐色土 黄色粘質土小塊、炭化粒、焼土塊を少量含む。
- 7 暗灰色土 黄色粘質土小塊を含む。炭化粒わずかに含む。やや粘性あり。
- 7' 暗灰色土 黄色粘質土小塊、炭化粒、焼土を含む。
- 8 暗褐色土 黄色粘質土小塊をわずかに含む。
- 8' 暗褐色土 黄色粘質土小塊、炭化粒、灰を少量含む。
- 9 暗褐色土 ブドウ色の塊、炭化物、灰混じり。
- 10 黒褐色土 炭塊を含む。
- 11 褐色土 焼土粒、炭化粒、黄色粒、小砂利をわずかに含む。
- 12 オリーブ褐色土 黄色細砂、炭化粒を含む。
- 13 黒褐色土 黄色細砂粒、炭化粒、褐色土、焼土をわずかに含む。
- 14 鈍い褐色シルト質土 やや焼土化している。
- 15 灰褐色粘質土
- 16 鈍い黄褐色シルト質土 軽石粒、斑鉄をわずかに含む。

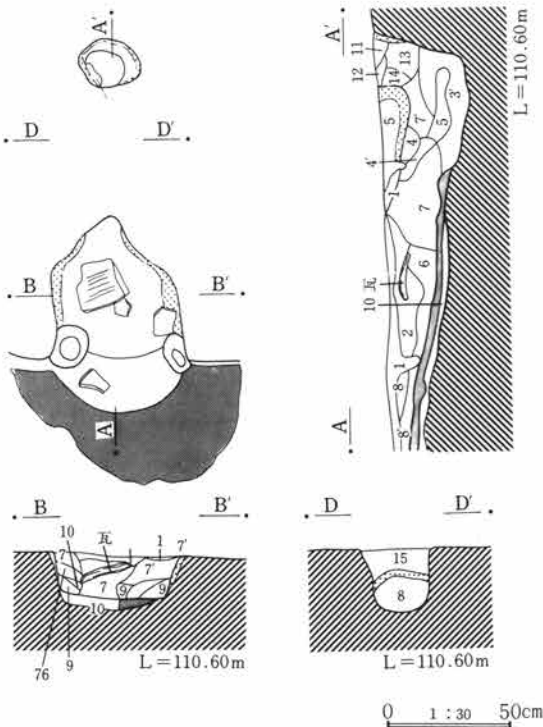


図58 IV区2面南端部 1号住居跡カマド平面図

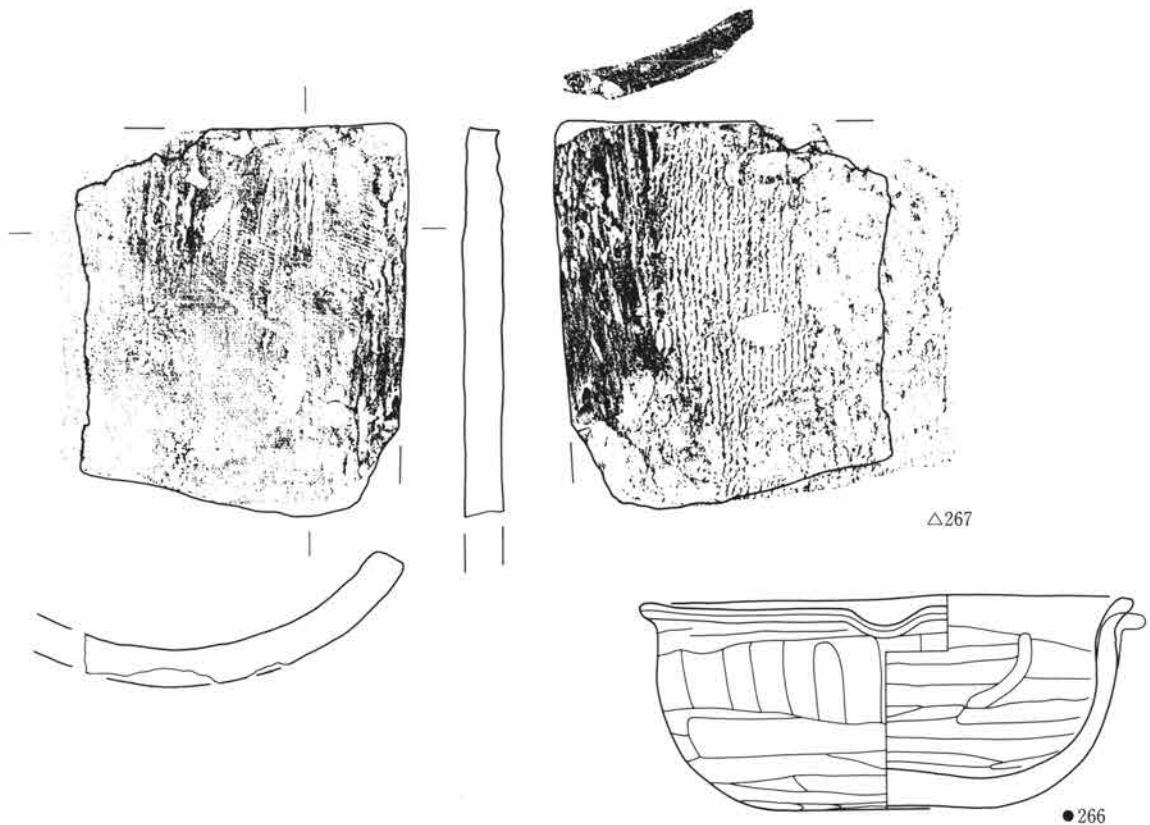


図59 IV区2面南端部 1号住居跡出土遺物

4. IV区の溝・土坑

1号溝 図56・60・61・65 表 P250 写真15-3・4、60

位置 K-58・59、L・M-59・60グリッド

重複 なし。

走向 南南西-東北東方向

規模 調査長11.4m 幅1.20m~3.90m

深さ0.36m~0.52m

形状 (傾斜 北東端 109.50m 南西端109.68m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 K-58・59、L-59グリッドの底面は、As-B及びB灰が純層堆積し、M-58・59グリッドにかけては、1号住居跡の上層埋没土である灰黄褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器甕片・坏片・椀片、須恵器坏・蓋・

椀、土師質土器小皿、土釜、羽釜、灰釉陶器片、瓦、軟質陶器、紡錘車・獣骨

調査所見 K-58・59、L-59グリッド内で沈下による落ち込みが認められ、落ち込み内にAs-Bが層厚に堆積していた。M-59・60グリッドに続く溝とは、埋没土からみて時期を異にするものと思われ、1条の溝に2条が重複して検出された。しかしながら、この重複は、地盤が東方向にかけて沈下、傾斜したことによるもので、下位にある溝が本来的であった溝であり、1号住居跡とほぼ時期を同じくするものであったと考えられる。下位の溝は、時期的にはAs-B堆積以前に既に埋没していたものと思われる。また、溝の底面には砂層を挟んでいることからみて、As-B堆積までは、溝としての機能を有し、それに伴って埋没土及び溝の底面部分より該期の遺物が出土している。

2号溝 図56・61 写図15-5、77

位置 K-58・59グリッド

重複 1号溝に接続する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長2.90m 幅1.98m
深さ0.96m形状 (傾斜 北東端109.67m 南東端109.69m)
底面最深部は丸みを帯び、法面の立ち上がりは急傾斜を呈する。

埋没土 暗褐色粘質土が底面に堆積し、直上にAs-Bが純層堆積する。

出土遺物 須恵器甕・坏・椀

調査所見 底面とAs-Bの純層堆積層の間に間層を挟むことから、As-B降下以前には既に自然埋没があり、溝としての機能を消失していたと思われる。

3号溝 図56・61 表 P254 写図61・62・64・67

位置 L-57~60、M-57・58グリッド

重複 4・5号溝に後出する。

走向 北-南東方向

規模 調査長15.53m 幅0.53m~6.70m
深さ0.39m~1.10m形状 (傾斜 北西端109.39m 南東端109.35m)
底面幅は不規則であり、法面は緩やかに立ち上がる。
埋没土 底面に黄褐色粗砂層・褐灰色砂礫層が自然堆積する。

出土遺物 須恵器坏・高台・皿、平瓦

調査所見 1号住居跡の遺構面を覆う灰黄褐色土を除去した2面の下位に相当する遺構面である。形状、埋没土及びFPF-1を掘り込んでいる状況からみて、流水作用によって形成された河道内の流路と思われ、調査区全域が流路面であったと考えられる。褐灰色砂礫層からは、上流部より流入されたと思われる多量の遺物が出土した。

4号溝 図56 写図62・64

位置 K-58、L-58グリッド

重複 3号溝に先行する。

走向 東西方向

規模 調査長3.15m 幅2.10m~3.25m
深さ0.25m~0.55m

形状 (傾斜 西端109.60m 東端109.47m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。
流水の影響による凹凸が認められる。

埋没土 底面に黄褐色粗砂層・褐灰色砂礫層が自然埋没する。

出土遺物 平瓦、須恵器坏・椀

調査所見 形状、埋没土及びFPF-1を掘り込んでいる状況からみて、3号溝と同様に流水作用によって形成された河道内の流路と思われる。埋没土である褐灰色砂礫層からは、上流部より流入されたと思われる多量の遺物が出土した。

5号溝 図56・61 表 P254・255 写図61・63・64・78

位置 M-57~59、N-58グリッド

重複 3号溝に先行する。

走向 ほぼ南北方向

規模 調査長9.35m 幅1.70m~2.35m
深さ0.12m~0.35m

形状 (傾斜 北端109.90m 南端109.58m)

底面はほぼ平坦であり、流水の影響による凹凸が認められる。

埋没土 底面に黄褐色粗砂層・褐灰色砂礫層が自然埋没する。

出土遺物 須恵器坏・蓋・甕、平瓦

調査所見 形状、埋没土及びFPF-1を掘り込んでいる状況からみて、3・4号溝と同様に流水作用によって形成された河道内の流路と思われる。埋没土である褐灰色砂礫層からは、上流部より流入されたと思われる多量の遺物が出土した。

6号溝 図56

位置 L-60・M-59・60グリッド

重複 3号溝に先行する。

走向 北-東方向

規模 調査長7.50m 幅2.35m

第3章 検出された遺構と遺物

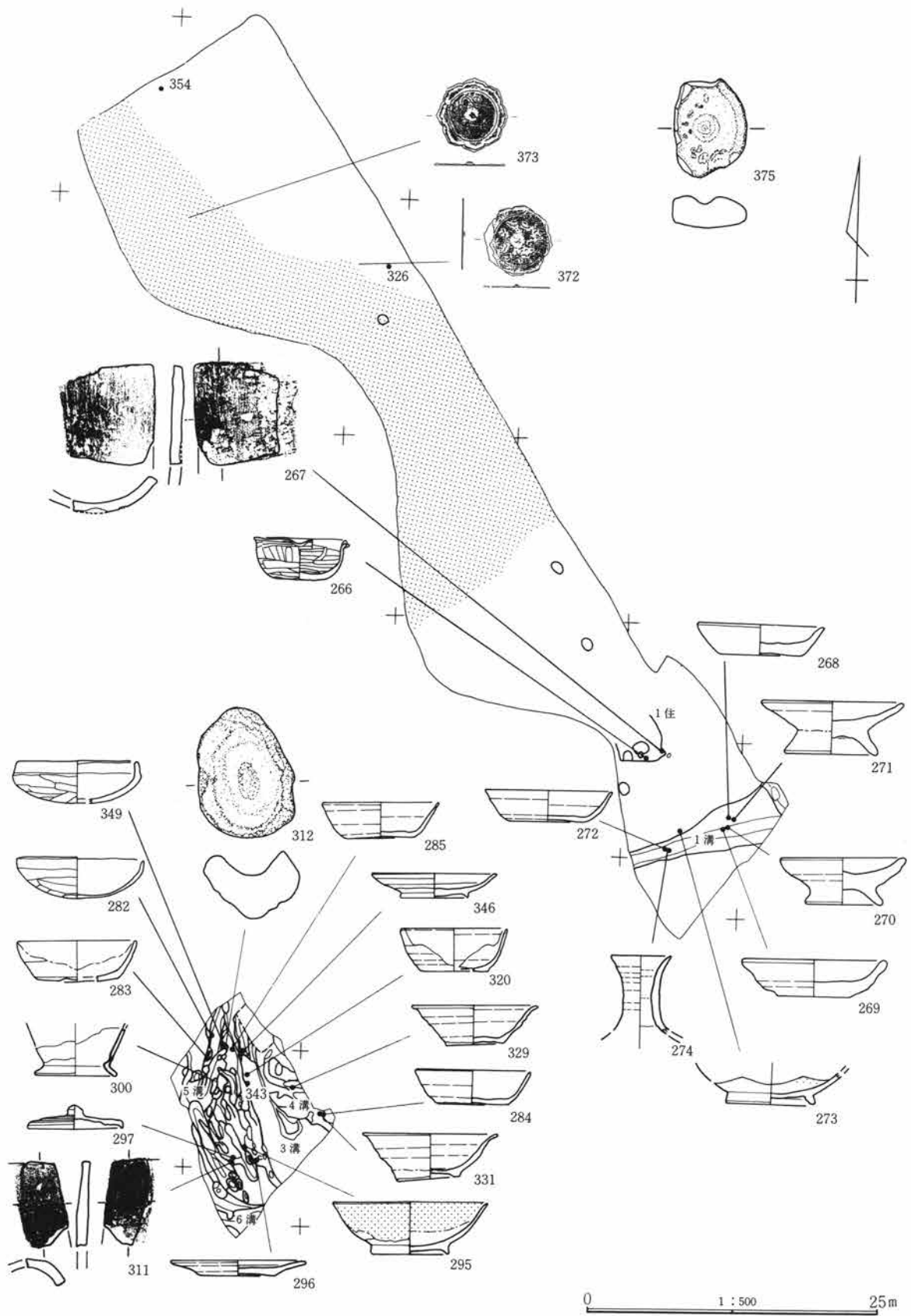


図60 IV区1・2面の主な遺物分布

深さ0.15m～0.86m

形状 (傾斜 北端109.40m 南端109.20m)

底面はほぼ平坦であり、断面形は逆台形を呈する。

埋没土 底面に褐灰色砂礫層が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 形状、埋没土及びFPF-1を掘り込んでいる状況からみて、3・4・5号溝と同様に、流水作用によって形成された旧河道内の流路と思われる。また、本溝の北西端の延長部は、調査範囲外であったため確認することができなかったが、湾曲した走向から推測して、おそらく5号溝とは同一の流路を成すものであった可能性が高く、東端の延長部は、V区2面の7号溝へと連続していたものと考えられる。

以上の様に、IV区南端部では4条の溝(旧河道面)を検出したが、調査区全域にわたって大・小の形状を示す凹凸が際立って重複し合っている。これらの凹凸は、河川の流水作用によってもたらされた痕跡であり、洪水的氾濫を含めた水量の変化及び水流の速さの違いによって甌穴等の凹凸が形成されたものと考えられる。また、3・6号溝の様に割合と深さを持つものは、おそらく流れの本流を成していたものと推測することができ、FPF-1堆積以降も本調査区周辺が、継続して河川の流水の影響下におかれていたことが窺える。埋没土である褐灰色砂礫層中からは、上流部より流入されたと思われる多量の遺物が、流れの停滞し易い地点より目立って出土している。出土した遺物では、土師質土器小皿(カワラケ)が多く目につき、また、殆どが磨滅しているもののほぼ完形の状態で出土していること等からみて、ただ単に自然的要因による流入ばかりではなく、人為的、故意的に投入され搬入された可能性もあり、本調査区を流れる牛池川が国府域内を北西方向から南東方向に流下していたことを考慮すれば、国府及び国分二寺と牛池川が、何等かの関係があったものと推測される。

1号土坑 図56・61 写図15-2

位置 M・N-68グリッド

重複 なし。

規模 1.04m×0.70m 深さ0.14m

形状 平面形 不整形な楕円形

断面形 不整形な箱形

埋没土 シルト質・砂質の褐色・暗赤褐色土が自然堆積する。

出土遺物 瓦片

調査所見 1号住居跡に伴うものかは、機能ともに不明である。また、1号住居跡以外にも住居が存在した可能性が極めて高く、L-57グリッド内においてカマドの痕跡を窺わせる焼土が検出されている。

2号土坑 図55・58

位置 M-58グリッド

重複 1号住居に後出する。

規模 0.50m×0.70m 深さ0.10m～0.12m

形状 平面形 隅丸台形

断面形 不整形な台形状

埋没土 細砂質の灰黄褐色土により一気に埋没する。

出土遺物 土師器片、獣骨

調査所見 埋没土は1号住居跡の埋没土上層と同様のものであることからみて、时期的には1号住居の埋没後に掘削されたものと思われる。出土遺物に獣骨を含んではいるものの機能的な詳細は不明である。1号住居跡の東壁を削平している。

5. V区の溝

7号溝 図16・19・61・76 表 P255・269 写図67

位置 K・L-60・61グリッド

重複 IV区2面の6号溝と一致し、V区9号溝に先行し8号溝に後出する。

走向 西-南東方向

規模 調査長8.30m 幅0.90m～1.10m

深さ0.01m～0.09m

形状 (傾斜 南東端109.29m 南端109.21m)

第3章 検出された遺構と遺物

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。
埋没土 灰色砂・灰白色砂・小礫が層をなして多量に混入する黒褐色土により埋没する。

出土遺物 須恵器蓋、土錘、石鏃

調査所見 流水作用によって形成された河道内の流路と思われる。溝の底面は FPF-1 を削り込む F A 上面であることからみて、時期は FPF-1 堆積以降、As-B 降下以前であり 8 号溝よりも時期的には新しいと思われる。おそらく IV 区南端部の 6 号溝から続く一連の河道面を成す流路であったと推測される。

8 号溝 図16・17・19・62・76・77 表 P256 写図15-6、67・68・78・79

位置 H-66~68、I-65~67グリッド

重複 7・9号溝に先行する。

走向 (北-南東方向)

規模 調査長12.78m 幅 (2.90m)

深さ0.30m~0.60m

形状 (傾斜 北端108.20m 南東端108.11m)

底面はほぼ平坦であり、3段階に落ち込む。

埋没土 灰色砂・灰白色砂・小礫を含む黒褐色土が堆積する。

出土遺物 須恵器杯・椀・皿、土師質土器小皿、灰釉陶器椀、緑釉皿、平瓦・丸瓦、砥石、打製石斧、縄文土器片、獣骨

調査所見 溝の底面が一部 F A を残し、F A 下黒色粘質土を切っていることと埋没状況等からみて、時期は 9 号溝よりも遡ると思われる。また、溝の北西側法面立ち上がり部分は、9 号溝の立ち上がり法面と同位置である。検出された溝の遺存状態は断片的なものであったが、おそらく検出された部分は、旧河道の蛇行部分であったものと考えられる。出土遺物は、主として蛇行部分際の溝底面より、砂礫を多量に含む埋没土中から目立って出土している。

9 号溝 図16~19・62 写図15-6・7

位置 E-76、F-71~76、G-69~74、H-66~72、I-64~68、J-64~67グリッド

重複 7・8号溝に後出する。

走向 北-南東方向

規模 調査長51.40m 幅 (7.10m)

深さ0.29m~0.80m

形状 (傾斜 南東端109.40m 北端108.80m)

底面は僅かに丸みを帯び凹凸が認められる。法面は緩やかな立ち上がりを呈する。

埋没土 炭化物を含む褐灰色土・灰黄褐色砂の洪水堆積物で埋没し、その上層に As-B の純層堆積が認められる。

出土遺物 なし。

調査所見 69ラインを境にして、溝は1面の6号溝によって分断されている。溝の底面は FPF-1 と 8 号溝の埋没土である黒褐色土を切り込んでいることからみて、時期は 8 号溝よりも新しく、FPF-1 堆積以降、As-B 降下までと考えられる。また、F~I-70~77ラインにかけての部分は、形状からみて一連の流水によって形成された河道と思われるが、FPF-1 上面を溝の底面としていることから、H~J-64~69ラインにかけての部分よりも多少時期が遅くなり、おそらく時期の異なる別個の河道面であった可能性が高く、北半部の溝とは、同一性はないものと考えられる。

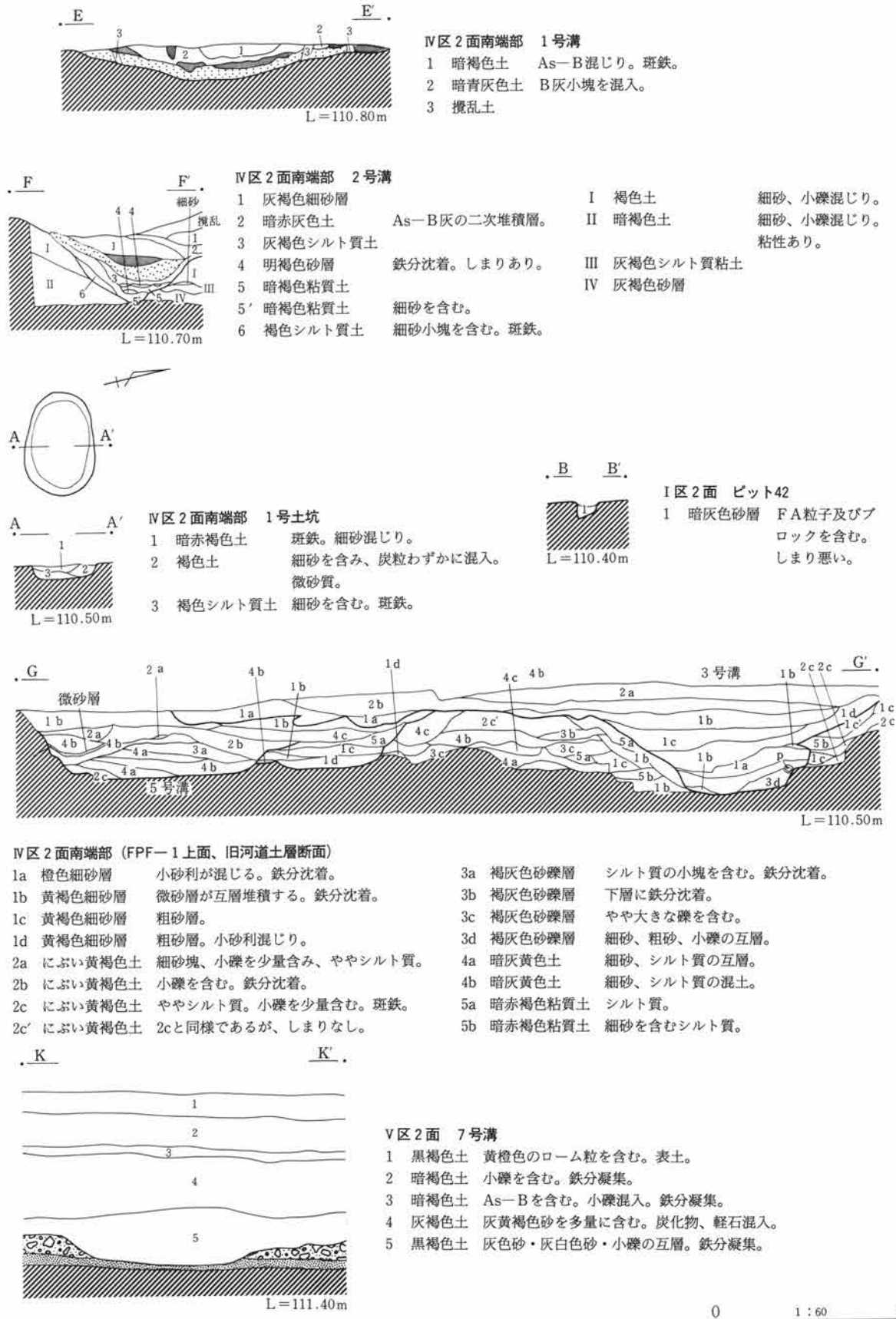
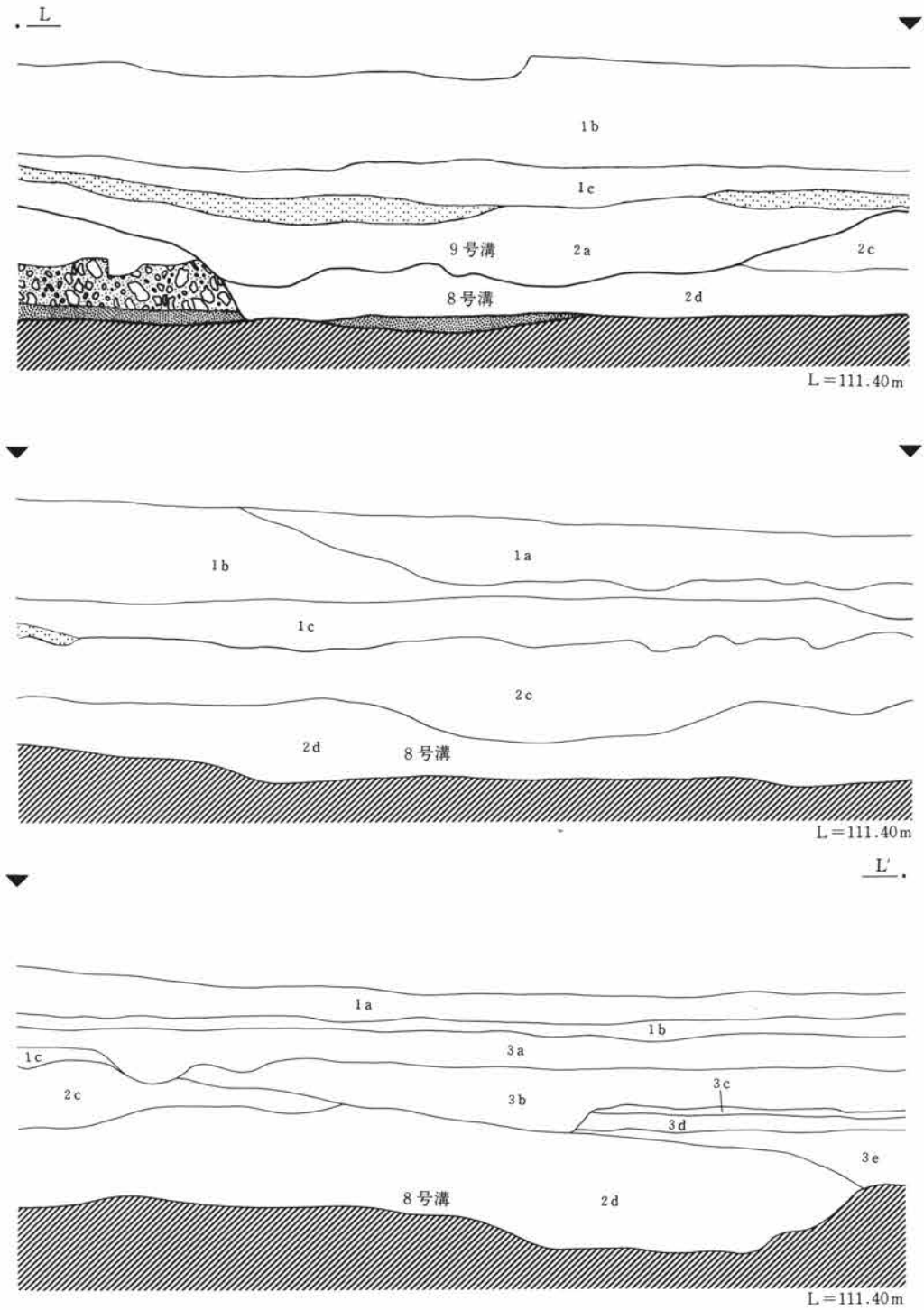


図61 IV区2面南端部 1～2号溝、1号土坑、旧河道、V区2面7号溝土層断面

第3章 検出された遺構と遺物



V区2面 8・9号溝

- | | | | | | |
|----|-------|---------------------------|----|--------|---------------------|
| 1a | 黒褐色土 | 黄橙色のローム粒を含む。植物根多く含む表土。 | 2d | 黒褐色土 | 部分的に灰オリブ色砂を多量に含む。 |
| 1b | 暗褐色土 | 小礫を含む。下層に鉄分凝集。植物根を含む表土。 | 3a | 褐灰色土 | 黄橙色ローム粒を少量含む。鉄分凝集。 |
| 1c | 褐灰色土 | As-Bを少量含む表土。斑鉄。 | 3b | 褐灰色土 | 砂粒を多く含む炭化物を含有。鉄分凝集。 |
| 2a | 褐灰色土 | 灰黄褐色砂を多量に含む。炭化物を少量含む。 | 3c | 褐灰色粘性土 | 細砂を部分的に含む。鉄分凝集。 |
| 2b | 黒褐色砂層 | 灰色・灰白色砂・小礫が互層に堆積する。しまりなし。 | 3d | 褐灰色土 | 暗灰黄色砂を部分的に含む。炭化物含有。 |
| 2c | 黒褐色土 | やや砂質。下層に灰色・灰白色砂、小礫を含む。 | 3e | 褐灰色土 | 砂粒・炭化物を含む。鉄分凝集。 |

0 1:60 2m

図62 V区2面 8・9号溝土層断面

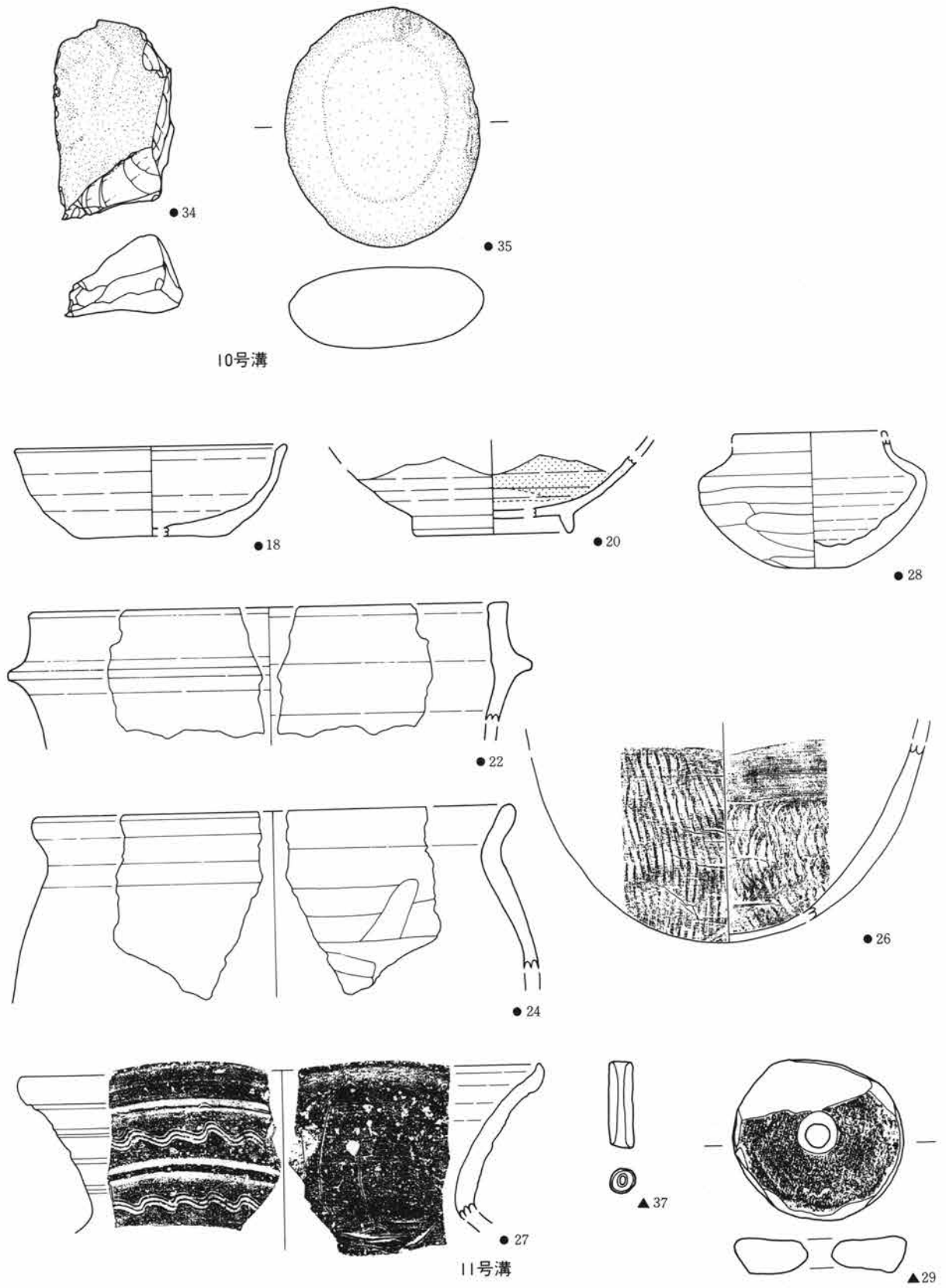


図63 I区2面 10・11号溝出土遺物

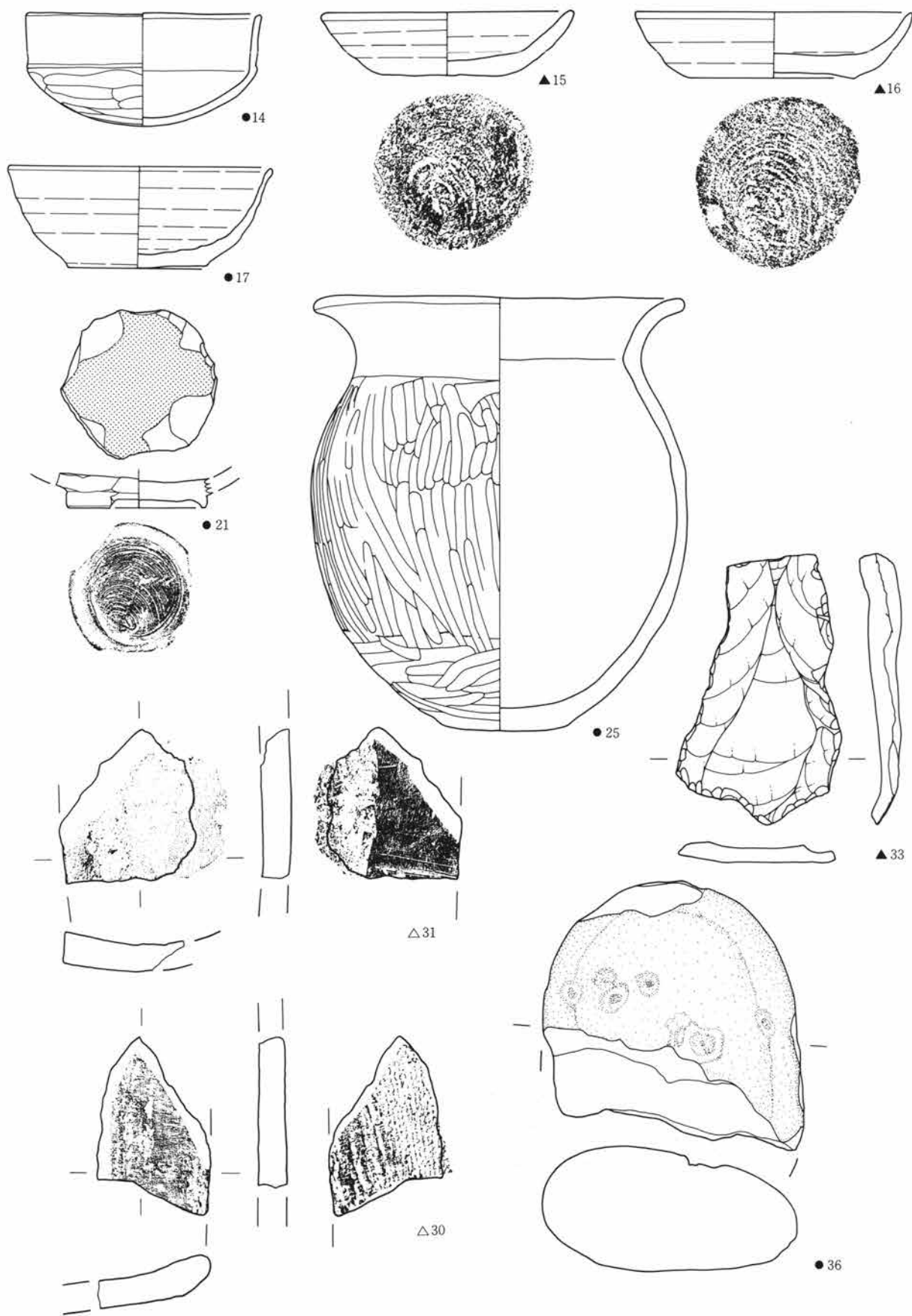


図64 I区2面 12号溝出土遺物

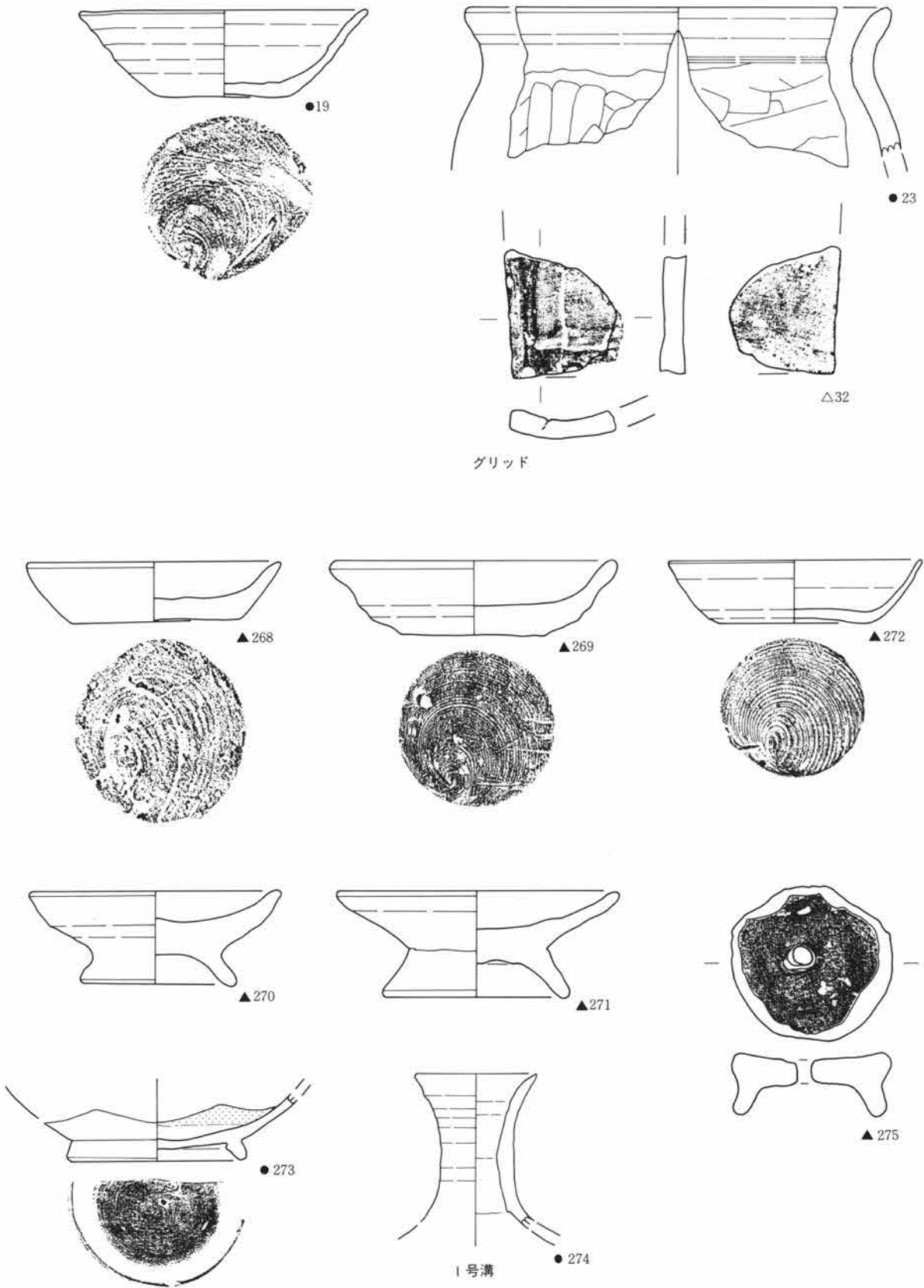


図65 I区2面 グリッド、IV区2面南端部 1号溝出土遺物

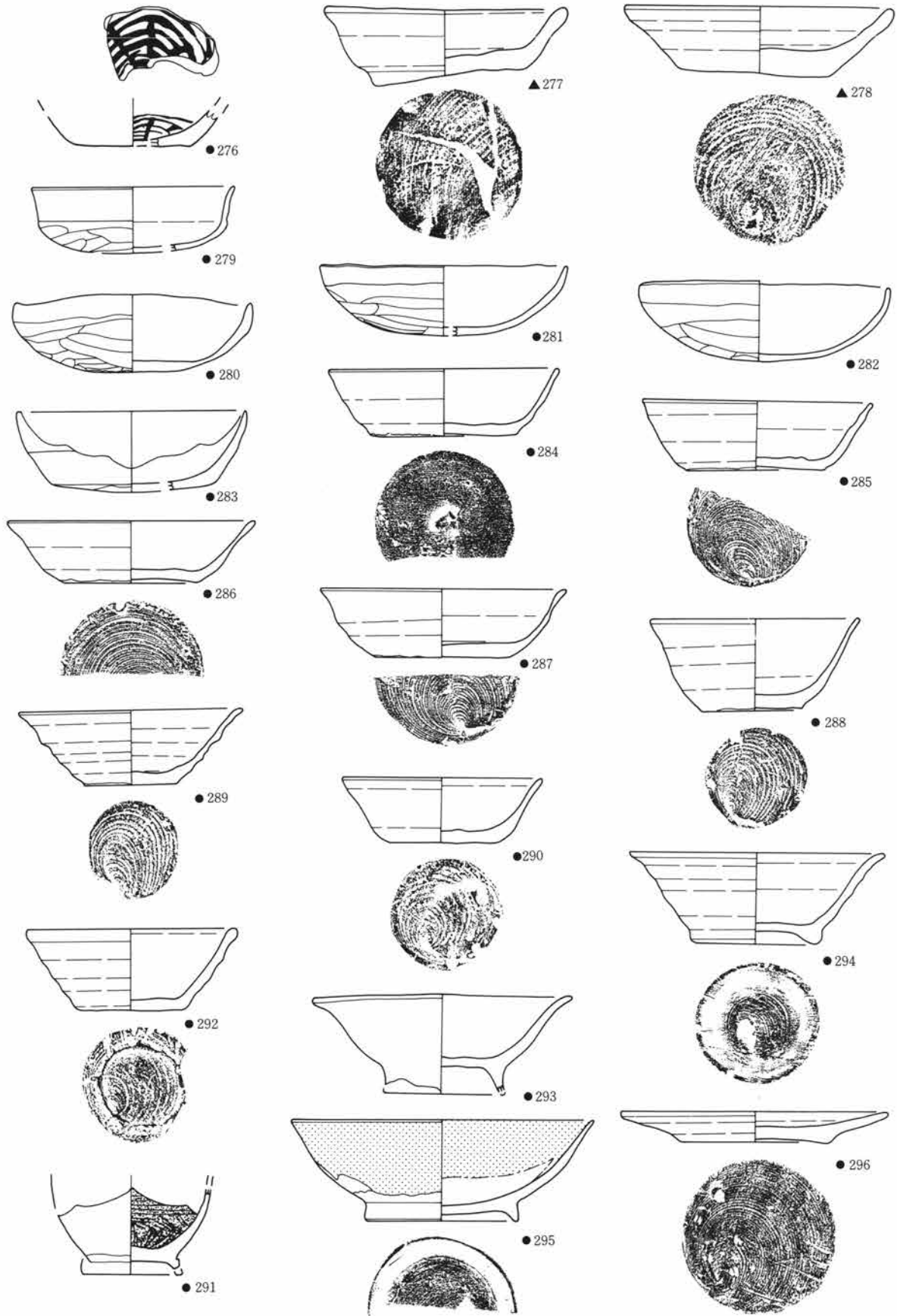


図66 IV区2面 グリッド出土遺物(1)

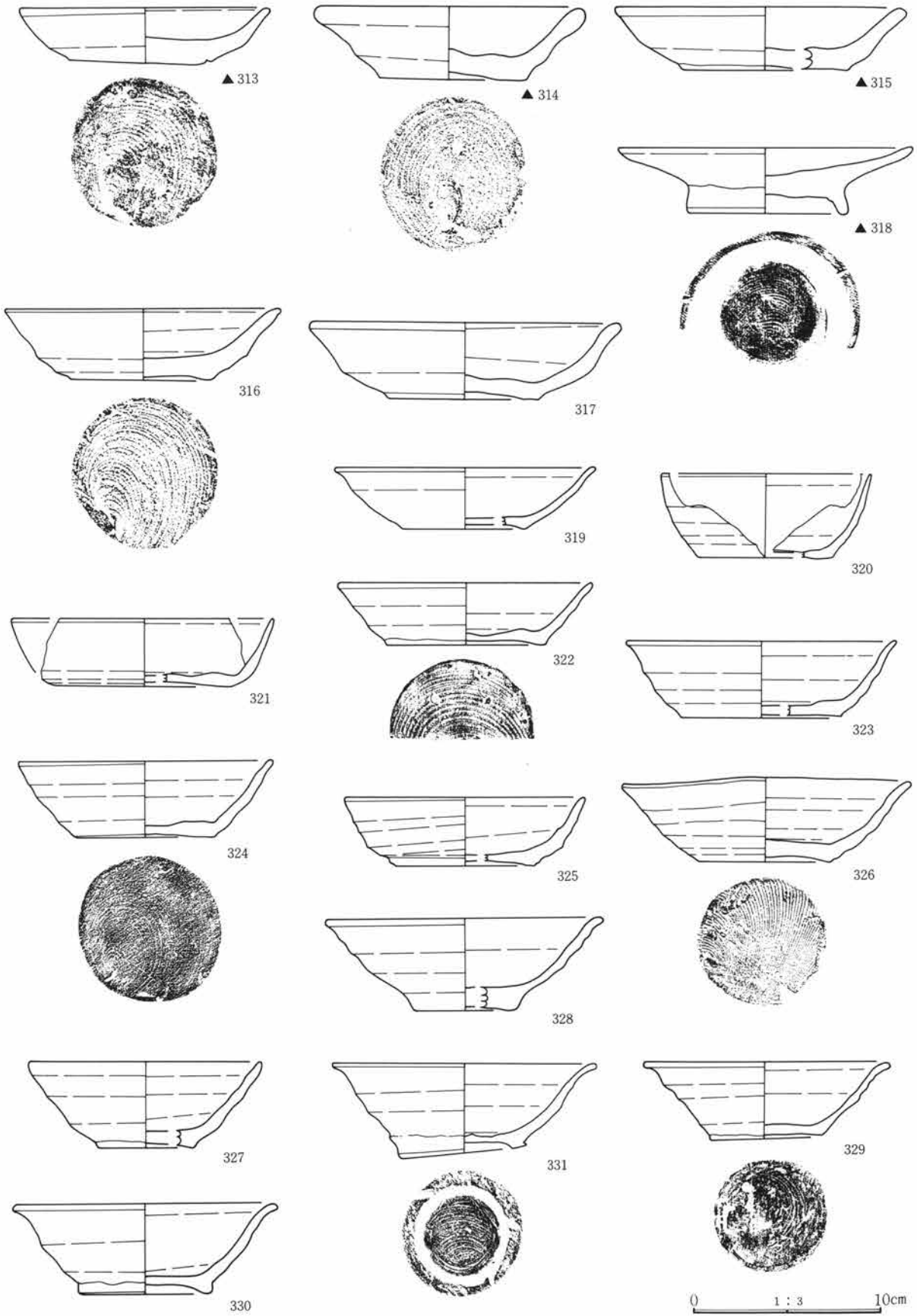


図67 IV区2面 グリッド出土遺物(2)

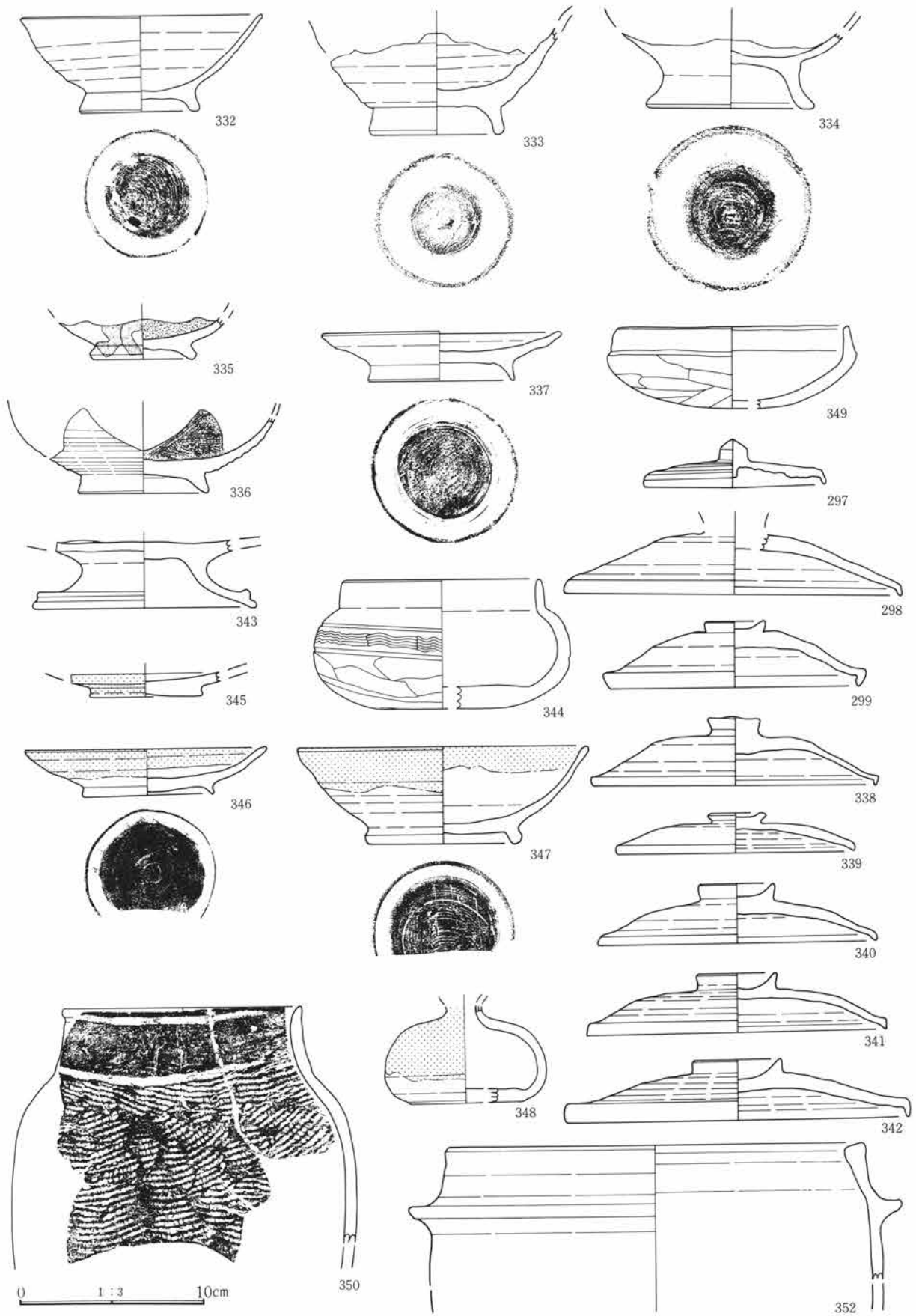


図68 IV区2面 グリッド出土遺物(3)

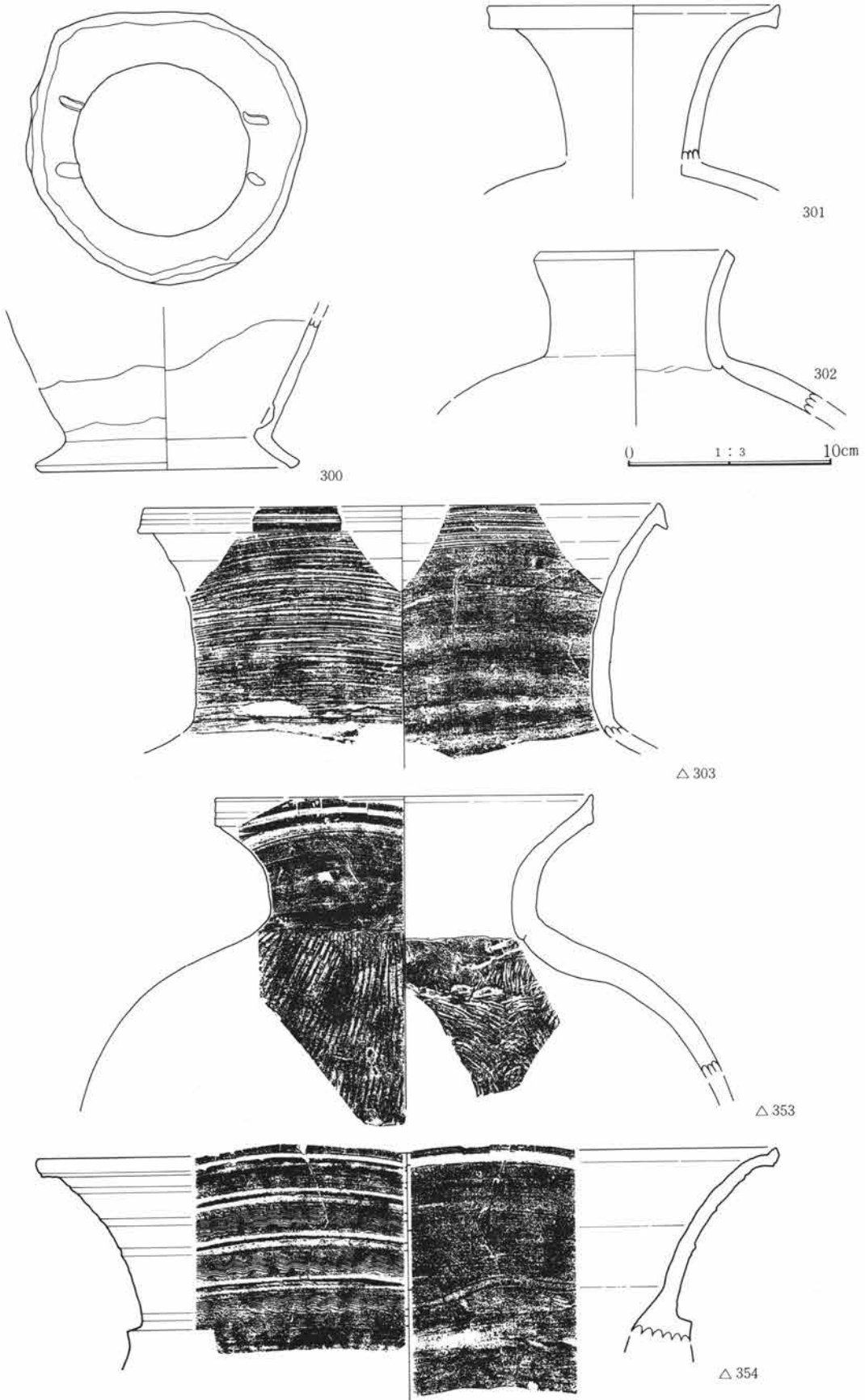


図69 IV区2面 グリッド出土遺物(4)

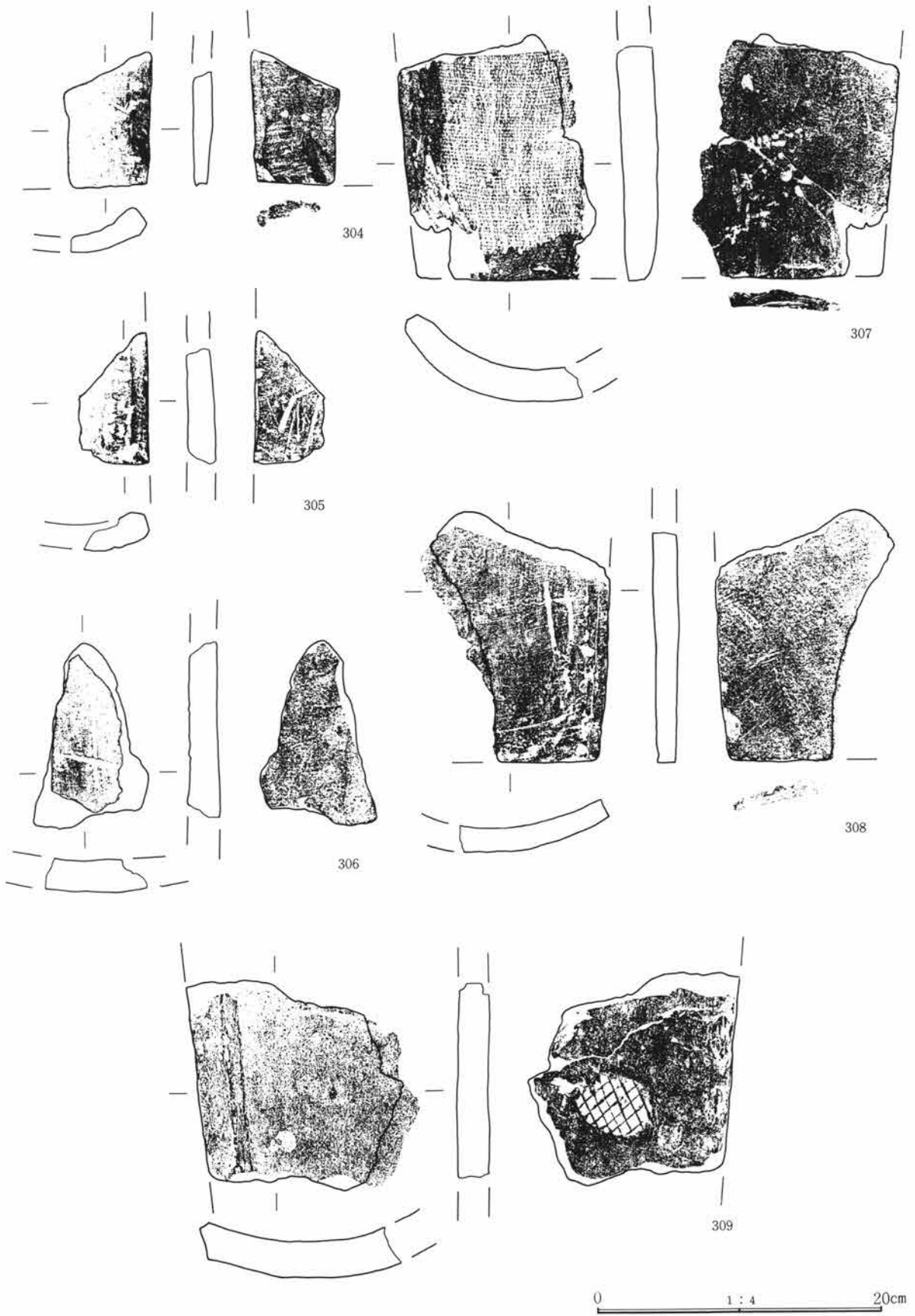


図70 IV区2面 グリッド出土遺物(5)

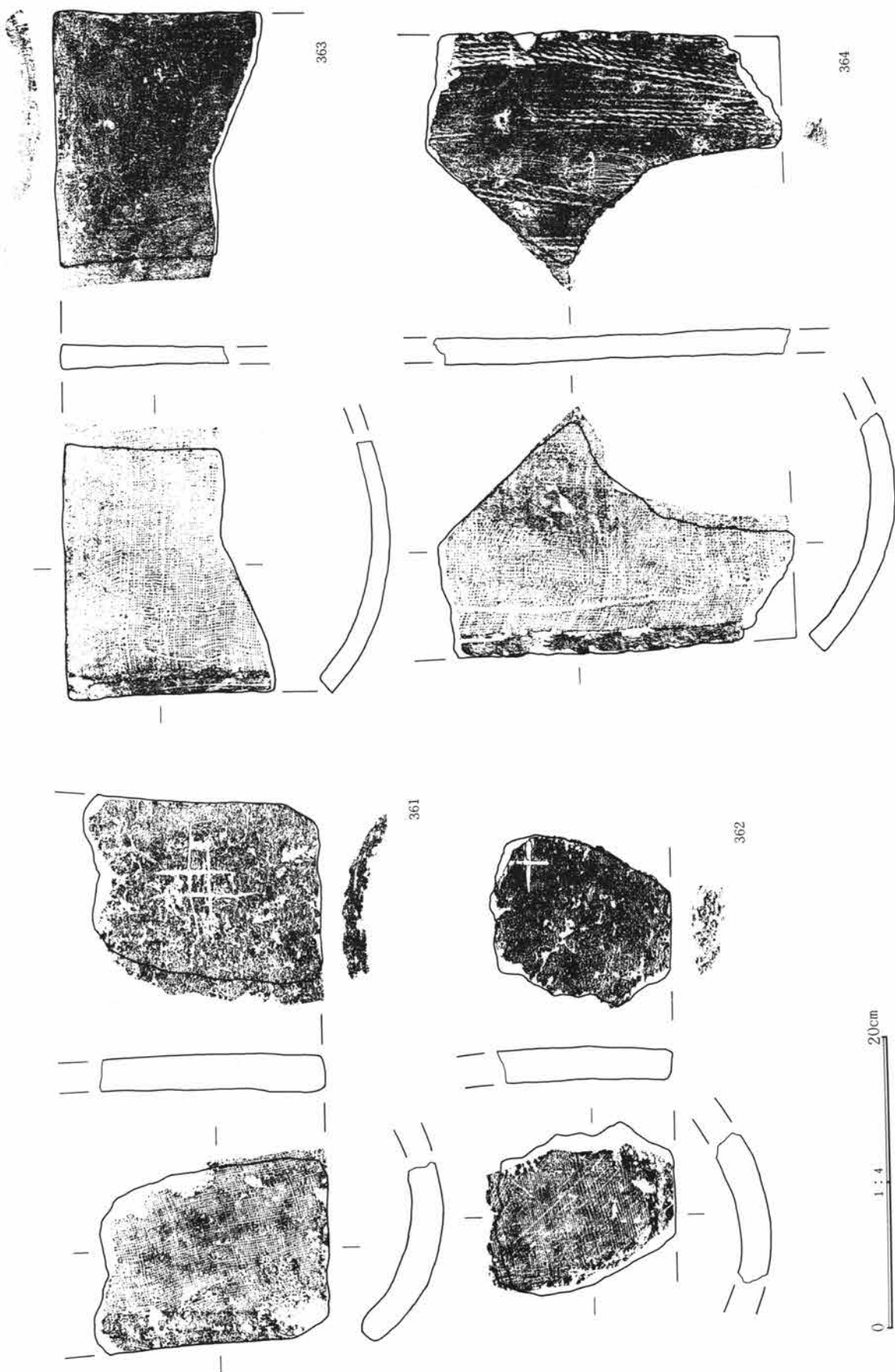


図71 IV区2面 グリッド出土遺物(6)

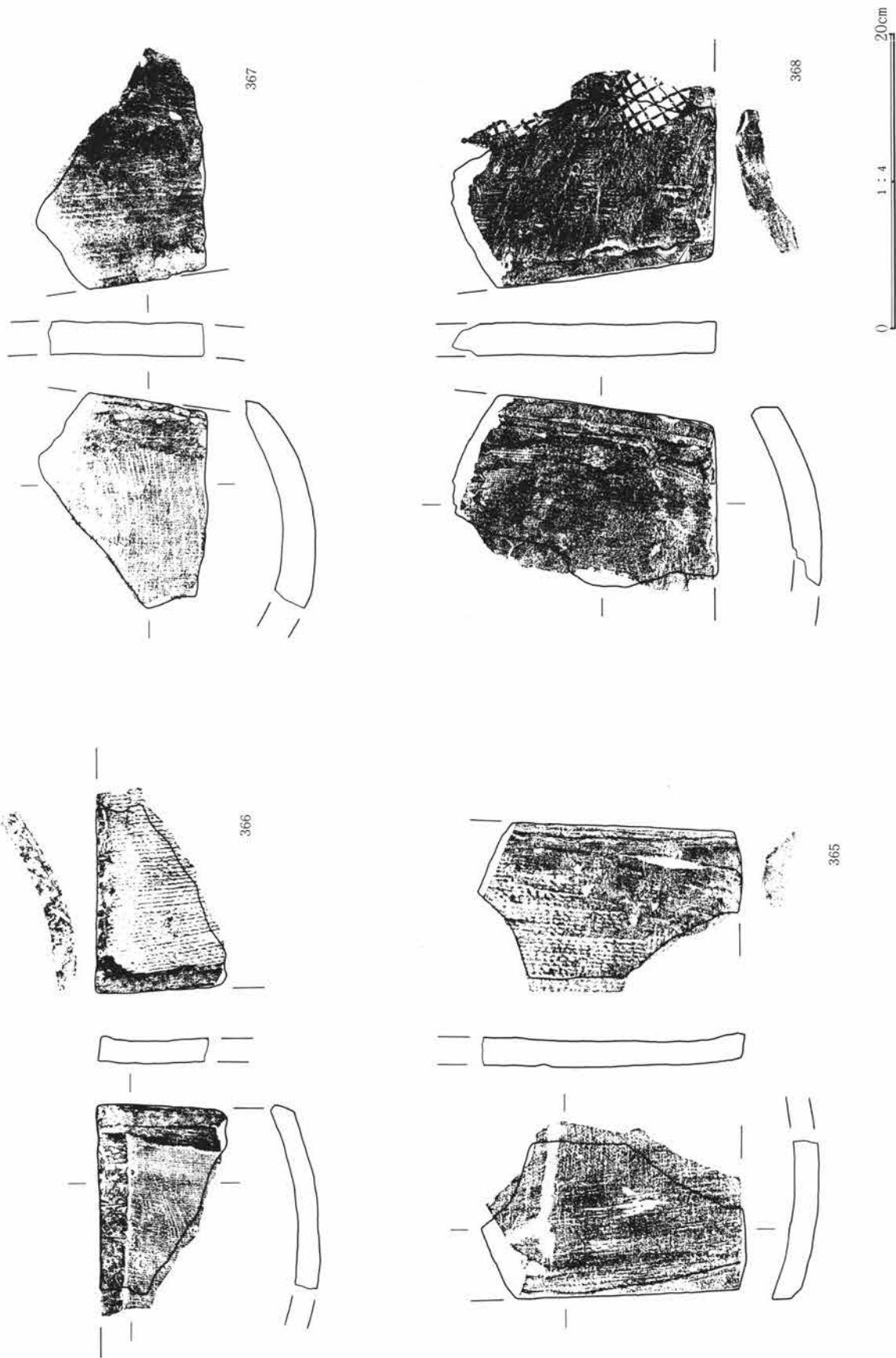


図72 IV区2面 グリッド出土遺物(7)

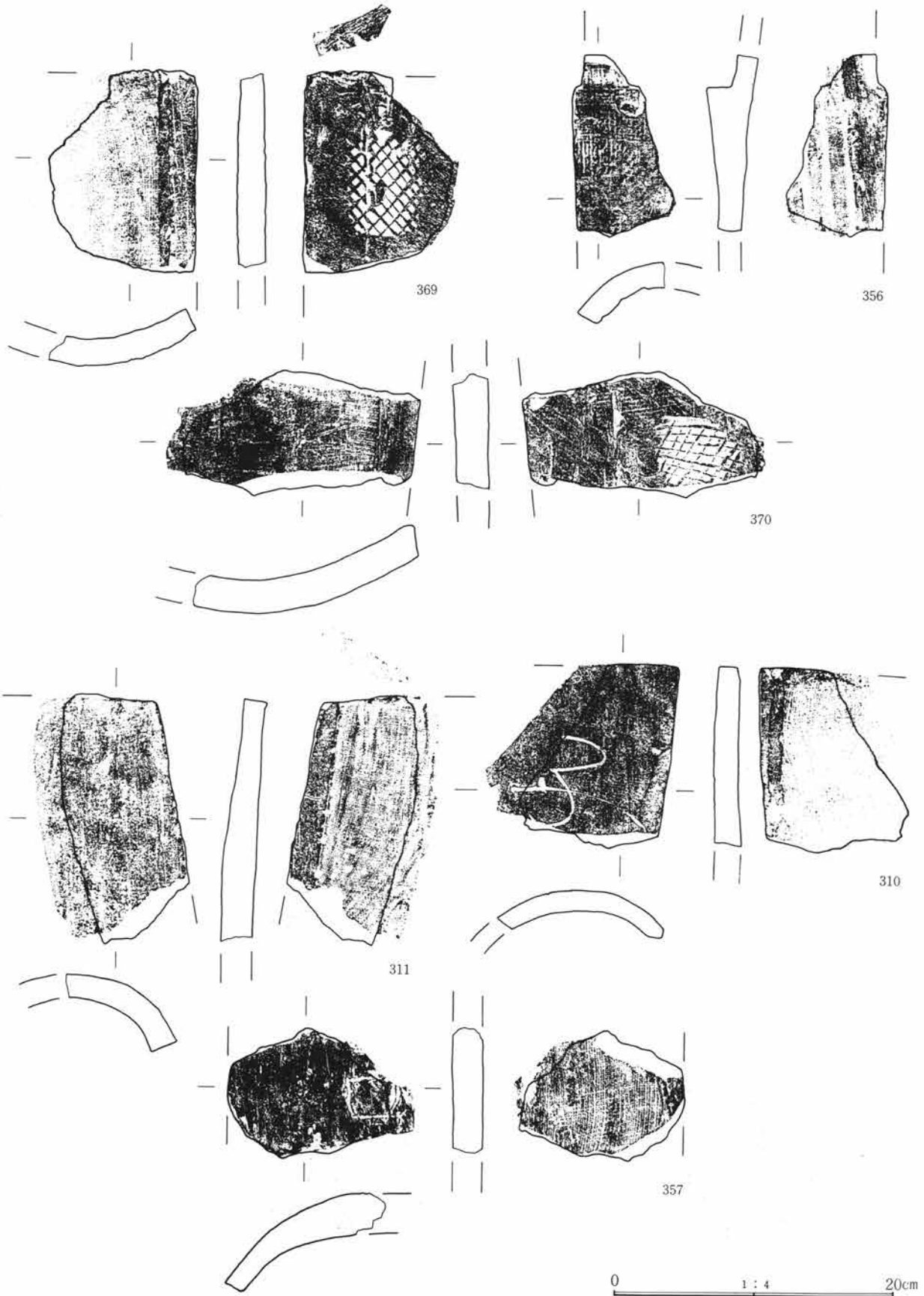


図73 IV区2面 グリッド出土遺物(8)

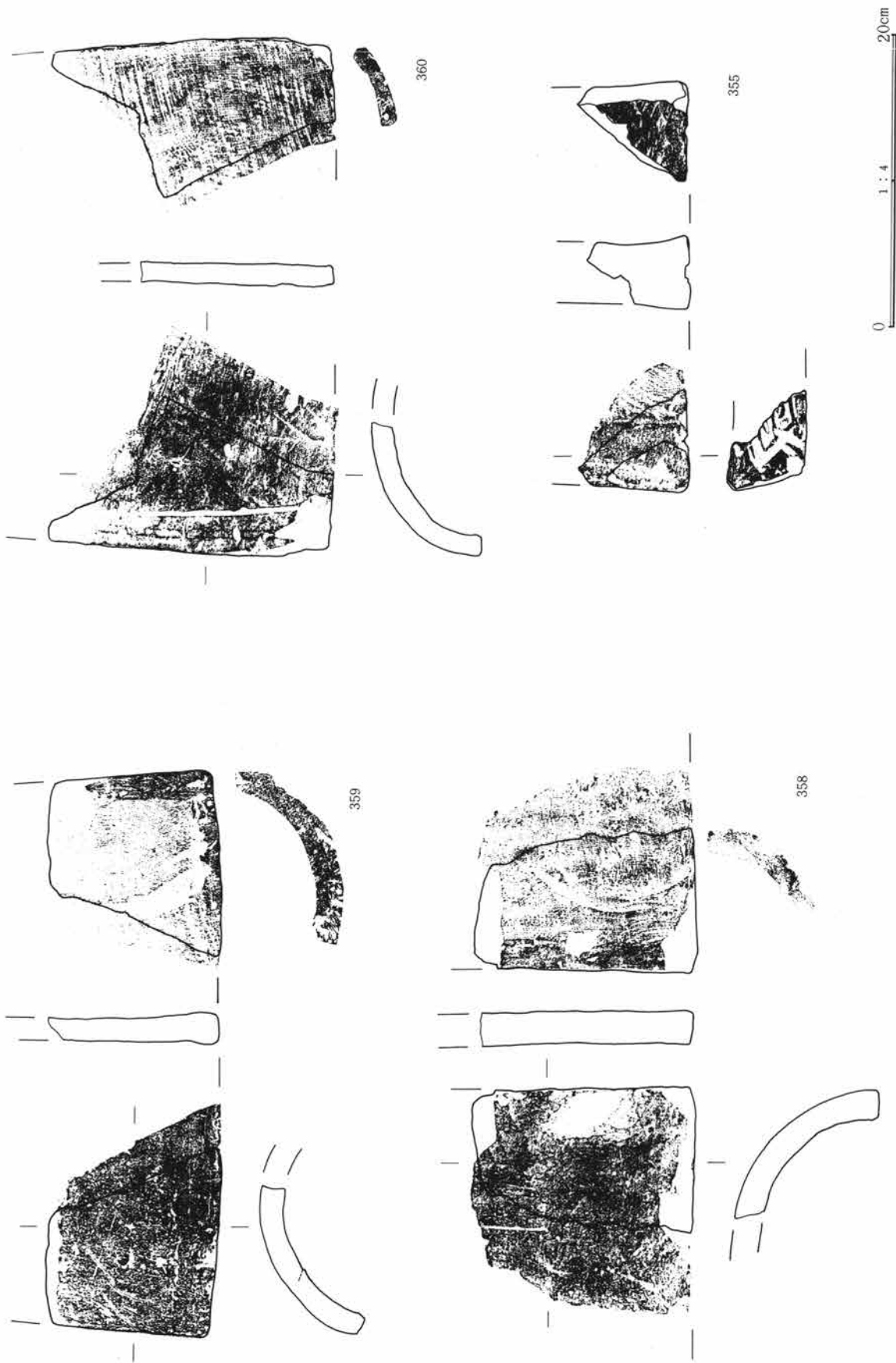


図74 IV区2面 グリッド出土遺物(9)

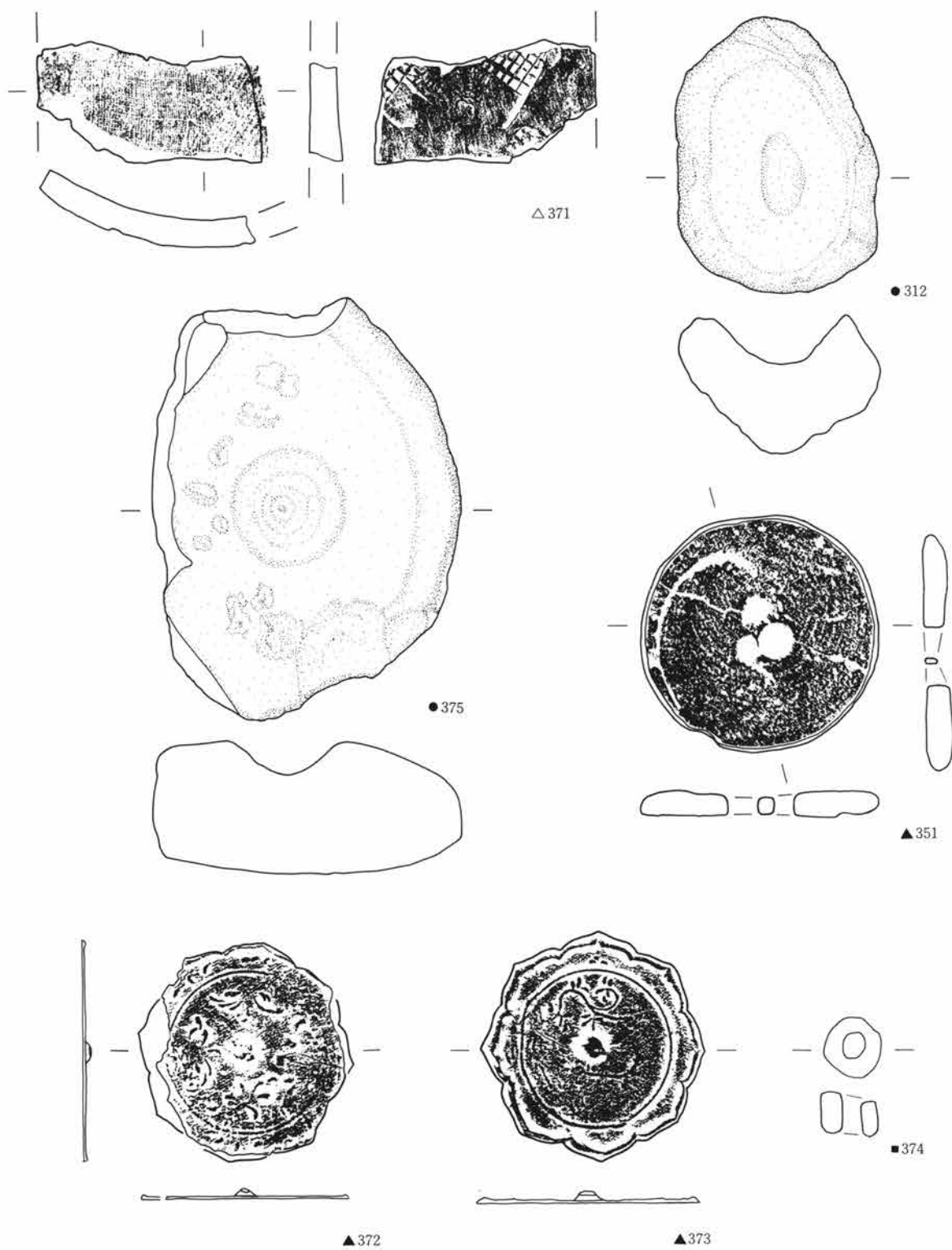


図75 IV区2面 グリッド出土遺物(10)

第3章 検出された遺構と遺物

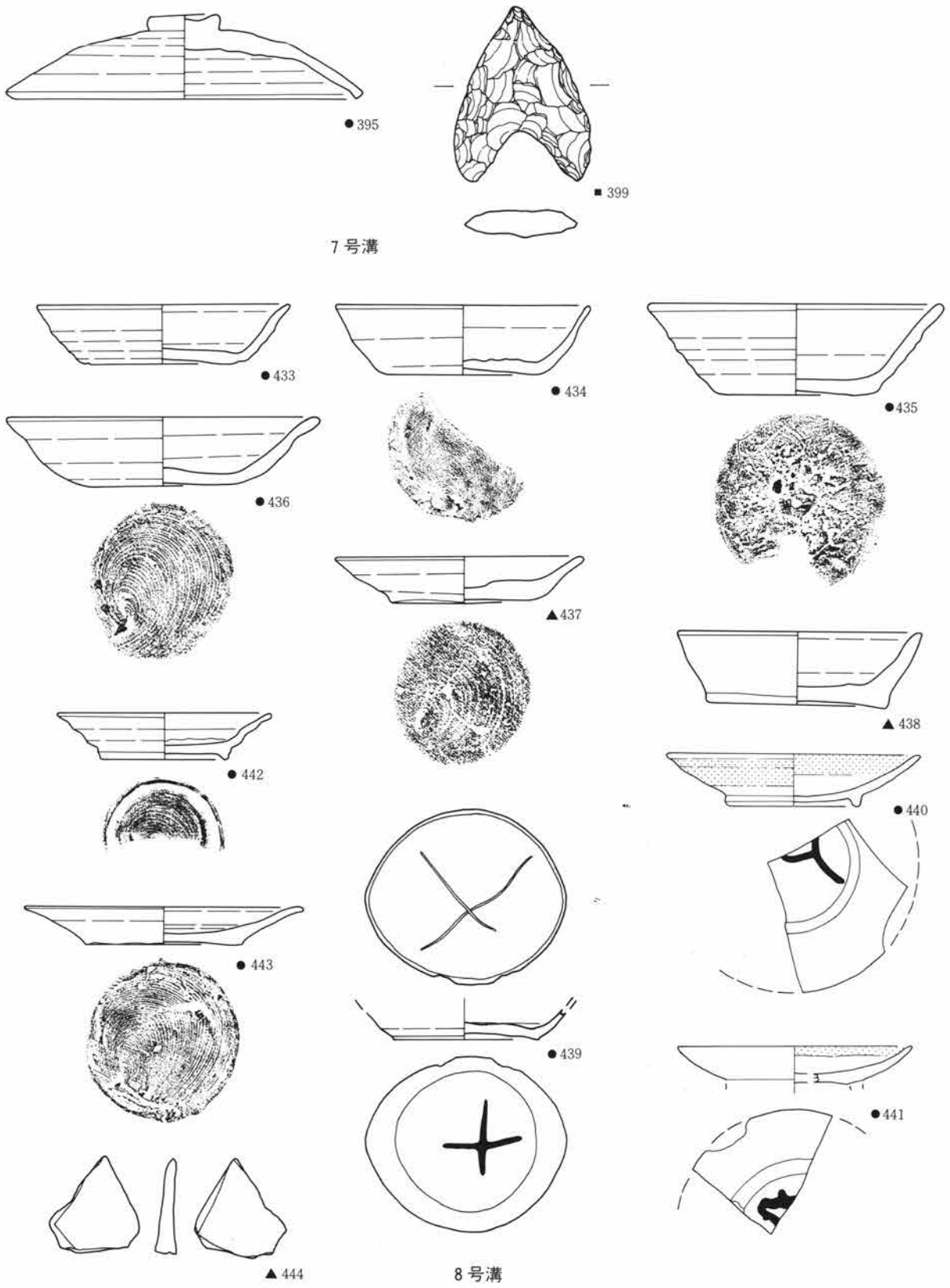


図76 V区2面 7・8号溝(1)出土遺物

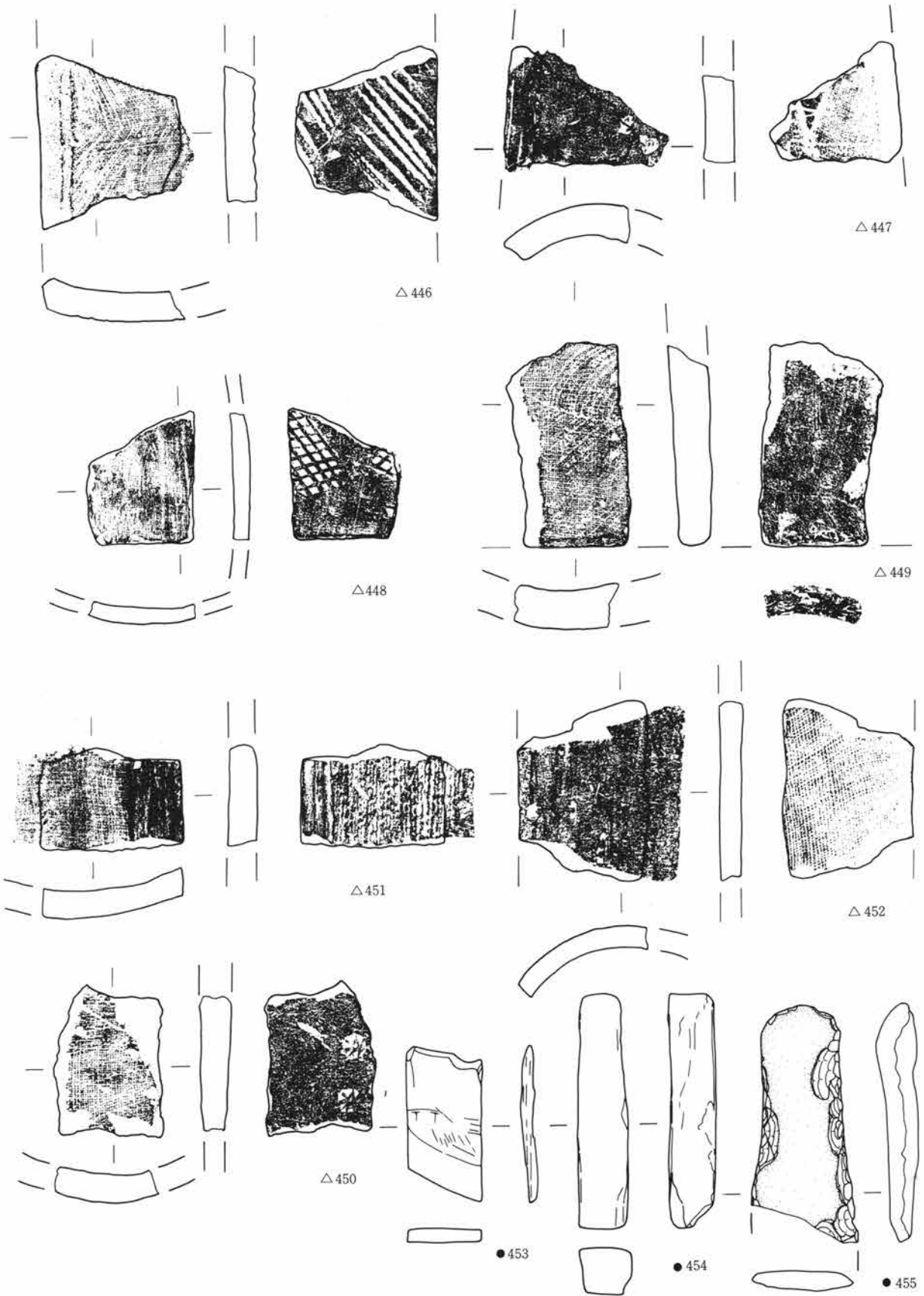


図77 V区2面 8号溝出土遺物(2)

第3節 3面の調査

1. 概要

本遺跡ではI・II区を除く各調査区で、示標テフラであるFAの堆積状態が良好であり、FA下黒色粘質土上面で水田址4面とそれに伴う溝21条を検出した。検出された水田址は、台地の蛇行地形に沿って、牛池川により下刻され形成された谷底平野に展開されている。

本遺跡検出の水田址と溝は、FAと水田面及び溝底面との間に間層が認められず、直接FAを埋没土としていることから、FA降下時期（6世紀初頭・古墳時代後期）とほぼ同時期まで営まれ、FAの降下及びFPF-1の堆積により、水田耕作を断念せざるを得ない状況に陥ったものと考えられる。以後本遺跡内においてFA及びFPF-1を除去し、水田耕作の復旧を図った形跡は認められず、また、土層観察においてもFA及びFPF-1直上での黒色粘質土の土壌化は確認されていない。

I区では上面での河川による浸食作用が盛んであったため、FA及び直下の黒色粘質土の遺存状態が極めて不良であった。よって遺構面としてとらえることはできなかったが、プラント・オパール分析の結果、水田土壌であった可能性が高いことが確認されている。3面の水田耕土面からは、土師器の坏が出土した。また、I・II区以外の調査区でも、1・2面で検出された上面の遺構が、3面の遺構面を切っているものがあり、所々に確認不能な部分が散在するが、FAが広範囲に、しかも厚く堆積していたIII区～V区にかけては、遺存状態の良好な水田址を検出することができた。

県内で検出されたFA下水田は、概して一区画が2～4m²の小区画水田であったと思われるが、本遺跡においては、III区とV区の一部で看取されるのみで、すべての調査区において認められる訳ではない。本遺跡よりも下流域にあたる染谷川沿いに位置する

新保田中遺跡でも、2～4m²の小区画水田と20m²前後、40m²前後のやや大きめな区画を有する三種類の水田区画が並存していたことが確認されている。その理由として、小区画の場合は下層の遺構の違い、つまり下層の方形周溝墓群と一致させ、墳丘による傾斜地を開田するための工夫としてとらえている。また、大きな区画は畝の広がる比較的平坦な地点を開田できたためとその保水性に焦点をあてている。本遺跡で検出された小区画は、下層の遺構の影響は認められないものの、FA下黒色粘質土下約10～60cmには、層厚約10～20cmのAs-Cの純層堆積があったことは否めず、区画を考える上では、やはり保水性も重要な要因となっているものと思われる。

V区3面の水田区画域は、北半部と南半部で顕著な差異を示す。北半部は南半部に比べ、区画が小さく多種多様な形状を呈しているのに対して、南半部は大畦畔によって仕切られた大区画が残存するのみである。その上、足跡群は北半部よりも大区画の南半部に多数認められ、縦横に残存する。足跡が明瞭に残存すると言うことは、既に南半部の大区画域の水田耕土面は適度な湛水状態であった証左でもあり、上流部から下流部への取配水を原則としていれば、北半部も同様な湛水状態であったと考えられる。このことからみて、北半部では既に何等かの区画作業を終えた段階であり、南半部は未作業の段階であった、折しもFAの降下に見舞われたのではないかと推測することができる。ただ、北半部の畦畔は、土圧を考慮してもその残存状態（高さ）が極めて不良であり、IV区南端部で看取された残存状態の良好な畦畔の高さに比べ、あまりにも偏平化していることや、区画内に残る足跡も、数が少なく不明瞭であること、また、V区よりも上流部にあたるIII区北半部でも足跡が検出されていること等からみて、前年の収穫後に放置されたままの状態であり、未作業の区画域であった可能性も高い。いずれにせよ、水田作りの過程において、FA降下時点までの間に、一時期期間放置されたままの状態があったことは否めず、作業範囲にもある一定の順序・段階があったものと

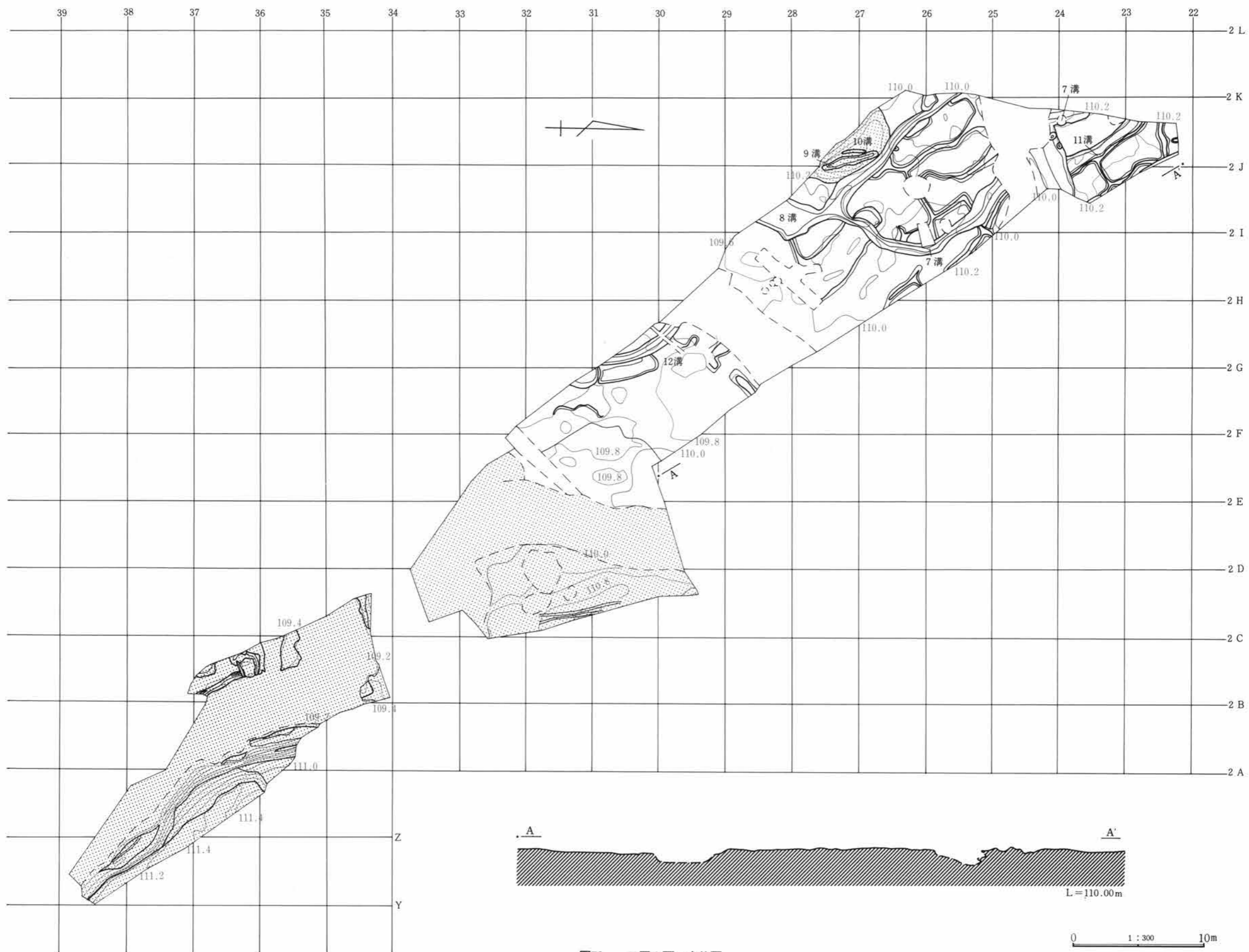


图78 II区3面 全体图

推測される。

調査区内での取水施設は溝と水口のみであり、その他の施設は確認されていない。溝も水田区画を成す畦畔を切って走向するといった不自然な位置を通るものがある一方、畦畔間を意図的に走向させ、しかも形状の整った明らかに人為的に手入れされた溝も検出され、形状を異にする溝が並存する。前者はII区の7・8号溝であり、後者はIV区南端部の14・15号溝、V区の10号溝が挙げられる。また、水口の看取できない畦畔は、田越しによる取配水、または未作業部分とも考えられるが、検出されたFA下水田がどの区画域でも完全に整備され、作業もほぼ完了した状態でFAに覆われたというものではないので、本遺跡で検出された遺構面のみでは推測の域を脱し得ない。

2. II区のFA下水田

付図 図78・79 写図16・17

被覆層と残存状況 層厚5～25cmのFAによって埋没した水田区画は、調査区北半部で29枚検出されたが、前述した通りFAの残存状態に斑があるために区画域の検出も部分的であり、主に調査区北半部に集中している。また、1面の1・2・4号溝及び1・2・3・4号井戸等によって削平を受けている部分もあり、整然としない区画も相俟って遺存状態は他区に比べ不良である。

水田域の地形 標高はI区を除けば本遺跡中で一番高く、北隅で最高点110.20m、南隅で109.80m、比高0.40mを測る。また、2I～2K-26～28ラインとY～2E-29～39ラインで、台地部が確認され、水田域はこの台地間の谷底平野に展開している。区画の検出された北半部の水田面はほぼ平坦であるが、南及び南東方向にかけては緩傾斜を示す。

畦畔の走向と区画 水田を区画する畦畔の走向は、北西-南東及び北東-南西方向であり、最大下幅0.29m～3.23m、高さ0.01m～0.17mのものまでと多様であり、殆どは偏平化している。また、直線的な畦畔よりも蛇行した畦畔が多く、2H-27グリッド

から延びる大畦畔は2.60m～3.23mと極めて下幅が広く、また、2I・2J-26グリッドから小畦に延びる大畦畔も下幅2.60m、高さ0.05mを測り、おそらく小畦に通じる作業道を兼ねたものであると思われるが詳細は不明である。水田区画は不定形ながらも方形に近かったであろう形状を呈しているが、調査区内において完全な形状を示す区画は認められない。

水田面の面積 全形がわかりしかも独立して計測できる区画は一枚もなく、水田域は主として7号溝・8号溝によって分断されている。分断された区画内を独立した区画と認めるならば、18.55m²を最大値、2.81m²を最小値とし、その平均面積は10.68m²である。

取配水の方法 水田区画を成す畦畔を7・8・11号溝が分断する形で走向する。区画を分断するという一見不自然さはあるものの、2つの溝の底面を覆う埋没土はFAの純層であり間層を挟まないことから、水田面とほぼ同時期に並存した可能性が高い。しかしながら、溝と水田面との間に時期的な差があった可能性も否めない。また、1面の1・2号溝によって削平を受け、延長部の接続部分が曖昧な7号溝においても、11号溝と一連の流れを持つことも考えられるが、現時点での機能的な詳細は不明である。走向は、両溝とも北西方向から南方向に流れていたものと思われ、溝を遮断することによって田越しを行い配水したと思われる。また、11号溝の走向からみて、調査区以東にも溝があった可能性が高いが、前述した様に7号溝本体部分との関係が不明瞭であるため、推測にしか過ぎない。水口は4箇所確認され、水口を成す畦間の間隔の違いは取配水時における水量調節のための工夫であったと思われる。

耕作土 FA下黒色粘質土であり、FA及び下層との混土は認められない。

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

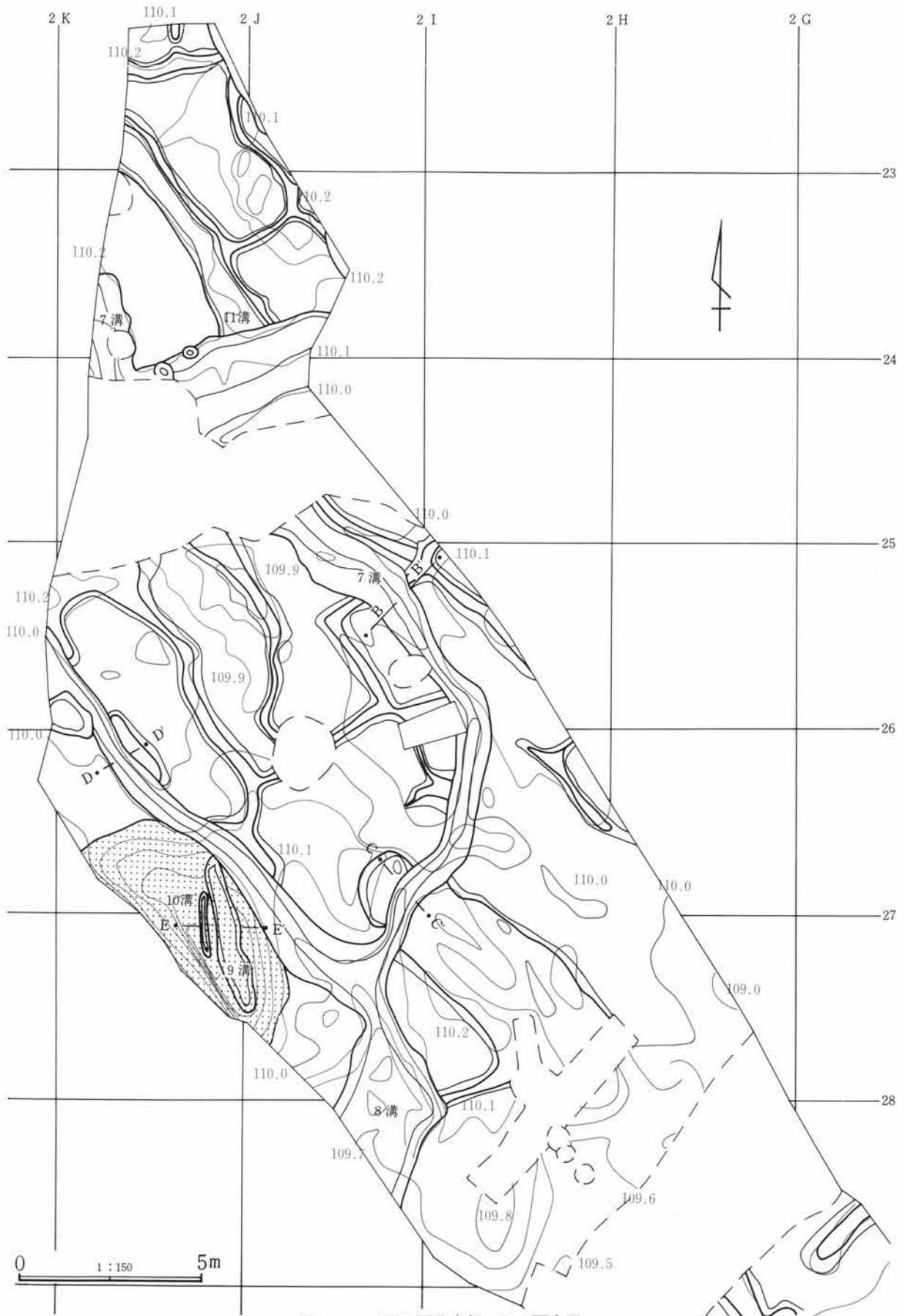


図79 II区3面北半部 FA下水田

3. II区の溝

7号溝 付図 図78・79・89 写図17-3・4

位置 2H-25・26、2I-24~27、2J-23・24
グリッド

重複 1面の1・2号溝によって切られる。2J-23・24グリッドに位置する残存部分は、4面、15号溝の埋没土上面を一部溝の底面とする。

走向 2J-23グリッドより南に走向し、2H-25グリッドで南西に走向を変え、8号溝に合流する。

規模 調査長(16.15m) 幅0.45m~1.50m
深さ0.09m~0.30m

形状 (傾斜 北西端110.00m 南西端109.90m)
底面は僅かに丸みを帯びるが、法面の立ち上がり面に凹凸が認められる。

埋没土 FAの純層堆積が認められる。

出土遺物 須恵器甕片・椀、土師器甕・坏

調査所見 流路が水田区画を切って走向していることから、河川の自然的氾濫によって形成された溝、もしくは、本来の河道であった可能性が高い。いずれにしても、埋没土がFAの純層であることから、水田に伴う溝であったことには違いないと思われる。また、区画内走向についても、区画をほぼ等分する位置を流路としていることから、人為的、意図的に作られた溝であったとも考えられるが、現時点での詳細は不明である。また、11号溝との関係は1面の1・2号溝によって削平されているため不明な部分が残るが、溝幅もほぼ一定で、畦畔に沿った走向を有する11号溝とは明らかに形状を異にするが、2I-24・25グリッドでは、一部であるが畦畔に沿った走向が看取でき、また、11号溝の南東端延長部が7号溝北西端と最短の位置にあることから、7号溝の本体と11号溝とが、同一の溝であった可能性も残る。

8号溝 付図 78・79・89 写図17-5・6

位置 2H-27・28、2I-26~28、2J-25・26、
2K-25グリッド

重複 なし。

走向 2K-25グリッドより南東方向にほぼ直進し、2I-27グリッドで7号溝と合流し、走向を南に変える。

規模 調査長17.40m 幅0.60m~1.50m
深さ0.05m~0.50m

形状 (傾斜 北西端109.90m 南端109.82m)
底面は丸みを帯び底面幅は一定である。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 コモアミ石

調査所見 7号溝と同様に自然的に形成されたものか、人為的なものかについての詳細は不明であるが、水田区画を避けた台地裾縁を走向し、区画内走向も区画をほぼ等分する位置を流路としていることから、人為的、意図的に作られた溝であった可能性も高いが、本来の河道であったとも考えられる。また、2J-23・24グリッドに位置する7号溝の残存部分と本溝が同一の溝であった可能性もあるが、形状、走向、埋没土のみからの判断では、現時点では断言することはできない。

9号溝 付図 図78・79・89 写図17-7・8

位置 2I-27、2J-26・27グリッド

重複 なし。

走向 長軸、南北方向より約15°西へ振れる。

規模 調査長4.22m 幅0.40m~0.70m
深さ0.10m~0.27m

形状 (傾斜 南端110.05m 北端110.14m)
底面に凹凸が認められほぼ直角に立ち上がる。

埋没土 FA降下以前に灰褐色土により自然埋没。
灰褐色土上面にはFAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 溝の底面とFA間に間層を挟んでいることから、FA降下以前に既に埋没していたと思われる。水田区画域と本溝との関係については、形状が完結しているため詳細は不明である。

第3章 検出された遺構と遺物

10号溝 付図 図78・79・89 写図17-7

位置 2 J-26・27グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ南北方向

規模 調査長1.75m 幅0.12m~0.20m
深さ0.05m

形状 (傾斜 南端110.05m 北端110.04m)

底面は丸みを帯び、底面幅は一定している。

埋没土 FA降下以前に黒灰色土によって埋没。黒灰色上面にFAが堆積する。

出土遺物 土師器坏

調査所見 9号溝と同様に、溝の底面とFA間に間層を挟んでいることから、FA降下以前に既に埋没していたと思われる。水田区画域と本溝との関係についても、形状が完結しているため詳細は不明である。

11号溝 付図 図78・79

位置 2 I-23、2 J-22・23グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長6.10m 幅(0.37m~1.20m)
深さ0.03m~0.10m

形状 (傾斜 南東端110.20m 北西端110.15m)

底面はほぼ平坦であり、底面幅は一定している。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 溝の走向が畦畔の走向と一致し、しかも溝幅もほぼ一定であることから、水田区画に伴う人為的な溝と思われる。

12号溝 付図 図78

位置 2 G-29・30グリッド

重複 1面の4号溝によって切られる。

走向 北西-南方向

規模 調査長4.86m 幅0.54m~1.00m
深さ0.01m~0.05m

形状 (傾斜 南端109.86m 北西端109.83m)

底面は僅かに丸みを帯び、底面幅は一定である。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 形状、走向、規模からみて人為的な溝であり、8号溝からの分水を受けたものと考えられる。しかしながら、走向位置からみて、8号溝の延長部を成していた可能性もあり、1面の4号溝の削平により、北西端の延長部が未確認であったため、その詳細は不明である。また、2 F-30・31、2 G-30グリッドの溝の東側外縁部分では、深さ2cm~4cmの凹面が2カ所認められる。凹面は畦畔によって分断されていることや底面が平坦なことからみて、おそらく水田区画の残存部分と思われるが、詳細は不明である。

4. III区のFA下水田

付図 図80・81・85 写図18、19、69

被覆層と残存状況 層厚5~25cmのFAによって埋没した水田区画は58枚確認され、大畦畔に囲まれ小畦で仕切られた小区画水田を検出した。また、区画が認められるのはU~2 B-40~46ライン内で、おもに調査区北半部に集中している。1面の1号溝、旧河道等によって水田面に攪乱を受けている以外は、FAの堆積状態は良好であり、土圧によるものか、実際の残存状態であったのかは不明であるが、小畦の偏平化が随所で認められた。

水田域の地形 II区と同様に、北西から南東方向にかけての緩傾斜を示す。標高は北隅で109.70m、南隅で109.60mを測り、比高は0.10mである。調査区内において台地部は確認されなかったが、おそらく谷底平野部分に水田域は展開されていたものと思われる。

畦畔の走向と区画 畦畔は大畦畔と小畦の違いが明瞭に看取でき、小畦の走向はII区と同様に、北西-南東及び北東-南東方向である。大畦畔は下幅0.52m~2.12mのものが6箇所あり、水口、形状、走向等からみて、他区画への配水方向を決定づけるものと

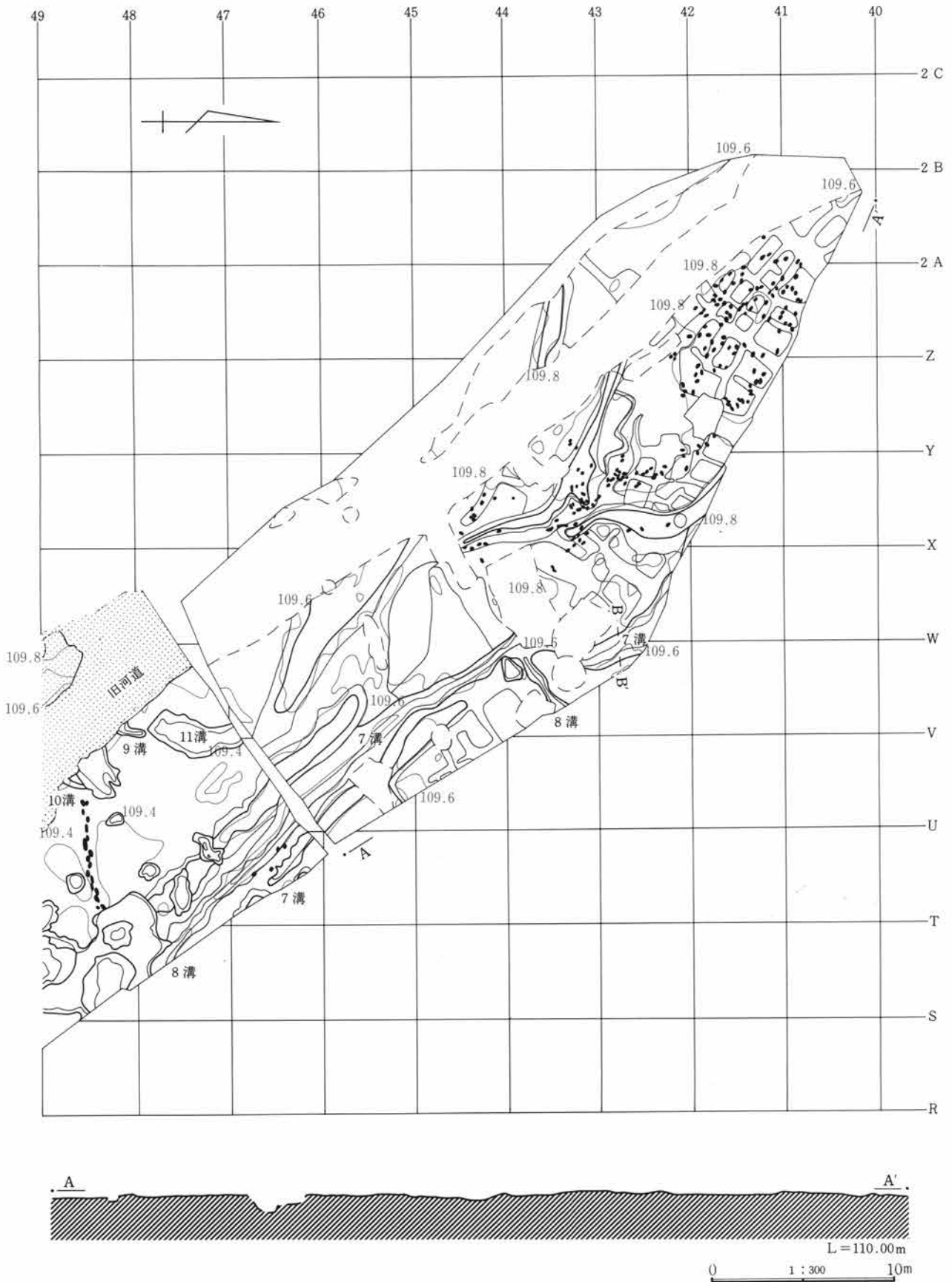
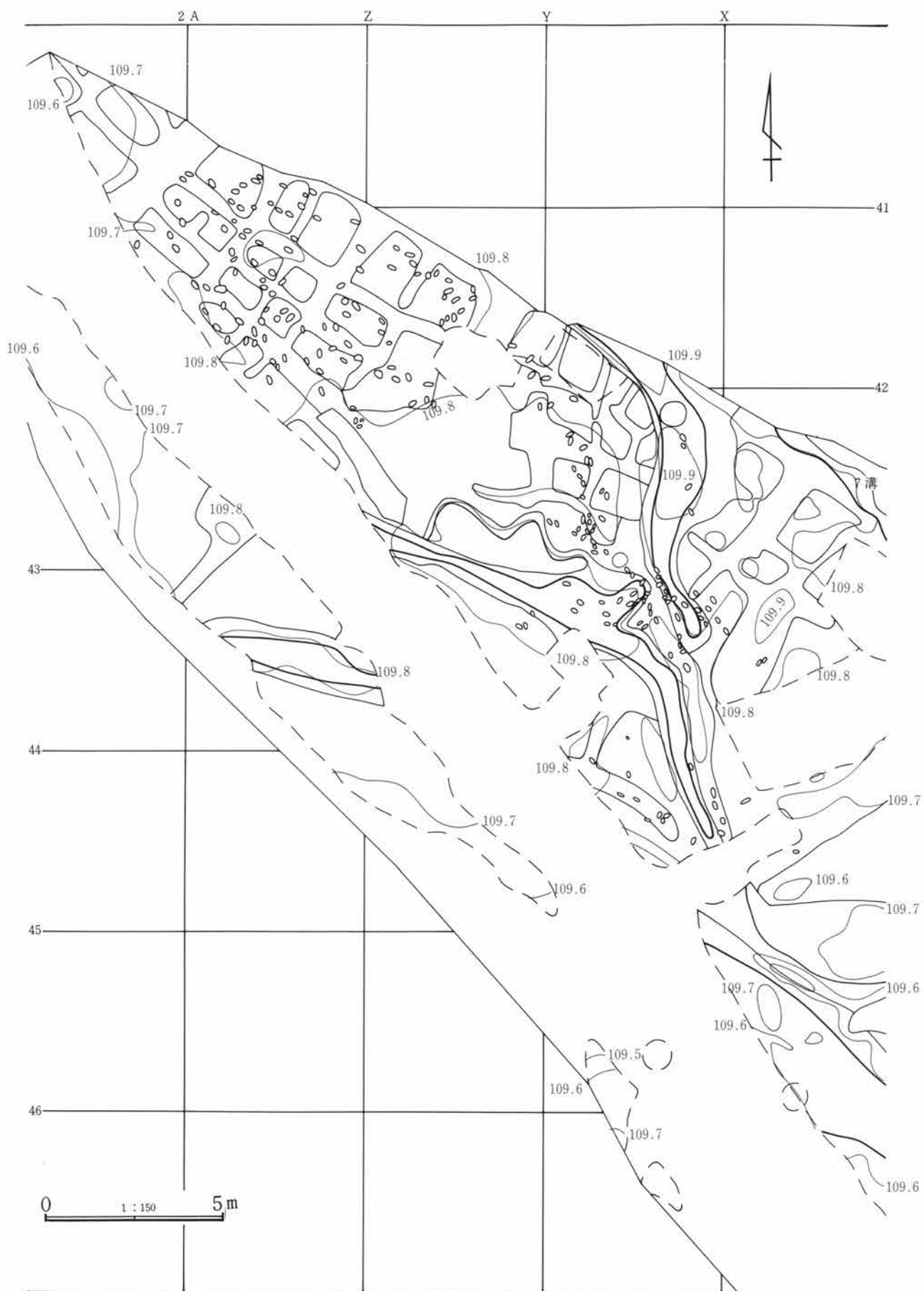


図80 III区3面 全体図



なっている。主として南東方向への配水機能を有していると言う意味においては規則的である。また、Y-42グリッドに位置する大畦畔は、最大下幅が2.69mと広く、そのやや偏平な形状から推測して、何等かの作業途中の段階か、前年のままの放置状態であったと考えられるが詳細は不明である。

大畦畔の中をさらに区画する小畦があり、下幅は0.18m～1.25mを測る。小畦の高さは殆どなく偏平である。小畦によって仕切られた区画の形状はほぼ方形で規則正しいのに対して、大畦畔付近の区画は不定形である。III区においては大畦畔区画内を小畦で区画した北半部としない南半部の両者が並存する。

水田面の面積 計測可能な水田区画は32枚あり、4.16m²を最大値、0.56m²を最小値とし、平均面積は1.65m²と極めて小区画である。

取配水の方法 7・8号溝によって水田面への取配水が可能であり、大畦畔も南東方向へ水口を向け、他区画への配水に大きく関与している。水口は13箇所確認されたがすべての区画では認められず、おそらく田越しによる方法を採用していたか、水口作りの未作業部分であったと思われる。

耕作土 FA下黒色粘質土であり、FA及び下層との混土は認められない。

その他の遺構 足跡は黒色粘質土の凹面にFAが埋没する形で数多く検出された。その殆どが形状を示す程度のものであり、五指、連続した走向までも識別できるものではなかった。特に北半部の小畦で仕切られた小区画域と大畦畔間の水口部分に多く看取された。小畦、足跡の残存状態、7号溝の埋没状況からみて、前年の収穫後に放置されたままの状態であった可能性が高い。

水田面からの出土遺物 なし。

5. III区の溝

7号溝

付図 図80～82・85・89・90 表 P257 写図19-5・6、69

位置 U-45・46、V-42～45、W-42グリッド

重複 なし。

走向 北西—南東方向

規模 (調査長20.08m) 幅0.65m～1.40m

深さ0.04m～0.29m

形状 (傾斜 北東端109.62m 南西端109.69m)

底面に凹凸が認められ、法面の立ち上がりは急勾配を呈する。底面幅は不規則である。

埋没土 有機物を多量に含む赤褐色砂質土と赤褐色砂層が底面に堆積し、その上層にFAがレンズ状に堆積する。

出土遺物 土師器坏・甕、須恵器甕

調査所見 U～W-44～47ライン内で認められる大畦畔間を、IV区の水田区画に向けて走向させていることからみて、人為的、意図的に作られた水田区画に伴う溝であるが、本来の河道であった可能性も高い。また、FAと溝底面との間に砂質土及び砂層を挟んでいることから、FA降下以前に、既に流水の影響による溝の埋没が始まっていて、溝としての機能を果たしていなかったものと思われる。このことからみて、本溝周辺での区画が不明瞭であったのは、小畦作りの作業段階に入っていなかったか、前年の収穫後、放置されたままの状態であったかのどちらかであると推測される。また、本溝の走向位置は、4面の19・24号溝とほぼ同位置であることから、下面の溝の走向を継承したものと考えられる。

8号溝 付図 図80

位置 V-43グリッド

重複 なし。

走向 北東—南西方向

規模 調査長3.40m 幅0.40m～0.50m

深さ0.04m～0.29m

形状 (傾斜 北東端109.67m 南西端109.69m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 7号溝と同様に、有機物を多量に含む赤褐色砂質土と赤褐色砂層が底面に堆積し、その上層にFAがレンズ状に堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺存状態が部分的であり詳細は不明であ

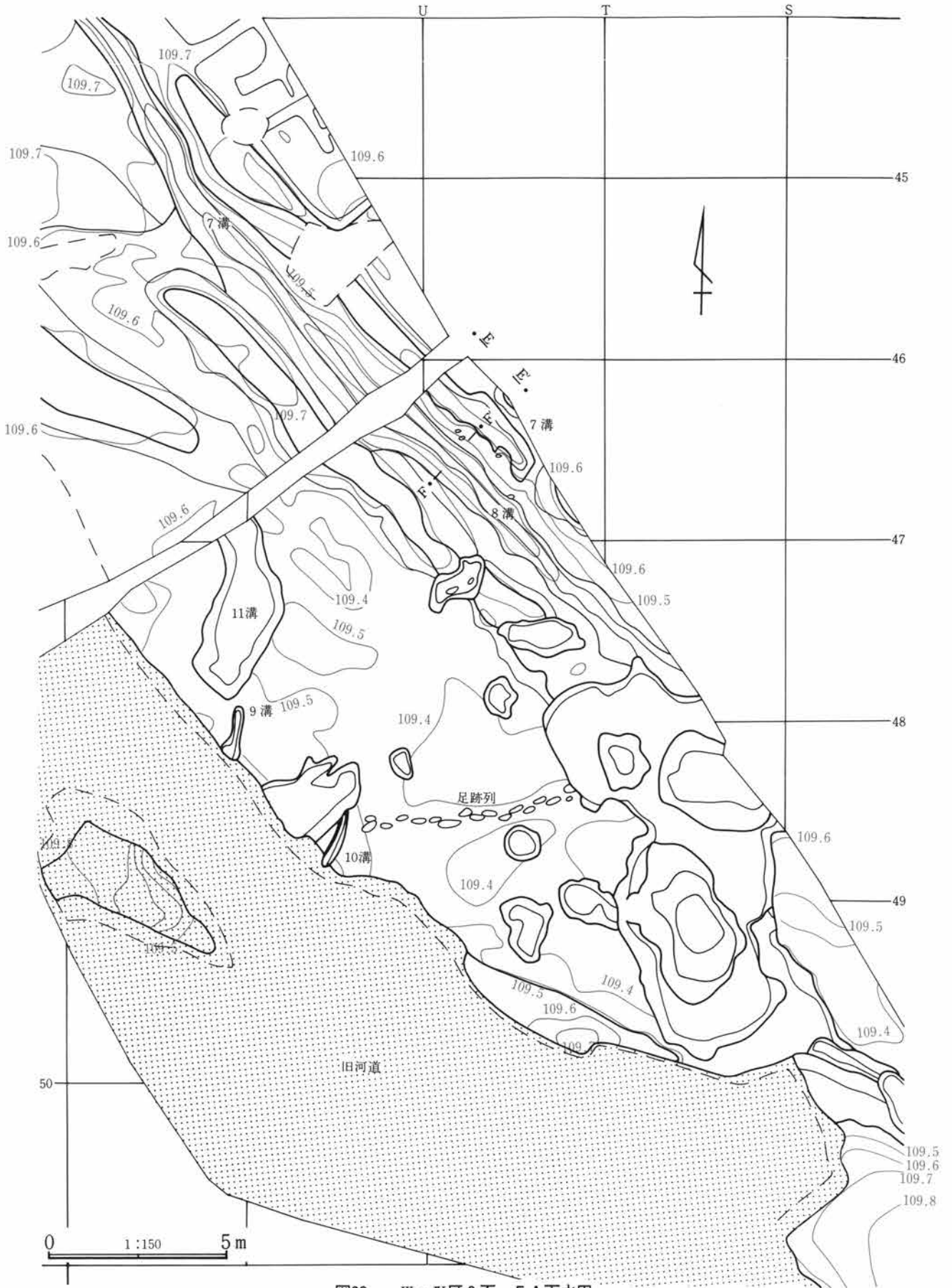


図82 III・IV区3面 FA下水田

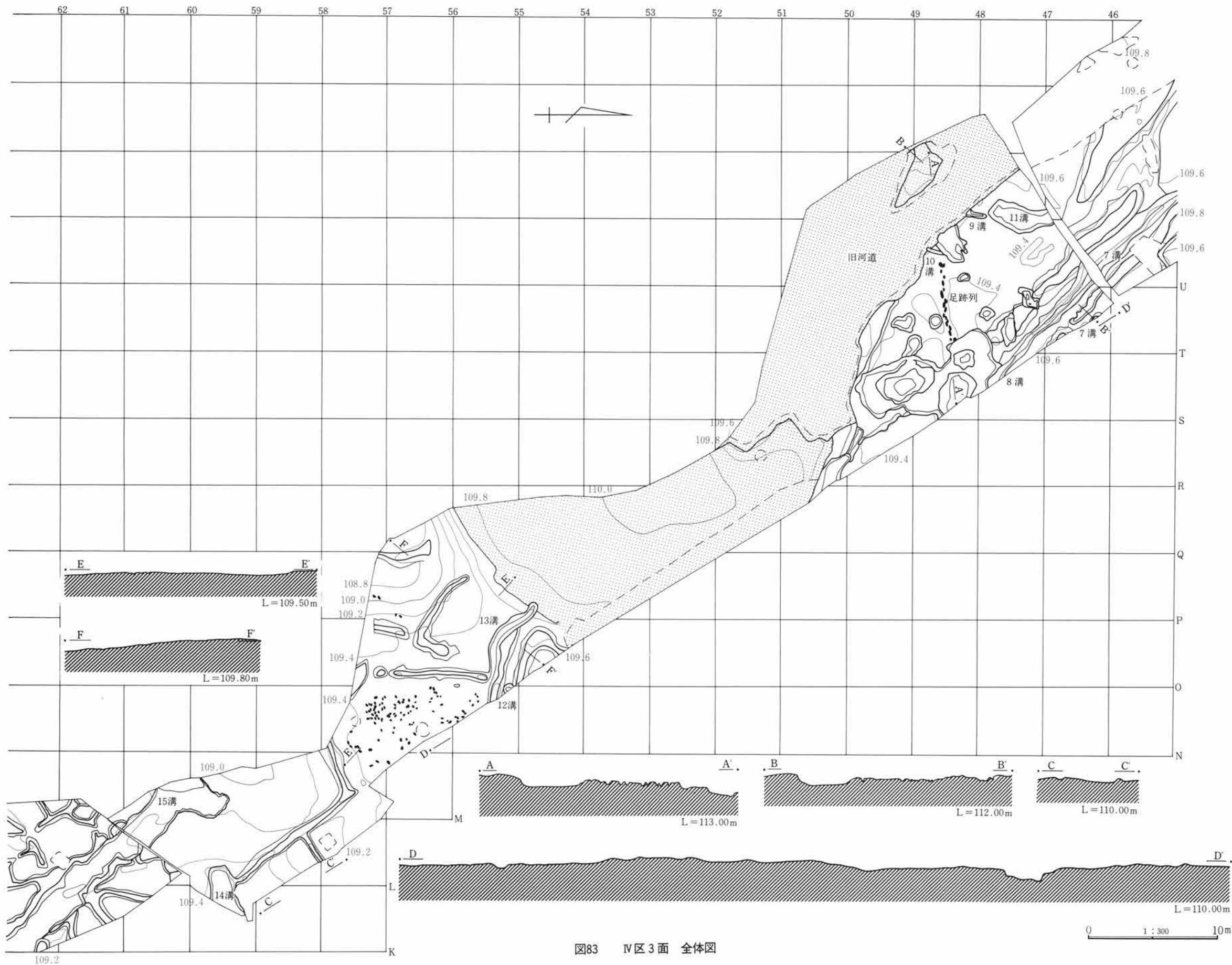


图83 IV区3面 全体图

るが、おそらく調査区北東部に広がる水田区画に伴う溝であると考えられる。また、7号溝と同様に、FAと溝底面との間に砂質土及び砂層を挟んでいることから、FA降下以前に、既に流水の影響による溝の埋没が始まっていて、溝としての機能を果たしていなかったものと思われる。

6. IV区のFA下水田

付図 図82～85 写図20～23、69

被覆層と残存状況 IV区は北半部と南半部及び第5次調査分の南端部の3つに分けられる。ともに層厚10～20cmのFAの純層堆積が認められ、遺存状態の良好な区画が14枚検出されたが、北半部の一部で上面、旧河道の浸食作用により生じたと思われる甌穴群が、水田遺構面に攪乱を及ぼしている。

水田域の地形 北半部の南西側は近世以降の旧河道の流路にあたり、III区1面の1号溝から続く水車小屋があった地点である。旧河道は台地の殆どを削平しているものの、一部に台地部が残存し、概ね調査区中央部の台地と連続していたものと思われる。従って、北半部の水田域は台地裾縁に展開されたものであり、旧牛池川の流路は大きく蛇行していたことが窺える。標高は中央部の台地上で最高点110.00mを示し、北半部の北隅で109.85m、南半部の南隅で109.40m、比高0.45mを測る。また、北半部、南端部の水田面は、ほぼ平坦を保っていたのに対して、南半部は南方向への勾配がきつく、調査時点での標高は108.65m、南半部との比高は0.85mである。おそらく土圧や地形変動等によって地盤沈下の影響を受けたものと思われる。

畦畔の走向と区画 畦畔はほぼ南西—南東及び北東—南西方向であり、一部南北方向を示す。下幅は0.58m～1.54m、高さ0.05m～0.20mを測る。北半部はIII区から続く大畦畔が走るのみで、小畦によって仕切られた水田区画は認められなかった。南半部はほぼ方形を保った区画を呈するが、0～P—56～57ラインの水田区画は不定形な形状を示す。また、南

端部では、調査範囲が制限されているため、区画の全形を確認することはできなかった。残存形状からみて、おそらく大区画を呈するものと思われる。この大区画を、小畦で仕切って小区画として利用していたかについては、現時点では不明である。

水田面の面積 計測可能な区画は殆ど検出されなかったが、区画No93を例にするならば、31.38㎡の数値を示し、III区の小区画と比較すれば、概して大区画の様相を呈する。

取配水の方法 北半部の大区画内へは、8・9・10・11号溝の計4カ所の入水口によって取配水が可能である。また、0～P—56～57ラインの不定形な区画は、他の区画に比べ小区画であり、多数の水口を有していることから、南方向へ配水する溝的機能を持つと思われる。また、0—57グリッドの畦畔の水口は、一畦畔に2箇所ある言わばダブルの水口であり、その方向が大区画の水田面に向けられていることからみて、水田区画の大きさに応じた水口の設置方が窺える。

耕作土 FA下黒色粘質土であり、FA及び下層との混土は認められない。

その他の遺構 北半部のT～U—48～49ラインにかけて、人の足跡と思われる凹凸が1列検出された。他区でも足跡は検出されたが、IV区北半部の足跡はその形状が明瞭であり、歩行人数、歩行方向、爪先の開閉具合、歩行間隔、黒色粘質土の軟弱状態等、遺構としての足跡のみならず人の動作をも窺い知ることができる。それによると、男女の別は不明であるが、単独の人間が、やや内股ぎみにゆっくりと北東方向から南西方向にかけて歩き始め、途中向きを西に変えたものと思われる。また、足跡の深さは0.18m～0.28mと深く、歩行間隔は0.05m～0.62mを測る。足跡の大きさは、埋もれた足を抜くためであったのか0.20m～0.70mと大きめであり、五指までも看取できる底面の形状はとどめていない。しかしながら、ぬかっていた水田面を難儀しながらの歩行であったことは容易に推測できる。中には大きさが0.18m、深さ0.03mと掌大のものが1カ所あり、歩行

第3章 検出された遺構と遺物



図84 IV区3面南半・南端部 FA下水田

順序にも外れていることから、おそらく歩行姿勢をくずした結果、水田面に手をついた痕跡とも思われる。足跡は、最終歩行以降、忽然と途絶えている。
水田面からの出土遺物 土師器坏・埴・甕・台付甕、須恵器甕、金属器

7. IV区の溝

7号溝 付図 図82・83・89

位置 T-46グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長3.40m 幅0.40m～(1.40m)

深さ0.10m

形状 (傾斜 北西端109.85m 南西端109.60m)

底面は平坦であり、法面の立ち上がりは緩やかである。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 検出された遺存部分が、調査区の範囲境界線際に位置しているため、畦畔の水口部分であるのか溝としての機能を有していたかの詳細は不明である。おそらく水田区画の一露出部分であった可能性が高いと思われる。

8号溝 付図 図82・83・89・90 表 P257 写図21-4、69

位置 S-47、T-46・47、U-46グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長11.00m 幅0.40m～2.50m

深さ0.15m～0.40m

形状 (傾斜 北西端109.27m 南東端109.16m)

底面は丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 土師器甕

調査所見 III区から続く大畦畔間を走向していることから見て、人為的、意図的に作られた水田区画に伴う溝と思われるが、本来の河道であったとも考え

られる。また、ST-47グリッド内の凹面は、本溝と水田区画とを結ぶ水口的な役割を果たす残存部分であると考えられ、土圧の影響によるものか本来の残存形状を示すものであったのかは不明であるが、不整形ながらも2カ所検出された。本溝の走向は、4面の16号溝、5面の30号溝と走向位置が一致することから、下面の溝の走向及び形状を継承したものと思われる。

9号溝 付図 図82・83 写図21-1・2

位置 U-47・48、V-47・48グリッド

重複 なし。

走向 南北方向

規模 調査長1.44m 幅0.12m～0.54m

深さ0.28m

形状 (傾斜 北端109.55m 南端109.27m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 現河道面によって削平をうけているため詳細は不明であるが、8号溝に付随した2カ所の凹面と同様に、水田区画内に配水するための水口的機能を有していたものと思われる。また、本溝に係する水田区画は、大区画であり小畦畔で仕切られた形跡が認められないことから、本来、大区画を呈していたものと推測される。しかしながら、湛水後に小畦を作ることもあり得るので断言はできない。

10号溝 付図 図82・83

位置 U-48グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ南北方向

規模 調査長1.40m 幅0.20m

深さ0.01m～0.26m

形状 (傾斜 北端109.52m 南端109.34m)

底面は丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

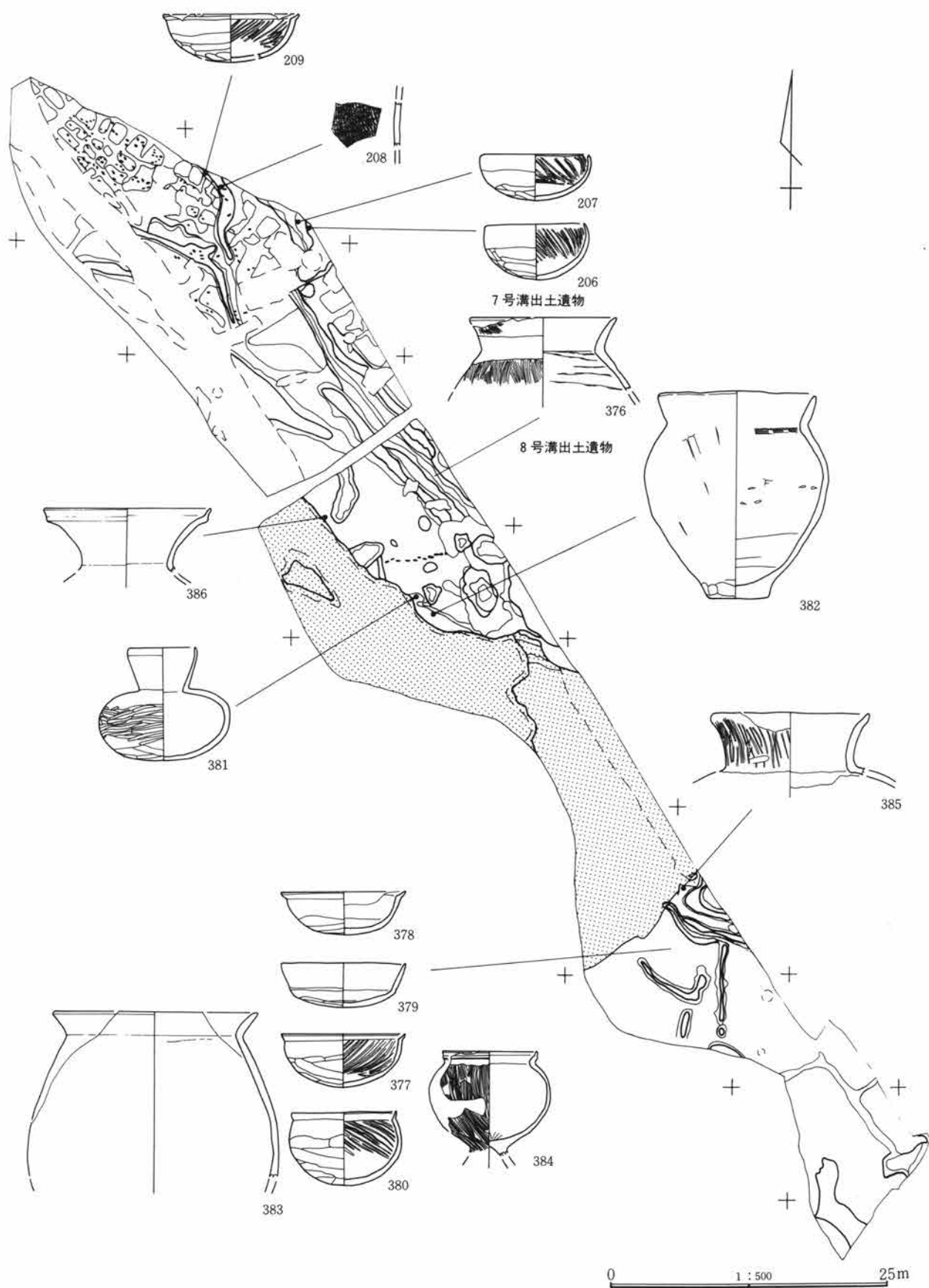


図85 III・IV区3面の主な遺物分布

調査所見 現河道面によって削平をうけているため詳細は不明であるが、9号溝と走向をほぼ同じくすることから、水田区画内に配水するための水口の機能を有していたと思われる。また、本溝と9号溝の様子からみて、おそらく台地裾縁に沿った溝がめぐっていたことが推測でき、8号溝からの入水口2カ所と本溝・9号溝、計4カ所から、取配水を可能にしていたものと思われる。

11号溝 付図 図82・83

位置 U-46・47、V-46・47グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ南北方向

規模 調査長4.73m 幅1.14m～1.90m
深さ0.03m～0.21m

形状 (傾斜 北端109.47m 南端109.36m)

底面は平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 形状からみて、水田区画に伴う溝であったのか詳細は不明であるが、IV区南端部で同様な形状を持ち、しかも大区画内に配水するための機能を有する溝が検出されていること等からみて、おそらく大区画内に配水するための幅広の溝と考えられる。

12号溝 付図 図83・85 写図22-4

位置 N-55、O-54・55グリッド

重複 9号溝に先行する。

走向 ほぼ東西方向

規模 調査長10.70m 幅0.64m～2.00m
深さ0.07m～0.18m

形状 (傾斜 北東端109.60m 東端109.57m)

底面はほぼ平坦であり法面は緩やかに立ち上がる。

底面幅はほぼ一定である。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 台地裾縁を迂回する溝であり、畦畔に沿って走向することから、水田に伴う人為的な溝と思わ

れる。

13号溝 付図 図83・84 写図22-4

位置 O-54・55、P-54グリッド

重複 12号溝に後出する。

走向 北西から湾曲して東に延びる。

規模 調査長7.40m 幅0.68m～1.00m
深さ0.05m～0.10m

形状 (傾斜 北西端109.60m 東端109.50m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 台地裾縁から走向し水田区画の水口に連結することから、水田に伴う人為的な溝と思われる。

14号溝 付図 図83・84

位置 K・L-59グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ東西方向

規模 調査長3.10m 幅1.75m～1.80m
深さ0.15m

形状 (傾斜 東端109.40m 西端109.35m)

底面はほぼ平坦であり、法面の立ち上がりは急勾配を呈する。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 遺存状態が部分的であり、詳細は不明であるが、大区画内に配水するための人為的な溝と思われる。

15号溝 付図 図83・84

位置 L-60、M-59・60グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向に延び南東方向に折れる。

規模 調査長5.84m 幅2.10m～2.50m
深さ0.10m～0.25m

形状 (傾斜 南東端109.20m 南西端109.05m)

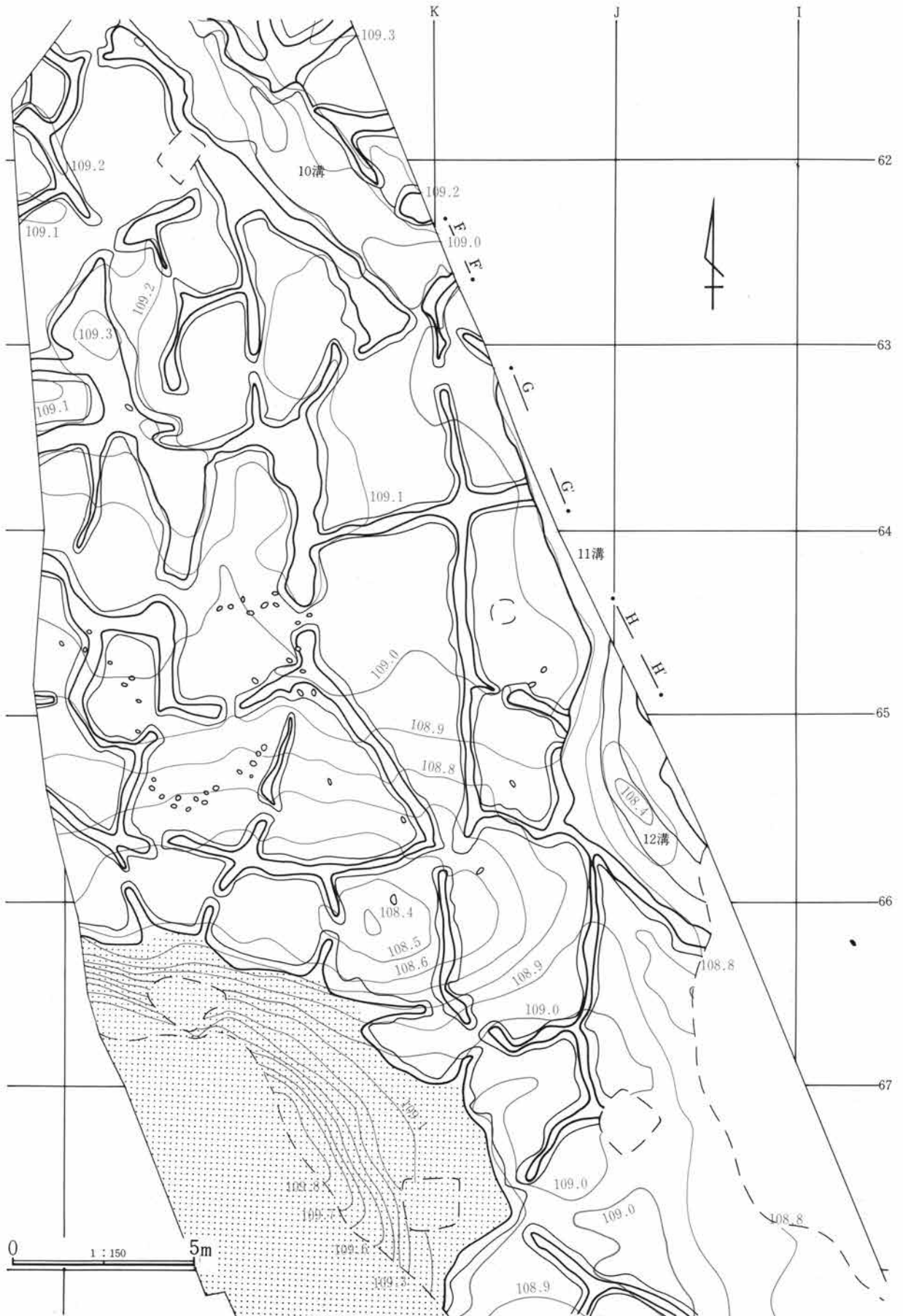


图86 V区3面北半部 FA下水田

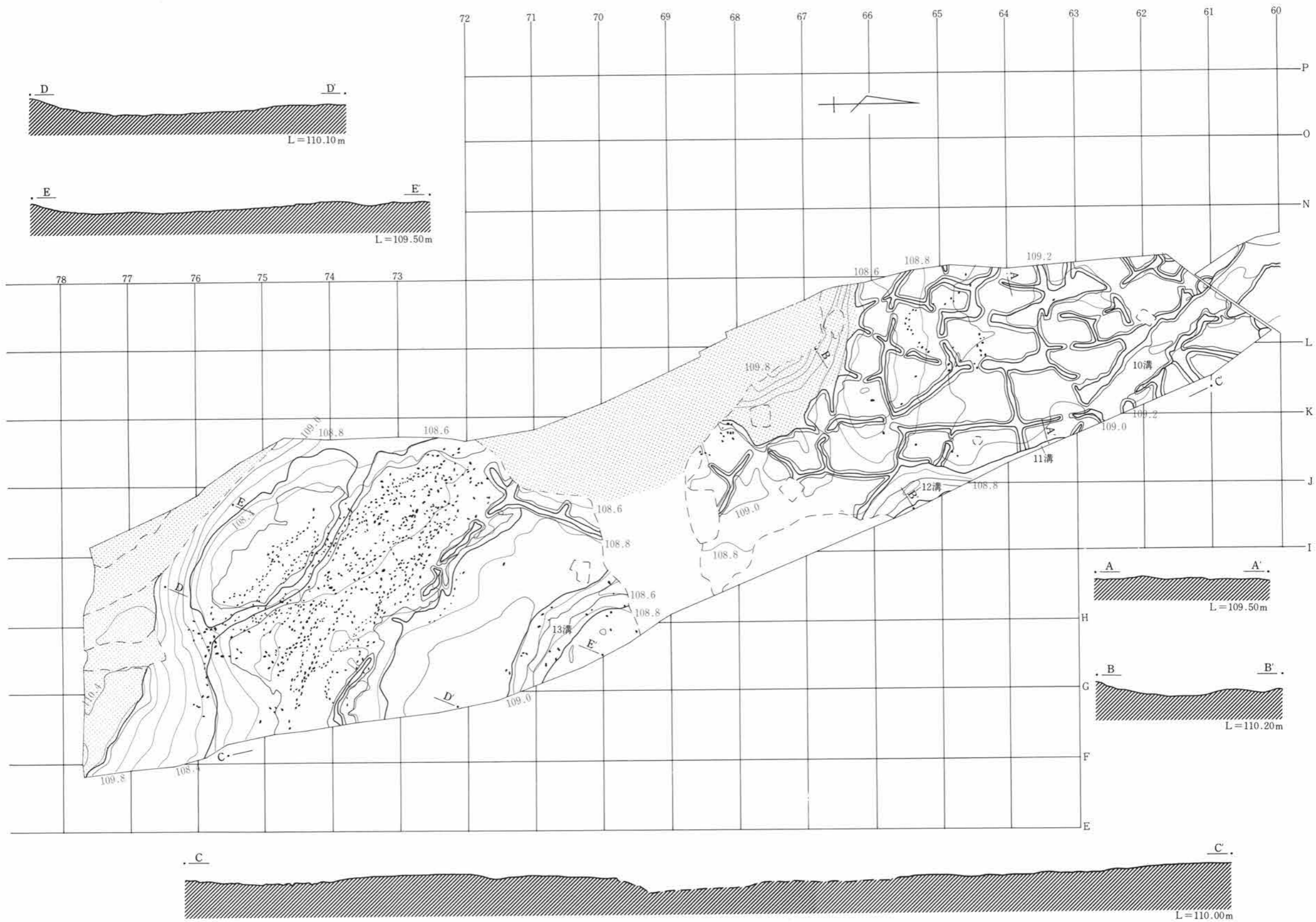


图87 V区3面 全体图

0 1:300 10m

底面はほぼ平坦であり、法面の立ち上がりは急勾配を呈する。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 走向がV区3面の10号溝へと続くことから、水田に伴う人為的な溝と思われる。また、幅広の形状は、14号溝と類似し、北東方向に突出している部分より大区画内に配水したものと考えられる。

8. V区のFA下水田

付図 図86～88 写真24、25

被覆層と残存状態 本調査区では、1面で検出された8・9号溝によって中央部に削平を受け、それによって北半部と南半部とに大きく分けられる。層厚5～60cmのFAによって埋没した水田面の遺存状態は極めて良好であるが、北半部の区画の検出にあたっては、畦畔の高さが微少であったため確認作業に難渋した。北半部で38枚、南半部で7枚の水田区画を検出したが、区画を成す畦畔の遺存状態からみて、北半部、南半部の水田域は、完全に作業を終えた段階とは考えられず、前年の収穫後に放置されたままの状態であった可能性が極めて高いと思われる。南半部の74～76ラインにかけての水田面は、僅かではあるが、凹状に窪んでいるのが看取できる。

水田域の地形 南半部のF～K-74～78ラインにかけては台地が確認され、台地内湾部の谷底平野に水田は展開されている。標高は台地部で最高点109.80m、調査区北隅で109.35m、南隅で108.20m、低地部間の比高は1.15mを測る。また、台地部の地形からみて、本調査区でもIV区と同様に、旧牛池川が大きく蛇行していた形跡が窺える。

畦畔の走向と区画 畦畔の走向は他の調査区と同様に、ほぼ北西—南東及び北東—南西方向を継承しているが、南北方向、東西方向のものも認められ、地形に応じた走向を呈している。北半部の区画は、下幅0.25～2.16mの小畦によって仕切られた多種多様な形状の小区画であるのに対して、南半部は下幅0.

45m～1.56mの大畦畔によってほぼ方形形状の大区画を呈する。北半部と南半部との区画の差異は、作業の進捗状況以外に、台地裾縁に作られたことによる保水性も要因となっているものと思われ、調査時点で検出された区画が、本来の完成された区画とは考え難い。なお、V区5面、南半部の水田域と区画の形状、畦畔の走向に類似性が認められる。

水田面の面積 本調査区では計測可能な水田区画は22枚あり、最大値21.48m²、最小値2.92m²を示し、北半部の平均面積は8.63m²を示す。

取配水の方法 調査区内を蛇行して走向する10・11・12・13号溝によって取配水が可能である。水口の位置は、K～M-65～67ラインに見られるように、畦畔の中央部にあり、しかも隣接区画と連続しているものもあれば、他区画へは連続しないものも認められる。おそらくここでも田越しによる取配水を採用していたか、水口設定の未作業部分であったと考えられる。

耕作土 FA下の黒色粘質土であり、FA及び下層との混土は認められない。

その他の遺構 IV区では単独の人の足跡が検出されたが、本調査区ではF～K-71～76ラインの大区画内において、夥しい数の足跡群が検出された。足跡は縦横に走向しているが、大畦畔の走向に沿って南東～北西方向、北西～南東方向が圧倒的に多く、北東～南西方向、南西～北東方向も看取できる。また、素足歩行の五指までも明瞭に看取できることからみて、水田面の状況としては、IV区北半部と同じ足跡が残る程度の程良い湛水状態、水田耕土面の硬度であったことには間違いはないが、本調査区の耕土は、IV区南半部の耕土よりもよりしまっていたものと思われる。また、足跡群は隣接するF～J-69～74ラインの大区画では殆ど検出されず、一部の水田区画と13号溝の限られた区画に集中している。足跡の歩行方向を調査した結果、区画を完全に縦断した痕跡は認められず、入路付近の足跡も稀薄であることから、区画内での何等かの作業途中であったとも考えられるが、大畦畔を踏み込んでいること等を考慮

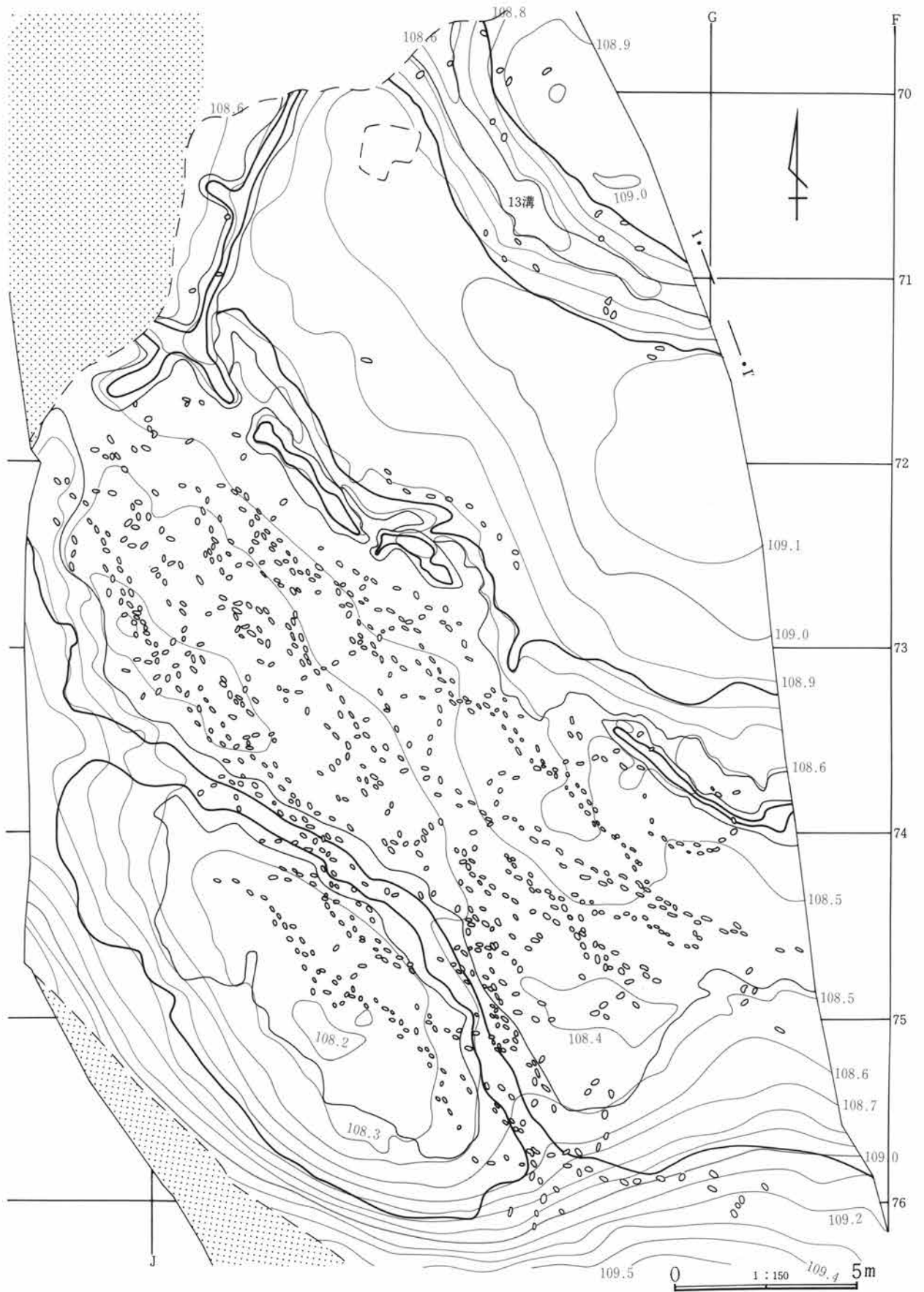


図88 V区3面南半部 FA下水田

すれば、あながち断言することもできず、他の作業場所へ移動するための抜け道の役割を果たした痕跡の可能性も残る。

水田面からの出土遺物 自然木、円礫

9. V区の溝

10号溝 付図 図86・87・89 写図24-3

位置 J-62、K-61・62、L-60・61グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長12.3m 幅1.40m~2.60m
深さ0.08m~0.20m

形状 (傾斜 北西端109.20m 南東端108.95m)
底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 IV区南端部の15号溝から本溝を経て、11・12号溝へと続く一連の流れを有する溝である。溝の走向は、畦畔間を通っていることや溝幅もほぼ一定で整った形状を示すこと等から、水田区画に伴って作られた人為的、意図的な溝であると思われる。

11号溝 付図 図87・89

位置 J-63・64グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ南東方向

規模 調査長7.60m 幅(0.20m~0.45m)
深さ0.05m

形状 (傾斜 北西端108.90m 南東端108.80m)
残存部分の底面はほぼ平坦であり、片側法面に凹凸が認められる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 調査区の北東壁際に位置するため、形状等の詳細は不明である。溝の南西片側法面の立ち上がり面のみを確認した。10号溝から12号溝へと続く

一連の溝であることは確かであるが、J-64グリッド内で認められる12号溝と本溝との南東端接続部分が、やや不自然に合流している様子から推測して、12号溝の本体部分は本溝以东にある可能性もあり、現時点での詳細は不明である。

12号溝 付図 図86・87・89

位置 I-64~66、J-64・65グリッド

重複 中・近世の旧河道によって切られる。

走向 J-65グリッドから南に走向し、途中、南東方向にくの字状に蛇行する。

規模 調査長5.05m 幅1.52m~3.08m
深さ0.10m~0.20m

形状 (傾斜 北端108.75m 南東端108.70m)
底面は僅かに丸みを帯び、凹凸が認められる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 10・11号溝からの一連の流れを持つ人為的な溝と思われるが、J-65グリッド内で区画を成す畦畔を切って走向していること等から、旧牛池川の河道をそのまま取配水のための溝として利用した可能性も高いと考えられる。

13号溝 付図 図87~89 写図25-5

位置 F-71、G-70・71、H-69~71グリッド

重複 なし。

走向 東から緩やかに湾曲して北上する。

規模 調査長10.84m 幅1.95m~3.02m
深さ0.21m~0.32m

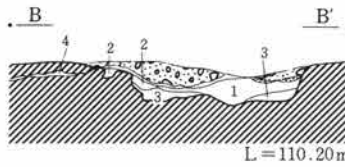
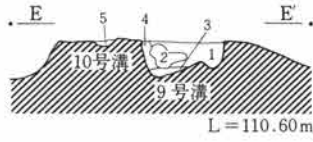
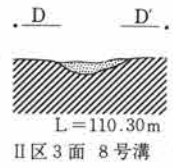
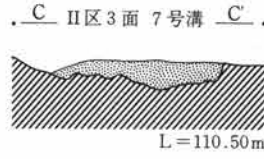
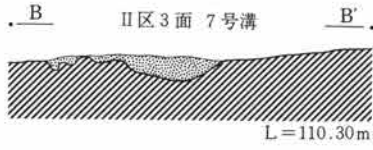
形状 (傾斜 北端108.55m 東端108.80m)
底面は僅かに丸みを帯びるがほぼ平坦であり、凹凸が認められる。

埋没土 FAが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 溝の勾配は北-東で比高0.25mを示すが、12号溝の標高からみて、おそらく12号溝から本溝を経て、南東方向へ向かう溝であったと思われる。また、溝の規模からみて、大区画内に配水するための

第3章 検出された遺構と遺物

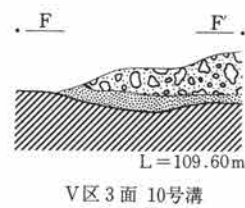
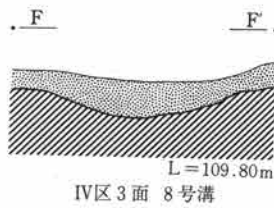
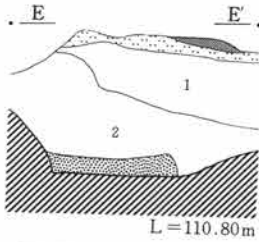


II区3面 10・9号溝

- | | |
|-----------|----------------|
| 1 灰褐色土 | 黄褐色砂岩粒、砂岩片を含む。 |
| 2 黄褐色砂質土 | しまり弱い。 |
| 3 暗黄褐色砂質土 | しまり弱い。 |
| 4 黒灰褐色土 | しまり弱い。 |
| 5 黒灰色土 | しまり強い。 |

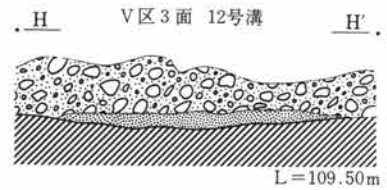
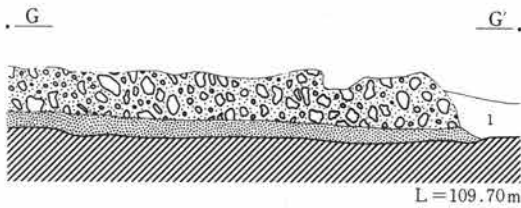
III区3面 7号溝

- | | |
|-------------|-------------------|
| 1 赤褐色砂層 | 間に灰褐色シルトをレンズ状に挟む。 |
| 2 灰紫色シルト層 | 3を含んだ部分あり。ラミナ状。 |
| 3 赤褐色砂質土 | 有機物を多く含む。 |
| 4 暗灰紫色シルトFA | |



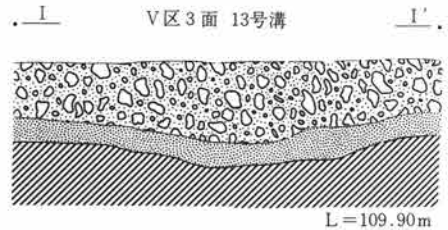
IV区3面 7号溝

- | | |
|-----------|--------------------------------------|
| 1 灰褐色シルト層 | 灰色砂、橙色砂の
薄い層を挟む。 |
| 2 灰色砂層 | 径5~10cmの小礫
を多量に含み、し
まり強い。鉄分沈着。 |



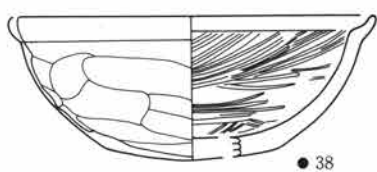
V区3面 11号溝

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 下層に灰色砂、灰白色砂を含み、径5~20cmの
小礫を多く混入。 |
|--------|-------------------------------------|

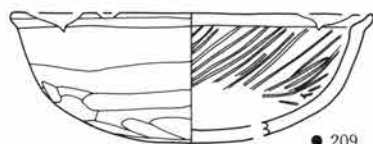
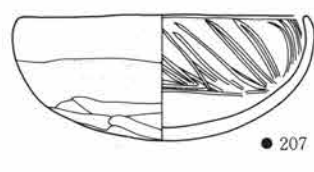
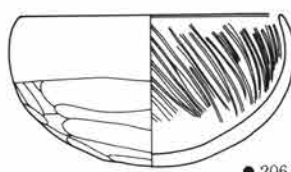


0 1:60 2m

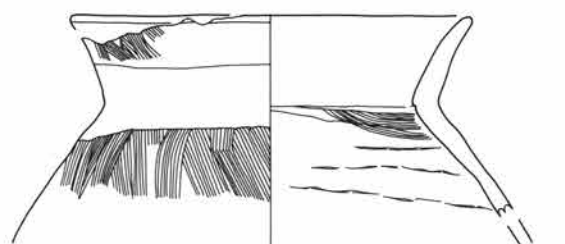
図89 II区3面 7~10号溝、III区3面 7号溝、IV区3面 7・8号溝、V区3面 10~13号溝土層断面



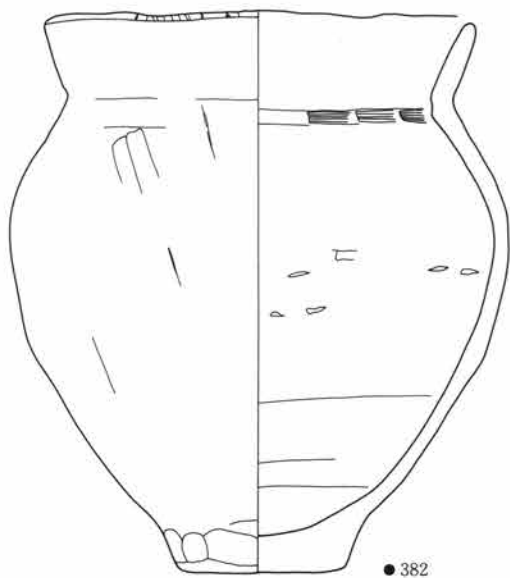
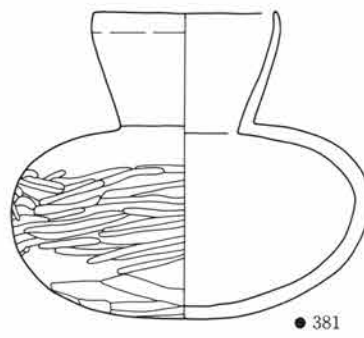
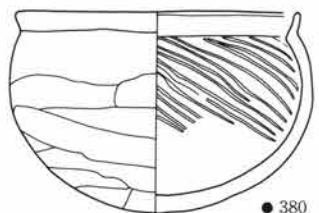
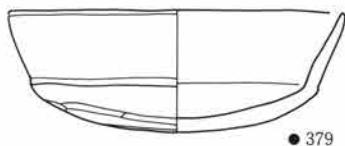
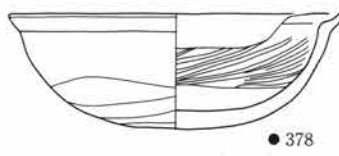
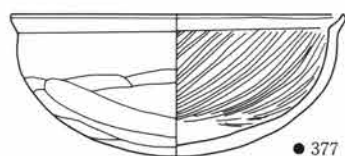
I区3面 グリッド



7号溝



8号溝



IV区3面 グリッド

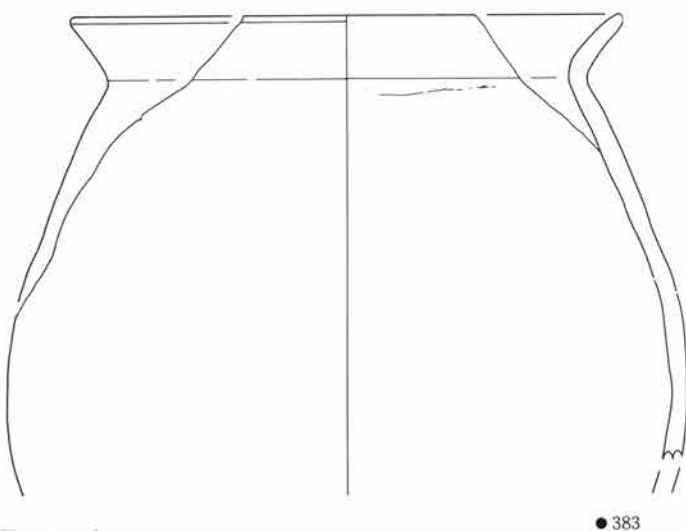


図90 I区3面 グリッド、III区3面 7号溝、IV区3面 8号溝、グリッド(1)出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

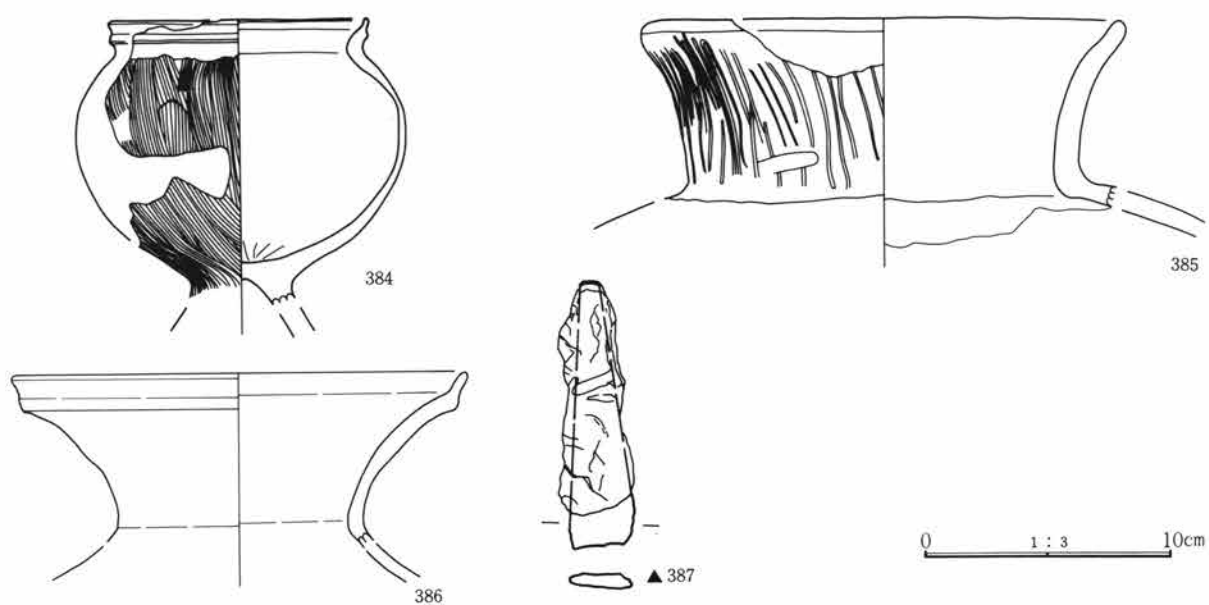


図91 IV区3面 グリッド出土遺物(2)

機能を持つ溝と思われるが、12号溝と同様に、旧牛池川の河道をそのまま溝として利用した可能性も高い。

第4節 4面の調査

1. 概要

II区からV区にかけて、FA下黒色粘質土からAs-C直上までの土層中より、4面に相当する遺構・遺物を検出した。検出された遺構は主として水田址と溝であり、IV区南端部では、4面層中より3面の水田址を検出し、また、溝からは土器を含む多量の木製品が出土した。

FA下黒色粘質土とAs-Cまでの層厚は、調査区によって多少差異はみられるものの、両テフラの残存状態の良好な所で約20cm～45cmを測る。FA下黒色粘質土は、上層が古墳時代後期に比定される3面の遺構面であり、本遺跡では水田耕土にあたることは前述した通りである。この黒色粘質土上層は、土層断面の観察でも黒色が強調されているのが看取できる。3面と4面の区別を正確にするならば、3面は厚さ約2cm～10cmの水田耕土面、4面はそれよりも下層にあたるAs-C層直上までの黒色粘質土とすることができる。また、黒色粘質土層は大きく2～3層に区分することができ、下層にいくに従い色調がやや明るくなり、粘質から砂質またはシルト質に土質が変わっていく。さらに、中層には幾層かの砂層（As-Cの二次堆積層）が互層堆積し、薄いラミナ状を呈する。この砂層に伴って多量の木製品が検出された。木製品は溝の流路に従い、溝筋に沿って埋没している。また、溝以外からも多量の木製品が出土している状況からみて、かなりの流水が本調査区内に及び、それは洪水的な氾濫から流水が消滅するまでの一連の過程を物語っている。しかしながら、水田耕作はAs-C降下、堆積以降も継続され、その証左は、III区4面の井堰跡の検出、5面、30号溝の走向、形状を継承し、かつ多量の木製品を伴うIV区北半部の16号溝及び南端部の第3～1洪水砂下水田址の検出、プラント・オパール分析の結果等に求めることができる。

溝は、II区で2条、III区で16条、IV区で13条、V区で3条検出され、木製品を多量に伴う溝と稀薄な溝とに分けられる。4面の溝の認定条件として、溝の確認面がFA下水田耕土面よりも下位にあり、しかも埋没土が流水作用に伴って堆積した砂層及び砂質土、もしくは下層に堆積するAs-C層を削り出した二次堆積層であるということが言える。また、検出された溝の底面は、As-C層及びAs-C下の黒色粘質土（水田耕土）を掘り込んでいるものが殆どであり、5面の遺構面に削平という形で影響を及ぼしているものもある。

III区は木製品が多量に出土した調査区であり、その数は約2,500点に及ぶ。その理由として、III区は低地幅が一番狭いことから、地形的な要因による複雑な流水の影響を受けたものと思われる。また、木製品は溝に伴って埋没していたものが殆どであるが、溝に伴わないグリッド取り上げの木製品も多量に検出されていることから、前述したように調査区（谷底平野）全域に渡って洪水的な氾濫の影響を受けたものと思われる。

II区・IV区（南端部を除く）・V区の調査区では、4面の層中より単独の遺構面を検出したにとどまったが、III区では、砂層を境界面として上層と下層から検出位置を異にする溝を検出した。溝は多量の木製品を伴い埋没していたが、形状、走向ともに不規則であり、断片的なものも多く、溝個々の機能的な詳細は不明な部分が多い。おそらく、FA下黒色粘質土が3面の水田耕土として安定するまでの間に、幾度かの流水の影響を受け、流路に従って溝筋を形成し、氾濫により漂流した木製品が流水の消滅に伴って埋没していったものと考えられる。その期間は4世紀初頭のAs-C降下、堆積以降、6世紀初頭以前の間と考えられ、砂層の堆積が氾濫の証とも言える。しかしながら、X-41グリッド内の調査区北東壁より、井堰跡と思われる施設を検出したことにより、溝が河川の氾濫により形成されたものばかりではなく、明らかに人為的、計画的な走向、機能を有する

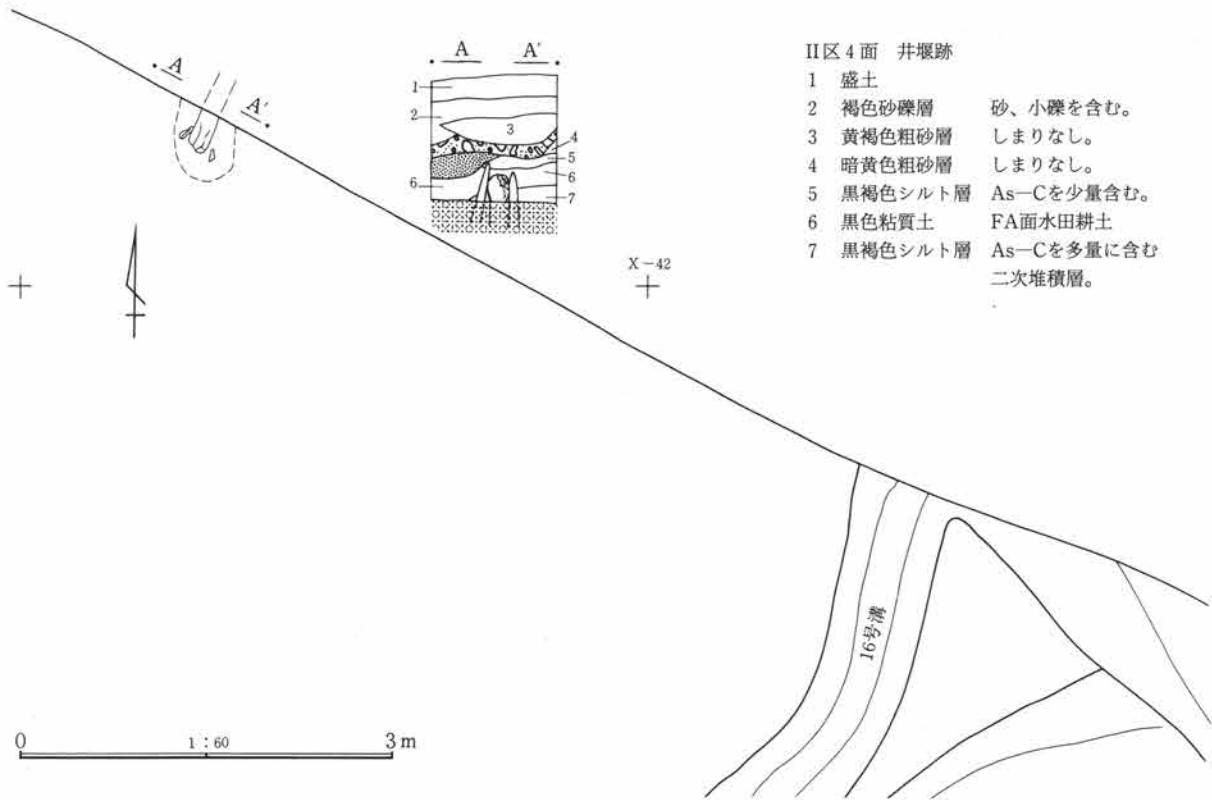


図92 III区4面の井堰跡

溝が存在したことが明らかとなった。検出された井堰付近の地形は、北東方向にかけて僅かに傾斜していることから、検出部分は、おそらく溝の立ち上がり法面に設けられた片側の固定施設と思われる。また、W-42グリッド内で16号溝に接続する溝の片側法面らしき落ち込みが認められることからみて、この落ち込みは井堰を伴う溝の延長部分であった可能性が高い。井堰を構築する木材は、断面形が半円形の厚みのある自然木を堰板とし、両脇を2本の割り杭で挟み固定されていることから、流水を遮断して水量調節をすることによって、水田区画への配水を可能にしたものと思われ、As-C降下以降も水田耕作を営んでいたことが推測できる。しかしながら、施設の延長部分は、調査区域外にあたるため、検出部分以外の詳細については不明である。

IV区南端部を除くII区からV区にかけては、4面の層中に見られる砂層 (As-Cの二次堆積層) の残存状態が極めて不良であったため、遺構面としてとらえることができず、水田面の確認までには至らな

かった。ゆえに、検出された溝がどのような機能を持ち、自然に形成されたものか、または人為的なものかの区別は不明である。なお、溝の検出は木製品の取り上げと同時に進行させ、脆弱な木製品の取り上げを優先させたため、取り上げ終了後の形状を記録したにとどまり、遺構面としての詳細な測量実測は行われなかった。

土層断面を良く観察してみると、前述したFA下黒色粘質土の中層にあたる砂層は、ラミナ状に堆積しているものの波状の高まりが認められる箇所が幾つか確認された。調査区によってその厚さが数ミリのものから数センチのものまでとまちまちであり、また、広がりも部分的なものから広範囲に及んでいるものまでである。そんな中であって、IV区南端部では広範囲な広がりが確認できた。ラミナ状に堆積する砂層を取り除いた面が4面の水田耕土面であり、As-C下水田以来の水田耕土面の検出は、上層より第3洪水砂下水田、第2洪水砂下水田、第1洪水砂下水田と仮称し、プラント・オパール分析の結果、

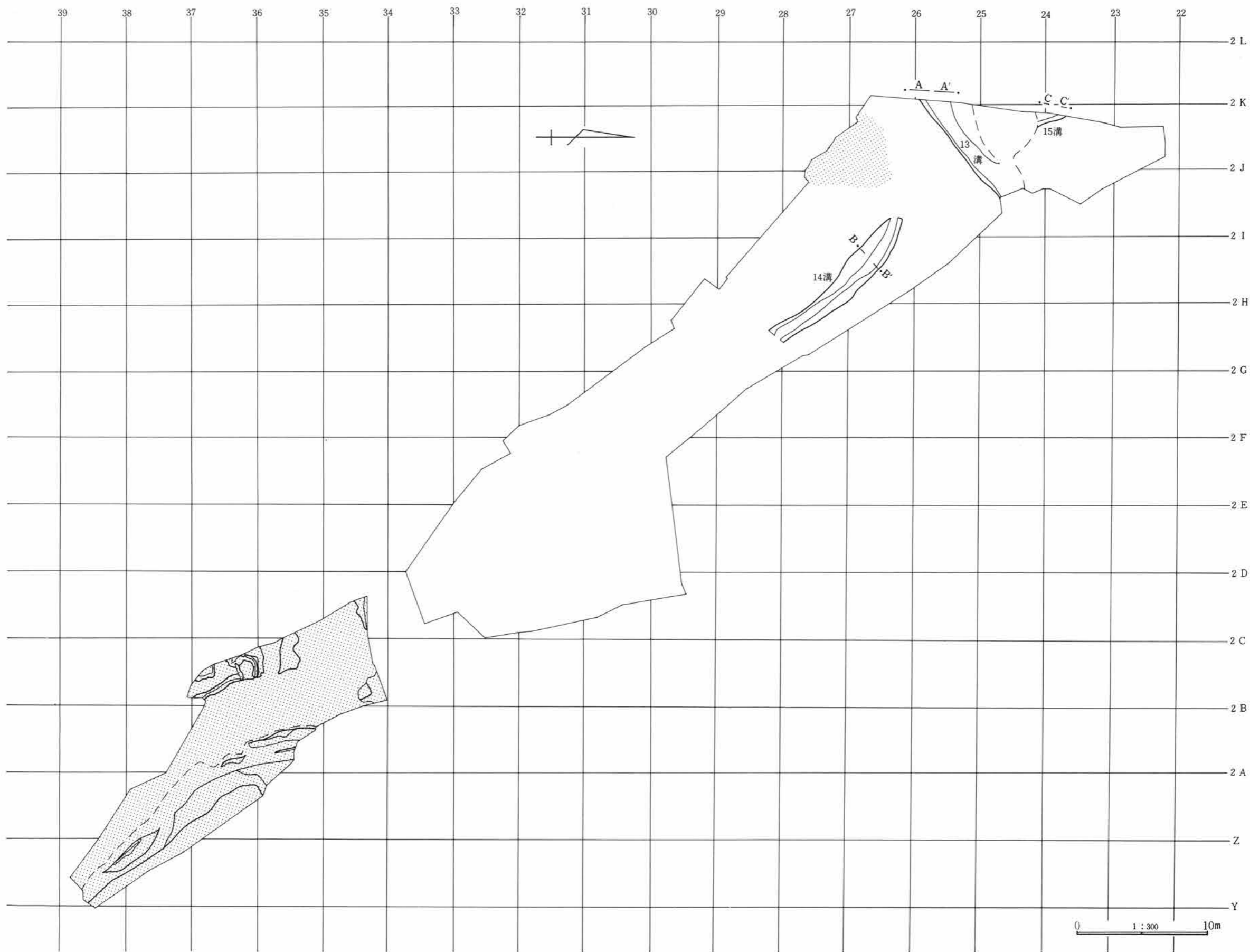


图93 II区4面 全体图

3面ともに水田耕土であった可能性が高いという証左を得られた。しかしながら、第2、第1洪水砂下水田は区画や畦畔が明瞭ではなく、洪水的影響によって形成されたと思われる数条の溝が走向する遺構面であり、形状的に水田面と認定するには問題が残るかもしれない。また、プラント・オパール分析においても、FAの様な不透水層が上層には介在しないので、植物珪酸体が流水に伴い3面の水田耕土中から4面の層中へ移動した危険性も払拭しきれない。

第1洪水砂下水田面を覆うAs-Cと細砂混じりの灰オリブ砂層は、多量の木製品を包含し、出土遺物の点において、上層の埋没砂層と明らかな相違を見せる。他の調査区から出土した木製品も、4面最下層の砂層からの出土が最も多かったことからみて、第1洪水砂下水田は、一連の流水作用の影響を受け、しかも木製品の堆積し易い状況下であったと思われる。また、第1洪水砂下水田の耕土は、As-C層の上層約10cmの位置にあり、As-Cの降下、堆積による災害以降、本遺跡地において明らかに水田の土壌化が進んだことが窺える。しかしながら、遺構面を広範囲に追えなかったため、5面の区画及び畦畔の走向を継承していたかについての詳細は不明である。なお、第1洪水砂下水田は、上記の理由で遺構図としては記録されていない。

V区では、砂層の堆積が薄く、しかも広範囲に堆積していなかったため水田址の検出は認められなかったが、南半部より溝3条(14・15・16号溝)を検出した。溝の底面はAs-C層及び直下の黒色粘質土を掘り込み、埋没土は4面層中の最下位に位置する暗灰色砂層である。この溝に伴って、底面部分及び埋没土中より多量の遺物が出土した。出土した遺物の年代と4面の時期間はほぼ一致している。検出された3溝の形状、埋没土からみて、人為的に作られた溝ではなく、おそらくAs-C降下、堆積後、河川の流水作用によって自然的に形成されたものと思われる。

2. II区の溝

13号溝 図93・101・103 表 P269 写図70

位置 2 I-24・2 J-25グリッド

重複 5面、13号溝に後出する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長6.40m 幅1.78m~2.80m
深さ0.46m

形状 (傾斜 北東端109.00m 西端108.96m)

底面は丸みを帯び、法面の立ち上がりは南東方向に緩傾斜を呈する。

埋没土 As-C層及びAs-C下黒色粘質土を掘り込む粒子の細かい淡褐色・淡茶褐色砂層により埋没し、FAの純層堆積を上層に載せる。(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 コモアミ石

調査所見 時期はAs-C降下以降、FA下黒色粘質土が堆積するまでと思われる。また、粒子の細かい淡褐色砂層はFA下黒色粘質土中に広範囲に認められることから、水田耕土として安定する以前に極めて緩やかな流水、それも本調査区全域にわたって及んだものと考えられる。

14号溝 図93・94・101

位置 2 G-27・28、2 H-26・27、2 I-26グリッド

重複 5面、17号溝に後出する。

走向 西-南東方向

規模 調査長12.94m 幅1.12m~2.20m
深さ0.08m~0.31m

形状 (傾斜 南東端109.59m 西端109.52m)

2 H-27グリッドで底面幅は最小となり、西から南東方向にかけて僅かに湾曲する。底面は丸みを帯びる。

埋没土 底面にはAs-Cを極多量に含む暗褐色砂質土が堆積し、上層には細砂を含む暗褐色土が堆積する。(As-Cの二次堆積層)

第3章 検出された遺構と遺物

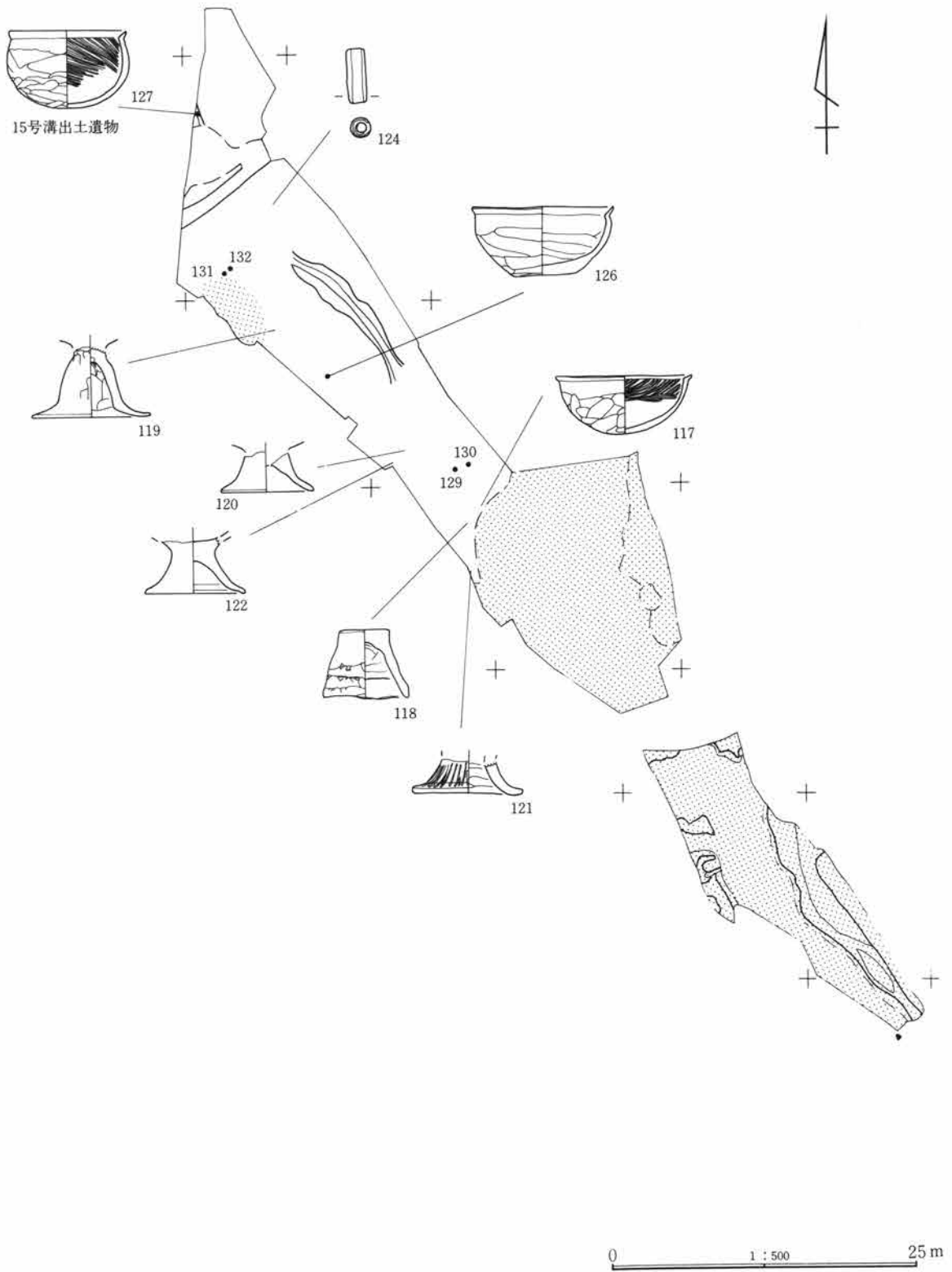


図94 II区4面の主な遺物分布

出土遺物 弥生の甕片・台付甕片

調査所見 溝自体は単独で存在するのには不自然であり、おそらく5面の17号溝の蛇行部分より流路を逸脱し本調査区内に流れ込んだものと思われる。

15号溝 図93・101・103 表 P249 写図70

位置 2J-23・24グリッド

重複 2面、2号溝に切られ3面の7号溝に先行する。

走向 長軸、南北方向より東へ20°振れる。

規模 調査長0.90m 幅(0.84m)
深さ(0.30m)

形状 (傾斜 北端109.70m 南端109.70m)
底面は僅かに丸みを帯びるが、ほぼ平坦である。

埋没土 As-C層を掘り込むAs-Cの二次堆積層。
埋没土上面は3面の7号溝の底面となる。

出土遺物 土師器碗・坏片・甕片・台付甕片

調査所見 溝はFA下黒色粘質土上層を切り込んでいることから、時期はAs-C降下以降、FAが堆積する以前と思われる。

3. III区の溝

9号溝 図95

位置 2A-41・42グリッド

重複 5面の25号溝に後出する。

走向 北西-南方向

規模 調査長(3.50m) 幅(1.00m)
深さ0.05m~0.19m

形状 (傾斜 北西端109.09m 南端109.17m)
底面は調査区西壁に向かって緩傾斜を呈する。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 調査区西壁際にあたり全容は不明である。

10号溝 付図 図95

位置 2A-41・42グリッド

重複 なし。

走向 北西から僅かに湾曲して南下する。

規模 調査長8.30m 幅0.75m~1.85m
深さ0.10m~0.39m

形状 (傾斜 北西端109.25m 南端109.01m)

底面幅は2A-41グリッドで最大となる。底面は丸みを帯びる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層が堆積する。(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 9号溝に近接し深さも一定でないことから、流水作用により形成されたものであり、人為的な溝を継承したものではないと考えられる。

11号溝 図95

位置 2A-40グリッド

重複 なし。

走向 東西方向

規模 調査長(1.00m) 幅(2.00m)
深さ0.12m~0.25m

形状 (傾斜 西端109.33m 東端109.30m)

底面は調査区北壁に向かって緩傾斜を呈する。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 調査区北西際にあたり全容は不明である。

12号溝 図95・96・103 表 P258・269 写図70

位置 Z-40・41、2A-41グリッド

重複 なし。

走向 南西-北東方向

規模 調査長5.50m 幅1.35m~2.70m
深さ0.07m~0.13m

形状 (傾斜 南西端109.48m 北東端109.46m)

底面は僅かに丸みを帯び、底面幅は不規則である。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器高坏・小型甕、須恵器甕、

第3章 検出された遺構と遺物

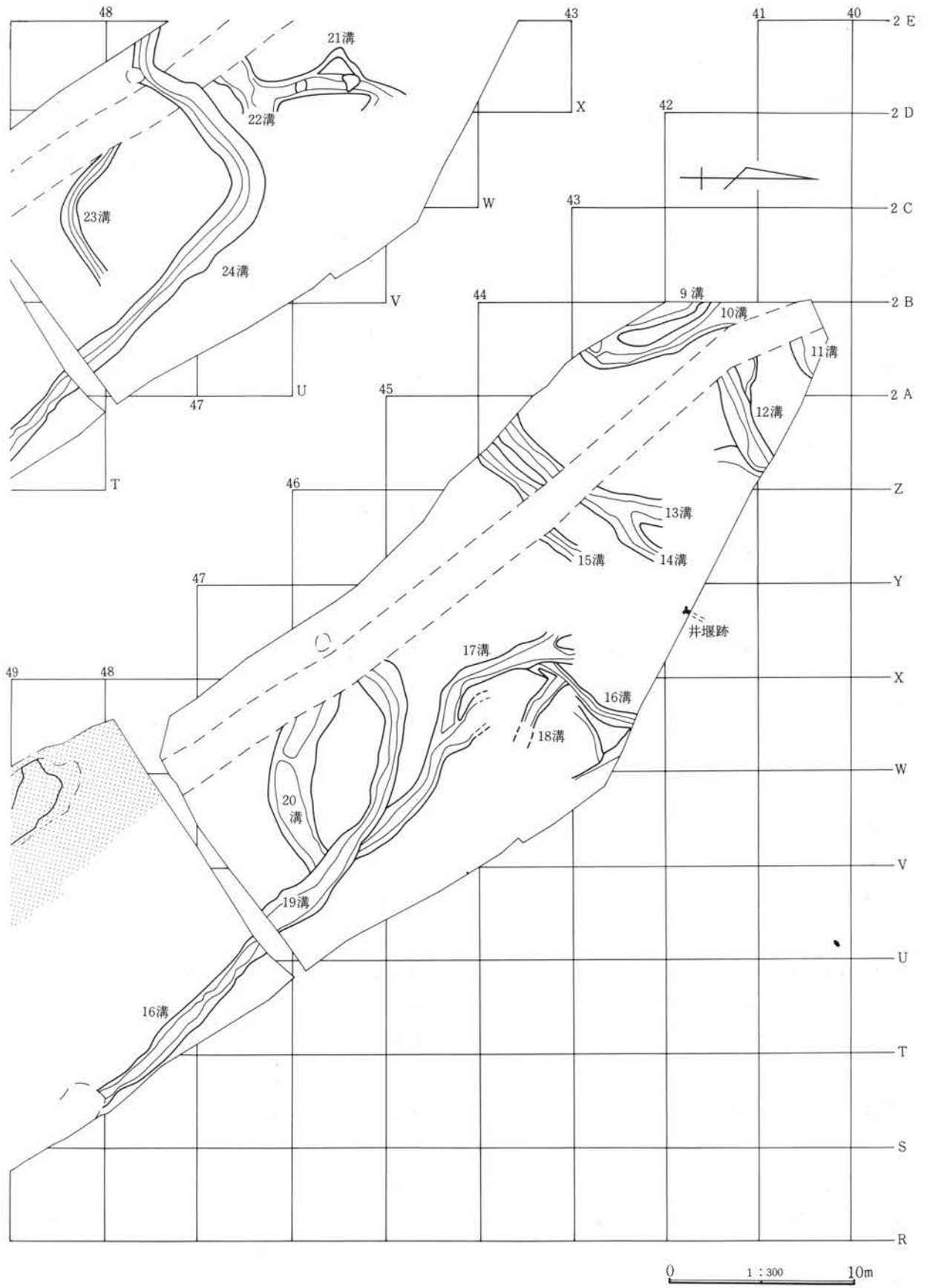


図95 III区4面 全体図

白玉

調査所見 1面の1号溝により削平され、南西端の延長部の形状は不明であるが、流水の影響により形成された溝と思われる。

13号溝 図95・96・103 表 P258 写図70・71

位置 Y-42、Z-42・43グリッド

重複 なし。

走向 南西-北東方向

規模 調査長(9.85m) 幅1.20m~1.45m

深さ0.04m~0.15m

形状 (傾斜 南西端109.44m 北東端109.33m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器高坏、縄文土器片

調査所見 14号溝と分岐するが、溝本体がどちらに属するかは不明であるが、形状からみて本溝になると思われる。

14号溝 図95

位置 Y-42グリッド

重複 なし。

走向 南西-北東方向

規模 調査長2.00m 幅0.85m~1.40m

深さ0.04m~0.08m

形状 (傾斜 南西端109.38m 北東端109.33m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 13号溝と同様に、溝本体がどちらになるのかは不明であるが、おそらく13号溝から分岐したものと思われる。

15号溝 図95

位置 Y-42・43、Z-43グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向

規模 調査長(7.80m) 幅0.90m~1.20m

深さ0.04m~0.10m

形状 (傾斜 北東端109.47m 南西端109.45m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。1面の1号溝の削平部分は、おそらく蛇行していたと思われる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 1面の1号溝により分断されているが、攪乱部分で湾曲していたと思われる。

16号溝 図95・97・104 表 P258 写図70・71

位置 W-42、X・W-43グリッド

重複 17号溝に先行し、18号溝に後出する。

走向 北-南西方向

規模 調査長6.35m 幅0.50m~0.80m

深さ0.03m~0.12m

形状 (傾斜 北端109.63m 南西端109.24m)

底面はほぼ平坦であり、底面幅は一定である。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、須恵器碗・甕・土師器・鉢

調査所見 北方向からの流れ込みにより形成された溝と思われる。

17号溝 図95~97

位置 V-44・45、W-44、X-43・44グリッド

重複 24・16号溝に後出し、19号溝に先行する。

走向 北から蛇行して南下する。

規模 調査長16.35m 幅1.00m~1.45m

深さ0.03m~0.20m

形状 (傾斜 北端109.53m 南端109.30m)

底面は僅かに丸みを帯び、底面幅は不規則である。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層 (As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、縄文土器片

調査所見 形状からみて自然的に形成された溝と思われる。

18号溝 図95・97

位置 W-43グリッド

重複 16号溝に先行する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長3.00m 幅0.70m~0.90m
深さ0.03m~0.06m

形状 (傾斜 北西端109.24m 南東端109.24m)

底面はほぼ平坦であり、底面幅は一定である。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層 (As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 形状からみて自然に形成されたものと思われる。

19号溝 図95・96・104 表 P258・259 写図70

位置 U-45・46、V~X-44・45グリッド

重複 17・24号溝に後出する。

走向 南西方向から大きく湾曲して南東方向に延びる。

規模 調査長16.30m 幅0.80m~2.15m
深さ0.05m~0.30m

形状 (傾斜 南西端109.34m 南東端108.90m)

底面は丸みを帯び、法面の立ち上がりは緩やかである。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層 (As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器高坏、弥生土器片、土製円盤

調査所見 南東端の走向位置は、下層の24号溝と一致することから、下層の溝の走向を一部継承したものである。

20号溝 図95~97 表 P259 写図71

位置 U-45、V・W-45・46グリッド

重複 17号溝に後出し19号溝に先行する。

走向 西から湾曲し北東方向に延びる。

規模 調査長8.90m 幅1.50m~2.35m
深さ0.04m~0.19m

形状 (傾斜 西端109.38m 北東端109.33m)

底面は僅かに丸みを帯び、凹凸が認められる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層 (As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器台付甕

調査所見 形状からみて自然的に形成されたものと思われる。

21号溝 図95

位置 X-42~45グリッド

重複 4面上層の9~20号溝に先行する。

走向 ほぼ南北方向

規模 調査長5.80m 幅0.75m~1.95m
深さ0.06m~0.19m

形状 (傾斜 北端109.25m 南端109.25m)

底面はほぼ平坦であるが、凹凸が認められる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層 (As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 4面の下層面の溝であり、形状からみて自然的に形成されたものと思われる。

22号溝 図95

位置 W・X-44グリッド

重複 4面上層の9~20号溝に先行する。

走向 南東-東方向

規模 調査長3.20m 幅1.00m
深さ0.05m~0.11m

形状 (傾斜 南東端109.25m 東端109.23m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層 (As-Cの二次堆積層)

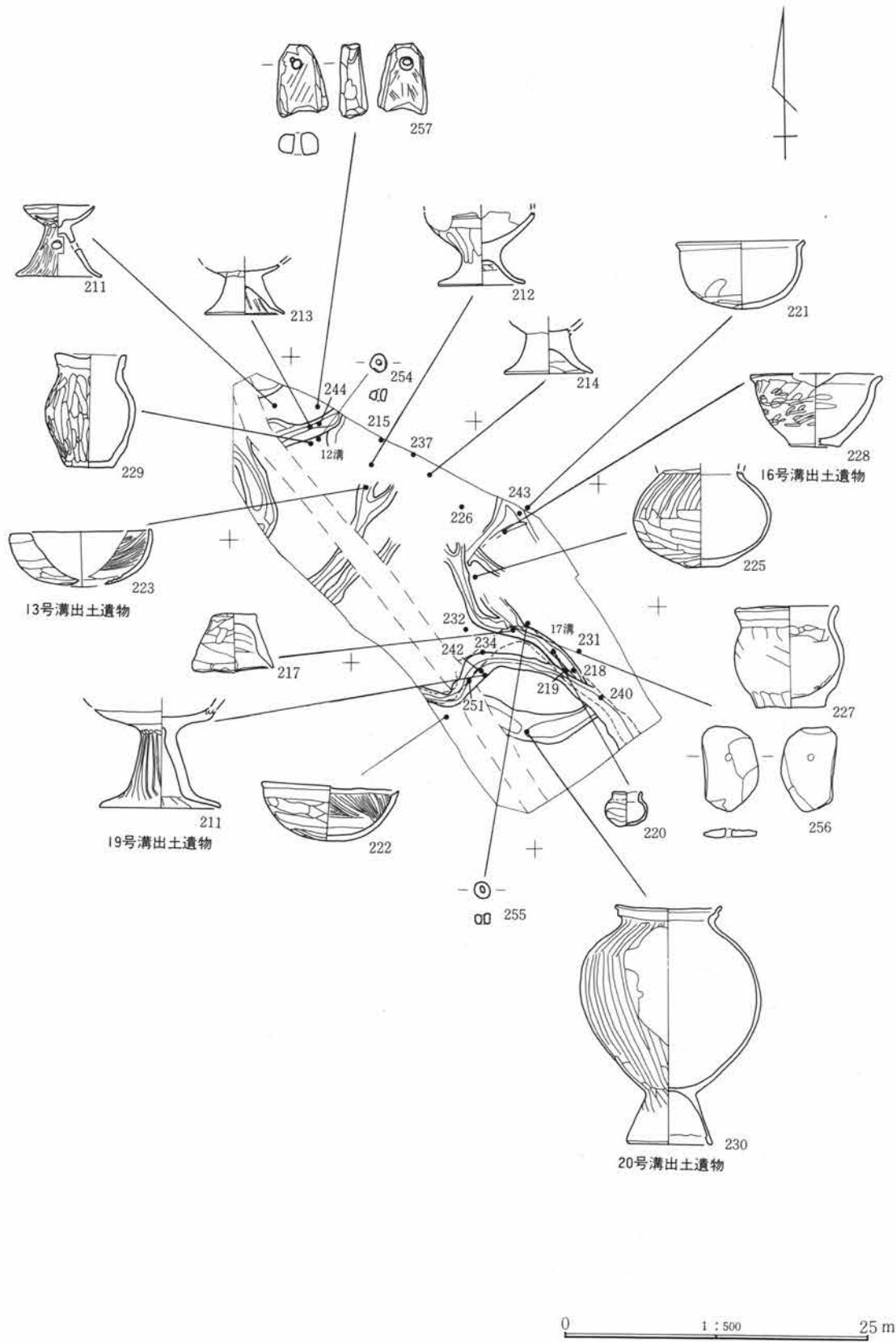


図96 III区4面の主な遺物分布

出土遺物 木製品

調査所見 4面の下層面の溝であり、形状からみて自然的に形成されたものと思われる。

23号溝 図95・97

位置 V-46、W-45・46グリッド

重複 4面上層の9～20号溝に先行する。

走向 北西方向からくの字状に湾曲し北東方向に延びる。

規模 調査長7.75m 幅0.75m～0.90m
深さ0.03m～0.10m

形状 (傾斜 北西端109.22m 北東端109.05m)

底面はほぼ平坦であり、底面幅も一定している。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 4面の下層面の溝であり、自然的に形成されたものか、人為的な溝かは不明である。

24号溝 図95～97・104 表 P258・259・269 写図26-2、33-2・4、71

位置 U-45・46、V-44・45、W-44、X-44・45グリッド

重複 4面上層の9～20号溝に先行する。

走向 西方向からくの字状に折れ、南東方向に延びる。

規模 調査長23.00m 幅1.00m～1.80m
深さ0.05m～0.33m

形状 (傾斜 西端109.11m 南東端108.85m)

底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FA下黒色粘質土及び粒子の細かい灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器脚台・小型甕・円盤・ミニチュア土器、須恵器甕、縄文土器片、弥生土器片、白玉

調査所見 4面の下層面の溝であり、IV区4面下層の16号溝へ続く溝である。走向距離は長く、形状からみて人為的な溝を継承したものと思われるが、機

能的な詳細は不明である。

4. IV区南端部の第3洪水砂下水田

付図 図97・98・102 写図28-1

被覆層と水田の残存状況 FA下黒色粘質土中の最上位に堆積する層厚約3cm～10cmの灰黄色砂(As-Cの二次堆積層)により埋没した第3洪水砂下水田は、不定形な区画ながらも9枚検出され、その残存状態は下層の第1、第2洪水砂下水田に比べ良好であった。

水田域の地形 標高は調査区北隅で109.20m、M-59グリッドで108.70m、南隅で109.00mを示し、南西方向にかけて0.30m～0.50mの傾斜を有する。

畦畔の走向と区画 畦畔の走向は、3面・5面の区画で看取されるように、ほぼ北西-南東方向、北東-南西方向を継承している。下幅0.62m～1.15mの大畦畔の中をさらに下幅0.35m～0.90mの不明瞭な小畦によって仕切られる。区画は比高を異にする段違いのフラット面として検出され、形状、規模ともに多様である。

水田面の面積 調査範囲の関係で、独立して計測できる区画は1面のみであるが、全体的に区画が大きく平均値7.53m²を測る。

取配水の方法 検出された区画に関係すると思われる溝は確認されなかった。おそらく自然の地形的傾斜を利用した田越しの方法を採用していたものと思われるが、詳細は不明である。また、隣接する17号・18号溝の立ち上がり法面が、本水田址と同様に4面の土層中の上位で確認されていることから、水田址と同時期に機能していた溝の可能性も考えられるが、南半部での水田址は検出されていないため、詳細は不明である。

耕作土 シルト層が互層に堆積する色調のやや明るい黒褐色粘質土であり、葦の茎、根を含んでいることから、泥炭層と思われる。

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

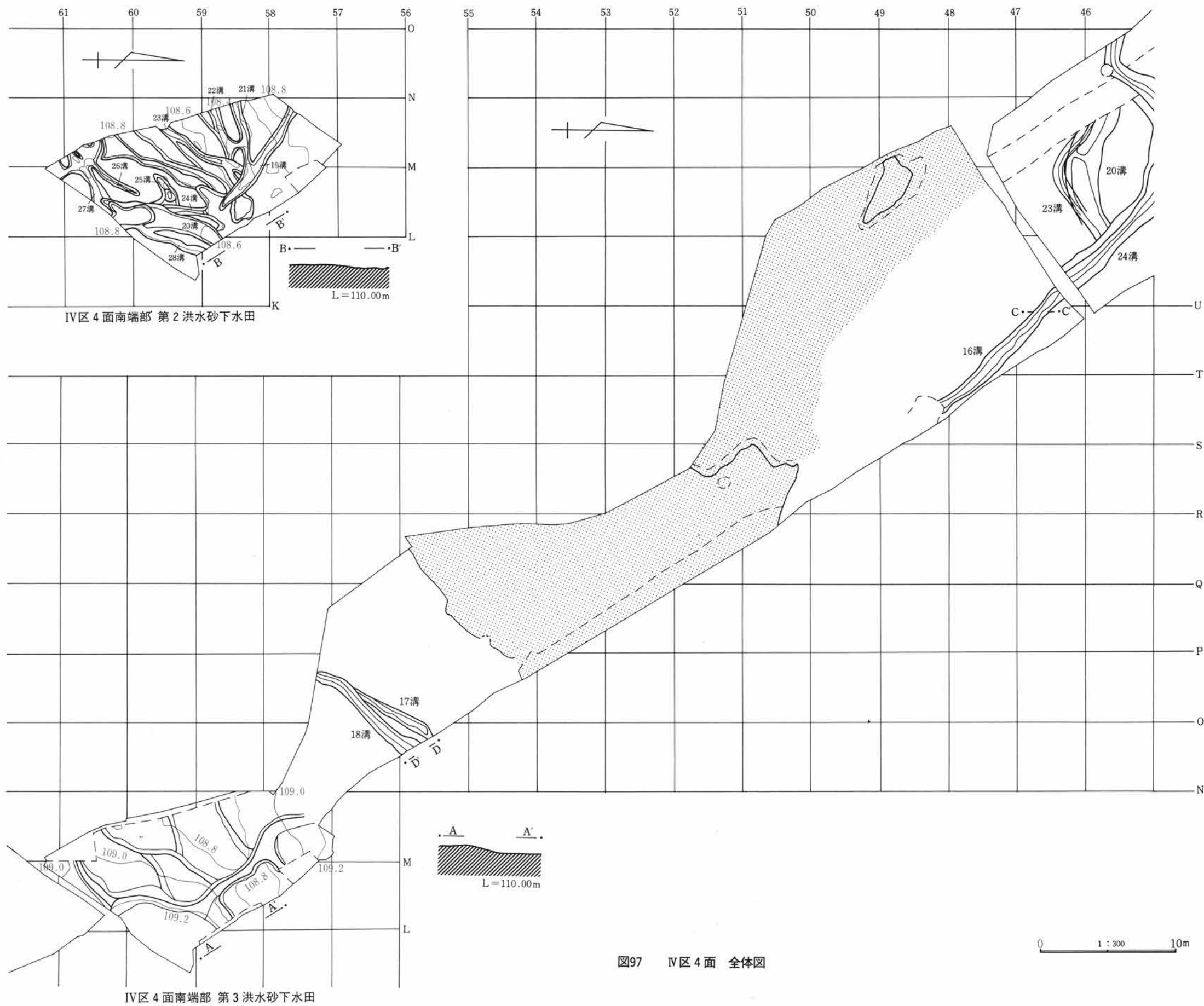




図98 IV区4面南端部 第3洪水砂下水田

5. IV区南端部の第2洪水砂下水田

付図 図97・102 写図28-2

被覆層と水田の残存状況 FA下黒色粘質土中の中に堆積する厚さ約3~20cmの橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層(As-Cの二次堆積層)によって埋没した第2洪水砂下水田は、一部に畦畔と見受けられるものがあるものの、整然とした区画は看取できず、流水の影響によって形成された溝状遺構が水田面に残存する程度であった。

水田域の地形 標高は調査区北隅で108.95m、南隅で108.85m、比高0.10mを測る。

畦畔の走向と区画 所々に高まりは認められるものの、畦畔と認定できるまでには至らなかった。したがって、区画も形状をとどめるものは検出されず、僅かに不定形なフラット面が残存するのみである。

水田面の面積 畦畔、区画が不明瞭のため計測不能である。

取配水の方法 溝は10条検出されたが、4面層中に上下重なり合う形で走向し、繁雑となっているため、水田面に伴う溝であったかは不明である。

耕作土 葦の茎、根を少量含み、黒色・灰色シルトが互層に堆積するオリブ黒色粘質土。泥炭層と思われる。

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

6. IV区の溝

16号溝 図97・101 写図72-2

位置 S-47・48、T-46・47、U-46グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長11.60m 幅0.60m~1.30m

形状 (傾斜 北西端108.86m 南東端109.03m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 FA下黒色粘質土中の灰白色砂層(As-Cの二次堆積層)により埋没する。

出土遺物 木製品、土器片

調査所見 5面の30号溝と走向がほぼ一致する。土層断面の観察結果からみて、本溝は5面の30号溝の流路を継承して流れていたものと思われる。自然的に形成されたものか、人為的なものかは関連する遺構が検出されなかったため機能ともに不明であるが、おそらく人為的な溝であったか、本来の旧河道であったかのいずれかと考えられる。本溝からは、多量の木製品等が出土している。

17号溝 図97・101 写図27-3

位置 N-55、O-55・56グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向

規模 調査長6.25m 幅0.31m~0.92m

深さ 0.05m

形状 (傾斜 北東端108.70m 南端108.30m)

底面は丸みを帯び、底面幅は不規則である。

埋没土 橙色砂層・砂礫層・灰色砂層(As-Cの二次堆積層)により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 16号溝と同様に、関連する遺構が検出されなかったため、自然的に形成されたものか、人為的なものかは不明であるが、形状からみて後者の可能性も高い。また、未確認ではあるが、16号溝の延長部と本溝の延長部が接続していたものと推測される。16号溝との違いは、木製品を包含しなかったことである。

18号溝 図97・101 写図27-3

位置 N-55・56、O-56・57グリッド

重複 なし。

走向 北東から僅かに湾曲して南下する。

規模 調査長8.85m 幅0.55m~1.60m

形状 (傾斜 北東端108.60m 南端108.30m)

底面は僅かに丸みを帯び、底面幅はほぼ一定である。

埋没土 橙色砂層・砂礫層・灰色砂層(As-Cの二次堆積層)により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 17号溝と同様に自然的に形成されたものか、人為的なものかは不明である。17号溝と同様に、木製品を包含しない。

19号溝 付図 図97

位置 L-58、M-57・58グリッド

重複 23号溝に後出する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長8.95m 幅0.53m~1.30m
深さ0.05m~0.10m

形状 (傾斜 北西端108.80m 南東端108.65m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。溝の傾斜、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。また、複雑に重複し合っている19~25号溝から、同時期の溝だけを選別することが可能ならば、意外と整然とした溝の走向が看取できるとと思われるが、現段階では、約200年の間の層位の違いを区別することは不可能である。

20号溝 付図 図97

位置 K-58、L-58~60グリッド

重複 24号溝に後出する。

走向 北東-南方向

規模 調査長7.58m 幅1.15m~2.30m
深さ0.05m~0.40m

形状 (傾斜 北東端108.55m 南端108.45m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。溝の傾斜、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。また、

一部に削り込まれた凹面が認められる。

21号溝 付図 図97

位置 M-58グリッド

重複 23号溝に後出する。

走向 ほぼ北西-南西方向

規模 調査長4.70m 幅0.35m~0.75m
深さ0.05m~0.10m

形状 (傾斜 西端108.40m 東端108.40m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。途中22号溝と合流し、19号溝へと続く。形状、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

22号溝 付図 図97

位置 M-58・59グリッド

重複 23号溝に先行する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長3.85m 幅0.50m~0.75m
深さ0.05m

形状 (傾斜 南西108.40m 東端108.40m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。形状、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

23号溝 付図 図97

位置 L-58、M-58・59グリッド

重複 22号溝に後出し19号溝に先行する。

走向 ほぼ南西-北東方向

規模 調査長6.55m 幅0.45m~1.10m

第3章 検出された遺構と遺物

深さ0.05m～0.10m

形状 (傾斜 南西端108.65m 北東端108.40m)
底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。
埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。傾斜、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。また、L-58グリッド内で看取できる凹面は、本溝の先端部分と思われる。

24号溝 付図 図97

位置 L-58・59グリッド

重複 25号溝に後出し20号溝に先行する。

走向 南北方向

規模 調査長2.60m 幅0.40m～0.60m

深さ0.05m

形状 (傾斜 北端108.85m 南端108.85m)
底面は僅かに丸みを帯び、法面は緩やかに立ち上がる。底面部分で凹面が認められる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。形状、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

25号溝 付図 図97

位置 L-59グリッド

重複 20・24号溝に先行する。

走向 東-南西方向

規模 調査長2.70m 幅0.40m～2.30m

深さ0.05m～0.10m

形状 (傾斜 東端108.80m 南西端108.80m)

底面はほぼ平坦であり、凹凸が認められる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。形状、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

26号溝 付図 図97

位置 L-59・60、M-60グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北東-南西方向

規模 調査長4.08m 幅0.20m～0.40m

深さ0.05m

形状 (傾斜 北東端108.90m 南西端108.80m)

底面は丸みを帯び、底面幅は一定である。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。形状、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

27号溝 付図 図97

位置 L-60グリッド

重複 20号溝に先行し26号溝と併走する。

走向 南西-北東方向

規模 調査長3.20m 幅0.55m～1.20m

深さ0.10m

形状 (傾斜 東端108.80m 南西端108.80m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As-Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As-Cの二次堆積層) により埋没した溝である。形状、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

28号溝 付図 図97

位置 K-58・59、L-59グリッド

重複 なし。

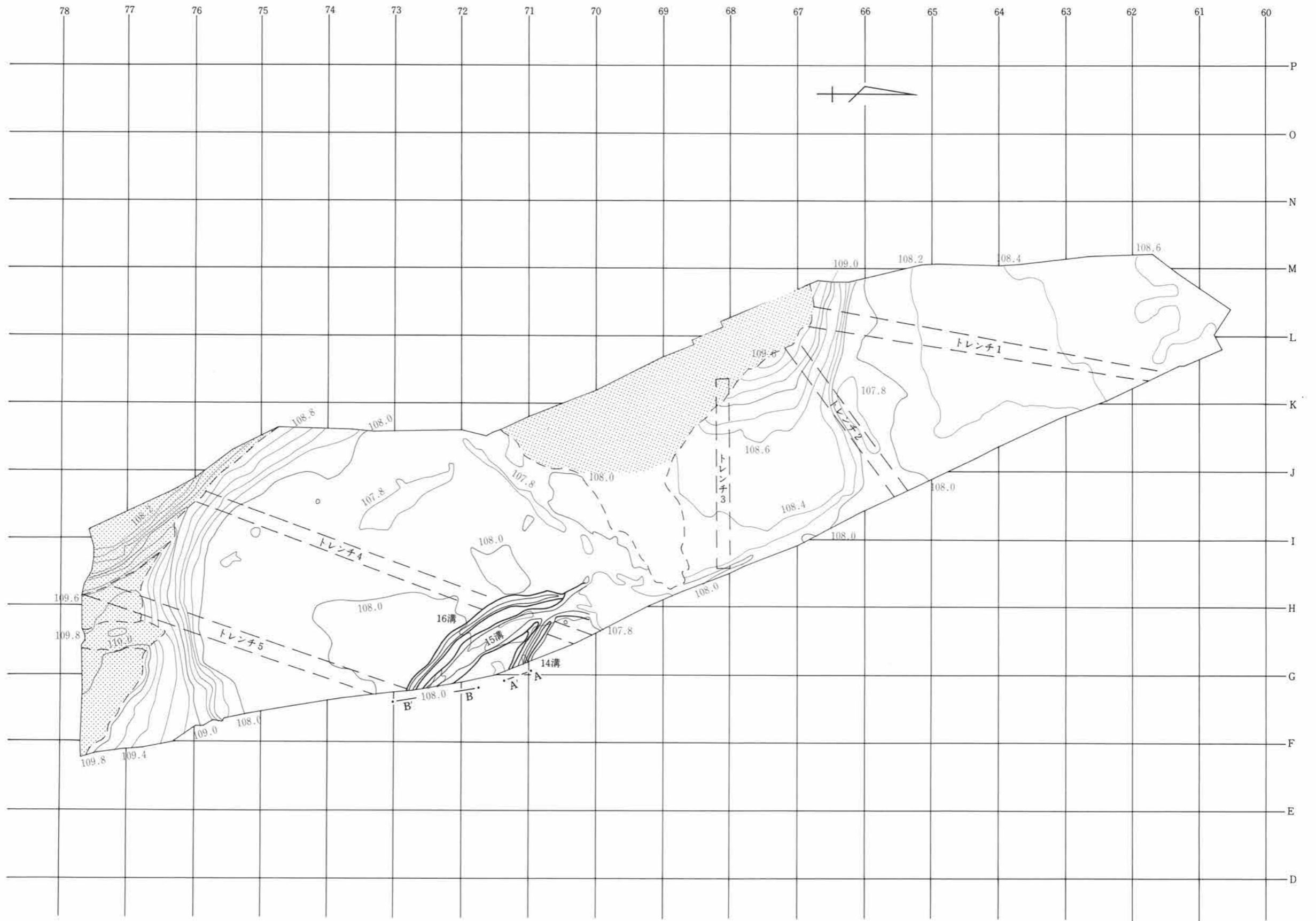


図99 V区4面 全体図

0 1:300 10m

走向 北北東—南南西方向

規模 調査長5.20m 幅0.35m～0.55m

深さ0.15m

形状 (傾斜 北東端108.75m 南端108.55m)

底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 橙色土・黄灰色砂層・橙色シルト層 (As—Cの二次堆積層) により埋没する。

出土遺物 なし。

調査所見 第2洪水砂 (As—Cの二次堆積層) により埋没した溝である。傾斜、埋没土からみて流水作用によって形成された流路面と思われる。

7. V区の溝

14号溝 図99・100・102 写図29-2

位置 G—70・71グリッド

重複 16号溝に後出する。

走向 東から緩やかに湾曲して北上する。

規模 調査長4.00m 幅0.43m～0.60m

深さ (0.10m～0.15m)

形状 (傾斜 東端107.95m 北西端107.90m)

底面はほぼ平坦であり、底面幅は一定している。

埋没土 As—C層を掘り込む暗灰色砂層により埋没する。(As—Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品

調査所見 FA下黒色粘質土下層は、灰白色シルト質の層であり、As—C降下以降、おそらく流水作用によって埋没した溝と考えられる。また、15・16号溝と形成時期はほぼ同じと考えられる。木製品は、本調査区の全域に埋没していたが、特に目立って集中していたのは、台地湾入部付近と本溝及び15・16号溝周辺である。このことからみて、河川が氾濫し木製品等の漂流が始まった当初は、明らかに本溝の走向を継承した流れがあったものと思われ、水量が増すに従って、調査区全域に広がり、離水とともに本溝及び15・16号溝周辺、さらには台地と谷底平野の堺を成す湾入部付近に堆積していったものと考えられる。

15号溝 図99・100・102・106 表 P260 写図29-2、72

位置 F—72、G—70～72、H—70グリッド

重複 16号溝に後出する。

走向 南東から緩やかに湾曲して北上する。

規模 調査長13.75m 幅0.25m～1.68m

深さ0.10m～0.20m

形状 (傾斜 南東端108.00m 北端107.85m)

底面は僅かに丸みを帯びるが、ほぼ平坦である。

埋没土 As—C層を掘り込む暗灰色砂層により埋没する。(As—Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器坏・広口罎・高坏・小型甕片

調査所見 出現時期はAs—C降下以降、FA下黒色粘質土が安定するまでの間と言えるが、出土遺物は、古墳時代前期から中期 (石田川式～和泉式) にかけてのものが集中して出土している。また、埋没までの経過は、14号溝と同様であり、河川の流水作用によって埋没した溝と考えられる。

16号溝 図99・100・102・106 表 P260・261・270 写図29-2、72

位置 F—72、G—72、H—70・71グリッド

重複 14・15号溝に先行する。

走向 南東から緩やかに湾曲して北上する。

規模 調査長14.58m 幅0.42m～0.70m

深さ0.05m～0.10m

形状 (傾斜 南東端108.00m 北端107.90m)

底面は僅かに丸みを帯びるが、ほぼ平坦である。

埋没土 As—C層を掘り込む暗灰色砂層により埋没する。(As—Cの二次堆積層)

出土遺物 木製品、土師器台付甕、打製石斧

調査所見 出現時期は15号溝と同様であり、埋没経過も同様であると思われる。暗灰色砂層によって埋没以降、溝としての機能は消滅し、木製品とともに暗灰褐色土の中に埋没していったものと考えられる。出土遺物は、14号溝と同様に、古墳時代前期から中期 (石田川式～和泉式) にかけての遺物が集中して出土している。

第3章 検出された遺構と遺物

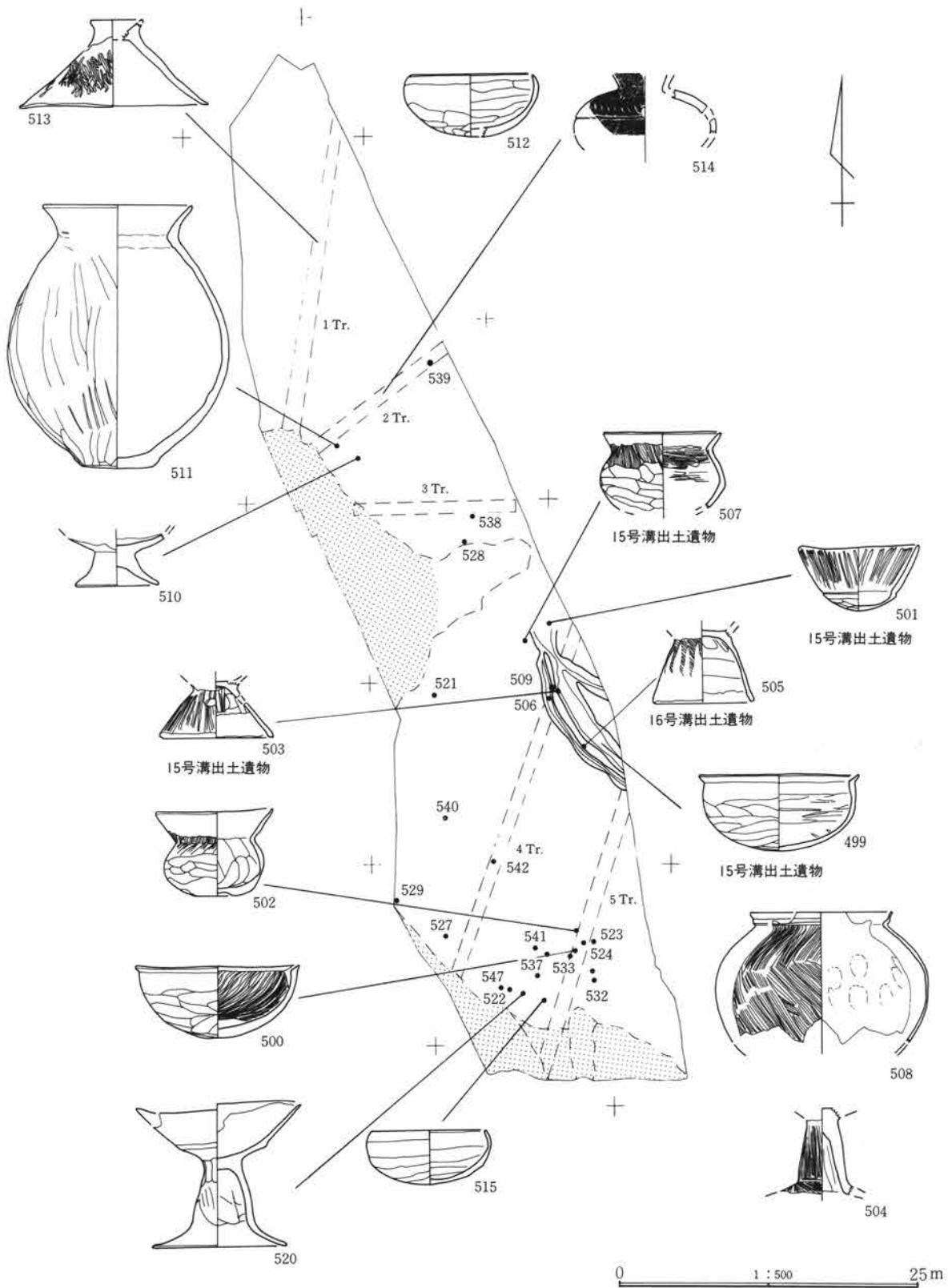
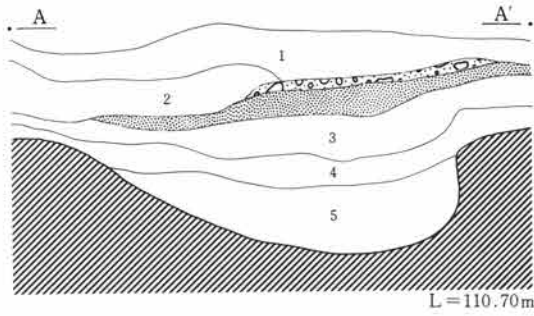
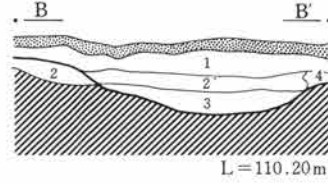


図100 V区4面の主な遺物分布



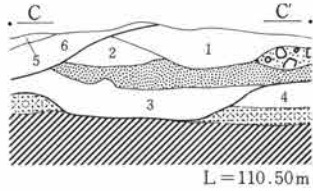
II区4面 13号溝

- 1 淡褐色土 上層に褐色粘質土、下層は小礫を含む砂層。粘性あり。
- 2 淡褐色土 最下層に小礫を含む砂層。粘性あり。やや鉄分凝集。
- 3 黒色粘質土 粒子細かい水田土壌。
- 4 淡褐色砂層 ラミナ状に堆積。粒子細かく均一。
- 5 淡茶褐色砂層 As-Cを混入し、粒子均一。ラミナ状堆積。



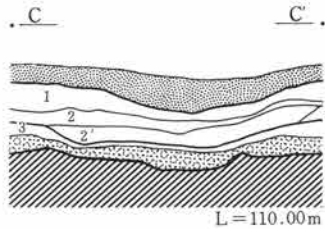
II区4面 14号溝

- 1 黒色粘質土 As-Cを極少量含む。(FA下水田耕土)
- 2 暗褐色土 As-Cを多く含む。
- 2' 暗褐色土 細砂を含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを極多量に含む。
- 4 暗褐色細砂層 As-Cを若干含む。



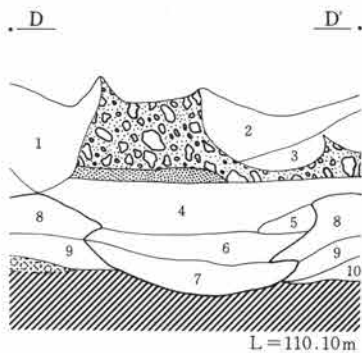
II区4面 15号溝

- 1 暗褐色砂礫層 砂粒粗く大小の礫を多量に含む。
- 2 茶褐色土 FAの二次堆積。やや硬く粒子粗い。
- 3 As-Cの二次堆積。部分的に黒色粘質土のブロック混入。
- 4 黒色粘質土 色調が明るく、灰色を帯びる。
- 5 茶褐色土 粒子密で粘質あり。鉄分沈着。2号溝の覆土。
- 6 淡茶褐色土 粒子密で均一。やや鉄分沈着。2号溝の覆土。



IV区4面 16号溝

- 1 黒色粘質土 水田土壌。粒子極細で均一。As-Cを斑点状に含む。しまり、粘性あり。
- 2 灰白色砂層 粒子細かく均一。ガラス質を含む。木器包含層。
- 2' 灰白色砂層 2に比べて砂が多く混入。
- 3 灰黒色粘質土 1と同様であるが、色調がややグレーがかかる。



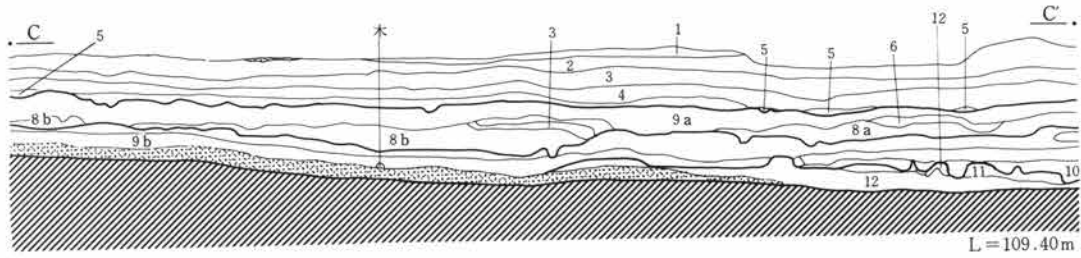
IV区4面 17・18号溝

- 1 灰色砂・灰褐色シルト層 鉄分凝集。軽石を含む。しまり強い。
- 2 灰褐色砂質土 灰色砂、橙色砂を多量に含む。しまり強い。
- 3 砂礫層 灰色砂、橙砂、暗灰色シルトブロック、小礫混入。
- 4 黒色粘質土 As-Cを少量含む。水田土壌。
- 5 橙砂層 砂粒細かい。鉄分凝集。
- 6 砂礫層 灰色砂、黒色粘質土、小礫の互層。粘質土に有機物を多く含む。鉄分凝集。
- 7 灰色砂層 粒子細かく、As-Cを少量含む。
- 8 黒灰色粘質土 灰白の細砂がラミナ状に堆積する。
- 9 黒灰色粘質土 8と同様であるが、色調がやや明るい。
- 10 灰色砂層 暗灰色粘質土と小礫を含む。鉄分凝集。



図101 II区4面 13~15号溝、IV区4面 16~18号溝土層断面

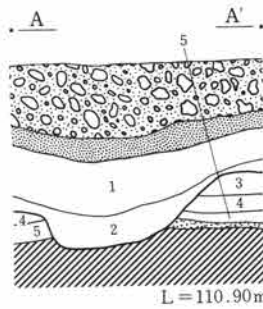
第3章 検出された遺構と遺物



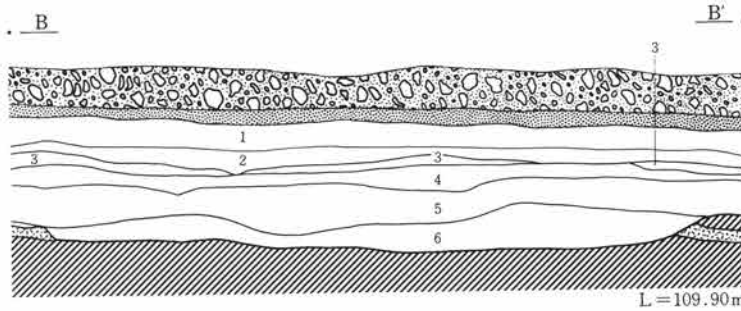
IV区4面南端部 第3～第1洪水砂下水田

- 1 黒褐色土 葦の根、茎を含む。FA下水田耕土。
- 2 オリーブ黒色土 葦の根、茎を含む。シルト、黒色土が互層に堆積。
- 3 黒色土 2と同様であり、葦の根、茎を多量に含む。
- 4 黒褐色土 粘性が強い。
- 5 灰黄色砂層 As-Cを含む。(第3洪水砂)
- 6 黒褐色土 As-C混じり。粘性あり。鉄分沈着。
- 7 黒褐色粘質土 葦の根、茎を含む。黒色、灰黄色シルトの互層堆積。(第3洪水砂下水田耕土)

- 8a 黒色砂層 細砂。(第2洪水砂)
- 8b 灰オリーブ砂層 8aが混じる。(第2洪水砂)
- 9a オリーブ黒色粘質土 葦の根、茎を少量含む。黒色土、灰色シルトの互層。(第2洪水下水田耕土)
- 9b オリーブ黒色土 9aとほぼ同様であるが、色調がやや明るくなる。
- 10 灰オリーブ砂層 As-C、細砂混じり。(第1洪水砂)
- 11 オリーブ黒色土 葦の根、茎を含む。(第1洪水下水田耕土)
- 12 オリーブ黒色土 As-Cとの混土層。



- 1 黒色粘質土 有機物、炭化物を含む。
- 2 黒色土 As-Cを多量に含み、砂、炭化物混入。
- 3 黒褐色粘質土 As-C、炭化物、細砂を少量含む。
- 4 黒色粘質土 As-C、有機物を少量含む。
- 5 暗灰色砂層 As-Cを多量に含む。



- 1 黒色粘質土 有機物、炭化物を含む。
- 2 黒色土 As-Cを多量に含み、砂、炭化物混入。
- 3 黒褐色粘質土 As-Cを少量含み、炭化物、細砂混入。
- 4 灰白色砂層 As-C多量に含む。
- 5 黒色粘質土 As-Cを少量含み、有機物混入。
- 6 暗灰色砂層 As-Cを少量含み、5と同様の粘質土を層状に挟む。



図102 IV区4面 洪水砂下水田、V区4面 14～16号溝土層断面

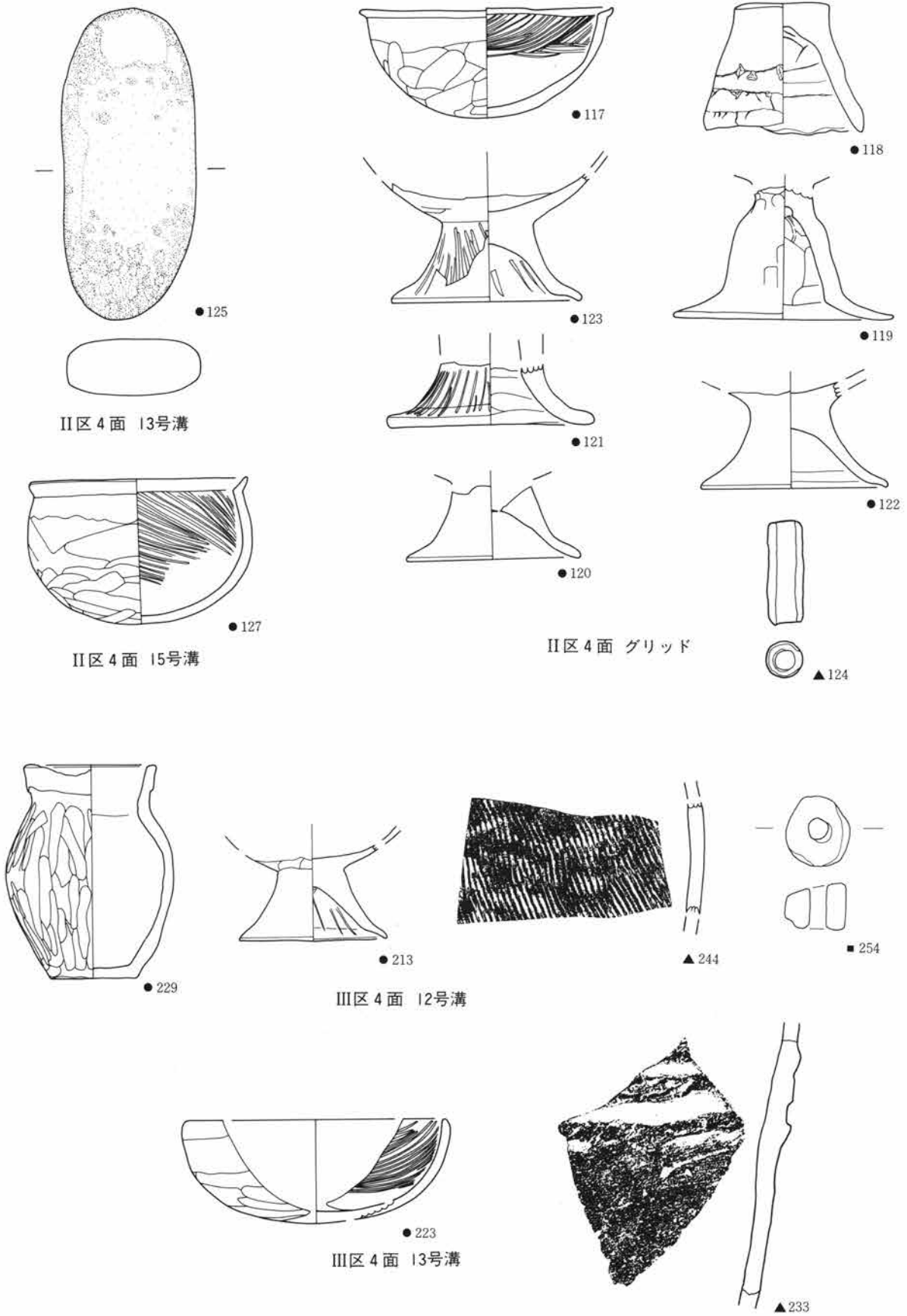


図103 II区4面 13・15号溝、グリッド、III区4面12・13号溝出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

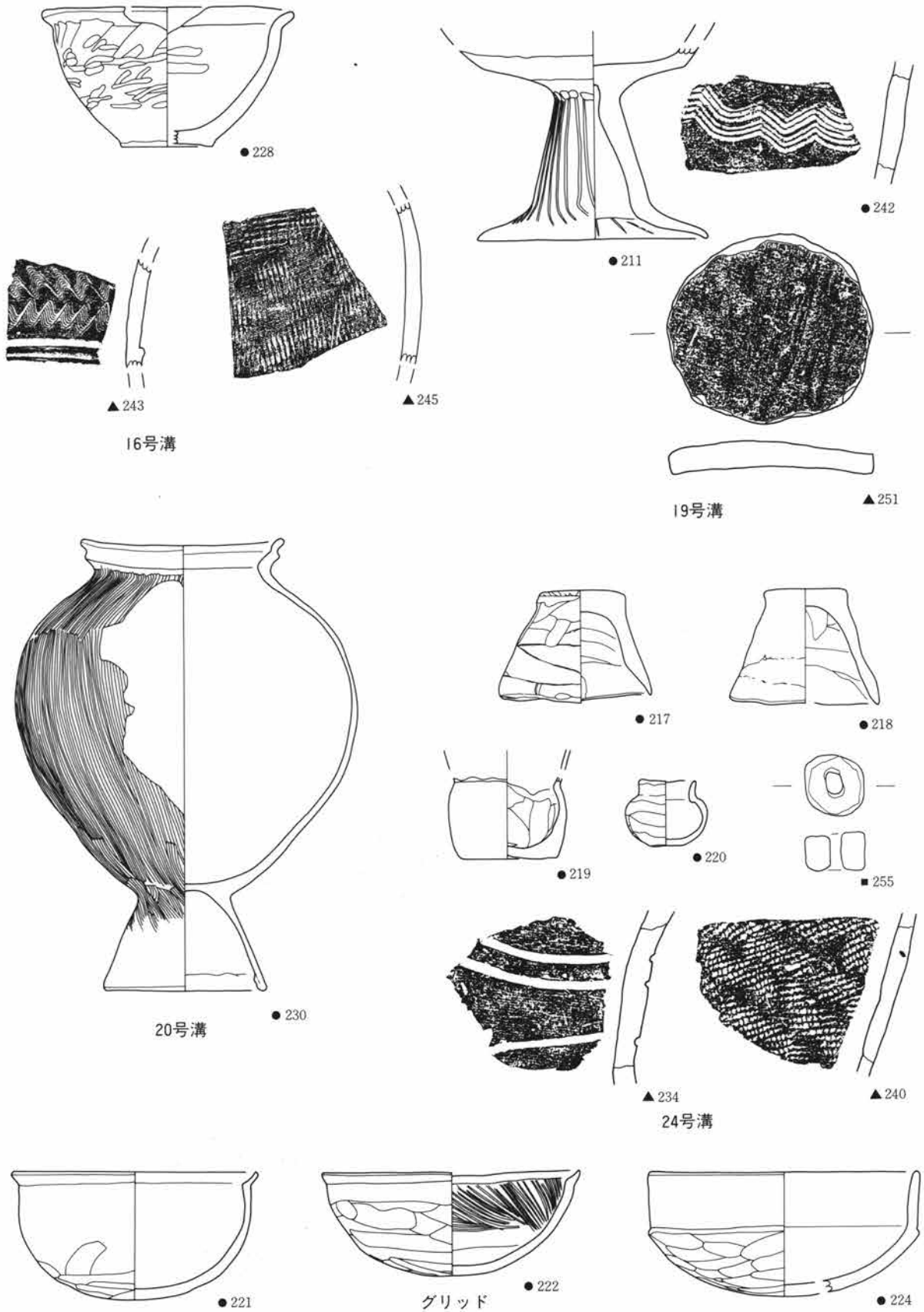


図104 III区4面 16・19・20・24号溝、グリッド出土遺物

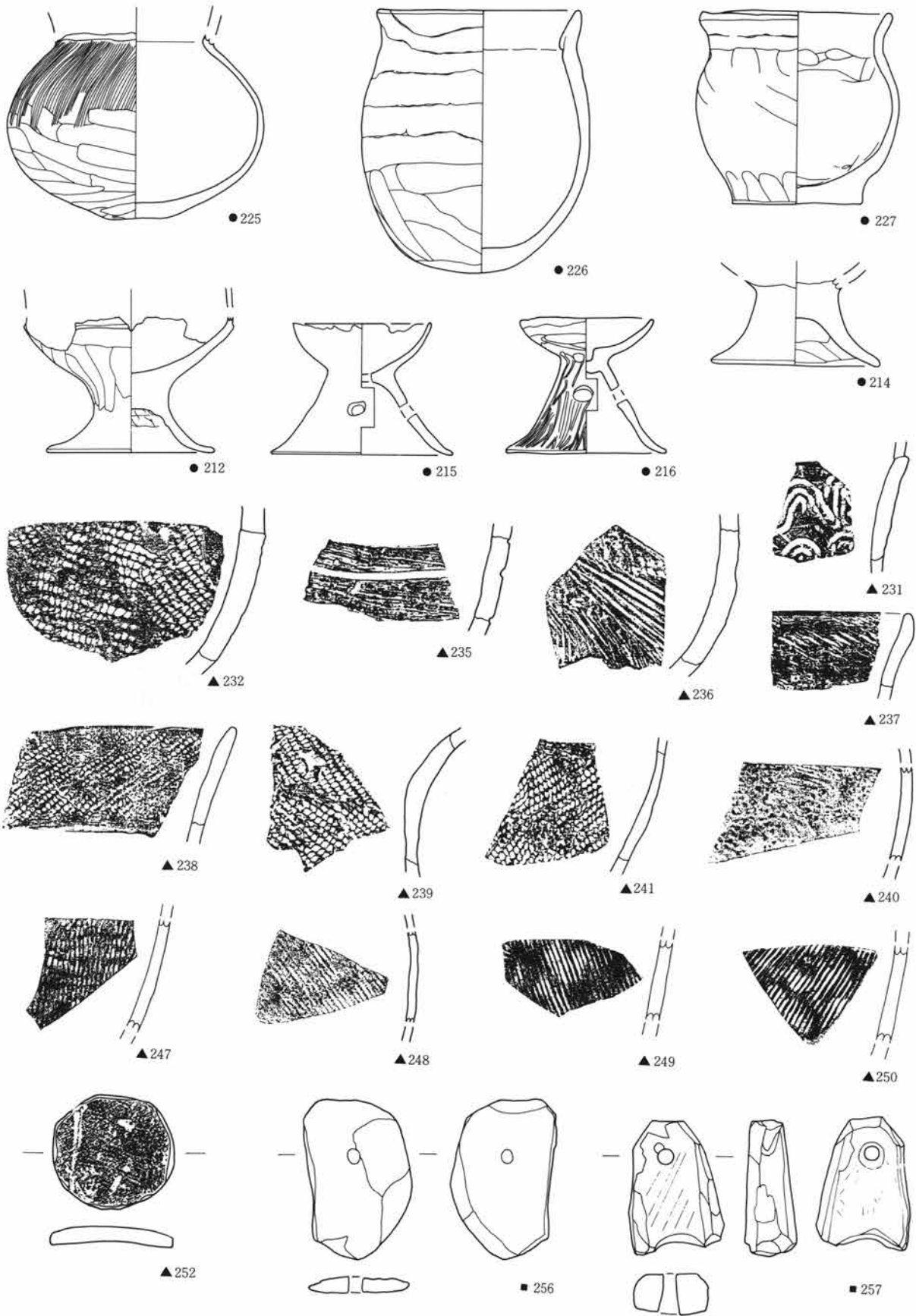


図105 III区4面 グリッド出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

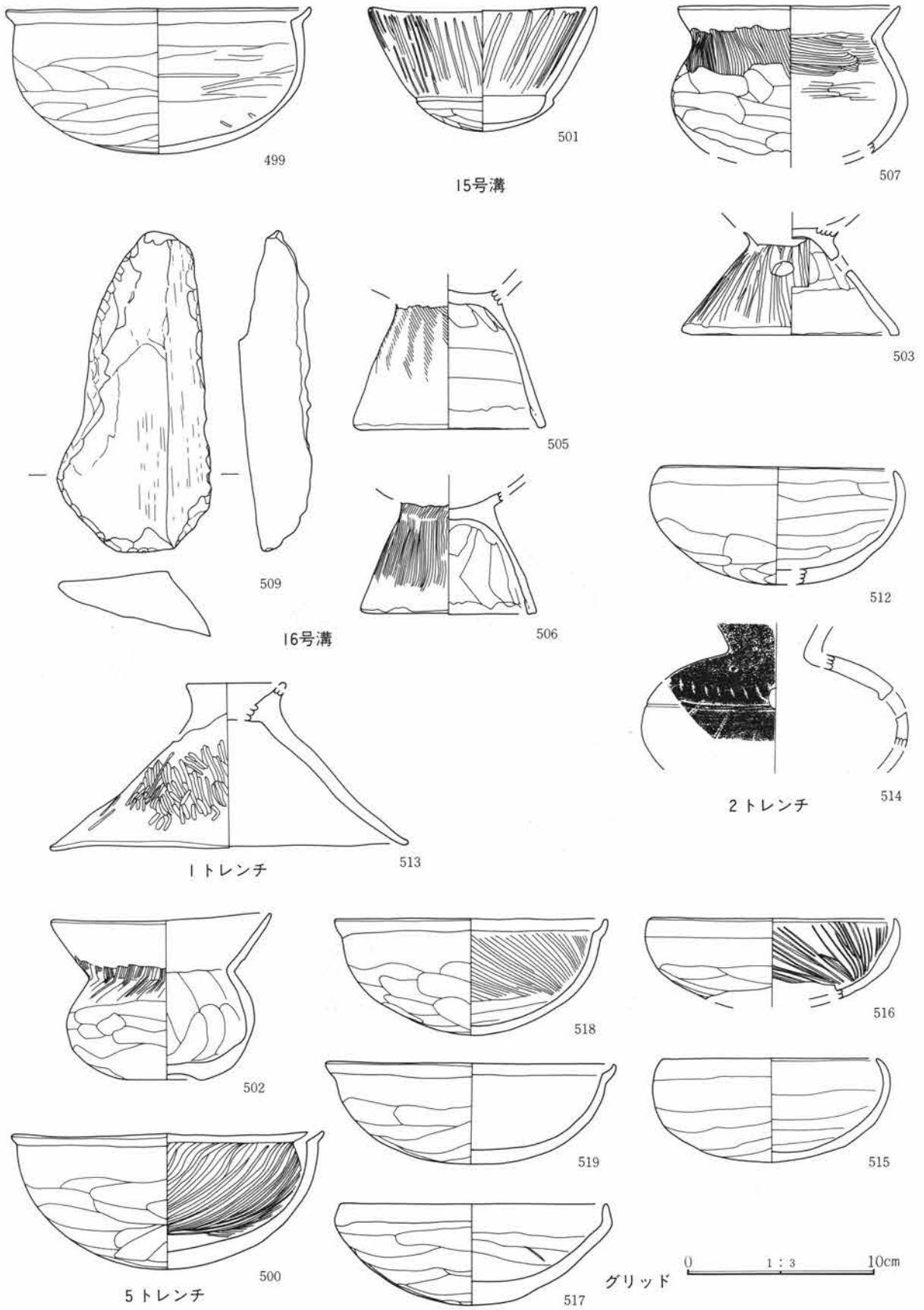


図106 V区4面 15・16号溝、1・2・5トレンチ出土遺物

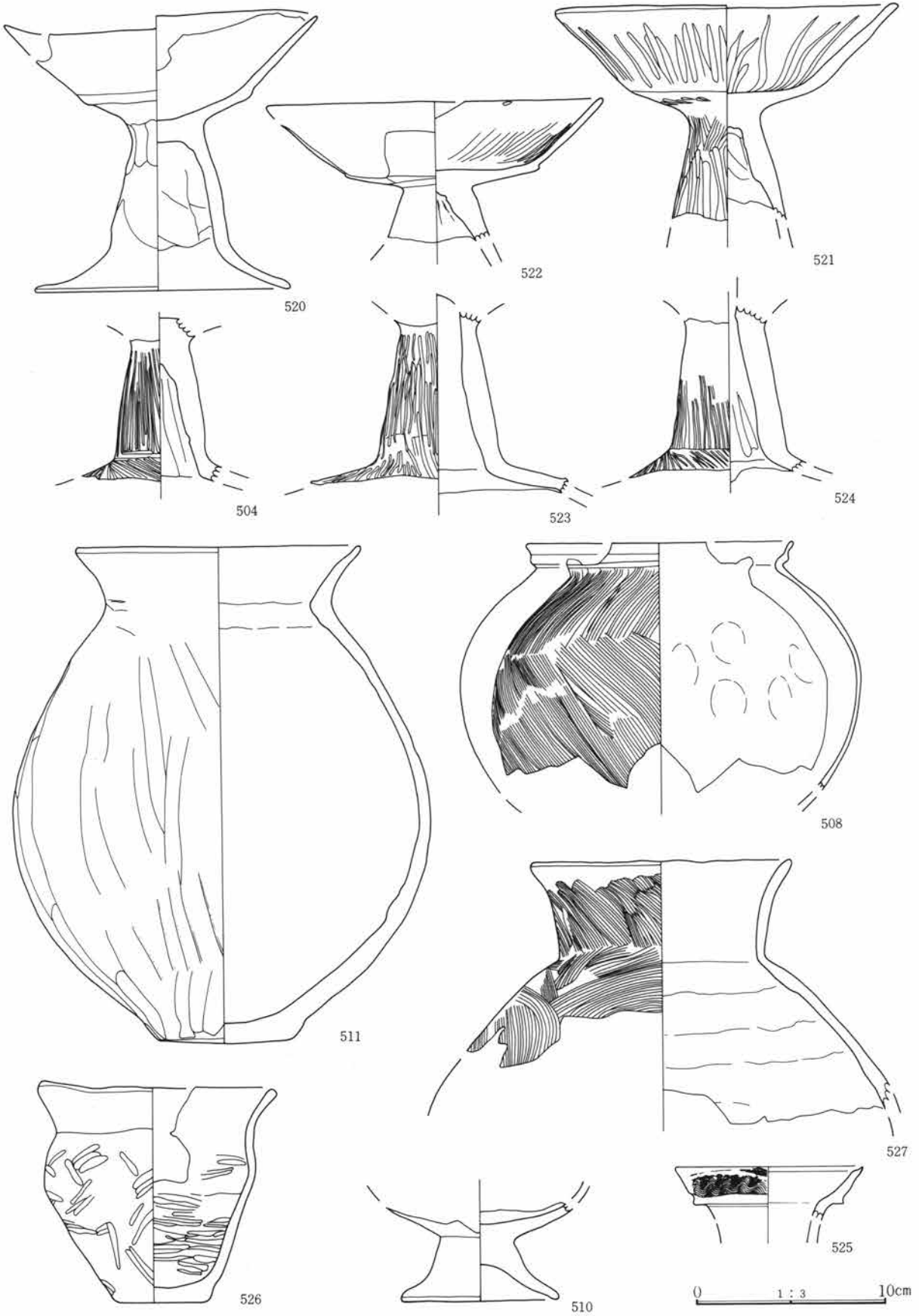


図107 V区4面 グリッド出土遺物(1)

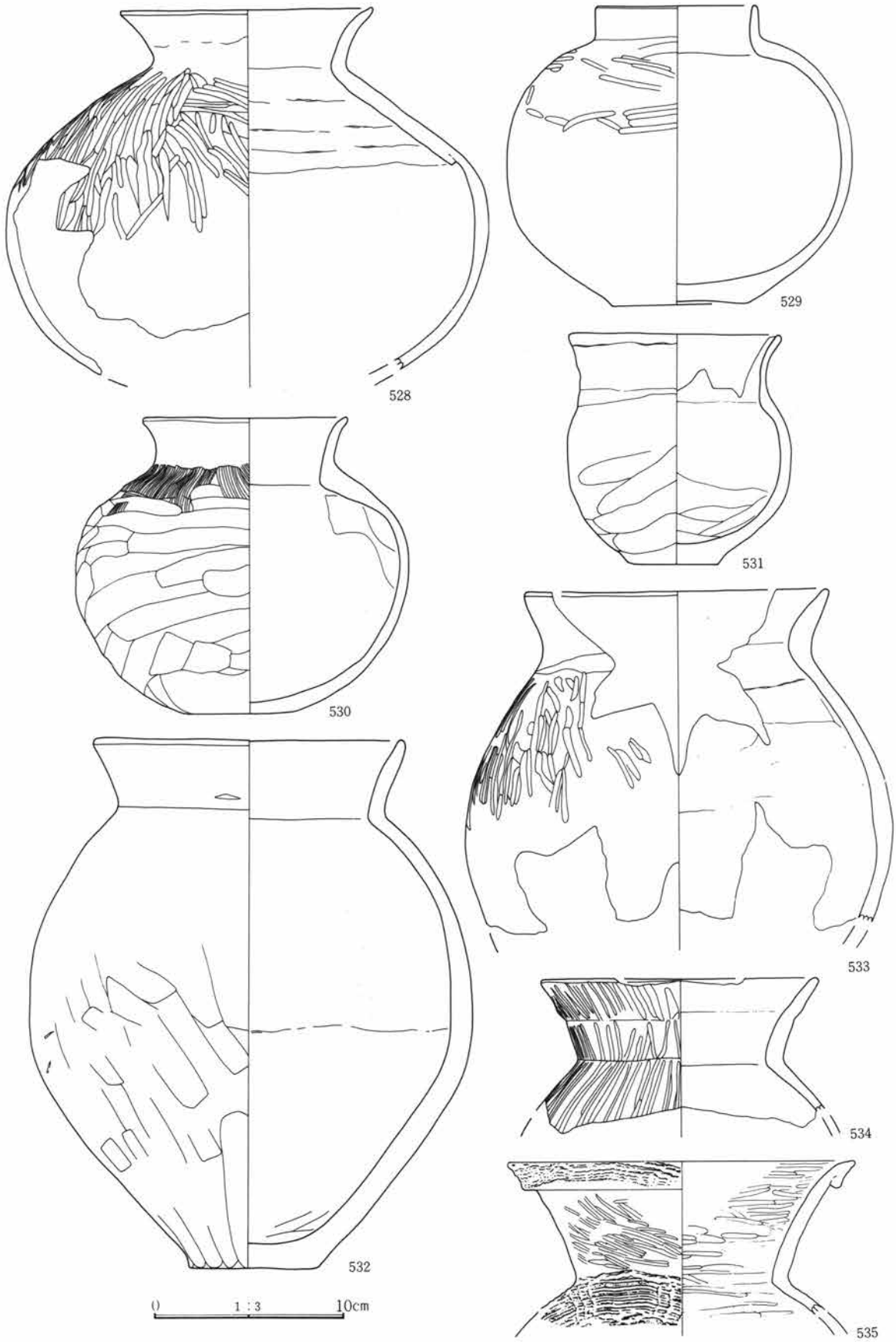
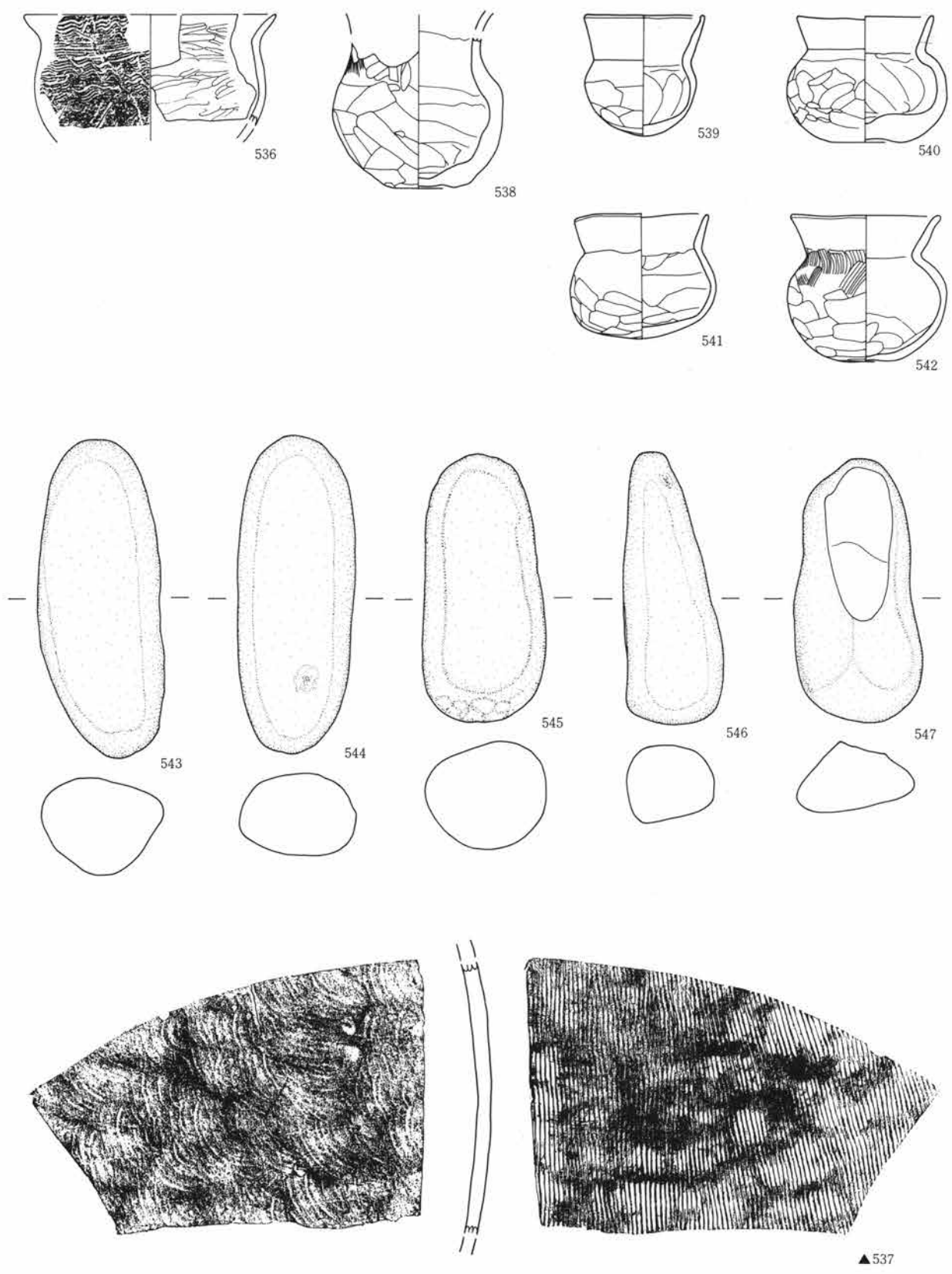


図108 V区4面 グリッド出土遺物(2)

第4節 4面の調査



0 1:3 10cm

図109 V区4面 グリッド出土遺物(3)

第5節 5面の調査

1. 概要

I区では畦畔を伴う水田区画は認められず、2条の溝のみの検出にとどまったが、II区からV区にかけては、As-C直下の黒色粘質土上面より、水田址とこれに伴う溝33条が検出された。特に、As-Cが広範囲に、しかも厚く堆積していたIV区とV区からは、遺存状態の良い水田址が検出された。しかしながら、区画を成す小畦は概して偏平化したままの状態で見出され、As-Cの降下季節を、晩秋に比定するならば、おそらく収穫後、放置されたままの状態で見舞われたものと思われる。

水田址に伴って検出された遺構は、II区より土橋と思われる木杭を打ち込んだ杭列、V区より木材を

畦畔中に埋め込んだと思われる補強された畦畔が挙げられる。

5面の示標テフラであるAs-Cの堆積状態は、一部上面からの削平を受けているものの極めて良好であり、全調査区で層厚約3cm~25cmの純層堆積を示す。また、As-C下水田の時期は、検出された水田面を覆うAs-C層と、直下の黒色粘質土との間に間層が認められないことから、As-C降下時期とほぼ同時期までは継続されていたものと考えられる。よって現時点でのAs-Cの降下年代である4世紀初頭をもって古墳時代前期に比定される。

本遺跡で検出された5面の水田址は、3・4面で検出された水田面と比較して、開田時期が最も古く古墳時代前期に比定されることは前述した通りであるが、高崎市の北西郊外に位置する同道遺跡にみられるような、As-C降下以前の畦畔の位置を、そのまま上面の畦畔が継承したという痕跡は認められな

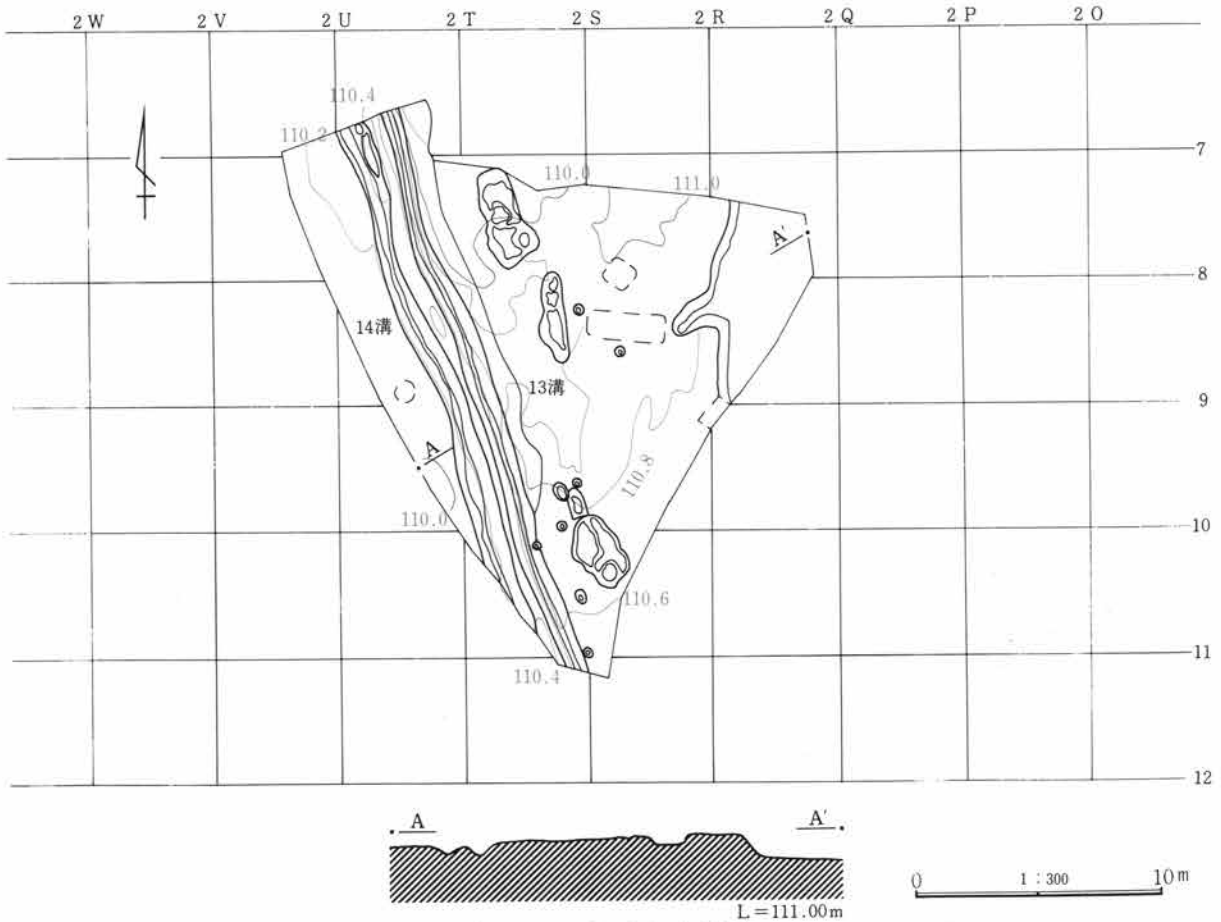


図110 I区5面 全体図



図111 1区5面の13・14号溝

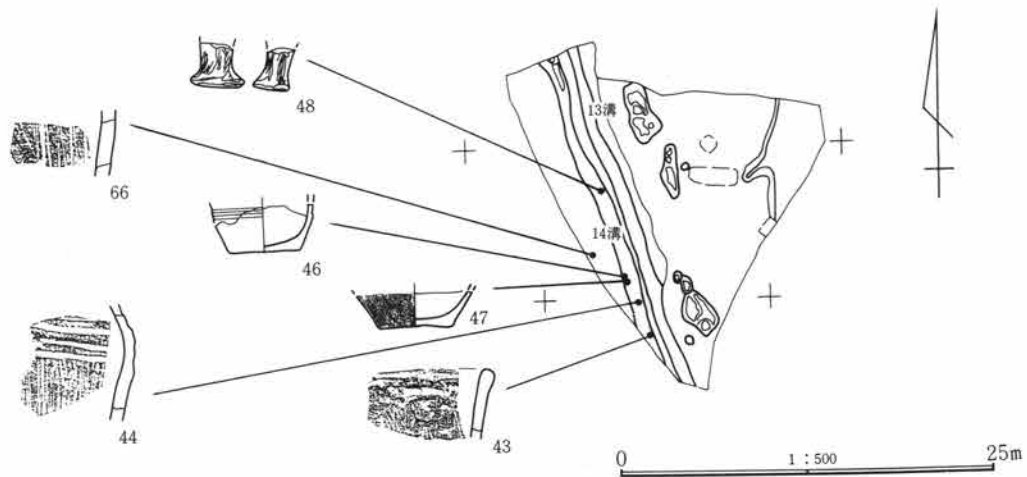


図112 I区5面の主な遺物分布

い。まして、As-C降下以降、軽石を除去し水田の復旧を図った形跡も認められない。しかしながら、As-C堆積以降、FAの堆積する間において、4面に相当する水田が営まれた形跡は前述の通り、本遺跡内で確認されている。

畦畔の走向は、どの面においてもほぼ北西-南東方向及び北東-南西方向に沿って作られていることは共通し、その理由として、流水方向が古墳時代においても現河道と同様に、ほぼ北西から南東方向の地形的な傾斜と一致していたことが挙げられる。また、III区4面の9号溝・5面の25号溝及びIV区3面の8号溝・4面の16号溝・5面の30号溝は、ともに検出位置が一致し、それぞれ下面の溝の走向及び形状を継承している。

調査区内での取水施設は、溝、水口であり、溝は畦畔間を通す一定幅で深さの浅いものや、V区の19号溝のように割合と深さもあり、河道を思わせるもの、IV区の32号溝、V区の17・18号溝のように台地裾縁を通るものと様々であり、水田区画に配水するための工夫が窺える。区画は概して大区画を呈するが、IV区南半部の区画は、他区画に比べ小区画であるのは、おそらくAs-C下黒色粘質土層中に堆積する砂利層の影響を受け、保水性を考慮しての区画であったものと推測される。

II区からV区にかけての調査区南西壁側は、洪積

台地であったことが確認されている。旧河道により削平はされているが、所々に台地の残存部分が散在する。おそらく谷の中心部は、調査区北東壁側よりも北東方向の位置にあり、谷地に沿った谷底平野に水田が展開されていたものと考えられる。

2. I区の溝

13号溝 図110~112・125・127・128 表 P263 写図30-2・3、75

位置 2S-8~11、2T-6~9グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長23.34m 幅0.45m~1.07m
深さ0.15m~0.39m

形状 (傾斜 北西端110.30m 南東端110.20m)
南東方向に下るに従い溝は深くなり、底面幅も広くなって容量を増していく。底面は最深部でほぼ平坦となり、緩く蛇行する。

埋没土 As-Cを多量に含んだ黒褐色土が堆積し、底面はAs-Cをほとんど含まない黒褐色粘質土で自然埋没する。

出土遺物 縄文粗製無文土器、条痕文土器、赤井土式土器片・木製品(木杭)

調査所見 溝の最深部では、As-Cを含む黒褐色で

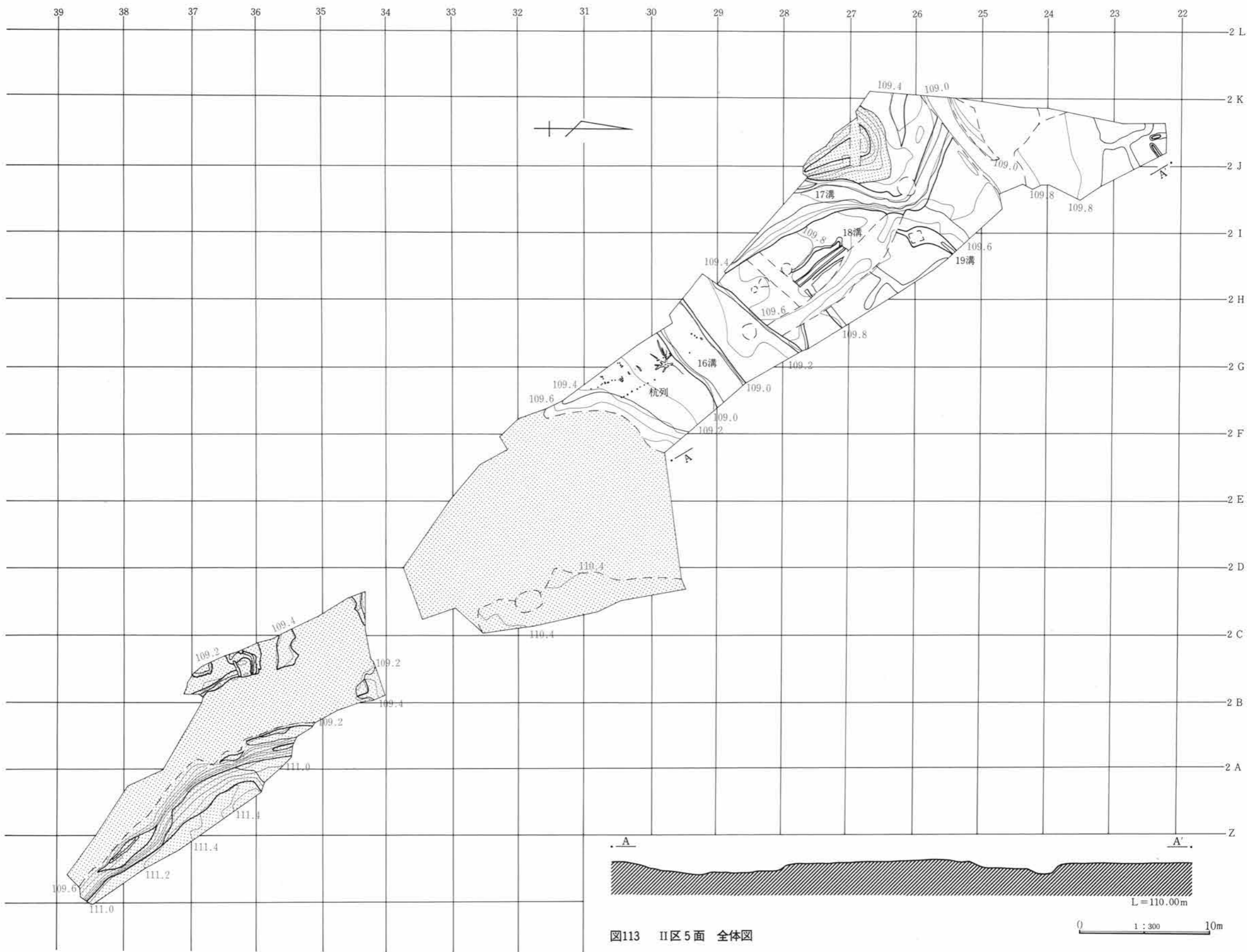


图113 II区5面 全体图

埋没していることから、As-C降下以降に自然埋没が始まったと思われる。水田施設との関係は、水田区画域が未検出であったため不明である。

14号溝 図110～112・125・127・128 表 P263 写図30-2～4、75

位置 2S-9・10、2T-6～9グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長19.36m 幅0.53m～1.50m

深さ0.25m～0.48m

形状 (傾斜 北西端110.20m 南東端110.01m)
北西部では溝の深さは浅く、底面は丸みを帯びるが、南東方向に下るに従い溝は深くなる。断面形は最深部でV字形となり、緩く蛇行する。

埋没土 As-Cをやや多く含んだ黒褐色土で自然埋没する。

出土遺物 縄文条痕文土器、沈線文土器、無文土器、土偶

調査所見 埋没時期は13号溝と同時期と思われる。14号溝は13号溝と比較して、規模がやや大きくなるが、13号溝と同様に機能的な詳細は不明である。また、2T-8グリッドの8ライン上では、溝の右側法面中位に木杭が1本垂直に打たれているのが検出された。13号溝の溝中からも、木杭と思われる加工痕を残す木製品が数点出土していることから、この木杭は井堰を成す構築部材であった可能性が高く、畦畔、区画ともに未検出であったI区、調査区の水田耕作の証左となり得るものである。

3. II区のAs-C下水田

付図 図113・114・118 写図31～33

被覆層と水田の残存状況 層厚約3cm～15cmのAs-Cによって埋没した水田区画は、区画の一部が4面の14号溝によって削平されているものの、調査区北端部と中央部で11枚検出され、畦畔とそれに伴う溝4条が検出された。区画を成す畦畔の残存状態は不良であり明瞭性に欠ける。

水田域の地形 標高は調査区北端で109.70m、16号溝の底面で108.90m、台地部で110.50mを示す。低地部では2H-26グリッド付近が最も高く、17号溝と16号溝に向かって緩傾斜を示す。また、2J-27グリッドの交点付近と2C～2D-29～33ラインでは台地部が露出する。3面と同様に台地間の谷底平野に水田は展開している。

畦畔の走向と区画 畦畔の走向は、他の調査区と同様に北西-南東方向及び北東-南西方向を基本とし、ほぼ直線的に延びている。畦畔の計測値は下幅0.20m～1.70m、高さ0.03m～0.05mを示し、土圧の影響と思われる畦畔の偏平化が認められる。また、遺存状態が極めて不良であったため、区画の形状については不明である。

水田面の面積 独立した区画が認められなかったため計測不能であるが、区画No.9(付図)の推定面積は5.62㎡を示す。

取配水の方法 16～19号溝によって取配水が可能である。

耕作土 As-C層下の細砂を含む黒色粘質土であり、その下層には透水性の良い暗灰色シルト質土が堆積する。

その他の遺構 2F・2G-29・30グリッドで21本の杭列と木の根1株、破損した杭片を検出した。杭列は16号溝の走向と交差するように打ち込まれ、杭の間隔は約10cm～50cmを測る。また、杭は土圧の影響によって生じた圧密杭であり、先端部分に加工を施した自然木を使用している。杭列の機能としては土橋の側壁法面の補強目的が考えられ、2列の杭列間を土砂等で堅固に盛土し、その延長部に16号溝(牛池川旧河道)を横断するための渡し板が架けられていた可能性も考えられる。また、渡し板ではなく井堰が付設されていた可能性もあるが、関連する施設、資材等が検出されていないので、機能的な詳細は不明である。

水田面からの出土遺物 杭

4. II区の溝

16号溝 付図 図113・115・125 表 P264 写図75・76

位置 2 F・2 G・2 H-28・ 29グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向

規模 調査長7.68m 幅5.80m~8.05m

深さ0.20m~0.27m

形状 (傾斜 北東端108.09m 南東端108.09m)

中心部に僅かに溝の立ち上がり認められ、底面幅はほぼ一定である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 土師器埴・器台・甕片・坏片・椀片・高坏片・台付甕片、弥生の甕片

調査所見 溝としては深さのない偏平な感じがするが、両脇に広がる地形が溝の中心部に向かって傾斜していることや、18号溝、4面の14号溝の末端部が北西側の傾斜地形で完結していること、溝と直交する杭列が南東側傾斜地形に位置することなどからみて、傾斜地形全体を利用した幅広の溝であった可能性が高く、大きく蛇行する牛池川の旧河道面と考

えられる。

17号溝 付図 図113・115・118 表 P264 写図31-1、

75・76

位置 2 H-28、2 I-25~28、2 J-25グリッド

重複 なし。

走向 2 J-25グリッドから南南東へ走向し、2 I-26グリッドで南に走向を変える。

規模 調査長16.20m 幅1.20m~3.00m

深さ0.21m~0.30m

形状 (傾斜 南東端109.05m 南端109.02m)

2 I-27グリッドで溝の幅が広がり、底面は丸みを帯びる。

埋没土 一部でAs-Cの純層堆積が認められる。

出土遺物 土師器坏・甕片・高坏片・椀片・台付甕片、弥生の甕片、瓦片

調査所見 4面の13号溝によって切られる。接続部分が一部削平されている。掘削時期はAs-C降下以前で、その直後、流水作用によって自然埋没していったと思われる。水田面への取配水は、2 I-28グリッド付近の蛇行部で可能と思われる。形状からみて、

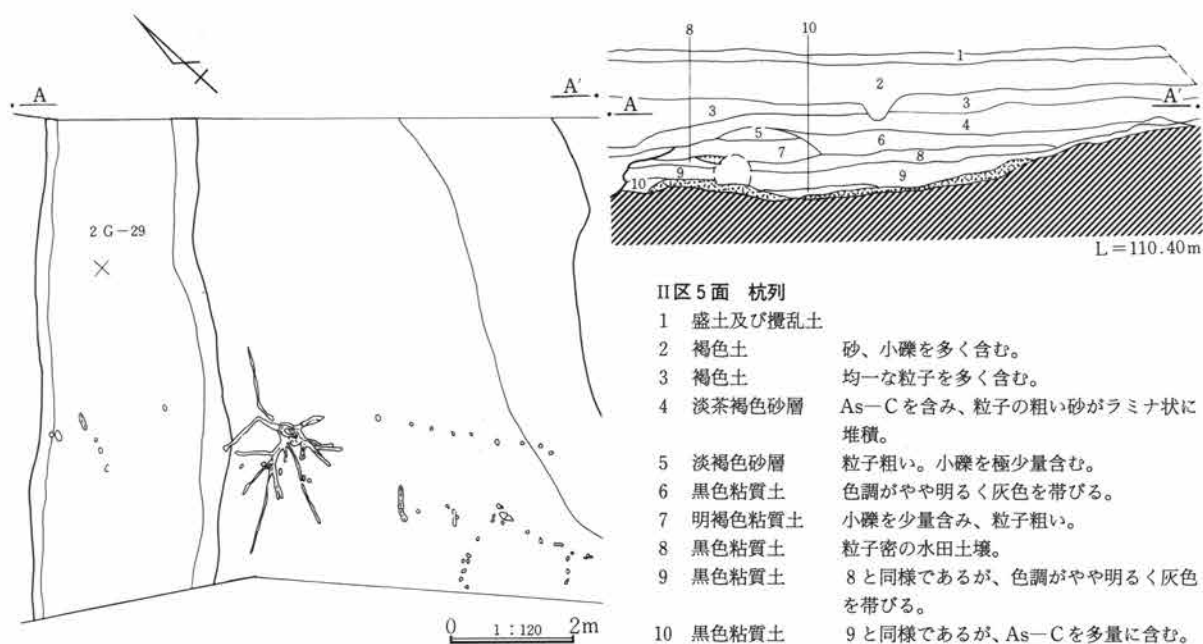


図114 II区5面の杭列

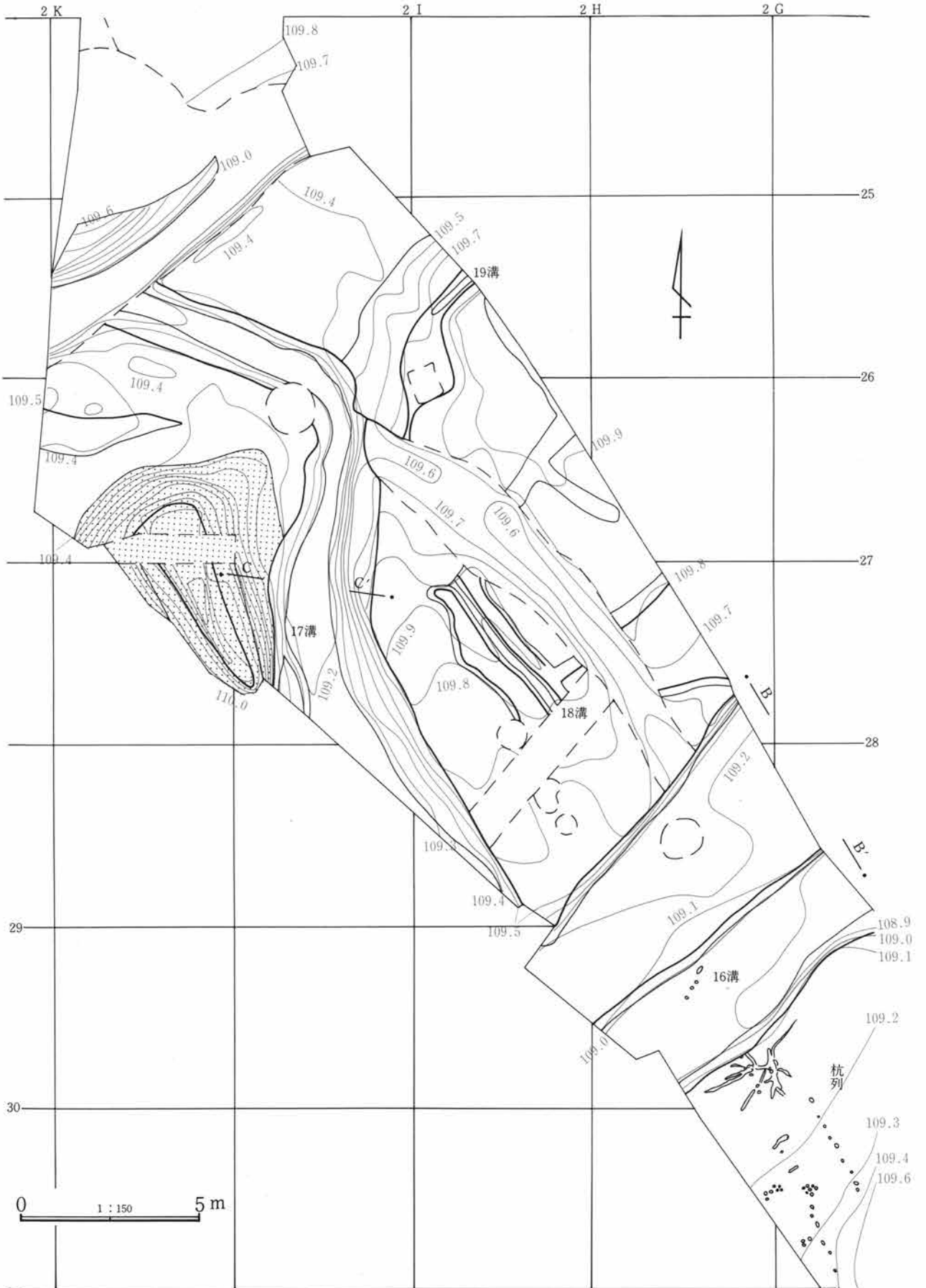


図115 II区5面 As-C下水田

人為的、意図的に作られた溝とも思われるが、本来の旧河道面をそのまま区画に伴う溝として利用したとも考えられる。

18号溝 付図 図113・115

位置 2H-27グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長4.54m 幅0.20m~0.50m

深さ0.04m~0.05m

形状 (傾斜 北西端109.92m 南東端109.80m)

溝の底面幅が均一であり、ほぼ直線的である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 畦畔間を通して他区画に配水するための人為的、意図的な溝であり、おそらく幅広の16号溝に合流していたものと思われる。また、本調査区で唯一の畦畔に沿った溝であり、水田耕作が営まれていた証左ともなる検出である。溝の北西端の延長部の遺存状態は不良であるが、19号溝と連続するものであった可能性もあるが、現時点での詳細は不明である。

19号溝 付図 図113・115

位置 2H-25グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向

規模 調査長1.30m 幅0.60m

深さ0.11m~0.13m

形状 (傾斜 北東端109.72m 南西端109.72m)

溝の底面幅、深さともにほぼ均一である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 遺存状態が極めて不良なため詳細は不明であるが、おそらく水田区画内に配水するための人為的につくられた溝であると思われる。南端の延長部は4面の14号溝によって削平を受けているが、18号溝と連続していた可能性も高い。

5. III区のAs-C下水田

付図 図116~118 写図33・76

被覆層と水田の残存状況 層厚3cm~25cmのAs-Cにより埋没した水田址は、一部に畦畔の偏平化と1面の1号溝及び4面下層の24号溝による削平が認められるものの、調査区全域で畦畔と溝を伴う明瞭な区画が検出された。開田時期は、他の調査区と同様に、As-C層と直下の黒色粘質土の間に間層が認められないことから、遅くとも4世紀中葉以前の古墳時代前期と思われる。

水田域の地形 標高は調査区北西端で109.00m、中央部で109.20m、南東端で108.95mを測り、北西から南東方向にかけての比高0.05mの緩傾斜を示す。3面と同様に谷底平野に水田は展開している。

畦畔の走向と区画 畦畔の走向は、ほぼ北西-南東方向及び北東-南西方向を継承し、下幅約0.28m~1.80m、高さ約0.01m~0.22mを計測値とする。北西-南東方向の畦畔がやや湾曲ぎみに延びているのは、台地裾縁の地形に沿って走向しているためと思われる。それとともなって区画の平面形は台形状を呈し、全体的に大きく整然としている。

水田面の面積 どの区画も削平や調査区外にまたがっていたりと完全には計測できないものの、遺存状態の良好なものを例に挙げれば、面積の平均値は24.29m²を測る。

取配水の方法 25~31号溝によって取配水が可能である。特に25・30・31号溝は畦畔間を通す走向を示し、II区からIV区へと続く一連の流れと思われる。畦畔に付随する水口は8箇所確認され、取配水幅0.20m~1.40mを測る。おそらく各区画への配水方向、水量を考慮して作られていたものと思われる。

耕作土 As-C下の細砂を含む黒色粘質土であり、厚さ0.30m~0.60mを示す。その下層に暗灰色シルト層が堆積する。

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 土師器高坏・埴、縄文土器片



図116 III区5面 全体図

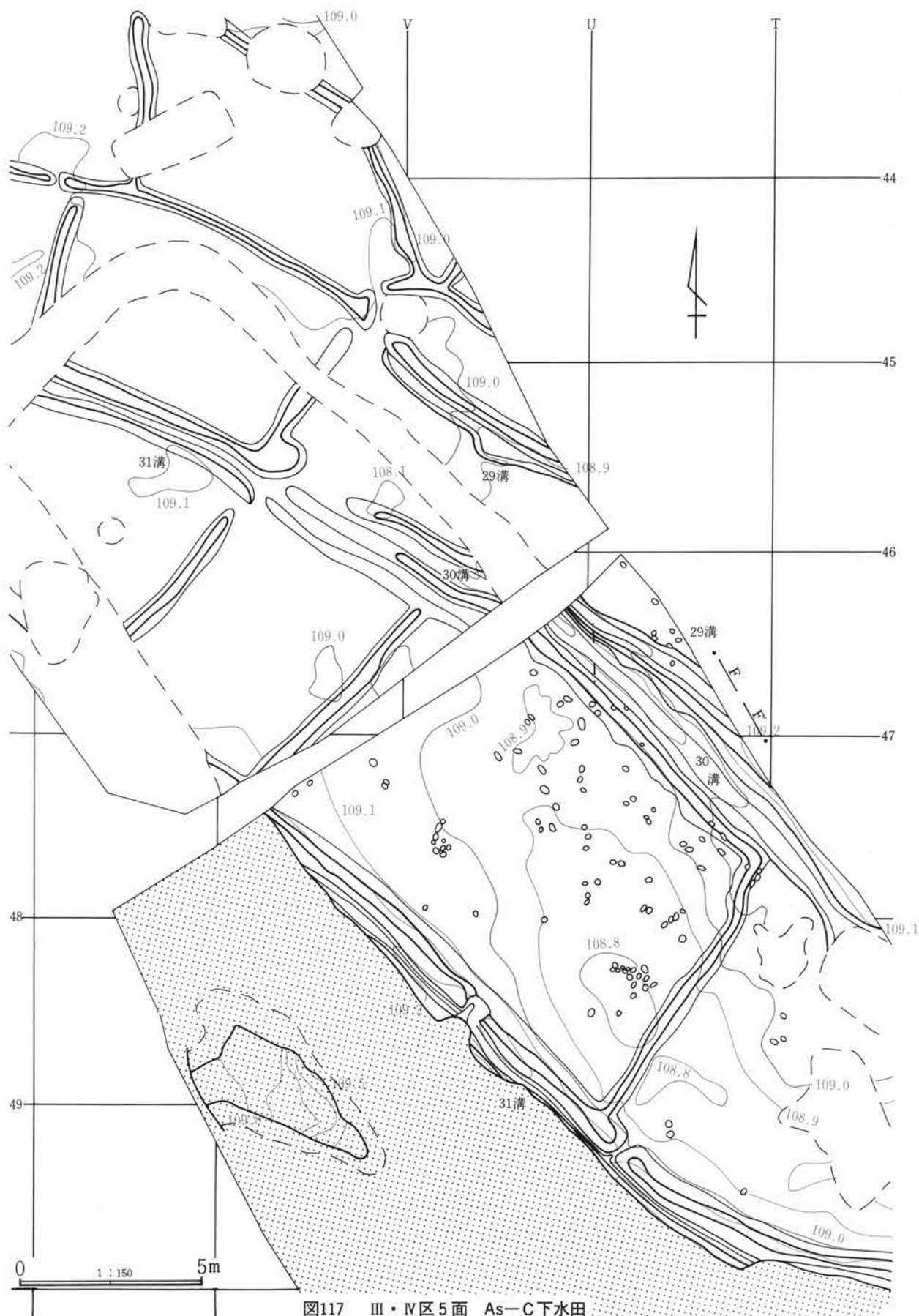


図117 III・IV区5面 As-C下水田

6. III区の溝

25号溝 付図 図116・126

位置 2A-41・42グリッド

重複 4面の9号溝に先行する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長3.80m 幅(0.45m)
深さ0.30m~0.98m

形状 (傾斜、形状は不明)

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 調査区境界線の南西壁に位置するため、全容は不明であるが、おそらく27号溝と一体のものであり、31号溝に分水しているものと思われる。

26号溝 付図 図116

位置 Z-43グリッド

重複 なし。

走向 南西-北東方向

規模 調査長3.60m 幅0.19m~0.30m
深さ0.04m~0.07m

形状 (傾斜 北東端109.26m 南西端109.25m)

底面は丸みを帯び、底面幅は一定である。

埋没土 As-Cが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 1面の1号溝により削平されているため、北東端の延長部分は不明である。また、畦畔を横切って走向していることから、区画内への取配水の機能を有する人為的な溝と思われる。

27号溝 付図 図116

位置 Y-41・42、Z-42・43、2A-43グリッド

重複 なし。

走向 南西からやや湾曲し緩やかに蛇行しながら北上する。

規模 調査長13.02m 幅0.20m~2.32m
深さ0.02m~0.25m

形状 (傾斜 南西端109.25m 北端108.82m)

北に向かうに従って溝の幅はほぼ均一となり、深さも浅くなる。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 水田区画に伴う畦畔と走向が一致していることからみて、取配水の機能を有する人為的な溝であり、旧河道から分岐する配水用の溝と考えられる。

28号溝 付図 図116 写図33-5

位置 W-42、X-42・43グリッド

重複 なし。

走向 南南西から東北東へ延び北東方向へ蛇行する。

規模 調査長8.50m 幅0.40m~0.52m
深さ0.04m~0.14m

形状 (傾斜 南端109.18m 北東端109.00m)

底面は僅かに丸みを帯びるが、ほぼ平坦である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 W-42グリッドからX-43グリッドに延びる畦畔と走向が一致することから、水田区画に伴う人為的な溝と思われる。

29号溝 付図 図116・117

位置 U・V-44・45グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長6.00m 幅0.43m~0.98m
深さ0.02m~0.05m

形状 (傾斜 北西端109.08m 南東端108.90m)

溝の底面は畦畔よりにやや傾きを持ち、やや湾曲ぎみに延びる。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 28号溝と同様に、U-44グリッドからU-45グリッドに延びる畦畔と走向が一致することから、水田区画に伴う人為的な溝と思われる。

第3章 検出された遺構と遺物

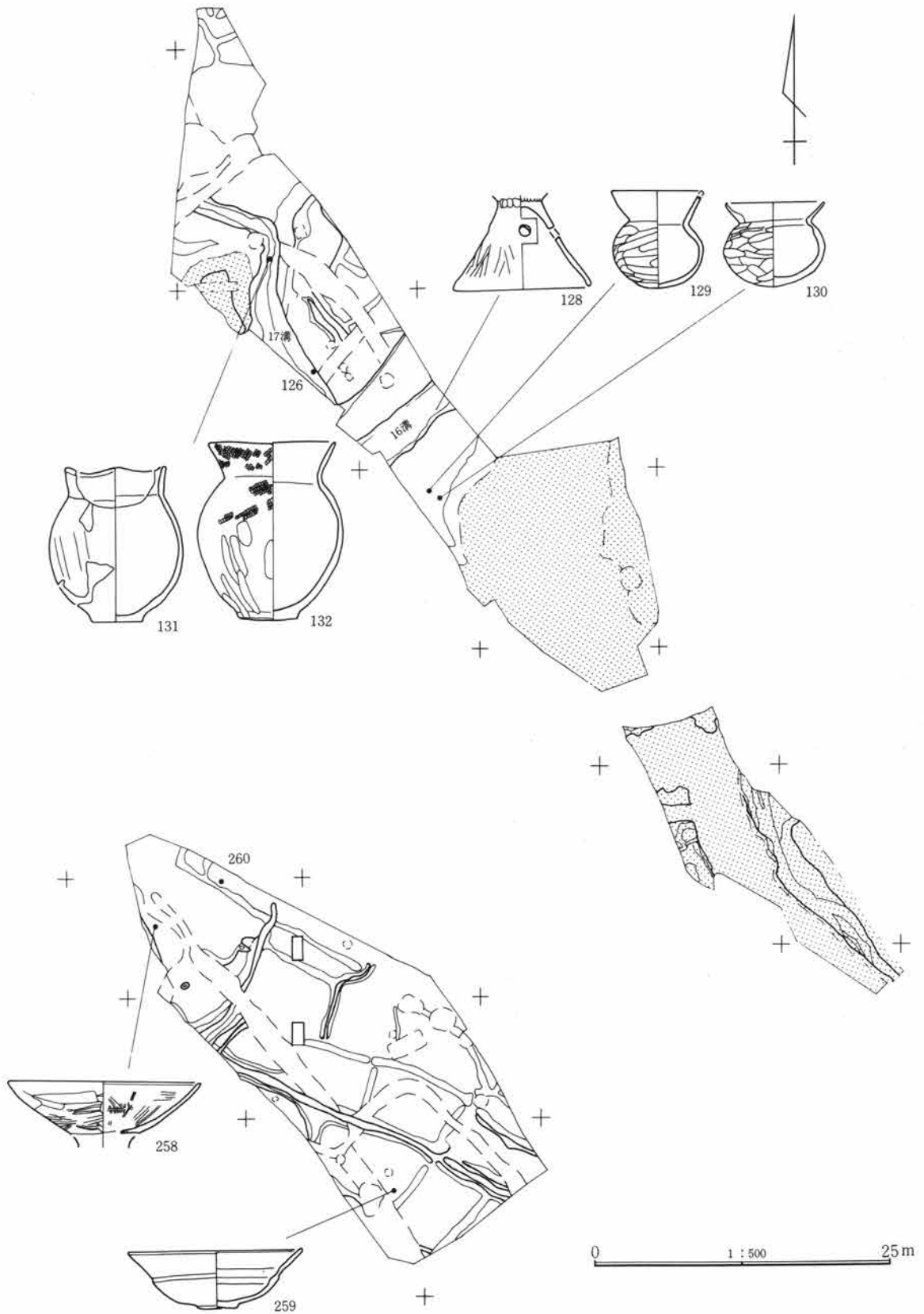


図118 II・III区5面の主な遺物分布

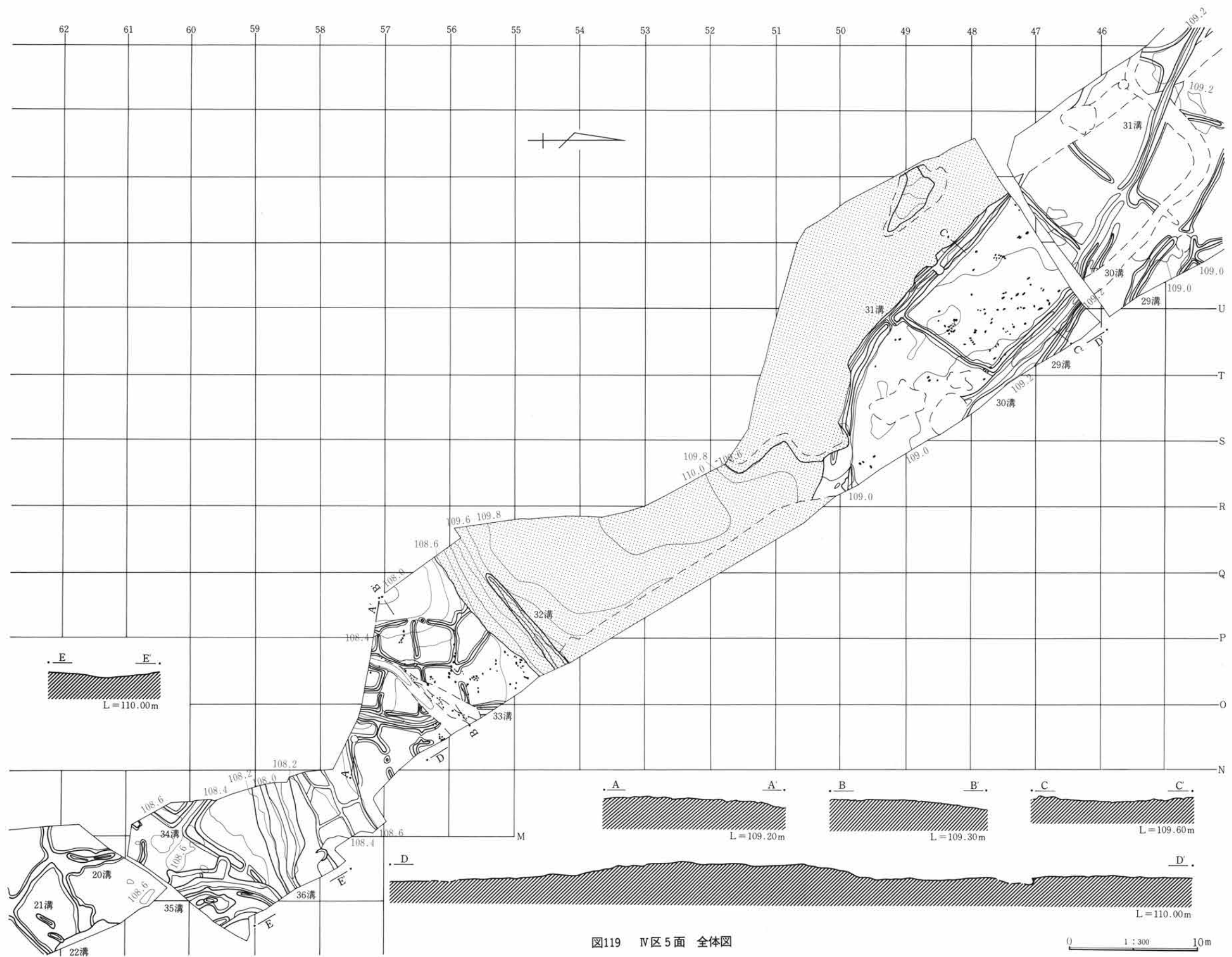


图119 IV区5面 全体图

0 1:300 10m

30号溝 付図 図116・117

位置 U・V-45・46グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北西-南東方向

規模 調査長4.54m 幅0.14m~0.50m
深さ0.01m~0.06m形状 (傾斜 北西端109.40m 南東端108.99m)
溝の底面はほぼ平坦であり、畦畔に沿って僅かに蛇行している。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 III区の25号溝から31号溝を経て、IV区の29号溝へと続く一連の流れであり、人為的、意図的に作られた溝である。また、31号溝と流路をともしないのは、IV区の異なった区画への配水を考慮したものと思われる。

31号溝 付図 図116・117・126 写図33-2・3

位置 U・V-45・46、W-45、X-44・45、Y-44、Z-43グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北西-南東方向

規模 調査長17.25m 幅0.34m~0.80m
深さ0.05m~0.20m形状 (傾斜 北西端109.13m 南東端109.04m)
溝の底面はほぼ平坦であり、畦畔に沿ってほぼ直線的に延びる。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 埋没土がAs-Cの純層堆積であることからみても、水田に伴う溝である。また、25号溝から本溝を経て、IV区の30号溝へと続く一連の流れの一部を成す溝でもある。走向は、ほぼ直線的であり配水距離も比較的長く、Z-43グリッドからV-45グリッドへ延びる畦畔に付随する。

7. IV区の As-C 下水田

付図 図11・117・119・120 写図34~37

被覆層と水田の残存状況 層厚3cm~25cmのAs-Cによって埋没した水田址は、畦畔、溝を伴い区画の形状を明瞭に残す。また、北半部の水田区画は、III区5面の区画の延長面であり、本調査区を主体として残存する。北半部の南西側は旧河道により削平を受け、該期の遺構面を残さない。区画は北半部で3枚、南半部、南端部で27枚検出された。**水田域の地形** 標高は調査区の北西隅で、109.05m、中央の台地部で、110.15m、南端部で108.60m、O-57グリッドで108.50mの最小値を測る。北半部は比較的平坦であるのに対して、南半部から南端部の南西方向にかけて比高0.80mの傾斜地形が認められる。おそらく地盤沈下によるものと思われる、本来の勾配をとどめていないと考えられる。**畦畔の走向と区画** 下幅0.30~0.85m、高さ0.01~0.03mを測る畦畔の走向は、他の調査区と同様に、ほぼ北西-南東方向及び北東-南西方向を継承しているが、例外として南半部の畦畔は、ほぼ南北方向を走向とする。その理由として、当初、北西-南東方向及び北東-南西方向であったものが、地盤沈下に伴う傾斜によって、位置が多少ずれた可能性もあるが、詳細は不明である。また、北半部は大区画なのに対して南半部は小区画となっているのは、黒色粘質土下層に堆積する土層が関係していると思われる。北半部では、黒色粘質土下層にしまりのある暗灰色シルト層が堆積しているのに対して、南半部では、透水性の良い灰色砂層が約10cm~25cmの厚さで堆積する。おそらく南半部では保水性を考慮して小区画になったものと考えられる。なお、北半部の水田区画が凹面となっているのは、土圧の影響による変形と思われる。**水田面の面積** 計測可能な水田区画を例にとると、III区5面の区画残存部を含めた北半部の大区画No.31では、計測値約84.60㎡を測り、南半部及び南端部の小区画では、平均約5.12㎡の計測値を示す。

第3章 検出された遺構と遺物



図120 IV区5面南半部・南端部 As-C下水田

取配水の方法 29～36号溝によって取配水が可能であり、取配水方向も水口から看取できる。調査区内の水系は、傾斜に沿って北西から南東方向及び北東から南西方向に向けての流れを持つと思われる。

耕作土 As-C直下の厚さ約5cm～25cmの黒色粘質土を水田耕土とし、所々にAs-Cにより埋没した凹凸が見られる。おそらく株痕か足跡であると思われるが、連続した歩行順序を示すものではない。

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

8. IV区の溝

29号溝 付図 図116・117・119

位置 T-46・47、U-46グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長4.64m 幅0.50m～0.78m
深さ0.05m～0.10m

形状 (傾斜 北西端108.95m 南東端108.01m)
底面は僅かに丸みを持ち、法面の立ち上がりも緩やかである。

埋没土 As-Cが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 III区5面の30号溝から続く人為的に作られた溝である。46～50ライン以東は調査範囲外であるため、詳細は不明であるが、III区の水田区画面とのつながりと、30号溝との間隔が徐々に離れていく様子からみて、調査区以東にも水田域が広がっていた可能性は高く、おそらく本溝の機能としては、区画面内への配水を目的としたものであると考えられる。

30号溝 付図 図116・117・119 写図35-1

位置 S-47・48、T-46・47、U-46グリッド

重複 IV区4面の16号溝と遺構位置が一致する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長11.66m 幅0.59m～1.20m
深さ0.05m～0.10m

形状 (傾斜 北西端109.00m 南東端108.01m)
溝の底面は僅かに丸みを持つがほぼ平坦であり、法面の立ち上がりは緩やかである。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 III区の31号溝と連続し水田区画への配水を可能にする人為的な溝である。

31号溝 付図 図116・117・119 写図35-2

位置 R-50、S・T-49、U-47・49、V-47グリッド

重複 なし。

走向 北西方向から南東方向へ直線的に延び、東方向に湾曲する。

規模 調査長20.75m 幅0.28m～0.60m
深さ0.04m～0.10m

形状 (傾斜 北西端109.25m 東端109.05m)
溝の底面は僅かに丸みを帯びるがほぼ平坦であり、畦畔に沿ってほぼ均一な幅を持つ。

埋没土 As-Cが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 区画に伴った溝であり、畦畔に沿った流路を有する。途中2カ所に設けられている水口から大区画内に配水したものと思われる。一部近・現代の河道によって台地部とともに削平を受けているが、当時は台地裾縁の地形に沿って巡らされていたものと推測される。

32号溝 付図 図119・120・126 写図36-2、37-4

位置 O-54、P-54・55グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向

規模 調査長9.01m 幅0.68m～1.00m
深さ0.10m～0.18m

形状 (傾斜 南西端109.50m 北東端109.05m)
溝の底面はほぼ平坦であり、直線状に延びる。

埋没土 As-Cが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 台地裾縁に位置するため水田面と比較して標高が高く、P-55グリッドで溝の南西端は立ち上がる。おそらく南半部の水田区画への配水を可能にする溝であり、北半部の31号溝と台地裾縁を巡って連続していたものと思われる。

33号溝 付図 図119・120・126 写・図37-1・2

位置 N-55・57、O-55グリッド

重複 4面13・14号溝に先行する。

走向 僅かに蛇行して南下する。

規模 調査長(10.23m) 幅0.30m~0.43m
深さ0.05m~0.10m

形状 (傾斜 北端108.75m 南端108.55m)

溝の底面はほぼ平坦であり、畦畔に沿って蛇行する。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 4面の17・18号溝によって削平を受けているため、一部確認不能な部分はあるが、水田区画に伴う溝であり、畦畔間を流路とする人為的、意図的な溝であると思われる。おそらくN~O-57~59ライン内において湾流し、南端部の34・36号溝と連続していたものと推測される。

34号溝 付図 図119・120

位置 M-59・60グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長3.00m 幅0.52m~0.90m
深さ0.05m

形状 (傾斜 南東端108.60m 北西端108.40m)

溝の底面はほぼ平坦であり、溝幅、深さとも均一である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 水田区画に伴う溝であり、畦畔間を流路としている。おそらく33号溝からの一連の溝であると思われる。また、溝の傾斜が北西方向に傾斜を有するのは、前述した地盤沈下の影響と考えられる。

35号溝 付図 図119・120

位置 K-58、L-58~60グリッド

重複 なし。

走向 北東方向から湾曲して南下する。

規模 調査長8.01m 幅0.70m~0.95m
深さ0.10m

形状 (傾斜 北東端108.30m)

溝の底面は僅かに丸みを帯び、深さも均一である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 水田区画内を湾曲して走向する点是不自然であるが、K-58グリッドから延びる畦畔が、溝に伴って湾曲していることからみて、走向は人為的に作られたものであり、他の区画内への配水を可能としている溝と推測される。また、L-59・60グリッド内で認められる凹面は、蛇行部の外側付近にあり、2カ所水口的な様相を呈していることから、流水を塞き止め、他の区画へ取配水した施設であった可能性もあるが、調査時点では、その施設に関連する痕跡及び遺物は検出されていない。

36号溝 付図 図119・120・126

位置 L-58、M-58・59グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北東-南西方向

規模 調査長8.32m 幅1.05m~3.30m
深さ0.25m

形状 (傾斜 北東端108.00m 南西端107.95m)

溝の底面はほぼ平坦であり、西方向にいくに従って幅が広くなる。法面の立ち上がりは緩やかである。

埋没土 As-Cが純層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 他の溝と比較して規模が大きく、水田区画内全域をほぼ流路としていることから、取配水の機能を有する主要水路であったものと思われ、本来の旧河道を利用した水田に伴う溝であった可能性が高い。

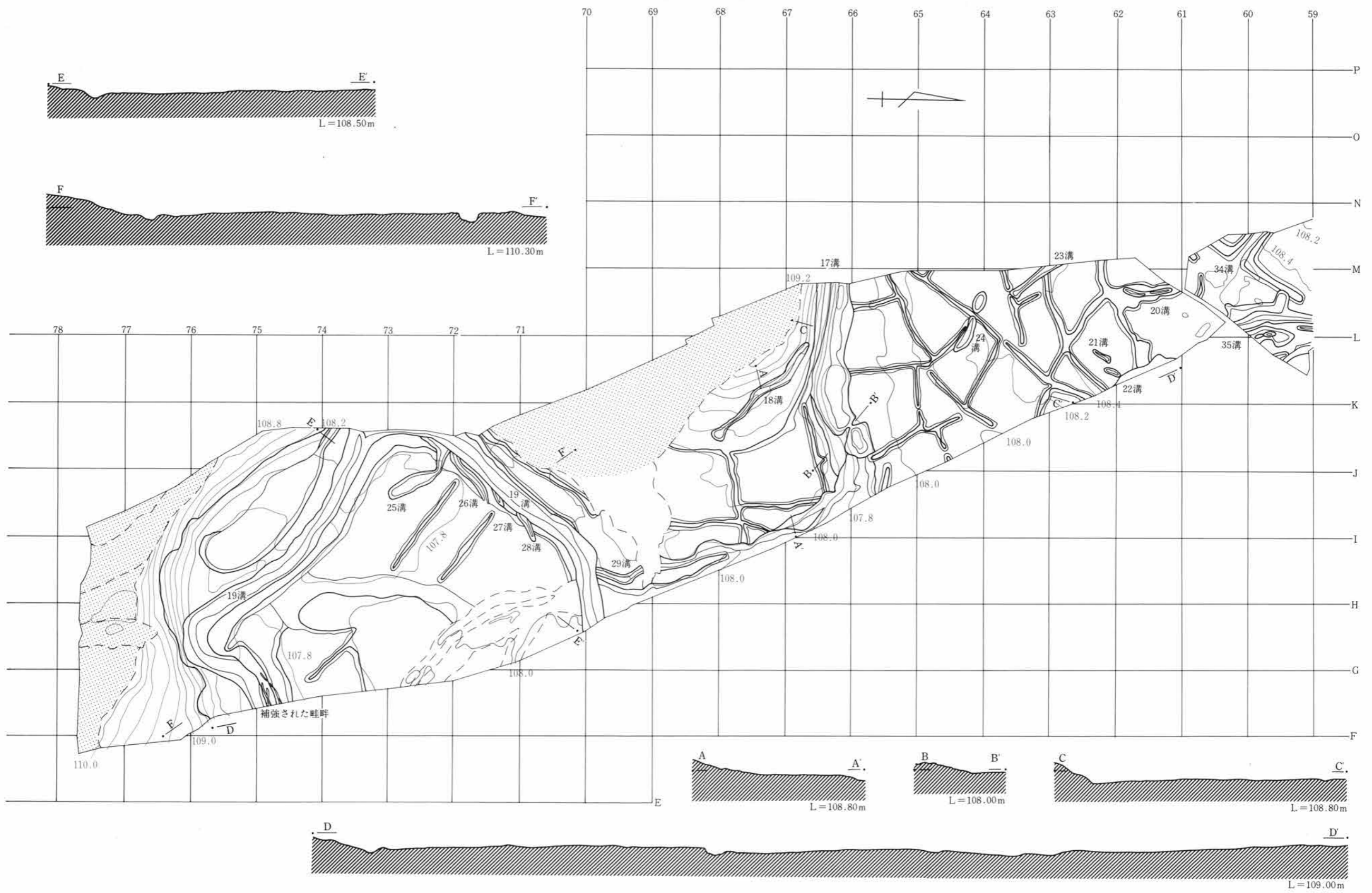


図121 V区5面 全体図

0 1 : 300 10m

9. V区のAs-C下水田

付図 図121~124 写図38~40

被覆層と水田の残存状況 調査区は1面の3・6号溝によって分断されるため、大きく北半部と南半部に分けられる。層厚約3cm~20cmのAs-Cにより埋没した水田区画は、北半部で25枚、南半部で5枚、黒色粘質土上面より検出された。南半部では畦畔は認められるものの完全な区画を決定するまでには至らなかったが、区画に配水するための機能を有する溝6条を検出した。全体的に残存状態は良好である。

水田域の地形 標高は調査区北隅で108.60m、中央の台地部で109.65m、南半台地部で109.60m、調査区東隅で108.15mを測る。水田は台地裾部東縁の谷底平野に展開され、南半部の水田面は凹状に窪む。また、台地部から低地部に移行する66と67ラインにかけて、比高1.60mの落差が生じるのは、地盤沈下に伴うものと思われ、調査時点においても浮き島状となっていたのが確認されている。

畦畔の走向と区画 下幅0.25m~2.10m、高さ0.01m~0.05mを測る畦畔の走向は、北西-南東方向及

び北東-南西方向を踏襲するものが主流を占め、北半部の一部で南北、東西方向を示すものが若干認められる。南半部では北西-南東方向に走向する畦畔と19号溝に沿って走向し大区画を成す畦畔が確認された。また、北半部の区画は方形状を主体とするが多種多様であり、南半部では大区画内を仕切る区画は不明瞭であり、しかも部分的にしか残存しないこと等からみて、収穫後、放置されたままの状態であった可能性が高い。

水田面の面積 計測可能な面積の平均値は北半部で14.71m²であり、南半部は畦畔が不明瞭なため測定の要素に欠けるが、区画No.90を例に挙げれば、その面積は30.82m²を示す。

取配水の方法 台地裾縁を走向する17号溝は畦畔に伴う水口へと通じる。また、19号溝は、水田面を囲む様に走向し、25~28号溝と連結して区画内への配水を可能とする。

その他の遺構 F-74グリッド内において、As-C下黒色粘質土中より、補強目的と思われる自然木を使用した畦畔を検出した。自然木は合計4本あり畦畔の両裾部分に2本ずつ水平に埋め込まれていた。

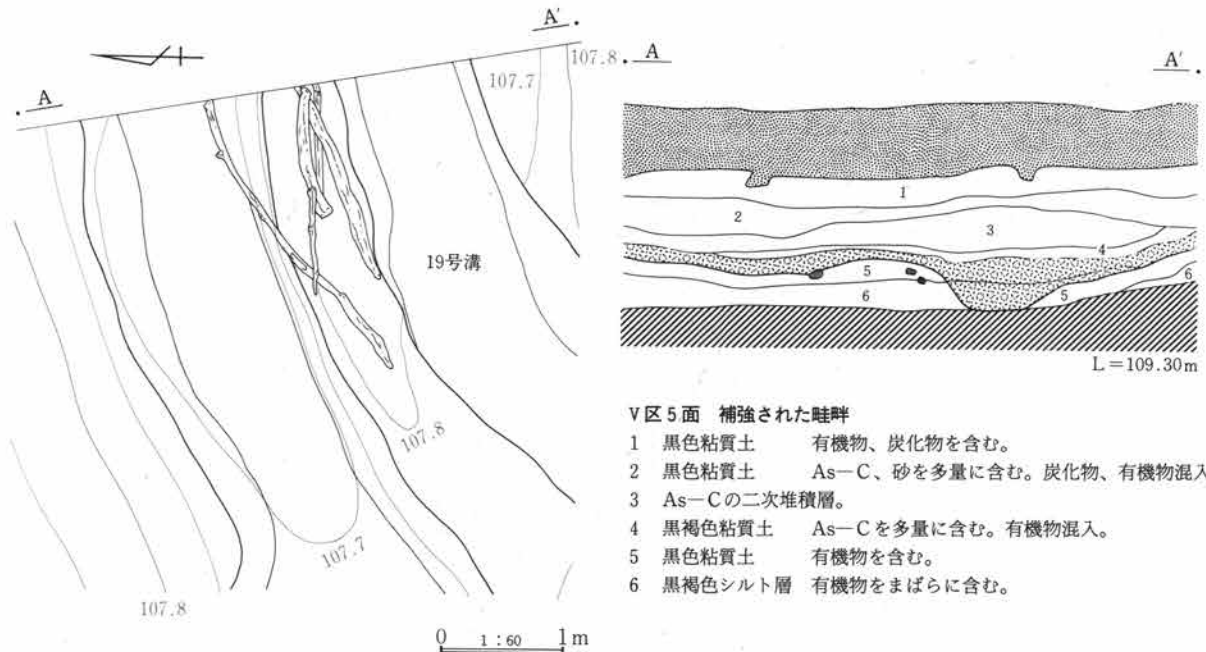


図122 V区5面 補強された畦畔

第3章 検出された遺構と遺物

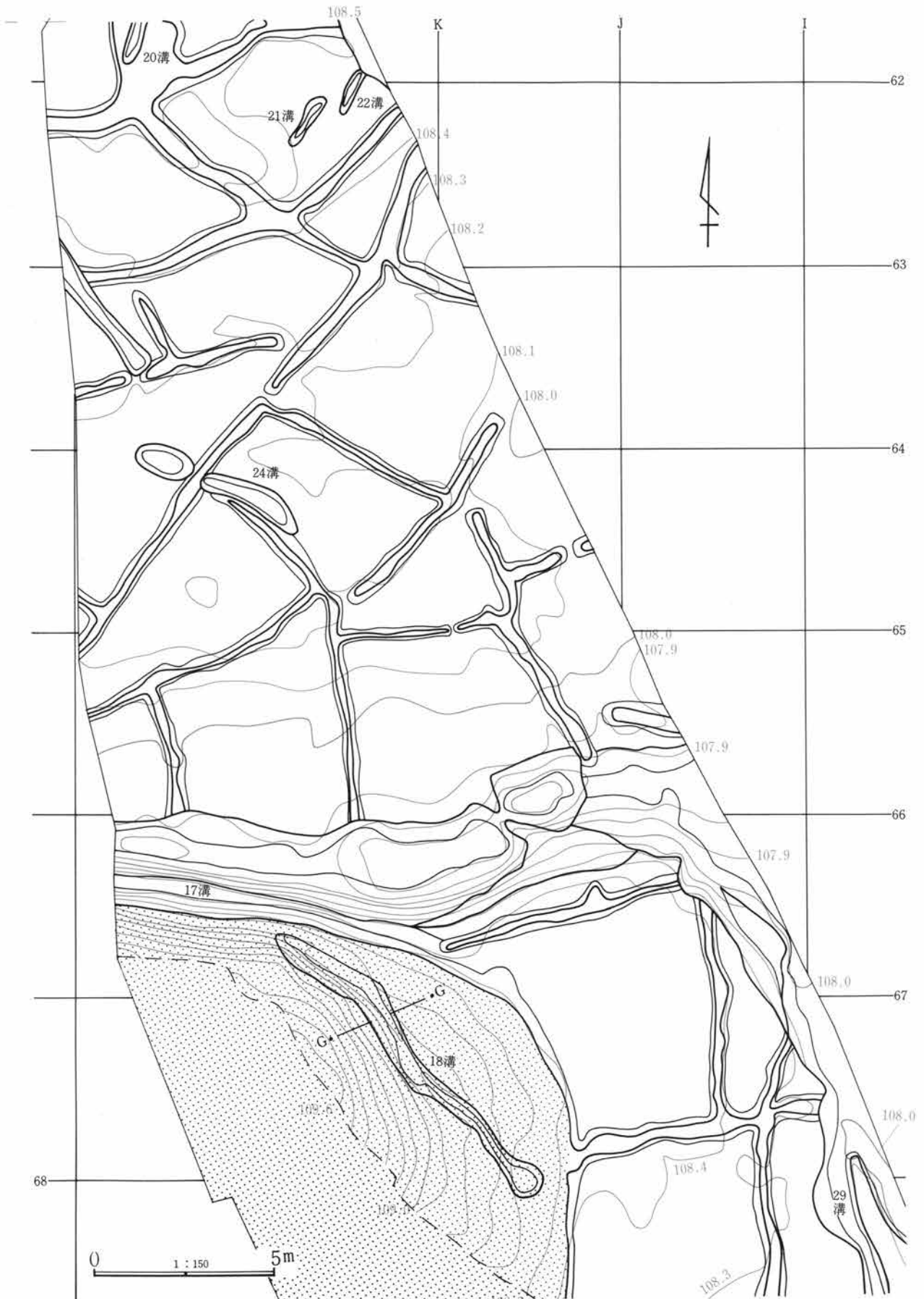


図123 V区5面北半部 As-C下水田

また、検出された畦畔の走向は、19号溝の走向と一致し隣接した位置にあることから、19号溝の流水作用によって畦畔が削り取られるのを防ぐ役割を果たしたと思われる。

水田面からの出土遺物 自然木

10. V区の溝

17号溝 付図 図121・123

位置 K・L-66グリッド

重複 18号溝に先行する。

走向 台地縁に沿って西から緩やかに南東方向へ湾曲する。

規模 調査長9.20m 幅(0.60m~0.75m)

深さ0.20m~0.25m

形状 (傾斜 西端108.40m 東端108.40m)

底面は僅かに丸みを持ち幅、深さともにほぼ均一である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 一部法面立上がりに乱れが認められたが、台地裾際を走向し、水田区画の水口へと続いている。溝の北側水田区画と比高を持つのは、区画が地盤沈下によって沈んでいるためであり、当時はあまり比高がなかったものと推測される。本溝は、おそらく台地裾縁を巡る走向を持つIV区の31・32号溝との一連の流れを有するものと思われる。また、途中で形状が完結している18号溝に近接して併走しているものの、埋没土からみて2溝の間には時期的な差が認められる。

18号溝 付図 図121・123・126

位置 J-67・68、K-66・67グリッド

重複 17号溝に後出する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長10.20m 幅0.26m~0.75m

深さ0.05m~0.35m

形状 (傾斜 北西端108.75m 南東端108.55m)

底面は僅かに丸みを持ち、法面の立ち上がりも緩やかである。

埋没土 As-Cの純層堆積は認められなかったが、多量のAs-Cを含む黒褐色土が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 As-C降下以降において、流水の作用による水田耕土とAs-Cとの混土が埋没土から看取することができる。このことからみて、17号溝に後出するものと思われ、また、L-66グリッド内で溝の北西端がとぎれ、形状が完結しているが、おそらく17号溝と同様に台地裾縁を巡る溝であったと思われる。機能的には、区画内への配水を考慮したものと思われる。

19号溝 付図 図121・123・126 写図40-3~6

位置 F-74・75、G-69・70・75・76・H-69・70・74・75、I-70・71・73・74、J-71~73グリッド

重複 4面、14・15・16号溝に先行する。

走向 G-69とF-75グリッドから水田区画面を取り巻く様にして南西方向へ進み、合流すると思われる。

規模 調査長52.60m 幅1.20m~1.90m

深さ 0.26m~0.71m

形状 (傾斜 東端107.26m 西端107.43m)

溝の底面はほぼ平坦であり、凹凸が認められる。法面の立ち上がりは水田面側に急傾斜を持ち不均一である。

埋没土 As-Cの純層堆積と二次堆積が認められる。

出土遺物 なし。

調査所見 確認面での取水施設等は認められなかったが、溝に深さの差異が認められことから、塞ぎ止めることによって水位を上げ、水田面への配水を可能にしたものと思われる。

20号溝 付図 図121・123

位置 L-61グリッド

重複 なし。

第3章 検出された遺構と遺物



図124 V区5面南半部 As-C下水田

走向 ほぼ北—南南西方向
規模 調査長3.70m 幅0.22m～0.40m
 深さ0.05m

形状 (傾斜 北端108.45m 南端108.45m)
 底面は僅かに丸みを持ち二分されている。

埋没土 As—Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 下幅約1.20m～2.10mの比較的幅のある畦畔の中央部に凹面を2カ所検出した。溝としての機能的な詳細は不明であるが、畦畔間を走向していた溝が、土圧の影響によって偏平され形状を変えた可能性も高い。

21号溝 付図 図121・123

位置 K—62グリッド

重複 なし。

走向 北東—南西方向

規模 調査長1.60m 幅0.20m～0.40m
 深さ0.05m

形状 (傾斜 北東端108.40m 南西端108.40m)
 底面はほぼ平坦であり深さは均一である。

埋没土 As—Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 水田区画内に孤立して残存する溝であり、その形状が完結しているため、機能的な詳細は不明である。

22号溝 付図 図121・123

位置 K—61・62グリッド

重複 なし。

走向 北東—南東方向

規模 調査長1.20m 幅0.26m～0.32m
 深さ0.05m

形状 (傾斜 北東端108.40m 南西端108.40m)
 底面はほぼ平坦であり深さは均一である。

埋没土 As—Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 21号溝と同様に、水田区画内に孤立して

残存する溝であり、その形状が完結しているため、機能的な詳細は不明である。

23号溝 付図 図121

位置 L・M—62・63グリッド

重複 なし。

走向 北西—南東方向

規模 調査長3.70m 幅0.20m～0.40m
 深さ0.05m

形状 (傾斜 北西端108.30m 南東端108.30m)
 底面は僅かに丸みを持ちほぼ平坦である。

埋没土 As—Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 走向が区画の水口へと続いていることからみて、区画内への配水を可能にする人為的、意図的な溝であり、区画の形状を考慮せず、また、畦畔を横切って走向させていること等からみて、応急的に作られた溝であった可能性も残るが、詳細は不明である。

24号溝 付図 図121・123

位置 K・L—63・64グリッド

重複 なし。

走向 西からやや湾曲して南東方向に延びる。

規模 調査長3.15m 幅0.50m～0.73m
 深さ0.05m

形状 (傾斜 西端108.25m 南東端108.25m)
 底面幅は不均一であるがほぼ平坦である。

埋没土 As—Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 水口部分に付随して2カ所検出された。機能的には区画内への配水を可能にしたものと思われるが、おそらく23号溝と同様に、水田区画内への配水時において、流れの悪い箇所、もしくはK—64グリッド内の水口部分への配水量を促進させるための工作であったとも推測できるが、詳細は不明である。

25号溝 付図 図121・124

位置 I-72・73、J-72グリッド

重複 なし。

走向 西-南東方向に湾曲する。

規模 調査長6.20m 幅0.35m~1.18m

深さ0.05m~0.10m

形状 (傾斜 西端107.90m 南東端107.70m)

底面幅、深さともに不均一であるがほぼ平坦である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 19号溝に伴って作られた溝であり、大区画内への取配水を可能にする。26~28号溝と同様の機能を有する。

26号溝 付図 図121・124

位置 I-71、J-71・72グリッド

重複 なし。

走向 東から蛇行して19号溝に接続する。

規模 調査長4.15m 幅0.23m~0.68m

深さ0.05m

形状 (傾斜 北東端107.85m 南西端107.85m)

底面幅、深さともにほぼ均一であり平坦である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 19号溝に伴って作られた溝であり、大区画内への配水を可能とする。25・27・28号溝と同様の機能を有する。

27号溝 付図 図121・124

位置 I-71グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北東-西方向に延び19号溝に接続する。

規模 調査長1.45m 幅0.22m~0.32m

深さ0.05m

形状 (傾斜 北東端107.85m 南西端107.85m)

溝の底面は僅かに丸みを帯びるがほぼ平坦である。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 19号溝に伴う溝であり、大区画内への配水を可能とする。25・26・28号溝と同様の機能を有する。

28号溝 付図 図121・124

位置 H-70、I-70・71グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ北東-西方向に延び19号溝に接続する。

規模 調査長2.20m 幅0.30m~0.55m

深さ0.05m

形状 (傾斜 東端107.90m 南西端107.90m)

底面幅は19号溝との接続部分で広くなり僅かに丸みを帯びる。

埋没土 As-Cの純層堆積。

出土遺物 なし。

調査所見 19号溝に伴う溝であり、大区画内への配水を可能とする。25~27号溝と同様の機能を有する。

29号溝 付図 図121・123・124

位置 H-69グリッド

重複 なし。

走向 ほぼ南北方向

規模 調査長4.50m 幅0.50m~1.10m

深さ0.10m~0.25m

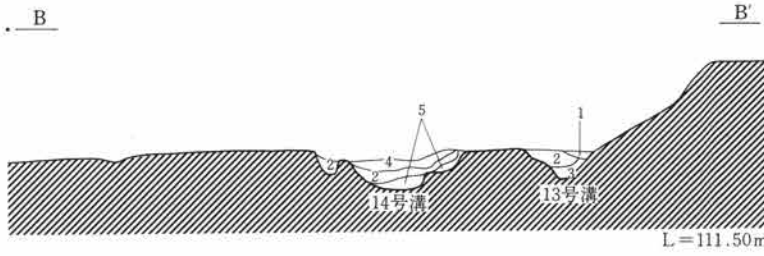
形状 (傾斜 北端108.00m 南端108.00m)

底面は僅かに丸みを持ち蛇行する。

埋没土 As-Cの純層堆積。

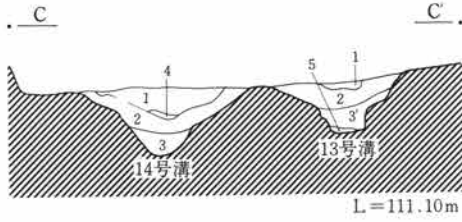
出土遺物 なし。

調査所見 19号溝に伴って作られた溝であり、水田区画内への配水を可能とする。本溝の南端部の標高は、19号溝との合流部分よりも高いことから、北半部の水田域からの流水の一部を集め、19号溝へと排水していたものと推測される。また、本溝の東側の落ち込みは、上面からの削平を受けているが、この時期に相当する旧河道の蛇行部であった可能性も高い。



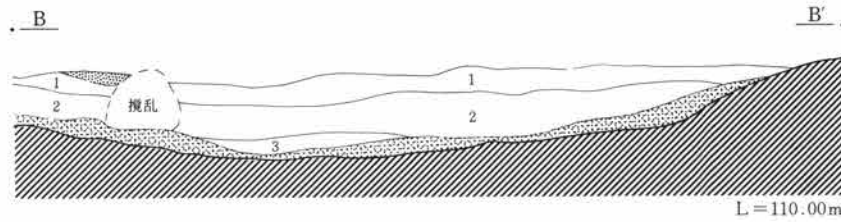
I区5面 13・14号溝

- 1 黒褐色土 As-Cを多量に含み、黄褐色粒子を少量含む。しまり弱く粘性あり。
- 2 黒褐色土 As-Cを極多量に含む。
- 3 黒褐色粘質土 As-Cをほとんど含まず、黄褐色粒子を少量含む。
- 4 暗褐色シルト質土 軽石を含まない。
- 5 黒褐色土 As-C、砂を含む。



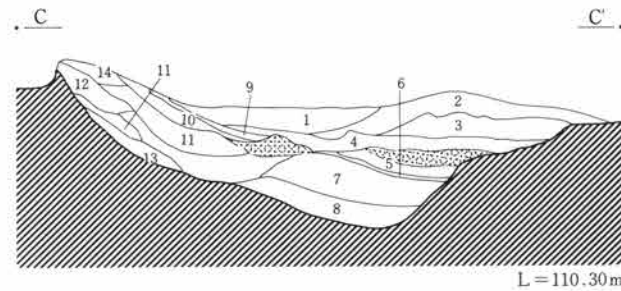
I区5面 13・14号溝

- 1 黒色土 As-Cを多量に含み、粘性あり。
- 2 黒褐色土 As-Cを多量に含み、黄褐色土粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土 As-Cをほとんど含まず、黄褐色土粒子をやや多く含む。
- 3' 黒褐色土 3よりもAs-Cをやや多く含み、しまり弱い。
- 4 黒褐色土 砂を多く含む。
- 5 黒褐色砂層 小礫を含む。



II区5面 16号溝

- 1 黒色粘質土 粘性強い水田土壤。
- 2 黒色粘質土 1と同様であるが、やや色調が明るく、灰色を帯びる。
- 3 黒色粘質土 2に類似するが、As-Cを多量に含む。



II区5面 17号溝

- 1 黒褐色土 粘性あり。(FA下水田土壤)
- 2 黒褐色土 1よりも色調が明るくAs-Cを少量含む。FA下水田土壤。
- 3 暗灰褐色土 As-Cを含む。黒褐色土を若干含み、10よりも色調が暗い。
- 4 暗灰褐色土 As-Cを含む。
- 5 暗灰褐色土 As-Cをやや多く含む。粒子は10よりも粗い。

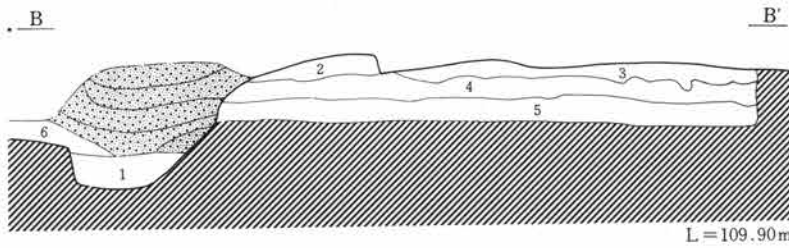
- 6 黒色粘性土 しまり弱い。
- 7 暗灰色砂層 ラミナ状堆積。As-Cを少量含む。
- 8 茶褐色砂層 As-Cを多量に含む。鉄分沈着。しまり強い。
- 9 暗褐色土 炭化物を層状に含む。
- 10 茶灰白色砂質シルト層 炭化物を少量含む。
- 11 灰白色細砂層 ラミナ状堆積。

- 12 暗褐色シルト層 砂をブロック状に含む。粘性あり。
- 12' 暗褐色シルト層 黄褐色岩片を多量に含み、As-Cを少量含む。
- 13 暗灰褐色土 ロームブロック、黒色土を含み、硬質。As-C、砂を少量含む。
- 14 灰褐色土 As-Cを多量に含み、黄褐色岩片を少量含む。



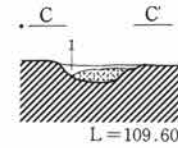
図125 I区5面 13・14号溝、II区5面 16・17号溝土層断面

第3章 検出された遺構と遺物



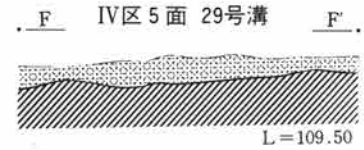
III区 5面 25号溝

- 1 砂礫層 径2~3mmの礫層。
- 2 黒褐色土 粘性あり。
- 3 暗褐色土 径5mm前後の灰白色岩片を含む。
- 4 暗褐色土 やや砂質。粘性弱い。
- 5 暗灰色砂質土 粗砂。
- 6 茶褐色土 やや砂質。植物質、木器を含む。

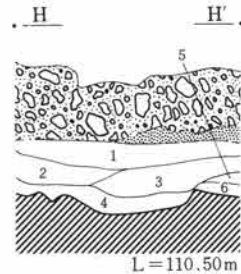
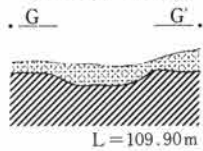


III区 5面 31号溝

- 1 黒色土 As-C混じり。

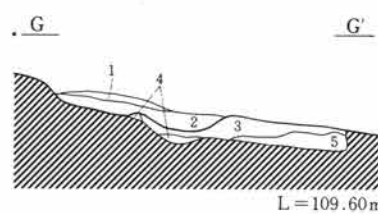
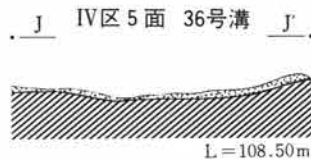
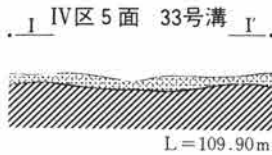


IV区 5面 30号溝



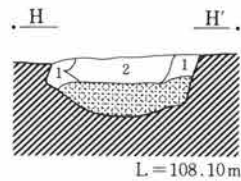
IV区 5面 32号溝

- 1 黒色粘質土 As-Cをまばらに含む水田土壌。
- 2 暗灰色粘質土 As-C、白色のシルト小ブロックを含む。しまり強い。鉄分凝集。
- 3 黒灰色粘質土 粒子細かく、しまり強い。
- 4 灰色砂質土 As-Cを多く含む。鉄分凝集。しまりあり。
- 5 黒色粘質土 As-Cを含む。
- 6 黒色粘質土 As-Cと黒色粘質土の混土。



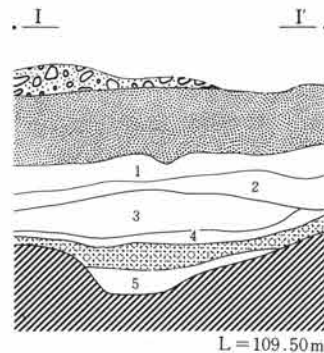
V区 5面 18号溝

- 1 黒褐色土 As-Cを多量に含み、砂層ブロックを含む。
- 2 暗褐色砂層 As-Cを含む。鉄分沈着。
- 3 暗褐色砂層 2よりも粒径が小さく、As-Cを少量含む。鉄分沈着。
- 4 黒灰色土 粒子細かく、粘性あり。
- 5 黒色土 As-Cを多量に含み、粘性なし。



V区 5面 19号溝

- 1 黒褐色土 粒子細かく、粘性弱い。
- 2 As-Cの二次堆積層。

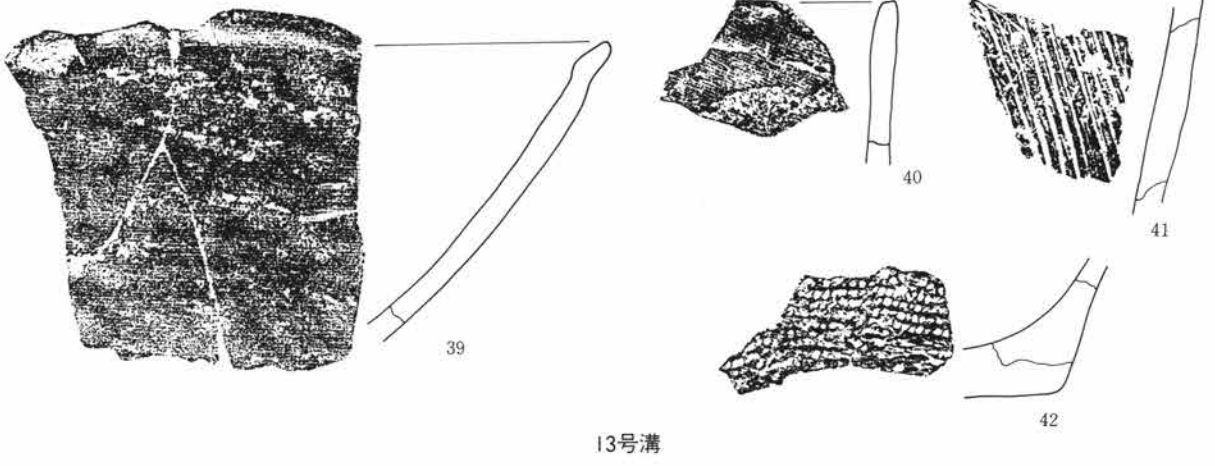


V区 5面 19号溝

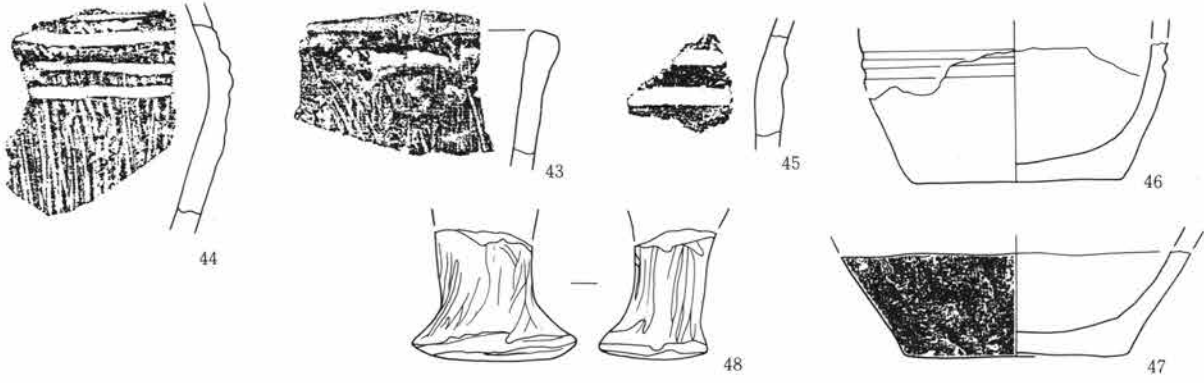
- 1 黒色粘質土 有機物、炭化物を含む。
- 2 黒色粘質土 As-Cを少量含み、有機物混入。
- 3 As-Cの二次堆積層。
- 4 黒褐色粘質土 As-Cを多量に含み、有機物混入。
- 5 As-Cに砂粒を少量含む。



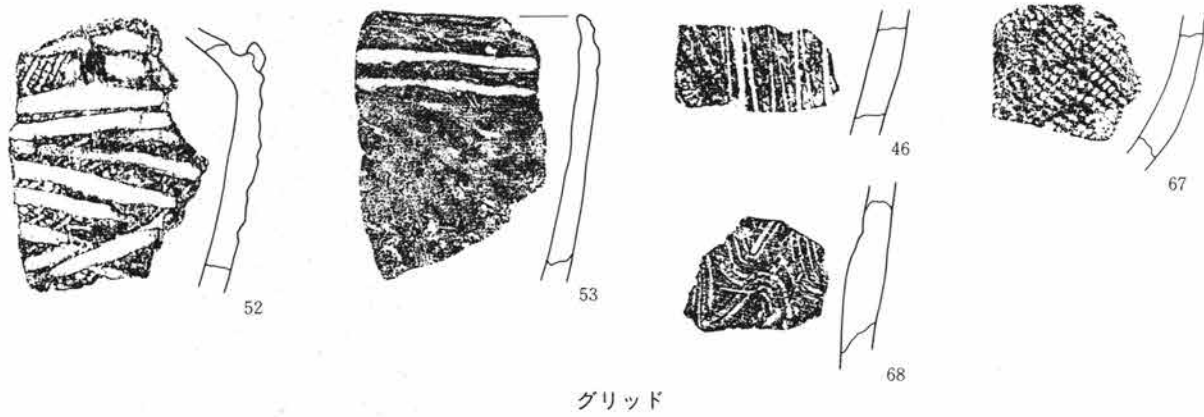
図126 III区 5面 25・31号溝、IV区 5面 29・30・32・33・36号溝、V区 5面 18・19号溝土層断面



13号溝



14号溝

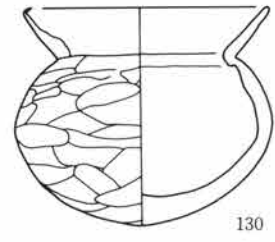
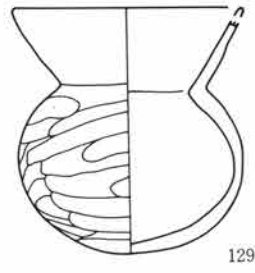
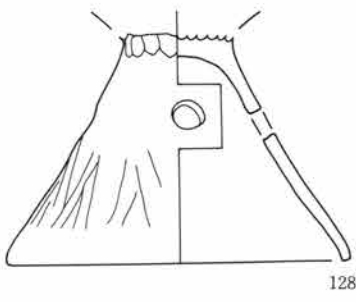


グリッド

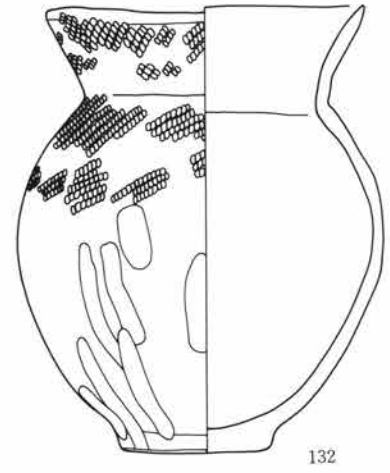
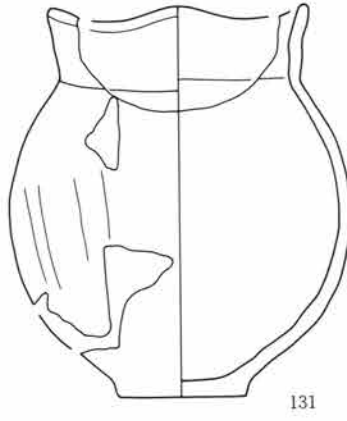
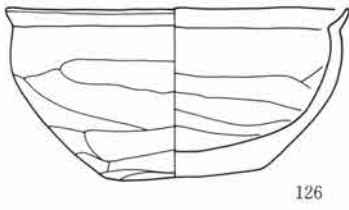
0 1 : 2 20cm

図127 I区5面 13・14号溝、グリッド出土遺物

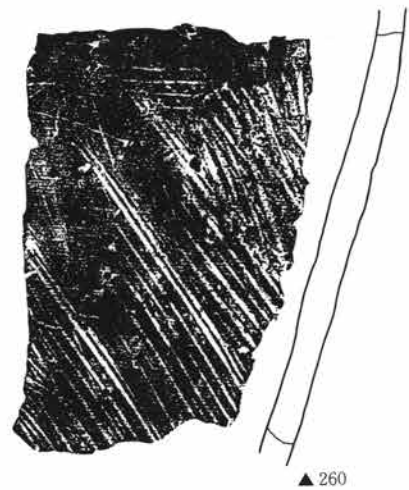
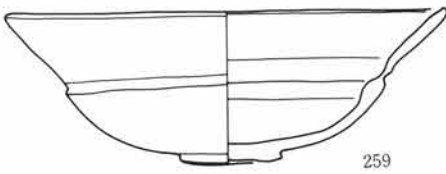
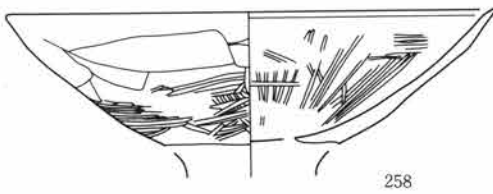
第3章 検出された遺構と遺物



16号溝



17号溝



グリッド

0 1 : 3 10cm

図128 II区5面 16・17号溝、III区5面 グリッド出土遺物

第6節 6面の調査

1. 概要

As-C下の黒色粘質土層は上面が古墳時代前期に比定される水田耕土であるが、漸次下層に行くに従って弥生時代後期～縄文時代前期までの遺物を包含する。また、土質は粘質からシルト質、色調も黒色から暗褐色へと変化していく。本遺跡での6面の調査はI区・III・IV・V区でそれぞれ試掘調査を実施した。調査の結果、該期の遺構は検出されなかったが、前述した包含層より該期の遺物の出土をみた。

I区では、5面の遺構である13・14号溝が該期の包含層を切り込んでいるため、両溝の底面及び法面を土層観察用のトレンチに代替し、調査区全域にわたって包含層を掘り下げて、遺構・遺物の確認調査

を実施した。調査の結果、該期の遺構は検出されなかったが、5面、14号溝の法面部分にあたる黒褐色粘質土中より数点の土器片が出土し、同じく2S-10グリッドに掛かる14号溝の底面部分より、縄文時代晩期終末に比定される壺がほぼ完形の状態で出土した。壺の胴部には、縦4.5mm、横2.5mmの窪みが一箇所看取でき、窪みの深さは1.0mmを測る。また、窪みの底面には植物繊維らしき縦縞模様がやや不鮮明であるが確認することができる。窪みの形状、大きさ等からみて、この窪みは杵痕と考えられるが、現時点では確証は得られていない。壺の器面は全体的に磨滅していること等からみて、流水に伴う本調査区への流入が考えられる。

III区では、調査区に掛かるW・Yラインに沿ったトレンチの他に4本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。また、Yラインの42・43グリッド内で2箇所、土層観察用のトレンチを設定して、As-C

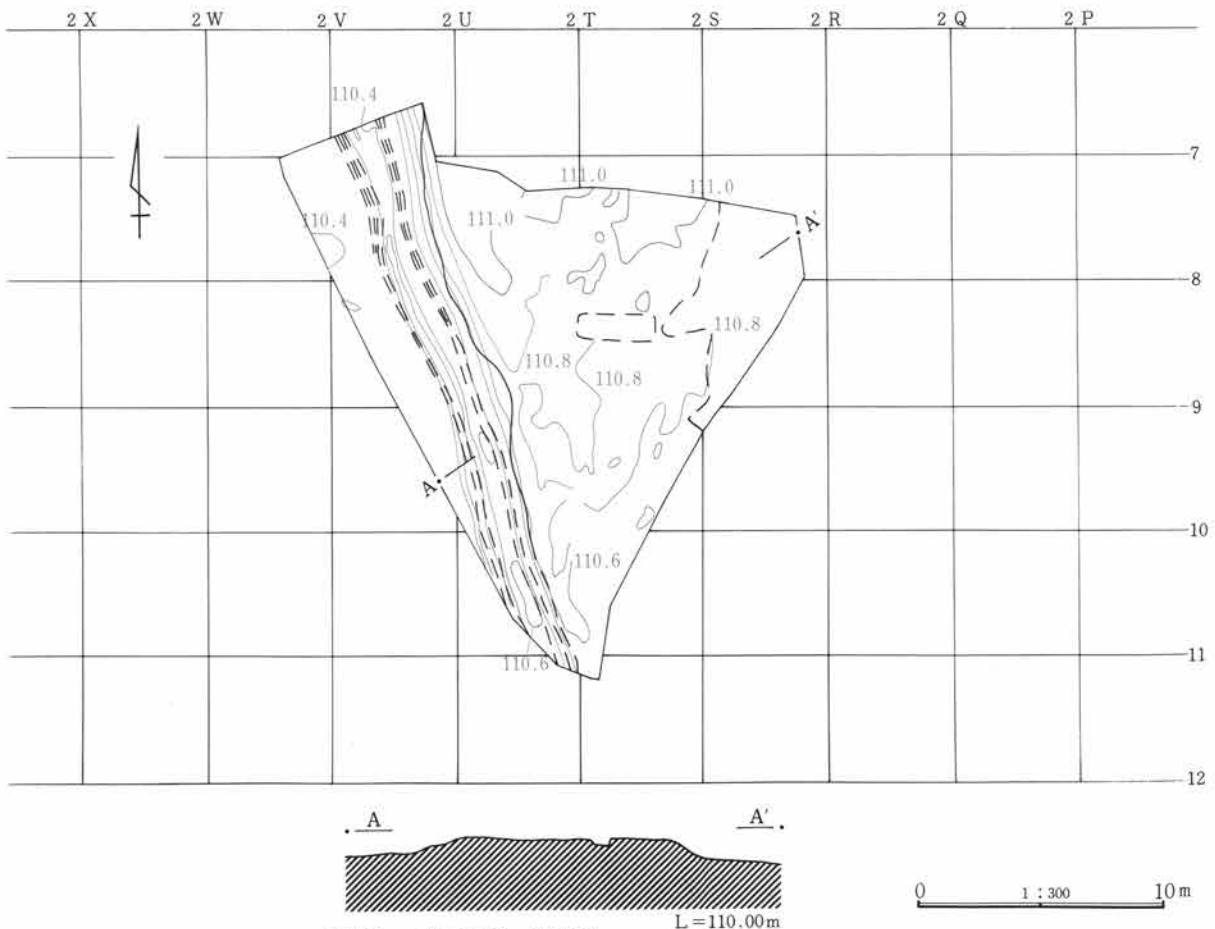


図129 I区6面 全体図

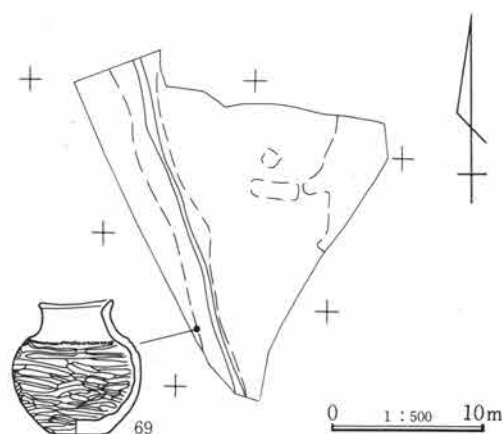


図130 I区6面の主な遺物分布

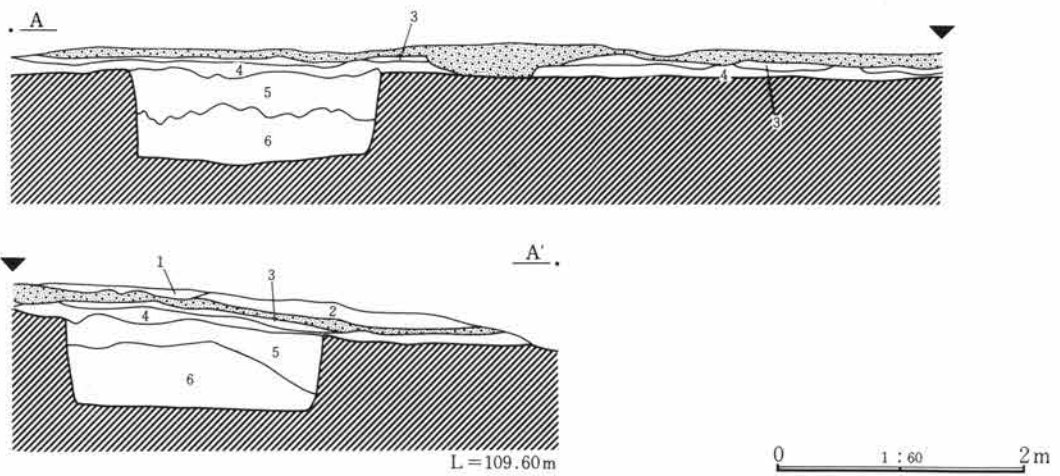
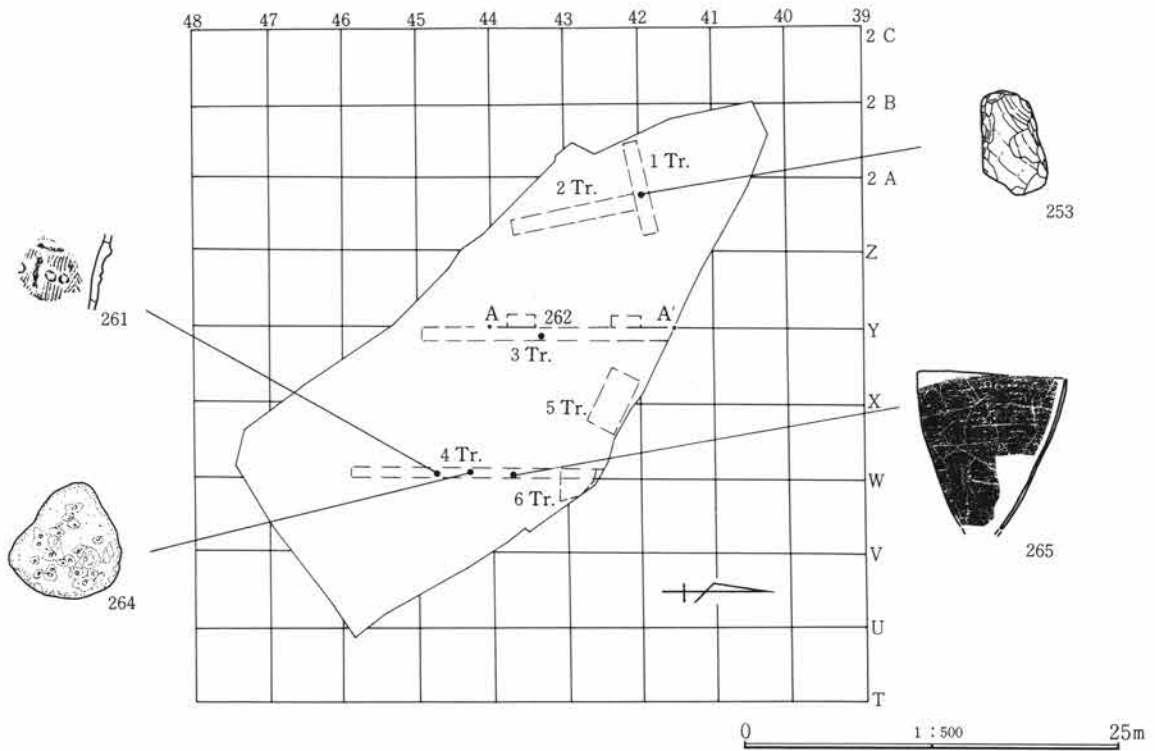
下約1mまでの暗灰褐色土層まで掘り下げ、遺構・遺物の確認調査を実施した。調査の結果、Wラインのトレンチより縄文時代晩期の粗製の深鉢が土圧により押し潰された状態で出土した他に、多孔石、弥生時代の土器片が出土した。深鉢は、底部が欠損しているものの、口縁直下に水平に穿たれた1対の焼成前穿孔の補修孔が看取できる。補修孔は、外面径6mm、内面径4mm、孔間2cmを測る。また、Yラインのトレンチと1トレンチからは、弥生時代の土器片と打製石斧がそれぞれ出土したが、該期の遺構は検出されなかった。以上の様に、III区でもI区と同様の遺物の出土をみたが、さらに深く掘り下げた底面部分や井戸の底面部分等から自然木が出土しているのが確認され、それらはその下層を抜くことができなほの大きなものであり、かつ調査区一面に広がりをもつことが推定された。そこで調査区北東壁寄りのW・Yラインの中間地点に新たにトレンチを設定し、人力による掘り下げを行い、下層の確認調査を続行したところ、トレンチは下層に行くに従い湧水が激しくなり、人力による掘り下げには限界が生じたため、W-42グリッド付近の調査区北東壁寄り、重機による掘り下げを実施した。その結果、深さ約2mの砂礫層中より、自然木と思われる流木が出土し、部分的に炭化している痕跡が認められるものの、それらは人為的なものではないと思われる。時間の経過に伴って湧水が激しくなったため、すぐさま埋め戻し作業を行い6面の調査を終了した。

IV区では、北半部から南半部にかけて調査区北東壁に沿った全長約61m、幅約1.50mのトレンチを設定し試掘調査を実施した。As-C層下の黒色粘質土から黒褐色シルト層・黒色シルト層まで掘り下げた結果、該期の遺構の検出並びに遺物の出土は認められなかった。また、トレンチの中央部は、台地部分にあたり、そこではAs-SjとAs-YPの純層堆積を確認したにとどまった。

第5次調査の調査区となったIV区南端部では、今までの試掘経過を踏まえて、L-58グリッド内で重機による試掘調査を実施した。調査の結果、調査区中央部で東西方向の落ち込みが認められたため、掘り下げたところ、As-C層下約1mの深さで旧河道の河床を検出した。旧河道の川岸にあたる所では、立ち木の根の部分が残存し、砂礫層で埋没した河道内よりIII区と同様の自然木と磨滅した数点の縄文式土器片、その他に枝葉・木の実等が確認されたが、湧水による壁面の崩壊の危険性が生じたため、写真撮影及び測量実測終了後に埋め戻し作業を実施し、調査を終了した。

V区では、幅約1.50mのトレンチを5本設定し、人力による試掘調査を実施したところ、やはりIII・IV区と同様の自然木が確認された。自然木は、台地の湾入部付近で多く検出されたことからみて、旧河道の流路(蛇行)に沿って埋没していったものと考えられる。

以上の様に、6面の調査は、I区を除きすべてが試掘調査であり、全面発掘とまではいかなかったが、保存状態の割合と良好な自然木と縄文時代前期～弥生時代後期にかけての土器片等が検出された。おそらくこれらの流木及び自然木群は、利根川河岸地域に広がっていた荒原を構成していた樹木群であり、縄文時代前期から弥生時代後期まで続く、旧牛池川の下刻・浸食作用に伴う洪水堆積物とともに、本調査区内に流入されたものと考えられる。

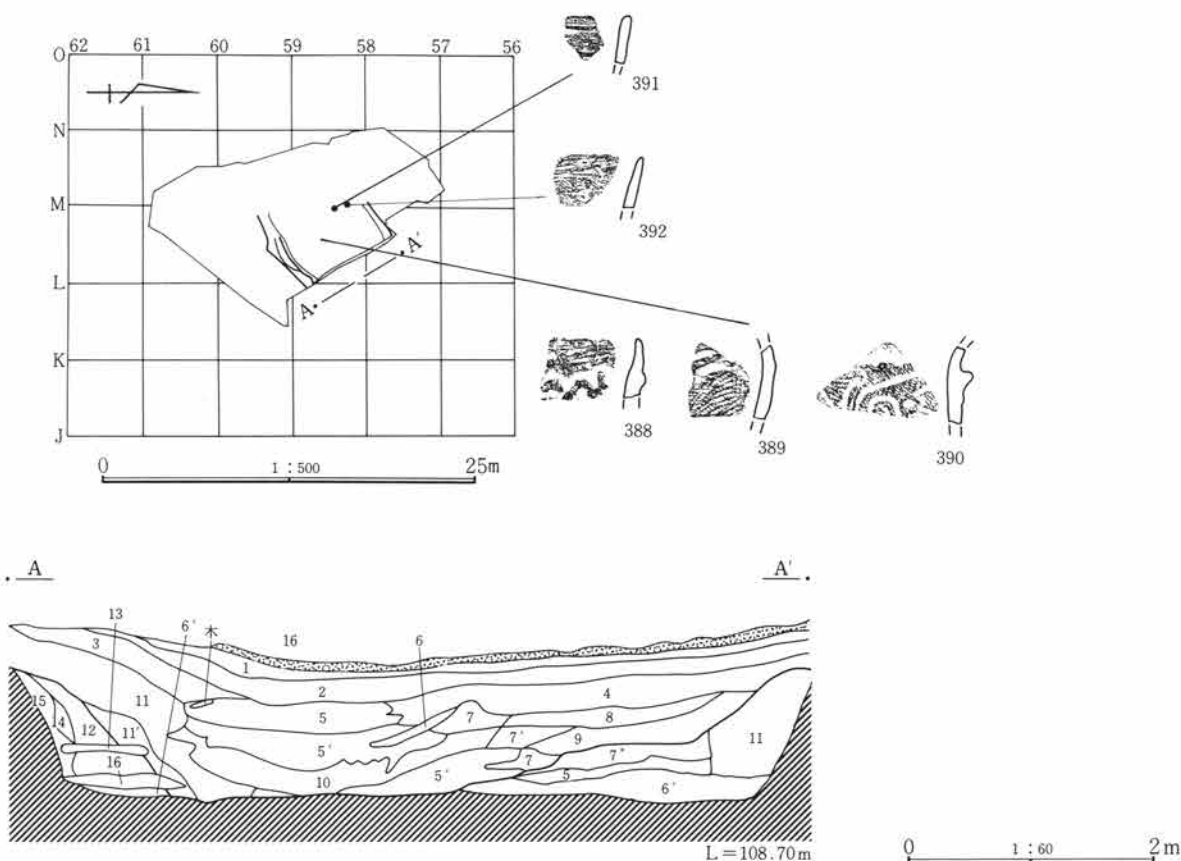


Ⅲ区6面 Yライトレンチ

- 1 黒褐色土 As-Cを多量に含む。粒子は細かい。
- 2 黄灰色土 砂粒、As-Cを含む。
- 3 黒褐色土 黒色土を少量含む砂質土。As-Cを含む。粒子は細かい。
- 4 黄褐色土 若干細砂を含む細・粗粒子のAs-C層。
- 5 黒色粘質土 炭化物粒子を含み、As-Cを少量含む。やや砂質。(As-C下水田耕土)
- 6 暗灰褐色土 下層にいくに従い色調が明るくなり、土質も砂質となる。

図131 Ⅲ区6面 トレンチ設定図と土層断面

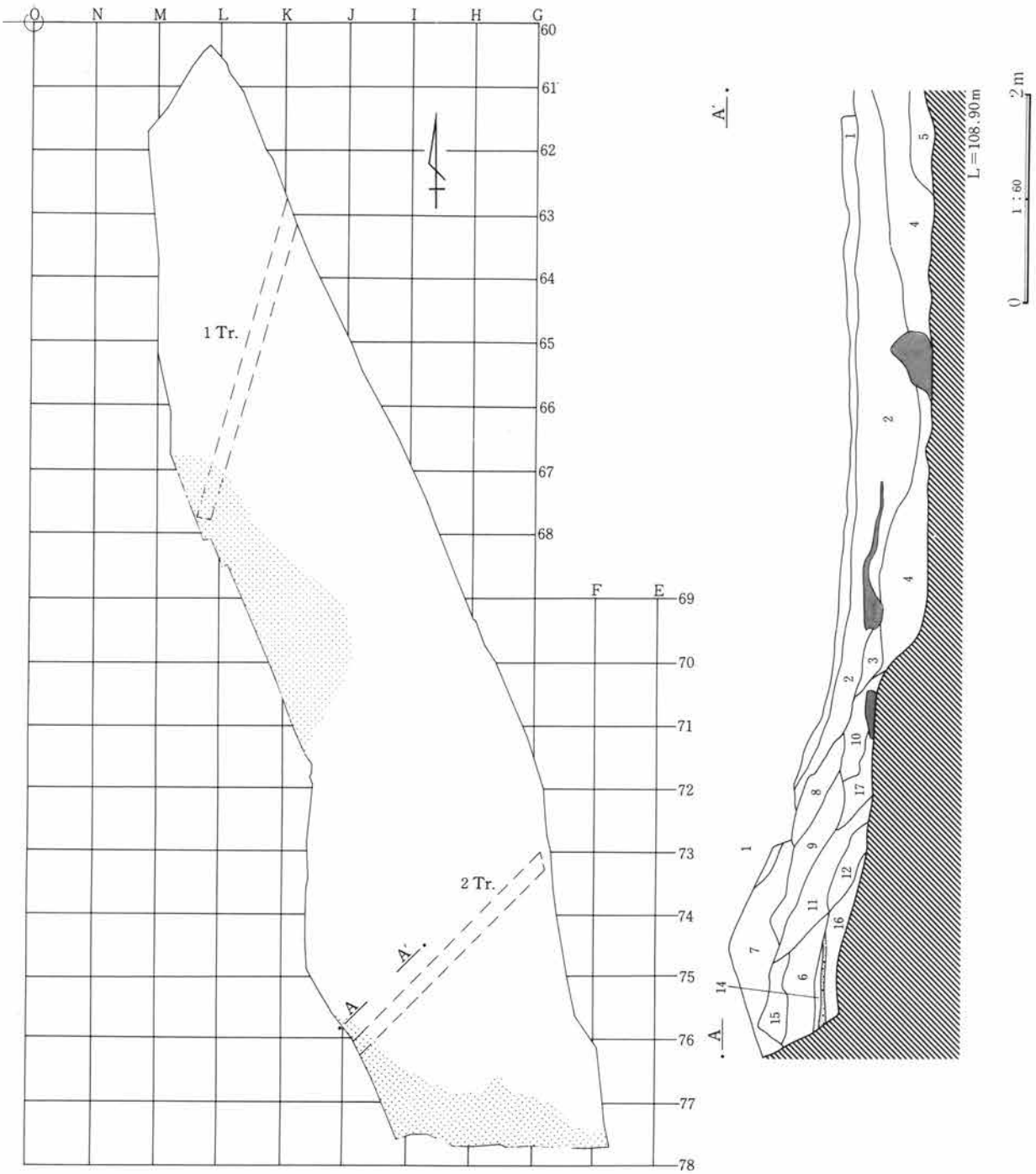
第3章 検出された遺構と遺物



IV区6面南端部 旧河道

- | | | | |
|---|--|--|---|
| <p>1 黒褐色粘質土
2 黒褐色粘質土
3 暗オリーブ褐色土
4 暗オリーブ褐色土
5 オリーブ砂層
5' オリーブ砂層
6 オリーブ褐色土
6' オリーブ褐色土
7 黄灰色土</p> | <p>茶色、黄褐色植物質を数ミリ単位に互層堆積。しまり強い。
1と同様であるが、色調がやや明るい。
細砂小塊をわずかに含む。層中に砂粒を層状に挟む。
泥炭がわずかに層状に入る。粘性、しまり強い。
層中に暗オリーブ褐色のシルト質土がラミナ状に入る。枝状木質を含む。
5と同様であるが、ラミナが減少する。
枝、葉、木質を多量に含む。細砂少量混入。
6と同様であるが、粘性が強くなる。
細砂、シルトがラミナ状に挟む。粘性強い。</p> | <p>7' 黄灰色土
7'' 黄灰色土
8 黄灰色土
9 黄灰色土
10 黒褐色土
11 黄灰色土
11' 黄灰色土
12 黄灰色土
13 黄灰色土
14 暗灰黄色土
15 灰白色土
16 灰オリーブ砂層</p> | <p>細砂、シルトをラミナ状に挟む。粘性強い。
細砂、シルトをラミナ状に挟む。枝、葉を多く含む。
葉、枝、幹を含み、シルト、砂粒を混入。粘性あり。
8と同様であるが、砂粒の小塊を含む。
粘性強く、幹、葉、枝を多く含む。
シルト質でしまりがない。
11と同様であるが、しまりが強い。
灰白色シルト小塊を多く含む。しまりあり。
中間にオリーブ灰色土を含む。
灰白色シルトを含む。
地山シルト</p> |
|---|--|--|---|

図132 IV区6面南端部 トレンチ設定図と旧河道土層断面



0 1 : 500 25m

V区6面 試掘トレンチ2

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|--------------------------|
| 1 黑色粘質土 | 川砂を小ブロックで含む。(As-C下水田土壌) | 9 黑色土 | やや粘性あり。 |
| 2 黑色粘質土 | 流木を含む。粘性あり。 | 10 灰色土 | 川砂、円礫、黑色土のブロックを含む。 |
| 3 黑色土 | 少量の細砂を含み、川砂を水平堆積する。 | 11 黑色土 | 川砂のブロックを含む。 |
| 4 黑色土 | やや粘性あり。少量の細砂を含む。 | 12 灰黄褐色土 | 上層に黑色土のブロックを含む。 |
| 5 黒褐色土 | 多量の川砂を含む。 | 13 総社砂層 | 大粒の小礫を含む。にぶい黄褐色、黄橙色の砂質土。 |
| 6 黒褐色土 | 細砂を多く含む砂質シルト。 | 14 黑色土 | 粘性が強い。上位泥炭層。 |
| 7 黒褐色土 | 灰黄褐色のブロックと黑色土粒、軽石を含む。 | 15 黒褐色土 | 粘性ややあり。 |
| 8 黄灰色砂質土 | やや粘性あり。 | 16 黑色土 | 粘性が強い。下位泥炭層。 |
| | | 17 黑色砂質土 | 粘性が強い。 |

図133 V区6面 南端部トレンチ設定図と土層断面

第3章 検出された遺構と遺物

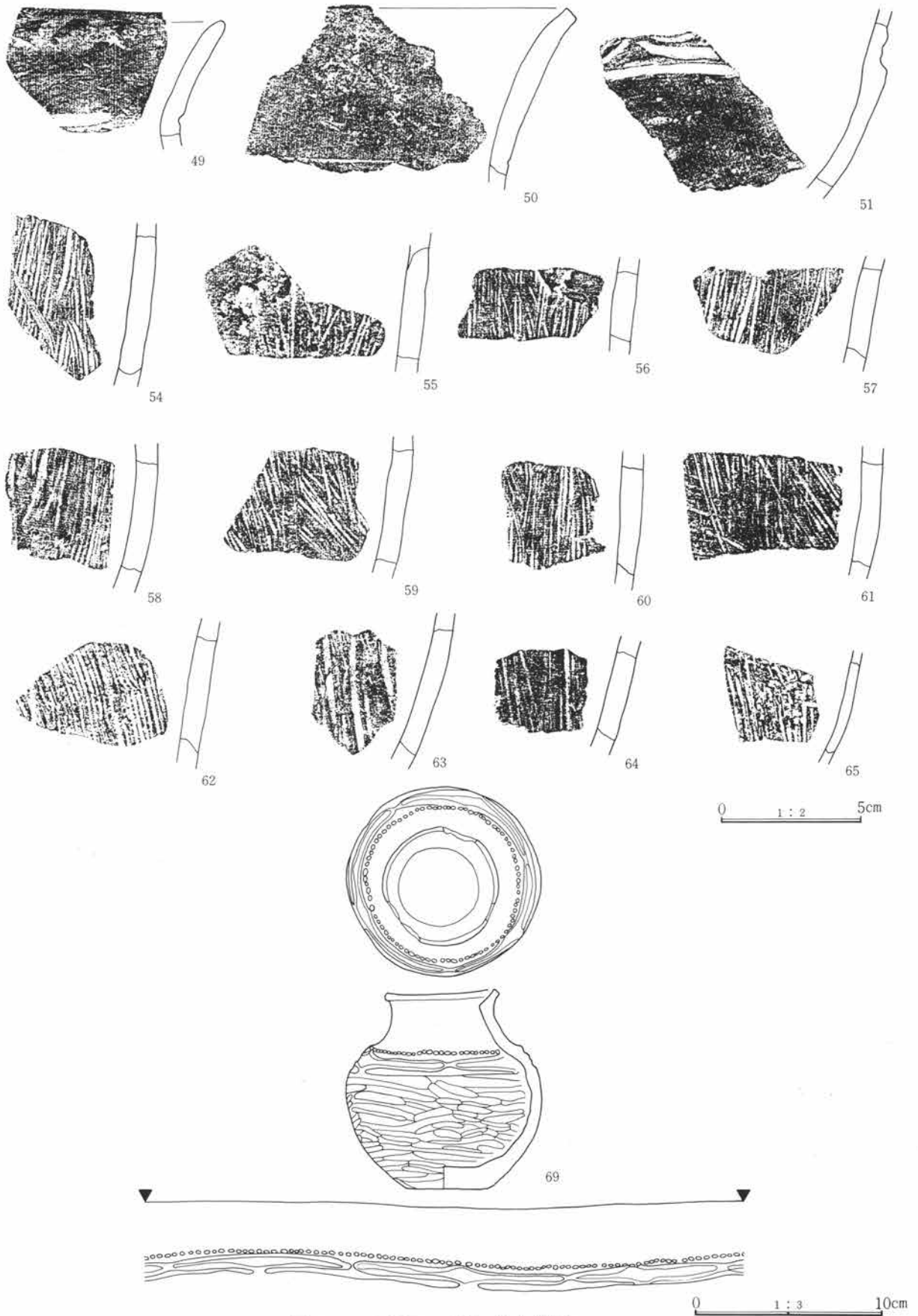


図134 I区6面 グリッド出土遺物

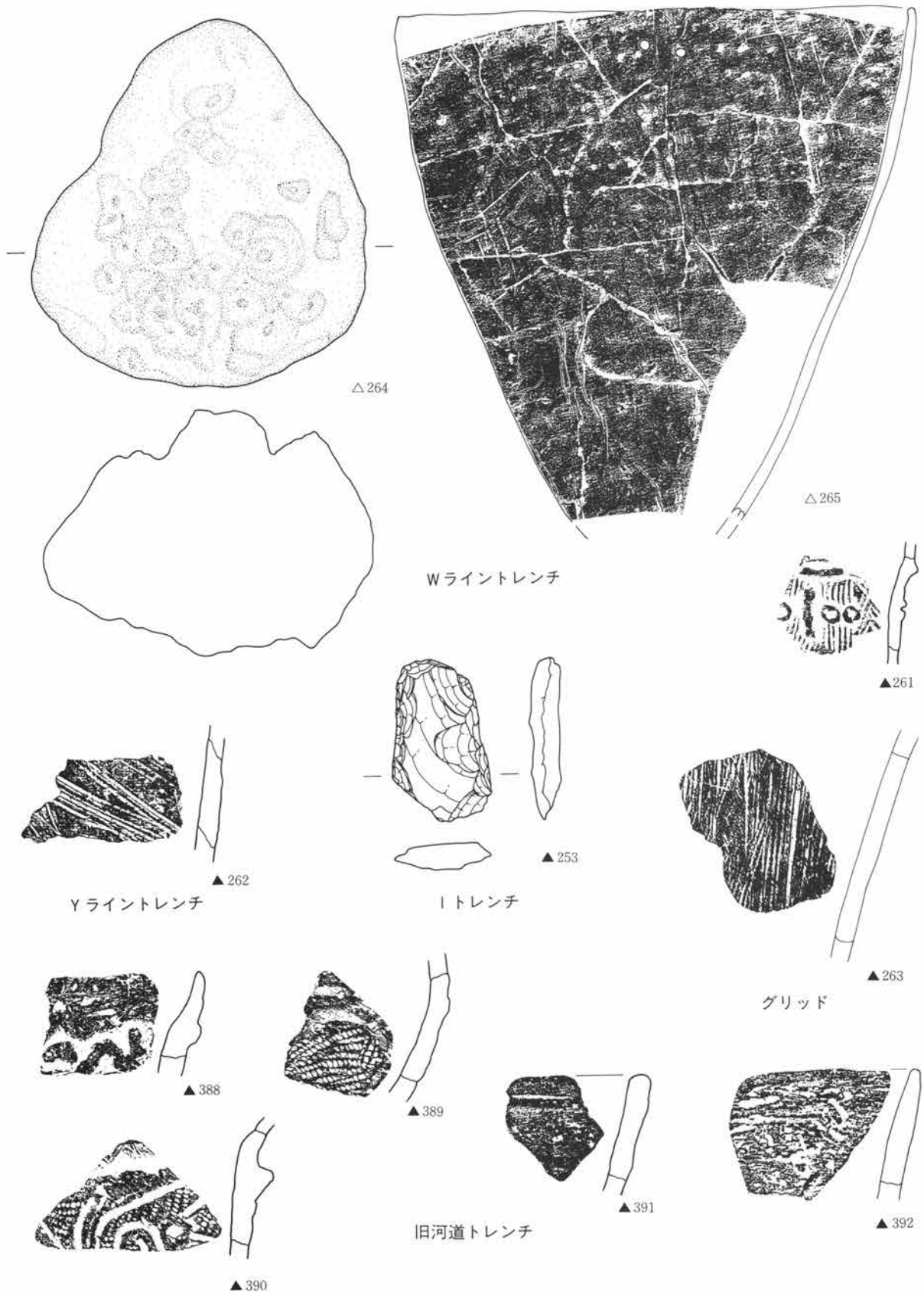


図135 III区6面 W・Yライトレンチ、Iトレンチ、グリッド、IV区6面南端部旧河道トレンチ出土遺物

第4章 自然科学分析と獣骨鑑定

第1節 I区における野外調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

元総社寺田遺跡は、いわゆる相馬ヶ原扇状地をきって流れる染谷川の谷底低地にある。谷底低地には低位段丘が発達しており、遺跡はこの段丘の上に立地している。当社の野外調査は、I区で認められる堆積物の層序を明らかにする目的で行った。なお調査は、昭和64年2月16日に行った。

2. I区の層序

I区の調査では、図1に示すような地質断面が明らかにされた。低位段丘を構成する堆積物は、厚さが約40cmの灰色シルト層である。段丘堆積物は、厚さ40cmの砂とシルトの互層を覆っている。この堆積物の最上部には、厚さ21cmの遊離結晶に富む白色の軽石層が挟まっている。含まれる軽石の最大径は、11mmである。このテフラは、層相から約1.3—1.4万年前に浅間山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石(As—YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)に対比される。As—YPが最上部に挟まれることから、低位段丘堆積物に不整合に覆われる堆積物は、相馬ヶ原扇状地堆積物と考えてよい。

低位段丘堆積物の上位には、腐植質の土壤の間に、テフラや砂層が挟まれている。段丘堆積物の直上には、灰色の石質岩片(最大径9mm)を含む黒色粘質土が認められる。この土壤からは縄文時代後期の土器が出土している。その上位には、厚さ6cmの黄灰色の降下軽石層(軽石の最大径:19mm)が認められる。この軽石には、斜方輝石や単斜輝石が斑晶とし

て含まれている。この軽石層は、岩相や鉱物組成から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As—C, 新井, 1979)に対比される。以上のことから低位段丘の形成に先行する谷の下刻の終了は、1.3—1.4万年前より新しく縄文時代後期より古いと考えられる。

As—Cの上位の黒色粘質土と砂礫層の互層の上位には成層した厚さ13.2cmの火山灰層が認められる。この火山灰層に含まれる軽石は、白色で、角閃石や斜方輝石を斑晶として含む。層相や軽石の岩層から、本テフラは、6世紀初頭に榛名火山ニツ岳火口から噴出した、榛名—ニツ岳火山灰(FA, 新井, 1979)に対比される。

FAの上位には、厚さ44cm程度の褐灰色砂礫層が認められる。砂礫層の間には、所によって1枚の降下テフラ層が認められる。このテフラは、最大の厚さが6.8cmの黄灰色の粗粒火山灰層で、褐色の軽石や斜方輝石、単斜輝石などが含まれている。層相や鉱物組成などから、このテフラ層は、1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(新井, 1979)に対比される。浅間Bテフラ堆積以降にも砂層の堆積が認められ、さらにその上位に灰褐色土壤が認められる。

なお今回は、低位段丘を相馬ヶ原扇状地を不整合に覆う堆積物の最下位のものだけとした。しかし、その上位の土壤のなかにも多くの洪水に由来する砂礫層が存在していることから、厳密な意味ではAs—B降灰後も離水しておらず、最上位の砂礫層の堆積終了をもって低位段丘の形成と考えることも可能である。(昭和64年報告)

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, P. 79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, 157, P. 41—52.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, P. 865—928.

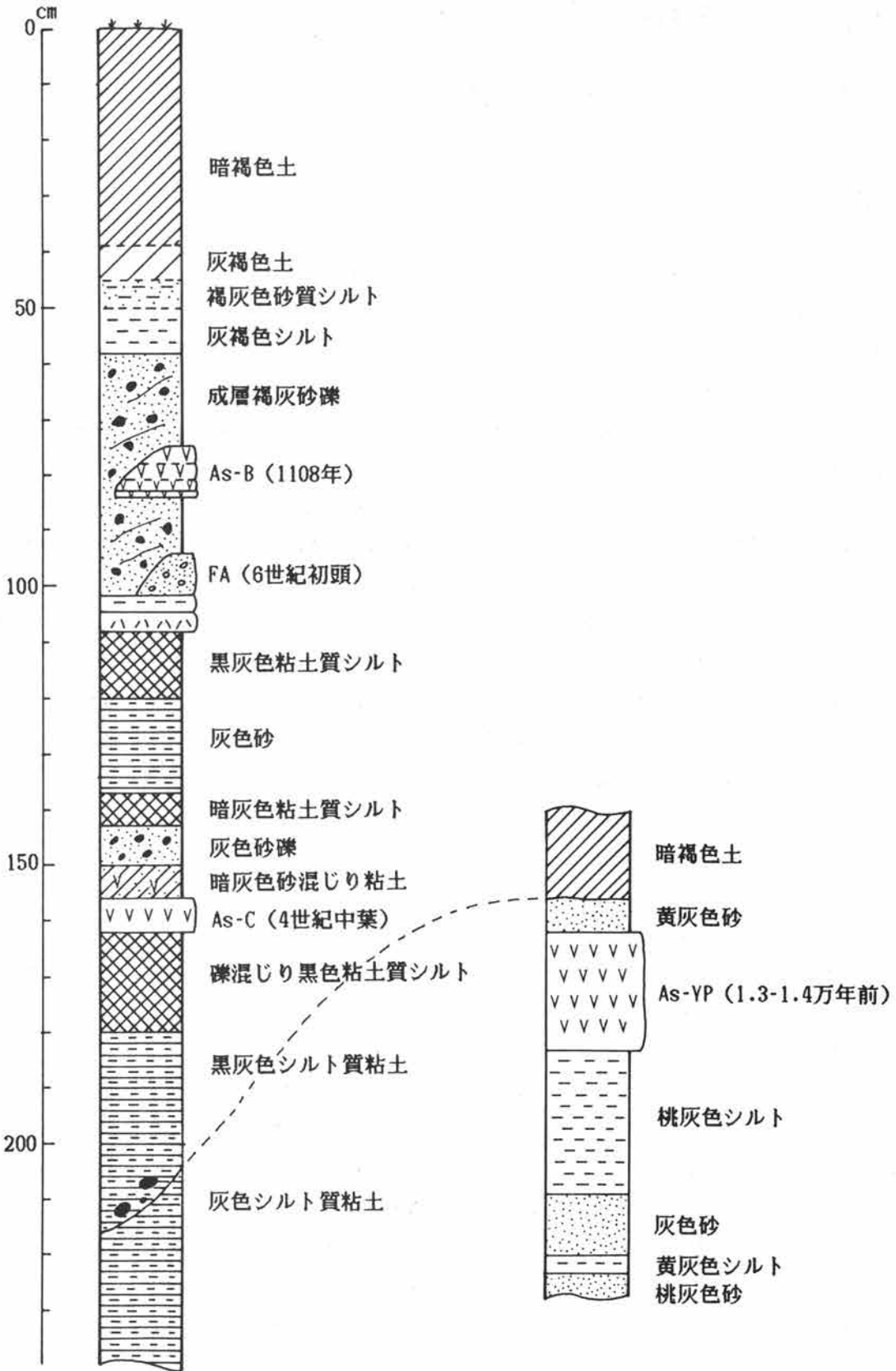


図1 元総社寺田遺跡I区の地質柱状図 左：西より地点、右：東（染谷川）より地点

第2節 II・IV区における野外調査

古環境研究所

1. はじめに

元総社寺田遺跡付近の地形は、大きく台地と低地に区分される。このうち台地は、榛名山南東麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端部である。また低地は、牛池川によって形成された谷底平野である。元総社寺田遺跡II区およびIV区の発掘調査では、これらの地形の良好な地質断面が作成された。野外において地質調査を行い、これらの地質層序を明らかにするとともに、地形発達史に関する重要な資料を得た。調査は、平成3年2月6日および3月12日の2日間行われた。

2. 台地の地質層序

台地の地質構造を示す代表的な地点、II区東壁の地質層序を図1に示す。この地点で認められる地層は、下位より大きくシルト層、泥炭層、シルトと砂の互層に区分される。最下位のシルト層の上部には、厚さ24cmの白色降下軽石層が認められる。含まれる軽石および石質岩片の最大径は、各々16mm、3mmである。軽石はよく発砲している。軽石の岩相から、本テフラは約1.3–1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)に対比される。

泥炭層の上部には、厚さ7cmの灰白色軽石層が認められる。軽石および石質岩片の最大径は、各々14mm、5mmである。軽石の発砲は比較的よい。また赤色の岩片も認められる。本テフラは、その岩相から約1万年前に浅間火山から噴出した浅間一総社軽石(As-SJ, 早田, 1990)に対比される。この泥炭層は、テフラとの層位関係から、前橋泥炭層(新井, 1962)の上部に相当すると考えられる。泥炭層の上位には、シルトと砂の互層が厚く堆積している。本

地層中には指標となるようなテフラの堆積は認められない。前橋泥炭層上部を整合に覆って堆積していることから、総社砂層(早田, 1990)に相当すると考えられる。

3. 谷底低地の地質層序

牛池川により形成された平坦な谷底低地には、泥炭質土壌と砂礫層によって埋没した後背湿地と旧河道が認められた。後背湿地の部分の地質断面を、図2に示す。下位より軽石層、泥炭層、シルトと泥炭の互層と整合に堆積しており、それらは砂礫層により不整合に覆われている。軽石層は層厚23cm以上である。上部に成層した火山灰層が認められる。含まれる軽石は、よく発泡している。軽石および石質岩片の最大径は、各々9mm、3mmである。本テフラは、層相からAs-YPに対比される。

泥炭層の上部には、厚さ6cmの灰色軽石層が認められる。軽石および石質岩片の最大径は、各々14mm、5mmである。軽石は比較的よく発泡している。また赤色の岩片も認められる。本テフラはその特徴からAs-Sjに対比される。本テフラとの層位関係により、泥炭層は前橋泥炭層上部に相当する。また、泥炭層の上位には、シルトと泥炭の互層が認められる。本地層中には指標となるようなテフラの堆積は認められない。前橋泥炭層上部を整合に覆って堆積していることから、この地層は総社砂層に相当すると考えられる。これらの地層は、厚さ20cm弱の砂礫層によって不整合で覆われている。総社砂層以下の地層は、II区東壁で認められた地層に相当する。

一方、旧河道には顕著な蛇行が認められる。元総社寺田遺跡IV区では北部と南部でそれぞれ旧河道の断面が観察できた。北部で認められた旧河道部の地質断面の一部の層序を、図3に示す。また南部で認

められた旧河道部の地質断面の一部の層序を、図4に示す。基本的に両者の層序は共通しており、下位より腐植質砂層、泥炭と砂の互層、砂礫層の連続で認められる。谷の基底はさらに深く、発掘調査では確認されなかった。泥炭と砂の互層の部分には、2層のテフラが確認された。最下位のテフラは、厚さ15cm程度の白色軽石層である。含まれる軽石は、比較的よく発砲している。軽石と石質岩片の最大径は、各々15mm、3mmである。本テフラは、層相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979, 石川ほか, 1979)に対比される。

中位のテフラは、不連続に堆積した細粒火山灰と粗粒火山灰の互層である。灰色がかかった黄色の色調を呈する。グライ化により青灰色を呈する場合も多い。また粗粒火山灰からなるユニットには、最大径16mm程度の白色軽石が含まれてる。本テフラは、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名一渋川テフラ層(Hr-S, 早田, 1989)に対比される。なおHr-Sは、従来「二ツ岳降下火山灰(FA, 新井, 1979)と呼ばれた降下テフラ層と、「二ツ岳第1軽石流(新井, 1979)」と呼ばれた火砕流堆積物を合わせた総称である。このテフラの上位には、不淘汰で無層理の泥流堆積物が認められる。

砂礫層は、後背湿地を不整合に覆う地層に連続するものである。砂礫層には、9-10世紀の遺物が多く含まれている。この砂礫層の上部には、部分的に成層した褐色の細粒軽石層が認められる。テフラの層厚は約20cmで、最大径8mmの軽石や、最大径3mmの石質岩片などが含まれている。このテフラ層は、その層相から天仁元(1108)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に対比される。

4. 考察—地形発達史の歴史

ここでは、最近の地質学的研究の成果を合わせ、

元総社寺田遺跡周辺の地形発達史を考察する。約1.5万年前に榛名火山で山体崩壊が初生し、陣場岩屑なだれが山麓を覆って堆積した。その後斜面から土砂が山麓に運ばれ、相馬ヶ原扇状地が急速に形成された。扇状地の扇頂部は、約1.3-1.4万年前にはすでに離水していたらしい(以上、早田, 1990)。扇中央部および扇端部でも、そのころには砂礫層が堆積するようなことはなく、泥炭地が広がっていた。この泥炭地の形成は約1万年前ころまで続き、前橋泥炭層上部に相当する泥炭層が形成された。そして、その後再び砂層(総社砂層)が堆積した。

総社砂層の堆積後、牛池川による下方侵食が始まった。牛池川は蛇行しながら下刻を続けた。そして旧河道と後背湿地が形成された。その後、谷は泥炭質土壌により埋積された。埋積の開始時期はAs-C降灰(4世紀中葉)を遡る。6世紀初頭に発生したHr-Sとそれに続いて発生した泥流により、さらに急速に埋積された。その後河川による浸食作用が卓越することになり、浸食平野が形成された。この侵食は、As-B(A.D. 1108)降灰前後まで続いた。

5. まとめ

土層断面について、野外で調査を行った結果、下位よりAs-YP, As-SP, As-C, Hr-S, As-Bなどの示標テフラが検出された。これらのテフラと地層の関係から、牛池川谷底平野の地形発達史を考察することができた。今後地形発達史の観点から、総社砂層の堆積時期および谷の埋積の開始時期に関する年代資料を得ることが望まれる。これらの資料は、遺跡の立地、分布を考える上で非常に重要な資料となる。(平成3年報告)

文献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第4紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, P. 1-79.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No157, P. 41-52.
 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一 (1979) 火山堆積物と遺跡 I. 考古学ジャーナル, No157, P. 3-40.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する人文・自然科学」, P. 865-928.
 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 F A・F P 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」 P. 103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, P. 297-312.
 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, P. 35-129.

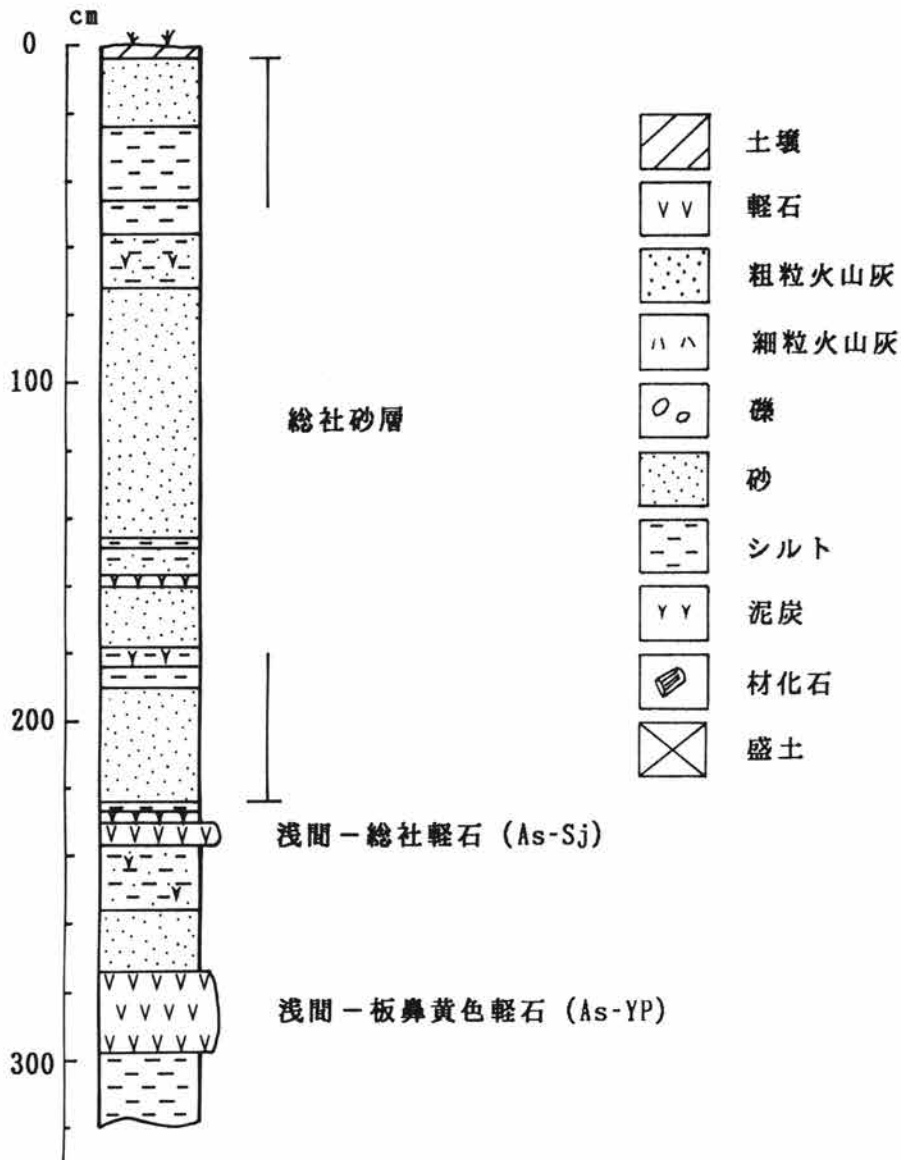


図1 元総社寺田遺跡II区東壁の地質層序

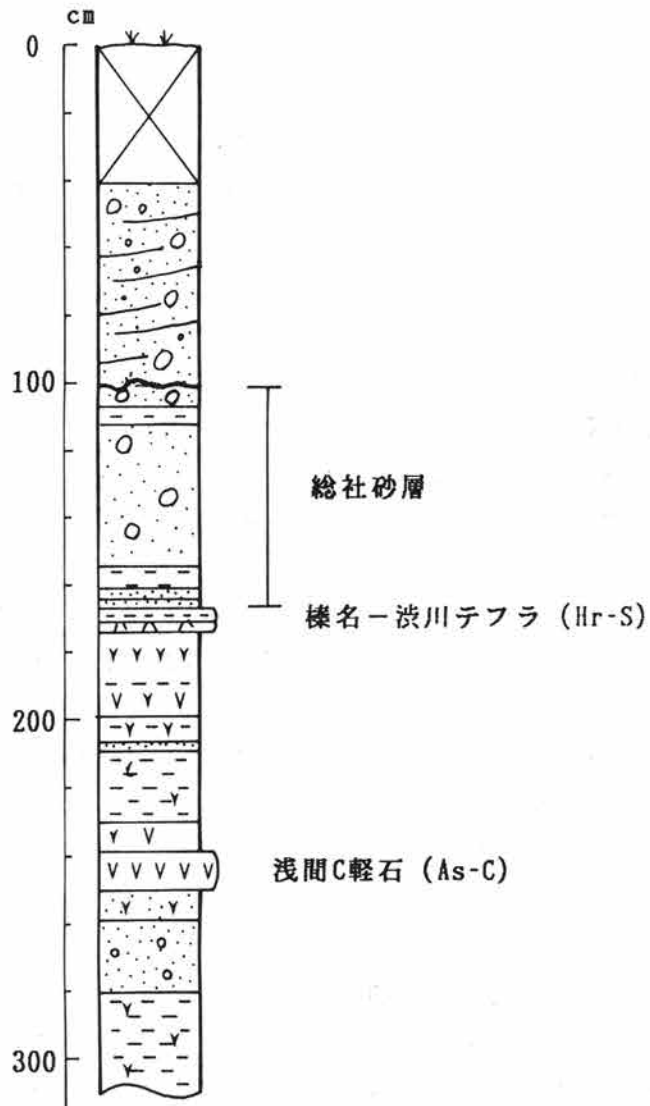


図4 元総社寺田遺跡IV区南部埋没谷の地質層序

第3節 V区における野外調査

古環境研究所

1. はじめに

元総社寺田遺跡第V区は、牛池川によって形成された谷底平野に位置している。発掘調査では、この谷底平野の良好な地質断面が作成された。ここで行われる植物珪酸体（プラント・オパール）分析の基礎資料として、地質調査を行い地質層序を明らかにすることを試みた。地層の観察を行った地点は、植物珪酸体分析の試料が採取された第1地点、第2地点、第3地点の3ヶ所である。

2. 地質層序

(1) 第1地点

本地点では、砂と泥炭の互層の上位に褐色土壌の堆積が認められた。これらの堆積物には、3層のテフラが認められた。これらのうち、最下位のテフラは、層厚11cmの黄白色軽石層である。含まれる軽石の最大径は、18mmである。軽石は比較的よく発泡している。この軽石は、層相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C, 新井, 1979, 石川ほか, 1979）に同定される。中位のテフラは、下位より紫がかかった灰色の細粒火山灰（層厚, 2cm）、灰色の成層した細粒火山灰層（層厚 4cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚 5cm）から構成されている。このテフラは、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名一渋川テフラ（Hr-S, 早田, 1986）に同定される。このテフラのうち降下堆積層である二ツ岳降下火山灰層（FA, 新井, 1979）の噴出年代は、6世紀初頭と考えられている。（坂口, 1986）。上位のテフラは、層厚約30cmのテフラ層である。下位より成層した細粒軽石層（層厚10cm）、桃色の細粒火山灰層（層厚 6cm）、褐色の細粒軽石層（層厚14cm）から構成されている。このテフラは、層相から1108年

（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に同定される。

この地点での砂礫の堆積は、As-Cの下位、As-CとHr-Sの間、Hr-Sの直上の3層準に認められる。

(2) 第2地点

ここでも、第1地点と同様に砂と泥炭の互層の上位に褐色土壌の堆積が認められた。これらの堆積物には、2層のテフラが認められた。下位のテフラは、層厚12cmの黄白色軽石層で、As-Cに同定される。一方上位のテフラは層厚約12cmで、褐色細粒火山灰層（層厚 3cm）、成層した灰色細粒火山灰層（層厚 5cm）、褐色粗粒火山灰層（層厚 4cm）から構成されている。このテフラ層は、Hr-Sに同定される。As-Bは、河川の侵食により流亡している。

この地点での砂礫の堆積は、As-Cの下位、As-CとHr-Sの間、Hr-Sの直上、As-B降灰の前後4層準に認められる。

(3) 第3地点

ここでは、As-Cの下位に堆積した砂礫に不整合に覆われた地層が認められる。この地層は、下位より砂礫層、黒泥、砂礫層から構成されている。黒泥の中には、層厚7cmの灰色軽石層が挟まれている。含まれる軽石は灰色で、その最大径は6mmである。この軽石層には、赤褐色の岩片が認められる。これらの特徴から、このテフラは、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間一総社軽石（As-Sj, 早田, 1990, 早田, 1991）に同定される。このことから、黒泥の下位の砂礫層は相馬ヶ原扇状地堆積物（早田, 1989）、上位の砂礫層は総社砂層（早田, 1989）に対比される。

3. ま と め

元総社寺田遺跡第V区の発掘調査では5層準に、砂礫の堆積が認められた。これらのうち、下位の相

馬ヶ原扇状地堆積物と総社砂層は、牛池川谷底平野の基盤の地層に相当する。谷底平野堆積物中で認められた最下位の砂礫層は、As-Cの下位にある。このほか砂礫層は、As-Cの上位、Hr-Sの直上、As-Bの降灰前後の層準に認められた。

文献

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No157, P.41-52.
 石川正之助・井上唯雄・梅澤重昭・松本浩一 (1979) 火山堆積物と遺跡I. 考古学ジャーナル, No157, P.3-40.
 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源F.A・F.P層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, P.103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, P.297-312.
 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, P.35-129.
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, No53, P.2-7.

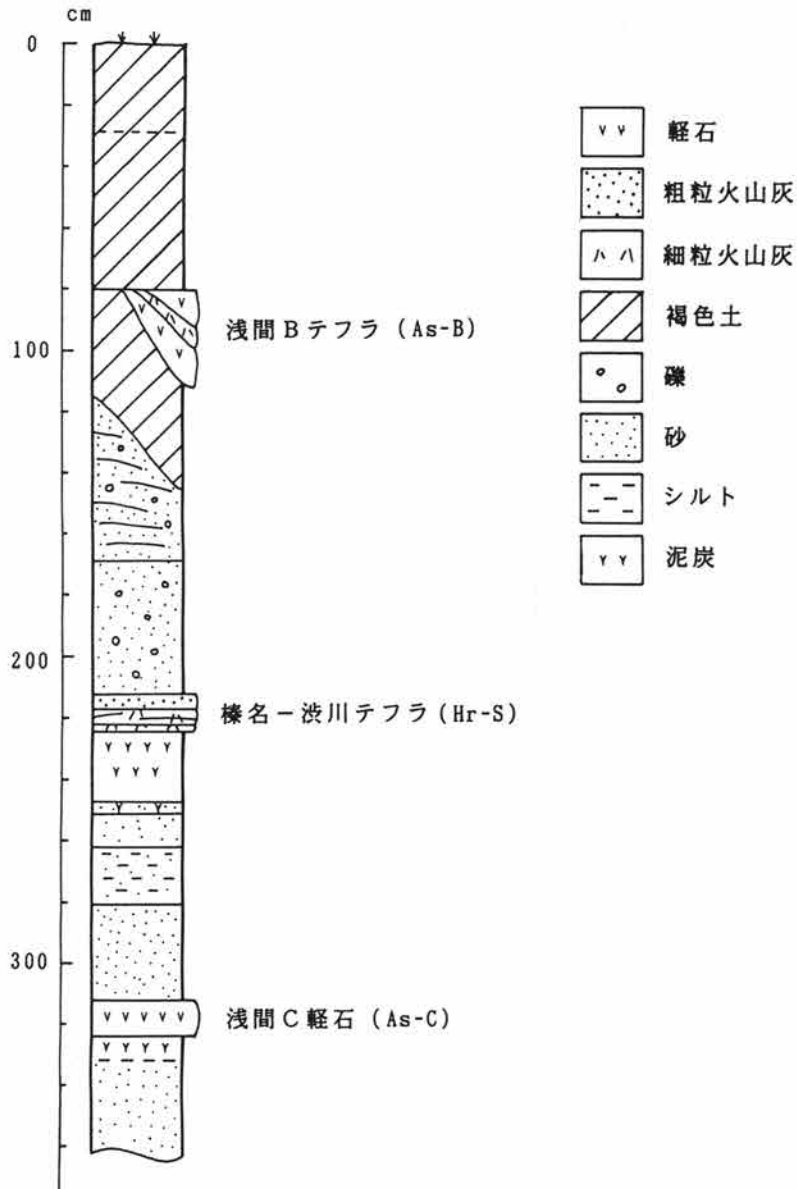


図1 元総社寺田遺跡第V区第1地点の地質柱状図

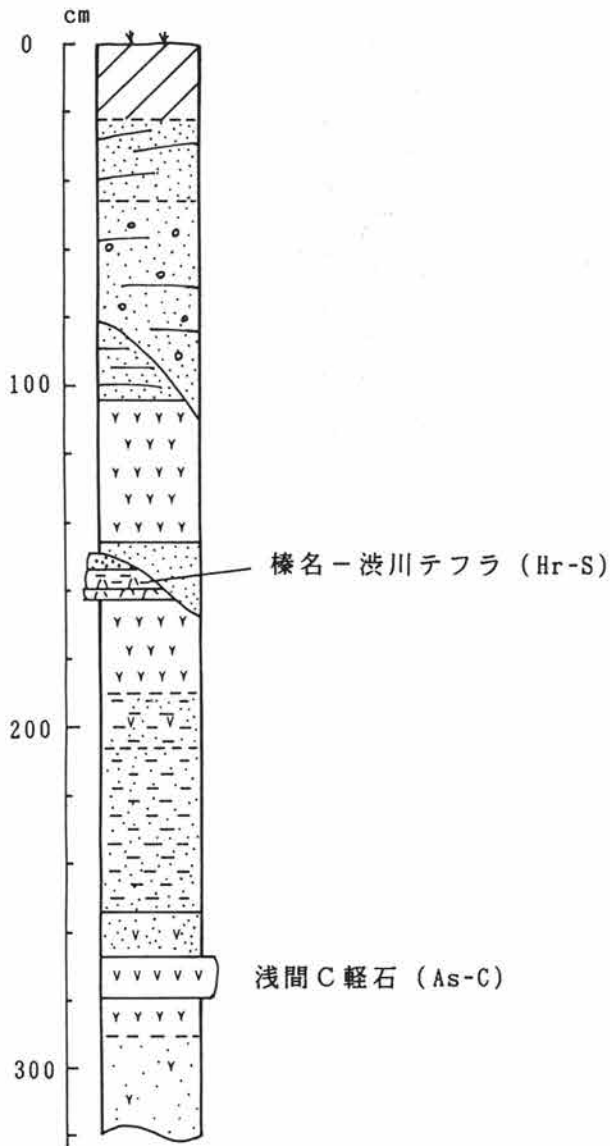


図2 元総社寺田遺跡第V区第2地点の地質柱状図

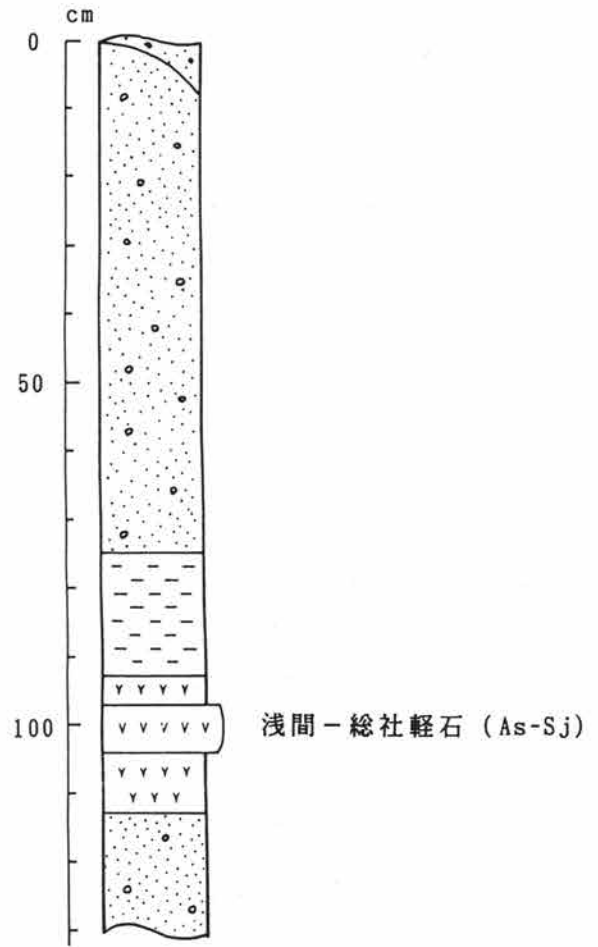


図3 元総社寺田遺跡第V区第3地点の地質柱状図

第4節 V区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

古環境研究所

1. はじめに

元総社寺田遺跡第V区では、榛名一渋川テフラ(Hr-S)および浅間C軽石層(As-C)の直下から畦畔状遺構が検出され、それぞれ当時の水田跡と見られていた。この調査は、植物珪酸体(プラント・オパール)分析を用いて、これらの遺構における稲作の検証およびその他の層における水田跡の探査を試みたものである。また、As-Sj前後の黒泥(前橋泥炭層)については、古植生および古環境の推定を試みた。

2. 試料

1991年7月4日に現行調査を行った。調査地点は、No.1~No.3の3地点である。試料は、No.1およびNo.2地点ではHr-S直下からAs-Cの下層までについて、各層ごとに5~10cm間隔で採取した。採取用具は、容量50cm³の採土管およびポリ袋等を用いた。なお、調査区の土層は比較的不安定であり、地点間での土層の対比が困難なぶぶんも見られた。このため、層名は各地点において層相の変化ごとに付けたものであり、地点間の対応関係を示すものではない。No.3地点ではAs-Sj前後の黒泥(前橋泥炭層)を中心に試料を採取した。試料数は計21点である。

3. 分析法

植物珪酸体(プラント・オパール)の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾(105°C・24時間)、仮比重測定
- (2) 試料土やく1gを秤量、ガラスビーズ点火(直径約40μm, 約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの制度で秤量

- (3) 電子炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。顕微鏡は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。下1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1gなかの植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米, ヨシ属はヨシ, タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03), 6.31, 0.48である(杉山・藤原, 1987)。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は次のとおりである。イネ, ヨシ属, ウシクサ属(スキ属やチガヤ属などが含まれる), タケ亜科のA1aタイプ(ネザサ節など), B1タイプ(クマザサ属)など, その他, 給源不明のAタイプ(キビ属類似), Bタイプ(ウシクサ属類似), 表皮毛起源, 茎部起源, 地下茎部起源, 棒状珪酸体, その他(未分類), および樹木起源(マツ科?)である。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

No.3地点については以上の分類群について定量を

行い、その結果を表及び図3に示した。なお、No.1およびNo.2地点については稲作跡および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ属（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ属（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した（表1、図1、図2）。

5. 稲作跡の検証および探査

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) No.1地点

本地点では、Hr-S直下の1層からAs-Cの下層の8層までについて分析を行った。その結果、1層～5層および7層の各層でイネの植物珪酸体が検出された。このうち、畦畔状遺構が検出されていた7層では密度が4,000個/gと比較的高い値である。また、同層は直上As-C層で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入したことは考えにくい。これらのことから、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。同じく畦畔状遺構が検出されていた1層では密度が1,900個/gと比較的低い値である。しかし、直上をHr-S層で覆われており、上層から後代の植物珪酸体が混入したとは考えにくいことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

(2) No.2地点

本地点では、Hr-S直下の1層からAs-Cの下層の7層までについて分析を行った。その結果、1

層、2層、4層、6層、7層でイネの植物珪酸体が検出された。個のうち、畦畔状遺構が検出されていた1層と6層では、密度が1,900個/gおよび2,800/gといずれも比較的低い値である。しかし、それぞれ直上をHr-S層およびAs-C層で覆われており、上層から後代の植物珪酸体が混入したことは考えにくいことから、混入れらの層では稲作が行われていた可能性が考えられる。

その他の層では密度が1,800～2,900個/gと比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

(3) まとめ

以上のように畦畔状遺構が検出されていたHr-S直下層As-C直下層からは、いずれもイネの植物珪酸体が検出され、これらの遺構で稲作が行われていたことが分析的にも確かめられた。また、両テフラの間層などでも稲作の可能性が認められた。

なお、植物珪酸体密度が低い原因としては、上述した他所からの混入によるもの他にも、①稲作が行われていた時期が短かったこと、②洪水などによって耕作土が流出したこと、③土層の堆積速度が早かったこと、④稲藁の大部分が水田外に持ち出されていたこと、⑤採取地点が畦畔など耕作地以外であったこと、⑥稲の生産性が低かったことなどが考えられる。

6. 古植生および古環境の推定

(1) 前橋泥炭層

No.3地点では、As-Sj前後の黒泥（前橋泥炭層）を中心に分析を行った。その結果、前橋泥炭層（試料No.2, 4）ではヨシ属や茎部を起源（おもにヨシ属と思われる。）および棒状珪酸体が非常に高い密度で検出された。その他の分類群ではタケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）や不明Bタイプ（ウシクサ族類似）などが検出されたが、いずれも少量である。

これらの結果から、前橋泥炭層が形成された当時

第4節 V区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

の調査地点周辺は、ヨシ属の繁茂する湿地帯であったものと推定される。

(2) Hr-S直下層からAs-C下層にかけての層準では、全体的にヨシ属とタケ亜科(おもにネザサ節)が他界密度で検出された。植物珪酸体密度から供給植物の生産量を推定したところ、いずれの層準でもヨシ属でもヨシ属の生産量がタケ亜科の生産量を上回っており、圧倒的に卓越していることがわかる(表3)。

これらのことから、当時の調査地点周辺はヨシ属の繁茂する湿地的な環境で推移したものと推定される。また、周辺の台地部などではネザサ節などのタケ亜科植物が多く生育していたものと考えられる。

なお、前述のようにHr-S)直下層からAs-C下層にかけての層準では稲作の可能性が認められることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。

参考文献

- 杉山真二, 1987, タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号: 70-83.
 杉山真二・藤原宏志, 1987, 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析, 赤山-古環境編一, 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.
 藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9: 15-29.
 藤原宏志, 1979, プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定-, 考古学と自然科学, 12: 29-41.
 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-, 考古学と自然科学, 17: 73-85.

表1 元総社寺田遺跡(第V区)における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

(単位: ×100個/g)

分類群	No. 1 地点									
	1-1	1-2	2	3-1	3-2	4	5	7	8-1	8-2
イネ	19	10	9	8	28	28	19	40		
ヨシ属	905	281	66	78	28	144	107	140	89	186
ウシクサ族(スキ属など)	28	30	37	17	28	38	19	30	29	16
タケ亜科	211	160	236	522	162	599	311	261	419	322

(単位: ×100個/g)

分類群	No. 2 地点					
	1	2-1	2-2	4	6	7
イネ	18	18	29	18	28	19
ヨシ属	113	187	98	55	189	19
ウシクサ族(スキ属など)	28	37	49			9
タケ亜科	359	589	444	92	255	259

第4章 自然科学分析と獣骨鑑定

表2 No.3地点における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

分類群	(単位: ×100個/g)				
	1	2	3	4	5
イネ科					
ヨシ属		864	22	258	48
ウシクサ族(スキ属など)	7				
タケ亜科					
B1タイプ(クマザサ属など)	15		15		7
その他	22		7		
不明等					
Aタイプ(キビ族類似)		7		14	
Bタイプ(ウシクサ族類似)	52	67	30	115	21
表皮毛起源	7	67	30	100	48
茎部起源	37	1184	104	430	248
地下茎部起源		231	22	86	48
棒状珪酸体	125	849	170	1010	138
その他	74	223	133	172	117
樹木起源(マツ科?)			7		
植物珪酸体総数	338	3492	541	2185	676

表3 元総社寺田遺跡(第V区)におけるおもな植物の推定生産量

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)										
	No. 1 地点										
	1-1	1-2	2	3-1	3-2	4	5	7	8-1	8-2	
イネ	0.21	0.12	0.21	0.19	0.32	0.65	0.24	0.35			
ヨシ属	24.67	7.76	3.60	2.15	0.76	7.79	3.47	2.98	1.80	3.81	
ウシクサ族(スキ属など)	0.14	0.15	0.36	0.07	0.14	0.37	0.10	0.11	0.10	0.05	
タケ亜科	0.40	0.31	0.90	1.00	0.31	2.31	0.70	0.38	0.60	0.46	

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)						
	No. 2 地点						
	1	2-1	2-2	4	6	7	
イネ	0.21	0.21	0.32	0.24	0.24	0.15	
ヨシ属	3.12	5.13	2.70	1.73	3.88	0.35	
ウシクサ族(スキ属など)	0.14	0.17	0.24			0.02	
タケ亜科	0.69	1.13	0.85	0.21	0.36	0.37	

第4節 V区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

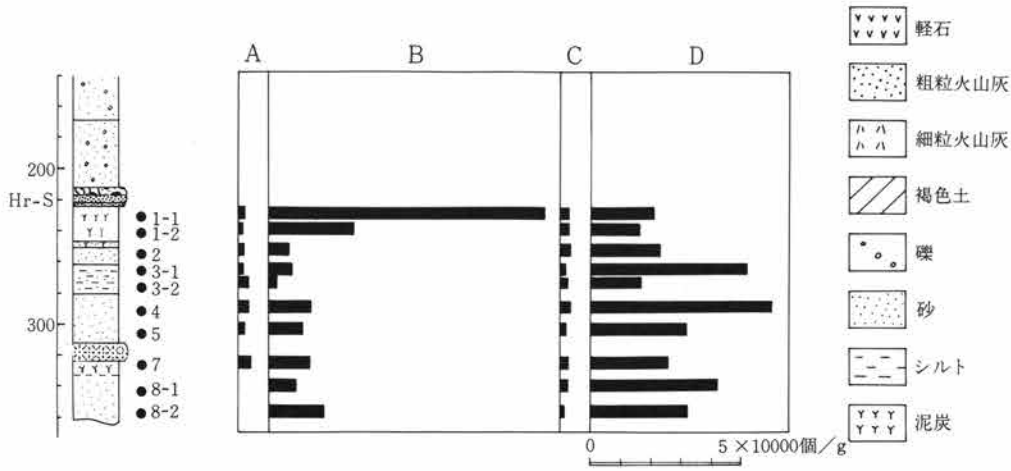


図136 V区・No.1地点における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

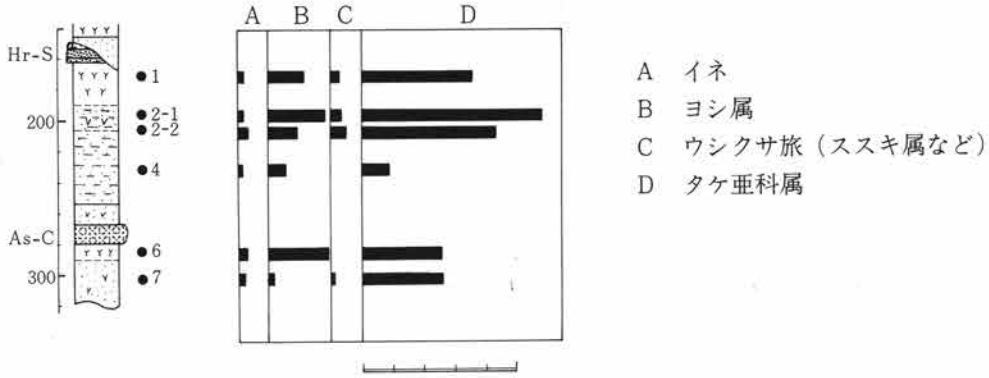


図137 V区・No.2地点における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

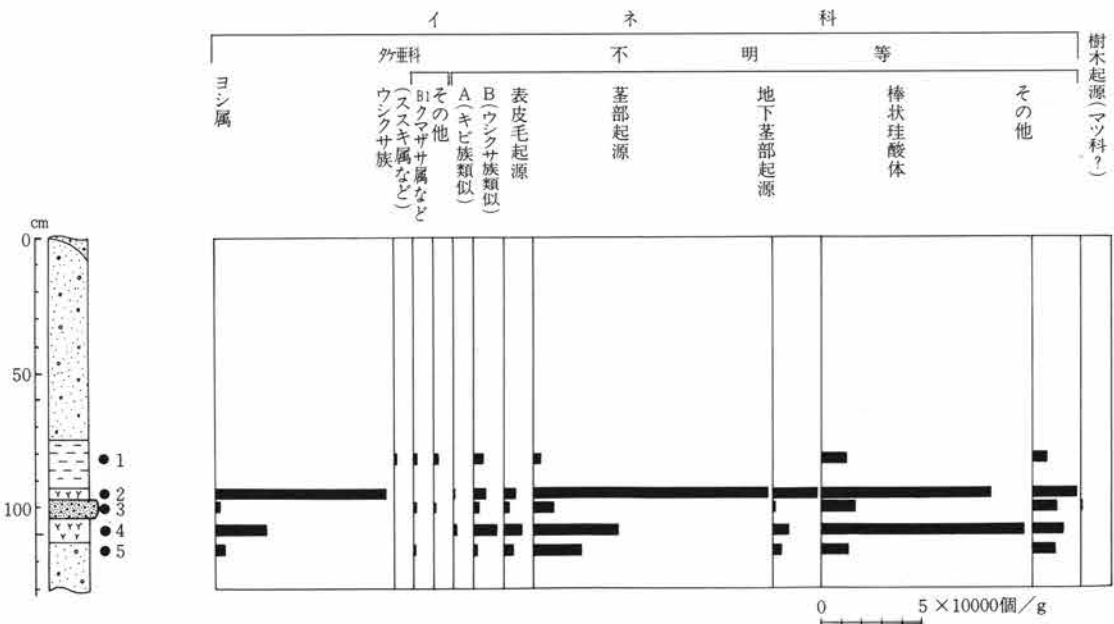


図138 V区・No.3地点における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

第5節 元総社寺田遺跡出土の獣骨類

宮崎重雄

元総社寺田遺跡は群馬県前橋市元総社町に所在し、古墳時代から中世・近世にいたる獣骨と人骨が出土している。包含層は旧牛池川の河川跡に堆積した湿地性の堆積物で、獣骨には藍鉄鉱が生成されているものもある。出土した獣骨の種類はウマ、ウシ、イヌの3種である。

I. ウマ (*Equus caballus*)

A. I区2面(古墳末~平安)

1. 右下顎第1後臼歯(11溝): Levin (1982)によって歯冠高から年齢を推定してみると6~7才である。

B. II区1面(中~近世)

①左上顎臼歯(2 I-26G No 1): 歯の湾曲の状況から第2後臼歯の可能性が高い。歯冠高は63.5mmで、いずれの咬頭も咬耗の痕跡が見られず未咬耗と思われる。第2後臼歯だとすれば2.5才程度の年齢が推定される。

②上顎臼歯片(2 H-27 No 2): 右上顎第2前臼歯の可能性が高い。歯冠高は34.0mmで、10~11才程度の年齢が推定され、前小窩の近遠心径は12.8mmである。③左上顎臼歯(フク土): 前小窩と後小窩のみが残存し、咬合面の傾斜は83°程度で、歯冠高は62.5mmである。

以上の3本の歯は、咬耗度・出土層位などから判断して、それぞれ別個体の可能性が高い。

C. IV区2面(古墳末~平安)

1. 1号馬: 同一個体に属すると思われる4本の遊離した臼歯が出土している。歯冠高から推定される年齢は6才で、性別は不明である。①左上顎第3前臼歯; 歯根は完成している。②同第4前臼歯; 歯根は完成しているが、咬耗が開始されてからまだあまり時間が経っていない。③右上顎第3後臼歯; 歯根はほぼ完成し、原隆起には、エナメルの皺が一つ余分にあり、後小窩のエナメルは近心隣接面のエナメルと合流している。④右下顎第2前臼歯; 歯根は分岐している。

2. 左上顎第2前臼歯: 上記4標本とは別個体である。歯根は未完成である。咬耗は始まったばかりで、各咬頭に細い帯状をなして象牙質が露出している。年齢は3才程度である。

この他にIV区2面からは、ウマの脛骨と思われる骨片が出土しているが、破片になり過ぎていて上、腐食がひどく、同定困難である。保存全長83.8mmである。

D. V区1面(中~近世)

1. 2号馬(4号溝): 同一個体と思われる4本の遊離臼歯からなっている。歯の萌出状況から3.5才程度が推定される。性別は不明である。①上顎左第2前臼歯; 歯根はほぼ完成しているが、咬耗のごく初期である。②上顎左第3前臼歯; 歯根は未完成で、咬頭にわずかの咬耗がある。後小窩の壁のエナメルは近心隣接面のエナメルと連続している。③上顎左第4前臼歯; 歯根は未完成で、未咬耗である。後小窩の壁のエナメルは近心隣接面のエナメルと連続している。④下顎第2後臼歯; 歯根はほぼ完成している。

2. この他、V区1面には9本の上顎臼歯と2本の下顎の臼歯、2本の上顎切歯、1本の下顎の切歯が出土している。歯の数と歯種から判断してV区1面には2号馬の他に、少なくともあと2頭は含まれていることが考えられる。

以下、遺構ごとにV区1面の主な出土馬歯・馬骨を列挙する。

1) 3号溝：①右下顎第2後臼歯；咬耗が開始されたばかりで、咬合面付近の近遠心径が特に大きくなっている。咬合面より31cm歯根側の舌側に帯状の凹みがある。②左上顎切歯(第1または第2)；歯冠近遠心径が17.5mm、同唇舌径が9.7mm、歯冠高が50.4mmである。咬耗が始まったばかりで、第2切歯であれば4才程である。 a. 中足骨？；保存全長201.0mm、骨体左右径が26.9mm、同前後径が25.8mmである。骨体近位端内側に鋭利な刃物の痕が2本ある。前上から後下へ腱を切断したのかもしれない。

2) 4号溝：①右上顎第3大臼歯；次錘の咬合面の中に径4mmのイチヨウ葉型のエナメルがある。②左上顎第1後臼歯、③右上顎第3前臼歯、④左上顎第2前臼歯、⑤右上顎切歯(第1または第2)；歯冠近遠心径が15.9mm、歯冠高が47.9+mmである。

3) 5号溝：①右上顎第4前臼歯

4) 6号溝：①左下顎第2(?)切歯；歯根は閉じつつあり、咬合面のエナメルの紋様から4才程度が推定される、②左下顎第3後臼歯；保存全長が30.4mm、歯冠頬舌径が12.5+mm、近遠心径が8.5+mm、近遠心径が8.5+mmで、咬耗が始まったばかりである。 a. 右中足骨；保存全長が249.0mm、遠位骨体幅が38.7+mm、遠位滑車幅39.6mmである。この大きさは小型馬相当の馬格を思わせる。

E. V区2面(古墳末～平安)

8号溝：①左上顎第3前臼歯；歯冠高から5～7才程度の年齢が推定される。②右上顎第3後臼歯、③右上顎臼歯の前小窩または後小窩；まだあまり咬耗が進んでいない。 a. 右脛骨骨体部；保存全長169.2mm、骨体中央左右径が29.0mm、同前後径が23.8mm、骨体中央周が84.0mmである。日本の小型在来馬である野間馬の雄の骨体最小幅が30.8mmである(大塚、1985)ことからみれば、かなり小さい個体ということになるが、骨表面が少し剝離していることを考えると、小振りの小型在来馬相当と見るのが妥当のようである。骨体前面中央部に鉋で抉り取ったような痕がある。 b. 右橈骨骨体部；保存全長154.0mm、骨体中央左右径が28.0mm、同前後径が20.1+mmであり、藍鉄鉱が生成されている。この個体も小振りの小型在来馬相当の大きさであろう。 c. 右上腕骨骨体部；保存全長184.2mm、骨体中央左右径が31.9mm、同前後径が40.3mm、骨体最小幅31.9mm、骨体最小前後径29.8mmである。骨表面はいくぶん剝離している。 d. 右橈尺骨骨体部；保存全長192.4mm、骨体中央左右径が32.8mm、同前後径が21.6mm、骨体最小幅31.9mm、骨体最小前後径29.8mmである。小型在来馬相当の大きさの個体と思われる。以上のことから、8号溝には少なくとも2頭の馬が存在していたことがわかる。

II. ウシ (*Bos taurus*)

A. V区1面(中～近世)

1. 左上顎第2後臼歯(4号溝)；最大歯冠長が27.0mm、最大歯冠幅が21.5mm、歯冠高は頬側が46.0mm、舌側が43.0mmである。西中川ほか(1981)によれば、山口県萩市沖の見島に生息している日本の在来牛・見島牛の上記前2者の計測値が27.7mm、22.7mmである。このことから、本遺跡出土のウシも見島牛相当の大きさであったと推測される。

III. 家犬 (*Canis familiaris*)

A. V区2面(奈良末～平安)

1. 左脛骨(8号溝)；保存全長117.0mm、骨体中央左右径が12.5mm、同前後径が12.7mmである。鉋で切ったような加工痕が外側面に5か所ほどあるが、発掘時のものか当初のものか不明である。体高44cmほどが推定

第4章 自然科学分析と獣骨鑑定

される犬の脛骨に比べるとやや大きめである。したがって現在の日本犬でいえば、小型犬と中型犬の間程度の体高であったと推定される。

B. IV区3面（古墳時代）

1. 左下顎臼歯（水田面）：裂肉歯（第1後臼歯）；咬耗が各咬頭の先端にごくわずかあるのみであり、計測値は近遠心径、頬舌径、歯冠高が裂肉歯で20.0mm、7.7（7.4）mm、11.1mmである、②第4前臼歯は歯冠後側縁突起と次丘の咬頭にごくわずかの咬耗があるのみである。それぞれの計測値は11.1mm、5.0mm、7.6mmである。この歯の大きさからすると小型犬の関東柴犬と中型犬の甲斐柴犬（醍醐、1956）の中間の大きさが考えられる。

IV. ヒト (*Homo sapiens*)

A. V区1面（中～近世）

1) 3号溝：a. 右(?) 大腿骨骨体部；保存全長90.5mm、骨体左右径が27.5mm、同前後径が27.4+mmである。b. 脳頭蓋骨破片4片 c. 上腕骨遠位骨体(?) 破片；保存全長46.0mm、骨体左右径が30.7mm、同前後径が21.4mmである。いずれの骨も骨表面が腐食によりだいぶ粗れている。同じ色調・粗れ方で、おそらく同一個体であろうが、確証はない。

2) 6号溝：a. 右上腕骨遠位骨体；保存全長82.7mm、骨体左右径が17.0mm、同前後径が19.0mmである。b. 左脛骨近位骨体；保存全長97.9mm、骨体左右径が17.4mm、同前後径が14.0+mmである。鉋で切り込んだような痕があるが、いつ作られたものか分からない。遠位端は輪切り状態に切っており、周囲から切り込みを入れたように見える。両者は同一個体のものであろう。骨質と骨の大きさは成人女性を思わせる。

引用文献

- 醍醐正之（1956） 犬の骨格に関する比較解剖学的考察。日本獣医畜産大学紀要，5，43-60。
Levin, M. A., (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horses teeth. In Wilson, B., Grigson, C. and Payne, S., eds., *Ageing and sexing animal bones from archaeological sites*. BAR British Series. 109, 223-250.
西中川駿・松本光春（1981） 第2号方形周溝墓西溝出土の家牛 (*Bos taurus*) 頭骨・「伊皿子貝塚」。日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会，476-485。
大塚関一・広田桂一・松本光春・橋口 勉（1985） 野間馬の形態・「野間馬に関する学術調査報告書」。日本馬事協会，10-15。
渡辺 肇（1976） 日本犬の欠歯と体高。日本犬，7，7-9。

上顎臼歯計測値 (単位mm)

(1) 1号馬他 (Ⅳ区2面)

歯種		1号馬			
		L	L	L	R
		第Ⅱ前臼歯	第Ⅲ前臼歯	第Ⅳ前臼歯	第Ⅲ後臼歯
歯冠長	咬合面	30.8	27.0	26.4	23.8
	中央	29.8	23.8	23.2	25.6
歯冠幅	咬合面	24.0	25.2	22.7	19.6
	中央	25.8	24.7	23.5	21.5
原錐幅	咬合面	12.0	12.3	11.1	12.4
	中央	10.6	11.6	10.9	12.8
歯冠高	頬側	59.7	64.6	77.5	71.1
	舌側	51.7	57.0	70.4	69.4
咬合面の傾斜		90°	85°	80°	64°
エナメル褶曲数			1212	1211	121?
中附錐幅	咬合面	2.7	4.3	3.1	
	中央	5.2	4.6	3.9	

(2) 2号馬他 (Ⅴ区1面・4号溝)

歯種		2号馬						
		L	L	L	L	R	L	R
		第Ⅱ前臼歯	第Ⅲ前臼歯	第Ⅳ前臼歯	第Ⅱ前臼歯	第Ⅲ前臼歯	第Ⅰ後臼歯	第Ⅲ後臼歯
歯冠長	咬合面	31.0+	27.8	29.0	33.7		24.4	26.0
	中央	28.4+	26.4	24.2			24.0	26.4
歯冠幅	咬合面	24.9	23.0	18.5	22.5	21.5+	25.1	22.3
	中央	23.6	26.9	23.4			24.8	22.1
原錐幅	咬合面		11.6	12.2	8.2	9.8	13.9	12.3
	中央		10.8	12.2				11.8
歯冠高	頬側	59.4 e	59.2+	68.0+	37.1		50.2	59.5
	舌側	52.0+	52.0+	63.5+	32.6	26.1	47.9	50.7
咬合面の傾斜		105°	98°	75?	110°	87°	75°	65°
エナメル褶曲数					1312	12??		1411
中附錐幅	咬合面	4.5	3.0	2.5	5.1		3.6	3.6
	中央	5.9	5.1	3.3			4.2	4.5

(3)

歯種		Ⅴ区2面	Ⅴ区1面	Ⅴ区1面	Ⅴ区2面	Ⅴ区2面
		5号溝		6号溝	8号溝	8号溝
		R	R	R	L	R
歯種		第Ⅳ前臼歯	第Ⅳ前臼歯	第Ⅱ後臼歯	第Ⅲ前臼歯	第Ⅲ後臼歯
歯冠長	咬合面	27.5	26.1	26.3	29.1	23.8+
	中央	24.1	25.2	23.1	26.2	
歯冠幅	咬合面	23.7		21.4	24.6	15.8+
	中央	24.7		23.1	24.3	
原錐幅	咬合面	12.7		12.1	10.5	
	中央	12.5		11.7	10.3	
歯冠高	頬側	78.0	48.1	76.8	70.4	43.3
	舌側	68.4			64.1	43.2
咬合面の傾斜		83°	88°	78°	93°	70°
エナメル褶曲数		1121	1321	1212	1211	1322
中附錐幅	咬合面	2.9	4.5	2.8	3.6	
	中央	4.0	4.5	5.0	4.6	

下顎臼歯計測値 (単位mm)

歯種		1号馬Ⅳ区2面	Ⅴ区1面	Ⅴ区1面	2号馬Ⅴ区1面	Ⅰ区2面
		3号溝	3号溝	3号溝	4号溝	11号溝
		R	R	R	R	R
歯種		第Ⅱ前臼歯	第Ⅳ前臼歯	第Ⅱ後臼歯	第Ⅱ後臼歯	第Ⅱ後臼歯
歯冠長	咬合面	31.3	27.0	26.7	24.5+	26.1+
	中央	31.3	24.6	24.4	26.1+	24.3+
歯冠幅	前葉咬合面	11.3	11.9	12.2	11.7	13.0
	中央	11.1	12.8	12.9	12.6	12.8
後葉咬合面	咬合面	12.5	11.1	11.3	10.5	12.0
	中央	13.0	11.3	12.1	11.8	12.0
歯冠高	頬側	50.2	83.3	77.0	58.4	51.6
	舌側	47.7	76.2	82.0?	60.0	47.6
下後錐谷長		8.1	9.2	9.1	8.8	8.1
下内錐谷長		15.5	10.8	10.7	11.2	9.3
double knot長	咬合面	13.8	12.8	12.6	13.0	13.3
	中央	13.3	12.8	12.6	13.6	13.5
咬合面の傾斜		95°	72°	72°	70°	80°
下内錐幅		6.1	4.5	4.6	4.2	4.4

第5章 まとめ

第1節 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡

坂井 隆

元総社寺田遺跡（前橋市元総社町）の牛池川旧河道より2面、および下高瀬上之原遺跡（富岡市下高瀬 当事業図調査で現在報告書編集中）13号竪穴住居より1面、八稜鏡が発見された。これらの鏡の特徴と出土状態を見ると共に、出土の意味を考えたい。

1. 出土鏡の状態

A-1 元総社寺田0372八稜鏡

直径推定7.4cm、内区径5.4cm、縁厚1mm、鈕厚4mm、重量7gを測る。外区の3分の2が欠損している。鏡背面は、かなり摩耗しており、薄く軽い。縁形は蒲鉾式細縁、界圏は単圏細線、鈕形は円錐形素鈕である。

文様は摩耗が激しいが、外区は飛雲文である。内区は、左右均整に開く瑞花が90度の位置で3箇所見られるため、単純な瑞花文と考えられる。

文様の形状と大きさは、日光男体山山頂出土の瑞花文八稜鏡（文献15のNo93～102）に近似している。牛池川旧河道の6世紀の榛名山火山灰層よりは上層で出土したが、近世までの遺物が混在する層位だった。

A-2 元総社寺田0373八稜鏡

直径7.4cm、内区径5.2cm、縁厚2mm、鈕厚4mm、重量39gを測る。完存品であり、縁は研磨されている。鏡背面は、3分の2ほどのところで文様に大きく精粗の差が見られる。

縁形は堤塘式縁、界圏は単圏細線、鈕形は截頭円錐形素鈕である。文様は粗面部分がはっきりしないが、外区が飛雲文、内区は一对の唐草文のうち片側

のみが明瞭である。

文様の形状と大きさは、赤城山小沼出土鏡の中（文献12のNo85）に近似したのが見られる。精粗两部分で異なった鑄型より造られた可能性が考えられる。

0372鏡と同様の層位の牛池川旧河道で、約20m離れて発見された。

B 下高瀬上之原八稜鏡

直径推定7.6cm、内区径5.3cm、縁厚1.5mm、鈕厚4mm、重量15gを測る。外区の5分の3ほどが欠損している。凹面鏡で、鈕には革紐状の繊維が残っている。幅広い縁は摩耗している。鏡背面は、全体に文様の残存状態が悪く、踏み返し鑄造と考えられる。

縁形は蒲鉾式膨側高縁、界圏は単圏細線、鈕形は截頭円錐形素鈕である。文様は不明確な部分が多いが、外区が飛雲文、内区は向かい合った文様にそれぞれ類似した瑞花と鳥のようなものが認められる。そのため瑞花双鳥文系のものと思われる。

文様の形状と大きさは、貫前神社蔵鏡の中（文献12のNo89）に近いのが見られる。

竪穴住居の北壁近くの床より20cmの位置で発見された。すぐ近くで他に鉄刀子・鉄帯金具・銅鈴が出土している。この住居は、土器の年代は8世紀中頃より9世紀初頭までの幅に入ると考えられる。しかし土層状態より、この住居の廃絶後のものになる。

2 時期と出土状態の特徴

以上の3面は、いずれも直径7.5cm前後の小型鏡で、文様は瑞花双鳥鏡の系統をひくものである。しかし唐式鏡からの双鳥系の文様構成がかるうじて認めら

第1節 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡

れる上之原鏡に比べて、元総社寺田の2鏡はかなりそこから自由になった文様の様相である。

また上之原鏡と寺田0372鏡は極めて薄く、文様の摩耗も含めて、保存状態の問題もあるが、あまり丁寧な鑄造がなされたとは考えにくい。寺田0373鏡は、厚さなどはしっかりしている。しかし、明らかに2個の異なった鑄型が使われており、粗製の部分の方は技術的にかなり安易になされている。

瑞花双鳥系の八稜鏡は、日光男体山山頂遺跡出土の134面の鏡の中で、117面含まれている。そしてその中で寺田0372鏡に似た瑞花八稜鏡は、26面(直径7.1~9cm)見られる。この瑞花双鳥系八稜鏡は、永延2(988)年から永保2(1082)年までのいくつかの紀年銘鏡が知られている(文献7)が、永延2年や寛弘4(1007)年と比べて、寺田0372鏡と0373鏡は後出と考えられるため、11世紀後半代をあてるのが、現状では妥当であろう。

上之原鏡は、踏み返し鑄造のために文様が明瞭ではないが、もとの鏡はかなり典型的な瑞花双鳥文鏡である可能性はある。とすれば、鏡の年代は10世紀後半とすることができる。しかし住居そのものの年代は、9世紀初頭を下ることは考えにくい。従って、この住居の廃絶後150年もたってから埋納されたものとせざるをえない。

管見では、遺跡出土で年代の推定できる最も古い可能性の瑞花双鳥系八稜鏡は、10世紀後半の長野県松本市吉田川西遺跡(文献26)と同原村判ノ木沢西遺跡(文献25)のものがある。両者に比べ上之原鏡は、縁がかなり狭く低い。高く厚い唐式鏡の縁からの発達を考えるなら、上之原鏡は上記2例より古くすることは難しく、150年後の埋納を裏付ける。なお長野県茅野市の構井・阿弥陀堂遺跡の例は、「竪穴住居址が埋没していく過程の窪地に鏡が置かれていた」としており(文献22)、同様のことが考えられる。

元総社寺田鏡は、2例ともに西側に接する上野国総社神社に奉納されたものと考えるのが妥当である。そしてこれは、牛池川への献納と共に、総社神社本殿の北側に東西方向に延びる堀へ献納されたものが、

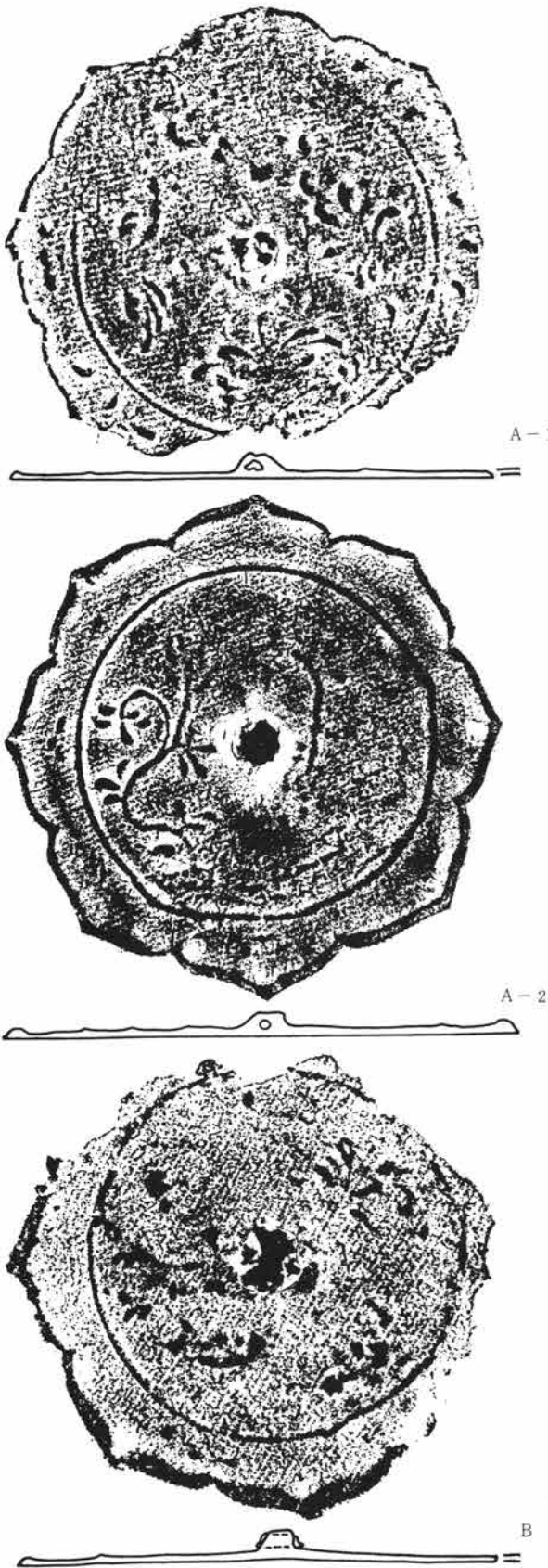


図139 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡

洪水などにより水流の通じる牛池川へ流れこんだ可能性も想定しうる。他の出土例では、後述のように八稜鏡の溝への埋納として長野県茅野市構井・阿弥陀堂遺跡の例及び大阪府和泉大津市大園遺跡と福岡市飯森遺跡群例もある(文献7による)が、よく知られているような赤城山小沼や羽黒山鏡ヶ池のような信仰対象地での池中埋納として、総社神社本殿北側の堀への埋納も十分想定できるからである。

下高瀬上之原鏡は、同様の出土状態で共伴した鉄刀子・鉄帯金具・銅鈴との組み合わせは、日光男体山などの自然対象への埋納と同様であり、また後述のように似た組み合わせの金属製品がいくつかの竪穴住居出土鏡の例と共伴している。そして前述のような年代観より見るならば、竪穴住居の生活そのものとは無関係に、埋納されたと考えられる。高瀬丘陵上のこの遺跡からは、北西2kmに上野国一之宮の貫前神社を望むだけでなく、南西には同神社の神体の一つである稲含山がそびえ、北東方向にははるかに赤城山がのぞめる。つまり、直接には貫前神社の信仰体系の中での埋納と考えられる。

なお、かつて尾崎喜左雄は、赤城山と稲含山を結んだ線上に榛名山から垂線をおろした位置に前橋市元総社町の総社神社があたり、ここへの国府設定に関係があると述べた。(文献6)その当否は別として、

祭祀中心	出土鏡	伝世鏡
A 一之宮貫前神社	本宿遺跡2面 下高瀬上之原遺跡1面	貫前神社3面(他に唐式鏡1面)
B 赤城山	赤城山山頂小沼4面 書上上原之城遺跡1面	三夜沢赤城神社1面 産泰神社1面 二之宮町個人1面
C 国府・総社地域	元総社寺田遺跡2面 鳥羽遺跡2面 正観寺遺跡1面 天田・川押遺跡1面 下大類遺跡1面	
D 榛名山	糺屋遺跡1面	(榛名神社1面)
E 神流川谷		旧鏡守神社1面 野栗神社1面

今回の発見は、各点での八稜鏡出土を示した。

3 鏡の竪穴埋納と八稜鏡の性格をめぐって

3-A 上野国内の分布と出土状態

筆者はかつて、伊勢崎市書上上原之城遺跡掘立遺構出土の瑞花双鳥八稜鏡をめぐって、全国的な八稜鏡(和鏡の初現的な存在である瑞花双鳥文系の八稜鏡及びその亜種を指す。以下同じ)の出土状態を考えたことがある。(文献10)その時点で把握できた上野国内での八稜鏡は、出土鏡7遺跡12面、伝世鏡7箇所9面である。出土鏡は、今回の2遺跡3面と渋川市の糺屋遺跡1面を下記表より除いたものがそれである。伝世鏡は、宮城村三夜沢赤城神社1面、前橋市産泰神社1面、同二之宮町個人1面、富岡市貫前神社3面、鬼石町譲原旧鏡守神社1面、上野村新羽野栗神社1面、個人1面。その他に唐式鏡の八稜の白銅月宮鑑が貫前神社に、また瑞花双鳥系八稜鏡と同時期のものとして双鳳麒麟八花鏡が榛名町の榛名神社に伝世され、同じく唐草四花鏡が大泉町坂田字熊野出土(詳細不明)とされている。(文献12)

今回の発見により、出土鏡は10遺跡16面となった。これらの分布は、次のように極めて興味深い特徴を

F 不明

示している。

Aでは、本宿は貫前神社の直下の遺跡であり、下高瀬上之原は上述のように貫前神社と神体山の稲舎山を望む位置である。Bでは、対象地が山頂小沼・三夜沢赤城神社・二之宮赤城神社(書上上原之城は二之宮赤城神社の南東6km)・産泰神社(二之宮赤城神社の北北東2km)に別れるが、赤城山信仰が共通している。Cは、総社神社からの距離が、鳥羽(南西1.5km)、正観寺(南西2.5km)、天田・川押(南5.5km)、下大類(南南東8km)であり、前3者は古道により、下大類は牛池川により、総社に通じている。(文献16)以上の各例の八稜鏡が、それぞれ祭祀中心とした信仰対象に献納した、あるいはする予定であったとするのは、ほぼ誤りないであろう。下高瀬上之原は、前

個人1面

(大泉町1面)

述のように廃棄竪穴を埋納場所として使っていたが、竪穴出土の他の本宿、鳥羽、正観寺、天田・川押例は、竪穴居住者との関係は近いと思われる。Dの糶屋は、伊香保神社里宮三宮神社の北4kmである。

Eは、上武国境の山深く狭い神流川の谷のそれほど著名ではない神社である。しかし、谷筋を通る十石街道は、信濃佐久へのルートとして中世には開かれていた。ここでなんらかの鏡を使った祭祀が行われていたとするより、鏡を持って移動する人々が通った場所と考えたい。

3-B 竪穴から出土した鏡の意味

竪穴住居より出土した鏡は、管見で次のとおりである。

種類	遺跡名	遺構	出土鏡	出土状態	共伴遺物	年代	文献
I 唐式鏡類及び儀鏡							
1	石川県羽咋市寺家遺跡	竪穴SBT12	儀鏡1			8C前	1, 3
2	同上	竪穴SBT16	海獣葡萄鏡1 儀鏡1	竪穴廃棄後埋納		8C前	1, 3
3	同上	竪穴SBT19	儀鏡1	床面	帯金具	8C前	1, 3
4	同上	竪穴SBT23	海獣葡萄鏡片1	床面		8C前	1, 3
5	同上	竪穴SBT28	儀鏡1			8C前	1, 3
6	同上	掘立SB21	海獣葡萄鏡1 儀鏡1			8C前	1, 3
7	同金沢市戸水C遺跡	12号掘立	唐式円鏡片1	周辺	緑釉・灰釉	9, 10C	2
8	京都府長岡京市長岡京跡	掘立SB5303	四仙騎獣文八稜鏡1	掘り方		8C末	23
9	千葉県千葉市文六第2遺跡	A005号住	狻猊双鸞八花鏡1	床面近く		平安中	4
10	群馬県榛東村別分八幡下遺跡	2区5号住	小型儀鏡1	床より10cm	土器	9C前	18
11	同群馬町鳥羽遺跡	G38号住	唐花?八稜鏡片	中央部床面	土器	10C後	9
II 八稜鏡							
12	群馬県群馬町鳥羽遺跡	N1号住	唐草文八稜鏡1	床より17cm	土器・灰釉	11C	11
13	同高崎市正観寺遺跡	72号住	草花八稜鏡片1	中央床	帯金具鎌鏃	11C後	19
14	同天田・川押遺跡	52号住	瑞花双鳳八稜鏡1	床面直上	土器	11C前	20
15	同下大類遺跡	竪穴住居	瑞花双鳥八稜鏡			11C頃	21
16	同富岡市本宿遺跡	MT127号住	八稜鏡片1	覆土	土器	11C	23
17	同伊勢崎市書上上原之城遺跡	掘立建物	瑞花双鳥八稜鏡1			11C?	10
18	同渋川市糶屋遺跡	2号住	瑞花双鳳八稜鏡片1		土器	10, 11C	17
19	山梨県御坂町二之宮遺跡	83号住	瑞花八稜鏡1		土器	11C前	36
20	長野県茅野市判ノ木山西遺跡	14号住	八稜鏡片2		土器灰釉鎌鏃	10C後	25
21	同構井・阿弥陀堂遺跡	30号住	瑞花双鳥八稜鏡3	廃棄後埋納	土器	不明	22
22	同松本市南栗遺跡	SB91	八稜鏡片1	置かれた状態	灰釉鎌刀子	11C前	27
23	同栄村乗落遺跡	竪穴住居	瑞花双鳥八稜鏡1	床面上	土器灰釉鉄棒	10C末11C	8
24	同箕輪町大原第二遺跡	1号住	八稜鏡1	床上10cm	灰釉	10C後11C前	35
25	福島県郡山市馬場中路遺跡	4号住	瑞花双鳥八稜鏡1	ピット中		11C初	13
III 和鏡円鏡							
26	長野県長野市浅川西条遺跡	15号住	網地草鳥鏡1	覆土最上層		平安	29
27	同松本市北栗遺跡	SB261	松鶴鏡1		やりがんな馬歯	12C後以降	28

以上の他に、人為的な施設より出土した八稜鏡には、次のものがある。

第5章 ま と め

28	千葉県市原市上総国分尼寺	土坑墓	瑞花双鳳八稜鏡 1	鉄製品鈴	11, 12C	7
29	長野県塩尻市吉田川西遺跡	土坑墓SK128	瑞花双鳥八稜鏡 1	漆器緑釉土器	10C後	26
30	同松本市南栗遺跡	土坑墓SK176	瑞花双鳳八稜鏡 1		11C後	27
31	同茅野市構井・阿弥陀堂遺跡	溝 2	瑞花双鳥八稜鏡 1	鉄製品	10C後11C前	22
32	同奈川村金原遺跡	土坑墓	八稜鏡 1	灰釉	10C末11C前	34
33	三重県明和町齋宮跡	土坑墓SK3084	瑞花双鳥八稜鏡片 1		平安中期	14
34	大阪府枚方市九頭神遺跡	土坑墓	瑞花双鳳八稜鏡 1		11C初	37
35	同和泉大津市大園遺跡	大溝	瑞花双鸞八稜鏡		11C末12C前	7
36	福岡県福岡市飯森遺跡群	溝	八稜鏡片 1		10, 11C	33
37	同春日市門田遺跡	木棺墓	花枝鳥文八稜鏡	鉄紡錘車釘	10C後	32

それらの中で、竪穴住居からの例で層位的な出土状態が知られるものは、次のように分けられる。

- A 廃絶後の埋納：寺家 SBT16、別分八幡下、鳥羽N 1 住、本宿、構井・阿弥陀堂30号住、大原第二、浅川西条、北栗(鉄馬歯)
- B 廃絶時に存在：天田・川押、文六第 2、乗落(スラグ)、馬場中路
- C 出土状態不明で鉄製品共伴：正観寺片、判ノ木山西片、南栗 SB91片(置かれた状態)

Aの中で最も古い寺家 SBT16の場合、廃棄した大型竪穴に砂そして粘土を入れ、それから鏡を埋納した後に、火を燃やしている。(文献 1) 構井・阿弥陀堂30号住では、覆土第 2 層上面で12×9 cmの板の上に載った状態で 3 面が見られた。「自然堆積していく過程においてできた窪地内におかれた」と報告者は述べ、同遺跡の溝 2 出土例(鉄製品を伴う)との関係で、4 m離れた溝 4 の埋没に伴う埋納としている。確かに、溝などへの埋納は他に上記の35と36で見られる他に、海獣葡萄鏡では平城京などにも例がある。北栗例は、同じく覆土中に鉄製品と馬歯があった。馬歯は、寺家の竪穴 SBT29でも覆土中で出土している。

竪穴住居の廃絶に対する儀礼として、鏡を鉄製品あるいは時には馬歯と共に埋納することは、どうやら海獣葡萄鏡の段階から始まり、八稜鏡で盛んに行われ、和鏡円鏡の時まで及んでいたようである。

Cはいずれも破片であり、必ずしもAと同様ではないかもしれないが、鉄製品を共伴する例が 3 例あるのも興味深い。これらの鉄製品とは、上記のように帯金具・鎌・鋏・刀子・棒などである。南栗 SB391については、AあるいはBのいずれも考えられる。

Bは、竪穴廃絶時の初期埋没に際し、すでに確實

に床などにあったものである。馬場中路を除いて、突発的な事態のために遺棄されたとしか考えられない。馬場中路は、径16cm深さ20cmのピット内からの出土である。このピットは柱穴の可能性もあり、とすれば地鎮具であるかもしれない。

そのため、馬場中路を唯一の例外として、竪穴から出土した鏡は、下高瀬上之原のように居住時間と大きく隔たりにない限り、廃絶儀礼に伴うものと、最終使用の前に遺棄されたものととらえられる。

この点について竪穴出土の鏡を、一般的に遺棄とした前説は撤回する。なお、横山貴広は海獣葡萄鏡の出土状態の検討の中で、①「埋納」と②「投供」に分けて考えている。(文献 3) 即ち、①「埋納」とは、「信仰対象にたいする鎮め物的な意味あいを有しており、「埋納されたその物に留まる使命を帯びる」行為とし、法隆寺五重塔心礎などの 7 例をあげている。一方、②「投供」とは、「鏡自体に祭祀の目的(願=厄落としなど)をこめて捨て去る身代わりの性格を有し、「捨て去ることによってその使命をすべて終了」する行為とし、寺家遺跡の竪穴での海獣葡萄鏡のあり方を含めて、7 例を指摘した。特に、後者はいわば「使い捨て」であるため、使われた鏡はすべて日本製の小形雑鏡であることがその証拠と述べた。興味深い指摘であるが、はたして上述の八稜鏡や和鏡円鏡による竪穴の廃絶儀礼に伴う埋納が、横山の言う海獣葡萄鏡の「投供」に完全に一致するとは、言い難い。例えば構井・阿弥陀堂30号住の場合、3 面が板に載せられた状態であった。それは「使い捨て」とは考えにくく、むしろ「埋納」であると思われる。八稜鏡や和鏡円鏡の場合は、破片のみも含めて恐らく大部分が海獣葡萄鏡の「埋納」でないかと思われる。

特に八稜鏡は、出土鏡の大部分(1987年での管見では全193面の85%)が、日光男体山を中心とする自然の信仰対象地で発見されている。男体山山頂を中心とする霊地でのあり方は、その前提に登山という苦行的な行為を伴っており、供献者の「身代わり」ではあっても「使い捨て」られたものとは、考えにくい。そして自然対象地で発見された鏡と竪穴などで出土したものとの質の差は、海獣葡萄鏡のように区別されない。

逆に、男体山の134面以上の出土鏡の中に僅か1面ながら古い漢式鏡も入っていたこと、そして大部分を占める瑞花双鳥系の八稜鏡の文様はかなり精粗があることを見れば、鏡背の文様は供献者にとってあまり大きな意味ではなかったかと思われる。「埋納」することが、最初からの製作目的であり、例えば化粧具としての使用などはあまり考えられなかったのではないだろうか。上記の吉田川西など、いくつかの土坑墓での出土も見られる。しかし、それは弥生時代以来続いている慣行であり、直接化粧具としての実用を現すことではない。(菊池誠一は化粧具としての使用の証拠として『義経記』をあげているが、それは八稜鏡の年代よりは1世紀以上後の資料である。文献7)

3-C 八稜鏡の分布の特徴

以上のような分布とそれ以外の鏡出土例をもとに菊池は、鏡を出土した集落遺跡の種類を1「山麓や地域内の高所にある規模の小さな遺跡」、2「低地や扇状地にある規模の小さな遺跡」、3「台地・低地に立

地し、付近に国府・国分寺・有力社寺などがあり、その地域の政治・文化の中心地域にある大規模な遺跡」に分けた。そして1と2は「鏡を祭祀に使う呪術的宗教者の存在」を考えた。3は、「有力者層の(中略)私的所有物としての化粧道具」と「呪術的宗教者」の祭祀品との二つの可能性を併記している。

さらに「東日本での鏡の集落内出現は、(中略)住居からの出土は10世紀後半頃から始まり、全国的に拡散するのは11世紀段階であろう。そして、それは京の文化をいち早く受容することができた国庁・国分寺近辺の集落で始まったとみることができる。そして、山間部への波及も同時に行われたのであろう。」と述べている。(文献7)

かつて検討したように、八稜鏡はその出土の大部分(1987年の管見で193面の83%の160面)が栃木・群馬・長野の3県に偏っている。もちろんそれは、日光男体山山頂の134面の量の圧倒によるものだが、さらに山梨や福島あるいは石川の白山を加えた東日本内陸部(東山道地域と周辺)での絶対的な出土量の優位は、その後の資料増加でも続いている。

さらに前述のように、上野国内の出土・伝世の各資料は、基本的に有力神社(山を神体とする式内社と中世の某之宮呼称を残す神社そして国府の総社)また交通路上に見られる。それは、集落の規模などとは直接関係ない。

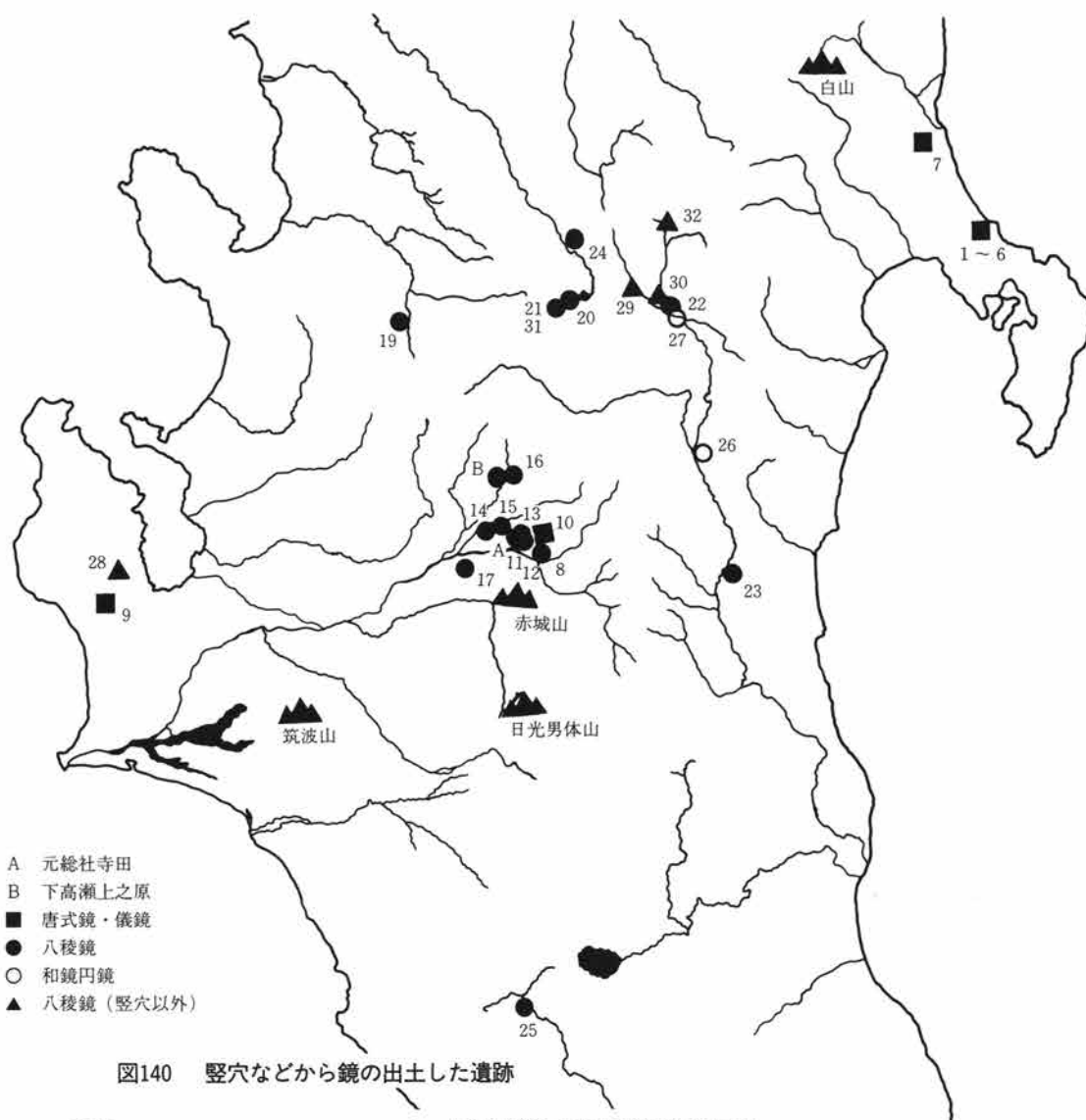
上記の上野以外の各例は、立地的には次のように特徴づけられる。

A 有力神社・山岳信仰地近傍

二之宮	:	甲斐国二之宮美和神社近傍
判ノ木山西、構井・阿弥陀堂	:	信濃国一之宮諏訪大社近傍
南栗、吉田川西、(北栗)	:	同 三之宮砂田神社近傍
大原第二	:	木曾駒ヶ岳近傍か
(浅川西条)	:	飯縄山近傍
上総国分尼寺	:	(上総国総社)

B 交通路

馬場中路	:	阿武隈川近傍か
------	---	---------



乗落 : 信濃越後国境千曲川近傍尾根
 金原 : 木曾御岳、信濃飛騨国境野麦峠近傍
 (寺家)、(戸水C) : 日本海海港

C 不明

文六第2 : 不明

D 信仰自然対象 :

日光男体山山頂、赤城山小沼、白山山頂、(筑波山山頂)、(羽黒山鏡ヶ池)

Aは、大原第二がやや不明瞭だが、他は極めて条件が似ている。もちろん、有力神社のある場所は主要交通路の通る地点でもある。東山道本路と木曾路の分岐点近くでもある吉田川西の付近では、さらに1面瑞花双鳥文八稜鏡が出土していたと言う。

Bでは、寺家は渤海との交通に大きく関係ある海港であり、近くの戸水Cも同様の可能性が考えられ

る。馬場中路は、今のところ東山道の路線を含んだ阿武隈川の流路との関係でとらえたい。乗落については、調査者の桐原 健は、この遺跡の居住者を鍛冶的な仕事にも従事し、灰釉陶器を運んだ「自由な山の民」で、「荘園機構からは何ら制約を受けない自由な民である彼等が、運輸交通業者としても大きな役割を果たしたろうことは想像に難くない」と考え

た。(文献8)詳細は不明だが、金原も同様のあり方と思われ、群馬の神流川谷の伝世資料にも共通する。菊池の言う「鏡を祭祀に使う呪術的宗教者の存在」を桐原の「自由な山の民」と重ねて考えることは、可能である。しかし「有力者層の(中略)私的所有物としての化粧道具」としての八稜鏡の存在は、前述のように難しい。

以上をまとめれば、唐式鏡の段階で日本海交通の要地の寺家などで始まった竪穴への埋納儀礼が、律令制国家が崩壊した時に内陸の山岳信仰と結び付い

て八稜鏡の儀礼が生まれたと思われる。その受容については、「京の文化をいち早く受容することができた国庁・国分寺近辺の集落で始まり」、「山間部への波及も同時に行われた」とは考えにくい。むしろ、「山の民」が自らのそして東山道地域の多くの人々にとっての精神的基盤である山岳信仰のために使用・製作し、その信仰力の大きさに国庁周辺が引きづられたとする方が、理解しやすい。日光男体山山頂の膨大な量は、何よりもその現れである。

文献

- 1 石川県埋蔵文化財センター 1986A『寺家遺跡発掘報告Ⅰ』
- 2 1986B『金沢市戸水C遺跡』
- 3 1988『寺家遺跡発掘報告Ⅱ』
- 4 石橋一恵 1984「千葉市文六第2遺跡出土の銅鏡について」『加曾利貝塚博物館紀要』11
- 5 大阪市立博物館 1985『日本の古鏡—女装美のプロデューサー—』
- 6 尾崎喜左雄 1966「山と信仰」『群馬文化』87、1970『上野国の信仰と文化』尾崎先生著書刊行会に再掲
- 7 菊池誠一 1987「平安時代の集落出土鏡の性格—東日本の出土例を中心に」『物質文化』49
- 8 桐原 健 1968「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃』20—4
- 9 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『鳥羽遺跡G・H・I地区』
- 10 1988『書上上原之城遺跡ほか』
- 11 1990『鳥羽遺跡L・M・N・O地区』
- 12 群馬県立歴史博物館 1980『群馬の古鏡』
- 13 郡山市教育委員会 1983『郡山東部Ⅲ』
- 14 斎宮歴史博物館 1989『斎宮跡発掘資料選』
- 15 斎藤 忠ほか 1963『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 16 坂井 隆 1989「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴」『研究紀要』6、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 渋川市教育委員会 1988『市内遺跡Ⅰ』
- 18 榛東村教育委員会 1987『別分八幡下遺跡 申府神田遺跡』
- 19 高崎市教育委員会 1981『正観寺遺跡群Ⅲ』
- 20 同上 1983『天田・川押遺跡』
- 21 田島桂男 1979『大類村史』
- 22 茅野市教育委員会 1983『構井・阿弥陀堂遺跡』
- 23 富岡市教育委員会 1981『本宿・郷土遺跡』
- 24 長岡京跡発掘調査研究所 1985『長岡京市文化財調査報告書』14
- 25 長野県教育委員会 1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3』
- 26 長野県埋蔵文化財センター 1989『吉田川西遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 27 1990A『南栗遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 28 1990B『北栗遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 29 長野市教育委員会 1975『浅川西条』
- 30 広瀬都巽 1974『和鏡の研究』角川書店
- 31 福井県立博物館 1986『古鏡の美 出土鏡を中心に』
- 32 福岡県教育委員会 1977『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3
- 33 福岡市教育委員会 1986『吉武飯森遺跡説明会パンフレット』
- 34 南安曇郡誌改定編纂会 1983『南安曇郡誌』
- 35 箕輪町教育委員会 1978『大原第二・第三遺跡』
- 36 山梨県教育委員会 1987『二之宮遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告23
- 37 読売新聞 1991「大阪版12.12」『月刊文化財発掘出土情報』1992—2

第2節 元総社寺田遺跡検出水田の様相

根岸 仁

(1) 概 要

元総社寺田遺跡においては、上層より1面（中・近世）、2面（奈良・平安時代）、3面（古墳時代後期）、4面（古墳時代前期～後期）、5面（古墳時代前期）、6面（縄文・弥生時代）の各文化層に分けて調査が実施されたことは、例言で述べてある通りである。特に、奈良・平安時代に相当する遺構で注目されたものに、本遺跡周辺地域が国府域に推定されている地であり、それらに関係する遺構の検出及び遺物の出土であったが、本遺跡調査地内において、または本調査期間においては、国府に直接関係する遺構の検出は残念ながらみられなかった。その理由として、本調査区が河原・大江説や近藤説による国府域の東限に近接しているものの、本調査の主要部分を占めたのは、旧牛池川の河川内の谷底平野であったことが言える。しかしながら、後者である河川内の調査では、河川の運搬・堆積作用によって、上流部及び周辺より多量の遺物が流入または混入し、国分寺遺跡出土と同範の瓦等が出土した。また、祭祀的色彩の濃い八稜鏡の出土や土師質土器の大量出土は、国府域内を流下する牛池川の「みそぎの川」としての一側面を窺わせるものである。また、古墳時代に至っては多量の木器の出土をみた。

本遺跡においての主たる遺構の検出としては、3面、4面、5面からの水田址の検出が挙げられる。上層よりFA下水田（古墳時代後期に相当）、第3洪水砂下水田・第2洪水砂下水田・第1洪水砂下水田（古墳時代前記～後期に相当）、As-C下水田（古墳時代前期に相当）であり、それらの残存状況からみて、古墳時代の前期から後期にかけて、当地において継続的に水田経営がなされていた証左となるものである。以下、本遺跡で検出された水田とその検出状況、水田に付随する施設等について記述する。また、本遺跡の調査に伴い、野外調査及びプラント・オパール分析（第4章、第4節に掲載）が実施され、野外調査では、(尙)古環境研究所の早田 勉氏により、牛池川に係わる本遺跡調査区内の地形発達の歴史が分析されているので、併せてその成果を本節中の(2)に掲載した。

(2) 考察—地形発達の歴史

個々では、最近の地質学的研究の成果を合わせ、元総社寺田遺跡周辺の地形発達の歴史を概観する。約1.5万年前に榛名火山で山体崩壊が発生し、陣場岩屑なだれが山麓を覆って堆積した。その後斜面から土砂が山麓に運ばれ、相馬ヶ原扇状地が急速に形成された。扇状地の扇頂部は、約1.3—1.4万年頃にはすでに離水していたらしい。(以上、早田、1990)。扇状部および扇端部でも、そのころには砂礫層が堆積するようなことはなく、泥炭地が広がっていた。この泥炭地の形成は約1万年前ごろまで続き、前橋泥炭層上部に相当する泥炭層が形成された。そして、その後再び砂礫（総社砂層）が堆積した。

総社砂層の堆積後、牛池川による下方侵食が始まった。牛池川は蛇行しながら下刻を続けた。そして旧河道と後背湿地が形成された。その後、谷は泥炭質土壌により埋積された。埋積の開始時期はAs-C降灰を遡る。6世紀初頭に発生したHr-Sとそれに続いて発生した泥流により、さらに急速に埋積された。その後河川による侵食作用が卓越することになり、侵食平野が形成された。この侵食は、As-B (A. D. 1108) 降灰前後まで続いた。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, P 1-79
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No.157, P 41-52
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する人文・自然科学」, P 865-928.
- 坂口 一 (1986) 榛名ニツ岳起源 F A・F P 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, P 103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, P 297-312.
- 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, P 35-129.

(3) 水田の検出状況

元総社寺田遺跡において検出された水田址は、F A 下水田と As-C 下水田のともに古墳時代に比定される水田であり、その他に As-C の二次堆積層下から3枚の水田址の可能性（プラント・オパール分析により、イネ科のプラント・オパールが低い値ながら確認されている。）のある水田土壌を確認している。これらの水田址は、旧牛池川の開析によって形成された谷底平野内の河川の流路面に沿って営まれている。また、谷底平野の外郭部を成しているのは、総社砂層を上層に伴う洪積台地（下層に As-YP が認められる。）であり、この台地部を切って牛池川が流下している。

水田の検出状況（残存状況）は、調査区によって異なり、上面からの削平及び攪乱を免れたIV区からV区にかけては、概して良好であった。しかしながら、畦畔の残存状況は土圧によるものか、それとも当時の状態のままであったのかは定かではないが、プランの確認に難渋したのは事実である。

(4) 水田に伴う施設

水田に伴って検出された施設には、畦畔により区画された水田（3面・4面の第3洪水砂下水田・5面）・溝（3面・4面・5面）・水口（3面・5面）・井堰（4面）・畦畔（3面・4面の第3・2洪水砂下水田・5面）・杭列（5面）・畦畔の補強材（5面）があり、その他に水田面に付随する遺構として、足跡及び足跡群（3面・5面）がある。5面では、IV区で浅く踏み込んだ足跡が検出されたが、方向性を追えるものは少ない。3面では、III～V区で検出され、III区の足跡は浅く方向性を追えるものはない。IV区北半部では、東から西へ歩行する膝ほどまで埋まった形跡を残す足跡が検出された。IV区南半部からV区北半部では、比較的浅い足跡が散在していた。V区南半部では、主に上流と下流を往復する集団的な足跡が検出された。足跡は、浅いものと深いもの両者があり、小人と思われる小さい足跡も含まれていた。この足跡群は、畦畔作り等の共同作業に向かう集団の往来が想定される。なお、溜井等の施設は検出されなかった。

(A) 水田区画と面積

水田区画については、他の遺跡で検出されているような方形または長方形といったような整然とした区画は、殆どといっていい程検出されず、形状の不定形な区画が目だって多かった。概して F A 下水田は、その計測面積からみても一区画が小さく、地形的制約を受けながらも、大区画を設け内部を小区画に画することを目指しているのに対して、As-C 下水田の方は、一区画の規模が大きいとともに、地形（傾斜）に即した区画性が窺える。本県で検出される F A 下水田は、概して小区画のものが多いいが、その理由として、やはり保水性（湛水深）が考えられる。すなわち、水田面の傾斜度合、耕作土及び直下土層の土壌状態で決定されるものと考えられる。そのことは、前章で述べた様に、IV区南半部、3面の水田区画における F A 層と As-C 層間に堆積する砂利層が証左となり得るものである。

第5章 ま と め

(B) 溝 (河道・水路)

本遺跡では、検出された溝状の遺構は、すべて遺構名称の溝として扱っている。そのために、畦畔間を利用した水路や河道としての機能を持つものも含まれている。溝の形状は、不整形なものや溝幅が均一で整ったものもあり、概して水田区画に伴う取配水を考慮した配置及び機能を有している。特に、As—C下の溝は大きく3つに分けられる。II区5面、17号溝・V区5面、19号溝のような谷底平野内を蛇行して流下する主に排水を目的とする規模の大きい溝、III区5面、31号溝やIV区5面、29・30・34・35号溝のような水田区画に沿って畦畔間を利用し合流・分岐を繰り返す、複数の水田間に給排水を行うものと、IV区5面、31・32号溝のような、台地縁辺を巡り水田に給水する溝である。これらの溝の内、FA下水田まで踏襲されるのは、畦畔間を利用して給排水を行う溝である。

(C) 水 口

水口は畦畔と畦畔の端部に手を加えることによってその機能を持つものであり、当然、畦畔間の幅は必要な取配水量によって異なってくる。また、水口の位置は、5面では畦畔によって区画された区画隅にある場合が多く、また、3面ではV区北半部で看取できるように、畦畔の中央部に設けられている傾向にある。いずれにしろ、水口の設けられた位置は、水が最も効率よく流れ、また、他区画への配水方向を決定づける位置であることは否めない。取配水の方法には、水口を設けない田越しの方法もあるが、水口がある区画においては、田越しの方法を採った可能性は低いと思われる。しかしながら、水田面の傾斜からみて、水口を設けなければ、他区画へ取配水ができないと思われる区画域については、部分的に、田越しを採用していたものと考えられ、本遺跡においても、圧倒的に水口利用をしていたものの、田越しも併用していたものと推測される。特に残存状態が良好でしかも形状の整った水口は、IV区5面のAs—C下水田に伴うものであり、畦畔間を利用した水路(31号溝)からNo31・32区画へ取水する2カ所である。水口を作る時の工具痕は確認されていないが、水口の底面から畦畔端部にかけては、緩やかに立上がり、As—C除去時点では、僅かに細砂が残存し、尻水口から水口にかけての部分は、水田面と比較して微妙に変色していた。

(D) 井 堰

本調査区において、III区4面の木器包含層中より、唯一検出された。このことは、As—C降下堆積以降、FA降下堆積までの間、当地において継続して水田耕作が営まれていた証左でもあり、IV区南端部で検出された第3～1洪水砂下水田(プラント・オパール分析で確認済み。)の信憑性を裏付けるものである。但し、井堰の全容は、その延長部が調査区外にあり、その詳細は不明な点が多い。いずれにしても、水量調節あるいは配水方向を決定するための施設であったことには変わりなく、多量の木器群に伴って検出された、葦とおぼしき編み込みのある植物繊維は、井堰の間隙を塞ぐためのものであった可能性も推測することができる。

(E) 畦畔 (大畦畔・小畦)

水田に伴う畦畔は一様に偏平であり、その形状が僅かに確認できるものが殆どである。その理由として考えられることに、土圧が生じたこと、当時、放棄されたままの状態が長く続いていたこと、河川の氾濫によって上面が磨耗、流亡したこと等が考えられるが、IV区3面の南端部で検出されたFA下水田に伴う畦畔は、その高さ、形状は堅固としたものであり、当時の畦畔の形状をとどめるものである。しかしながら、畦畔の高さは、水位に関係するものであり、傾斜地に沿って構築する場合は、必然的に高くなるものであり、すべ

ての畦畔と比較して結論付けるのは、少々危険であると思われる。いずれにしろ、畦畔高数センチメートルの畦畔では、畦畔としての機能を持たないのも事実であり、前述した理由かまたは、それ以外の何等かの理由によって、偏平化したものと思われる。

(F) 補強された畦畔

V区5面、F-74グリッド内のAs-C下水田に伴う畦畔の裾部より検出されたものである。補強目的のために、自然木（補強材）を人為的に埋め込んだことは、検出された補強材の位置や、ほぼ同種の形状を選択していることから推測することができる。設置理由については、前章で記述している通りである。

(G) 杭列（土橋）

II区5面、As-C下水田の2F~2H-29~31ラインにかけて検出された遺構である。その機能としては、土橋と考えられることは、前章で述べた通りであるが、同時に検出された杭列の延長線中央にある木の株根は、後に生えたものであるのか、当時、幹部分を伐採して補強に使用したのかは不明である。しかしながら、16号溝にはほぼ交差するように杭列と株根があることからみて、意図的に利用した可能性も高いと考えられる。

(H) 結 び

本遺跡検出の3面・5面の水田址は、それぞれFAとAs-Cに覆われ、ともに間層を挟まない。FAは近年の考古学的所見では、6世紀初頭の年代観が与えられている。また、As-Cの年代観は、従来より4世紀中葉の年代観が与えられているが、近年では4世紀初頭とする考え方も表明されている。いずれにしろ、As-C下水田面及び溝からは、古墳時代前期の土器が出土しており、また、As-Cに直接覆われていることからみて、本遺跡検出の水田の開田時期は、古墳時代前期の可能性が強い。また、4面の検出状況から、その後も継続的に水田は営まれ、古墳時代後期初頭のFA及び泥流の堆積により、本遺跡での水田耕作を断念せざるを得ない状況に陥ったものと考えられる。

参考文献

- 「水田の考古学」 工藤善通 東京大学出版会 1991
- 「発掘された古代の水田」 群馬県立博物館編 1980
- 「北関東北西部における水田遺構」 平野進一 考古学研究 第29巻第2号 1982
- 「浅間山大焼・榛名山爆裂」 能登 健 どんめん No19
- 「火山災害の季節」 原田恒弘・能登 健 群馬県立博物館紀要 第5号 1~22頁 1984
- 「特集・火山堆積物と遺跡」 考古学ジャーナル No157 1979
- 「古式土器出現期の様相と浅間山C軽石」 友廣哲也 群馬の考古学 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 「群馬県の古墳文化初頭期の検討」 友廣哲也 古代 早稲田大学考古学会 第94号 1992
- 「群馬県史」通史編1 原始古代1 群馬県 1990
- 「図説 群馬県の歴史」 河出書房新社 1989
- 「新保田中村前遺跡I」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990

第5章 ま と め

主な古墳時代の水田遺跡一覧

群馬県埋蔵文化財調査事業団年報より

No.	遺 跡 名	市町村	内 容
2	三室遺跡	東 村	古墳時代の谷地田
3	荒砥中屋敷II遺跡	前橋市	古墳時代の水田跡
4	日高遺跡群	高崎市	古墳時代の水田跡
5	融通寺遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
6	北原遺跡	群馬町	古墳時代の水田跡
7	一日市関後遺跡群	粕川村	As-C下水田跡
8	新保田中村前遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
9	中村遺跡	渋川市	FA・FP下水田
10	西組遺跡	子持村	古墳時代の水田跡
11	元総社明神遺跡	前橋市	古墳時代の水田跡
12	上並榎御料所遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
13	中尾村前遺跡	高崎市	As-C下水田跡
14	日高中堀添遺跡	高崎市	As-C下水田跡
15	中筋遺跡	渋川市	古墳時代の水田跡
16	石原東遺跡	渋川市	古墳時代の水田跡
17	砂田遺跡	新里村	古墳時代の水田跡
18	上並榎下松遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
19	中尾村前IV遺跡	高崎市	3世紀後半の水田跡
20	上並榎仲沖遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
21	問屋町西遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
22	北牧遺跡	子持村	古墳時代の水田跡
23	上並榎下松II遺跡	高崎市	古墳時代の水田跡
24	井出地区遺跡群	群馬町	古墳時代の水田跡
25	横尾地区遺跡群 (七日市遺跡)	中之条町	古墳時代の水田跡
26	伊勢町地区遺跡群 (天神遺跡・川端遺跡)	中之条町	古墳時代の水田跡

水田計測一覧表 (II区3面)

番号	被覆層	規模m		平面形	面積 ㎡	水 口
		長辺	短辺			
1	FA	—	—	—	—	東
2		—	—	—	—	西
3		—	1.50	不定形	—	—
4		—	—	—	—	—
5		—	—	—	—	—
6		—	1.70	—	—	—
7		—	—	—	—	—
8		—	—	—	—	—
9		—	—	—	—	—
10		3.05	0.60	(台形)	2.81	—
11		—	—	—	—	—
12		—	—	不定形	5.85	—
13		—	—	不定形	9.22	—
14		—	1.10	不定形	11.22	南西
15		—	—	不定形	18.55	東
16		—	—	—	—	南
17		—	—	—	—	—
18		—	—	—	—	北
19		3.80	1.30	不定形	4.38	—
20		—	—	—	—	南東
21		—	—	—	—	北東
22		—	—	—	—	—
23		—	—	—	—	—
24		—	—	—	—	—
25		—	—	—	—	南西
26		—	—	—	—	北西
27		—	—	—	—	—
28		—	—	—	—	—
29		—	—	—	—	—

水田計測一覧表 (III区3面)

番号	被覆層	規模m		平面形	面積 ㎡	水 口
		長辺	短辺			
30	FA	—	—	—	—	—
31		2.25	—	—	—	—
32		1.95	0.55	隅丸長方形	1.91	—
33		—	—	—	—	—
34		1.90	—	—	2.36	—
35		0.90	0.55	隅丸方形	0.56	南東
36		0.85	0.70	隅丸方形	0.78	北西
37		2.25	0.60	長方形	0.45	—
38		—	—	不定形	0.56	—
39		1.20	0.50	隅丸長方形	0.78	—
40		0.70	0.60	隅丸方形	1.46	—
41		1.55	0.70	隅丸台形	0.56	—
42		1.75	1.20	長方形	2.02	—
43		0.80	0.55	方形	0.56	—
44		0.90	0.70	不定形	0.90	—
45		—	0.70	—	—	南東
46		—	—	—	—	北西
47		2.20	0.60	不定形	1.68	南東
48		1.70	0.75	隅丸長方形	1.57	—
49		2.10	1.00	隅丸台形	2.70	南東
50		1.70	1.25	台形	2.70	北西
51		—	—	(不定形)	4.16	—
52		—	—	—	—	—
53		—	—	—	—	—
54		—	1.10	—	—	—
55		0.90	0.70	不定形	1.46	東・西

第2節 元総社寺田遺跡検出水田の様相

56	FA	—	1.20	隅丸台形	0.90	—
57		1.40	—	方形	1.80	—
58		—	1.10	不定形	1.01	西・北
59		—	—	不定形	0.78	南
60		—	0.80	台形	0.60	—
61		—	0.80	—	—	—
62		1.20	1.10	台形	0.90	北東・南東
63		1.60	1.10	不定形	1.57	南東・北東
64		1.30	0.95	不定形	1.35	南西
65		1.60	1.60	台形	3.03	—
66		—	—	不定形	0.67	—
67		—	1.20	不定形	2.13	北西・南西
68		—	—	—	—	北東
69		—	—	—	—	—
70		—	—	—	—	—
71		—	1.90	不定形	4.16	南東
72		—	—	—	—	—
73		—	—	—	—	—
74		—	—	—	—	南東
75		—	—	—	—	—
76		—	1.60	—	—	—
77		2.00	0.70	隅丸長方形	2.47	南東
78		—	0.70	—	—	北西・北東
79		—	—	—	—	南西
80		—	0.55	—	—	—
81		3.10	—	(隅丸台形)	4.27	北東
82		—	—	—	—	南東
83		—	—	—	—	—
84		—	—	—	—	—
85		—	—	—	—	—
86		—	—	—	—	—
87		—	—	—	—	—

水田計測一覧表 (IV区3面)

番号	被覆層	規模m		平面形	面積 ㎡	水口
		長辺	短辺			
88	FA	—	—	—	—	—
89		—	—	—	—	南東
90		—	—	—	—	南西・北西
91		—	—	—	—	—
92		—	—	—	—	—
93		—	5.05	不定形	31.38	南・南西
94		—	—	—	—	—
95		—	—	—	—	東
96		—	—	—	—	東・北・西
97		—	9.90	—	—	北西・西
98		—	—	—	—	—
99		—	6.10	—	—	—
100		—	9.90	—	—	—
101		—	—	—	—	—

水田計測一覧表 (V区3面)

番号	被覆層	規模m		平面形	面積 ㎡	水口
		長辺	短辺			
102	FA	—	—	—	—	—
103		—	—	—	—	南西
104		—	—	—	—	—
105		—	—	—	—	南西
106		—	1.90	—	—	南西
107		—	—	—	—	南
108		5.30	2.70	不定形	10.10	南西・南東
109		—	—	—	—	—

110	FA	—	1.65	—	—	北東
111		—	1.10	不定形	4.95	北西・北東・東
112		1.80	1.60	隅丸方形	3.26	北西・南西
113		3.10	1.20	不定形	5.73	西・東
114		—	—	不定形	9.00	西・南東
115		4.80	3.70	台形	14.28	北西・北・東
116		—	3.80	不定形	4.61	西・北
117		—	0.75	—	—	—
118		—	—	—	—	南東
119		—	—	不定形	6.86	北西・南東
120		6.50	1.40	不定形	14.62	北西・東・南
121		8.70	4.20	台形	21.48	北西・南
122		—	1.60	不定形	13.16	南
123		3.00	1.20	不定形	5.62	北・東
124		4.35	4.30	三角形	9.90	南西・北西
125		3.65	2.75	台形	10.12	北・北西・南・南東・北東
126		2.40	1.10	不定形	3.48	東
127		—	—	—	—	南
128		—	1.80	—	—	北
129		—	—	—	—	東
130		—	1.70	不定形	3.93	西・北・南東
131		1.90	1.70	不定形	6.18	北西・東
132		4.00	2.20	台形	8.32	西・北東・南東
133		4.60	2.70	隅丸長方形	16.65	北西・南西
134		2.30	1.20	台形	2.92	北西・北東
135		3.10	1.60	不定形	6.09	北西・南東
136		—	—	—	—	—
137		—	—	—	—	西
138		—	2.60	—	—	北東・南東
139		—	—	—	—	北西
140		—	—	—	—	南西
141		—	—	—	—	北東
142		—	—	—	—	南西
143		—	—	—	—	—
144		—	—	—	—	北東
145		—	—	不定形	39.90	—
146		—	—	—	—	—

水田計測一覧表 (IV区4面南端部第3洪水砂下水田)

番号	被覆層	規模m		平面形	面積 ㎡	水口
		長辺	短辺			
1	灰黄色砂	—	—	—	—	—
2		—	4.50	—	—	—
3		—	2.60	—	—	—
4		—	2.60	—	—	—
5		—	3.85	—	—	—
6		—	—	—	—	—
7		—	—	不定形	7.53	—
8		—	—	—	—	—
9		—	—	—	—	—

水田計測一覧表 (II区5面)

番号	被覆層	規模(m)		平面形	面積 ㎡	水口
		長辺	短辺			
1	As-C	—	—	—	—	南東
2		—	—	—	—	南
3		—	—	—	—	北西・北
4		—	—	—	—	—
5		—	—	—	—	—
6		—	—	—	—	—
7		—	—	—	—	—

第5章 ま と め

8	As-C	-	-	-	-	南東
9		-	-	(台形)	5.62	北東
10		-	-	-	-	-
11		-	-	-	-	-

水田計測一覧表 (III区 5面)

番号	被覆層	規模 m		平面形	面積 m ²	水 口
		長辺	短辺			
12	As-C	-	-	-	-	-
13		15.20	-	-	東	-
14		8.20	1.70	台形	11.90	北東
15		-	-	-	-	-
16		-	4.60	-	-	南東
17		-	-	-	-	-
18		-	-	-	-	-
19		-	-	(台形)	-	北・東
20		-	-	-	-	-
21		-	-	-	-	南東
22		8.10	4.30	(台形)	31.05	西・南東
23		5.70	-	不定形	29.92	北東・南西
24		-	-	-	-	-
25		6.50	-	-	-	北西・南東
26		-	-	-	-	-
27		-	-	-	-	北西・南西
28		-	3.50	-	-	北東・北西・西
29		6.50	5.10	-	-	北西・北東
30		-	-	-	-	-

水田計測一覧表 (IV区 5面)

番号	被覆層	規模(m)		平面形	面積 m ²	水 口
		長辺	短辺			
31	As-C	12.50	7.60	台形	76.05	南西
32		-	-	-	-	南西・北西
33		-	-	-	-	-
34		-	-	-	-	南
35		-	1.80	不定形	4.95	-
36		-	-	-	-	東
37		2.50	2.30	隅丸台形	5.85	南・西
38		2.60	1.30	隅丸台形	5.62	北・西・南
39		-	-	-	-	北
40		-	2.00	(隅丸台形)	-	北
41		3.30	2.40	(隅丸台形)	-	南東
42		-	1.10	-	-	-
43		-	0.90	-	-	北西
44		-	0.70	-	-	-
45		-	-	-	-	南
46		-	-	-	-	西
47		-	-	-	-	北・南東
48		-	1.20	-	-	北西
49		-	1.40	-	-	-
50		-	1.40	-	-	-
51		-	1.20	-	-	-
52		2.10	1.70	不定形	4.05	-
53		-	2.00	-	-	-
54		-	0.60	-	-	-
55		-	-	-	-	-
56		-	-	-	-	-
57		-	-	-	-	-
58		-	-	-	-	北西
59		-	-	-	-	-
60		-	-	-	-	-

水田計測一覧表 (V区 5面)

番号	被覆層	規模(m)		平面形	面積 m ²	水 口
		長辺	短辺			
61	As-C	-	-	-	-	-
62		-	-	-	-	-
63		-	3.50	-	-	-
64		-	4.10	-	-	-
65		-	-	-	-	-
66		2.50	1.80	不定形	1.58	東・南西
67		-	-	-	-	南東
68		2.00	-	不定形	10.35	西・南西
69		-	-	-	-	-
70		5.30	4.60	(台形)	-	南東・北西
71		2.40	5.30	台形	12.80	南西・南
72		-	-	-	-	北東・北西
73		-	-	-	-	-
74		-	6.70	(三角形)	-	北東
75		-	3.30	-	-	-
76		6.10	3.40	台形	21.37	-
77		-	3.60	台形	22.27	北
78		3.70	3.00	三角形	7.31	北・南・北東
79		-	2.40	-	-	南西・南東・北西
80		-	-	-	-	北
81		6.70	3.10	台形	27.30	北西
82		0.70	-	-	-	-
83		-	4.60	-	-	-
84		-	-	-	-	-
85		-	-	-	-	-
86		-	-	-	-	-
87		-	-	-	-	-
88		-	-	-	-	-
89		-	-	-	-	-
90		-	-	不定形	30.82	-

※区画番号は付図にのみ記載

※被覆層は一覧表中の先頭区画番号以下同様

遺物觀察表

1 面遺物観察表・1

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0005 図29 43	龍泉窯系 青磁碗	I区1面 2号溝 2S-8	破片	—	胎土 密 焼成 良好 色調 明緑灰色	外面片彫りによる、鎗蓮弁文。13世紀。
0006 図29 43	龍泉窯系 青磁碗	I区1面 2R-9	破片	—	胎土 密、白色鉍物粒少 焼成 普通 色調 明緑灰色	体部下位破片。外面鎗蓮弁文か。釉葉不透明で文様不明確。13世紀か。
0007 図29 43	龍泉窯系 青磁碗	I区1面 確認面	破片	—	胎土 密、黒色鉍物粒多 焼成 普通 色調 緑灰色	体部下位破片。内面片彫りによる蓮華文。12世紀後～13世紀前。
0008 図29 43	焼締陶器 甕	I区1面 2S-7	破片	—	胎土 密、黒色・白色鉍物粒 焼成 不良 色調 灰オリーブ色	知多古窯。外面自然釉。12～13世紀。
0009 図29 43	須恵器 甕	I区1面 2R-7	破片	—	胎土 密、白色・細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰褐色	頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。突帯上位に刺突痕4条が認められる。内面に自然釉付着。
0070 図30 43	須恵器 坏	II区1面 2号溝	破片	口径 (9.4)	胎土 密、白色・黒色鉍物粒 小礫多 焼成 還元、良好 色調 青灰色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。底部右回転ヘラ削り調整。
0071 図30 44	瓦 丸瓦	II区1面 2号溝	破片	厚さ 2.9	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、糸切り痕。端縁 ヨコケズリ。側縁 タテケズリ。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ。
0072 図30 44	陶器 乗燭	II区1面 3号溝	残存	器高 5.1 口径 7.6 底径 5.0	胎土 密、黒色鉍物粒少 焼成 良好 色調 灰黄色	益子・笠間窯か。焼締まる。細かい貫入のある灰釉を施す。内面下位と底部外面無釉。明治時代。
0073 図30 44	赤絵 水滴	II区1面 3号溝	完形	器高 5.8 口径 0.7 底径 3.9	胎土 密 焼成 良好 色調 白灰色	磁器。瀬戸・美濃系。大正～昭和前期。桃太郎が桃から生きた所を表す。彩色はすべて上絵。上部はコンプレッサーによるとおもわれるピンクの吹墨。葉は緑、葉脈と頭髪・目は黒。口は赤。目の周囲は橙。空気穴は左腕にある。
0074 図30 44	灰釉 鉄絵皿	II区1面 3号溝	完形	器高 2.5 口径 13.2 底径 8.7	胎土 密、黒色鉍物粒少 焼成 良好 色調 オリーブ灰色	益子・笠間系。鉄泥で簡略な文様。高台脇以下を除き灰釉。底部内面に目痕7ヶ所。明治時代。19世紀。
0075 図30 44	陶器 播鉢	II区1面 3号溝	破片	口径 (25.5)	胎土 粗、黒色鉍物粒少 焼成 不良 色調 暗赤褐色	瀬戸・美濃系。全面錆釉後外面拭い取る。底部外面回転糸切り。内面一部に布圧痕。使用により摩滅。18世紀中頃。
0076 図30 44	陶器 播鉢	II区1面 3号溝	破片	底径 (11.6)	胎土 粗、黒色・白色鉍物粒 焼成 不良 色調 赤褐色	瀬戸・美濃系。全面錆釉後外面拭い取る。底部外面回転糸切り。内面一部に布圧痕。使用により摩滅。17世紀～19世紀。
0080 図32 44	土師質 土器小皿 (カワラケ)	II区1面 5号溝	残存	器高 2.0 口径 8.8 底径 4.6	胎土 粗、黒色鉍物粒、雲母多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は外湾し立ち上がり、口縁部は外反して肥厚する。ロクロ整形。底部は高台状。右回転糸切り無調整。
0095 図34 47	瓦 棧瓦	II区1面 4号井戸	破片	厚さ 2.1	胎土 粗、砂粒多 焼成 いぶし、良好 色調 暗灰色	凹面・凸面・端面共に丁寧なナデ。端部幅の狭い面取り2回。
0094 図34 47	陶器 鉄釉三耳 付甕	II区1面 10号井戸	残存	口径 14.0	胎土 粗、黒色・白色鉍物粒 焼成 不良 色調 黒褐色	瀬戸・美濃系。口縁部内面以下無釉。口縁端部器表剥離。17世紀後半。
0098 図34 47	土師質 土器小皿 (カワラケ)	II区1面 確認面	残存	器高 1.8 口径 7.8 底径 3.8	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 にぶい橙色	体部は底位でわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。ロクロ整形。底部糸切り無調整。器面摩滅。
0099 図34 47	土師質 土器小皿 (カワラケ)	II区1面 確認面	完形	器高 2.0 口径 8.8 底径 4.2	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 にぶい黄橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。口縁部はそのまま肥厚する。ロクロ整形。器面摩滅。
0100 図34 47	土師質 土器小皿 (カワラケ)	II区1面 10号井戸	完形	器高 2.6 口径 9.8 底径 4.8	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 浅黄橙色	体部は低位で外湾、中位で内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。器面摩滅。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0101 図34 47	土師質 土器小皿 (カワラケ)	II区1面 確認面	ほぼ完形	器高 2.3 口径 9.4 底径 4.3	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 浅黄橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。ロクロ整形。底部右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0102 図34 48	土師質 土器小皿 (カワラケ)	II区1面 確認面	完形	器高 2.7 口径 10.1 底径 5.2	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は底位で外湾、中位で内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ロクロ整形。底部右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0103 図34 48	須恵器 壺	II区1面 確認面	ㄥ残存	底径(12.8)	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部は直線的に外向し立ち上がる。糸切り後ヘラ削り調整。鉄分付着。
0104 図34 48	須恵器 坏	II区1面 確認面	ㄥ残存	器高 3.5 口径(13.0) 底径(8.8)	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。底部はヘラ調整。
0105 図34 48	灰釉陶器 壺	II区1面 確認面	ㄥ残存	底径 8.6	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰白色	体部はゆるやかに内湾して立ち上がる。体部内面に緑・灰釉付着。高台はやや外傾し短い。右回転糸切り後ナデ調整。
0106 図34 48	灰釉陶器 甕	II区1面 確認面	破片	口径(18.6)	胎土 密、白色・黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	頸部内外面に強いロクロ整形痕を残す。口縁部内外面横ナデ。外面施釉。
0097 図34 47	緑釉陶器 壺	II区1面 確認面	破片	底径(4.2)	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 緑色	高台は外傾し断面三角形を呈す。底部内外面に緑釉を施す。
0115 図35 48	土師器 甕	II区1面 確認面	ㄥ残存	底径(12.2)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 明赤褐色	胴部下半部は直線的に外向する。外面体部縦方向の磨き。内面底部～胴部下半部横方向のヘラ削り。高台部欠落。器面摩滅。
0108 図35 48	瓦 平瓦	II区1面 2I-25	破片	厚さ 1.5	胎土 粗、砂粒、小石を含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目、模骨痕。凸面 縄叩き。側縁 ヨコケズリ。幅の狭い面取り2回。側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。
0109 図35 48	瓦 平瓦	II区1面 確認面	破片	厚さ 1.8	胎土 粗、黒色粒子多 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目。凸面 縄叩き。側面 タテケズリ。
0110 図35 48	瓦 平瓦	II区1面 確認面	破片	厚さ 1.6	胎土 やや粗、白色・赤色粒子多 焼成 酸化、良好 色調 褐色	凹面 布目、一部ナデ。凸面 格子叩き。
0111 図35 48	瓦 平瓦	II区1面 確認面	破片	厚さ 2.4	胎土 密、白色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、糸切り痕、模骨痕、粘土板合わせ目。端縁 ヨコケズリ。凸面 ヨコナデ、一部布目。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ、面取り1回。
0112 図35 48	瓦 平瓦	II区1面 確認面	破片	厚さ 2.3	胎土 やや粗、層状をなす、砂粒含む 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	凹面 布目。凸面 ナデ。側面 タテケズリ、面取り2回。端面ヨコケズリ、面取り2回。
0113 図35 48-78	瓦 丸瓦	II区1面 確認面	破片	厚さ 1.4	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 暗青灰色	凹面 布目、押印當か。凸面 タテナデ。側面 タテケズリ、面取り1回。
0114 図36 48	瓦 丸瓦	II区1面 確認面	破片	厚さ 1.6	胎土 やや粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 褐灰色	凹面 粗い布目。凸面 タテケズリの後ナデ。側面 タテケズリ。
0107 図36 48	有孔円盤	II区1面 確認面	完形	縦径 6.1 横径 5.7 孔径 1.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 還元 色調 赤褐灰色	底部外面付高台欠落。中央に円形の穿孔。器面摩滅。
0141 図38 50	須恵器 甕	III区1面 2号溝	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 褐灰色	頸部中央に波状文を施し、上下に断面三角形の突帯が2条ずつ付される。外面平行叩き。内面ロクロ整形。
0133 図38 50	須恵器 蓋	III区1面 4号溝	ㄥ残存	器高 4.2 口径(18.0) 摘径 4.0	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰白色	天井部はわずかに凹む。体部はわずかに内湾し開き、口縁部はやや外反し直に折れる。天井部右回転ヘラ削り。環状摘。
0136 図38 50	土師器 坏	III区1面 4号溝	ㄥ残存	器高 5.1 口径(12.8)	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面体部ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面口縁横ナデ。体部放射状の磨き。器面摩滅。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0192 図38 50	土師質 土器小皿 (カワラケ)	Ⅲ区1面 4号溝 Z-41	ほぼ完形	器高 2.3 口径 9.0 底径 4.6	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口唇部は平坦。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。
0135 図38 50・77	須恵器 坏	Ⅲ区1面 4号溝	1/2残存	器高 3.5 口径(13.6) 底径 5.7	胎土 密、砂粒、小礫多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。底部右回転糸切り無調整。内面に墨書、判読不能。鉄分付着。器面摩滅。
0193 図38 50	土師質 土器小皿 (カワラケ)	Ⅲ区1面 4号溝 Y-43	ほぼ完形	器高 2.6 口径 9.6 底径 5.6	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化 色調 におい橙色	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反し肥厚する。ロクロ整形。底部右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0194 図38 50	須恵器 埴	Ⅲ区1面 4号溝 2B-42	1/2残存	器高 4.6 口径 13.6 底径 6.8	胎土 粗、砂粒多 焼成 還元、不良 色調 褐灰色	体部はわずかに外湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り。付高台。器面摩滅。
0195 図38 50・77	須恵器 坏	Ⅲ区1面 4号溝 X-42	1/2残存	器高(5.4) 口径(14.6)	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し直立する。口唇部断面は三角形。底部外面にヘラ記号。
0196 図38 50	須恵器 蓋	Ⅲ区1面 4号溝 X-43	ほぼ完形	器高 2.2 口径 14.4 摘径 3.0	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	天井部は平坦。体部はわずかに内湾し開き、口縁部は直に折れる。ボタン状摘。外面自然釉付着。
0140 図38 50	瓦 丸瓦	Ⅲ区1面 4号溝	破片	厚さ 1.1	胎土 密、砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目一部、糸切り痕。側縁 タテケズリ。凸面 タテケズリの後ヨコナデ。側縁 タテケズリ。側面 タテケズリ。端縁 ヨコケズリ。
0197 図38 50・77	瓦 平瓦	Ⅲ区1面 4号溝	破片	厚さ 2.2	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目。凸面 タテナデ、押印當。側面 タテケズリ、面取り1回。
0134 図39 51	須恵器 埴	Ⅲ区1面 5号溝	1/2残存	器高 4.1 口径(13.2) 底径 6.5	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 還元、普通 色調 褐灰色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はそのまま外向し肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0137 図39 51	須恵器 坏	Ⅲ区1面 5号溝	1/2残存	器高 3.1 口径(12.8) 底径(8.2)	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 青灰色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。回転ヘラ削り調整。高台剝離。
0138 図39 51	土師質 土器小皿 (カワラケ)	Ⅲ区1面 5号溝	1/2残存	器高 2.3 口径 10.0 底径 4.8	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は外湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。
0139 図39 51	瓦 平瓦	Ⅲ区1面 5号溝	破片	厚さ 1.8	胎土 密、砂粒含む 焼成 還元、焼き締め 色調 暗灰色	凹面 布目、模骨痕。凸面 縄叩き。側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。
0199 図40 51	軟質陶器 内耳鍋	Ⅲ区1面 Z-43	破片	器高 4.9 口径(36.0) 底径(31.0)	胎土 細砂 焼成 良好 色調 灰褐色	口縁直線状に外傾し底部は平坦。ロクロ使用外面はナデ。
0200 図40 51	陶器 小埴	Ⅲ区1面 Y-44	完形	器高 3.1 口径 5.7 底径 2.5	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 良好 色調 灰色	瀬戸・美濃系。灰釉。外面下位以下無釉。内面粗い貫入。18～19世紀。
0201 図40 51	陶器 乗燭	Ⅲ区1面 Y-44	ほぼ完形	器高 6.5 口径 6.5 底径 6.3 最大径 10.4	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 良好 色調 におい黄褐色	0072と同様な胎土と釉調。底部と口縁端部のみ無釉。益子・笠間系。明治時代。
0198 図40 51	瓦 丸瓦	Ⅲ区1面 Z-45	破片	厚さ 1.5	胎土 やや粗、白色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、粘土紐接合痕。側縁 分割界線、隅部斜めケズリ。凸面 ヨコナデ。側面 タテケズリ、面取り1回。端部 ヨコケズリ。
0410 図42 52	土師器 坏	V区1面 4号溝	1/2残存	器高 3.8 口径(12.8)	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化 色調 におい橙色	体部は内湾し立ち上がる。直立口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。
0411 図42 52	土師質 土器小皿 (カワラケ)	V区1面 4号溝	1/2残存	器高 1.3 口径(8.0) 底径(6.2)	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。ロクロ整形。糸切り無調整。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0412 図42 52	土師質 土器小皿 (カワラケ)	V区1面 4号溝	ほぼ完形	器高 1.6 口径 8.4 底径 5.8	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は外湾し立ち上がり、口縁部は肥厚する。底部 ロクロ整形後ナデ消し調整。
0414 図42 52	須恵器 壺	V区1面 4号溝	1/2残存	器高 3.9 口径(12.6) 底径(6.4)	胎土 密、白色鈳物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はやや内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外 向しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。
0413 図42 52	土師質 土器小皿 (カワラケ)	V区1面 4号溝	1/2残存	器高 2.0 口径 9.2 底径 6.0	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 濃い黄橙色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部は肥厚す る。ロクロ整形後ナデ消し調整。
0415 図42 52	須恵器 皿	V区1面 4号溝	1/2残存	器高 3.5 口径 15.0 底径 6.4	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 濃い橙色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。 糸切り後付高台。スス付着。器面摩滅。
0416 図42 53	須恵器 蓋	V区1面 4号溝	1/2残存	器高 2.8 口径 15.3 摘径 4.5	胎土 密、白色・黒色鈳物粒 多 焼成 還元、良好 色調 灰色	天井部はわずかに凹む。体部はやや外湾し開き、口 縁部は直に折れる。天井部右回転ヘラ削り。環状摘。
0423 図42 53	龍泉窯系 青磁	V区1面 4号溝	破片	—	胎土 密、黒色鈳物粒少 焼成 良好 色調 明緑灰色	内面片彫りによる蓮華文。12世紀後～13世紀前。
0426 図42 52	白磁 碗	V区1面 4号溝	破片	—	胎土 ガラス質 焼成 不良 色調 青白色	体部内面圏線。11～12世紀。
0424 図42 53	龍泉窯系 青磁碗	V区1面 4号溝	破片	口径(12.0)	胎土 密、白色鈳物粒少 焼成 良好 色調 明緑灰色	内面縦位白堆。口縁に沿って片彫り沈線。口縁部輪 花。時期不詳(中世)。
0425 図42 52	龍泉窯系 青磁碗	V区1面 4号溝	破片	口径(10.0)	胎土 密、黒色鈳物粒少 焼成 良好 色調 灰オリーブ色	口縁部内面櫛状工具による施文。15～16世紀。
0422 図42 52	緑釉陶器 壺	V区1面 4号溝	破片	底径(5.0)	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 緑黄色	腰部はやや内湾する。高台は直立し断面台形を呈す。 底部ナデ調整。内外面に施釉。
0417 図42 53	須恵器 鉢	V区1面 4号溝	破片	口径(31.0)	胎土 密、白色鈳物粒多 焼成 還元 色調 明黄褐色	口縁部はわずかに外湾し肥厚する。内外面ロクロ整 形。外面鉄分付着。
0418 図43 53	焼締陶器 甕	V区1面 4号溝	破片	口径(48.0)	胎土 粗、白色粒子、白色鈳 物粒 焼成 還元 色調 灰色	知多窯。口縁部は外反しやや下方に下がり、端部を 上方に立ち上げる。口縁部内面・肩部外面自然釉。 13世紀後半0420・0421と同一個体の可能性高い。
0419 図43 53	焼締陶器 甕	V区1面 4号溝	破片	口径(47.0)	胎土 やや緻密 焼成 還元 色調 灰色	知多窯。口縁部外反する。端部上方に立ち上がる。 口縁部の外反は知多窯にしては短い。肩部外面自然 釉。13世紀後半。
0420 図43 53	焼締陶器 甕	V区1面 4号溝	破片	口径(32.0)	胎土 粗、白色粒子、白色鈳 物粒 焼成 還元 色調 灰赤色	知多窯。口縁部外反してやや下方に下がる。端部は 上方に立ち上げ、下端もわずかに下がる。13世紀後 半。0418・0421と同一個体の可能性高い。
0421 図43 53	焼締陶器 甕	V区1面 4号溝	破片	口径(30.0)	胎土 粗、白色粒子、白色鈳 物粒 焼成 還元 色調 灰赤色	知多窯。口縁部外反してやや下方に下がる。端部を 上方に立ち上げる。下端もやや下方に下がる。0418・ 0420と同一個体の可能性高い。
0430 図43 53	紡錘車	V区1面 4号溝	完形	縦径 7.3 横径 6.6 厚さ 0.7 孔径 0.7	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 淡橙色	土師器底部転用。内外面縁面研磨。
0427 図43 53	瓦 平瓦	V区1面 4号溝	破片	厚さ 1.8	胎土 粗、白色粒子、白色小 石多 焼成 還元、良好 色調 暗青灰色	凹面 布目、模骨痕。凸面 縄叩き。側面 タテズリ。
0429 図43 53	瓦 軒瓦 (鎧瓦)	V区1面 4号溝	破片	厚さ 1.2	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	瓦当裏面、丸瓦部凹面から一連の無紋り布目。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0428 図44 53	瓦 丸瓦	V区1面 4号溝	破片	厚さ 2.0	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、粘土紐接合痕。凸面 ナデ。側面 タテケズリ、面取り2回。端面 ヨコケズリ、面取り2回。
0400 図44 53	土師器 坏	V区1面 5号溝	ほぼ完形	器高 7.7 口径 12.2 底径 6.6	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。外傾口縁、外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁～底部横ナデ。
0401 図44 53	須恵器 埴	V区1面 5号溝	1/2残存	器高 4.1 口径(13.4) 底径(5.8)	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部はゆるやかに外湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。糸切り無調整。鉄分付着。
0402 図44 53	灰釉陶器 埴	V区1面 5号溝	1/2残存	底径 7.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 還元、普通 色調 褐灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。高台は内湾ぎみに外傾する。右回転糸切り後ナデ調整。内外面施釉。
0403 図44 53	緑釉陶器 埴	V区1面 5号溝	破片	口径(13.6)	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 緑黄色	体部上半部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。内外面施釉。
0404 図45 54	瓦 丸瓦	V区1面 5号溝	破片	厚さ 1.9	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、普通 色調 明褐灰色	凹面 布目。凸面 タテケズリの後ナデ。側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。
0405 図45 54・77	瓦 平瓦	V区1面 5号溝	破片	厚さ 2.4	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、普通 色調 灰白色	凹面 布目。端縁 タテナデ。凹面 ヘラ書き「大」か。凸面 縄叩き。側面・凸面から一連の布目、タテナデ。端面は横ケズリ。
0456 図46 54	土師器 坏	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 4.9 口径 11.8	胎土 密、粗砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 橙色	体部は内湾し立ち上がる。外斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面横ナデ。
0457 図46 54	土師器 埴	V区1面 6号溝	1/2残存	器高(3.8) 口径(12.0) 底径(15.0)	胎土 やや粗、白色鉱物粒 焼成 普通 色調 褐色	体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに内湾し肥厚する。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。
0458 図46 54	須恵器 埴	V区1面 6号溝	ほぼ完形	器高 4.0 口径 12.0 底径 6.4	胎土 粗、砂粒多 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外反し肥厚する。ヘラ削り。ナデ調整。付高台。器面摩滅。
0459 図46 54	須恵器 埴	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 3.6 口径(14.0) 底径(6.2)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はゆるやかに外湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。付高台。器面摩滅。スス付着。
0460 図46 54	須恵器 皿	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 3.0 口径 14.0 底径 6.5	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は直線的に外反し立ち上がり、口縁部はわずかに外湾し肥厚する。右回転糸切り無調整。付高台。鉄分付着。
0461 図46 55	須恵器 皿	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 1.7 口径(14.0) 底径(7.6)	胎土 密、粗砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は直線的に外向し立ち上がり、中位で強く外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。鉄分付着。
0462 図46 55	須恵器 蓋	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 3.2 口径 16.0 摘径 6.6	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	天井部は平坦。体部はわずかに内湾し開き、口縁部は外反する。天井部右回転ヘラ削り。環状摘。鉄分付着。
0480 図46 55	須恵器 埴	V区1面 6号溝	1/2残存	底径 7.6	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。右回転糸切り無調整。付高台。高台欠損。器面摩滅。内面黒色処理。放射状ヘラ磨き。
0481 図46 55	須恵器 埴	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 4.0 口径 12.0 底径(7.0)	胎土 粗、砂粒、小礫多 焼成 還元 色調 黒褐色	体部はゆるやかに外湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。付高台。
0482 図46 55	須恵器 埴	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 5.1 口径 14.0 底径 6.5	胎土 粗、砂粒、小礫多 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。付高台。器面摩滅。鉄分付着。
0483 図46 55	灰釉陶器 埴	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 5.7 口径(16.6) 底径(8.4)	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 緑灰色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外湾し肥厚する。高台やや内湾ぎみに外傾する。底部ナデ調整。内外面施釉。
0485 図46 55	須恵器 皿	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 1.9 口径(13.5) 底径(7.0)	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は外反し立ち上がり、口縁部はわずかに内反する。右回転糸切り無調整。鉄分付着。
0486 図46 55	須恵器 皿	V区1面 6号溝	1/2残存	器高 2.8 口径 13.4 底径 7.6	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は外反し立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。右回転糸切り無調整。付高台。鉄分付着。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0487 図46 77	須恵器 皿	V区1面 6号溝	破片	底径(11.0)	胎土 粗、白色・黒色鉱物粒 焼成 普通 色調 灰色	底部右回転無調整。鉄分付着。底部外面に墨書「□厨」。
0465 図46 55	土釜	V区1面 6号溝	1/4残存	口径(12.0)	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 にぶい橙色	口縁部短く外側へ弱く屈曲する。口縁部横ナデ。胴部内外面ナデ。
0484 図46 55	須恵器 甕	V区1面 6号溝	破片	—	胎土 粗、白色粒子 焼成 良好 色調 灰色	口縁部外傾する。ロクロ使用。外面口縁部、波状文。頸部にシャープな稜をもつ。胴部叩き。内面胴部青海波文状。
0463 図47 55	焼締陶器 甕	V区1面 6号溝	破片	口径(48.0)	胎土 粗 焼成 還元 色調 赤灰色	知多窯。口縁部短く外反し、端部「N」字状となる。14世紀前半。口縁部の外反は知多窯にしては短い。胎土は知多窯とみられる。
0464 図47 55	軟質陶器	V区1面 6号溝	破片	口径(30.0)	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 黒褐色	口縁部弱く内湾して外傾する。端部平坦面を持つ。
0466 図47 55	土釜	V区1面 6号溝	破片	口径(38.0)	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 灰色	ロクロ整形。口縁部外面に段を持つ。
0468 図47 55	瓦 平瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.5	胎土 密、細砂粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 ヨコナデ。凸面 粗いナデの後縄叩き。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ。
0469 図47 56	瓦 平瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.8	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 細かい布目、模骨痕。側縁 タテケズリ。凸面 ヨコナデ。側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。隅部を斜めに削り落としている。
0470 図47 55	瓦 丸瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.4	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目。凸面 ヨコナデ。端面 ヨコケズリ。
0471 図47 56	瓦 丸瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.5	胎土 やや粗、白色粒子多 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 ナデ。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ、面取り1回。
0472 図48 56	瓦 平瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 2.2	胎土 粗、白色粒子、白色小石含む 焼成 還元、普通 色調 暗灰色	凹面 布目。凸面 タテナデ。側面 タテケズリ、面取り1回。
0489 図48 56・78	瓦 丸瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.7	胎土 やや粗、層状をなす、砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 にぶい橙色	凹面 細かい布目。ヘラ書き、判読不能。凸面 縄叩きの後タテナデ。側面 タテケズリ、面取り2回。
0490 図48 56	瓦 丸瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.7	胎土 やや粗、白色・黒色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目。凸面 タテナデの後一部ヨコナデ。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ。
0492 図48 56	瓦 軒瓦 (鎧瓦)	V区1面 6号溝	破片	厚さ 2.2	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、普通 色調 黄灰色	国分寺C003と同範。弁間文5ヶ所を追刻する。瓦当裏面は丸瓦部凹面から一連の無絞りの布目。一本作りによる。
0491 図49 57	瓦 丸瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 2.4	胎土 やや粗、細砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 にぶい黄褐色	凹面 布目。凸面 タテナデ、分割破面。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ、面取り1回。
0493 図49 57	瓦 軒平瓦	V区1面 6号溝	破片	—	胎土 粗、砂粒含む 焼成 酸化、普通 色調 にぶい橙色	凹面 布目。端縁 ヨコケズリ。凸面 ナデ。端縁 ヨコケズリ。国分寺P002B(b)と同範。
0494 図49 57・77	瓦 平瓦	V区1面 6号溝	破片	厚さ 1.8	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目。凸面 ヨコナデの後一部タテケズリ。ヘラ書き「生」。
0467 図50 57	土製品 円盤 (転用)	V区1面 6号溝	完形	径 4.0 厚 0.5	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 黒褐色	土師器破片、縁磨き。用途不明。
0488 図50 57	土製品 円盤 (転用)	V区1面 6号溝	完形	径 7.0 厚 1.0	胎土 小石 焼成 良好 色調 にぶい橙色	外面ヘラケズリ。内面ナデ。土師器破片。用途不明。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0393 図51 58	土師質 土器小皿 (カワラケ)	V区1面 3号井戸	完形	器高 1.7 口径 8.0 底径 4.5	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は直線的に外傾し、口縁部は外向し肥厚する。 底部右回転糸切り無調整。
0394 図51 58	灰釉陶器 壺	V区1面 4号井戸	1/2残存	底径 7.5	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 灰色	腰部はわずかに内湾し立ち上がる。高台は内湾ぎみに外傾する。底部右回転糸切り後ナデ調整。内外面施釉。
0396 図51 58	土錘	V区1面 確認面	完形	長 5.7 幅 1.1 厚 1.0	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 ぶい橙色	外面ナデ、摩滅。

2面 1号住居遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0267 図59 60	瓦 平瓦	IV区2面 1号住	破片	厚さ 2.1	胎土 やや粗、砂粒、赤色粒 子含む 焼成 酸化、良好 色調 ぶい黄褐色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 縄叩き。側縁 タテナデ。 側面 タテナデ、一部布目残る。端面 ヨコナデ。
0266 図59 60	土師器 片口土釜	IV区2面 1号住	1/2残存	器高 8.2 口径 19.6	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 黒褐色	胴部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。口縁部注口は下傾する。外面体部縦横方向のヘラ削り。口縁部横ナデ。内面体部横位のヘラ削り。口縁部横ナデ。器面摩滅。

2面遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0018 図63 59	須恵器 坏	I区2面 11号溝 2R-10	1/2残存	器高 4.5 口径(14.0) 底径(7.8)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 ぶい褐色	底部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向し肥厚する。回転ヘラ削り調整。器面摩滅。
0020 図63 59	灰釉陶器 壺	I区2面 11号溝 2S-7	破片	底径(8.0)	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 白灰色	腰部はゆるやかに内湾し立ち上がる。高台はやや内湾ぎみに外傾する。底部ナデ調整。内外面に施釉。
0028 図63 59	須恵器 短頸壺	I区2面 11号溝 2S-8	1/2残存	器高 6.8 口径(7.8) 底径 3.4	胎土 密、粗砂粒多、小礫少 含む 焼成 還元、良好 色調 浅黄橙色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、上部でくの字状に内反する。内傾口縁。外面体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面口縁横ナデ。ロクロ整形。内面鉄分付着。
0022 図63 59	羽釜	I区2面 11号溝 2S-7	破片	口径(24.6) 鏝(27.0)	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 ぶい黄橙色	口縁部直立気味に立ち上がる。鏝は三角形で外側へ水平に開く。ロクロ整形。
0024 図63 59	土釜	I区2面 11号溝 2S-8	破片	口径(25.0)	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 黒褐色	口縁部短く外傾する。外面口縁部横ナデ。胴部ナデ。内面ナデ。
0026 図63 59	須恵器 壺	I区2面 11号溝 2S-7	1/2残存	—	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 還元、不良 色調 浅黄橙色	胴部は内湾ぎみに立ち上がる。外面疑似格子叩き。内面上半部ロクロによるナデ整形。下半部青海波文スリけし。
0027 図63 59	須恵器 壺	I区2面 11号溝 2R-10	破片	口径(26.6)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 還元、不良 色調 灰黄色	口縁部は外反し立ち上がる。中央に断面半円形の突帯を施し、その上下に一条ずつ櫛描き波状文が付される。口唇部はわずかに内湾し肥厚する。内面ロクロ整形。
0029 図63 59	紡錘車	I区2面 11号溝 2R-10	ほぼ完形	縦径 5.5 横径 5.8 孔径 0.7 厚さ 1.2	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 褐色	土師器底部転用紡錘車。
0014 図64 59	土師器 坏	I区2面 12号溝 2T-08	1/2残存	器高 5.9 口径 12.4	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は内湾し立ち上がる。直立口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。
0015 図64 59	土師質 土器小皿 (カワラケ)	I区2面 12号溝 2T-7	完形	器高 2.2 口径 9.0 底径 5.0	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。ロクロ整形。底部糸切り無調整。器面摩滅。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0016 図64 59	土師質 土器小皿 (カワラケ)	I区2面 12号溝 2U-8	1/2残存	器高 2.3 口径 10.0 底径 6.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0017 図64 59	須恵器 坏	I区2面 12号溝 2T-9	1/2残存	器高 5.3 口径(14.0) 底径 (7.4)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 橙色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外反し肥厚する。左回転糸切り無調整。器面摩滅。鉄分付着。
0021 図64 59	灰釉陶器 埴	I区2面 12号溝 2T-8	破片	底径 7.5	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	高台は内湾ぎみに外傾し短い。底部内面に朱墨が認められる。右回転糸切り後ナデ調整。
0025 図64 59	土師器 甕	I区2面 12号溝 2T-8	1/2残存	器高 22.9 口径(18.8)	胎土 小石 焼成 良好 色調 ぶい橙色	口縁部くの字に外反する。外面口縁部横ナデ。胴部磨き。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。
0031 図64 59	瓦 平瓦	I区2面 12号溝 2T-8	破片	厚さ 2.0	胎土 密、砂粒含む 焼成 酸化、良好 色調 浅黄橙色	凹面 布目、糸切り痕、模骨痕。凸面 ヨコナデ。側面 タテケズリ。
0030 図64 59	瓦 平瓦	I区2面 12号溝 2T-8	破片	厚さ 2.0	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目、一部タテナデ。凸面 縄叩き。側縁 タテナデ。側面 無調整、一部布目。
0019 図65 60	須恵器 坏	I区2面 確認面	1/2残存	器高 4.4 口径(14.8) 底径 6.8	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 ぶい黄橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。口縁部内面スス付着。器面摩滅。
0023 図65 60	土釜	I区2面 確認面	破片	口径(22.0)	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 橙褐色	口縁部くの字状に屈曲する。外面口縁部横ナデ。胴上部ヘラナデ。内面ナデ。
0032 図65 60	瓦 平瓦	I区2面 確認面	破片	厚さ 1.3	胎土 やや粗、砂粒、小石含む 焼成 還元、良好 色調 青灰色	凹面 布目、粘土板合わせ目。端縁 ヨコケズリ。凸面 ヨコナデ。側面 タテケズリ。面取り1回。
0268 図65 60	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 1号溝	1/2残存	器高 2.1 口径 8.8 底径 6.0	胎土 粗、細砂粒・小礫多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい橙色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚する。ロクロ整形後、底部右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0269 図65 60	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 1号溝	1/2残存	器高 2.5 口径(10.0) 底径 5.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0272 図65 60	須恵器 坏	IV区2面 1号溝	1/2残存	器高 3.2 口径(13.0) 底径 7.6	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。右回転糸切り無調整。
0270 図65 60	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 1号溝	ほぼ完形	器高 3.2 口径 8.7 底径 5.4	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は外湾し立ち上がり、口縁部はわずかに内反し肥厚する。付高台は外反し開きヘラ削り調整。
0271 図65 60	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 1号溝	1/2残存	器高 3.6 口径 9.8 底径 6.5	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し肥厚する。付高台は外反し開き、底部内面ヘラ削り調整。器面摩滅。器内面スス付着。
0273 図65 60	灰釉陶器 埴	IV区2面 1号溝	1/2残存	底径 (9.4)	胎土 密、白色・黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰白色	腰部はゆるやかに内湾し立ち上がる。高台は外傾し長く、底部との接続部にナデ調整。内面に施釉。
0274 図65 60	須恵器 長頸壺	IV区2面 1号溝	1/2残存	口径 6.2	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	頸部は直立し立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形。胴部との接合痕あり。
0275 図65 60	紡錘車	IV区2面 1号溝	完形	縦径 5.3 横径 5.6	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 黒褐色	須恵器底部転用、付高台。
0276 図66 60・79	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 M-59	1/2残存	底径 (6.0)	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。器面摩滅。内面墨書。
0277 図66 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 確認面	完形	器高 2.7 口径 8.7 底径 5.4	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 酸化、良好 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ロクロ整形。底部糸切り無調整。器面摩滅。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0278 図66 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 2.4 口径 9.6 底径 5.3	胎土 粗、黒色鈳物粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい橙色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ログロ整形。底部右回転糸切り無調整。スス付着。器面摩滅。
0279 図66 61	土師器 坏	IV区2面 確認面	1/2残存	口径(10.6)	胎土 密、白色鈳物粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。外傾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面横ナデ。
0280 図66 61	土師器 坏	IV区2面 L-58	1/2残存	器高 4.0 口径(12.5)	胎土 密、砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部は肥厚する。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面横ナデ。器面摩滅。
0281 図66 61	土師器 坏	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 3.7 口径(13.0)	胎土 密、黒色鈳物粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。外傾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面横ナデ。
0282 図66 61	土師器 坏	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 4.1 口径 13.2	胎土 密、黒色鈳物粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。直立口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面横ナデ。
0283 図66 61	土師器 坏	IV区2面 M-58	1/2残存	口径(12.0) 底径 (8.4)	胎土 粗、鈳物粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。直立口縁。外面口縁横ナデ。体部縦・横方向のへラ削り。内面横ナデ。器面摩滅。
0284 図66 61	須恵器 坏	IV区2面 K-59	1/2残存	器高 3.5 口径(12.0) 底径 7.6	胎土 密、黒色鈳物粒少 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。回転へラ削り調整。
0285 図66 61	須恵器 坏	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 3.7 口径 12.0 底径 7.0	胎土 密、白色鈳物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し、口縁部はそのまま外向する。底部は右回転糸切り無調整。
0286 図66 61	須恵器 坏	IV区2面 L-59	1/2残存	器高 3.3 口径(13.2) 底径 7.2	胎土 密、鈳物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はやや外湾して立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。鉄分付着。
0287 図66 61	須恵器 坏	IV区2面 M-58	1/2残存	器高 3.6 口径(13.0) 底径 7.2	胎土 密、砂粒多 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部はやや内湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0288 図66 61	須恵器 壺	IV区2面 L-57	1/2残存	器高 4.9 口径(11.2) 底径 5.4	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 浅黄橙色	体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0289 図66 61	須恵器 坏	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 3.9 口径(11.8) 底径 5.0	胎土 粗、砂粒多 焼成 還元、普通 色調 におい橙色	体部はゆるやかに外湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。右回転糸切り無調整。スス付着。器面摩滅。
0290 図66 61	須恵器 坏	IV区2面 M-59	1/2残存	器高 3.3 口径 10.6 底径 5.6	胎土 粗、砂粒多、小礫含む 焼成 還元、普通 色調 におい橙色	体部はゆるやかに外湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。回転糸切り無調整。スス付着。器面摩滅。
0294 図66 61	須恵器 高台壺	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 4.8 口径(13.4) 底径 6.8	胎土 粗、白色・黒色鈳物粒多、雲母 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部はやや外湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0292 図66 61	須恵器 高台壺	IV区2面 M-58	1/2残存	器高 (4.3) 口径(11.0) 底径 6.2	胎土 粗、白色・黒色鈳物粒多 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部は下位よりやや内湾し立ち上がり、口縁部は外反して肥厚する。右回転糸切り。付高台。高台欠落。器面摩滅。
0293 図66 61	土師器 高台壺	IV区2面 M-58	ほぼ完形	器高 (5.0) 口径 13.6 底径 (6.4)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 明褐色	体部はやや内湾し立ち上がり、口縁部は大きく外反する。へラ削り後付高台。器面摩滅。
0291 図66 61	須恵器 壺	IV区2面 M-58	1/2残存	器高 (3.9) 底径 4.2	胎土 粗、鈳物粒多 焼成 酸化、普通 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。内面体部横位の磨き。底部放射状の磨き、糸切り後付高台。
0295 図66 61	灰釉陶器 壺	IV区2面 L-59	1/2残存	器高 5.2 口径(16.0) 底径 8.0	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外傾し、断面略三角形を呈す。底部右回転糸切り後ナデ調整。内外面施釉。
0296 図66 61	須恵器 皿	IV区2面 L-59	1/2残存	器高 1.7 口径(14.2) 底径 8.1	胎土 密、黒色・白色鈳物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は大きく外反し、口縁部は平坦。右回転糸切り無調整。鉄分付着。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0313 図67 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 1.9 口径 8.8 底径 5.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 におい黄橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0314 図67 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 確認面	ほぼ完形	器高 2.5 口径 9.6 底径 5.2	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい橙色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。ロクロ整形。底部右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0315 図67 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 2.2 口径(10.3) 底径(5.8)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい黄橙色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口唇部は平坦。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0318 図67 61	須恵器 皿	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 2.3 口径(10.3) 底径(5.7)	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 還元、普通 色調 におい黄橙色	体部は外反し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。底部左回転糸切り無調整。付高台。
0316 図67 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 T-48	ほぼ完形	器高 2.5 口径 9.8 底径 5.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 明褐色	体部は中位に稜をもち、直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。ロクロ整形。底部高台状。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0317 図67 61	土師質 土器小皿 (カワラケ)	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 2.6 口径(11.0) 底径(5.3)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 浅黄橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。ロクロ整形。底部高台状。ナデ消し調整。器面摩滅。
0319 図67 61	土師器 坏	IV区2面 T-48	1/2残存	器高 3.2 口径(13.8) 底径 6.5	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 橙色	体部は内湾し立ち上がる。外傾口縁。外面口縁横ナデ。内面横ナデ。
0320 図67 61	須恵器 坏	IV区2面 L-58	1/2残存	器高 4.3 口径(11.0) 底径(7.0)	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰白色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外向する。底部糸切り後ナデ消し。
0321 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 3.5 口径(14.0) 底径(9.0)	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。ヘラ削り調整。
0322 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 L-59	1/2残存	器高 3.2 口径(13.4) 底径(8.4)	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はわずかに外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。内面鉄分付着。
0323 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 M-60	1/2残存	器高 4.0 口径(14.2) 底径(8.4)	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。鉄分付着。
0324 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 4.0 口径(13.4) 底径 7.5	胎土 密、砂粒多 焼成 還元、良好 色調 褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。鉄分付着。
0325 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 L-60	1/2残存	器高 3.5 口径(12.7) 底径(7.3)	胎土 密、白色・黒色鉱物粒 小礫少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0326 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 確認面	ほぼ完形	器高 4.4 口径 15.2 底径 6.8	胎土 密、砂粒多、小礫少 焼成 酸化、普通 色調 灰褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。スス付着。
0328 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 4.8 口径(14.6) 底径(5.3)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はやや内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。
0327 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 4.5 口径(12.3) 底径(4.8)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい橙色	体部は直線的に外向し、口縁部はわずかに内湾し肥厚する。底部はヘラ削り後ナデ調整。器面摩滅。
0331 図67 62	須恵器 塊	IV区2面 K-58	1/2残存	器高 4.7 口径(14.0) 底径 6.6	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。付高台。器面摩滅。
0329 図67 62	須恵器 坏	IV区2面 L-58	1/2残存	器高 4.0 口径 13.0 底径 5.9	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 におい橙色	体部はわずかに外湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0330 図67 62	須恵器 塊	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 4.7 口径(13.9) 底径(6.5)	胎土 粗、砂粒、小礫多 焼成 還元、普通 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。付高台。器面摩滅。鉄分付着。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0332 図68 62	須恵器 埴	IV区2面 L-59	1/2残存	器高 5.0 口径 13.0 底径 6.4	胎土 粗、細砂粒、小礫多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外向する。右回転糸切り無調整。付高台。
0333 図68 62	須恵器 埴	IV区2面 確認面	1/2残存	底径 7.2	胎土 密、砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。右回転糸切り無調整。付高台。
0334 図68 62	須恵器 埴	IV区2面 確認面	1/2残存	底径 9.0	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。高台は高く外反し開く。糸切り後ナデ調整。
0335 図68 62	須恵器 埴	IV区2面 確認面	1/2残存	底径 5.6	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 黒色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。器内外面に漆付着。ヘラ削り。付高台。
0336 図68 62	須恵器 埴	IV区2面 確認面	1/2残存	底径 (6.8)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 還元、普通 色調 橙黄色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。右回転糸切り無調整。付高台。内面黒色処理。斜方向ヘラ磨き調整。
0337 図68 62	須恵器 皿	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 2.6 口径(12.8) 底径 7.8	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は外反し立ち上がり、口縁部はわずかに外向し肥厚する。鉄分付着。
0349 図68 62	土師器 坏	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 4.3 口径 12.3	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 にぶい橙色	体部は内湾し立ち上がる。内傾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面横ナデ。器面摩滅。
0343 図68 62	須恵器 高台付盤	IV区2面 L-58	1/2残存	底径 12.0	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	裾部は外反し開き、端部は中央に段を持つ。
0344 図68 62	須恵器 短頸壺	IV区2面 L-59	1/2残存	器高 (6.7) 口径(10.6) 最大径 (13.7)	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は内湾し立ち上がる。中位に一条の波状文を付し、上下に一本ずつ沈線が走る。内傾口縁。外面体部ヘラ削り。口縁部ロクロ整形。内面口縁部・体部ロクロ整形。
0345 図68 62	古代緑釉 陶器	IV区2面 M-57	1/2残存	底径 6.0	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 灰黄色	底部ナデ調整。内外面に施釉。袋物か。
0346 図68 62	灰釉陶器 皿	IV区2面 L-58	1/2残存	器高 2.6 口径(13.0) 底径 7.0	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部は外向する。高台は外湾ぎみに外向する。右回転糸切り後ナデ調整。内外面施釉。
0347 図68 62	灰釉陶器 埴	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 5.1 口径 15.6 底径 6.0	胎土 緻密 焼成 良好 色調 灰色	底部回転糸切り。付高台、内面三ヶ月ややくずれる。口縁部ゆるやかに外反し端部弱く外面に肥厚する。施釉つけかけ。
0348 図68 62	灰釉陶器 壺	IV区2面 確認面	1/2残存	底径 (6.2) 最大径 (8.7)	胎土 密、細砂粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は強く内湾し頸部へと続く。体部外面上半部に施釉。
0297 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 M-59	1/2残存	器高 2.6 口径 9.6 摘径 1.4	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し開き、口縁部はやや外反し折れる。宝珠状摘。器内面自然釉付着。天井部右回転ヘラ削り調整。
0298 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 M-59	1/2残存	口径(18.0)	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰白色	体部は直線的に外向し開き、口縁部はわずかに外反し折れる。体部右回転ヘラ削り調整。鉄分付着。
0299 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 3.5 口径 13.2 摘径 3.2	胎土 密、白色・黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰白色	天井部はわずかに凹む。体部はやや内湾し開き、口縁部は内反し折れる。環状摘。左回転ヘラ削り調整。鉄分付着。
0338 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 3.6 口径(15.0) 摘径 2.7	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 青灰色	天井部はわずかに凹む。体部はわずかに外湾し開き、口縁部は内傾し折れる。天井部右回転ヘラ削り調整。ボタン状摘。鉄分付着。
0339 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 2.1 口径 12.7 摘径 3.1	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	天井部はわずかに凹む。体部はわずかに内湾し開き、口縁部は短く直に折れる。天井部右回転ヘラ削り調整。鉄分付着。ボタン状摘。
0340 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 M-57	1/2残存	器高 3.2 口径(15.0) 摘径 4.0	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	天井部は平坦。体部はわずかに内湾し開き、口縁部はやや外反し外傾する。天井部右回転ヘラ削り調整。環状摘。鉄分付着。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0341 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 L-58	1/2残存	器高 3.1 口径(16.0) 摘径 4.4	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 青灰色	天井部は平坦。体部はわずかに内湾し開き、口縁部はやや外反し直に折れる。天井部～体部右回転ヘラ削り調整。環状摘。鉄分付着。
0342 図68 63	須恵器 蓋	IV区2面 確認面	1/2残存	器高 3.2 口径 18.2 摘径 4.6	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰白色	体部はわずかに内湾し開き、口縁部はやや外反し端部は直に折れる。天井部右回転ヘラ削り調整。環状摘。鉄分付着。
0350 図68 63	縄文土器 甕	IV区2面 確認面	1/2残存	口径(12.6)	胎土 細砂粒 焼成 やや軟質 色調 にぶい褐色	肩にわずかに張りを有し、口縁部は内傾気味に直立する。口縁部上端と頸部に一条の沈線を巡らせ胴部は全面LRを縦位置に施文する。
0352 図68 63	須恵器 羽釜	IV区2面 確認面	破片	口径(22.0) 鏝 (26.4)	胎土 砂粒、長石 焼成 良好 色調 にぶい橙色	口縁部内傾し端部に平坦面をもち肥厚する。鏝断面三角形。やや上を向く。下面凹む。ロクロ整形。
0300 図69 63	須恵器 甕	IV区2面 M-58	1/2残存	底径 16.3	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 還元、普通 色調 灰色	胴部はわずかに内湾し立ち上がり、底部内面に2対の溝を刻む。器面摩滅。鉄分付着。
0301 図69 63	須恵器 甕	IV区2面 M-59	1/2残存	口径(14.5)	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	口縁部はゆるやかに外湾し立ち上がり、口唇部断面略三角形を呈す。鉄分付着。
0302 図69 63	須恵器 甕	IV区2面 M-59	破片	口径(10.0)	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 還元、普通 色調 褐灰色	胴上半部はゆるやかに内湾し、頸部はわずかに外湾し立ち上がる。器面摩滅。鉄分付着。
0303 図69 63	須恵器 甕	IV区2面 M-58	破片	口径(25.8)	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	口縁部はわずかに外湾し立ち上がり、口唇部は外傾し断面略三角形を呈す。鉄分付着。
0353 図69 64	須恵器 甕	IV区2面 5号溝 確認面	1/2残存	口径(18.6)	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 にぶい橙色	頸部はくの字状に外反し、口縁部に断面四角形の隆帯を付す。胴部外面平行叩き。胴部・頸部内面ロクロ整形。口唇部全周に意図的な打ちかき痕を残す。
0354 図69 64	須恵器 甕	IV区2面 確認面	破片	口径(49.0)	胎土 密、白色鉱物粒 焼成 還元、良好 色調 灰色	口唇部に一条の波状文が付され、口辺部に断面三角形の突帯三条が走る。突帯間に一条の櫛描き波状文。内面ロクロ整形。
0304 図70 63・77	瓦 平瓦	IV区2面 M-59	破片	厚さ 1.3	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目、ヘラ書き・押印、判読不能。凸面 タテナダ、一部ケズリ。側面 タテケズリ、面取り2回。端面 ケズリ。
0305 図70 63	瓦 平瓦	IV区2面 5号溝 M-58	破片	厚さ 1.9	胎土 やや粗、赤色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 暗灰色	凹面 布目。側縁 ヨコナダ。凸面 タテナダ。ヘラ書き、判読不能。側面 タテケズリ、面取り1回。
0306 図70 64・77	瓦 平瓦	IV区2面 3号溝 L-59	破片	厚さ 2.0	胎土 やや粗、縞状、白色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 青灰色	凹面 布目、ヘラ書き、判読不能。凸面 タテナダ。
0307 図70 64	瓦 平瓦	IV区2面 5号溝 M-57	破片	厚さ 2.4	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、普通 色調 褐灰色	凹面 粗い布目、糸切り痕。端縁 ヨコケズリ。凸面 タテナダ。側面 タテケズリ、面取り2回。端面 ヨコケズリ、面取り1回。
0308 図70 64	瓦 平瓦	IV区2面 4号溝 M-58	破片	厚さ 1.6	胎土 粗、白色粒子、白色小石多 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目。凸面 ナダ。側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。
0309 図70 64	瓦 平瓦	IV区2面 L-58	破片	厚さ 2.5	胎土 やや粗、白色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 暗青灰色	凹面 ヨコナダ、一部布目残る。凸面 ヨコナダの後格子叩き。側面 タテケズリ。面取り1回。
0361 図71 66・78	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 2.3	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、普通 色調 暗灰色	凹面 布目、端縁 幅の狭いヨコナダ。凸面 タテナダ、ヘラ書き「井」。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ。
0363 図71 65	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 1.2	胎土 粗、砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目。凸面 ナダ。側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。
0362 図71 65・78	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 1.2	胎土 粗、白色粒子 焼成 還元、普通 色調 青灰色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 タテナダ、ヘラ書き「十」。端面 ヨコケズリ。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0364 図71 66	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 1.6	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目、一部ナデ。凸面 縄叩きの後タテナデ。 側面 タテケズリ。端面 ヨコケズリ。
0366 図72 66	瓦 平瓦	IV区2面 M-58	破片	厚さ 1.5	胎土 密、黒色粒子多 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、糸切り痕。端縁にそって布端の圧痕。端 縁 ヨコケズリ。凸面 縄叩き。側面 タテケズリ、面 取り1回。端面 ヨコケズリ。
0367 図72 67	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 2.2	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 暗灰黄色	凹面 布目、糸切り痕。側縁 タテケズリ。凸面 縄叩 きの後タテナデ。側面 タテケズリ。凹面を削って側 面を薄くする。
0365 図72 66	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 1.8	胎土 密、砂粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目。凸面 縄叩き、離れ砂。側面 タテケズリ、 面取り1回。端面 ヨコケズリ、面取り1回。
0368 図72 67	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 2.1	胎土 やや粗、細砂粒、赤色 粒子含む 焼成 還元、良好 色調 赤褐色	凹面 タテナデ、一部布目残る。凸面 ナナメナデの 後格子叩き。側面 タテケズリ、面取り2回。端縁 ヨ コナデ。
0369 図73 67	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 2.0	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、良好 色調 暗灰色	凹面 布目。側縁 タテケズリ。端縁 横ケズリ。凸面 ヨコナデ後格子叩き。側面 タテケズリ。
0356 図73 65	瓦 玉縁付 丸瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 1.8	胎土 密、黒色粒子多 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目。凸面(玉縁部共)縄叩きの後ヨコナデ。側 面 タテナデ、面取り1回。
0370 図73 66	瓦 平瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 2.4	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 酸化、良好 色調 にぶい橙色	凹面 ヨコナデ、一部布目残る。凸面 ヨコナデの後 格子叩き。側面 タテナデ、面取り1回。
0311 図73 64	瓦 丸瓦	IV区2面 M-59	破片	厚さ 2.0	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 明褐色	凹面 布目。凸面 タテナデ。側面 タテケズリ。端面 ヨコナデ。
0310 図73 64・78	瓦 丸瓦	IV区2面 5号溝 M-58	破片	厚さ 1.8	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目。凸面 タテナデ、ヘラ書き「子」。側面 タ テケズリ、面取り2回。端縁 ヨコケズリ、面取り1回。
0357 図73 65・78	瓦 丸瓦	IV区2面 M-58	破片	厚さ 2.1	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰黄色	凹面 布目、一部ナデ。凸面 タテナデ、ヘラ書き上 下欠、判読不能。側面 ナデ、面取り(幅狭い)一回。
0359 図74 66	瓦 丸瓦	IV区2面 M-58	破片	厚さ 1.7	胎土 やや粗、白色・赤色粒 子含む 焼成 還元、普通 色調 暗灰色	凹面 布目、粘土板合わせ目。端縁 ヨコケズリ。凸 面 タテナデ。端縁 ヨコケズリ、ヨコナデ。側面 タ テケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ。
0360 図74 65	瓦 丸瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 1.4	胎土 やや粗、細かい縞状、 砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 ヨコナデ。側面 タテケ ズリ、面取り1回。端面 ヨコケズリ。
0358 図74 65	瓦 丸瓦	IV区2面 確認面	破片	厚さ 2.1	胎土 やや粗、細かい層状、 砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 布目、一部ナデ。凸面 タテナデ、一部タテケ ズリ。側面 タテケズリ、面取り1回。端面 ヨコケズ リ。
0355 図74 65	瓦 軒平瓦	IV区2面 M-57	破片	—	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 酸化、良好 色調 にぶい橙色	国分寺P002Bと同范。凹面 布目、糸切り痕。凸面 ナ デ。側面 ナデ。
0371 図75 67	瓦 平瓦	IV区2面 L-58	破片	厚さ 1.8	胎土 やや粗、白色粒子含む 焼成 還元、良好 色調 青灰色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 タテナデの後格子叩き。 押印(叩き)「雀(左字)」。側面 タテナデ、面取り1回。
0351 図75 66	土製品 円盤 (転用)	IV区2面 確認面	完形	径 7.7 厚さ 0.9	胎土 輝石、細砂多 焼成 軟質 色調 淡黄色	糸切り底部転用(左回転)。焼成後穿孔3ヶ所。周辺は 研磨したものと思われるが全体の摩滅が激しく詳細 は不明。
0395 図76 67	須恵器 蓋	V区2面 7号溝	残存	器高 4.2 口径 17.2 摘径 3.5	胎土 密、細砂粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	天井部は平坦。体部はわずかに内湾し開き、口縁部 は内反し折れる。天井部右回転ヘラ削り。鉄分付着。 環状摘。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0433 図76 67	須恵器 坏	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 3.0 口径(13.0) 底径(7.0)	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は直線的に外向し立ち上がり、口縁部はやや外反する。ヘラ削り調整。内面鉄分付着。
0434 図76 67	須恵器 坏	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 3.5 口径 13.0 底径 7.5	胎土 密、黒色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反しわずかに肥厚する。右回転糸切り無調整。鉄分付着。
0435 図76 68	須恵器 塊	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 4.6 口径(15.0) 底径 8.6	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 褐色	体部は下位で内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。ヘラ削り調整。器面摩滅。スス付着。
0436 図76 68	須恵器 坏	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 3.5 口径 16.0 底径 7.2	胎土 粗、白色・黒色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい橙色	体部はやや外湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。右回転糸切り無調整。器面摩滅。スス付着。
0437 図76 68	土師質 土器小皿 (カワラケ)	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 1.7 口径 8.4 底径 4.8	胎土 粗、黒色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は外湾し立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚する。ロクロ整形後底部右回転糸切り無調整。器面摩滅。
0442 図76 68	須恵器 皿	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 2.3 口径 10.8 底径 6.2	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部は外反しわずかに肥厚する。糸切り後付高台。自然釉。鉄分付着。
0438 図76 68	土師質 土器小皿 (カワラケ)	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 2.5 口径 8.3 底径 6.0	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 酸化、良好 色調 暗灰黄色	体部はわずかに外湾し立ち上がり、口縁部はやや内反し肥厚する。ロクロ整形後底部右回転糸切り無調整。
0440 図76 68・78	灰釉陶器 塊	V区2面 8号溝	破片	器高 2.6 口径(13.0) 底径(7.0)	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台はやや外反し短い。内外面施釉。外面底部墨書。判読不能。
0443 図76 68	須恵器 皿	V区2面 8号溝	1/2残存	器高 1.9 口径(14.2) 底径 8.0	胎土 密、小礫少 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部は下位より内湾し立ち上がり、口縁部は外反する。右回転糸切り無調整。鉄分付着。
0439 図76 68・79	須恵器 塊	V区2面 8号溝	1/2残存	底径 7.4	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	底部右回転糸切り無調整。鉄分付着。底部外面墨書「十」、底部内面ヘラ書き「十」。
0441 図76 68・78	灰釉陶器 塊	V区2面 8号溝	破片	口径(12.0)	胎土 密 焼成 還元、良好 色調 灰色	体部はやや内湾し立ち上がり、口縁部は外向する。高台欠落痕あり。内面施釉。底部外面墨書。判読不能。鉄分付着。
0444 図76 68	緑釉陶器 皿	V区2面 8号溝	破片	—	胎土 粗、黒色粒子 焼成 軟質 色調 灰白色	2回目の焼成時の両面の目痕、内面底に1ヶ所。特別に古い。陰刻花纹。
0446 図77 68	瓦 平瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 2.1	胎土 やや粗、砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 縄叩き。側面 タテズリ、面取り1回。
0447 図77 68	瓦 丸瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 2.1	胎土 粗、白色・赤色粒子多 焼成 還元、普通 色調 黄灰色	凹面 布目、布の縫い合わせ痕。凸面 タテズリ。側面 タテズリ、面取り2回。
0448 図77 68	瓦 平瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 1.2	胎土 やや粗、細砂粒含む 焼成 還元、良好 色調 灰黄褐色	凹面 布目、一部ヨコナデ。凸面 格子叩き。
0449 図77 68	瓦 平瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 2.8	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、良好 色調 暗青灰色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 タテナデ。端面 ヨコケズリ、面取り2回。
0451 図77 68	瓦 平瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 2.0	胎土 密、砂粒少 焼成 還元、良好 色調 灰白色	凹面 細かい布目、一部タテナデ。凸面 縄叩き、離れ砂。側面 タテナデ。
0452 図77 68	瓦 丸瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 1.5	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、良好 色調 灰色	凹面 粗い布面。凸面 タテナデ。側面 タテズリ、面取り2回。
0450 図77 68・79	瓦 平瓦	V区2面 8号溝	破片	厚さ 2.2	胎土 粗、白色粒子多 焼成 還元、良好 色調 褐灰色	凹面 布目、糸切り痕。凸面 ナデ押印「佐」か。

3面遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0038 図90 69	土師器 坏	I区3面 確認面	1/2残存	器高(5.6) 口径(14.7)	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜・横方向の磨き
0206 図90 69	土師器 坏	III区3面 7号溝 V-42	1/2残存	器高 6.0 口径(10.6)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0207 図90 69	土師器 坏	III区3面 7号溝 W-42	3/4残存	器高 4.9 口径 11.6	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0209 図90 69	土師器 坏	III区3面 X-41	1/2残存	器高 5.1 口径(14.4)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0208 図90 69	須恵器 甕	III区3面 X-42	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 外 灰色 内 灰褐色	外面疑似格子叩き。内面青海波文スリ消し状。No0247と同一個体。
0376 図90 69	土師器 甕	IV区3面 8号溝	破片	口径(15.9)	胎土 砂粒、雲母、白色粒 焼成 良好 色調 橙褐色	口縁部直線上に外傾し、頸部くの字を呈する。外面口縁横ナデ後ハケ目。内面口縁横ナデ。胴上部ハケ目。胴部ヘラナデ。
0377 図90 69	土師器 坏	IV区3面 確認面	1/2残存	器高 5.6 口径 13.4	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 橙色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0378 図90 69	土師器 坏	IV区3面 確認面	3/4残存	器高 4.6 口径 13.2	胎土 粗、砂粒、小礫多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。器面摩滅。
0379 図90 69	土師器 坏	IV区3面 確認面	1/2残存	器高 4.8 口径 13.4	胎土 密、細砂粒、小礫多 焼成 酸化、良好 色調 橙色	体部は内湾し立ち上がる。外傾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。口縁横ナデ。
0380 図90 69	土師器 坏	IV区3面 確認面	1/2残存	器高 8.0 口径 11.4	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。外傾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0381 図90 69	土師器 埴	IV区3面 確認面	完形	器高 12.1 口径 7.4 最大径 14.2	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化 色調 赤褐色	体部は強く内湾し、口縁部はわずかに内湾し立ち上がる。外面口縁部横ナデ。体部ヘラ削り。内面口縁部横ナデ。スス付着
0382 図90 69	土師器 甕	IV区3面 確認面	1/2残存	器高 22.2 口径 17.0 底径 6.4 最大径 19.8	胎土 細粒砂少 焼成 硬質 色調 浅黄色	頸部直上に段を有し口縁部は直線的に外傾する。底部は厚く突出する。器内外面に共に雑なナデで、口縁部は横ナデを施す。
0383 図90 69	土師器 甕	IV区3面 確認面	1/2残存	口径(22.2) 最大径 (27.2)	胎土 石英細粒少、細粒砂多 焼成 やや軟質 色調 橙色	口縁部はくの字状に外反し、胴部中位に最大径を有する。口縁部は横ナデ。胴部内外面はナデと思われるが、摩滅が激しく不明瞭。
0384 図91 69	土師器 台付甕	IV区3面 確認面	1/2残存	口径(10.4) 最大径 (13.2)	胎土 砂粒、雲母 焼成 良好 色調 橙褐色	口縁部S字状を呈し、端部は短く立ち気味。肩部やや張る。外面口縁部横ナデ、胴・脚部ハケ目。内面、口縁部横ナデ。胴・底部ヘラ痕。
0385 図91 69	土師器 甕	IV区3面 確認面	1/2残存	口径 19.0	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 還元、普通 色調 明黄褐色	口縁部は外湾し立ち上がり、口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。外面口縁部横ナデ。内面口縁部横ナデ。器面摩滅。鉄分付着。
0386 図91 69	須恵器 甕	IV区3面 確認面	破片	口径(18.2)	胎土 密、黒色鉱物粒多 焼成 還元、普通 色調 灰色	口縁部はゆるやかに外湾し立ち上がる。外傾口縁。外面頸部クロ整形。器面摩滅。鉄分付着。

4面遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0127 図103 70	土師器 坏	II区4面 15号溝	1/2残存	器高 7.5 口径(11.4)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し外反する。外面底部から体部多方向のヘラ削り。口縁横ナデ。内面口縁横ナデ。体部斜方向の磨き。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0117 図103 70	土師器 坏	II区4面 2F-30	1/2残存	器高 5.7 口径 13.3	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面口縁横ナデ。斜・横方向の磨き。
0118 図103 70	土師器 脚台	II区4面 2F-30	ほぼ完形	器高 6.7 上面径 4.9 底径 8.2	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は直線的に外反し立ち上がり、口縁部は肥厚する。内外面輪積痕を残す。内面底部へラ削り。外面スス付着。
0123 図103 70	土師器 高坏	II区4面 確認面	1/2残存	底径 10.0	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙褐色	器受部はわずかに内湾し立ち上がる。脚部はやや外湾し開き、裾部は内湾ぎみに外反する。外面器受部へラ削り。脚部斜方向の磨き。裾部横ナデ。内面器受部横ナデ。脚部縦方向の磨き。裾部横ナデ。
0119 図103 70	土師器 高坏	II区4面 2I-27	1/2残存	底径 11.5	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化 色調 明赤褐色	脚部はわずかに内湾し開き、裾部は大きく外反する。外面脚部へラ削り。裾部横ナデ。内面脚部へラナデ。裾部へラナデ。
0121 図103 70	土師器 高坏	II区4面 2F-31	1/2残存	底径 11.0	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化 色調 赤褐色	脚部は外湾し開き、裾部は外反し肥厚する。外面脚部、縦方向の磨きと横ナデ。内面脚部へラ削り。裾部横ナデ。器面摩滅。
0122 図103 70	土師器 高坏	II区4面 2G-29	1/2残存	底径 (9.8)	胎土 粗、白色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	脚部はゆるやかに外湾し開き、裾部はやや内湾ぎみに外傾する。外面脚部へラナデ。内面へラナデ。脚部外面スス付着。
0120 図103 70	土師器 高坏	II区4面 2G-29	1/2残存	底径 9.2	胎土 粗、黒色・白色鉱物粒多 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	脚部はわずかに外湾し開き、裾部は外反し肥厚する。外面裾部横ナデ。内面裾部横ナデ。脚部内面に接合痕を残す。外面スス付着。
0124 図103 70	土製品 管玉	II区4面 2I-25	ほぼ完形	長さ 1.8 幅 0.6 厚さ 0.6	胎土 焼成 色調	完形であるが、片面一部欠損。両面穿孔わずかに、紐ずれ痕を残す。
0229 図103 70	土師器 小型甕	III区4面 12号溝 Z-41	1/2残存	器高 11.1 口径 (7.0) 底径 4.6 最大径 8.8	胎土 やや密、粗砂粒少 焼成 酸化、普通 色調 灰黄褐色	胴部は強く内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。外面胴部へラ削り。内面胴部へラナデ。器面摩滅。
0213 図103 70	土師器 高坏	III区4面 12号溝 Z-41	1/2残存	底径 7.8	胎土 密、細砂粒少 焼成 酸化、良好 色調 明赤褐色	脚部は短く外湾し開き、裾部はわずかに内湾する。内外面脚部へラナデ。
0244 図103 70	須恵器 甕	III区4面 12号溝 Z-41	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	外面平行叩き。内面スリ消し調整。
0223 図103 70	土師器 坏	III区4面 13号溝 Y-43	1/2残存	器高 (5.4) 口径 (13.8)	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0233 図103 70	縄文土器 深鉢	III区4面 13号溝 Y-42	破片	—	胎土 輝石粒を多く含む 焼成 良好 色調 灰黄褐色	器内外面とも整形良好で、内面に横位の整形痕が認められる。幅太の沈線文間には斜位の刻目が加えられる。縄文は認められない。
0228 図104 70	土師器 鉢	III区4面 16号溝 W-42	1/2残存	器高 7.1 口径 (13.0) 底径 (4.8)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 褐灰色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部は外反し肥厚する。外面体部へラ削り、磨き。口縁部横ナデ。内面口縁部横ナデ。体部へラ削り。器面摩滅。
0211 図104 70	土師器 高坏	III区4面 19号溝 W-45	1/2残存	底径 (12.0)	胎土 やや粗、白色鉱物粒少 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	胴部は直線的に外傾し開き裾部はわずかに内湾する。外面脚部縦方向のへラ削り。内面へラナデ。
0242 図104 70	弥生土器 甕	III区4面 19号溝 W-45	破片	—	胎土 細砂粒含む、ややザラつく 焼成 良好 色調 灰褐色	整形良好。5条一単位の波状文が横位に加えられる。施文は丁寧で明瞭。縄文は認められない。
0243 図104 70	須恵器 甕	III区4面 24号溝 W-44	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	頸部に断面三角形の隆帯を付し、その下に2条の櫛描波状文が走る。内面ナデ整形。
0245 図104 71	須恵器 甕	III区4面 16号溝 W-42	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	胴部はわずかに内湾して立ち上がる。外面平行叩き。内面青海波文スリ消し状。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0251 図104 70	土製品 円盤	Ⅲ区 4面 19号溝 X-45	完形	縦径 6.4 横径 7.1 厚さ 0.9	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 灰色	須恵器破片。断面研磨。
0230 図104 71	土師器 台付壺	Ⅲ区 4面 20号溝 W-46	1/2残存	器高 23.0 口径 10.5 底径 8.3 最大径 17.6	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい赤褐色	胴部は強く内湾し立ち上がる。S字状口縁。脚台体部は、直線的に外反し開き、裾部は肥厚する。外面胴部へラ削り。斜縦位のへラナデ。脚台部へラ削り。口縁部横ナデ。内面口縁横ナデ。
0217 図104 71	土師器 脚台	Ⅲ区 4面 24号溝 W-44	完形	器高 5.7 上面径 4.3 底径 7.8	胎土 やや粗、細砂粒少 焼成 酸化、不良 色調 明赤褐色	体部はわずかに外湾し立ち上がり、口縁部はやや内湾する。外面体部に輪積痕を残す。底部へラナデ。内面体部口縁部へラナデ。
0218 図104 71	土師器 脚台	Ⅲ区 4面 24号溝 V-45	1/2残存	器高 5.8 上面径 4.4 底径 7.7	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部はわずかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外傾する。外面体部に輪積痕を残す。内面体部～底部へラ削り。口縁部へラナデ。
0219 図104 71	手捏ね	Ⅲ区 4面 24号溝 V-45	1/2残存	底径 5.0	胎土 やや密、細砂粒少 焼成 酸化、普通 色調 におい黄褐色	体部はゆるやかに内湾し立ち上がる。外面体部～底部へラナデ。内面体部～底部ナデ調整。
0220 図104 71	ミニチュア 土器	Ⅲ区 4面 24号溝 V-44	完形	器高 3.3 口径 3.9 底径 1.5 最大径 4.3	胎土 やや粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 明黄褐色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部はやや外傾する。外面体部～底部へラ削り。口縁部横ナデ。内面口縁部横ナデ。
0234 図104 71	縄文土器 深鉢	Ⅲ区 4面 24号溝 W-44	破片	—	胎土 砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 灰黄褐色	器内外面とも整形良好で、平滑面を形成。単一沈線文は幅2mmで、施文は深く明瞭。縄文は認められない。輪積部で剥落する。
0240 図104 71	弥生土器 甕	Ⅲ区 4面 24号溝 U-45	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 におい黄褐色	整形良好で、内面は平滑面を形成。縄文はLR横位。原体はよく撚られており、施文も良好。
0221 図104 71	土師器 坏	Ⅲ区 4面 W-42	1/2残存	器高 6.6 口径(12.8)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。底部へラ削り。内面口縁横ナデ。
0222 図104 71	土師器 坏	Ⅲ区 4面 X-45	ほぼ完形	器高 5.4 口径 13.3	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面口縁横ナデ。斜横方向のへラ磨き。
0224 図104 71	土師器 坏	Ⅲ区 4面 確認面	1/2残存	器高 (6.4) 口径(14.0)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。直立口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部へラ削り。内面口縁横ナデ。
0225 図105 71	土師器 埴	Ⅲ区 4面 X-43	1/2残存	底径 3.3 最大径 13.5	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい黄褐色	体部は強く内湾し立ち上がる。外面体部斜縦位のへラ削り、へラナデ。内面へラナデ。器面摩滅。鉄分付着。
0226 図105 71	土師器 壺	Ⅲ区 4面 X-42	1/2残存	器高 13.6 口径 11.8 最大径 12.0	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、不良 色調 黒色	胴部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反し肥厚する。外面胴下半部へラ削り、胴部に輪積み痕を残す。口縁部横ナデ。内面口縁～胴部横ナデ。器面摩滅。
0227 図105 71	土師器 小型壺	Ⅲ区 4面 V-44	完形	器高 10.0 口径 9.8 底径 6.8 最大径 10.7	胎土 粗、小礫少 焼成 酸化、普通 色調 明黄褐色	胴部はゆるやかに内湾し、立ち上がり、口縁部はわずかに外反し肥厚する。外面胴部へラ削り。口縁部横ナデ。内面口縁部、胴部横ナデ。底部へラ削り。内面底部付近に朽痕。器面摩滅。
0212 図105 71	土師器 高坏	Ⅲ区 4面 Y-41	1/2残存	底径 8.8	胎土 やや粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい橙色	脚部はわずかに外湾して開き、裾部は外傾する。器受部はやや内湾して立ち上がる。外面脚部斜縦位のへラ削り。裾部へラナデ。内面器受部へラナデ。
0215 図105 71	土師器 器台	Ⅲ区 4面 Y-41	1/2残存	器高 6.8 口径 7.4 底径 9.6	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化 色調 灰白色	脚部は直線的に外反し開き、裾部はわずかに外傾する。器受部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部は外向する。2対の円形の孔を穿つ。内外面へラナデ。器面摩滅。
0216 図105 71	土師器 器台	Ⅲ区 4面 2A-4	1/2残存	器高 7.1 口径 7.0 底径 8.4	胎土 密、粗砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 褐灰色	脚部は直線的に外反し開き、裾部は外傾する。器受部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部は外傾する。外面器受部へラ削り。脚部磨き。内面器受部・裾部へラナデ。3つの円形の孔を穿つ。
0214 図105 71	土師器 高坏	Ⅲ区 4面 X-41	1/2残存	底径 8.8	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい赤褐色	脚部は外湾し開き、裾部はわずかに内湾ぎみに外傾する。外面脚部へラナデ。内面脚部へラ削り。裾部へラナデ。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0232 図105 71	縄文土器 深鉢	Ⅲ区 4面 X-44	破片	—	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 灰白色	球状にふくらむ胴部片。内面に横位の整形痕が残る。縄文はLR縦位であるが、やや不規則で条が横走する部分もある。一部に粗雑な単一沈線文がみられる。
0235 図105 71	縄文土器 深鉢	Ⅲ区 4面 V-45	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 褐灰色	器面に横位の整形痕が残る。横走する単一沈線は幅2mmで、施文は深く明瞭。縄文は認められない。
0236 図105 71	縄文土器 深鉢	Ⅲ区 4面 X-41	破片	—	胎土 輝石を多量に含む、緻密 焼成 良好 色調 灰黄褐色	球状にふくらむ胴部片。整形良好で内面は平滑面を形成。斜位の条線文が加えられる。
0231 図105 71	縄文土器 深鉢	Ⅲ区 4面 V-44	破片	—	胎土 砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 ぶい黄褐色	器内外面とも整形良好で平滑面を形成する。3条1単位の櫛歯状工具により波状文が施される。縄文は認められない。
0237 図105 71	弥生土器 甕	Ⅲ区 4面 Z-41	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 ぶい褐色	整形良好で内外面に横位の整形痕が残る。口縁下に粗雑な縄文が加えられる。原体はやや不明瞭であるが、附加条第2種の可能性がある。
0238 図105 72	弥生土器 甕	Ⅲ区 4面 X-42	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 ぶい褐色	整形良好で内面に横位の整形痕が残る。縄文はやや細めで施文は不規則な部分も見られる。LR横位。縄文施文下に横位のナデが認められる。(赤井戸式)
0239 図105 72	弥生土器 甕	Ⅲ区 4面 Y-42	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 ぶい褐色	括れをもつ頸部片。縄文はRL横位。原体はよく燃られ施文も良好。
0241 図105 72	弥生土器 甕	Ⅲ区 4面 X-41	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 褐灰色	胴部上半の破片と思われ、LR原体を縦位回転施文している。
0246 図105 72	須恵器 甕	Ⅲ区 4面 W-44	破片	—	胎土 密、細砂粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	外面ヘラナデ調整。自然袖付着。内面ヘラナデ調整。
0247 図105 72	須恵器 甕	Ⅲ区 4面 X-42	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	外面疑似格子叩き。内面青海波文スリ消し状。Na0208と同一個体か。
0248 図105 72	須恵器 甕	Ⅲ区 4面 V-45	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	胴部はわずかに内湾し立ち上がる。外面平行叩き。自然袖付着。内面青海波文スリ消し状。
0249 図105 72	須恵器 甕	Ⅲ区 4面 X-43	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒多 焼成 還元、良好 色調 灰色	外面平行叩き。内面ナデ消し。
0250 図105 72	須恵器 甕	Ⅲ区 4面 U-44	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	外面平行叩き。内面青海波文スリ消し状。
0252 図105 72	土製品 円盤 (転用)	Ⅲ区 4面 Z-40	完形	径 4.2 厚さ 0.5	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 明褐色	胴部片利用の円盤状土製品。縁辺調整は丁寧で平坦面を形成。器面に沈線文が一部認められる。
0499 図106 72	土師器 坏	V区 4面 15号溝	1/2残存	器高 7.5 口径 16.0	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は強く内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ、横方向の磨き。
0501 図106 72	土師器 罎	V区 4面 15号溝	完形	器高 6.3 口径 12.0	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 ぶい赤褐色	底部と体部の境に段をもち、体部はわずかに内湾し立ち上がる。口縁部は外向する。外面底部ヘラ削り。口縁横ナデ。体部縦位のヘラ磨き。内面口縁横ナデ。体部縦位の磨き。
0507 図106 72	土師器 小型甕	V区 4面 15号溝 H-70	1/2残存	口径(11.7) 最大径 (12.4)	胎土 やや粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 黒褐色	体部は内湾し立ち上がり、口縁部はやや内湾ぎみに外反する。外面体部多方向のヘラ削り。口縁部ヘラナデ。内面体部～口縁ヘラナデ。
0505 図106 72	土師器 台付甕	V区 4面 16号溝	1/4残存	底径(10.0)	胎土 やや密、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 褐灰色	脚台部はわずかに内湾し開き、裾部は折り返し肥厚する。外面脚台部斜縦位のヘラナデ。内面指頭尻後ナデ、ヘラナデ。輪積痕を残す。鉄分付着。
0503 図106 72	土師器 高坏	V区 4面 15号溝	1/2残存	底径 11.2	胎土 やや密、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 褐灰色	脚部は直線的に外反し開き、裾部はわずかに内湾する。外面縦方向の磨き。裾部ヘラナデ。内面脚部指頭尻後ナデ。3つの円形の孔を穿つ。裾部ヘラナデ。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0506 図106 72	土師器 台付甕	V区4面 16号溝 H-71	1/2残存	底径 (9.1)	胎土 やや粗、細砂粒、小礫少 焼成 酸化、普通 色調 ぶい黄褐色	脚台部はわずかに内湾し開き、裾部は折り返し肥厚する。外面脚台部縦方向の磨き。裾部ヘラナデ。内面脚台部ヘラ削り、ヘラナデ。輪積痕を残す。鉄分付着。
0512 図106 72	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 6.1 口径 12.2	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 黒褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面横ナデ。
0513 図106 72	土師器 蓋	V区4面 確認面	1/2残存	器高 8.6 口径 18.8 摘径 5.2	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 赤褐色	裾部は直線的に外傾し開き、端部はやや外反する。外面端部横ナデ。裾部斜縦位の磨き。内面端部横ナデ。
0514 図106 72	須恵器 甕	V区4面 確認面	破片	最大径 (14.2)	胎土 緻密 焼成 良好 色調 灰色	ロクロ整形。円孔。肩部自然釉。
0502 図106 72	土師器 埴	V区4面 確認面	1/2残存	器高 8.3 口径 11.6 底径 3.9	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい黄褐色	胴部は内湾し立ち上がり、頸部はくの字状に外反する。口縁部はわずかに内反する。外面頸部～胴部ヘラ削り。内面口縁部ヘラナデ。胴部～底部指頭圧後ナデ。器面摩滅。
0518 図106 72	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 6.1 口径 14.3	胎土 密、粗砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 明赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。ナデ調整。
0516 図106 73	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	口径(13.0)	胎土 密、白色・黒色鈹物粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0519 図106 73	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 5.3 口径 15.2	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面横ナデ。
0515 図106 73	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 5.4 口径 11.3	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 明赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内湾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ、ヘラ削り。
0500 図106 73	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 7.1 口径(16.6)	胎土 密、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 ぶい赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。斜方向の磨き。
0517 図106 73	土師器 坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 5.2 口径 14.2	胎土 密、白色鈹物粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	体部はわずかに内湾し立ち上がる。内傾口縁。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面横ナデ。
0520 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/2残存	器高 14.2 口径(16.4) 底径 13.5	胎土 小石 焼成 良好 色調 灰褐色	坏部中段に稜をもつ。脚部中位ややふくらむ。裾部外側へ開く。口縁内外面横ナデ。他粗いナデ。
0522 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/2残存	口径 17.8	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 黒褐色	坏部中段に稜をもち直線状に外傾する。朽痕。外面口縁上部横ナデ。下部ヘラ削り。脚部ヘラナデ。内面口縁横ナデ。坏部磨き。脚部ヘラナデ。
0521 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/2残存	口径 18.0	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 ぶい橙色	坏部中段に弱い稜をもつ。外面坏部ナデ、磨き。脚部ハケ目後磨き。内面坏部ナデ、磨き。脚部ヘラによるしぼり痕。
0504 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/2残存	—	胎土 やや粗、粗砂粒多 焼成 酸化、良好 色調 赤褐色	脚部はゆるやかに内湾し開く。外面縦方向の磨き。裾部放射状の磨き。内面裾部ヘラナデ。
0523 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/2残存	—	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 橙色	脚中位ややふくらみ裾大きく開く。外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ(横方向)。裾部横ナデ。
0524 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/2残存	—	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 ぶい橙色	脚部下位で外側へ大きく開く。外面ヘラ磨き。内面指ナデ状。裾部横ナデ。
0511 図107 73	土師器 甕	V区4面 確認面	1/2残存	器高 26.0 口径(15.2) 底径 6.8 最大径 21.8	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 ぶい橙色	口縁部くの字を呈し、端部短く内側へ屈曲する。外面口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0508 図107 73	土師器 台付甕	V区4面 確認面	破片	口径(14.0) 最大径 (21.2)	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 黄褐色	口縁部S字状を呈し、肩部に最大径をもつ。外面口縁部横ナデ。胴部ハケ目。内面口縁部横ナデ。胴上部指頭痕。
0527 図107 74	土師器 甕	V区4面 確認面	1/4残存	口径(13.8)	胎土 砂粒、小石 焼成 やや軟質 色調 暗褐色	口縁部長く弱く外傾し、端部外反する。肩部あまり張らず下胴部に下がる。外面口縁部横ナデ、ハケ目。胴部口縁部とことなる工具によるハケ目(ハケの間が広く大きい)。内面ナデ。
0526 図107 73	土師器 小型甕	V区4面 確認面	1/4残存	器高 11.2 口径 12.7 底径 4.7	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 暗褐色	歪み大。口縁部ゆるやかに曲線をなし外反する。外面口縁部横ナデ、胴部磨き。内面口縁部横ナデ、胴部磨き。
0510 図107 73	土師器 高坏	V区4面 確認面	1/4残存	底径 8.3	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 橙色	脚部ハの字状に開く。内外面ナデ。裾部横ナデ。
0525 図107 74	須恵器 甕	V区4面 確認面	破片	口径(10.0)	胎土 密、白色鉱物粒少 焼成 還元、良好 色調 灰色	頸部に一条の波状文が巡る。口縁下半部に断面三角形の突帯を持つ。外傾口縁。口縁部上位内面に稜をもつ。
0528 図108 74	土師器 甕	V区4面 確認面	1/4残存	口径 13.1 最大径 24.8	胎土 細砂粒、小石 焼成 良好 色調 にぶい橙色	口縁部くの字を呈し、端部外反する。胴中位に最大径。外面口縁部横ナデ、胴部ヘラ磨き。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。
0529 図108 74	土師器 甕	V区4面 確認面	1/4残存	器高 15.2 口径(8.4) 底径 6.8	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 橙色	口縁部短く直立し、胴部は球状を呈する。外面口縁部横ナデ。胴部ナデ、磨き。内面ナデ。
0530 図108 74	土師器 甕	V区4面 確認面	ほぼ完形	器高 15.0 口径 10.6 底径 5.6 最大径 17.2	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 にぶい橙色	不安定な平底。口縁部くの字に外反する。外面口縁部横ナデ。頸部ハケ目。胴部ヘラ削り、ナデ。内面口縁部横ナデ。胴部ナデ。底部ヘラ痕。
0531 図108 74	土師器 小型甕	V区4面 確認面	ほぼ完形	器高 11.8 口径 11.0 底径 4.6 最大径 11.6	胎土 細砂粒、黒色鉱物粒 焼成 良好 色調 浅黄橙色	口縁部ゆるやかに外反する。外面口縁部横ナデ。胴部ナデ。内面ナデ。
0533 図108 74	土師器 甕	V区4面 確認面	1/4残存	口径 15.8 最大径 22.1	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 にぶい橙色	口縁部はゆるやかにくの字状を呈し外傾する。外面口縁部横ナデ。胴部磨き。内面ナデ。
0532 図108 74	土師器 甕	V区4面 確認面	1/4残存	器高 27.3 口径(16.0) 底径 6.8 最大径 22.8	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 灰褐色	口縁部くの字を呈し外傾する。外面口縁部横ナデ。胴部ヘラ削り、ナデ。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。
0534 図108 74	土師器 甕	V区4面 確認面	1/4残存	口径(14.3)	胎土 小石 焼成 良好 色調 橙色	口縁部中位に段をもち外傾する。外面磨き。内面丁寧なナデ。剝離著しい。
0535 図108 74	弥生土器 壺	V区4面 確認面	1/4残存	口径(18.0)	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 浅黄橙色	口縁部直線状に外傾し端部外反する。口縁部折り返し。外面口縁部折り返しかなりだれた波状文。口縁部ヘラ磨き。頸部簾状文。左回り3連止め。簾状文の下波状文。
0536 図109 74	弥生土器 小型甕	V区4面 確認面	破片	口径(13.0)	胎土 細砂粒、雲母 焼成 良好 色調 褐色	口縁部弱くくの字状に外反する。外面だれた波状文。内面磨き。
0538 図109 74	土師器 埴	V区4面 確認面	1/4残存	底径 3.2 最大径 8.8	胎土 砂粒、長石 焼成 良好 色調 にぶい黄褐色	ややだれた球形。底部凹む。内外面ナデ、指ナデ。
0539 図109 74	土師器 埴	V区4面 確認面	完形	器高 6.2 口径 6.2 最大径 5.7	胎土 砂粒 焼成 良好 色調 浅黄褐色	口縁部直線状に外傾し端部内側肥厚する。外面口縁部横ナデ。体部ナデ。内面口縁部横ナデ。体部指ナデ。
0540 図109 74	土師器 埴	V区4面 確認面	完形	器高 6.4 口径 7.1 底径 3.4 最大径 8.2	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 にぶい浅黄褐色	口縁部直線状に外傾する。肩部やや張る。底部凹状を呈す。外面口縁部横ナデ。体部ナデ。内面口縁部横ナデ。体部指ナデ。
0541 図109 74	土師器 埴	V区4面 確認面	完形	器高 6.4 口径 6.9 最大径 7.6	胎土 砂粒、長石 焼成 良好 色調 浅黄褐色	口縁部直線状に外傾し底部丸底。外面口縁部横ナデ。体部ナデ。底部ヘラ削り。内面口縁部横ナデ。体部指ナデ。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0542 図109 74	土師器 埴	V区4面 確認面	完形	器高 7.4 口径 7.7 最大径 8.1	胎土 細砂粒 焼成 良好 色調 灰褐色	口縁部直線状に外傾する。外面口縁部横ナデ。体上部ハケ目。体部ヘラ削り。内面口縁部横ナデ。底部指ナデ。
0537 図109 75	須恵器 甕	V区4面 確認面	破片	—	胎土 密、白色鉱物粒少、粗 砂粒多 焼成 還元、良好 色調 褐灰色	外面平行叩き。自然釉付着。内面青海波文すり消し状。古式須恵器。

5面遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0039 図127 75	縄文土器 浅鉢	I区5面 13号溝	破片	—	胎土 石英、角閃石を含む、 砂粒多 焼成 硬質 色調 黄褐色	口縁部外面わずかに外反し、内面が肥厚する。無文で内外面共にナデを施す。
0040 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 13号溝	破片	—	胎土 角閃石、砂粒少 焼成 硬質 色調 ぶい黄橙色	直線的な口縁部で残存部においては無文。
0041 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 13号溝	破片	—	胎土 石英、輝石を含む、砂 粒多 焼成 硬質 色調 黄橙色	外面に斜位の条線を施す。
0042 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 13号溝	破片	—	胎土 砂粒多 焼成 硬質 色調 黄橙色	外面に撚りの細かなLRを縦位施文する。
0044 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 14号溝	破片	—	胎土 砂粒少 焼成 硬質 色調 灰褐色	外面は縦位条線施文後、残存部で横位の4本の平行沈線を施す。
0043 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 14号溝	破片	—	胎土 角閃石細粒、砂粒を多 量に含む 焼成 硬質 色調 明褐灰色	口唇部は平坦で、内傾する口縁部を有する。外面は口唇部直下から縦位～斜位の条線施文。
0045 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 14号溝	破片	—	胎土 砂粒多 焼成 硬質 色調 ぶい橙	横位の平行沈線を施す。
0046 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 14号溝	破片	底径 (5.6)	胎土 石英、角閃石を含む、 細砂粒多 焼成 硬質 色調 明褐色	胴部下半の破片で外面は粗い横位磨き後に平行沈線を施す。外面赤色塗彩。底部に爪先の圧痕。
0048 図127 75	縄文土器 土偶	I区5面 14号溝	破片	—	胎土 石英を含む、砂粒多 焼成 硬質 色調 ぶい橙	左足と考えられるもので、外面は比較的丁寧に磨いている。
0047 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 14号溝	破片	底径 5.7	胎土 粗粒砂多 焼成 硬質 色調 灰白色	底部破片で、外面に斜位のナデを施す。
0052 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 確認面	破片	—	胎土 砂粒少 焼成 硬質 色調 黒色	胴部上位にくびれを有する器形で沈線で入組状の文様を描出し帯状部にRLを充填施文する。1ヶ所に瘤状の突起が認められる。
0053 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 確認面	破片	—	胎土 砂粒多、片岩大粒少 焼成 やや軟質 色調 浅黄橙色	胴部の張りの弱い器形で、口縁部外面に2本、内面に1本の沈線を巡らせている。
0066 図127 75	縄文土器 深鉢	I区5面 2T-9	破片	—	胎土 砂粒多 焼成 硬質 色調 灰褐色	胴部破片で、外面にシャープな縦位条線施文。
0067 図127 75	弥生土器 甕	I区5面 2T-7	破片	—	胎土 小石少 焼成 良好 色調 灰褐色	縄文RL内面磨き。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0068 図127 75	弥生土器 甕	I区5面 確認面	破片	—	胎土 小石少 焼成 良好 色調 灰褐色	みだれた波状文。内面ナデ。
0128 図128 75	土師器 器台	II区5面 16号溝	1/2残存	底径(13.8)	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化 色調 灰白色	脚部は直線的に外反し開き、裾部はわずかに内湾する。孔は2対で不整形な円形を呈す。脚部外面縦方向の磨き。裾部横ナデ。器面摩滅。
0129 図128 76	土師器 罎	II区5面 16号溝	ほぼ完形	器高 9.6 口径 (9.2) 最大径 8.9	胎土 粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 橙色	胴部は強く内湾し立ち上がり、頸部はくの字状で直線的に外反する。外傾口縁。外面体部ヘラ削り。器面摩滅。
0130 図128 76	土師器 罎	II区5面 16号溝	1/2残存	器高 8.6 口径 9.8 最大径 10.2	胎土 粗、砂粒、小礫多 焼成 酸化、普通 色調 浅黄色	胴部は内湾し立ち上がり、頸部はくの字状に外反する。外傾口縁。外面体部～底部ヘラ削り。口縁横ナデ。内面口縁横ナデ。器面摩滅。
0126 図128 76	土師器 坏	II区5面 17号溝	1/2残存	器高 6.7 口径(13.8)	胎土 粗、細砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい赤褐色	体部は内湾し立ち上がる。内斜口縁。平底。外面口縁横ナデ。体部～底部ヘラ削り。内面口縁横ナデ。横位ヘラナデ。
0131 図128 76	弥生土器 小型甕	II区5面 17号溝	1/2残存	器高 14.4 口径(10.4) 底径 5.0 最大径 13.8	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化 色調 オリーブ黒色	胴部は内湾し立ち上がり、口縁部はわずかに外湾し肥厚する。口縁部は水平方向に対しゆがみをもつ。外面斜縦位のヘラ削り。器面摩滅。
0132 図128 76	弥生土器 壺	II区5面 17号溝	ほぼ完形	器高 17.6 口径 12.6 底径 5.7 最大径 14.6	胎土 細砂粒、輝石粒含む 焼成 良好 色調 におい黄橙色	口縁の一部を欠損する壺形土器。器上半部に縄文が加えられ、下半部は縦位のナデが認められる。縄文はLR横位。縄文帯は幅2cm前後で、間隔をもって3帯(口縁部、肩部、胴部)認められる。整形良好で内面は平滑面を形成する。
0258 図128 76	土師器 高坏	III区5面 1号溝 2A-41	破片	口径(19.6)	胎土 やや粗、粗砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 灰白色	坏部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面坏部横位の磨き、ヘラナデ。内面多方向の磨き。坏部底面に接合痕を残す。器面摩滅。
0259 図128 76	土師器 広口罎	III区5面 1号溝 W-46	1/2残存	器高 6.0 口径 17.5 底径 3.8	胎土 粗、砂粒多 焼成 酸化、普通 色調 におい橙色	体部は内湾し中位に稜をもつ。口縁部はわずかに外反する。外面体部・口縁・内面口縁横ナデ。器面摩滅。
0260 図128 76	縄文土器 深鉢	III区5面 1号溝 Z-41	破片	—	胎土 粗、黒色鈹物粒 焼成 酸化 色調 灰黄色	胴部破片で外面に斜位の条線を施す。

6面遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0049 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 細砂粒少 焼成 硬質 色調 におい橙色	外反する口縁部で頸部に横位の沈線を施す。口縁部外面は横位磨き。内面はナデ。
0050 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 石英を含む、砂粒少、 白色細粒多 焼成 やや軟質 色調 黄灰色	外反する口縁部で、口唇部は角状を呈する。
0051 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 2T -9~10	破片	—	胎土 金雲母多、角閃石、石 英、細粒少 焼成 硬質 色調 灰褐色	胴部中位で屈曲する器形で、屈曲部より上位に沈線で文様を描出する。外面上半赤色塗彩。
0054 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 粗粒砂少 焼成 硬質 色調 におい黄橙色	外面に縦位～斜位の条線施文。
0055 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 角閃石を含む、細粒砂 少 焼成 やや軟質 色調 黄褐色	胴部下位の破片で、外面に縦位～斜位の条線施文。外面やや摩滅。
0056 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 細粒砂少 焼成 やや軟質 色調 灰黄褐色	胴部の破片で外面に縦位～横位の細い条線施文。

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0057 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 石英を含む、砂粒少 焼成 やや軟質 色調 におい褐色	胴部破片で、外面に縦位の縦線施文。
0058 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 石英を含む、細粒砂多 焼成 硬質 色調 におい橙色	胴部に弱い屈曲を有する器形で外面に横位の条線施文。
0059 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 細粒砂少 焼成 硬質 色調 浅黄橙色	胴部破片で外面に縦位～斜位の条線施文。
0060 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 角閃石を含む、細粒砂少 焼成 硬質 色調 灰褐色	胴部破片で外面に縦位～斜位の条線施文。
0061 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 石英、輝石、微細粒 焼成 硬質 色調 浅黄橙色	胴部破片で外面に縦位～斜位の条線施文。
0062 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 2T-9~10	破片	—	胎土 砂粒多 焼成 やや硬質 色調 におい褐色	胴部破片で外面に縦位条線施文。内面に炭化物附着。
0063 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 砂粒少 焼成 やや軟質 色調 灰褐色	胴部破片で外面に縦位条線施文。内外面わずかに摩滅。
0064 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 細粒砂少 焼成 やや軟質 色調 浅黄橙色	胴部破片で外面に縦位～斜位の条線施文。
0065 図134 75	縄文土器 深鉢	I区6面 確認面	破片	—	胎土 砂粒少 焼成 硬質 色調 灰褐色	丸みを有する胴部破片で、斜位のハケ目を施す。
0069 図134 76・79	弥生土器 壺	I区6面 2S-10	完形	器高 10.4 口径 6.0 底径 4.2 最大径 10.4	胎土 雲母、角閃石細粒他砂粒多 焼成 硬質 色調 灰褐色	胴部上位に最大径を有し、口縁部は内傾ぎみに立ち上がり、上端で外反する。口縁部は無文で肩部に円形刺突を施した突帯と浮線網状文を施す。胴部外面は全面磨き。胴部外面に朽痕と考えられる圧痕が認められる。
0261 図135 76	縄文土器 深鉢	III区6面 確認面	破片	—	胎土 砂粒含む 焼成 良好 色調 におい褐色	胴部の破片で、縦位及び斜位の条線施文後ボタン状貼付文を施す。
0262 図135 76	縄文土器 深鉢	III区6面 Y-43	破片	—	胎土 砂礫含む、緻密 焼成 良好 色調 褐色	整形良好で、内面には横位の整形痕が残る。1単位3mm程の条線文が施される。縄文は認められない。
0263 図135 76	縄文土器 深鉢	III区6面 確認面	破片	—	胎土 細砂粒含む、緻密 焼成 良好 色調 明赤褐色	整形良好で内面は平滑面を形成。縦位の条線文は密で部分的に重複する。
0265 図135 76	縄文土器 深鉢	III区6面 X-43	%残存	口径 36.0	胎土 砂粒少 焼成 硬質 色調 におい黄褐色	胴部に張りがほとんどない鉢形で内外面を比較的丁寧にナデている。1カ所口縁部下に焼成前の穿孔が1対認められる。
0388 図135 76	縄文土器 深鉢	IV区6面 確認面	破片	—	胎土 白色細粒多、砂粒少 焼成 やや硬質 色調 褐灰色	胴部上半に弱いくびれを有し、口縁部はわずかに内湾する。口縁部は無文でくびれ部外面に粘土紐を波状に貼付。
0389 図135 76	縄文土器 深鉢	IV区6面 確認面	破片	—	胎土 角閃石を含む、細粒砂少 焼成 硬質 色調 におい褐色	口縁部付近の破片で、幅広の沈線で文様を区画しRLを充填施文する。器面内外面、断面の摩滅が激しく、水によるローリングを受けたものと思われる。
0390 図135 77	縄文土器 深鉢	IV区6面 確認面	破片	—	胎土 石英細粒多、砂粒多 焼成 やや軟質 色調 灰黄色	胴部に張りのある器形で頸部に無文部を有する。胴部文様は沈線で曲線の文様を描出し、沈線間にLRを充填施文。器面の摩滅が激しい。
0391 図135 77	縄文土器 深鉢	IV区6面 確認面	破片	—	胎土 細粒砂少 焼成 硬質 色調 灰褐色	口縁部付近の破片で2条の細隆帯で巡らしている。

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴、その他
0392 図135 77	縄文土器 深鉢	IV区 6面 確認面	破片	—	胎土 粗粒砂少 焼成 硬質 色調 灰色	口縁部破片で内面はナデ、外面は横位の削りを施す。

1 面石類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0004 図29 43	石白 下白	I区 1面 5号土坑	径 34.5 厚 13.7 重12600.0	粗粒安山岩	分画不明。ふくみややあり。芯棒孔のえぐりが大きい。内外面摩滅。	
0002 図29 43	五輪塔 火輪	I区 1面 5号土坑	縦 27.0 横 26.5 高 15.0 重14200.0	粗粒安山岩	上下の軒反りはほぼ平行であり、ゆるやかに反る。軒口は下方に向かってわずかに内傾し、屋だるみはゆるやかである。	
0003 図29 43	五輪塔 地輪	I区 1面 5号土坑	縦 20.0 横 19.5 高 14.5 重 9100.0	粗粒安山岩	高さとの割合は0.80であり、ほぼ方形に近い。上面はふくみがあり、側面に梵アの刻書が認められる。一部外面剥落。	
0077 図30 44	砥石	II区 1面 3号溝	長 14.7 幅 3.3 厚 2.2 重 262.0	流紋岩	全面ともよく研磨している。	
0078 図31 45	石白 上白	II区 1面 3号溝	径 (35.0) 横 (44.5) 厚 10.0 重10600.0	粗粒安山岩	6分画13条を1単位とする。目の断面形は丸溝、輪の作り出しあり。くぼみは浅く、えぐりはややあり。	
0079 図31 45	石白 上白	II区 1面 3号溝	径 (37.0) 横 (48.0) 厚 11.5 重12500.0	粗粒安山岩	6分画7条を1単位とする。目の断面形は丸溝、輪の作り出しあり。軸受けの形状は円形。くぼみは深く、えぐりは大きい。タガネ痕あり。	
0081 図32 44	石製品 板碑	II区 1面 5号溝	厚 1.4 重 219.0	緑色片岩	浅い葉研彫りの阿弥陀如来種子(キリーク)一部が残る。キリークは「イー」が「アク点」間を抜ける書体。種子の大きさより、小型の板碑であろう。石材は長石を含まない緑色片岩。	
0082 図32 44	石製品 板碑	II区 1面 5号溝	厚 1.3 重 317.0	緑色片岩	浅い葉研彫りの阿弥陀如来種子(キリーク)及び、葉研彫りの蓮座の一部が残る。キリークは「イー」が「アク点」間を抜ける書体。種子の大きさより、No0081とほぼ同じ大きさの板碑であろう。石材もNo0081に類似する緑色片岩。	
0086 図32 46	五輪塔 火輪	II区 1面 5号溝	縦 24.8 横 25.5 高 17.0 重12300.0	粗粒安山岩	上下の反りは平行に近い形で、ゆるやかに反る。軒口は下方に向かって内傾し、屋だるみはゆるやかである。上面中央部に空風輪受けの孔がある。	
0085 図32 45	五輪塔 地輪	II区 1面 5号溝	縦 22.5 横 21.5 高 16.5 重11600.0	角閃石安山岩(ニツ岳)	高さとの割合は約0.80であり、ほぼ方形である。上面にふくみあり。外面剥落。	
0083 図32 44	石製品 宝篋印塔 相輪	II区 1面 5号溝	幅 11.3 重 1100.0	角閃石安山岩(ニツ岳)	九輪部分のうち四輪を残す。清花宝珠は残存しない。外面剥落。	
0087 図32 46	石白 上白	II区 1面 5号溝	径 (32.0) 厚 11.5 孔径 (3.5) 重 7200.0	粗粒安山岩	分画不明。中心に芯棒受けあり。くぼみはやや浅く、ふくみわずかにあり。側石に方形の輪孔あり。	
0084 図32 45	五輪塔 空風輪	II区 1面 5号溝	幅 19.1 高 23.5 重 6200.0	角閃石安山岩(ニツ岳)	高さとの割合は1.23である。空輪は宝珠形を呈し、先端部分は突出する。くびれは垂直であるがわずかに内湾する。風輪は下方に向かって内湾する。	

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0088 図33 46	石殿台座	II区1面 5号溝	幅 (34.0) 高 9.8 重 6100.0	粗粒安山岩	二重台座の上位部分であり、中心に円形の軸受けがある。	
0089 図33 46	石臼 上臼	II区1面 5号溝	径 (32.0) 厚 10.3 重 1400.0	粗粒安山岩	分画不明、溝の断面形は丸溝、くぼみは深く、側面に方形の軒口あり。中心部に芯棒受けあり。ふくみはややあり。	
0090 図33 46	石臼 上臼	II区1面 5号溝	径 (30.0) 厚 8.4 重 1700.0	粗粒安山岩	6分画、溝の断面形は丸溝、くぼみはやや浅く供給口あり、側面に方形の軒口あり。	
0093 図33 47	石臼 下臼	II区1面 5号溝	径 (26.0) 厚 14.0 重 8800.0	粗粒安山岩	分画不明。溝面は剝落。	
0091 図33 47	石臼 上臼	II区1面 5号溝	径 (28.0) 厚 12.5 重 5800.0	粗粒安山岩	分画不明。くぼみは浅くふくみは大きい。円形の供給口あり、側面に方形の軒口あり。	
0092 図33 47	石臼 下臼	II区1面 5号溝	径 (30.0) 厚 11.0 重 8300.0	粗粒安山岩	8分画、5溝を単位とする。中心に芯棒孔あり。くぼみは浅く、ふくみわずかにあり。溝の断面形は丸山型。外面摩滅。	
0096 図34 47	石製品 石鉢	II区1面 10号井戸	口径 16.8 器高 13.6 底径 14.6 重 2000.0	粗粒安山岩	外面はわずかに内湾し、立ち上がる。内面中位はくの字状に削り込まれている。外面摩滅。	
0116 図36 49	塔婆台座	II区1面 確認面	高 17.2 径 41.2 底径 28.0 重38500.0	粗粒安山岩	光背花立があり、周囲に蓮弁を刻む。水切り用の溝が1条認められる。	
0188 図38 50	両面加工 石器	III区1面 2号溝 Y-41	長 8.8 幅 6.8 厚 2.0 重 168.0	珪質頁岩	細部調整加工が両面を覆うため、素材は不明である。	
0190 図39 51	五輪塔 火輪	III区1面 2号井戸	縦 26.2 横 26.0 高 20.0 重13100.0	粗粒安山岩	上下の軒反りは平行である。軒口は下方に向かって内傾する。屋だるみは急である。上面中央に空風輪受けがある。	
0191 図39 51	石臼 上臼	III区1面 3号井戸	径 (32.0) 厚 8.5 重 2300.0	粗粒安山岩	分画不明。溝の断面形は、丸溝。側部に輪孔あり。くぼみは深く、円形の供給口あり。ふくみはわずかにあり。	
0205 図40 52	石臼 下臼	III区1面 確認面	径 (29.0) 厚 13.5 重 6100.0	粗粒安山岩	分画不明。中心部に芯棒孔あり。ふくみややあり。外面摩滅。	
0204 図41 52	石臼 上臼	III区1面 確認面	径 (56.0) 厚 18.0 孔径 (6.5) 重23600.0	粗粒安山岩	6分画9溝を1単位とする。溝の断面形は丸溝、くぼみは深く、中心部に芯棒孔あり。供給口あり。側面に方形の輪孔あり。	
0431 図44 53	塔婆 傘石	V区1面 5号溝	縦 24.5 横 31.0 重 5100.0	牛伏砂岩	四注形に宝珠がつく。軒口はわずかに内湾する。内外面に手斧痕を残す。方形の塔婆を残す。	
0406 図45 54	五輪塔 空風輪	V区1面 5号溝	高 23.5 幅 15.0 重 2900.0	角閃石安山岩	高さとの割合は1.41である。空輪の突出部は偏平となる。くびれは下面に向かって外湾し、風輪はやや内湾し縦長になる。	
0407 図45 54	五輪塔 空風輪	V区1面 5号溝	高 23.6 幅 18.0 重 8300.0	角閃石安山岩	高さとの割合は約1.31である。空輪はやや偏平になり、くびれは垂直に下がる。風輪は断面形で方形を呈する。刻書名あり。	
0408 図45 54	台石	V区1面 5号溝	長 19.5 幅 14.5 厚 7.5 重 3500.0	石英閃緑岩	石材の上下面を金床とする。側面自然礫面に一条の傷が認められる。	

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0409 図45 54	石製品 石鉢	V区1面 5号溝	縦 18.0 横 22.5 厚 13.5 重 3880.0	粗粒安山岩	外形は不定形、中央に円錐形に凹む。	
0475 図49 57	砥石	V区1面 6号溝	長 9.6 幅 3.5 厚 2.0 重 100.0	砥沢石	4面ともよく研磨されている。表面には溝状に研磨された部分もある。	
0476 図49 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	長 15.0 幅 5.2 厚 4.5 重 540.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。打痕は上下両端部に若干認められるにとどまるが、擦痕は側縁部に顕著である。	
0477 図49 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	長 13.6 幅 5.6 厚 4.1 重 520.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部には平滑面化した打痕が顕著に残っている。	
0478 図49 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	長 15.8 幅 6.8 厚 5.0 重 800.0	石英閃緑岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部と右側縁部に打痕が、表面部には擦痕が認められる。	
0479 図49 57	石製品 打製石斧	V区1面 6号溝	長 19.0 幅 5.5 厚 2.0 重 182.0	雲母石英片岩	偏平な礫を素材とする。細かい調整加工によって側縁及び刃部を作り出している。	
0495 図50 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	幅 6.3 厚 5.7 重 610.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とするが、上半部は欠損。下端部に打痕が若干認められる。	
0496 図50 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	長 14.0 幅 6.0 厚 3.8 重 498.0	砂岩	右側中央部に袈り部を持つ棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が若干認められる。	
0497 図50 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	長 14.5 幅 6.2 厚 4.9 重 620.0	蛇文岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部、右側縁部、表面部に打痕が顕著に認められる。	
0498 図50 57	コモアミ石	V区1面 6号溝	長 13.8 幅 5.3 厚 5.1 重 590.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が良く残る。	
0474 図50 58	石臼 下臼	V区1面 6号溝	厚 (11.0) 重 2300.0	粗粒安山岩	分画は不明。方形の餘孔がある。外面摩滅。	

2面石類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0034 図63 58	スクレイパー	I区2面 10号溝 2R-8	長 (9.9) 幅 6.0 厚 (3.7) 重 223.0	黒色頁岩	厚手の縦長剥片を素材とする。主要剥離面側に主に細部調整加工が施される。	
0035 図63 58	石製品 磨石	I区2面 10号溝 2R-8	長 12.1 幅 9.9 厚 4.1 重 674.0	粗粒安山岩	表面に一部研磨痕。側縁部は全周にわたって打痕が認められる。	
0037 図63 59	石製品 管玉	I区2面 11号溝 2S-10	長 3.0 幅 0.8 厚 0.9 重 3.0	蛇紋岩	完形。肉尾両面穿孔。紐ずれがわずかに認められる。使用による摩滅あり。	

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0033 図64 60	打製石斧	I区2面 12号溝 2T-8	長 13.9 幅 8.5 厚 1.8 重 198.0	珪質頁岩	縦長剥片を素材とする。細部調整加工は左右両側縁及び端部の背面側に施されているのみで、素材形状を保持している。	
0036 図64 59	多孔石	I区2面 12号溝 2R-7	幅 13.5 厚 6.5 重 1496.0	珪質変質岩	偏平な楕円盤を素材とする。凹部は最大径2.2cm、最深長0.4cm。	
0312 図75 66	凹石	IV区2面 M-57	長 13.4 幅 9.8 厚 4.3 重 690.0	粗粒安山岩	中央部に陥円形の凹部を持つ。大きさは9.6×6.3cmで深さは2.7cmである。	
0375 図75 67	凹石	IV区2面 確認面	厚 6.4 幅 15.0 重 2540.0	粗粒安山岩	表・裏面に擦痕。側縁に打痕が認められることから、欠損した大型の磨石を転用していると思われる。中央部の凹部の大きさは5.5×5.7cmで、深さは1.6cmである。	
0374 図75 67	石製品 白玉	IV区2面 確認面	径 0.5 厚 0.4 孔径 0.2 重 0.17	滑岩	断面円形を呈し、外面磨き、中心に穴貫通する。	
0399 図76 67	石鏃	V区2面 7号溝	長 2.9 幅 2.3 厚 0.4 重 2.48	黒色安山岩	両面とも入念な細部調整加工によって、製作されている。	
0453 図77 69	砥石	V区2面 確認面	長 8.2 幅 4.0 厚 0.8 重 34.0	珪質頁岩	表面は良く研磨されているが裏面は剥落が著しい。	
0454 図77 69	砥石	V区2面 確認面	長 12.4 幅 2.7 厚 2.4 重 140.0	砥沢石	4面とも良く研磨されている。	
0455 図77 69	石製品 打製石斧	V区2面 確認面	幅 5.3 厚 2.2 重 140.0	変質安山岩	刃部を欠損する。周辺調整によって側縁を整形している。	

4面石類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0125 図103 70	コモアミ石	II区4面 13号溝 2K-25	長 16.1 幅 7.0 厚 2.9 重 590.0	雲母石英片岩	上下両端部に比較的弱い打痕。左右両側縁は研磨して面取りされている。偏平な楕円盤を素材としている。	
0124 図103 70	石製品 管玉	II区4面 2I-25	長 1.8 幅 0.6 厚 0.6 重 1.0	滑石	ほぼ完形であるが、片面一部欠損。両面穿孔。わずかに紐ずれ痕を残す。	
0254 図103 70	石製品 白玉	III区4面 12号溝 Z-41	径 0.6 厚 0.4 孔径 0.2 重 0.22	滑石	ほぼ完形であるが、片面一部欠損。輪切成形。使用による摩滅あり。外面ケズリ痕を残す。	
0255 図104 71	石製品 白玉	III区4面 24号溝 W-44	径 0.5 厚 0.3 孔径 0.1 重 0.16	滑石	完形。外面ケズリ痕を残す。輪切成形。	
0256 図105 72	石製品	III区4面 W-44	縦 2.8 幅 1.8 孔径 0.2 重 2.0	蛇紋岩	形状はほぼ半円形。石材の剝離面を利用し加工される。単孔ではあるが、穿孔時の位置修正が認められる。	

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0257 図105 72	石製品	Ⅲ区4面 Z-40	縦 2.3 幅 1.7 孔径 0.3 重 5.0	滑石	将棋の駒に似た形を示し、両側面にケズリ成形痕を残す。単孔であるが片面の穿孔口に位置の修正痕を残す。用途不明。	
0509 図109 72	打製石斧	V区4面 16号溝 H-70	長 16.5 幅 8.0 厚 3.5 重 480.0	細粒安山岩	細かい調整加工によって刃部を作り出している。刃部は使用による摩滅がみられる。	
0543 図109 75	コモアミ石	V区4面 確認面	長 16.5 幅 6.3 厚 5.0 重 780.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部と側縁に若干打痕が認められる。	
0544 図109 75	コモアミ石	V区4面 確認面	長 16.3 幅 6.0 厚 4.2 重 650.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が若干認められる。	
0545 図109 75	コモアミ石	V区4面 確認面	長 13.8 幅 6.3 厚 5.5 重 780.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上下両端部に打痕が認められる。	
0546 図109 75	コモアミ石	V区4面 確認面	長 13.9 幅 4.9 厚 4.2 重 480.0	粗粒安山岩	棒状の礫を素材とする。上端部に打痕、下端部に擦痕が認められる。	
0547 図109 75	コモアミ石	V区4面 確認面	長 13.5 幅 6.3 厚 3.6 重 460.0	粗粒安山岩	やや偏平な礫を素材とする。上下両端部に打痕が認められる。	

6面石類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石 材	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0264 図135 76	多孔石	Ⅲ区6面 確認面	長 18.9 幅 17.5 厚 12.8 重 3680.0	粗粒安山岩	凹部の最梁径4.0cm、最深長1.5cm。球状に近い礫を素材としている。	
0253 図135 76	打製石斧	Ⅲ区6面 2A-41	長 8.4 幅 5.1 厚 1.3 重 86.0	珪質頁岩	刃部と上端部が欠損する。上端部は欠損後再加工している。刃部は欠損が著しく、器体が形状修正不能な部分まで使用されていたことがわかる。	

古銭遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	出土位置	銭貨名	読順	材質	外径	内径	孔	時代	初鑄造年	備考
0001	29図	43	I区1面 5号土坑	元豊通宝	対読	銅	24.0	17.0	6.0	北宋	1078	
0010	29図	43	I区1面 2R-9	至道元宝	対読	銅	24.0	18.0	5.5	北宋	995	
0011	29図	43	I区1面 2R-10	皇宋通宝	対読	銅	23.5	19.0	7.0	北宋	1039	
0012	29図	43	I区1面 2R-7	治平元宝	順読	銅	23.0	17.5	5.0	北宋	1064	
0013	29図	43	I区1面 2R-8	元祐通宝	対読	銅	24.0	18.0	7.0	北宋	1093	
0156	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	皇宋通宝	対読	銅	24.0	20.0	7.0	北宋	1039	
0142	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	24.0	20.0	6.0	江戸	1636	
0143	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	22.5	18.0	6.0	江戸	1636	
0146	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	22.5	18.0	6.5	江戸	1636	
0148	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	24.0	20.0	6.5	江戸	1636	
0149	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	22.0	18.5	5.5	江戸	1636	
0150	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	24.5	20.0	6.0	江戸	1636	
0151	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	23.0	19.0	6.5	江戸	1636	
0152	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	25.0	18.0	6.0	江戸	1636	
0153	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	22.5	18.5	6.5	江戸	1636	

遺物番号	挿図番号	写真図版	出土位置	銭貨名	読順	材質	外径	内径	孔	時代	初鑄造年	備考
0154	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	22.5	17.0	6.0	江戸	1636	
0158	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	23.0	19.0	6.0	江戸	1636	
0160	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	24.0	19.5	6.0	江戸	1636	
0163	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	23.0	19.0	6.0	江戸	1636	
0165	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	25.0	20.0	6.0	江戸	1636	
0166	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	24.0	19.0	6.0	江戸	1636	
0167	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	24.5	19.0	5.5	江戸	1636	
0168	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	23.0	19.0	6.0	江戸	1636	
0180	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	24.5	20.0	5.0	江戸	1636	
0183	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	23.0	17.0	5.0	江戸	1636	
0187	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	24.0	18.5	6.5	江戸	1636	
0210	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	22.5	18.0	6.0	江戸	1636	
0175	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	—	—	—	江戸	1636	2個体
0176	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	—	—	6.5	江戸	1636	
0157	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	28.0	21.5	6.0	江戸	1636	
0161	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	28.0	21.0	6.5	江戸	1636	
0162	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	28.0	20.5	6.5	江戸	1636	
0164	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	28.0	21.0	6.0	江戸	1636	
0173	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	28.0	21.0	6.5	江戸	1636	
0186	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	28.0	21.0	6.0	江戸	1636	
0145	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	寛永通宝	対読	銅	—	—	—	江戸	1636	
0184	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	寛永通宝	対読	銅	28.0	21.0	—	江戸	1636	
0144	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	文久永宝	対読	銅	26.0	20.0	6.0	江戸	1863	
0147	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝	文久永宝	対読	銅	26.0	21.0	6.0	江戸	1863	
0159	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	文久永宝	対読	銅	22.0	28.0	6.5	江戸	1863	
0169	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	文久永宝	対読	銅	21.0	22.0	6.0	江戸	1863	
0170	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	文久永宝	対読	銅	26.0	20.0	7.0	江戸	1863	
0171	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	文久永宝	対読	銅	26.0	20.5	6.5	江戸	1863	
0172	37図	49	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	文久永宝	対読	銅	27.0	21.0	6.5	江戸	1863	
0178	37図	52	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	一銭銅貨	—	銅	22.0	20.0	—	大正	1920	
0177	37図	52	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	半銭銅貨	—	銅	22.0	20.0	—	明治	—	
0179	37図	52	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	一銭銅貨	—	銅	27.0	25.0	—	明治	1885	
0155	37図	52	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	一銭銅貨	—	銅	26.0	26.0	—	江戸	1636	
0174	37図	52	Ⅲ区1面 1号溝 Y-43	二銭銅貨	—	銅	31.0	28.0	—	明治	1881	
0202	40図	52	Ⅲ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	27.0	26.0	—	明治	1885	
0203	40図	49	Ⅲ区1面 確認面	寛永通宝	対読	銅	22.5	18.0	6.0	江戸	1636	
0554	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	22.5	21.0	—	大正	1918	
0555	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	22.0	21.0	—	大正	1922	
0556	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	23.0	20.0	—	大正	1919	
0557	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	23.0	21.0	—	大正	1921	
0558	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	23.0	21.5	—	昭和	1937	
0559	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	23.0	21.0	—	大正	1921	
0560	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	23.0	21.0	—	大正	1922	
0561	42図	52	Ⅳ区1面 確認面	一銭銅貨	—	銅	23.5	22.0	—	隆熙	朝鮮隆熙4年	
0573	50図	58	V区1面 6号溝	開元通宝	対読	銅	23.0	19.0	6.5	唐	621	
0575	50図	58	V区1面 6号溝	景德通宝	順読	銅	24.0	19.0	5.0	北宋	1004	
0577	50図	58	V区1面 6号溝	景德通宝	順読	銅	24.0	21.0	6.0	北宋	1004	
0570	50図	58	V区1面 6号溝	皇宋通宝	対読	銅	24.5	20.0	6.5	北宋	1039	
0567	50図	58	V区1面 6号溝	熙寧元宝	順読	銅	22.5	18.0	6.0	北宋	1068	
0566	50図	58	V区1面 6号溝	元豊通宝	順読	銅	24.0	19.0	6.0	北宋	1078	
0571	50図	58	V区1面 6号溝	元豊通宝	順読	銅	24.0	20.0	6.5	北宋	1078	
0579	50図	58	V区1面 6号溝	元祐通宝	順読	銅	24.0	21.0	7.0	北宋	1093	
0569	50図	58	V区1面 6号溝	紹聖元宝	順読	銅	22.0	18.0	7.0	北宋	1094	
0578	50図	58	V区1面 6号溝	紹聖元宝	順読	銅	24.0	21.0	6.5	北宋	1094	
0572	50図	58	V区1面 6号溝	元符通宝	順読	銅	24.0	20.5	6.5	北宋	1098	
0568	50図	58	V区1面 6号溝	政和通宝	対読	銅	25.0	19.0	6.0	北宋	1111	
0574	50図	58	V区1面 6号溝	永樂通宝	対読	銅	23.0	19.0	5.5	明	1411	
0576	50図	58	V区1面 6号溝	永樂通宝	対読	銅	25.0	21.0	5.0	明	1411	
0563	50図	58	V区1面 確認面	寛永通宝	対読	銅	28.0	20.0	6.0	江戸	1636	
0397	51図	58	V区1面 確認面	寛永通宝	対読	銅	23.0	20.0	5.5	江戸	1636	
0398	51図	58	V区1面 確認面	寛永通宝	対読	銅	23.5	20.0	5.5	江戸	1636	

1 面金属類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	残存	出土位置	計測値 (cm・g)	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0181 37図 50	銅製品 鑑	完形	III区1面 1号溝	縦 2.6 横 3.4 厚 1.0 重 21.3	鑑上端部に、等辺の面をもち、断面形は五角形を呈する。金メッキ。緑青付着。	
0551 37図 50	銅製品 刀装具か	完形	III区1面 1号溝 Y-43	長 10.0 最大幅0.55 縦 1.5 重 22.4	「U」字状に曲げた部材と細長い平坦な部材とで構成されている。	
0548 37図 50	鉄製品 髪ざし	柄残存	III区1面 1号溝 X-45	縦 0.9 横 7.2 厚 0.6 重 2.7	柄の断面形は階円形を呈し柄先にかけて、均一な先細りを示す。先端部は金属疲労により、鋭利に切断。金メッキ空洞。	細部 縦1.4 厚0.2
0553 37図 50	銅製品 煙管	完形	III区1面 1号溝 Y-43	縦 1.4 横 2.3 厚 0.4 重 1.5	キセル(煙管)の吸い口。吸い口端部は正円で平端面がある。他端部は潰れており、合わせ部に亀裂が入っている。全体に緑青が付着する。	細部 縦1.2 厚0.5
0562 42図 52	銅製品 飾金具	完形	IV区1面 M-58	縦 2.5 横 2.4 厚 0.1 重 3.1	4枚の花弁状を呈し、中央に一辺7.5mmの正方形の穿孔がある。表面は平滑に仕上げられており、本来は塗金が施されていたものと思われる。	

2 面金属類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	残存	出土位置	計測値 (cm・g)	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0372 75図	金属 和鏡		IV区2面	縦 7.0 横 6.8 厚 3.5 重 7.9	第5章 第1節 元総社寺田遺跡・下高瀬上之原遺跡出土の八稜鏡参照。	
0373 75図	金属 和鏡		IV区2面	縦 7.5 横 7.3 厚 4.0 重 39.9	同上	

3 面金属類遺物観察表

遺物番号 挿図番号 写真図版	種別 器種	残存	出土位置	計測値 (cm・g)	器形・成・整形の特徴、その他	備考
0387 91図 69	鉄製品 鑿	刃先のみ 残存	IV区3面	長 7.0 幅 1.6 厚 0.3 重 19.3	歯先は剥離し、金属層理が認められる。サビ付着。	

写 真 图 版



1. 遺跡上空から相馬ヶ原扇状地と牛池川を望む（南東から）

写真図版 2



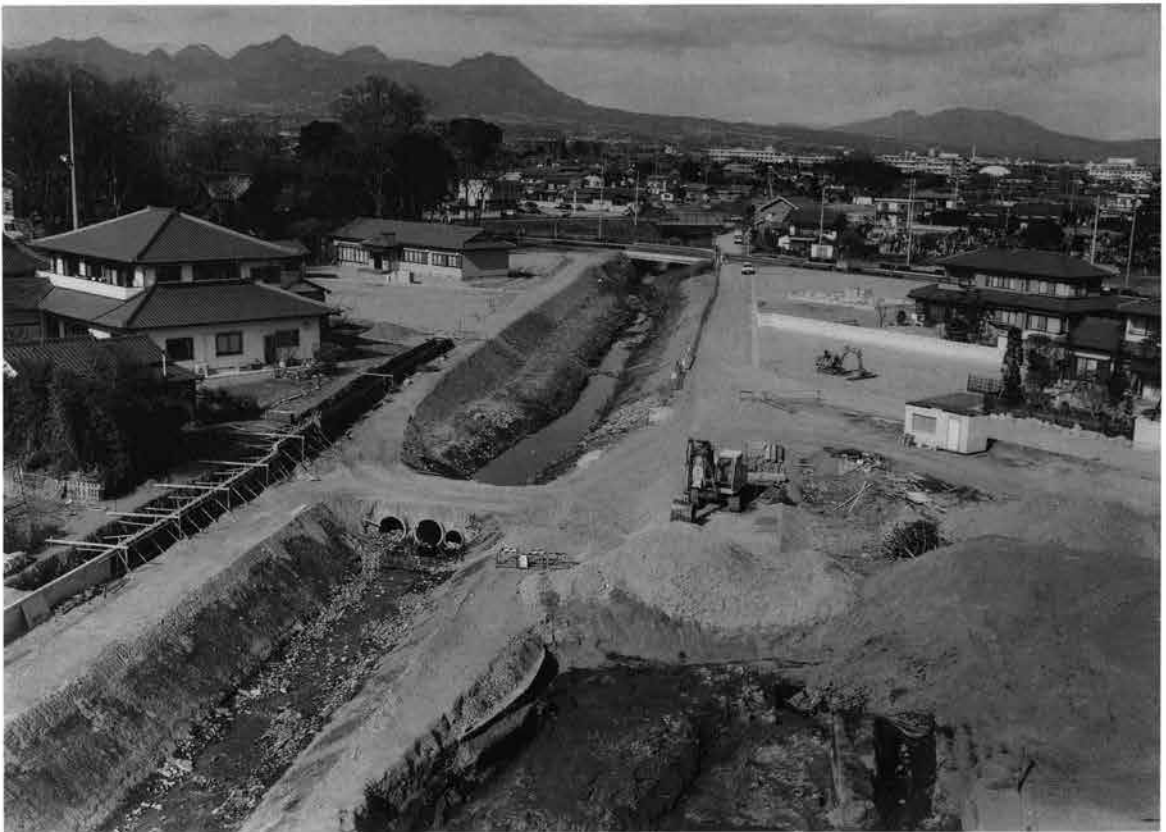
1. 空から見た牛池川と染谷川の合流地点（東から）



2. 空から見た推定国府域と元総社寺田遺跡（南から）



1. I区から下流部方向市街地を望む（北西から）



2. IV区から上流部方向榛名山を望む（南東から）

写真図版 4



1. II区 作業風景（北から）



2. V区 排水作業風景（北東から）



3. V区 作業風景



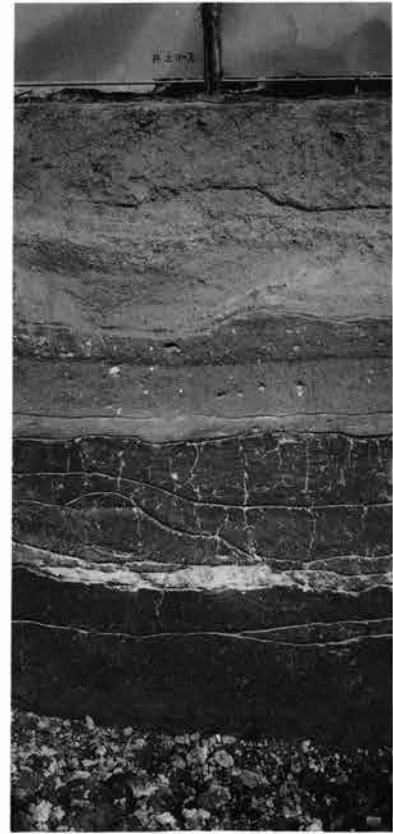
4. 元総社小学校児童の遺跡見学



1. II区南半 台地部土層断面（南から）

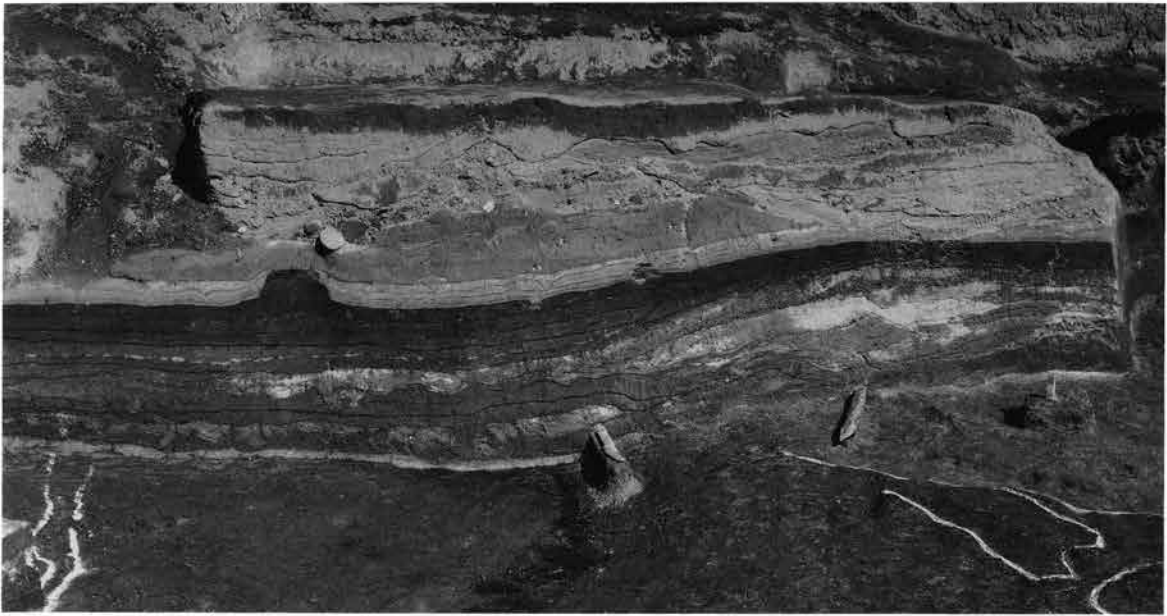


2. IV区南半 低地部土層断面（南から）



3. IV区 基本土層（南西から）

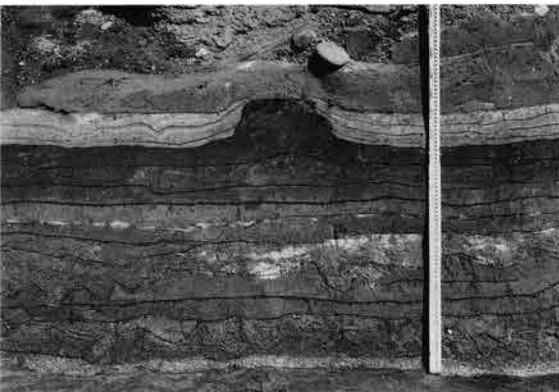
写真図版 6



1. IV区南端 土層断面 (南西から)



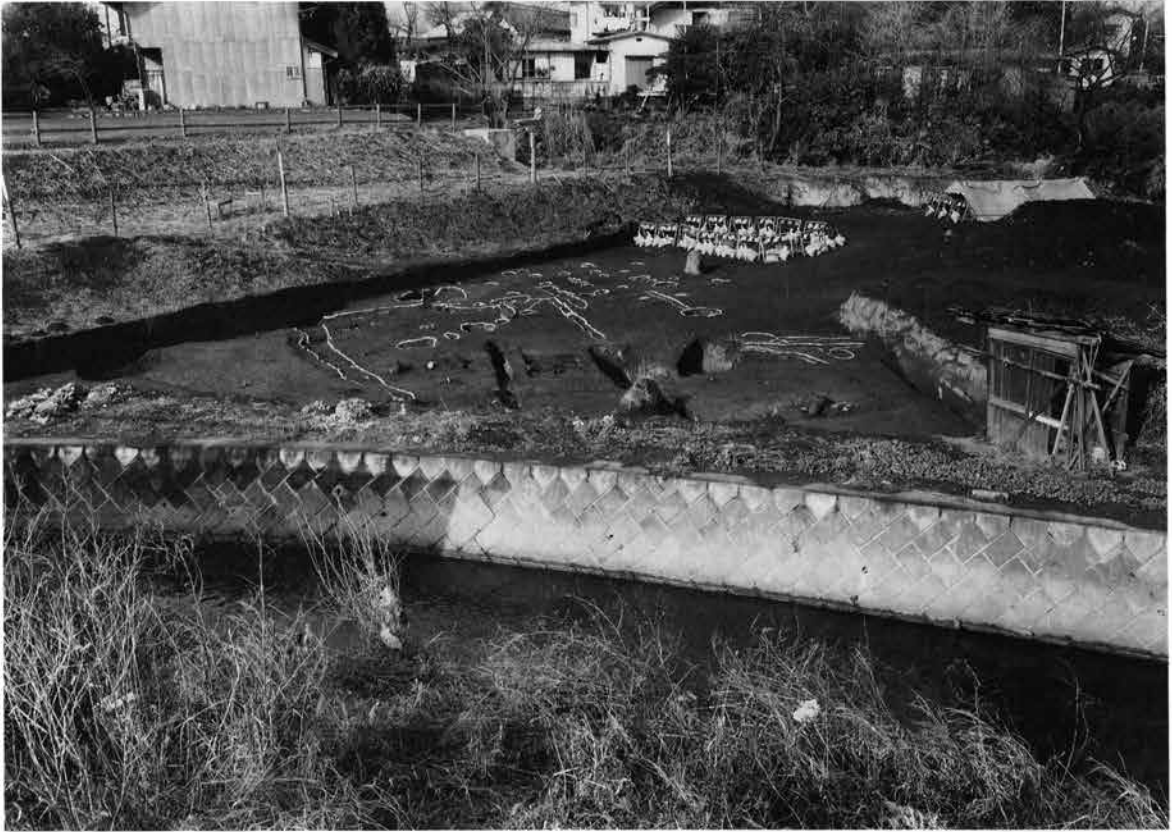
2. V区 土層断面 (北西から)



3. IV区南端 基本土層 (南西から)



4. V区 基本土層 (西から)



1. I区1面 現牛池川と調査区全景（東から）



2. I区1面 1号井戸全景（西から）



3. I区1面 1号井戸土層断面（南から）



4. I区1面 5号土坑全景（北東から）



5. I区1面 5号土坑遺物出土状況（北西から）



1. II区1面 全景 (南東から)



2. II区1面 5号溝全景 (南東から)



1. II区1面 1・2号溝全景 (東から)



2. II区1面 4号溝全景 (北東から)



3. II区1面 3号溝遺物出土状況



4. II区1面 4号溝土層断面 (西から)

写真図版10



1. II区1面 1号土坑土層断面 (南西から)



2. II区1面 3号井戸全景 (南から)



3. II区1面 4号井戸全景 (北から)



4. II区1面 7号井戸全景 (南東から)



5. III区1面 全景 (北から)



1. V区1・2面 全景（南東から）



2. V区1・2面 全景（北西から）

写真図版12



1. V区1面 1・2号溝全景（東から）



2. V区1面 1・2号溝土層断面（南東から）



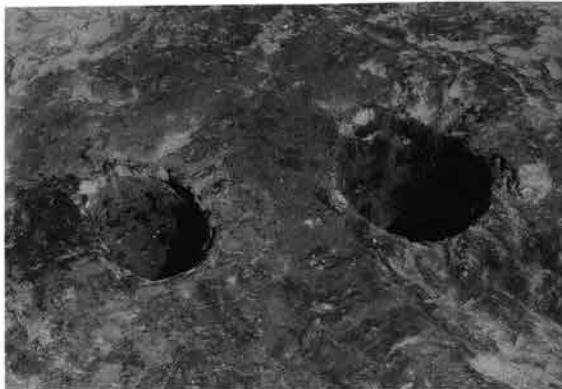
3. V区1面 6号溝全景（北西から）



4. V区1面 1号井戸全景（南から）



5. V区1面 2号井戸全景（南から）



6. V区1面 3・4号井戸全景（南から）



7. V区1面 5号井戸全景（東から）



8. V区1面 5号井戸土層断面（東から）



1. I区2面 全景 (南から)



2. IV区2面 全景 (北西から)

写真図版14



1. IV区2面南端 1号住全景 (西から)



2. IV区2面南端 1号住カマド全景 (西から)



3. IV区2面南端 1号住遺物出土状況 (西から)



4. IV区2面南端 FPF-1上面 全景 (北東から)



1. IV区2面南端 1号住カマド土層断面（南から）



2. IV区2面南端 1号土坑全景（西から）



3. IV区2面南端 1号溝全景（西から）



4. IV区2面南端 1号溝遺物出土状況



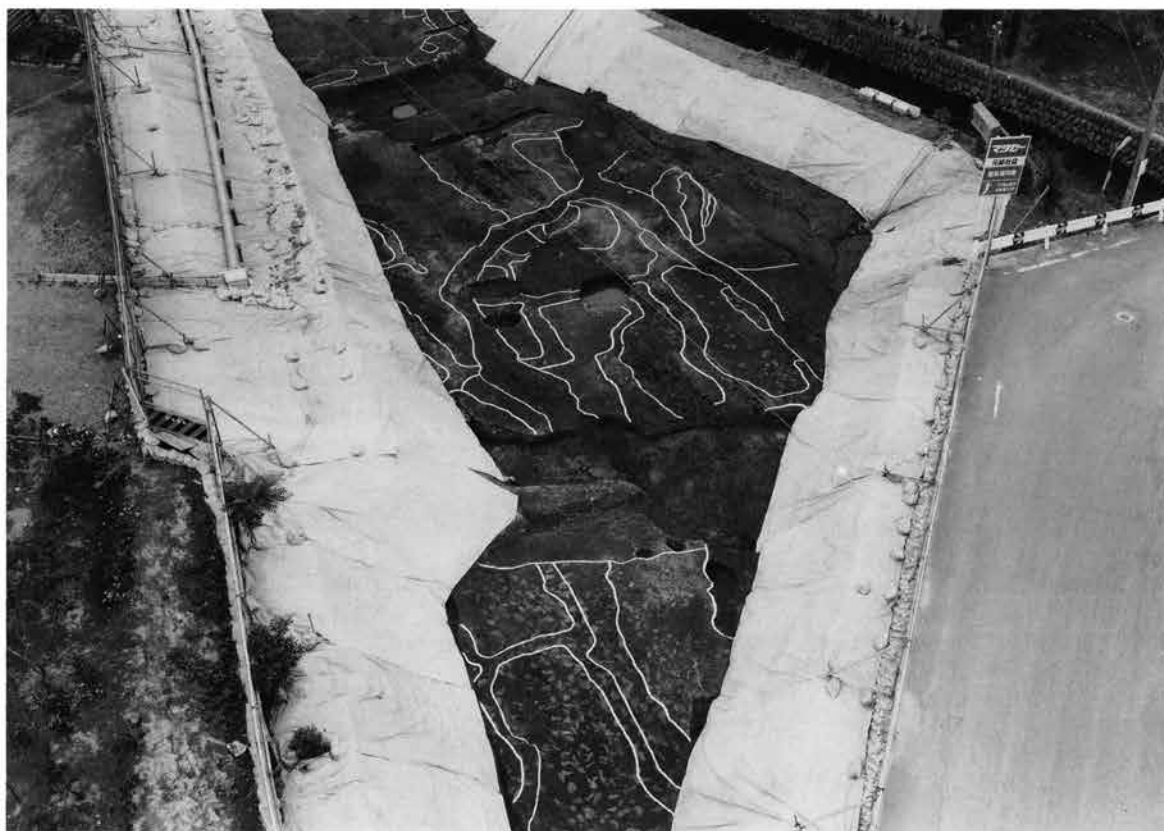
5. IV区2面南端 2号溝全景（南東から）



6. V区2面北半 8・9号溝全景（南東から）



7. V区2面 9号溝全景（北東から）



1. II区3面 全景 (北から)



2. II区3面 FA下水田と溝 (北から)



1. II区3面 北半全景(南東から)



2. II区3面北端 FA下水田・溝検出状況(北から)



3. II区3面 7号溝全景(南東から)



4. II区3面 7号溝土層断面(南東から)



5. II区3面 8号溝全景(北西から)



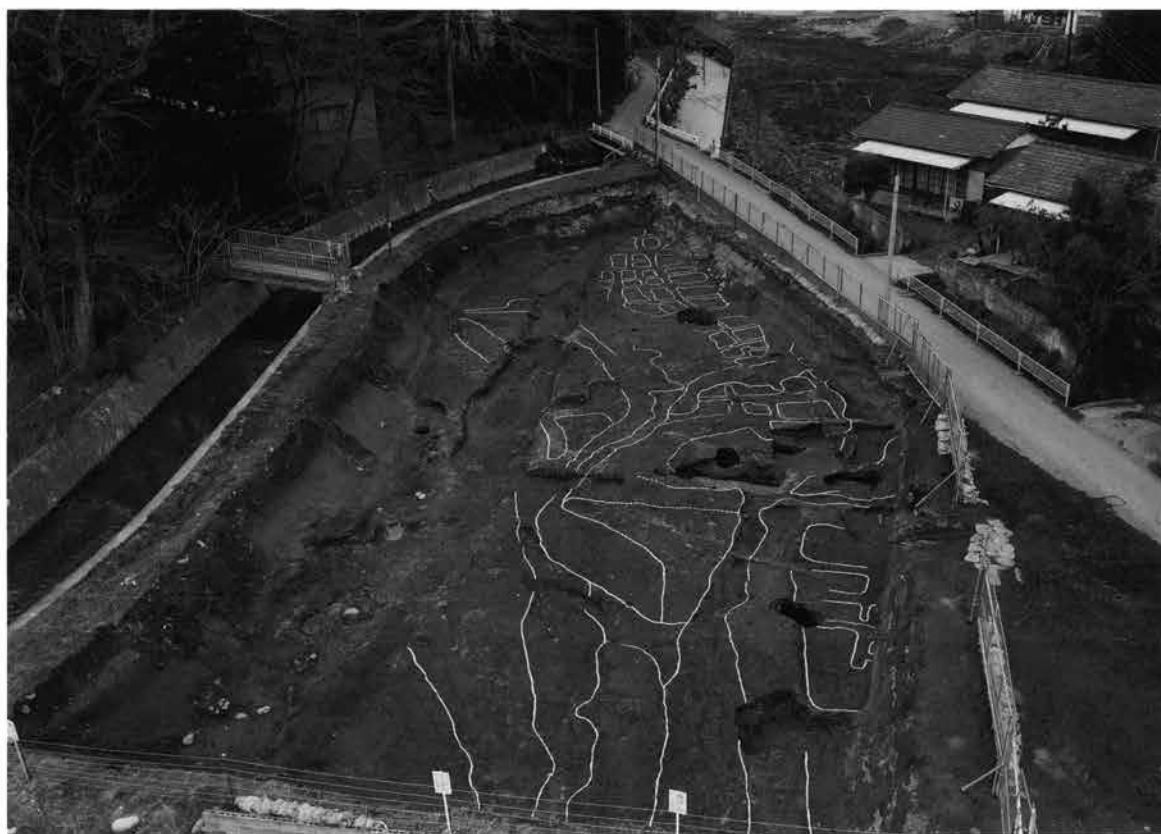
6. II区3面 8号溝土層断面(南西から)



7. II区3面 9・10号溝全景(北から)



8. II区3面 9号溝土層断面(北東から)



1. III区3面 全景 (南東から)



2. III区3面北半 全景 (北西から)



1. III区3面北半 FA下水田検出状況（北西から）



2. III区3面北半 FA下水田検出状況（南西から）



3. III区3面 大畦とFA下水田区画（北から）



4. III区3面 大畦とFA下水田区画（南東から）



5. III区3面 7号溝全景（南東から）



6. III区3面 7号溝土層断面（東から）



7. III区3面 遺物出土状況（東から）



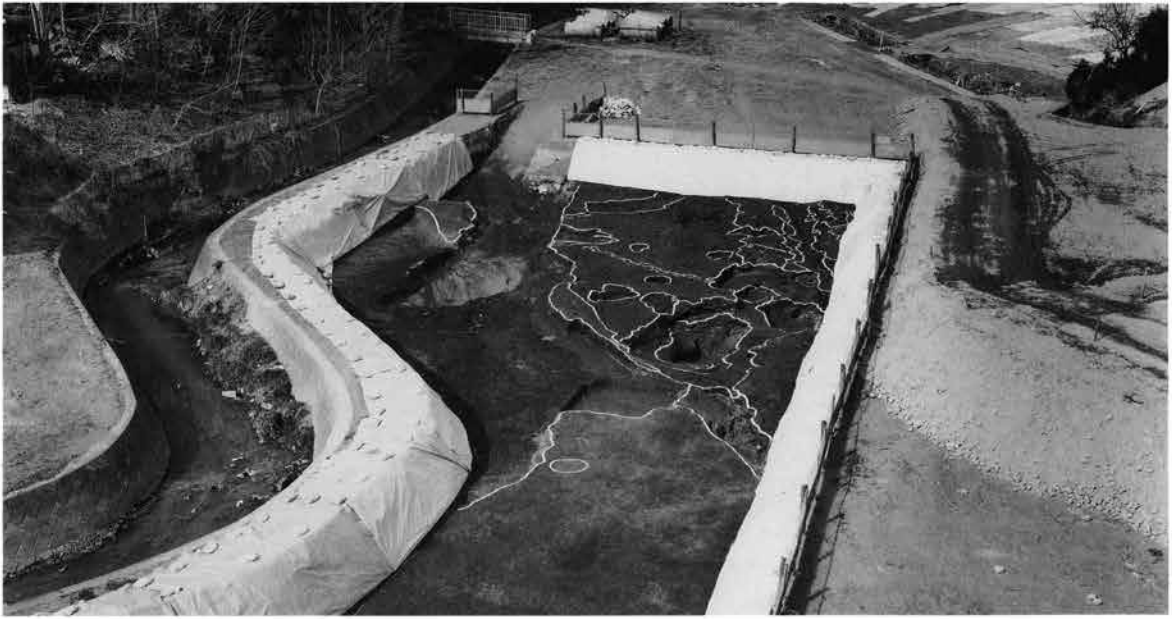
8. III区3面 遺物出土状況（東から）



1. IV区3面 全景（北西から）



2. IV区3面 全景（南東から）



1. IV区3面北半 全景（南東から）



2. IV区3面北半 全景（南東から）



3. IV区3面北半 足跡検出状況（東北東から）



4. IV区3面 8号溝全景（南東から）



1. IV区3面南半 全景（北東から）



2. IV区3面南半 水田区画と足跡群（南東から）



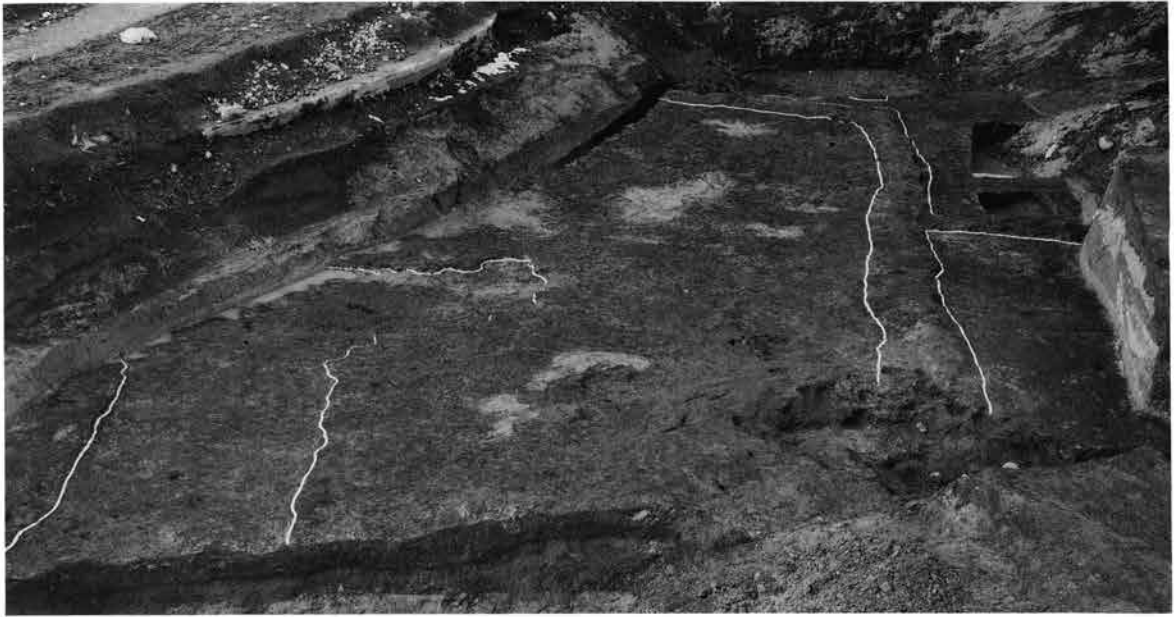
3. IV区3面南半 蛙検出状況（南から）



4. IV区3面南半 12・13号溝全景（南東から）



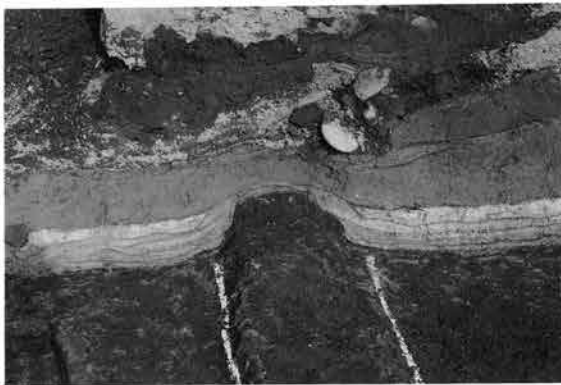
5. IV区3面 遺物出土状況（東から）



1. IV区3面南端 全景 (南東から)



2. IV区3面南端 全景 (北西から)



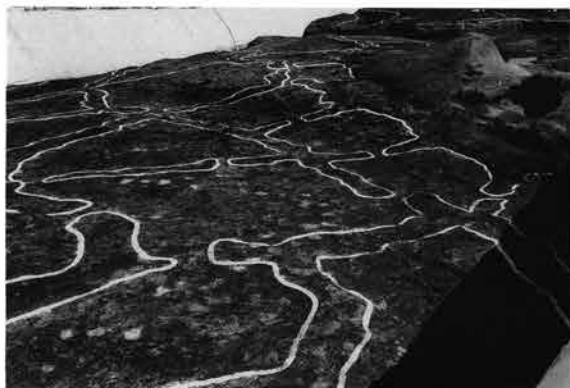
3. IV区3面南端 畦検出状況 (南西から)



4. IV区3面南端 葦検出状況



1. V区3面 全景 (南東から)



2. V区3面北半 FA下水田検出状況 (北西から)



3. V区3面北半 10号溝全景 (北西から)



1. V区3面南半 全景（北東から）



2. V区3面南半 足跡検出状況（南東から）



3. V区3面南半 水田面に残る足跡群（北西から）



4. V区3面南半 指先まで明瞭な足跡（北西から）



5. V区3面南半 13号溝全景（北西から）



6. V区3面南半 遺物出土状況



1. III区4面 木器出土状況（北西から）



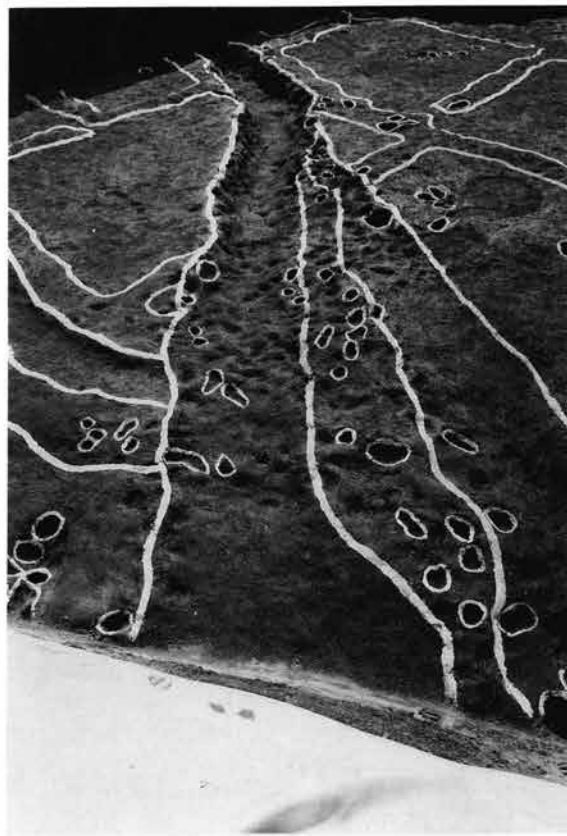
2. III区4面 24号溝木器出土状況（南東から）



1. III区4面 調査区北壁に残る井堰跡(西から)



2. IV区4面北半 16号溝木器出土状況(北西から)



3. IV区4面南半 17・18号溝全景(北東から)



1. IV区4面南端 第3洪水砂下水田全景（南東から）



2. IV区4面南端 第2洪水砂下水田全景（北西から）



1. V区4面 木器出土状況（南東から）



2. V区4面南半 14・15・16号溝全景（南東から）



1. I区5面 全景 (南から)



2. I区5面 13・14号溝全景 (南東から)



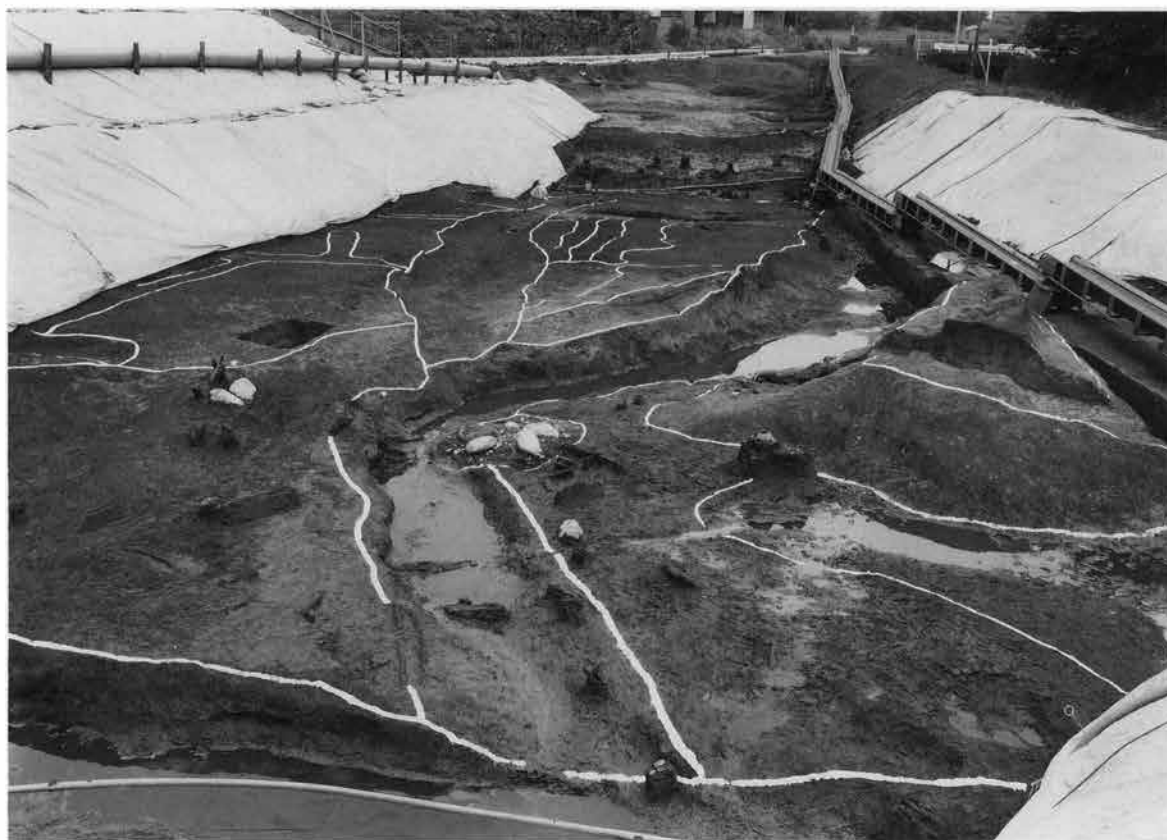
3. I区5面 13・14号溝土層断面 (南東から)



4. I区5面 14号溝の杭検出状況 (南から)



1. II区5面 全景（北西から）



1. II区5面 17号溝とAs-C下水田(北西から)



2. II区5面北半 全景(北西から)



3. II区5面北端 蛙検出状況(北西から)



4. II区5面 杭列検出状況(南東から)



5. II区5面 杭列打ち込み状況(南西から)



1. III区5面 全景 (南東から)



2. III区5面 24・31号溝とAs-C下水田 (東から)



3. III区5面 31号溝とAs-C下水田 (北西から)



4. III区5面 水田区画を横切る24号溝 (北東から)

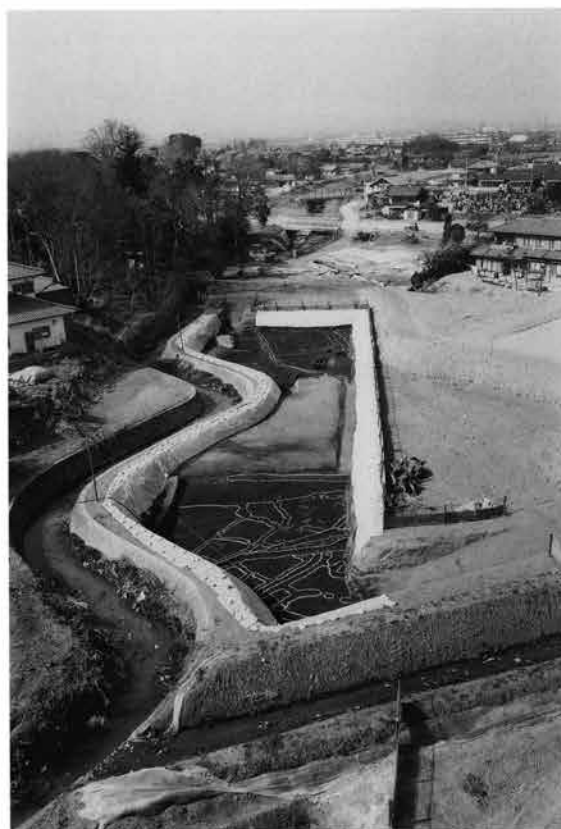


5. III区5面 28号溝と畦畔 (北東から)

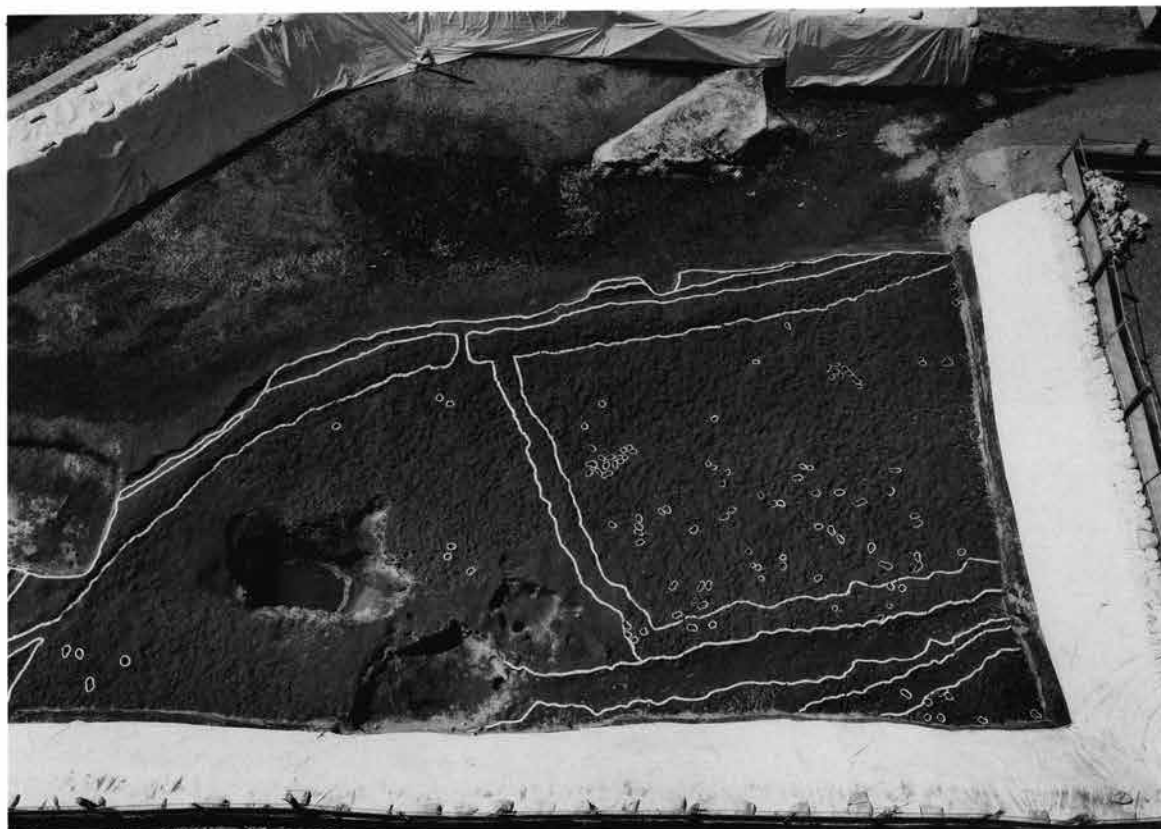
写真図版34



1. IV区5面 全景（北西から）



2. IV区5面 全景（南東から）



3. IV区5面北半 全景（北東から）



1. IV区5面北半 30号溝全景 (南東から)



2. IV区5面北半 31号溝全景 (北西から)



3. IV区5面北半 水田面に残る足跡群 (北から)



4. IV区5面北半 蛙検出状況 (北東から)



5. IV区5面北半 蛙検出状況 (東から)



6. IV区5面北半 水口検出状況 (北東から)



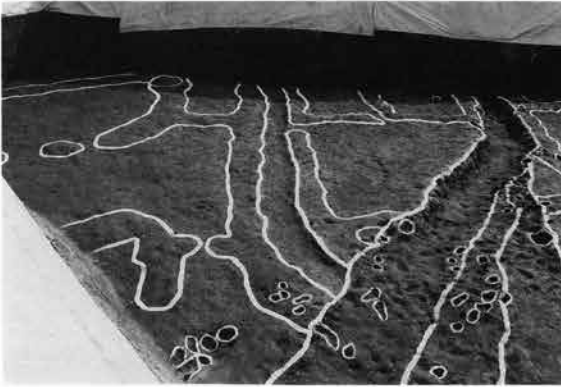
1. IV区5面南半 全景（北東から）



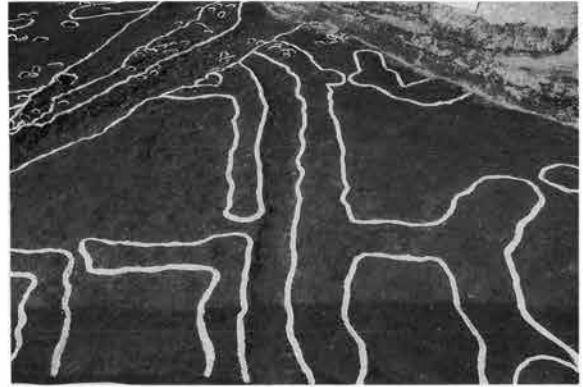
2. IV区5面 32号溝全景（北東から）



3. IV区5面 33号溝全景（北から）



1. IV区5面南半 33号溝全景（北から）



2. IV区5面南半 33号溝と水田区画（南から）



3. IV区5面南半 As-C下水田区画（南から）



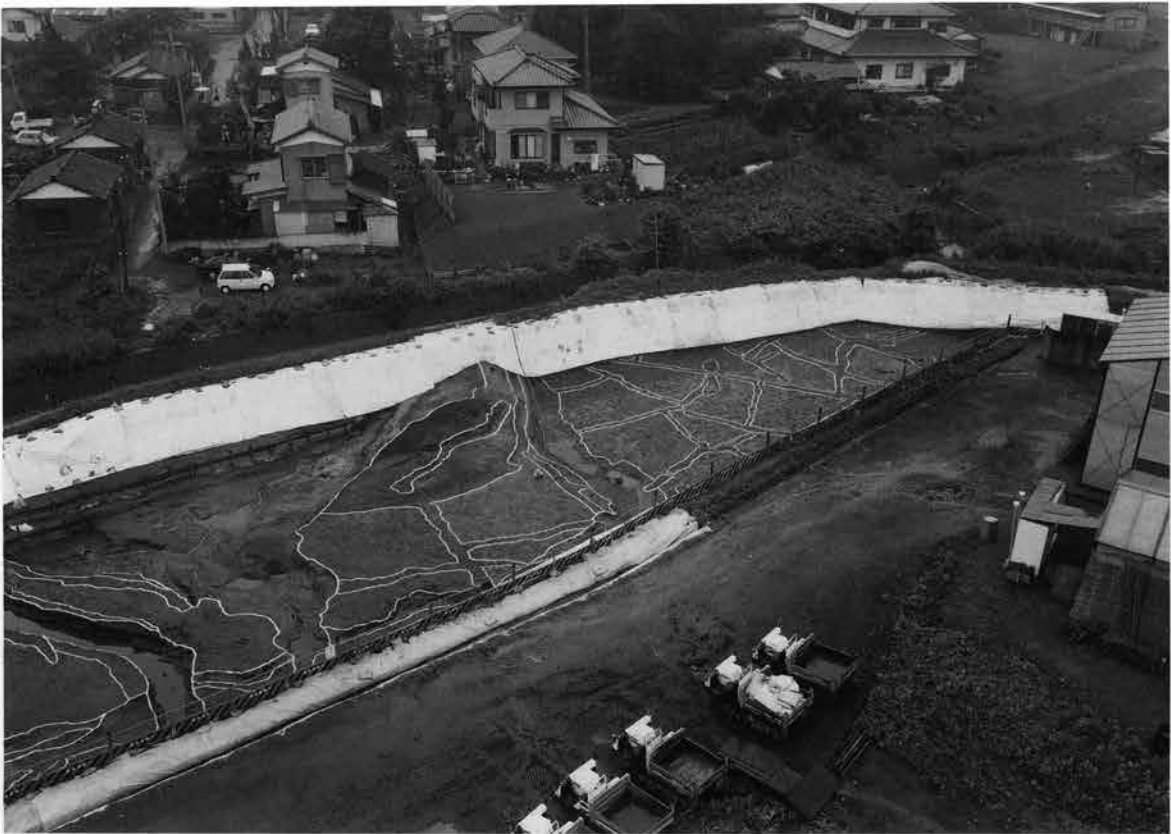
4. IV区5面南半 32号溝と水田区画（北から）



5. IV区5面南端 全景（南東から）



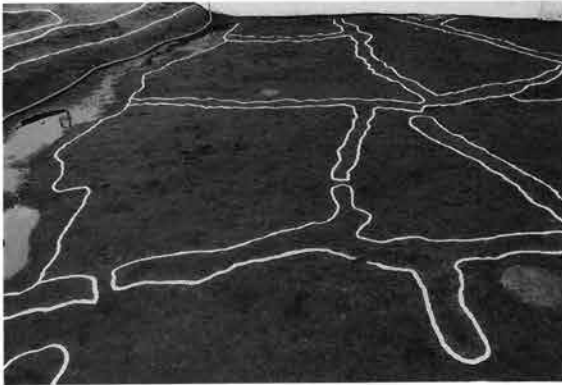
1. V区5面 全景 (南東から)



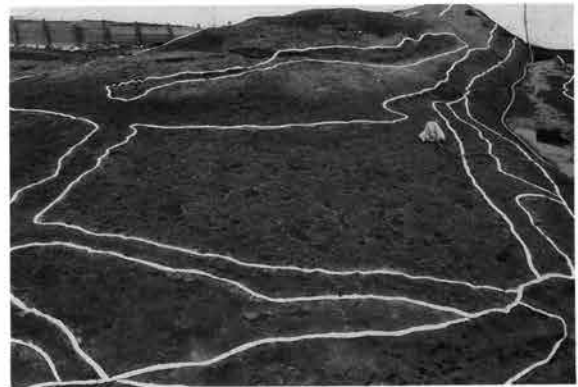
2. V区5面北半 全景 (東から)



1. V区5面南半 全景 (東から)



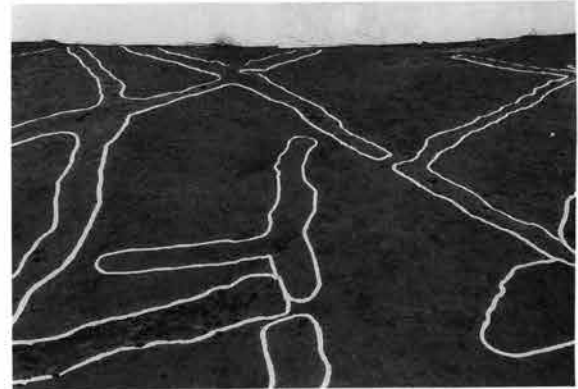
2. V区5面北半 As-C下水田区画 (東から)



3. V区5面北半 As-C下水田区画 (東から)



4. V区5面北半 As-C下水田区画 (東から)



5. V区5面北半 As-C下水田区画 (南西から)

写真図版40



1. V区5面北半 As-C下水田区画(東から)



2. V区5面南半 As-C下水田区画(東から)



3. V区5面南半 19号溝と水田区画(南西から)



4. V区5面南半 19号溝と水田区画(西から)



5. V区5面南半 19号溝と水田区画(南西から)



6. V区5面南半 19号溝と水田区画(北西から)



7. V区5面南半 蛙の補強材検出状況(北東から)



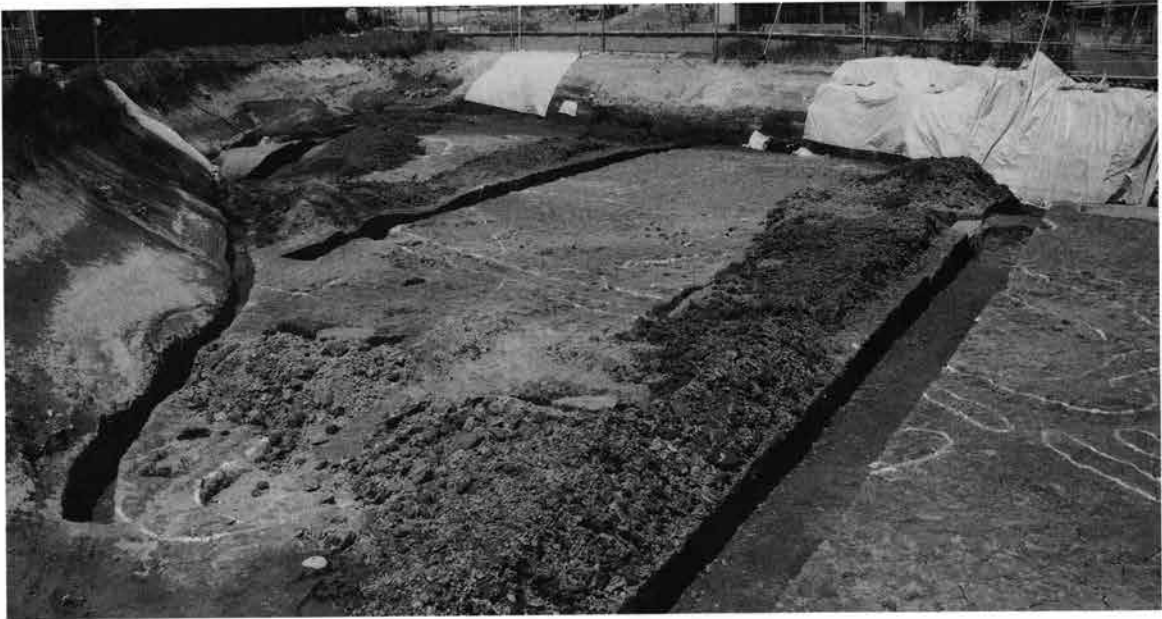
8. V区5面南半 遺物出土状況



1. I区6面 全景 (南東から)



2. I区6面 遺物出土状況



3. III区6面 試掘設定状況 (南東から)



4. III区6面 遺物出土状況



5. III区6面 流木出土状況



1. IV区6面南端 流木出土状況（南西から）



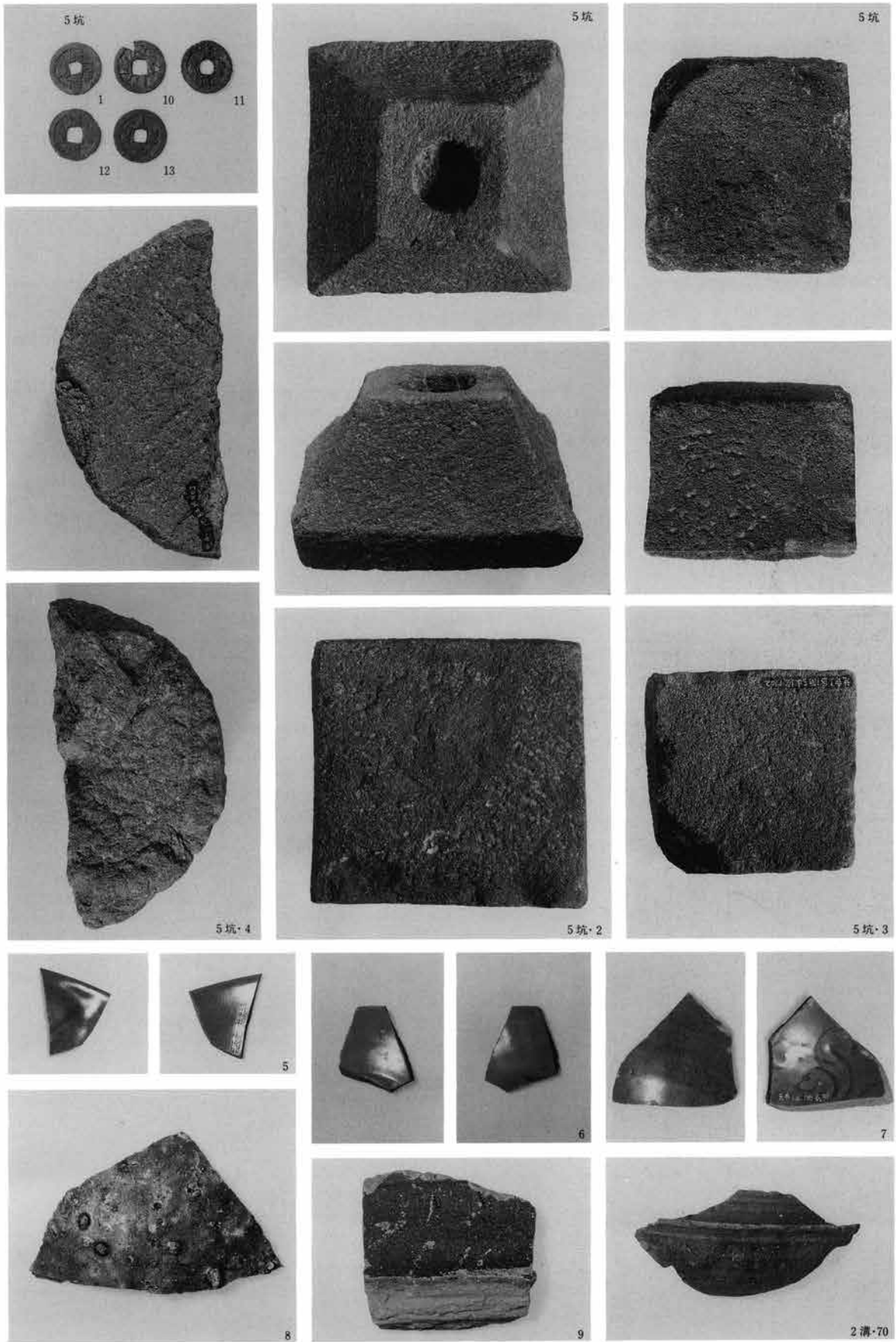
2. V区6面 試掘設定状況（南東から）



3. V区6面 試掘作業風景（南西から）

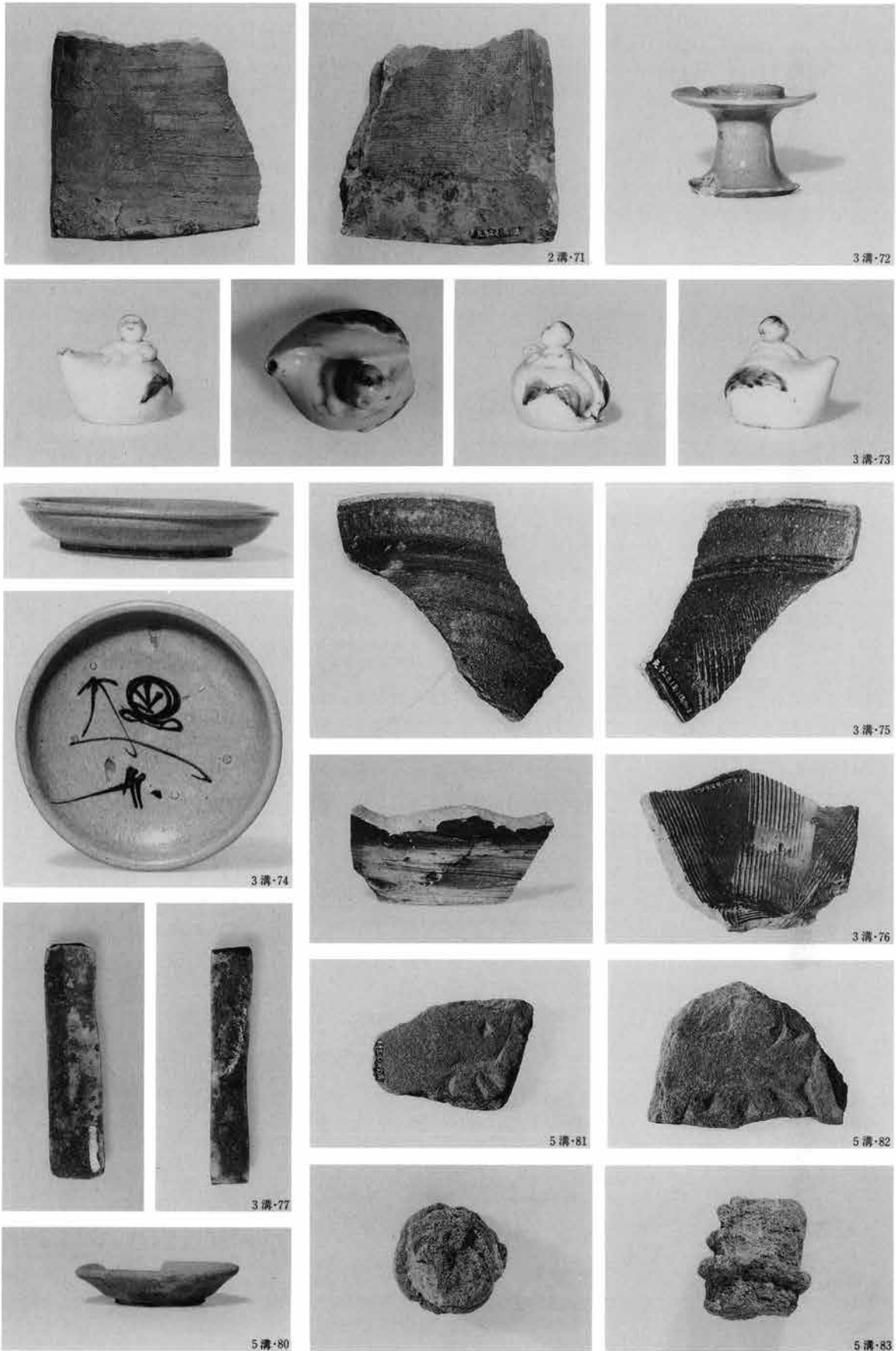


4. V区6面 流木出土状況

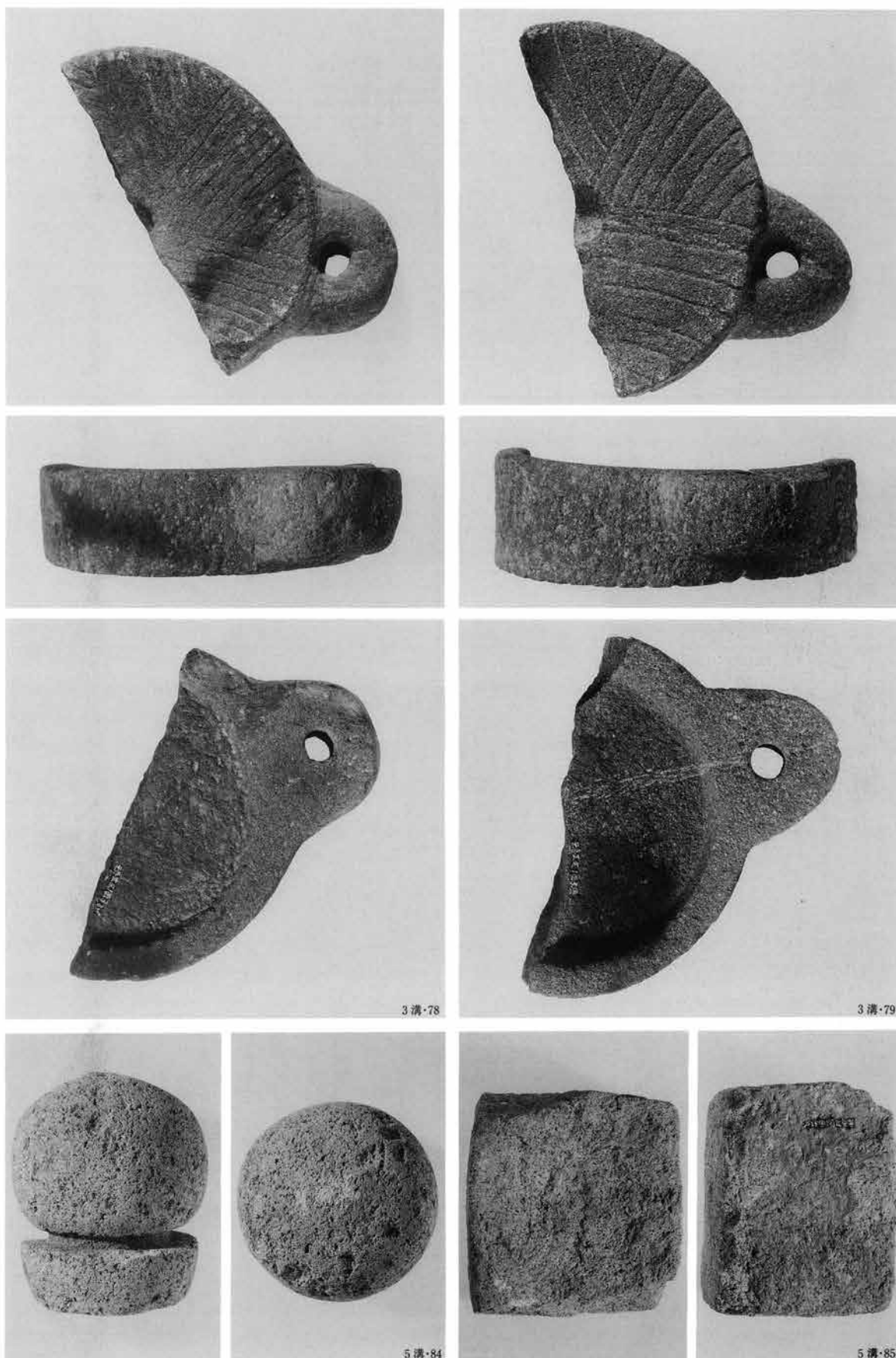


I区I面 5号土坑、II区I面 2号溝、グリッド出土遺物

写真图版44

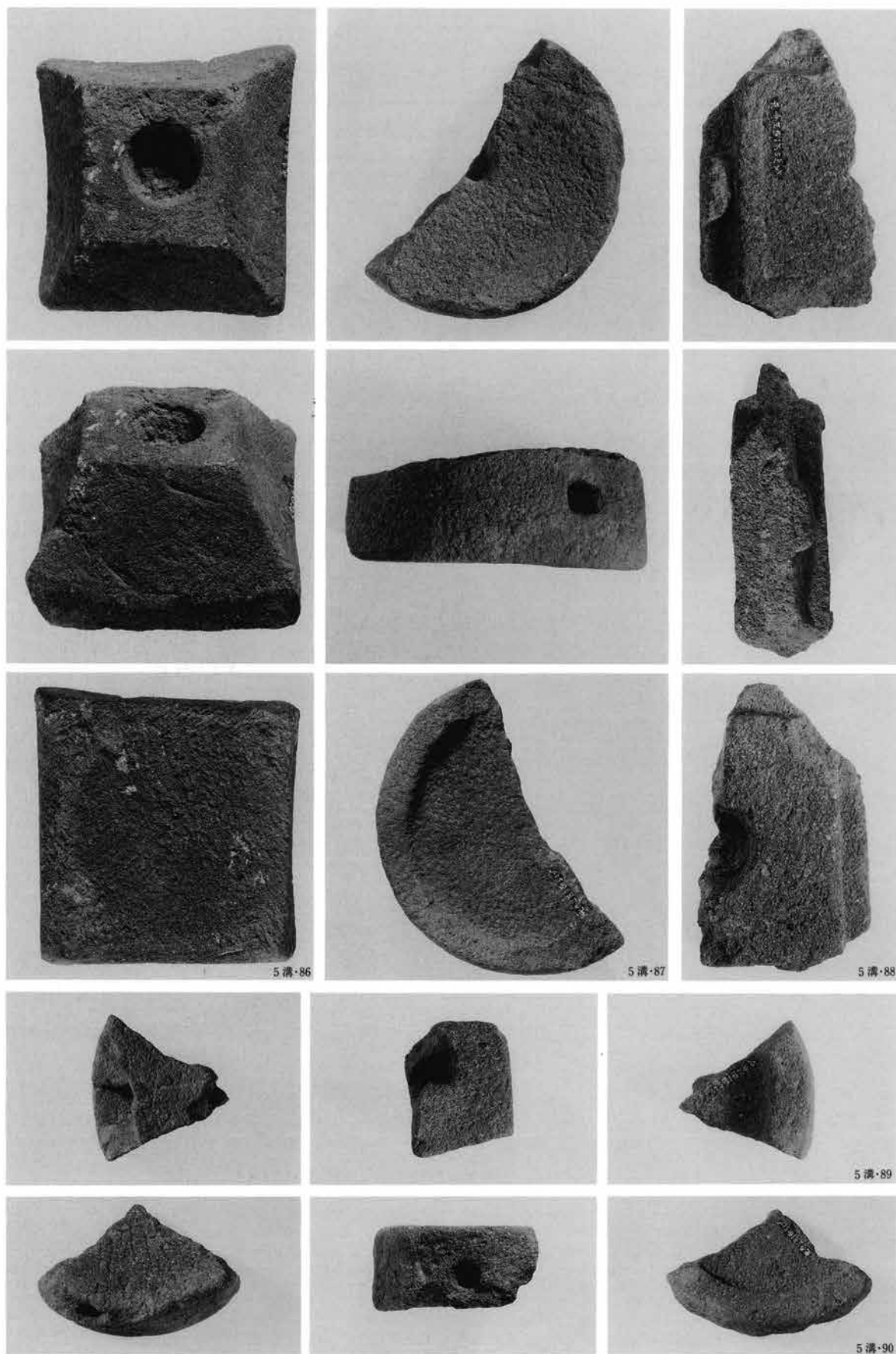


II区1面 2・3・5号溝出土遺物

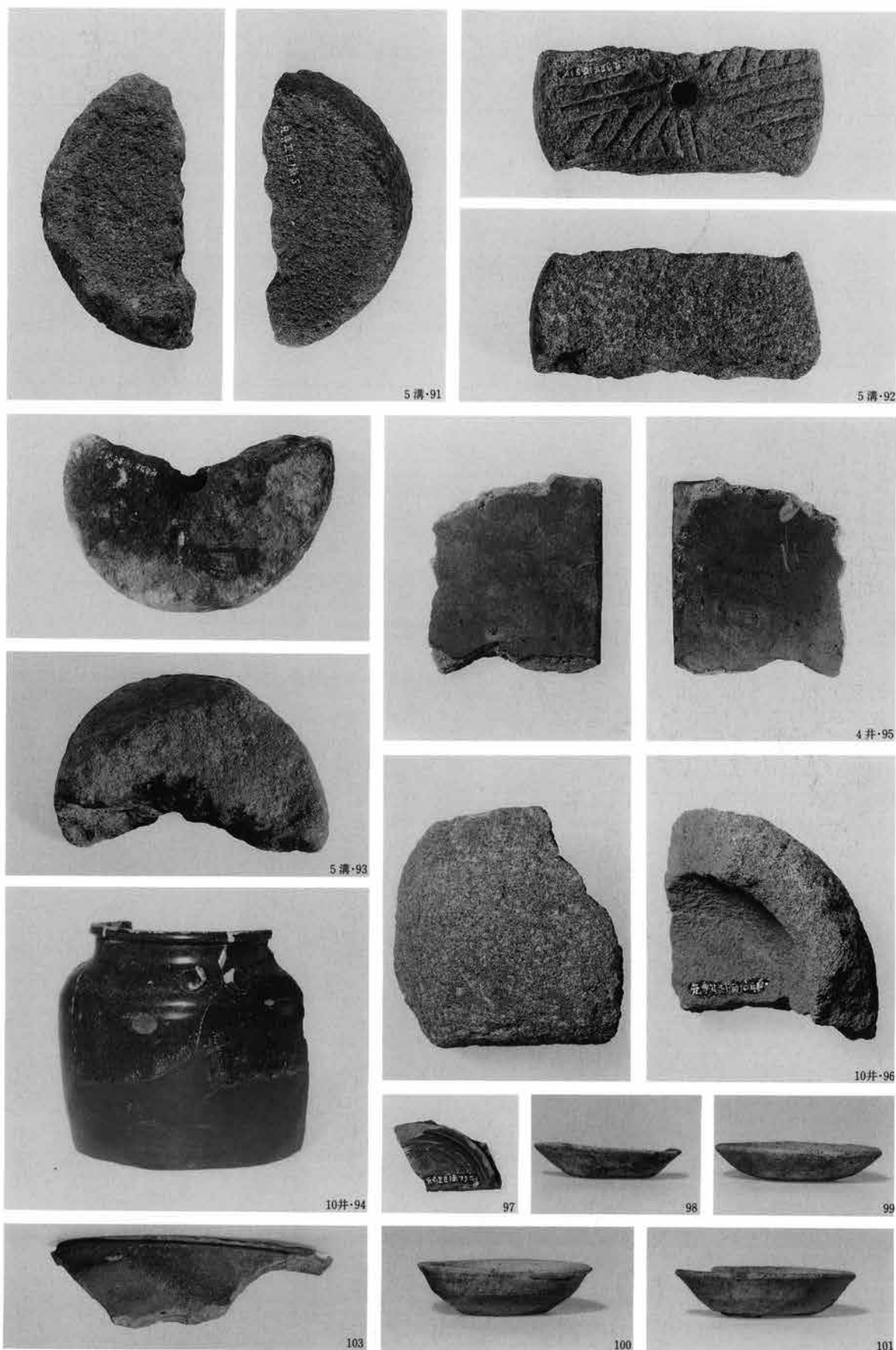


II区1面 3・5号出土遺物

写真図版46

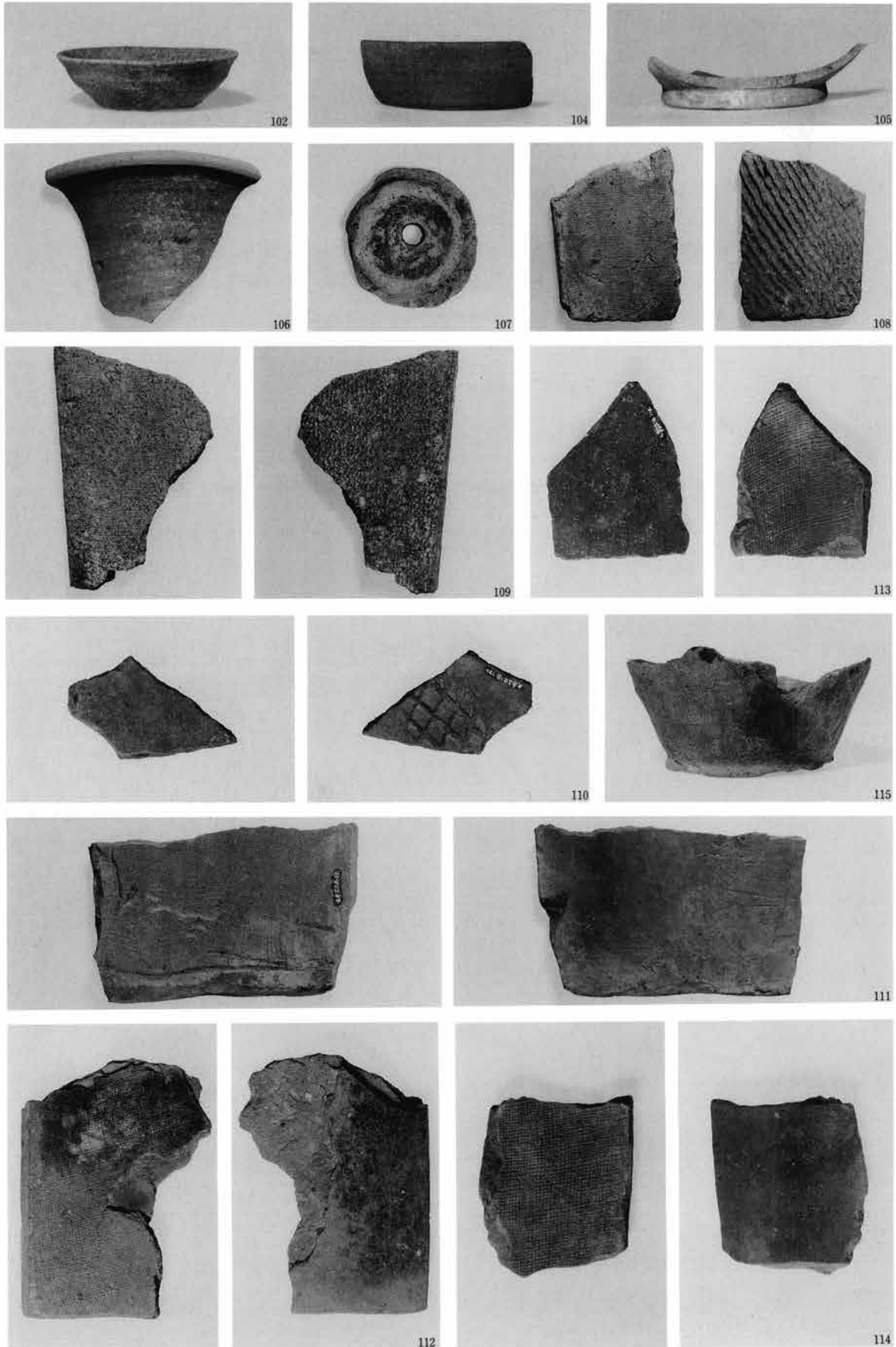


II区1面 5号出土遺物

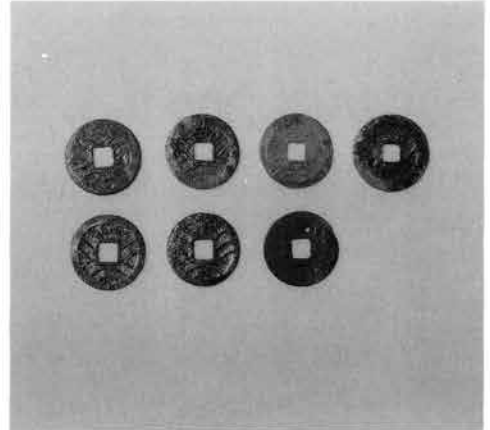
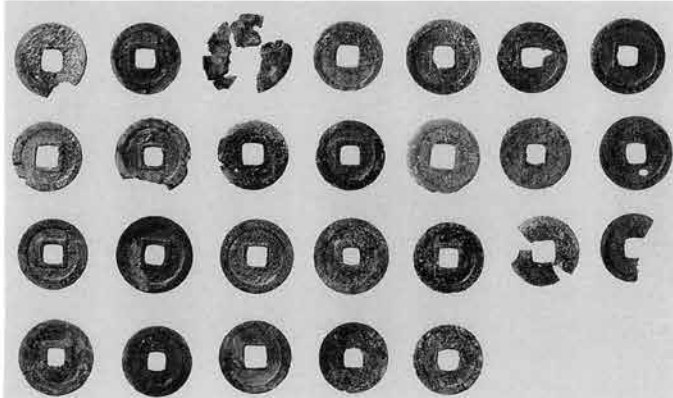
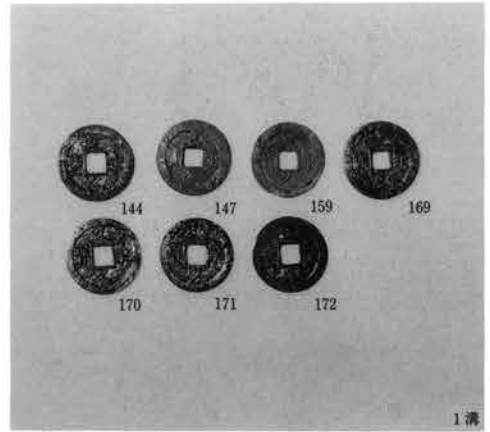
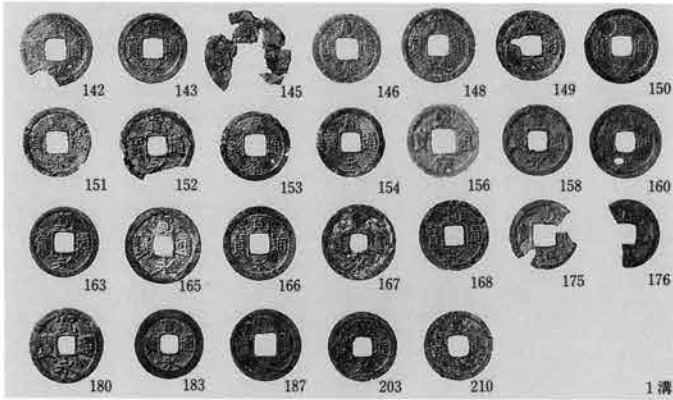
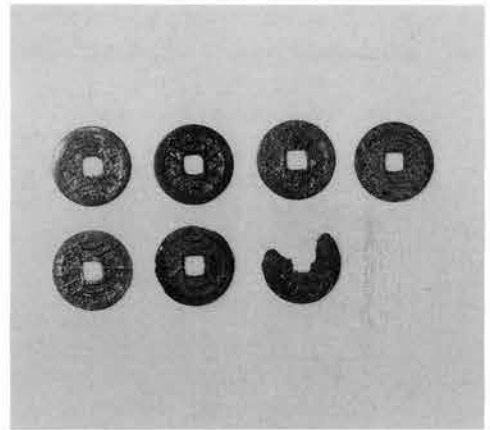
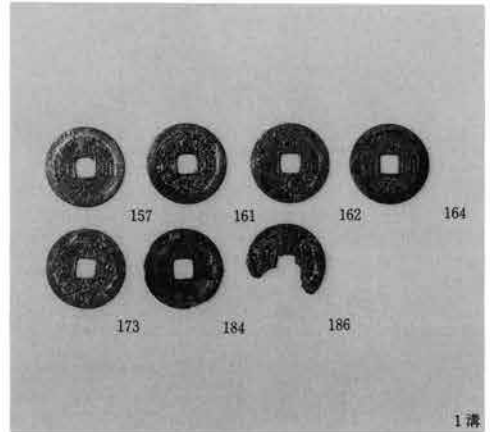


II区1面 5号溝、4・10号井戸、グリッド出土遺物

写真図版48

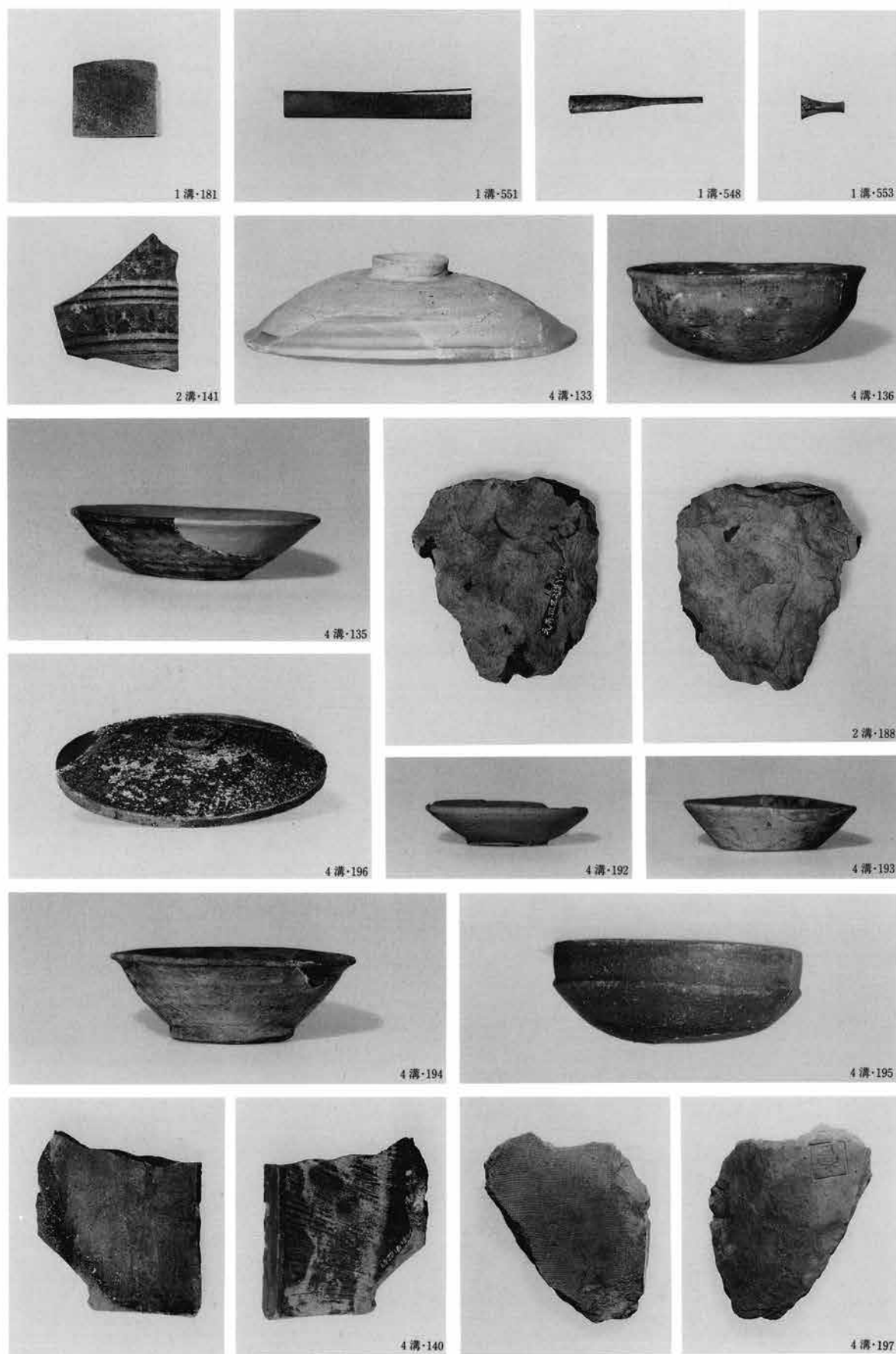


II区1面 グリッド出土遺物

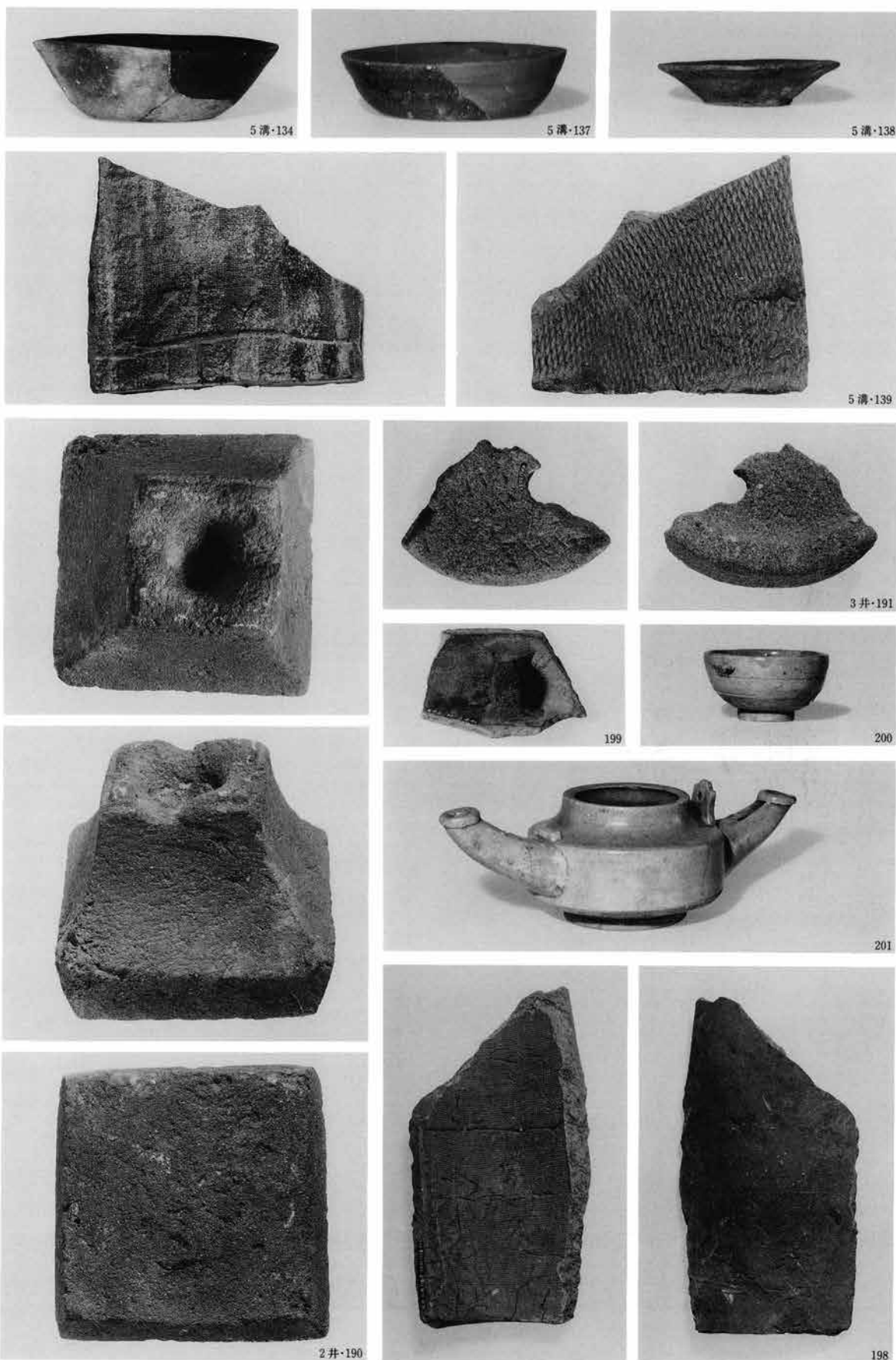


II区1面 グリッド、III区1面 1号溝出土遺物

写真图版50

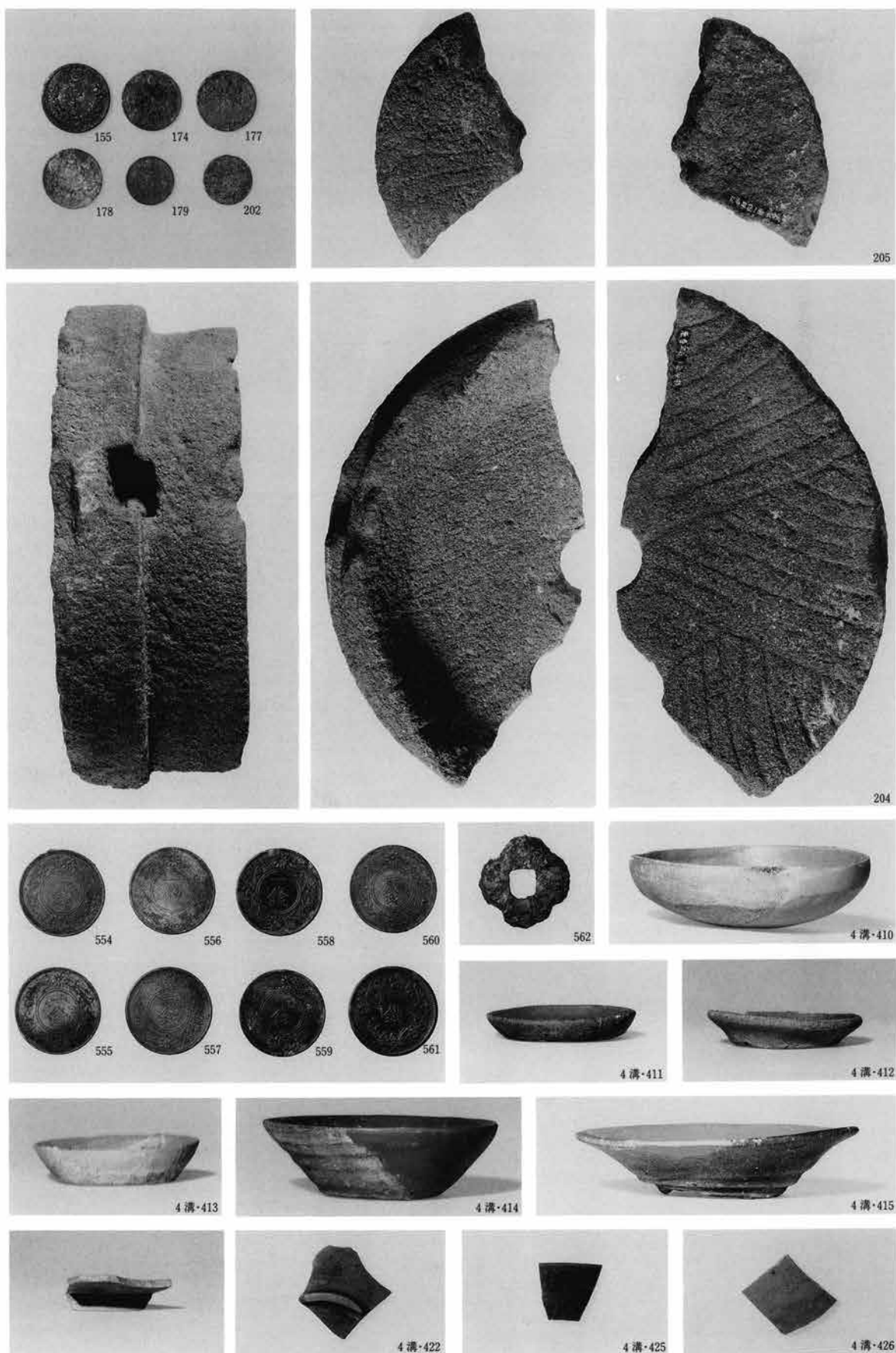


Ⅲ区1面 1・2・4号溝出土遺物

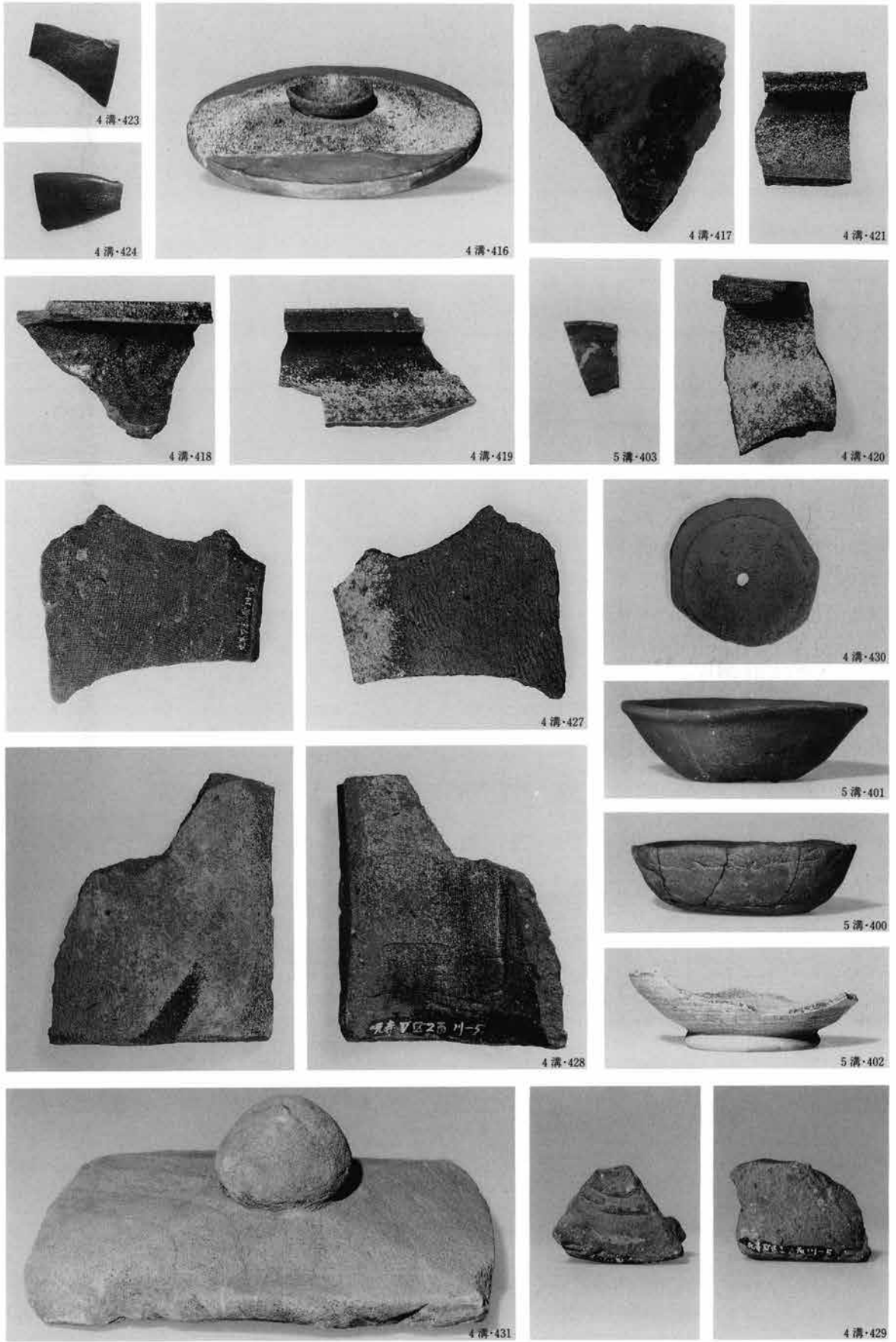


Ⅲ区1面 5号溝、2・3号井戸、グリッド出土遺物

写真図版52

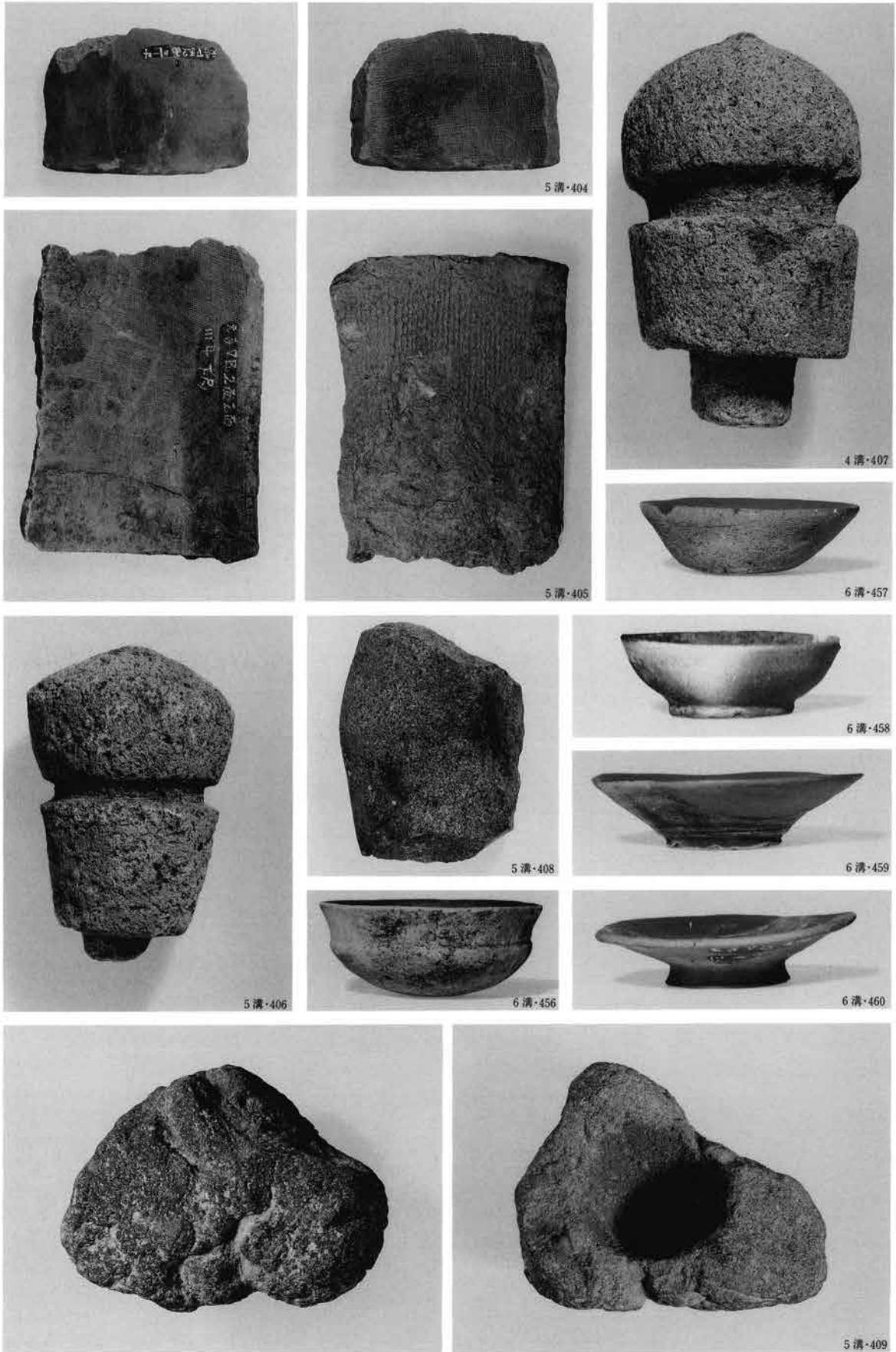


Ⅲ区1面 1号溝、グリッド、Ⅳ区1面 グリッド、Ⅴ区1面 4号溝、グリッド出土遺物

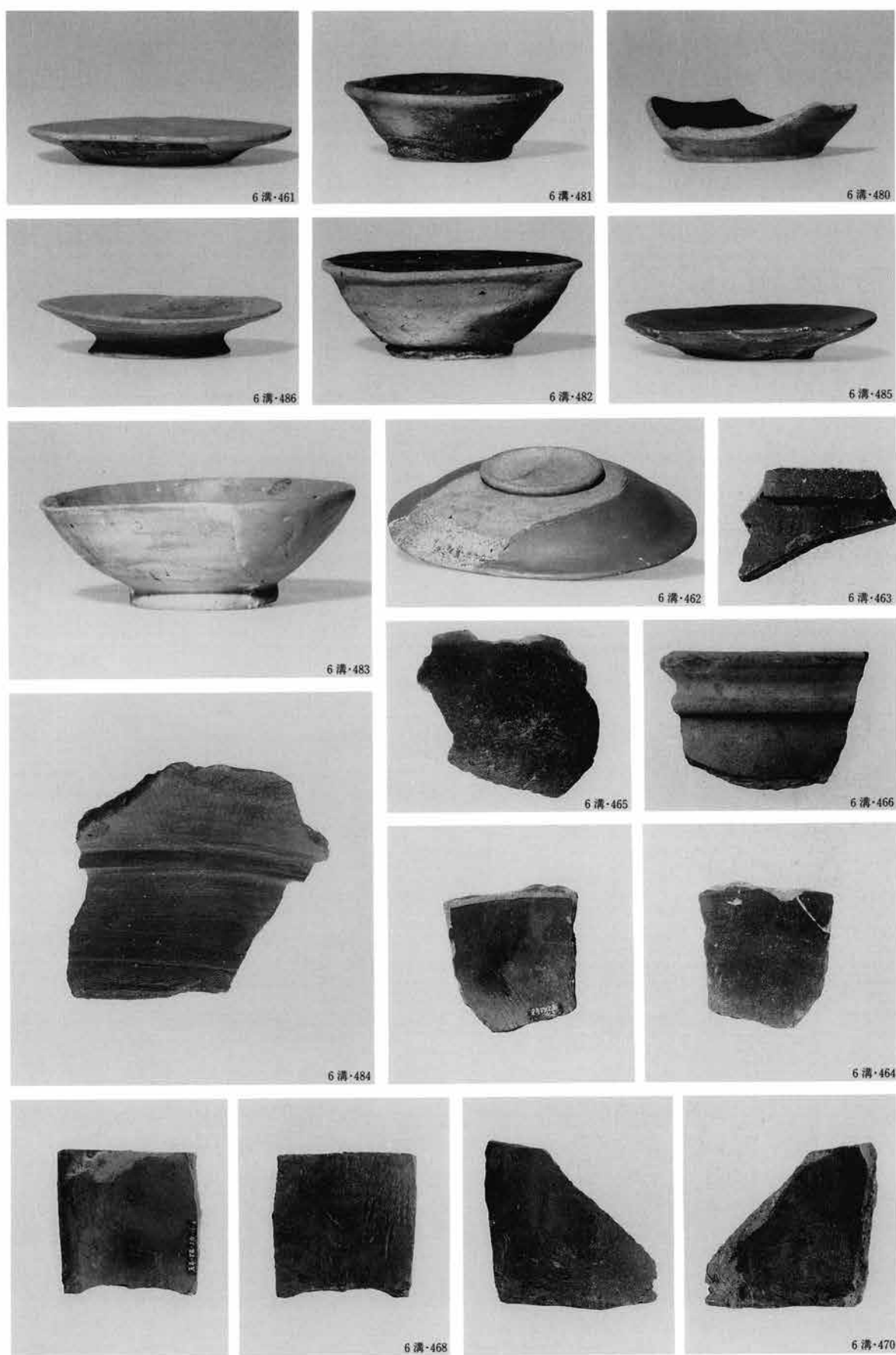


V区1面 4・5号溝出土遺物

写真図版54

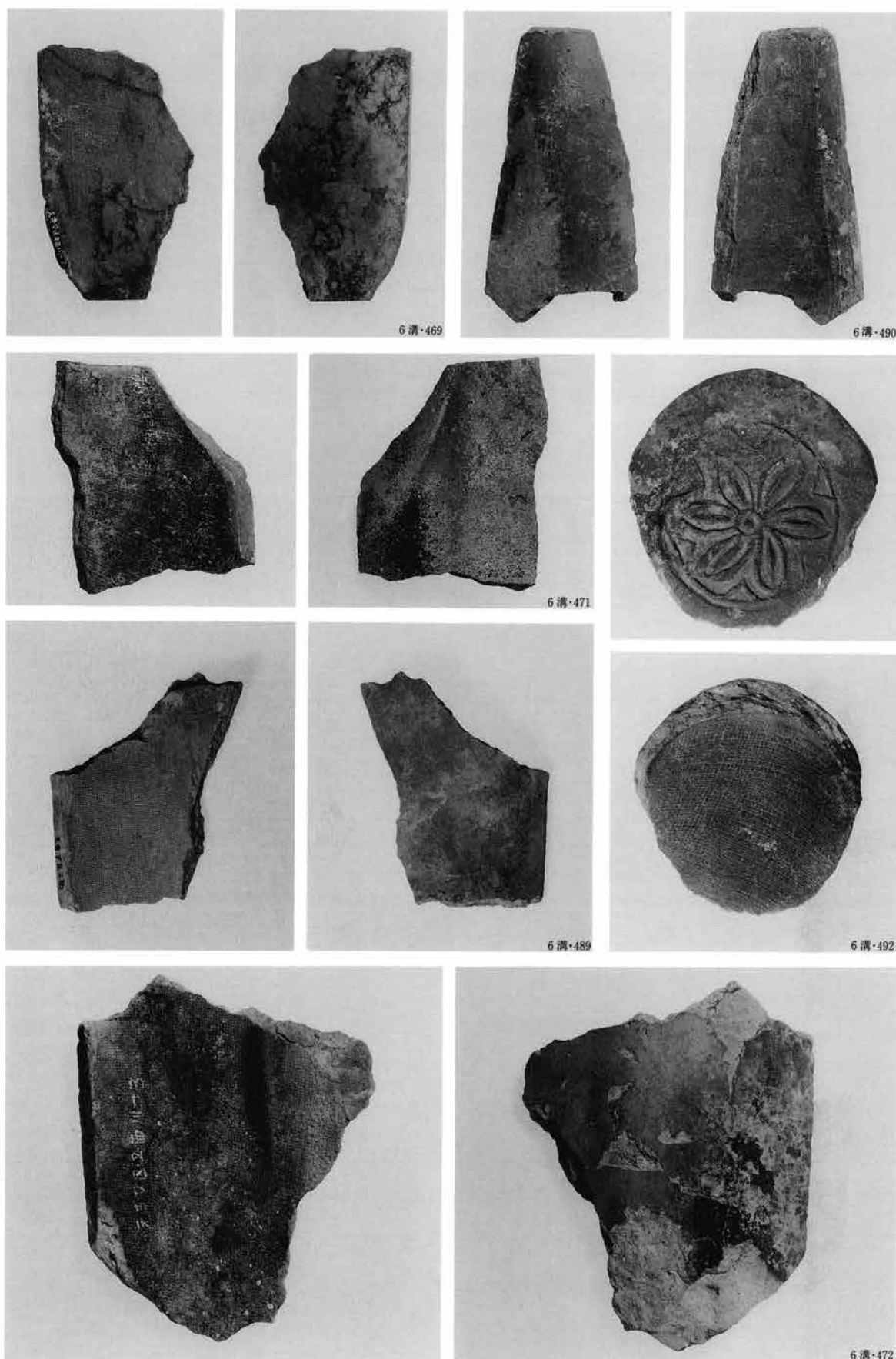


V区1面 4・5・6号溝出土遺物

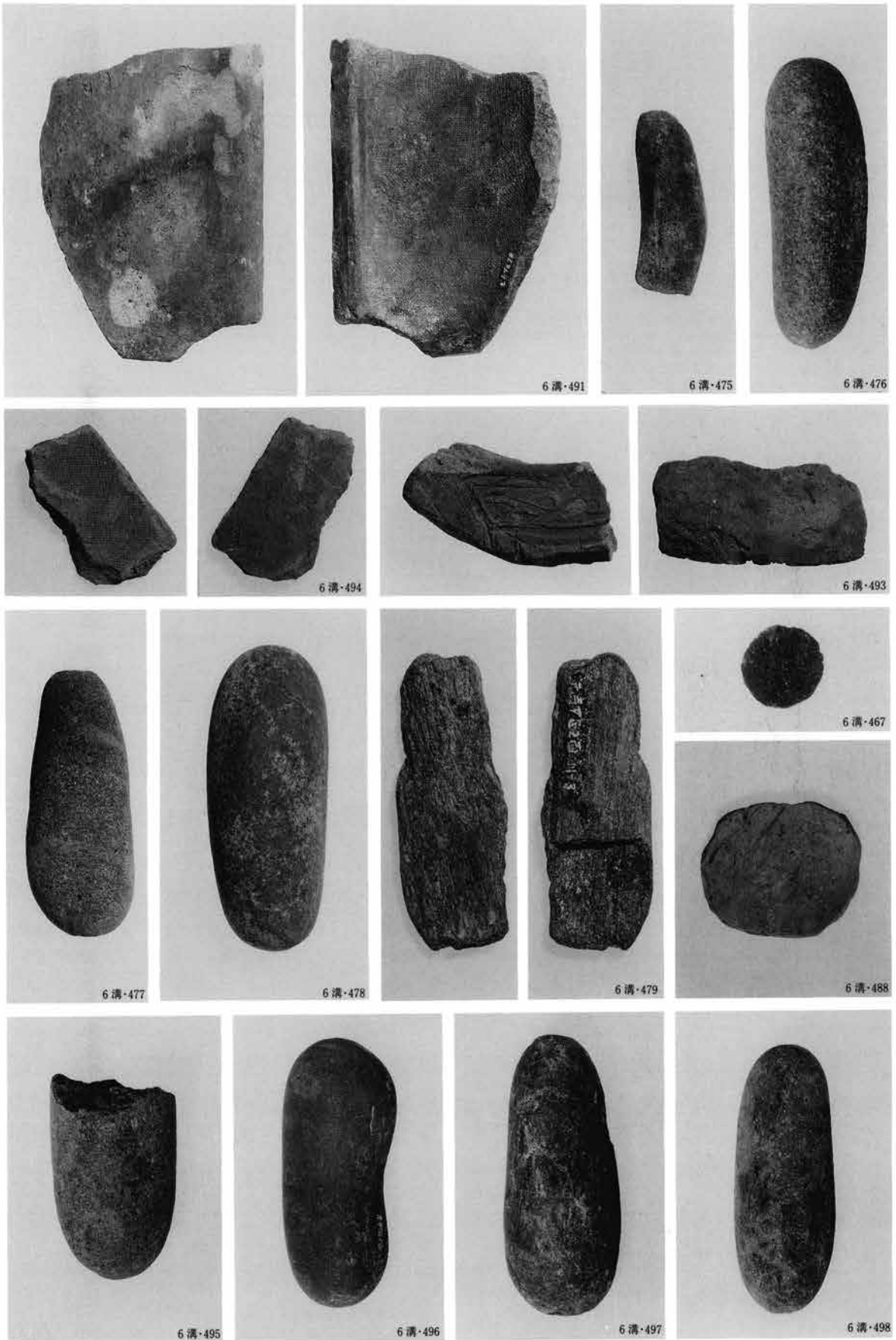


V区1面 6号溝出土遺物

写真図版56

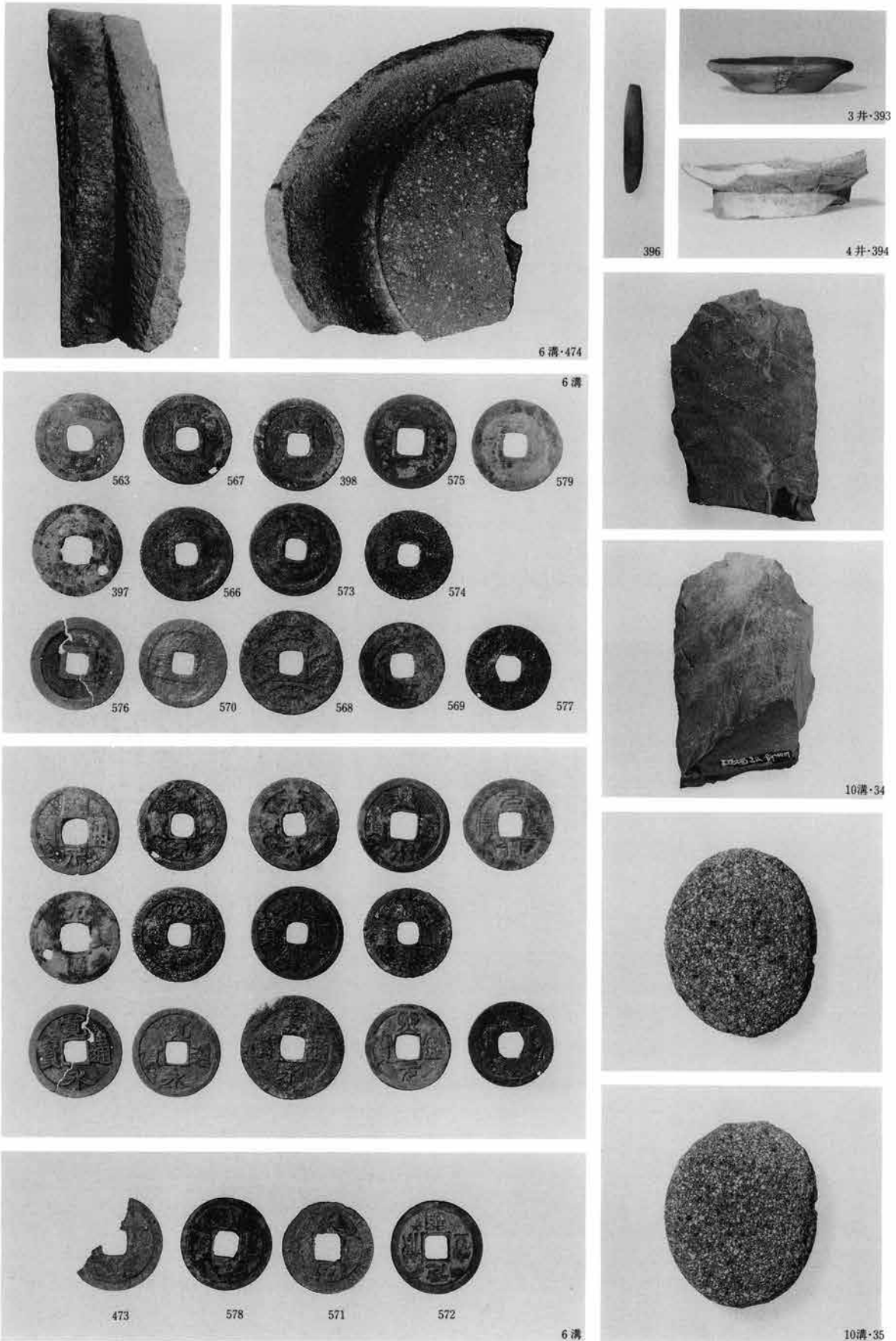


V区1面 6号溝出土遺物

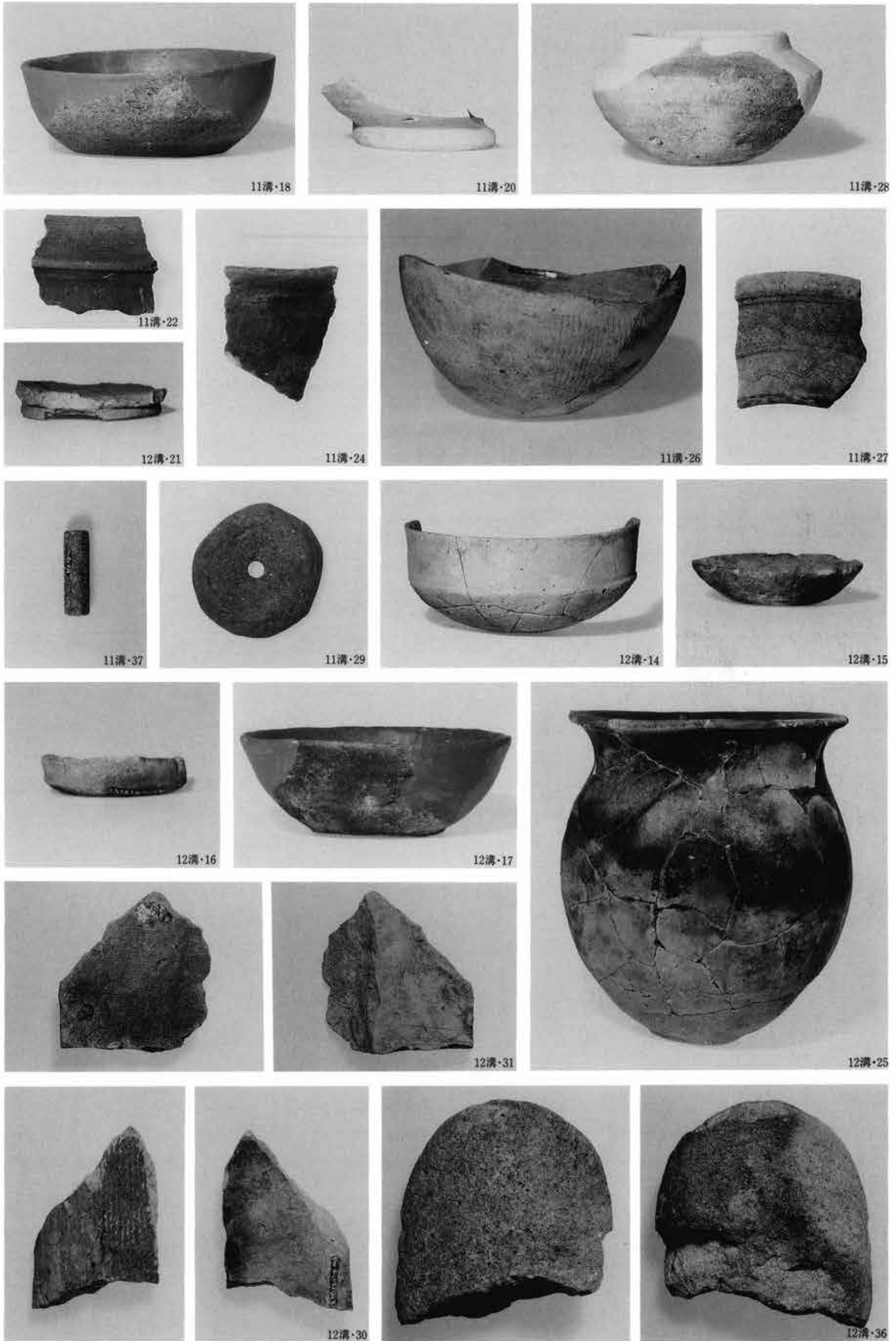


V区1面 6号溝出土遺物

写真図版58

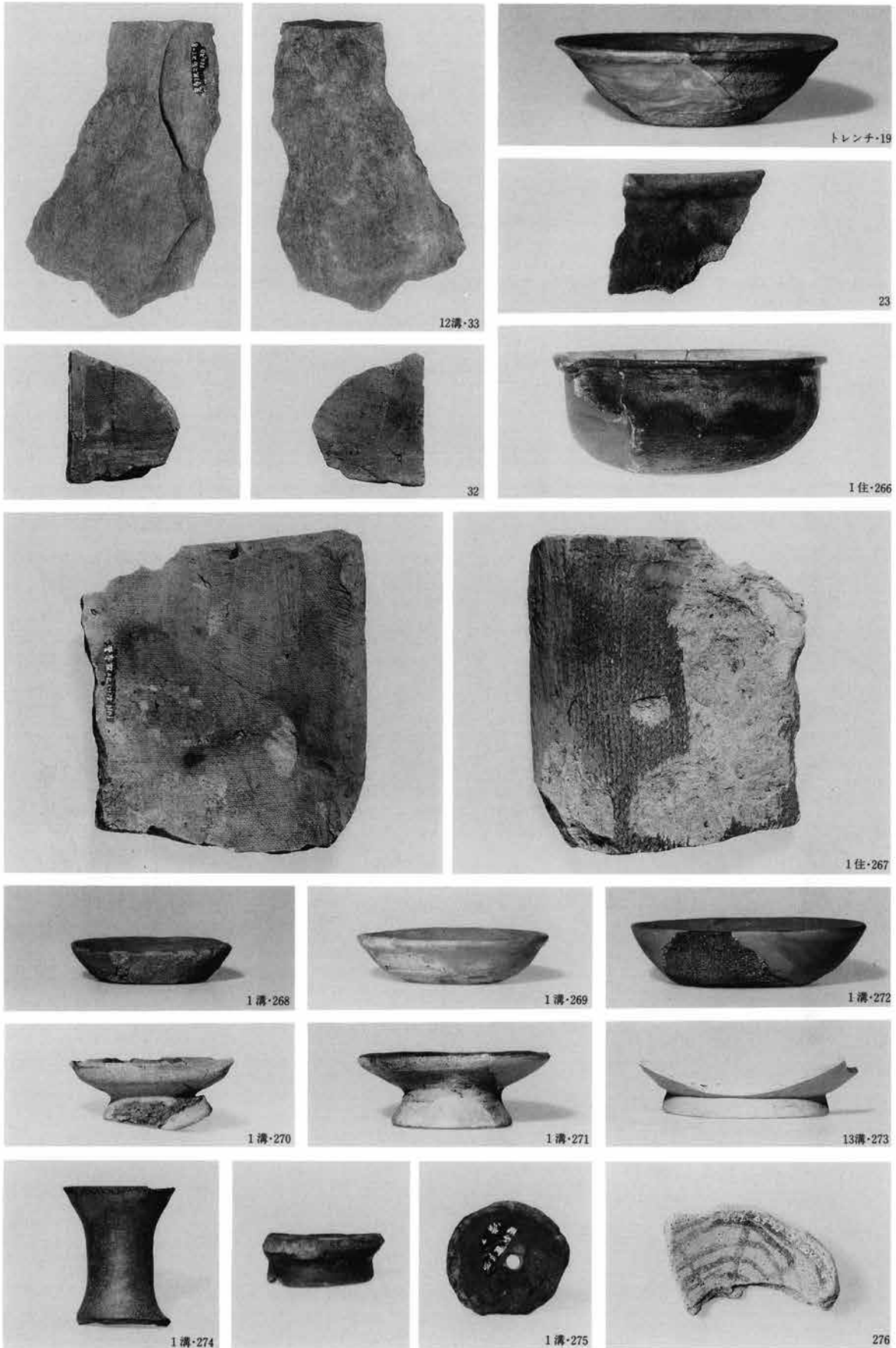


V区1面 6号溝、3・4号井戸、2トレンチ、グリッド、I区2面 10号溝出土遺物

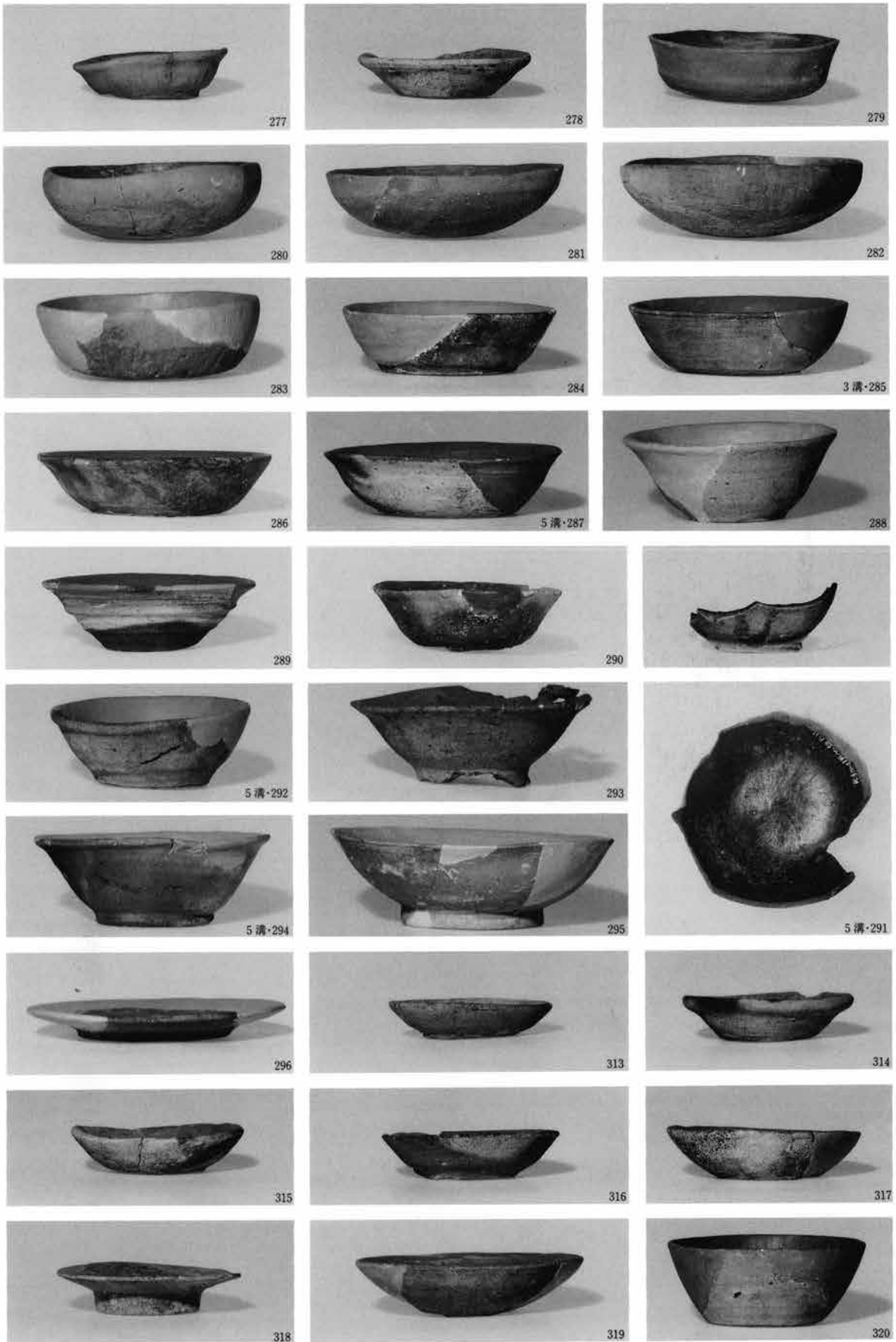


I区2面 11・12号溝出土遺物

写真図版60

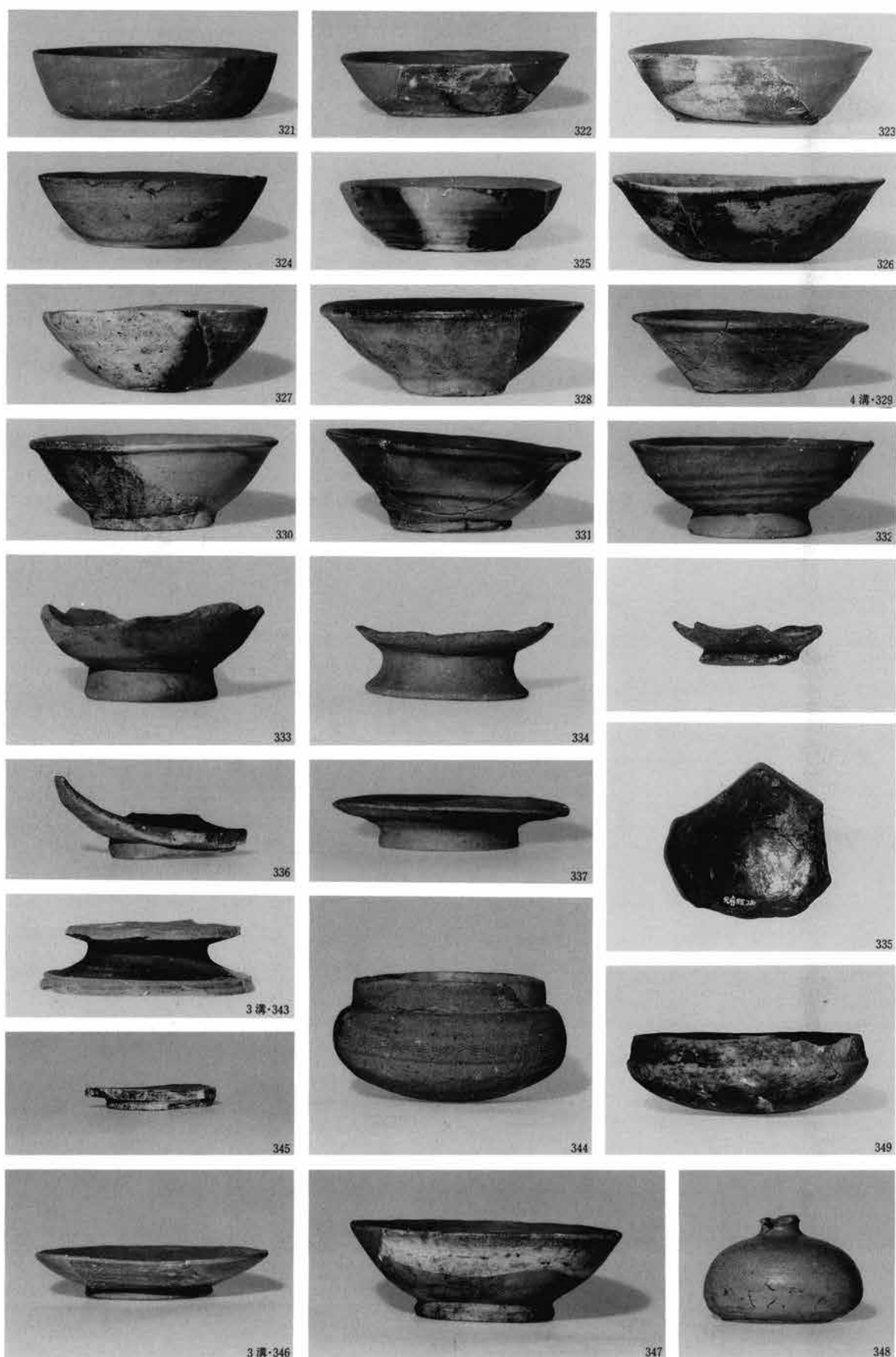


I区2面 12号溝、トレンチ、グリッド、IV区2面 1号住、1号溝、グリッド出土遺物

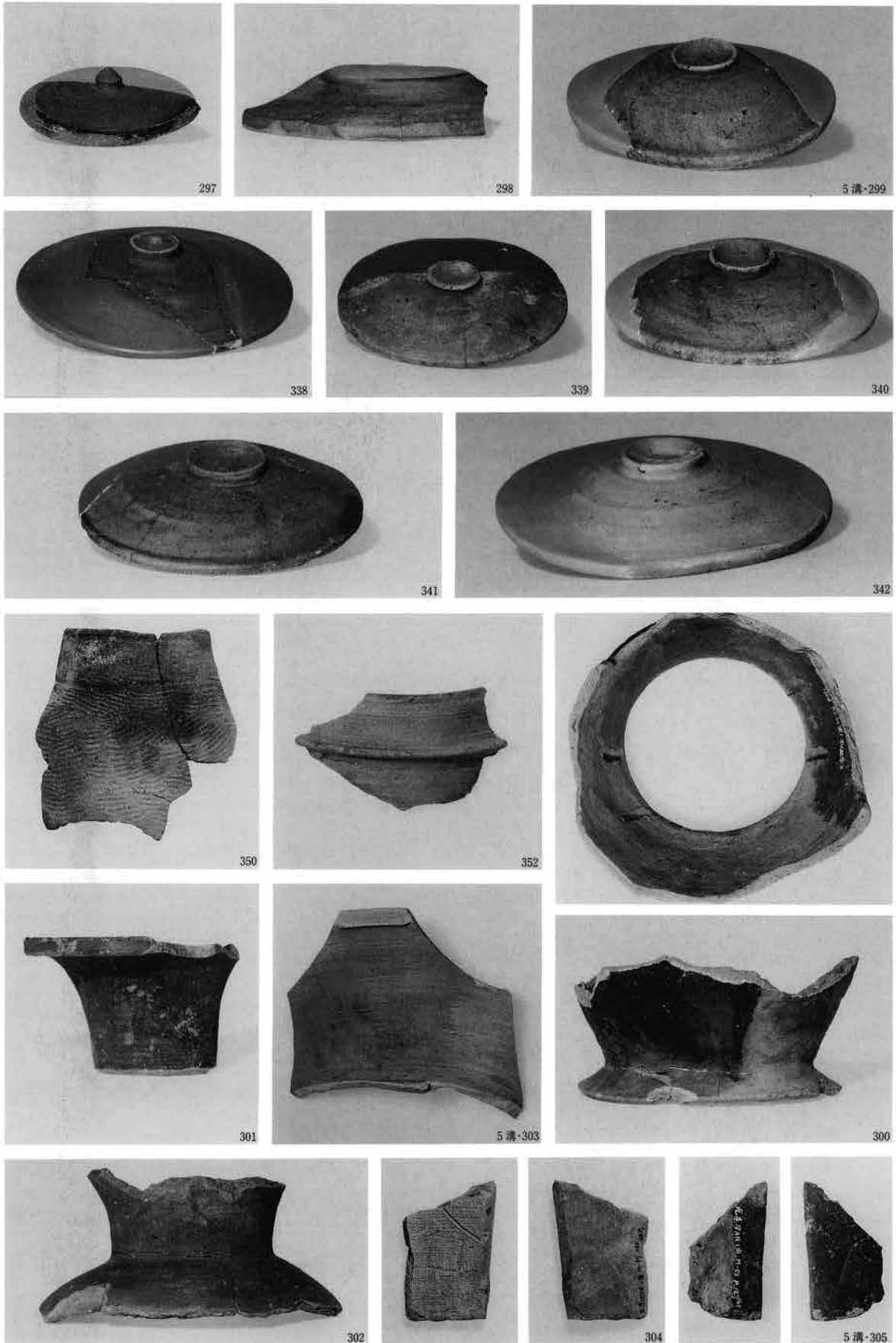


IV区2面 3・5号溝、グリッド出土遺物

写真図版62



IV区2面 3・4号溝、グリッド出土遺物

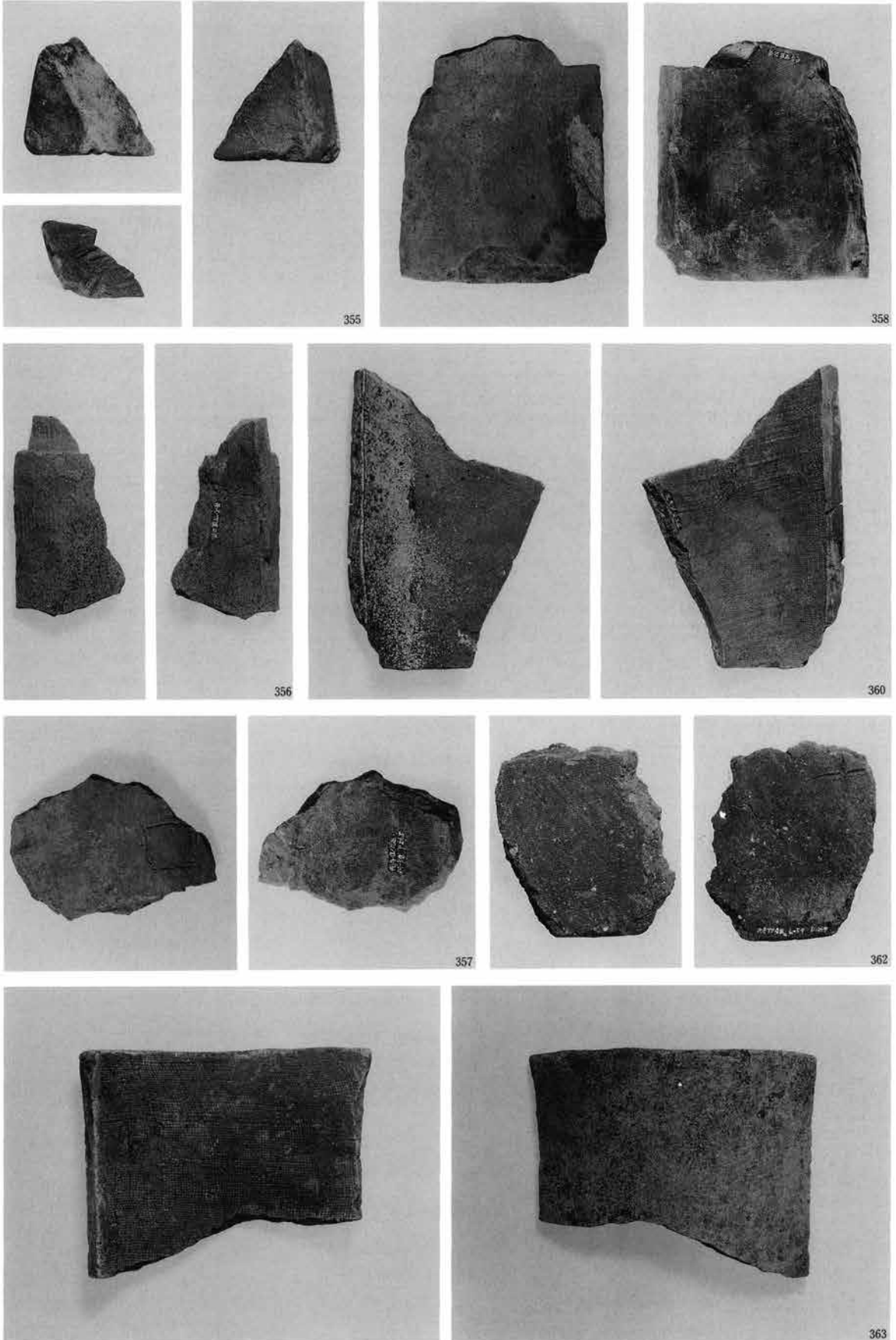


IV区2面 5号溝、グリッド出土遺物

写真図版64

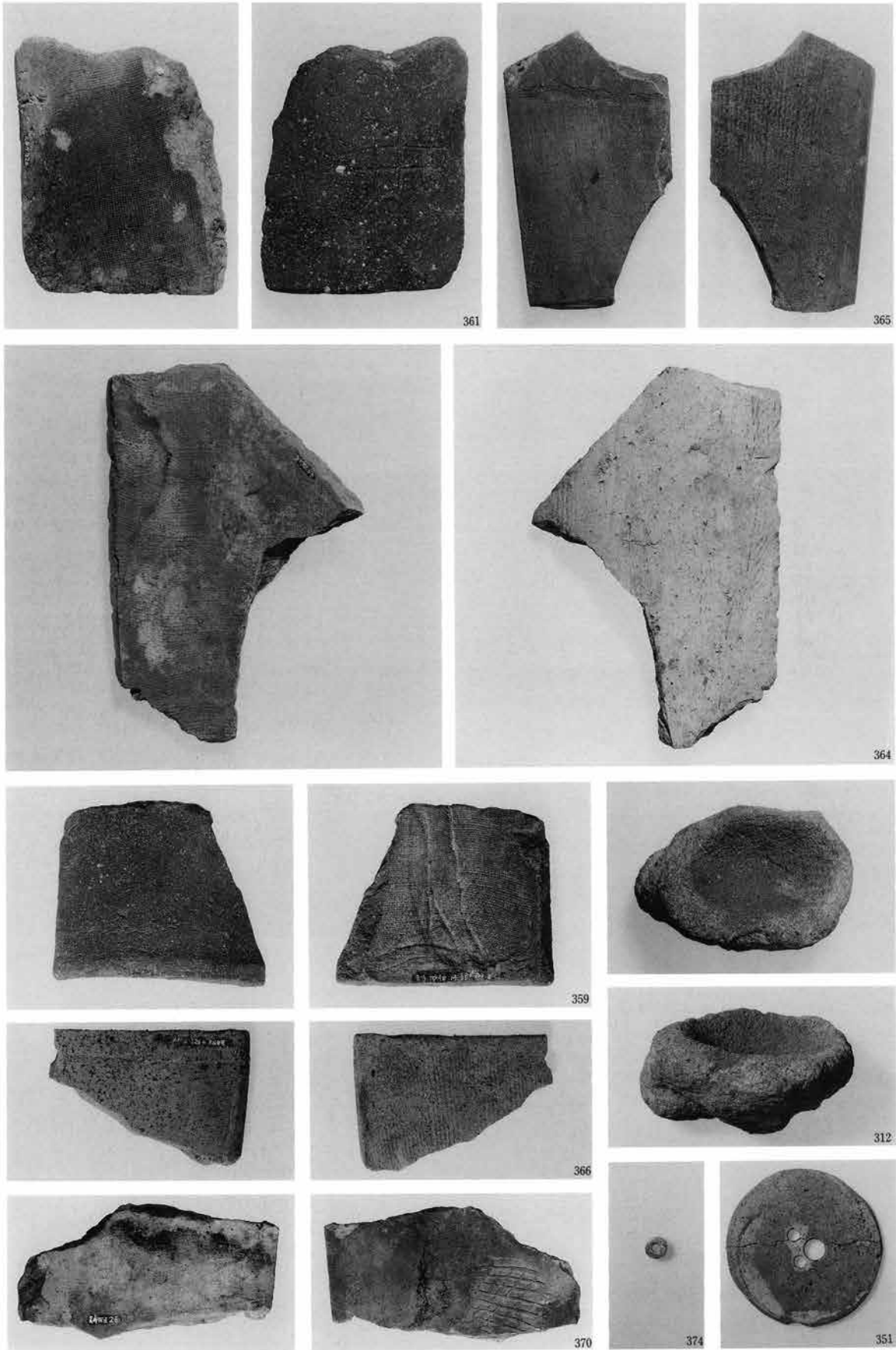


IV区2面 3・4・5号溝、グリッド出土遺物

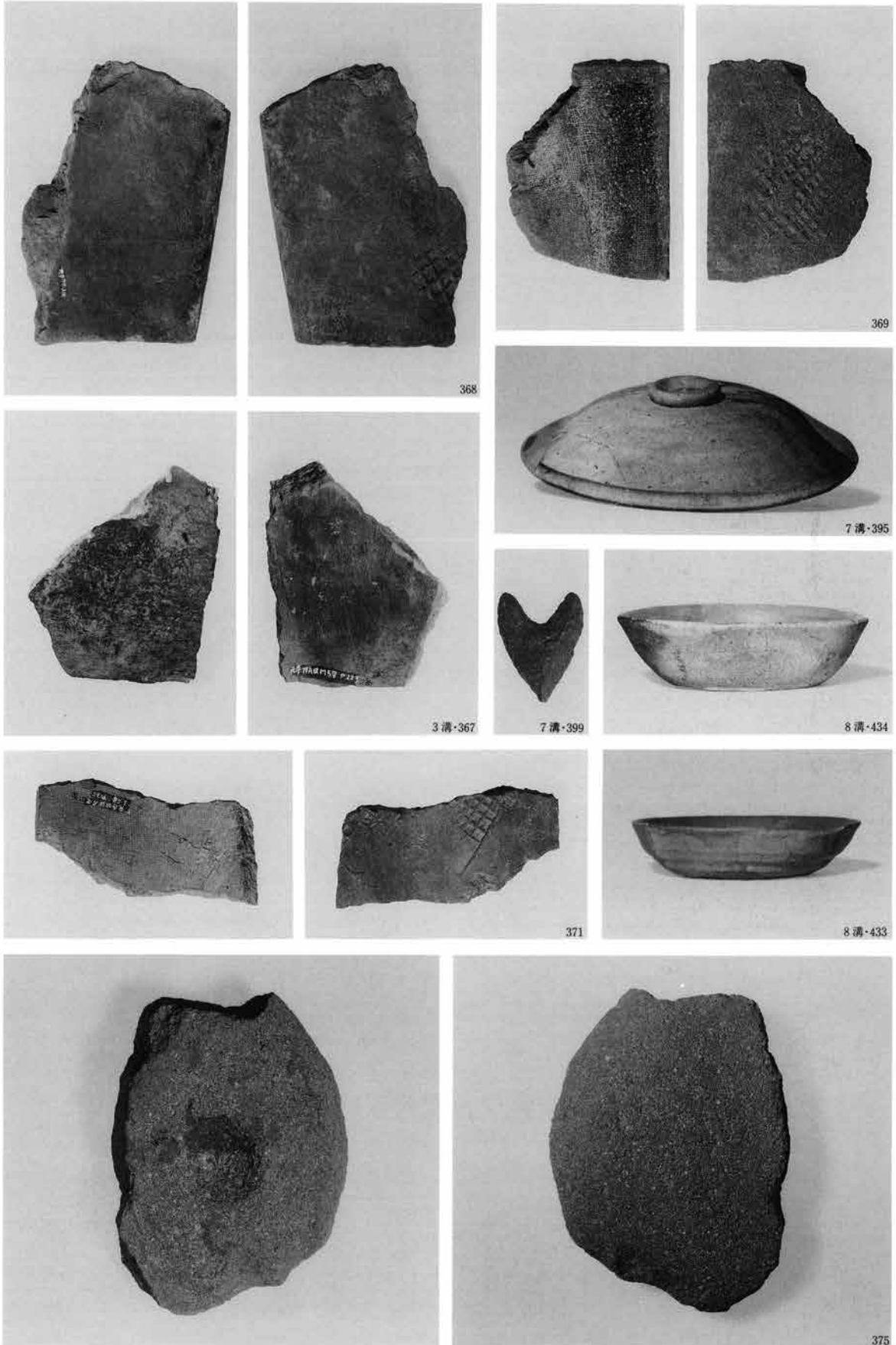


IV区2面 グリッド出土遺物

写真図版66

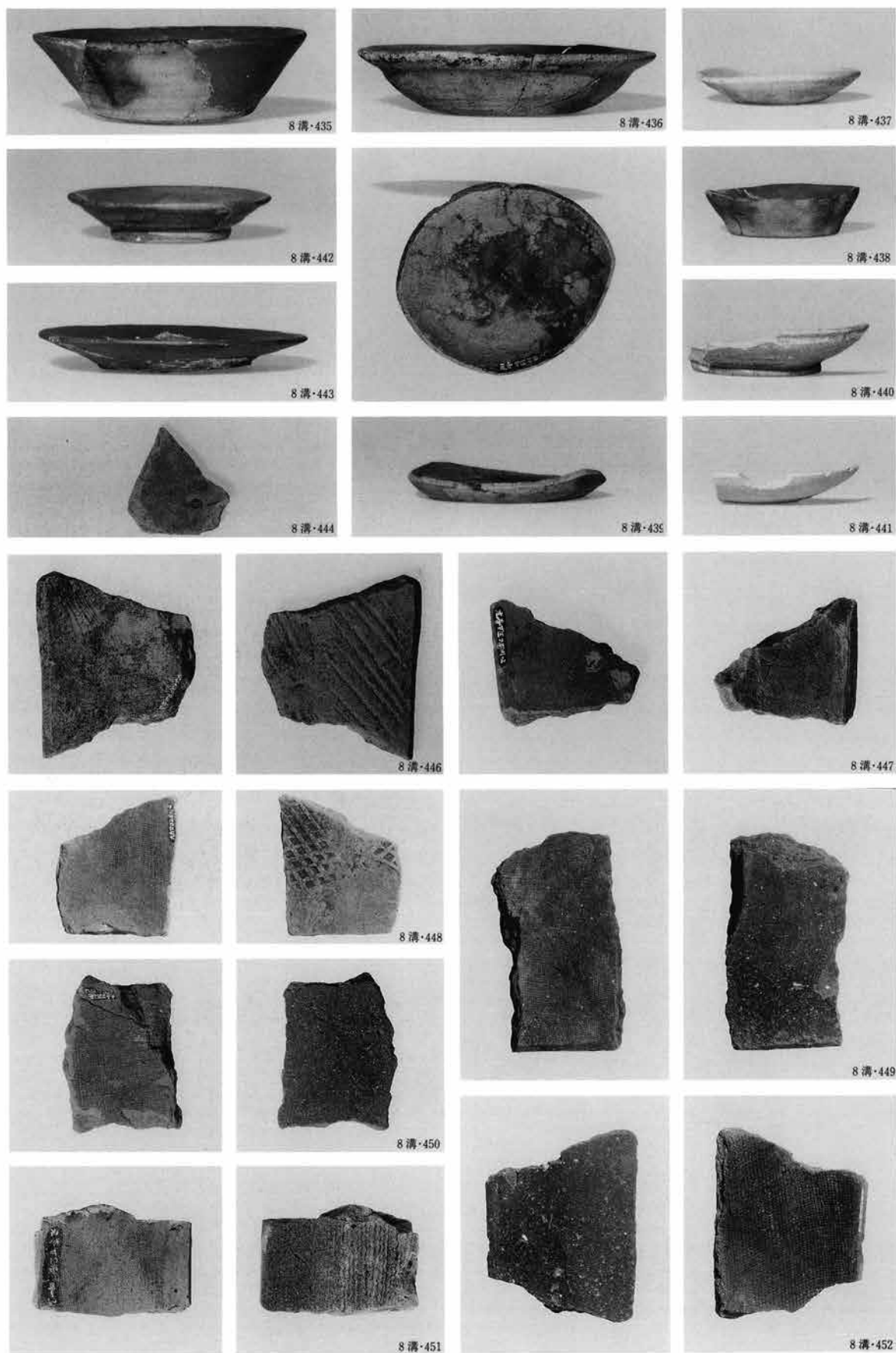


IV区2面 グリッド出土遺物

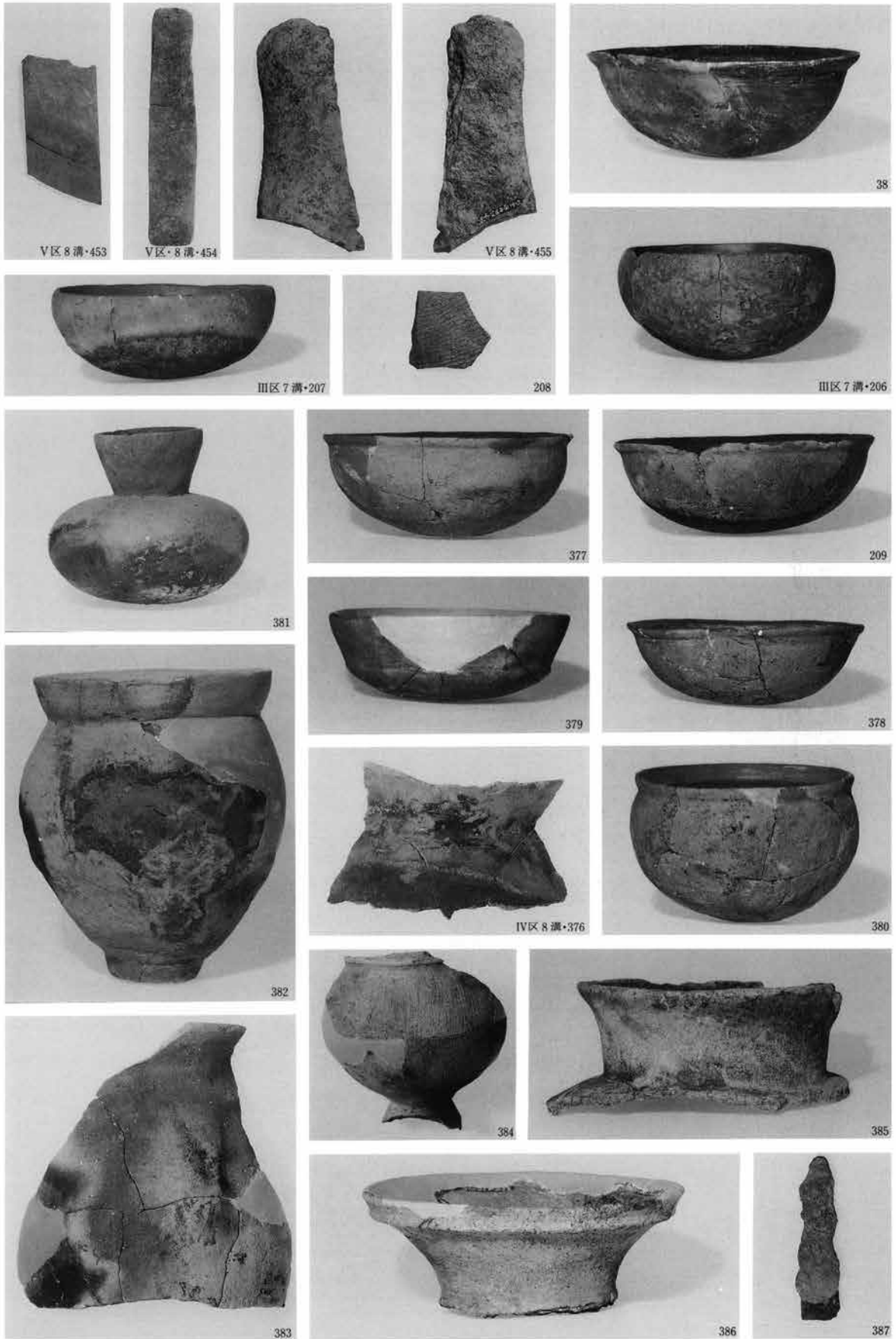


IV区2面 グリッド、3号溝、V区2面 7・8号溝出土遺物

写真图版68



V区2面 8号溝出土遺物

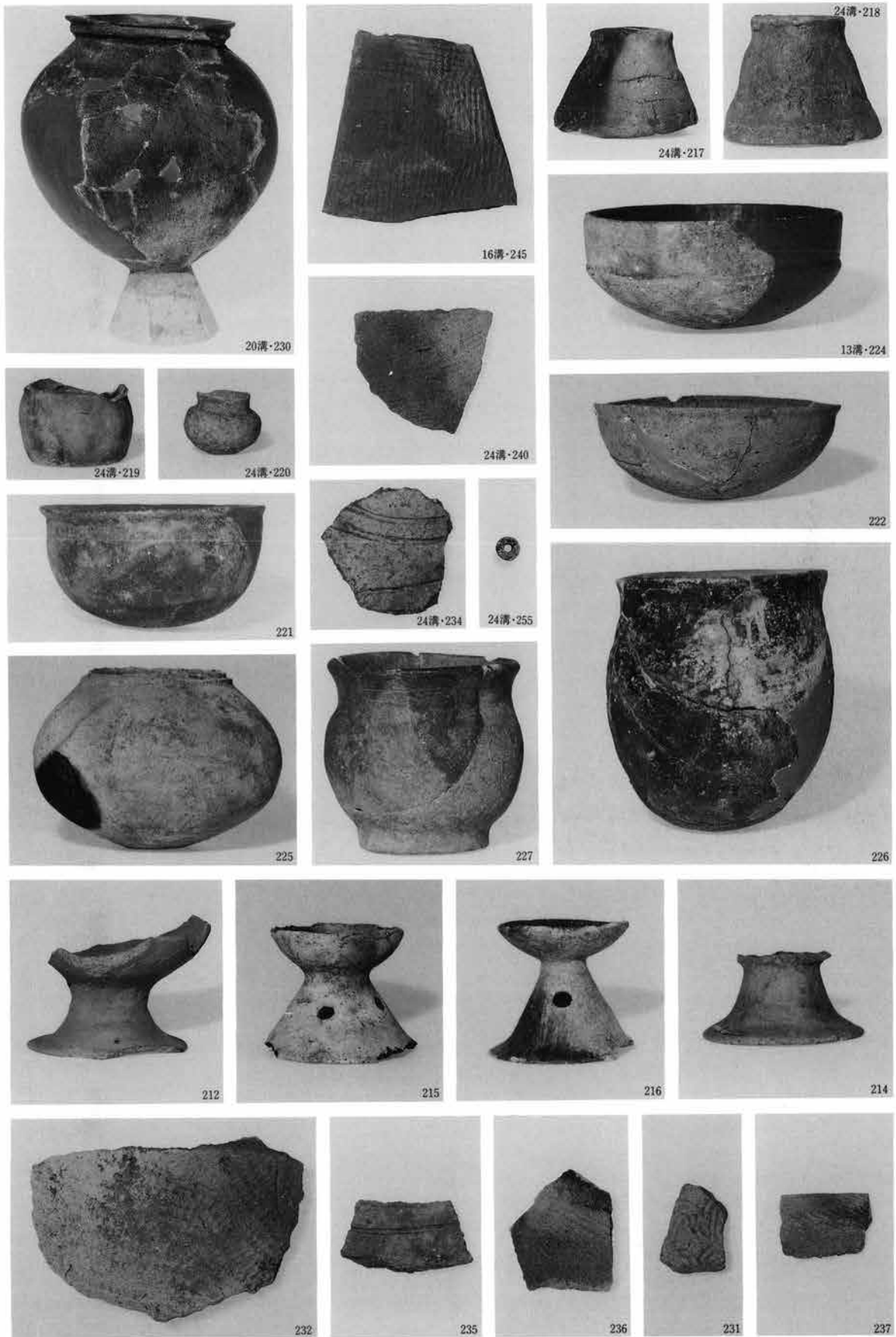


V区 2面 8号溝、I区 3面 グリッド、III区 3面 7号溝、グリッド、IV区 3面 8号溝、グリッド出土遺物

写真図版70

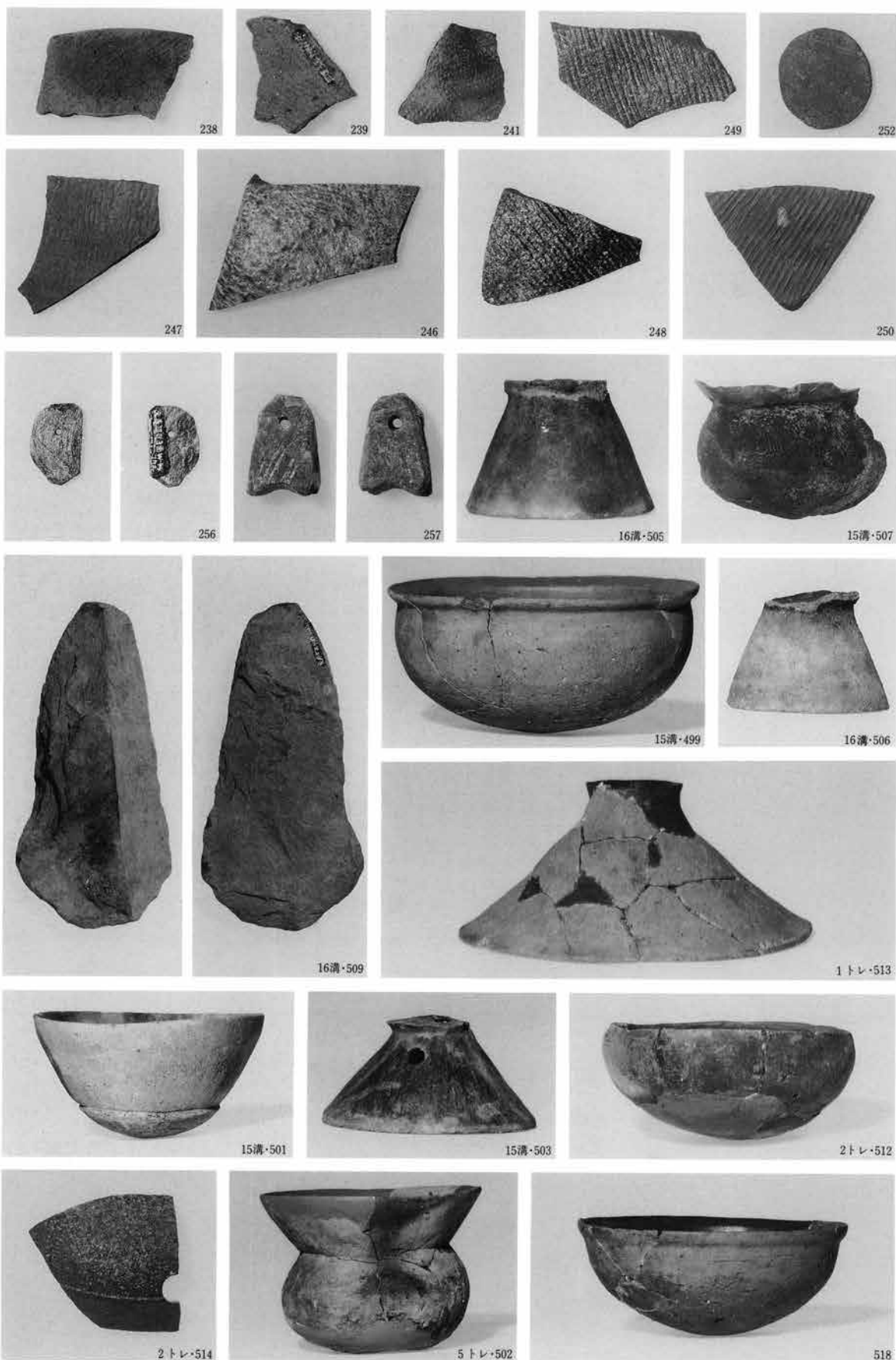


II区4面 13・15号溝、グリッド、III区4面 12・13・15・16・19号溝出土遺物



Ⅲ区4面 13・16・20・24号溝、グリッド出土遺物

写真図版72

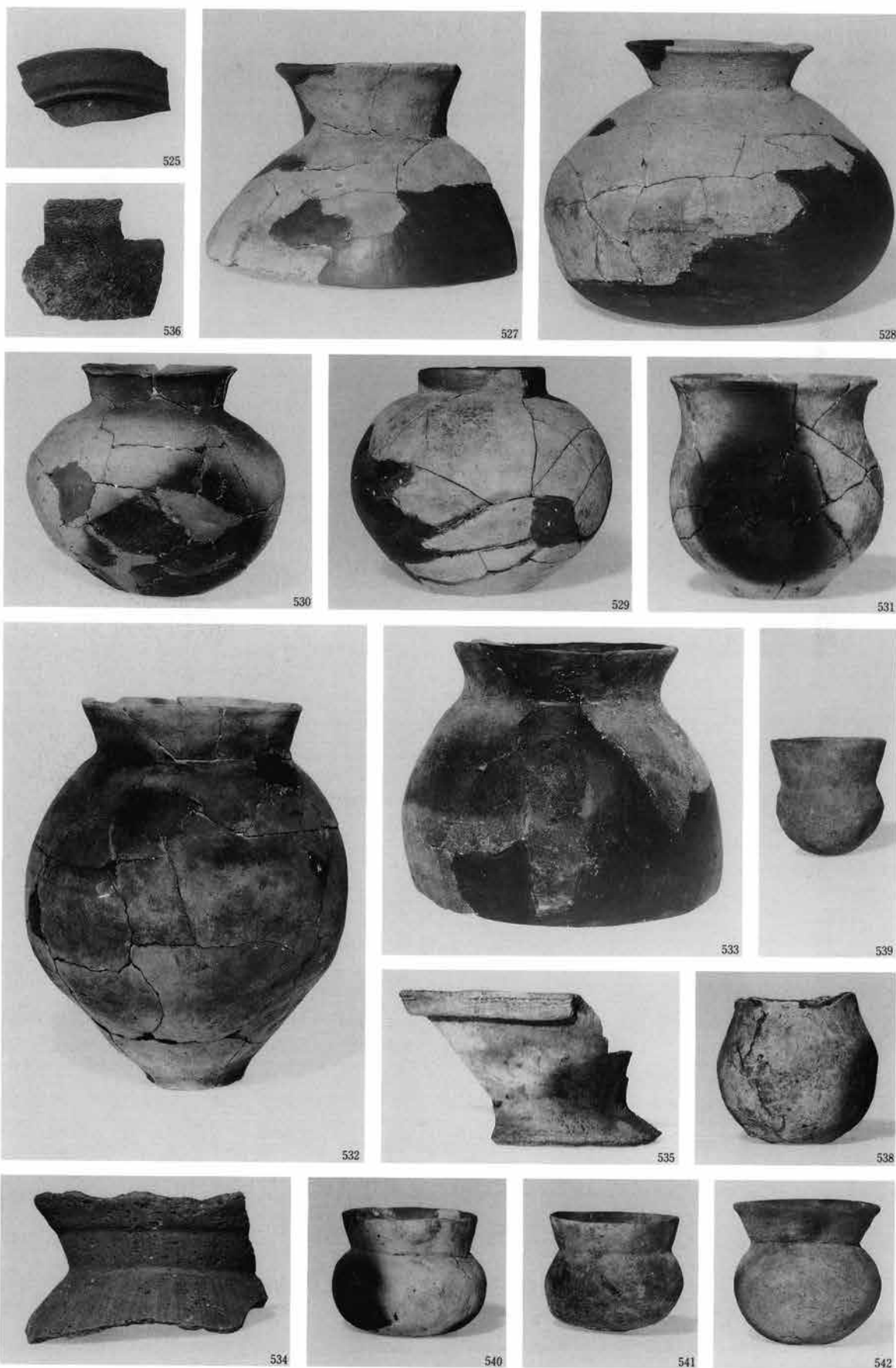


III区4面 グリッド、V区4面 15・16号溝、1・2・5トレンチ、グリッド出土遺物

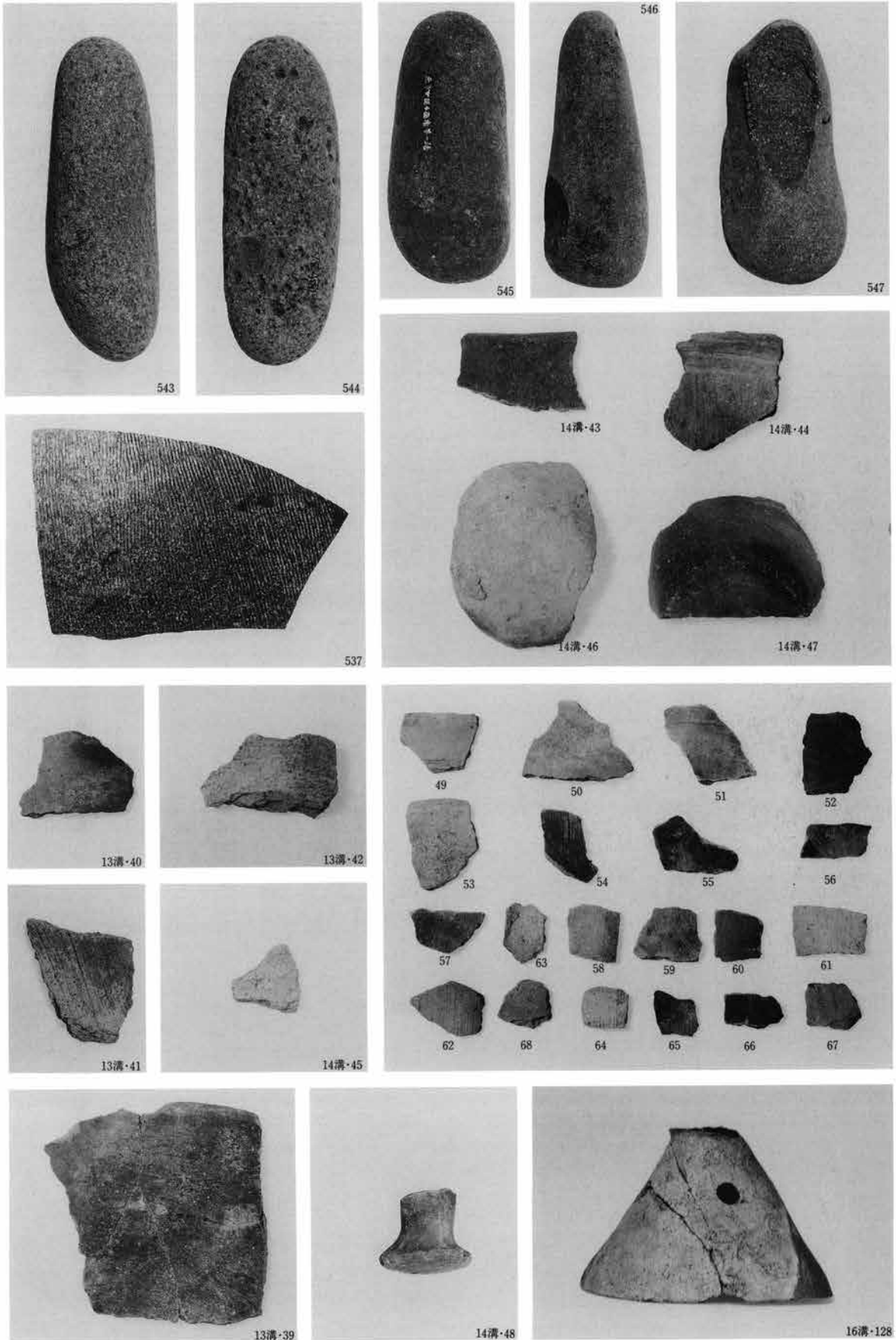


V区4面 5トレンチ、グリッド出土遺物

写真図版74

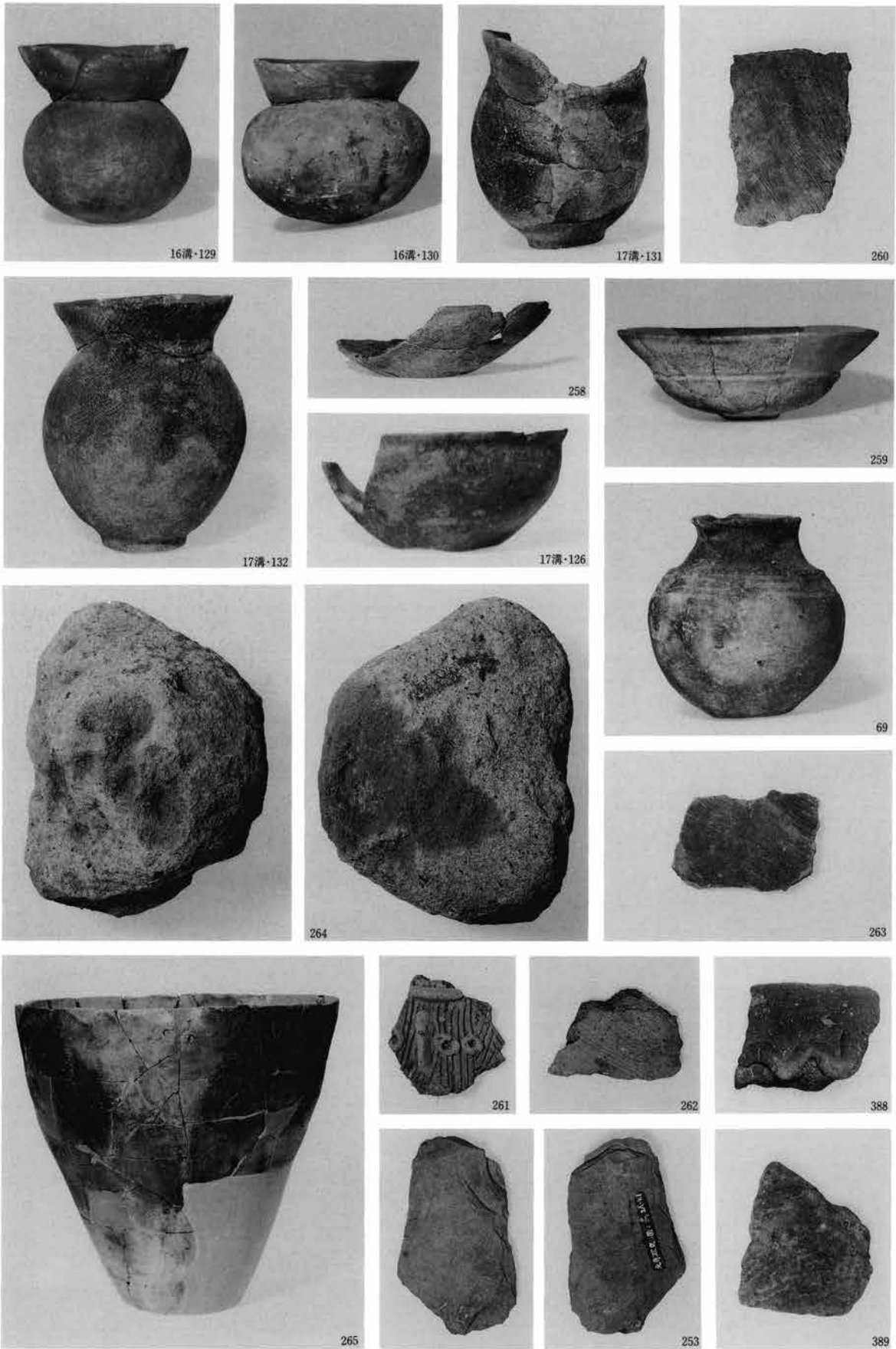


V区4面 グリッド出土遺物

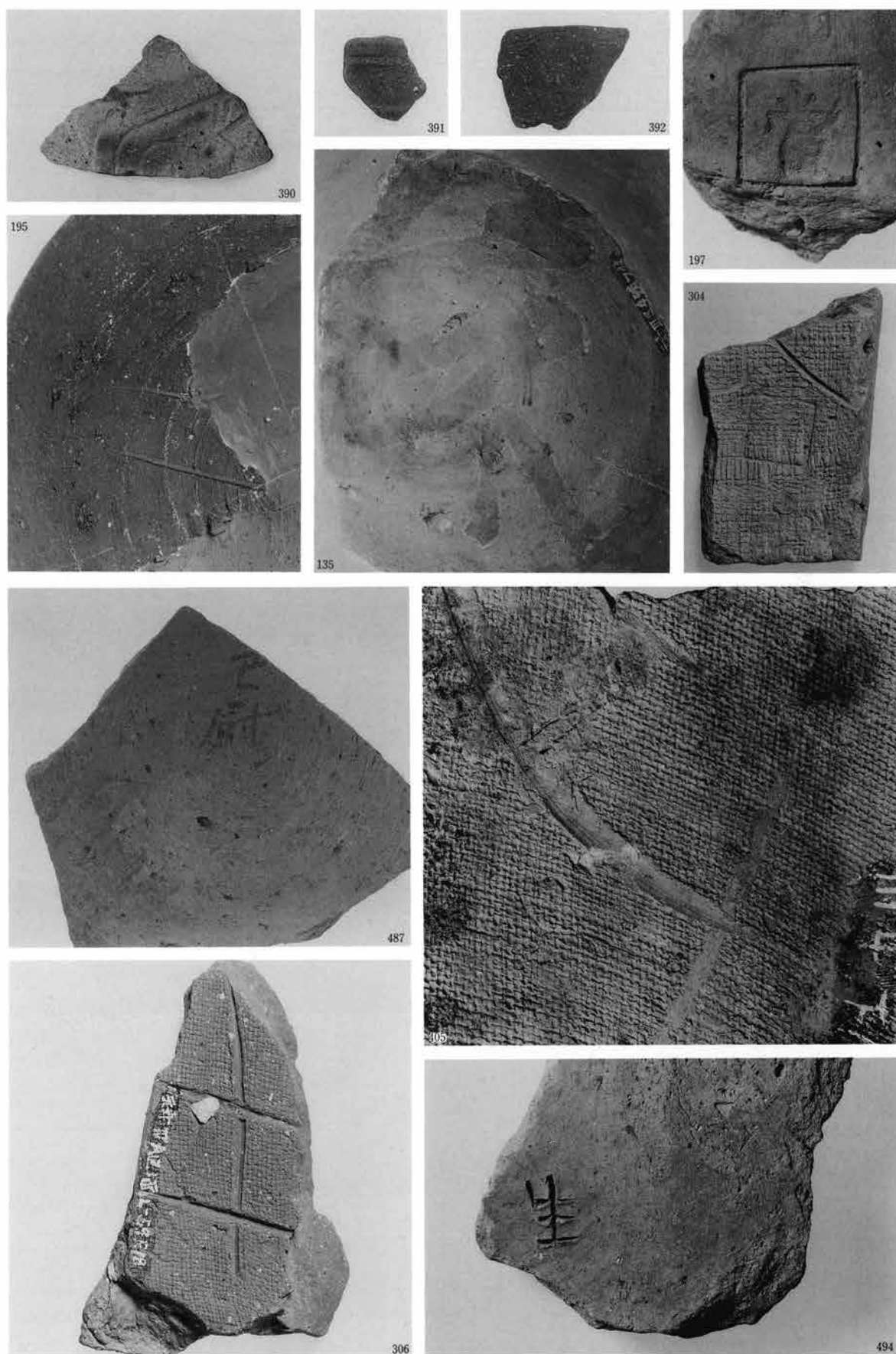


V区4面 グリッド、I区5面 13・14号溝、グリッド、II区5面 16・17号溝、I区6面 トレンチ、グリッド出土遺物

写真図版76



II区5面 16・17号溝、III区5面 グリッド、I区6面グリッド III区6面 W・Yライン・1トレンチ・グリッド、IV区6面 グリッド出土遺物

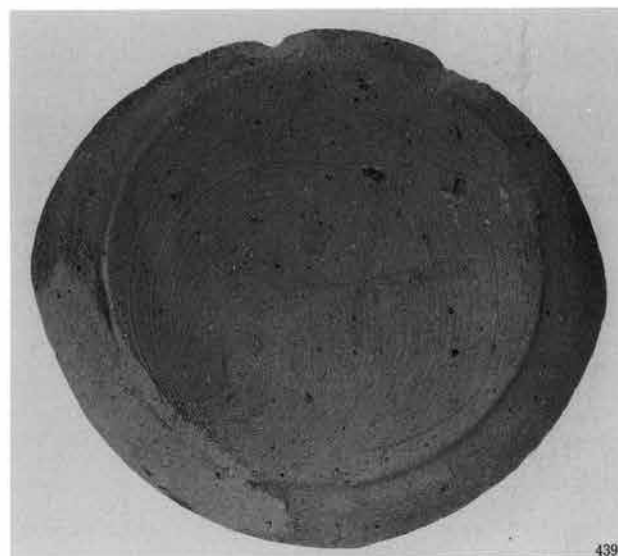
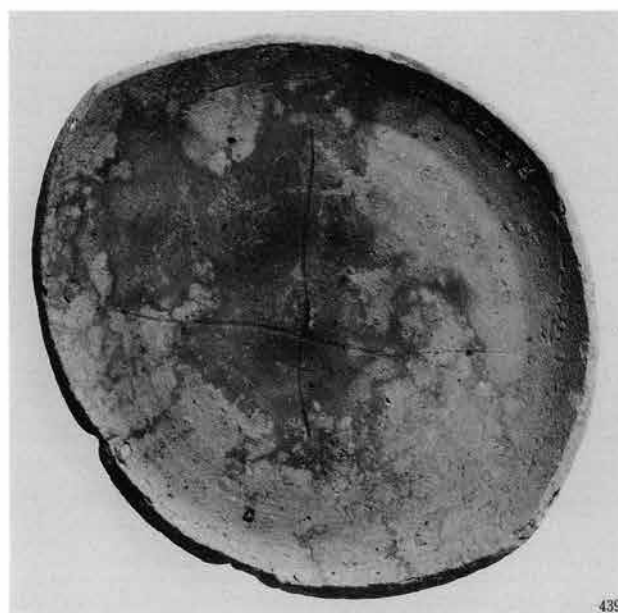


IV区6面 旧河道・トレンチ、グリッド出土遺物 元総社寺田遺跡出土の墨書土器、刻書土器、刻印文字瓦、線刻文字瓦

写真図版78

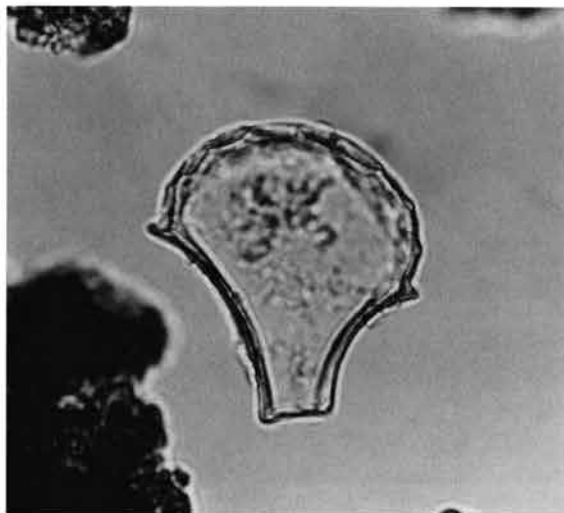


元総社寺田遺跡出土の線刻文字瓦、刻印文字瓦、墨書土器

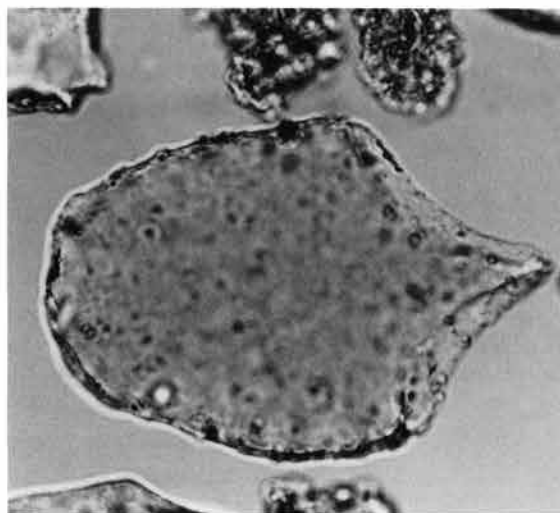


元総社寺田遺跡出土の墨書土器、刻書土器、刻印文字瓦、I区6面出土土器の靱痕

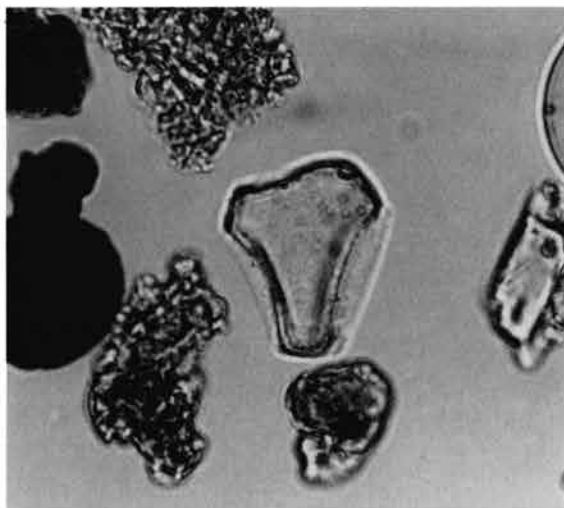
写真図版80



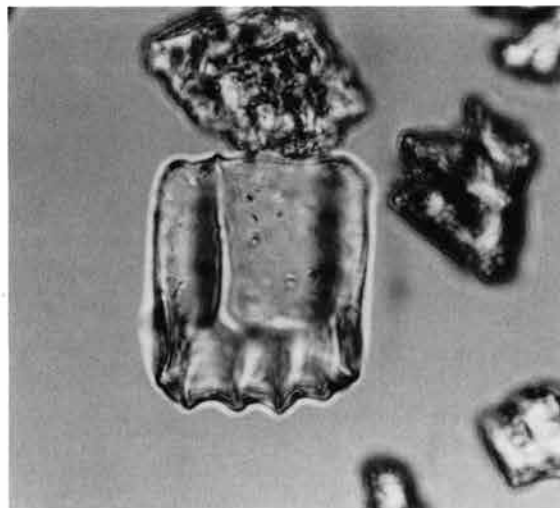
1. イネ



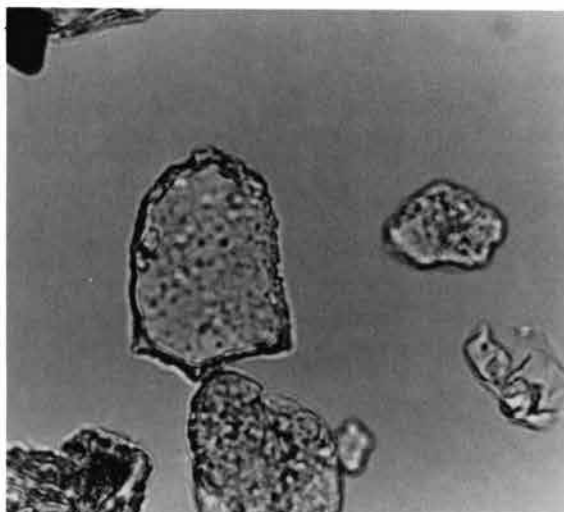
2. ヨシ属



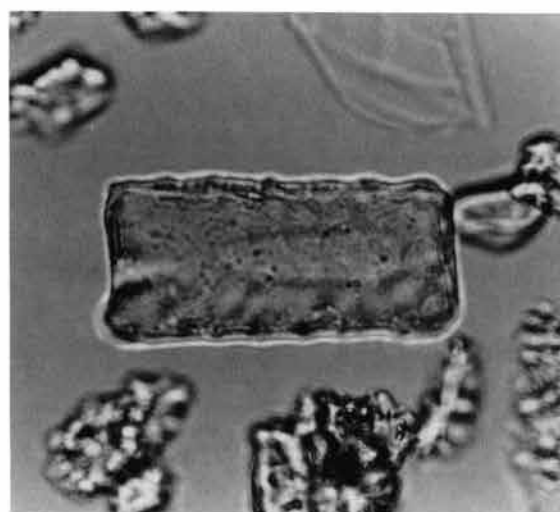
3. ウシクサ属 (ススキ属など)



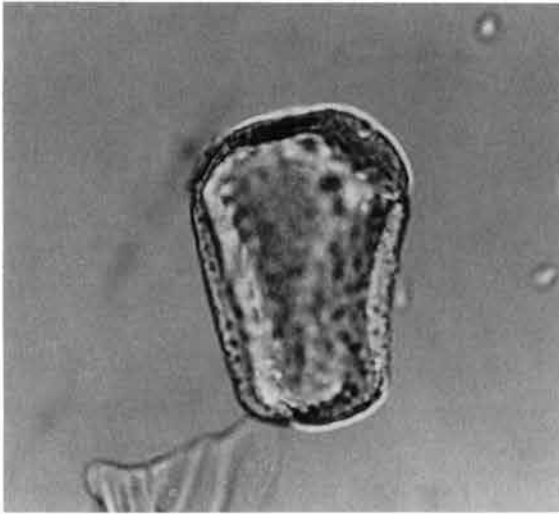
4. タケ亜科Alaタイプ (ネザサ節など)



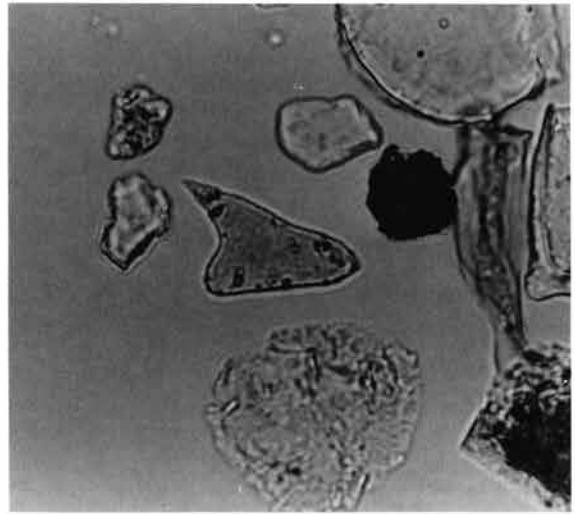
5. タケ亜科B1タイプ (クマザサ属)



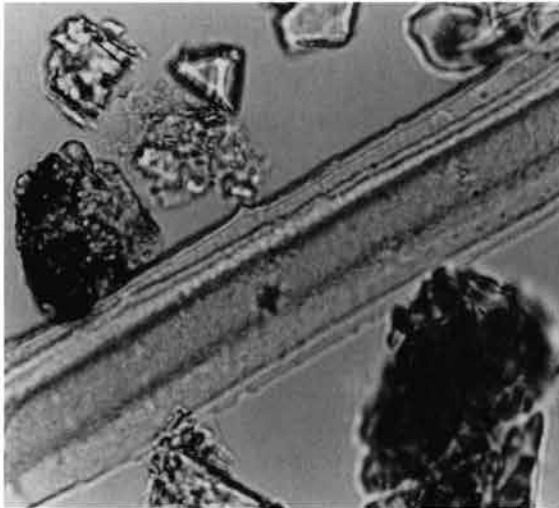
6. 不明Aタイプ (キビ族類似)



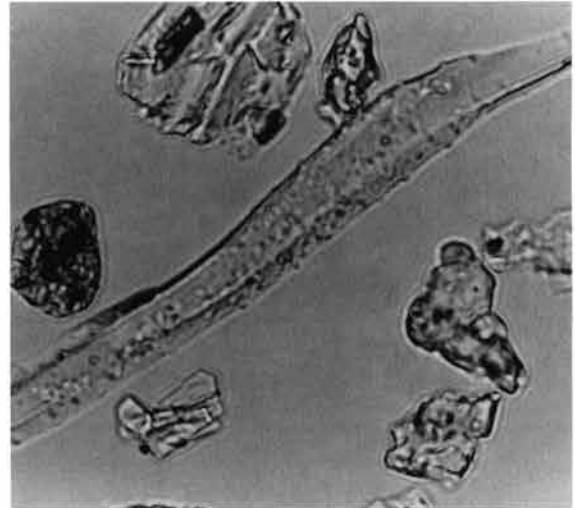
1. 不明Bタイプ (ウシクサ族類似)



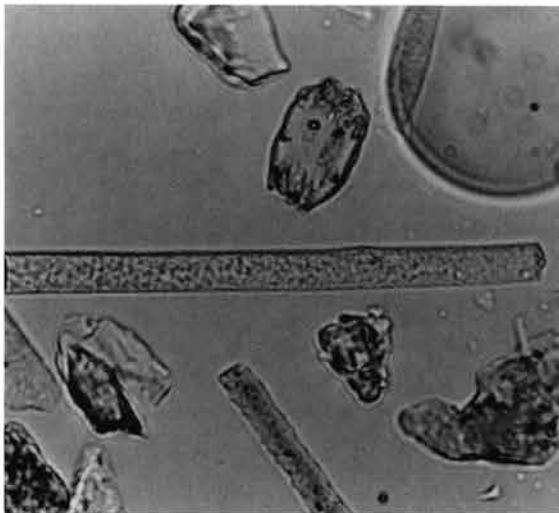
2. 表皮毛起源



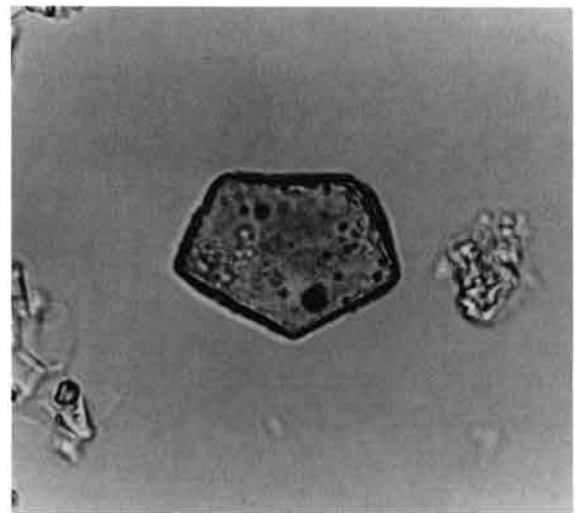
3. イネ科の茎部起源



4. イネ科の地下茎部起源



5. 棒状珪酸体



6. 樹木起源 (マツ科?)

元総社寺田遺跡 I

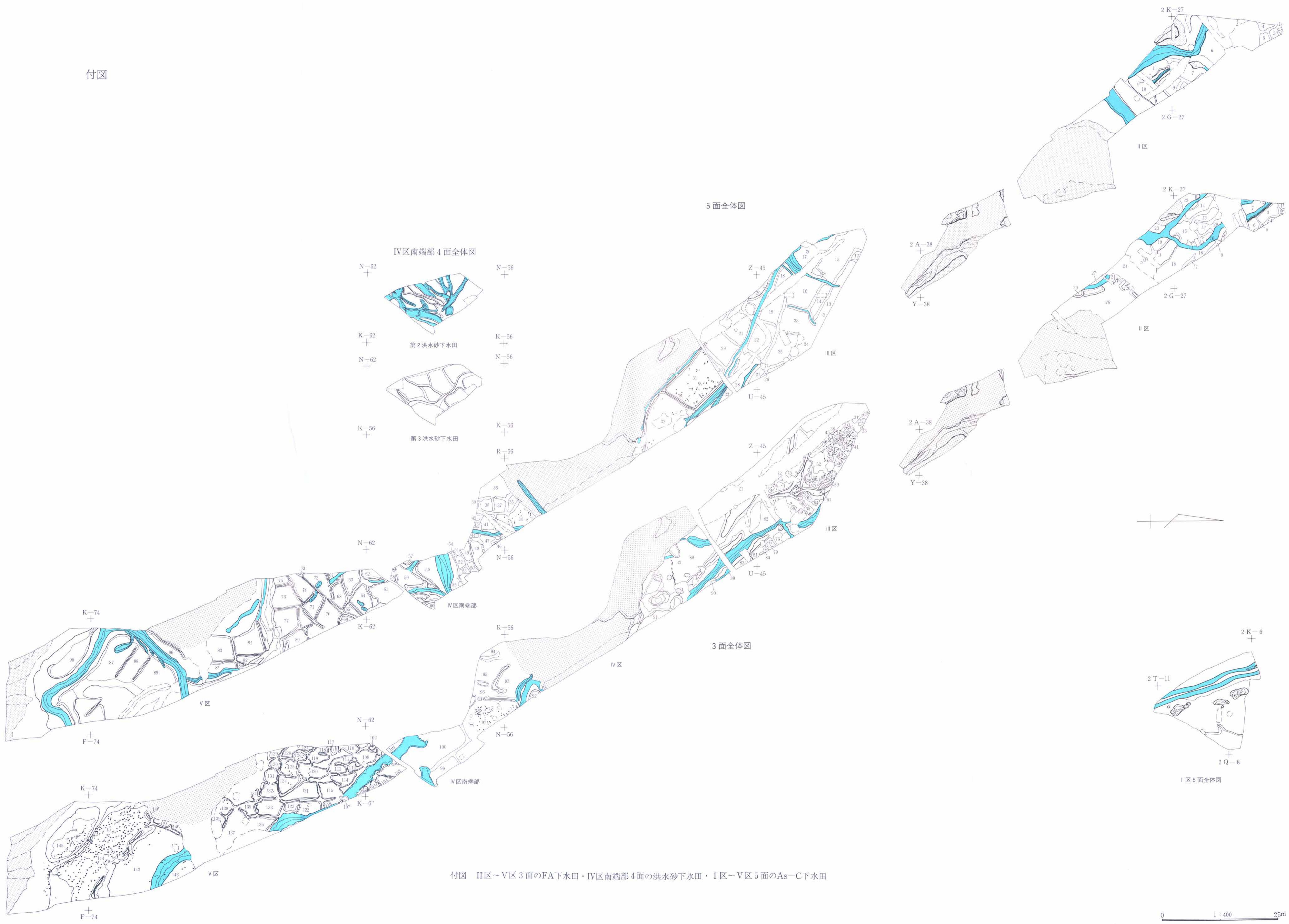
《遺構・遺物編》

一級河川牛池川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成5年3月20日 印刷
平成5年3月26日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



付図 II区～V区3面のFA下水田・IV区南端部4面の洪水砂下水田・I区～V区5面のAs-C下水田